
本 庄 市

夏目／夏目西／弥藤次

県道藤岡本庄線建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 0 7

埼 玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 夏目遺跡群遠景（南から）



2 夏目遺跡第2次調査区全景（北から）



1 夏目西遺跡第15号住居跡遺物出土状況



2 夏目遺跡第10号住居跡カマド



1 夏目遺跡第23号住居跡出土遺物



2 夏目西遺跡第14号住居跡出土遺物

夏目・夏目西・弥藤次遺跡の紹介

夏目遺跡をはじめとする3遺跡の調査によって、1,600～1,200年前(古墳時代中期から平安時代)の竪穴住居跡が50軒見つかりました。このうちの古墳時代中期(約1,600～1,500年前)の竪穴住居跡には、縄文時代以来1万年もの長い間使われてきた「炉」に替わって、新しく「カマド」がつくられるようになります。それに伴い米を蒸すための大型甑こしきという土器や、坏つきと呼ばれる個人用食器などが普及し、住居の構造だけでなく、炊飯方法を含む食生活の様子が大きく変わったことがわかります。今回の調査でもカマドが初めてつくられた頃の竪穴住居跡が見つかり、東日本の中でもいち早くカマドを導入した先進的な地域のひとつであることが明らかになりました。

夏目遺跡からは、当時ヤマト政権の中枢部ちゆうすう(畿内地域)きないで使用されていた「布留式甕しきかめ」と呼ばれる煮炊き用の土器が発見されました。マツリなどに使うための特別品であったのか、あるいは日常品として使われていたのか、はっきりしませんが、こうした土器が夏目遺跡の周辺に集中していることから、近くに畿内地域から移り住んできた人たちが暮らしていたことがうかがわれます。

序

埼玉県は、「人と自然にやさしい道づくり」を道路整備の基本理念として掲げ、誰もが安心・安全・快適に通行できる道路空間を形成するとともに、環境にも十分配慮した道づくりを推進しています。県民の活発な交流や盛んな経済活動が行われるためには、誰もが円滑に移動できる交通網の整備が必要となり、埼玉県では「渋滞のない円滑な自動車交通の実現」を目標に、バイパスの整備や幹線道路の拡幅、市街地を迂回する環状道路の整備などを進めております。

群馬県藤岡市と埼玉県本庄市を結ぶ、県道藤岡本庄線の整備もそのひとつです。これにより関越自動車道本庄児玉インターチェンジ、国道17号などへのアクセスが強化されるとともに、本庄市街地の渋滞が大幅に緩和されました。

この道路が国道462号と交差する本庄市の西富田周辺には、埼玉県重要遺跡に選定されている「西富田遺跡群」が所在し、これまでの発掘調査によって関東地方で最も早く竈が導入される地域のひとつとして知られています。

事業地内には、この遺跡群に含まれる夏目遺跡、夏目西遺跡、弥藤次遺跡の3遺跡が所在しており、その取り扱いについて、関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）の調整により、当事業団が埼玉県土木部道路建設課（当時）の委託を受けて実施いたしました。

発掘調査の結果、5世紀中ごろの竈をもつ竪穴住居跡や滑石製模造品を製作した工房跡などが発見されました。出土遺物の中には、近畿地方と同じ特徴をもつ甕や高坏を再利用した鞆の羽口などがみられ、5世紀代に朝鮮半島から渡来した新しい技術や文物が、この地にいち早くもたらされていたことが明らかとなりました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広くご活用いただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、埼玉県県土整備部道路街路課、本庄県土整備事務所、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、本庄市教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成19年11月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 刈 部 博

例言

1. 本書は、本庄市大字西富田に所在する夏目遺跡(第1～3次)・夏目西遺跡(第1次)・弥藤次遺跡(第1次)の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の略号と県遺跡番号、代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は以下のとおりである。

夏目遺跡第1次(略号 NTM)

県遺跡番号53-91

本庄市大字西富田732番地1他

平成7年9月8日付け 教文第2-103号

夏目遺跡第2次(略号 NTM2)

本庄市大字西富田736番地他

平成9年7月31日付け 教文第2-92号

夏目遺跡第3次(略号 NTM3)

本庄市大字西富田771-2番地他

平成12年10月18日付け 教文第2-72号

夏目西遺跡第1次(略号NTMNS)

県遺跡番号53-92

本庄市大字西富田762番地他

平成7年9月8日付け 教文第2-104号

弥藤次遺跡第1次(略号YTUJ)

県遺跡番号53-90

本庄市大字西富田962番地1他

平成7年9月8日付け 教文第2-102号

3. 発掘調査は、県道藤岡本庄線道路建設工事に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。調査は埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課(当時)が調整し、埼玉県土木部道路建設課(平成7・9年度)、埼玉県土木部道路整備課(平成12年度)の委託を受けて、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 本事業は、第I章-3の組織により実施した。調査実施期間及び担当者は以下のとおりである。

平成7年度(夏目・夏目西・弥藤次遺跡)

平成7年7月10日から平成8年2月29日まで

担当者 中村倉司・橋本充史

平成9年度(夏目遺跡第2次)

平成9年4月1日から平成9年6月30日まで

担当者 中村倉司・君島勝秀

平成12年度(夏目遺跡第3次)

平成12年9月1日から平成12年11月30日まで

担当者 富田和夫・木戸春夫

整理・報告書作成事業は平成18年4月10日から平成19年9月30日まで大谷 徹が担当して実施し、平成19年11月30日までに本書を印刷・刊行した。

5. 平成7・9年度の基準点測量及び空中写真撮影は、アスコエンジニアリング株式会社、平成12年度の基準点測量は株式会社日成プランに委託した。

6. 発掘調査時の写真撮影は各担当者が、遺物の写真撮影は大屋道則・大谷が実施した。

7. 出土品の整理・図版作成は大谷が行い、磯崎一・宮井英一・富田和夫・赤熊浩一・西井幸雄・鈴木孝之・山本 靖・兵ゆり子・山北美穂・吉田美子の協力、大和田 瞳の補助を受けた。

8. 本書の執筆は、第I章-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、第IV章-5・6、第V章-2～4を富田、第IV章-9の弥生土器を磯崎、その他は大谷が行った。

9. 本書の編集は大谷が行った。

10. 本書に掲載した資料は、平成19年10月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。

11. 本書の作成にあたり、下記の方々、機関から御教示、御協力を賜った。記して感謝の意を表します。(敬称略)

本庄市教育委員会 江原昌俊 太田博之

河内一浩 恋河内昭彦 白石真里 増田一裕

凡例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、日本測地系（旧測地系）による国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯36°00'00"、東経139°50'00"）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

夏目西遺跡のN-19グリッド北西杭の座標は、 $X = +25640.000\text{m}$ 、 $Y = -59640.000\text{m}$ （北緯36°13'45"4041、東経139°10'10"7301である。

N-19グリッドの世界測地系による換算値は、 $X = +25995.4257\text{m}$ 、 $Y = -59932.8508\text{m}$ 。北緯36°13'56"78653、東経139°09'59"75189である。
2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を1グリッドとし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）と付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばR-8グリッド等と呼称した。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

S J…竪穴住居跡 S A…柱穴列 S B…掘立柱建物跡 S D…溝跡 S E…井戸跡
S K…土坑 S O…道路跡 S W…倒木痕
Pit…小穴・柱穴
5. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。ただし、一部例外もある。

全体図 1 : 200
遺構図 1 : 60 遺構拡大図 1 : 30
- 土師器・須恵器等 1 : 4
鉄器・小型製品（石製品・土製品等） 1 : 2
玉類（滑石製白玉・ガラス小玉等） 1 : 1
6. 遺物で断面を黒塗りしたものは須恵器を示す。また、彩色された土器についてはその範囲に網を掛けて示した（赤彩15%・黒色処理30%）。
7. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を表す。
8. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
 - 口径・器高・最大径・底径はcm、重さはgを単位とする。
 - ()内の数値は復元推定値、[]内の数値は残存値である。
 - 胎土は土器に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A—白色粒子 B—角閃石 C—石英 D—雲母状微粒子 E—長石 F—赤色粒子
G—黒色粒子 H—白色針状物質 I—片岩 J—砂粒 K—小礫
 - 色調の表記は、『新版標準土色帖』2002年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）に従った。
 - 残存は残存率を指し、残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。
 - 白玉等の石製模造品の観察表の表記方法は、第70図に示した。
9. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/25,000地形図、本庄市都市計画図1/2,500を使用した。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	V 夏目西遺跡の調査	160
1. 発掘調査に至る経過	1	1. 概要	160
2. 発掘調査、報告書作成の経過	2	2. 竪穴住居跡	162
3. 発掘調査、報告書作成の組織	4	3. 掘立柱建物跡	277
II 遺跡の立地と環境	5	4. 柱穴列	282
1. 地理的環境	5	5. 溝跡	283
2. 歴史的環境	6	6. 土坑	288
III 遺跡の概要	13	7. ピット	295
IV 夏目遺跡の調査	29	8. その他の遺物	300
1. 概要	29	VI 弥藤次遺跡の調査	301
2. 竪穴住居跡	32	1. 概要	301
3. 掘立柱建物跡	102	2. 竪穴住居跡	301
4. 柱穴列	103	3. 溝跡	308
5. 道路跡	105	4. 土坑	316
6. 大溝跡	111	5. ピット	318
7. 溝跡	112	6. その他の遺物	320
8. 井戸跡	119	VII 調査のまとめ	321
9. 土坑	127	1. 夏目遺跡群の土器様相	321
10. 倒木痕	142	2. 集落構成について	329
11. ピット	144	3. 問題点と今後の課題	332
12. その他の遺物	159	写真図版	

挿 図 目 次

第 1 図	調査区分図	2	第 32 図	第 5 号住居跡	41
第 2 図	埼玉県の地形	5	第 33 図	第 5 号住居跡出土遺物	41
第 3 図	遺跡周辺の地形区分図	6	第 34 図	第 6 号住居跡・遺物出土状況	43
第 4 図	基本土層	6	第 35 図	第 6 号住居跡出土遺物	44
第 5 図	周辺遺跡分布図	8	第 36 図	第 7 号住居跡	46
第 6 図	遺跡位置図	14	第 37 図	第 7 号住居跡出土遺物	46
第 7 図	グリッド配置図	15	第 38 図	第 8 号住居跡	47
第 8 図	夏目・夏目西・弥藤次遺跡全体図 (1)	16	第 39 図	第 8 号住居跡出土遺物	48
第 9 図	夏目・夏目西・弥藤次遺跡全体図 (2)	17	第 40 図	第 9 号住居跡	48
第 10 図	遺跡全体図区割図	18	第 41 図	第 9 号住居跡カマド	49
第 11 図	遺跡区割図 (1)	19	第 42 図	第 9 号住居跡掘方	49
第 12 図	遺跡区割図 (2)	20	第 43 図	第 9 号住居跡遺物出土状況	50
第 13 図	遺跡区割図 (3)	21	第 44 図	第 9 号住居跡出土遺物 (1)	51
第 14 図	遺跡区割図 (4)	22	第 45 図	第 9 号住居跡出土遺物 (2)	52
第 15 図	遺跡区割図 (5)	23	第 46 図	第 10 号住居跡・カマド	55
第 16 図	遺跡区割図 (6)	24	第 47 図	第 10 号住居跡出土遺物	56
第 17 図	遺跡区割図 (7)	25	第 48 図	第 11 号住居跡	57
第 18 図	遺跡区割図 (8)	26	第 49 図	第 12 号住居跡・掘方	58
第 19 図	遺跡区割図 (9)	27	第 50 図	第 12 号住居跡出土遺物	59
第 20 図	遺跡区割図 (10)	28	第 51 図	第 13 号住居跡	60
〈夏目遺跡〉			第 52 図	第 13 号住居跡カマド	61
第 21 図	夏目遺跡全体図 (1)	30	第 53 図	第 13 号住居跡掘方	61
第 22 図	夏目遺跡全体図 (2)	31	第 54 図	第 13 号住居跡出土遺物 (1)	62
第 23 図	第 1 号住居跡・出土遺物	32	第 55 図	第 13 号住居跡出土遺物 (2)	63
第 24 図	第 2 号住居跡	33	第 56 図	第 14 号住居跡	64
第 25 図	第 2 号住居跡出土遺物	34	第 57 図	第 15 号住居跡・カマド	65
第 26 図	第 3 号住居跡	35	第 58 図	第 15 号住居跡出土遺物	66
第 27 図	第 3 号住居跡遺物出土状況	36	第 59 図	第 16 号住居跡	67
第 28 図	第 3 号住居跡出土遺物 (1)	37	第 60 図	第 16 号住居跡カマド	68
第 29 図	第 3 号住居跡出土遺物 (2)	38	第 61 図	第 16 号住居跡出土遺物	68
第 30 図	第 4 号住居跡	39	第 62 図	第 17 号住居跡	69
第 31 図	第 4 号住居跡出土遺物	40	第 63 図	第 17 号住居跡出土遺物	70

第 64 図	第18号住居跡・カマド	71	第 98 図	道路跡・大溝跡（2）	107
第 65 図	第18号住居跡出土遺物	72	第 99 図	道路跡	108
第 66 図	第19号住居跡・カマド	74	第100図	道路跡出土遺物	109
第 67 図	第19号住居跡出土遺物	75	第101図	大溝跡・第64号土坑	110
第 68 図	第20号住居跡・カマド	77	第102図	大溝跡・第64号土坑出土遺物	111
第 69 図	第20号住居跡出土遺物	77	第103図	第1・2号溝跡	112
第 70 図	白玉の分類	78	第104図	第4・5・6・7号溝跡	113
第 71 図	第21号住居跡	79	第105図	第8・9・10・11号溝跡	114
第 72 図	第21号住居跡出土遺物	79	第106図	第12・13・14号溝跡	115
第 73 図	第22号住居跡	80	第107図	第15～21号溝跡	116
第 74 図	第22号住居跡カマド	81	第108図	溝跡出土遺物	117
第 75 図	第22号住居跡掘方	82	第109図	第22・23号溝跡	118
第 76 図	第22号住居跡出土遺物	83	第110図	第1号井戸跡	120
第 77 図	第23号住居跡	85	第111図	第1号井戸跡出土遺物	120
第 78 図	第23号住居跡遺物出土状況	86	第112図	第2号井戸跡	121
第 79 図	第23号住居跡出土遺物（1）	87	第113図	第2号井戸跡遺物出土状況	122
第 80 図	第23号住居跡出土遺物（2）	88	第114図	第2号井戸跡出土遺物（1）	123
第 81 図	第23号住居跡出土遺物（3）	89	第115図	第2号井戸跡出土遺物（2）	124
第 82 図	第23号住居跡出土遺物（4）	90	第116図	第2号井戸跡出土遺物（3）	125
第 83 図	第24号住居跡	93	第117図	第1号土坑	127
第 84 図	第24号住居跡カマド	94	第118図	第1号土坑出土遺物（1）	128
第 85 図	第24号住居跡出土遺物（1）	95	第119図	第1号土坑出土遺物（2）	129
第 86 図	第24号住居跡出土遺物（2）	96	第120図	土坑（1）	131
第 87 図	第25号住居跡	97	第121図	土坑（2）	133
第 88 図	第25号住居跡出土遺物	98	第122図	土坑（3）	135
第 89 図	第26号住居跡	99	第123図	土坑（4）	137
第 90 図	第26号住居跡出土遺物	100	第124図	土坑（5）	139
第 91 図	第27号住居跡	101	第125図	土坑出土遺物	140
第 92 図	第27号住居跡出土遺物	101	第126図	倒木痕	143
第 93 図	第1号掘立柱建物跡	102	第127図	倒木痕分布図	144
第 94 図	第1・2・3号柱穴列	103	第128図	ピット出土遺物	144
第 95 図	第4・5号柱穴列（1）	104	第129図	ピット（1）	145
第 96 図	第4・5号柱穴列（2）	105	第130図	ピット（2）	146
第 97 図	道路跡・大溝跡（1）	106	第131図	ピット（3）	147

第132図	ピット (4) ……………	148	第165図	第7号住居跡出土遺物 (2) ……	187
第133図	ピット (5) ……………	149	第166図	第8号住居跡 ……………	189
第134図	ピット (6) ……………	150	第167図	第8号住居跡カマド ……………	190
第135図	ピット (7) ……………	151	第168図	第8号住居跡出土遺物 ……………	191
第136図	ピット (8) ……………	152	第169図	第9号住居跡 ……………	193
第137図	ピット (9) ……………	153	第170図	第9号住居跡出土遺物 ……………	193
第138図	ピット (10) ……………	154	第171図	第10号住居跡・カマド ……………	194
第139図	その他の遺物 ……………	159	第172図	第10号住居跡出土遺物 ……………	194
〈夏目西遺跡〉					
第140図	夏目西遺跡全体図 (1) ……………	160	第173図	第11号住居跡 ……………	195
第141図	夏目西遺跡全体図 (2) ……………	161	第174図	第11号住居跡遺物出土状況 ……	196
第142図	第1号住居跡 ……………	162	第175図	第11号住居跡石製模造品分布図 ……	197
第143図	第1号住居跡カマド ……………	163	第176図	第11号住居跡出土遺物 (1) ……	198
第144図	第1号住居跡石製模造品分布図 ……	163	第177図	第11号住居跡出土遺物 (2) ……	199
第145図	第1号住居跡出土遺物 (1) ……	164	第178図	第11号住居跡出土遺物 (3) ……	200
第146図	第1号住居跡出土遺物 (2) ……	165	第179図	第11号住居跡出土遺物 (4) ……	201
第147図	第1号住居跡出土遺物 (3) ……	166	第180図	第12号住居跡 ……………	204
第148図	第2号住居跡 ……………	169	第181図	第12号住居跡カマド ……………	205
第149図	第2号住居跡出土遺物 ……………	169	第182図	第12号住居跡出土遺物 (1) ……	205
第150図	第3号住居跡 (1) ……………	170	第183図	第12号住居跡出土遺物 (2) ……	206
第151図	第3号住居跡 (2) ……………	171	第184図	第13号住居跡 ……………	208
第152図	第3号住居跡カマド ……………	172	第185図	第13号住居跡遺物出土状況 ……	209
第153図	第3号住居跡出土遺物 (1) ……	173	第186図	第13号住居跡出土遺物 (1) ……	210
第154図	第3号住居跡出土遺物 (2) ……	174	第187図	第13号住居跡出土遺物 (2) ……	211
第155図	第4号住居跡 ……………	176	第188図	第13号住居跡出土遺物 (3) ……	212
第156図	第4号住居跡カマド ……………	177	第189図	第14号住居跡 (1) ……………	215
第157図	第4号住居跡出土遺物 (1) ……	178	第190図	第14号住居跡 (2)・カマド ……	216
第158図	第4号住居跡出土遺物 (2) ……	179	第191図	第14号住居跡遺物出土状況 (1) ……	217
第159図	第5・6号住居跡 ……………	181	第192図	第14号住居跡遺物出土状況 (2) ……	218
第160図	第5号住居跡出土遺物 ……………	182	第193図	第14号住居跡遺物出土状況 (3) ……	219
第161図	第6号住居跡出土遺物 ……………	183	第194図	第14号住居跡遺物出土状況 (4) ……	220
第162図	第7号住居跡 ……………	184	第195図	第14号住居跡石製模造品分布図 ……	221
第163図	第7号住居跡カマド ……………	185	第196図	第14号住居跡出土遺物 (1) ……	222
第164図	第7号住居跡出土遺物 (1) ……	186	第197図	第14号住居跡出土遺物 (2) ……	223
			第198図	第14号住居跡出土遺物 (3) ……	224

第199図	第14号住居跡出土遺物 (4) ……	225	第233図	第21号住居跡掘方 ……	268
第200図	第14号住居跡出土遺物 (5) ……	226	第234図	第21号住居跡遺物出土状況 (1) ……	269
第201図	第14号住居跡出土遺物 (6) ……	227	第235図	第21号住居跡遺物出土状況 (2) ……	270
第202図	第14号住居跡出土遺物 (7) ……	228	第236図	第21号住居跡出土遺物 (1) ……	271
第203図	第14号住居跡出土遺物 (8) ……	229	第237図	第21号住居跡出土遺物 (2) ……	272
第204図	第14号住居跡出土遺物 (9) ……	230	第238図	第21号住居跡出土遺物 (3) ……	273
第205図	第14号住居跡出土遺物 (10) ……	231	第239図	第21号住居跡出土遺物 (4) ……	274
第206図	第15号住居跡・カマド ……	236	第240図	第21号住居跡出土遺物 (5) ……	275
第207図	第15号住居跡遺物出土状況 (1) ……	237	第241図	掘立柱建物跡・柱穴列分布図 ……	278
第208図	第15号住居跡遺物出土状況 (2) ……	238	第242図	第1号掘立柱建物跡 ……	279
第209図	第15号住居跡遺物出土状況 (3) ……	239	第243図	第2号掘立柱建物跡 ……	280
第210図	第15号住居跡出土遺物 (1) ……	240	第244図	第2号掘立柱建物跡出土遺物 ……	280
第211図	第15号住居跡出土遺物 (2) ……	241	第245図	第3号掘立柱建物跡 ……	281
第212図	第15号住居跡出土遺物 (3) ……	242	第246図	第4号掘立柱建物跡 ……	281
第213図	第15号住居跡出土遺物 (4) ……	243	第247図	第1・2・3・4号柱穴列 ……	282
第214図	第15号住居跡出土遺物 (5) ……	244	第248図	第1・2・3号溝跡 ……	284
第215図	第15号住居跡出土遺物 (6) ……	245	第249図	第4・5号溝跡 ……	285
第216図	第15号住居跡出土遺物 (7) ……	246	第250図	第6号溝跡 ……	286
第217図	第15号住居跡出土遺物 (8) ……	247	第251図	溝跡出土遺物 ……	287
第218図	第16号住居跡 ……	250	第252図	土坑 (1) ……	289
第219図	第16号住居跡出土遺物 ……	251	第253図	土坑 (2) ……	291
第220図	第17号住居跡 ……	253	第254図	土坑 (3) ……	293
第221図	第17号住居跡カマド ……	254	第255図	土坑出土遺物 ……	294
第222図	第17号住居跡出土遺物 (1) ……	255	第256図	ピット (1) ……	296
第223図	第17号住居跡出土遺物 (2) ……	256	第257図	ピット (2) ……	297
第224図	第18号住居跡 ……	259	第258図	ピット (3) ……	298
第225図	第18号住居跡出土遺物 ……	259	第259図	ピット出土遺物 ……	298
第226図	第19号住居跡・掘方 ……	261	第260図	縄文時代の遺物 ……	300
第227図	第19号住居跡カマド ……	262	〈弥藤次遺跡〉		
第228図	第19号住居跡出土遺物 ……	263	第261図	弥藤次遺跡全体図 ……	301
第229図	第20号住居跡・掘方 ……	264	第262図	第1号住居跡 ……	302
第230図	第20号住居跡出土遺物 ……	264	第263図	第1号住居跡遺物出土状況 ……	302
第231図	第21号住居跡 ……	266	第264図	第1号住居跡出土遺物 ……	303
第232図	第21号住居跡カマド ……	267	第265図	第2号住居跡 ……	305

第266図	第2号住居跡カマド	306	第277図	ピット出土遺物	318
第267図	第2号住居跡出土遺物	307	第278図	ピット	319
第268図	第1・2・3号溝跡	309	第279図	古墳時代初頭の遺物	320
第269図	第1・3・4号溝跡出土遺物	309	第280図	夏目遺跡I・II期の土器群	322
第270図	第5号溝跡出土遺物	310	第281図	夏目遺跡II期の土器群	323
第271図	第4・5号溝跡	311	第282図	夏目遺跡III期の土器群	325
第272図	第6号溝跡	312	第283図	夏目遺跡IV～VI期の土器群	327
第273図	第6号溝跡出土遺物	313	第284図	夏目遺跡VII～XII期の土器群	328
第274図	第7・8・9・10号溝跡	315	第285図	夏目遺跡群の集落変遷(1)	330
第275図	土坑	317	第286図	夏目遺跡群の集落変遷(2)	331
第276図	第3号土坑出土遺物	317			

表 目 次

第1表	発掘調査工程表	2	第20表	第18号住居跡出土遺物観察表	73
〈夏目遺跡〉					
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表	32	第21表	第19号住居跡出土遺物観察表	76
第3表	第2号住居跡出土遺物観察表	34	第22表	第20号住居跡出土遺物観察表	78
第4表	第3号住居跡出土遺物観察表	38	第23表	第20号住居跡出土白土玉観察表	78
第5表	第3号住居跡出土編物石観察表	39	第24表	第21号住居跡出土遺物観察表	79
第6表	第4号住居跡出土遺物観察表	40	第25表	第22号住居跡出土遺物観察表	84
第7表	第5号住居跡出土遺物観察表	42	第26表	第23号住居跡出土遺物観察表	91
第8表	第6号住居跡出土遺物観察表	45	第27表	第23号住居跡出土白土玉観察表	92
第9表	第6号住居跡出土編物石観察表	45	第28表	第24号住居跡出土遺物観察表	96
第10表	第7号住居跡出土遺物観察表	46	第29表	第24号住居跡出土白土玉観察表	96
第11表	第8号住居跡出土遺物観察表	48	第30表	第25号住居跡出土遺物観察表	99
第12表	第9号住居跡出土遺物観察表	53	第31表	第25号住居跡出土白土玉観察表	99
第13表	第9号住居跡出土編物石観察表	54	第32表	第26号住居跡出土遺物観察表	100
第14表	第10号住居跡出土遺物観察表	56	第33表	第27号住居跡出土遺物観察表	101
第15表	第12号住居跡出土遺物観察表	59	第34表	道路跡出土遺物観察表	109
第16表	第13号住居跡出土遺物観察表	63	第35表	第64号土坑出土遺物観察表	111
第17表	第15号住居跡出土遺物観察表	66	第36表	大溝跡出土遺物観察表	111
第18表	第16号住居跡出土遺物観察表	68	第37表	溝跡出土遺物観察表	118
第19表	第17号住居跡出土遺物観察表	70	第38表	第1号井戸跡出土遺物観察表	121
			第39表	第2号井戸跡出土遺物観察表	126

第40表	第1号土坑出土遺物観察表	128
第41表	土坑出土遺物観察表	140
第42表	土坑一覧表	141
第43表	ピット出土遺物観察表	144
第44表	ピット一覧表	155
第45表	その他の遺物観察表	159

〈夏目西遺跡〉

第46表	第1号住居跡出土遺物観察表	166
第47表	第1号住居跡出土白玉未成品観察表	167
第48表	第1号住居跡出土白玉観察表	168
第49表	第2号住居跡出土遺物観察表	169
第50表	第3号住居跡出土遺物観察表	175
第51表	第4号住居跡出土遺物観察表	180
第52表	第4号住居跡出土白玉観察表	180
第53表	第5号住居跡出土遺物観察表	182
第54表	第6号住居跡出土遺物観察表	183
第55表	第7号住居跡出土遺物観察表	187
第56表	第8号住居跡出土遺物観察表	192
第57表	第9号住居跡出土遺物観察表	193
第58表	第10号住居跡出土遺物観察表	194
第59表	第11号住居跡出土遺物観察表	202
第60表	第11号住居跡出土白玉未成品観察表	203
第61表	第11号住居跡出土白玉観察表	203
第62表	第12号住居跡出土遺物観察表	207
第63表	第12号住居跡出土編物石観察表	207
第64表	第13号住居跡出土遺物観察表	213
第65表	第13号住居跡出土白玉観察表	214
第66表	第14号住居跡出土遺物観察表	231
第67表	第14号住居跡出土白玉観察表	235
第68表	第15号住居跡出土遺物観察表	248
第69表	第15号住居跡出土白玉観察表	250
第70表	第16号住居跡出土遺物観察表	251

第71表	第16号住居跡出土編物石観察表	252
第72表	第17号住居跡出土遺物観察表	257
第73表	第17号住居跡出土編物石観察表	258
第74表	第17号住居跡出土白玉観察表	258
第75表	第18号住居跡出土遺物観察表	260
第76表	第18号住居跡出土編物石観察表	260
第77表	第19号住居跡出土遺物観察表	263
第78表	第20号住居跡出土遺物観察表	265
第79表	第20号住居跡出土編物石観察表	265
第80表	第21号住居跡出土遺物観察表	276
第81表	第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表	280
第82表	溝跡出土遺物観察表	287
第83表	土坑出土遺物観察表	294
第84表	土坑一覧表	294
第85表	ピット出土遺物観察表	298
第86表	ピット一覧表	299
第87表	縄文時代の遺物観察表	300

〈弥藤次遺跡〉

第88表	第1号住居跡出土遺物観察表	304
第89表	第2号住居跡出土遺物観察表	308
第90表	第2号住居跡出土白玉観察表	308
第91表	第1・3・4号溝跡出土遺物観察表	310
第92表	第5号溝跡出土遺物観察表	310
第93表	第6号溝跡出土遺物観察表	314
第94表	土坑一覧表	316
第95表	第3号土坑出土遺物観察表	318
第96表	ピット出土遺物観察表	318
第97表	ピット一覧表	320
第98表	古墳時代初頭の遺物観察表	320
第99表	写真図版遺物番号対応表	337

写真図版目次

巻頭図版 1	夏目遺跡群遠景 夏目遺跡第 2 次調査区全景	図版 11	第 10 号住居跡カマド遺物出土状況 第 11 号住居跡
巻頭図版 2	夏目西遺跡第 15 号住居跡遺物出土 状況 夏目遺跡第 10 号住居跡カマド	図版 12	第 12・13 号住居跡遺物出土状況 第 13 号住居跡遺物出土状況 第 13 号住居跡カマド遺物出土状況 第 13 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 第 13 号住居跡砥石出土状況
巻頭図版 3	夏目遺跡第 23 号住居跡出土遺物 夏目西遺跡第 14 号住居跡出土遺物	図版 13	第 14 号住居跡 第 15 号住居跡遺物出土状況 第 16 号住居跡 第 17 号住居跡 第 18 号住居跡
〈夏目遺跡〉		図版 14	第 18 号住居跡カマド 第 19 号住居跡遺物出土状況 第 19 号住居跡カマド遺物出土状況 第 20 号住居跡遺物出土状況 第 21・22 号住居跡遺物出土状況
図版 1	第 2 次調査区全景（北から） 第 2 次調査区全景（上空から）	図版 15	第 21 号住居跡 第 22 号住居跡カマド 第 22 号住居跡カマド遺物出土状況 第 23 号住居跡
図版 2	第 2 次調査区全景（西から） 第 2 次調査区全景（東から）	図版 16	第 23 号住居跡遺物出土状況 第 23 号住居跡炉支脚出土状況
図版 3	第 2 次調査区全景（西から） 第 3 次調査区全景（西から）	図版 17	第 24 号住居跡遺物出土状況 第 24 号住居跡カマド遺物出土状況 第 24 号住居跡遺物出土状況 第 24 号住居跡磨製石鏃出土状況
図版 4	第 1 号住居跡 第 2 号住居跡	図版 18	第 25 号住居跡 第 26 号住居跡 第 26 号住居跡遺物出土状況 第 27 号住居跡 第 27 号住居跡遺物出土状況
図版 5	第 2 号住居跡遺物出土状況 第 2 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 第 3 号住居跡遺物出土状況（第 1 次） 第 3 号住居跡（第 2 次）		
図版 6	第 4 号住居跡遺物出土状況 第 5 号住居跡遺物出土状況		
図版 7	第 6 号住居跡遺物出土状況 第 6 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況		
図版 8	第 7 号住居跡遺物出土状況 第 8 号住居跡		
図版 9	第 9 号住居跡 第 9 号住居跡遺物出土状況		
図版 10	第 9 号住居跡カマド遺物出土状況 第 9 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 第 9 号住居跡遺物出土状況 第 10 号住居跡遺物出土状況		

図版19	道路跡全景		第55号土坑
図版20	道路跡遺物出土状況		第58・59号土坑
	第1 A・B号道路跡		第60～63号土坑
	第1 A号道路跡		第66号土坑
	第1 A号道路跡土層断面	図版26	倒木痕全景（西から）
	第2号道路跡		第1号倒木痕
	第2号道路跡土層断面		第2号倒木痕
	第3号道路跡		第3号倒木痕
	第3号道路跡土層断面		第4・5号倒木痕
図版21	大溝跡		第6号倒木痕
	大溝跡土層断面		第7号倒木痕
図版22	第2号井戸跡遺物出土状況		第8号倒木痕・第5号土坑
	第2号井戸跡	図版27	第3号住居跡出土遺物
	第2号井戸跡土層断面		第4号住居跡出土遺物
	第2号井戸跡遺物出土状況		第5号住居跡出土遺物
図版23	第1号土坑遺物出土状況		第6号住居跡出土遺物
	第16号土坑遺物出土状況	図版28	第9号住居跡出土遺物
	第22号土坑		第13号住居跡出土遺物
	第32号土坑		第15号住居跡出土遺物
	第33号土坑		第16号住居跡出土遺物
	第35号土坑		第17号住居跡出土遺物
	第37号土坑		第18号住居跡出土遺物
図版24	第39号土坑	図版29	第18号住居跡出土遺物
	第40号土坑		第19号住居跡出土遺物
	第41号土坑		第20号住居跡出土遺物
	第43号土坑		第21号住居跡出土遺物
	第44号土坑		第22号住居跡出土遺物
	第45号土坑		第23号住居跡出土遺物
	第46号土坑	図版30	第23号住居跡出土遺物
	第47・50号土坑		第24号住居跡出土遺物
図版25	第49号土坑		第25号住居跡出土遺物
	第51号土坑		第27号住居跡出土遺物
	第53号土坑遺物出土状況		第1 A号道路跡出土遺物
	第54号土坑		大溝跡出土遺物

- 図版31 大溝跡出土遺物
第2号井戸跡出土遺物
- 図版32 第18号土坑跡出土遺物
第25号土坑跡出土遺物
第2号住居跡出土遺物
第10号住居跡出土遺物
第13号住居跡出土遺物
第23号住居跡出土遺物
第9号住居跡出土遺物
第10号住居跡出土遺物
第23号住居跡出土遺物
第24号住居跡出土遺物
- 図版33 第2号住居跡出土遺物
第3号住居跡出土遺物
- 図版34 第3号住居跡出土遺物
第6号住居跡出土遺物
- 図版35 第6号住居跡出土遺物
第7号住居跡出土遺物
第9号住居跡出土遺物
- 図版36 第9号住居跡出土遺物
- 図版37 第9号住居跡出土遺物
第12号住居跡出土遺物
第13号住居跡出土遺物
- 図版38 第13号住居跡出土遺物
第15号住居跡出土遺物
第18号住居跡出土遺物
第19号住居跡出土遺物
第20号住居跡出土遺物
第22号住居跡出土遺物
- 図版39 第23号住居跡出土遺物
- 図版40 第23号住居跡出土遺物
- 図版41 第23号住居跡出土遺物
- 図版42 第24号住居跡出土遺物
第25号住居跡出土遺物
- 第2号井戸跡出土遺物
- 図版43 第2号井戸跡出土遺物
- 図版44 第3号住居跡出土遺物
第5号住居跡出土遺物
第9号住居跡出土遺物
- 図版45 第9号住居跡出土遺物
第13号住居跡出土遺物
第15号住居跡出土遺物
- 図版46 第19号住居跡出土遺物
第22号住居跡出土遺物
第23号住居跡出土遺物
- 図版47 第24号住居跡出土遺物
第2号井戸跡出土遺物
- 図版48 第1号土坑出土弥生土器
第1号土坑出土石器
- 図版49 溝跡出土遺物
第1号井戸跡出土遺物
- 図版50 第4号住居跡出土遺物
第13号住居跡出土遺物
- 図版51 第23号住居跡出土遺物
土製品（1）
土製品（2）
磨製石鏃
- 図版52 第23号住居跡出土白玉
第20・24・25号住居跡出土玉類
砥石・磨石
第3号住居跡出土編物石
第6号住居跡出土編物石
第9号住居跡出土編物石
第25号住居跡出土遺物
第14号溝跡出土遺物
- 〈夏目西遺跡〉
- 図版53 遺跡群遠景（西から）
夏目西・弥藤次遺跡全景（南から）

図版54	調査区全景（東から） 東端部調査区全景（東から）		第8号住居跡坏出土状況 第9号住居跡遺物出土状況
図版55	第1号住居跡 第1号住居跡カマド 第1号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 第2号住居跡南半部遺物出土状況 第2号住居跡遺物出土状況	図版62	第9号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 第10号住居跡遺物出土状況 第10号住居跡カマド遺物出土状況 第11号住居跡 第11号住居跡遺物出土状況
図版56	第3号住居跡 第3号住居跡遺物出土状況 第3号住居跡カマド 第3号住居跡カマド遺物出土状況	図版63	第11号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 第11号住居跡埴出土状況 第11号住居跡紡錘車出土状況 第12号住居跡遺物出土状況
図版57	第3号住居跡遺物出土状況 第3号住居跡甕出土状況 第3号住居跡北壁側遺物出土状況 第3号住居跡剣形模造品出土状況 第4号住居跡	図版64	第12号住居跡カマド遺物出土状況 第12号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 第12号住居跡粘土溜り半截 第13号住居跡 第13号住居跡遺物出土状況
図版58	第4号住居跡掘方 第4号住居跡カマド 第4号住居跡カマド遺物出土状況 第4号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 第4号住居跡遺物出土状況	図版65 図版66	第13号住居跡遺物出土状況 第14号住居跡 第14号住居跡遺物出土状況
図版59	第5・6号住居跡遺物出土状況 第5号住居跡遺物出土状況 第6号住居跡炉跡遺物出土状況 第6号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 第6号住居跡砥石出土状況	図版67 図版68	第14号住居跡カマド 第14号住居跡貯蔵穴1遺物出土状況 第14号住居跡貯蔵穴2遺物出土状況 第14号住居跡遺物出土状況 第15号住居跡 第15号住居跡遺物出土状況
図版60	第7・8号住居跡遺物出土状況 第7号住居跡カマド遺物出土状況 第7号住居跡遺物出土状況 第7号住居跡埴出土状況 第7号住居跡高坏出土状況	図版69 図版70	第15号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 第15号住居跡遺物出土状況 第15号住居跡甗出土状況 第15号住居跡紡錘車出土状況 第16号住居跡遺物出土状況 第17号住居跡遺物出土状況
図版61	第8号住居跡遺物出土状況 第8号住居跡カマド遺物出土状況 第8号住居跡カマド支脚出土状況	図版71	第17号住居跡カマド 第17号住居跡カマド袖部半截 第17号住居跡

	第17号住居跡坏出土状况		第19号住居跡出土遺物
	第18号住居跡遺物出土状况		第21号住居跡出土遺物
図版72	第19・20号住居跡遺物出土状况		第5号溝跡出土遺物
	第19号住居跡		第10号土坑跡出土遺物
	第20号住居跡遺物出土状况	図版84	第1号住居跡出土遺物
	第20号住居跡甕出土状况		第2号住居跡出土遺物
	第20号住居跡編物石出土状况		第3号住居跡出土遺物
図版73	第21号住居跡		第6号住居跡出土遺物
	第21号住居跡カマド遺物出土状况		第7号住居跡出土遺物
	第21号住居跡貯蔵穴出土状况	図版85	第7号住居跡出土遺物
	第21号住居跡遺物出土状况		第11号住居跡出土遺物
図版74	第21号住居跡遺物出土状况		第14号住居跡出土遺物
	第21号住居跡劍形模造品出土状况	図版86	第15号住居跡出土遺物
図版75	第1号掘立柱建物跡		第21号住居跡出土遺物
	第2号掘立柱建物跡	図版87	第1号住居跡出土遺物
図版76	第1・2号溝跡		第2号住居跡出土遺物
	第5号溝跡		第3号住居跡出土遺物
図版77	第1号住居跡出土遺物	図版88	第3号住居跡出土遺物
	第4号住居跡出土遺物	図版89	第3号住居跡出土遺物
図版78	第4号住居跡出土遺物		第4号住居跡出土遺物
	第5号住居跡出土遺物	図版90	第4号住居跡出土遺物
	第6号住居跡出土遺物		第6号住居跡出土遺物
	第8号住居跡出土遺物	図版91	第7号住居跡出土遺物
	第11号住居跡出土遺物	図版92	第7号住居跡出土遺物
図版79	第12号住居跡出土遺物		第8号住居跡出土遺物
図版80	第12号住居跡出土遺物		第9号住居跡出土遺物
	第13号住居跡出土遺物		第10号住居跡出土遺物
	第14号住居跡出土遺物	図版93	第11号住居跡出土遺物
図版81	第14号住居跡出土遺物	図版94	第11号住居跡出土遺物
	第15号住居跡出土遺物	図版95	第13号住居跡出土遺物
図版82	第16号住居跡出土遺物	図版96	第13号住居跡出土遺物
	第17号住居跡出土遺物	図版97	第13号住居跡出土遺物
図版83	第17号住居跡出土遺物	図版98	第14号住居跡出土遺物
	第18号住居跡出土遺物	図版99	第14号住居跡出土遺物

図版100	第14号住居跡出土遺物	陶器
図版101	第14号住居跡出土遺物	図版127 土製品
図版102	第14号住居跡出土遺物	石製品
	第15号住居跡出土遺物	図版128 第1号住居跡出土石製品(1)
図版103	第15号住居跡出土遺物	第1号住居跡出土石製品(2)
図版104	第15号住居跡出土遺物	図版129 玉類
図版105	第15号住居跡出土遺物	石製品未成品
図版106	第15号住居跡出土遺物	図版130 舟形土製品
図版107	第17号住居跡出土遺物	焼成粘土塊
	第21号住居跡出土遺物	打製石斧
図版108	第21号住居跡出土遺物	石鏃
図版109	第21号住居跡出土遺物	砥石
図版110	第21号住居跡出土遺物	図版131 砥石
図版111	第3号住居跡出土遺物	砥石
	第4号住居跡出土遺物	台石
	第8号住居跡出土遺物	図版132 第12号住居跡出土編物石
図版112	第11号住居跡出土遺物	第16号住居跡出土編物石
図版113	第11号住居跡出土遺物	第17号住居跡出土編物石(1)
図版114	第12号住居跡出土遺物	第17号住居跡出土編物石(2)
	第13号住居跡出土遺物	第18号住居跡出土編物石
図版115	第14号住居跡出土遺物	第20号住居跡出土編物石
図版116	第14号住居跡出土遺物	鉄製品
図版117	第14号住居跡出土遺物	桃核
図版118	第14号住居跡出土遺物	〈弥藤次遺跡〉
	第15号住居跡出土遺物	図版133 調査区全景(東から)
図版119	第15号住居跡出土遺物	調査区全景(西から)
図版120	第15号住居跡出土遺物	図版134 第1号住居跡
図版121	第15号住居跡出土遺物	第1号住居跡遺物出土状況
図版122	第15号住居跡出土遺物	図版135 第2号住居跡
図版123	第15号住居跡出土遺物	溝跡全景
図版124	第16号住居跡出土遺物	第5号溝跡
	第21号住居跡出土遺物	第6号溝跡
図版125	第21号住居跡出土遺物	第10号溝跡
図版126	須恵器	図版136 第1号住居跡出土遺物

第2号住居跡出土遺物
図版137 第1号住居跡出土遺物
第2号住居跡出土遺物
第6号溝跡出土遺物

図版138 第6号溝跡出土遺物
土製品
第5号溝跡出土遺物
古墳時代初頭の遺物(1)
古墳時代初頭の遺物(2)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では基本目標「安心・安全な暮らしを確保する」の施策として「交通安全の推進と安全な道路交通環境の整備」を推進している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

県道藤岡本庄線の道路改良工事にかかる埋蔵文化財の所在および取扱いについては、道路建設課長（当時）から文化財保護課長（当時）あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、夏目遺跡、夏目西遺跡、弥藤次遺跡について「現状保存することが望ましいが、やむを得ず工事を実施する場合は記録保存のための発掘調査を実施すること」と回答し、協議を実施した。しかし、工事計画の変更が困難であったため発掘調査を実施することとなり、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあ

たることとなった。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から平成7年8月25日付け道建第153号で提出され、それに対する保護上必要な勧告は平成7年9月1日付け教文第3—288号で行った。また、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知番号は次のとおりである。

夏目遺跡

平成7年9月8日付け教文第2—103号

平成9年7月31日付け教文第2—92号

平成12年10月18日付け教文第2—72号

夏目西遺跡

平成7年9月8日付け教文第2—104号

弥藤次遺跡

平成7年9月8日付け教文第2—102号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

夏目・夏目西・弥藤次遺跡の発掘調査は、県道藤岡本庄線の建設工事に先立ち平成7・9・12年の3年度にわたって断続的に実施した。調査区は南東から北西に向って延びる総延長約375mの道路建設予定地で、路線内には東から夏目、夏目西、弥藤次の順で遺跡が並び、現道を境に接している。調査総面積は5,754㎡である。

発掘調査は工事施工の関係で、平成7年度に夏目・夏目西・弥藤次の3遺跡の第1次調査を平成7年7月10日から平成8年2月29日まで実施した。次いで平成9年度に夏目遺跡第2次調査を平成9年4月1日から同年6月30日まで行い、平成12年度には同遺跡第3次調査を平成12年9月1日から同年11月30日まで実施し、すべての調査を完了した(第1図・第1表)。

平成7年度

7月、事務手続きと事務所設置を終え、囲柵工

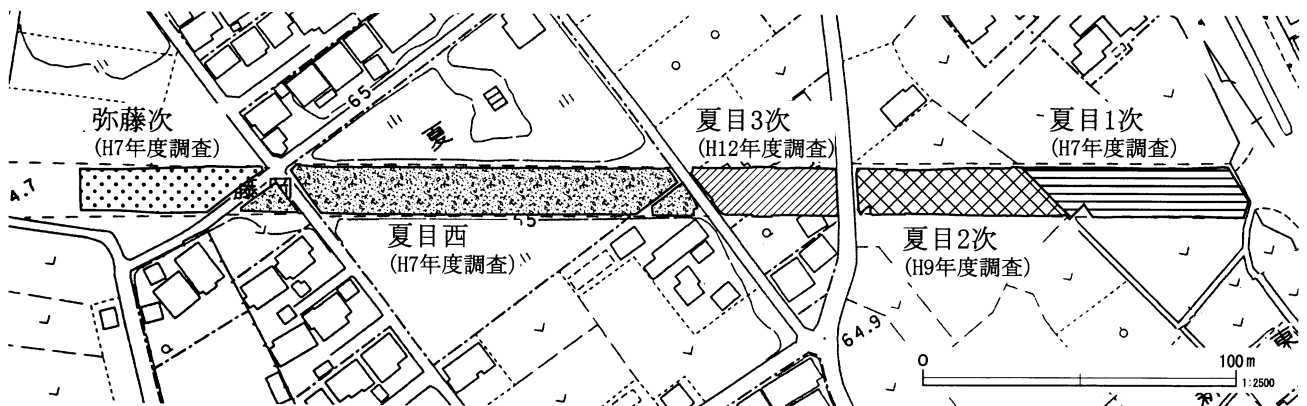
事ならびに表土掘削を開始した。9月から本格的に夏目遺跡の調査に取り掛かり、順次、夏目西遺跡、弥藤次遺跡へと調査を進めた。

発掘調査は遺構確認作業、基準点測量を経て、各遺構の掘り下げ、土層断面図・平面図等の作成、遺構の写真撮影等の調査記録の作成を実施した。

12月9日(土)、夏目西遺跡を対象に現地説明会を開催し、調査成果を一般市民の方々に公開した。平成8年1月中旬、空中写真撮影及び写真測量を実施し、1月下旬までに各遺跡の調査を概ね終了した。2月上旬、埋め戻し作業や事務所の撤収などを行い、2月末に調査を終了した。

調査の結果、夏目遺跡では弥生時代中期の土坑1基、古墳時代の住居跡3軒、中・近世の柱穴列3条、溝跡2条、土坑6基、時期不詳の倒木痕8基等が検出された。調査面積は1,670㎡である。

夏目西遺跡では古墳時代の住居跡19軒、奈良時代の住居跡2軒、掘立柱建物跡3棟、土坑1基、



第1図 調査区分図

第1表 発掘調査工程表

遺跡名	所在地	調査面積	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度
夏目遺跡(第1次)	本庄市大字西富田732番地1他	1,670㎡	■					
(第2次)	本庄市大字西富田736番地他	1,050㎡			■			
(第3次)	本庄市大字西富田771-2番地他	704㎡						■
夏目西遺跡	本庄市大字西富田762番地他	1,830㎡	■					
弥藤次遺跡	本庄市大字西富田962番地1他	500㎡	■					

中・近世の掘立柱建物跡1棟、柱穴列4条、溝跡6条、土坑44基等が検出された。調査面積は1,830㎡である。

弥藤次遺跡では古墳時代の住居跡2軒、溝跡1条、中・近世の溝跡9条、土坑12基等を検出した。調査面積は500㎡である。

平成9年度

夏目遺跡第2次調査は平成7年度調査区の北西側に隣接し、調査面積は1,050㎡である。

4月、事務手続きと事務所設置を行い、囲柵工事ならびに表土掘削を開始した。予想を超える遺構密度であったため、急ぎ調査に着手した。検出された遺構数は、古墳時代の住居跡21軒（うち2軒は2回目の調査）、奈良・平安時代の住居跡2軒、中・近世の掘立柱建物跡1棟、柱穴列2条、溝跡14条、井戸跡1基、土坑24基等である。

遺構の掘り下げ後、土層断面図・平面図等の作成、遺構の写真撮影等の調査記録を作成し、6月中旬に空中写真撮影を実施、下旬までに調査を概ね終了し、その後埋め戻し作業や事務所の撤収を行い、6月末に調査を終了した。

平成12年度

夏目遺跡第3次調査は第2次調査区の北西側に隣接し、調査面積704㎡の狭い範囲である。

9月、事務手続きと事務所設置を終え、囲柵工事ならびに表土掘削を開始した。遺構確認作業を平行して行い、10月から調査に本格的に着手する。

調査の結果、夏目遺跡を東西に分ける大溝跡やそれに取り付く道路跡など貴重な発見があった。また古墳時代後期初頭の大型井戸跡が検出され、その廃絶に伴うマツリに使用された大量の土器が出土した。検出された遺構数は古墳時代の住居跡3軒、井戸跡1基、大溝跡1条、道路跡4条、土坑1基、中・近世の溝跡7条、土坑34基等である。

11月中旬、遺構の調査終了後、調査区の埋め戻し、事務所の撤去及び事務手続きを行い、本事業に伴うすべての調査を完了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理報告書作成事業は、平成18年4月10日から平成19年3月23日、及び平成19年4月9日から9月30日までの1年6ヶ月間にわたって実施した。

平成18年度

遺物の水洗・註記作業を行った後、接合・復元作業を実施した。接合後、遺物実測を開始した。壺・甕などの大型品、丁寧に器面にミガキの施された坏・高坏などを中心に機械実測（3スペース）を利用して素図を作成し、この素図をもとに実測図を完成させた。実測図は製図ペンで墨入れ（トレース）し、必要に応じて拓影を採った。実測図と拓影図を組み合わせてレイアウトを行い、遺物図版の版下を作成した。

遺構図面は図面整理と修正を経て第2原図を作成した。第2原図はスキャナーでコンピューターに取り込んだ後、グラフィックソフトでデジタルトレース・土層説明等の入力データを組み込んで編集作業を実施し、遺構図版の版下を作成した。

実測遺物はその属性をパソコンに入力し、データ処理・編集して遺物観察表を作成した。また、遺存度の高い遺物を中心に石膏による復元作業を行い、一部写真撮影を実施した。併行して調査時に撮影した写真を選択し、焼付け、トリミング指示などを行い、写真図版を作成した。

平成19年度

前年度から引き続き遺物・遺構の整理作業を進めるとともに、全体のとりまとめ作業にかかる。

作成したデータを基に原稿を執筆し、遺構図版・遺物図版・写真などを組み合わせて割付を作成した。写真・本文の割付作業と原稿執筆を進め、編集作業に着手した。9月中旬に大部分の作業を完了させて、下旬に印刷業者を選定して入稿した。校正は3回行い、平成19年11月に報告書を刊行した。図面類・写真類・遺物は整理分類して、収納作業を実施した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成7年度（発掘調査）

理事長	荒井 桂	調査部	
常務理事兼管理部長	新井 秀直	理事兼調査部長	小川 良祐
管理部		調査部副部長	高橋 一夫
専門調査員兼経理課長	関野 栄一	調査第一課長	坂野 和信
庶務課長	及川 孝之	主任調査員	中村 倉司
		調査員	橋本 充史

平成9年度（発掘調査）

理事長	荒井 桂	調査部	
常務理事兼管理部長	稲葉 文夫	理事兼調査部長	梅沢 太久夫
管理部		調査部副部長	今泉 泰之
専門調査員兼経理課長	関野 栄一	調査第一課長	井上 尚明
庶務課長	依田 透	主査	中村 倉司
		主任調査員	君島 勝秀

平成12年度（発掘調査）

理事長	中野 健一	調査部	
常務理事兼管理部長	広木 卓	調査部長	高橋 一夫
管理部		調査部副部長	石岡 憲雄
管理部副部長	関野 栄一	専門調査員（調査第一担当）	坂野 和信
		統括調査員	富田 和夫
		統括調査員	木戸 春夫

平成18年度（報告書作成）

理事長	福田 陽充	調査部	
常務理事兼総務部長	岸本 洋一	調査部長	今泉 泰之
総務部		調査部副部長	小野 美代子
総務部副部長	昼間 孝志	主幹兼整理第一課長	磯崎 一
総務課長	高橋 義和	主査	大谷 徹

平成19年度（報告書作成）

理事長	刈部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	岸本 洋一	調査部長	村田 健二
総務部		調査部副部長	磯崎 一
総務部副部長	昼間 孝志	整理第二課長	富田 和夫
総務課長	松盛 孝	主査	大谷 徹

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

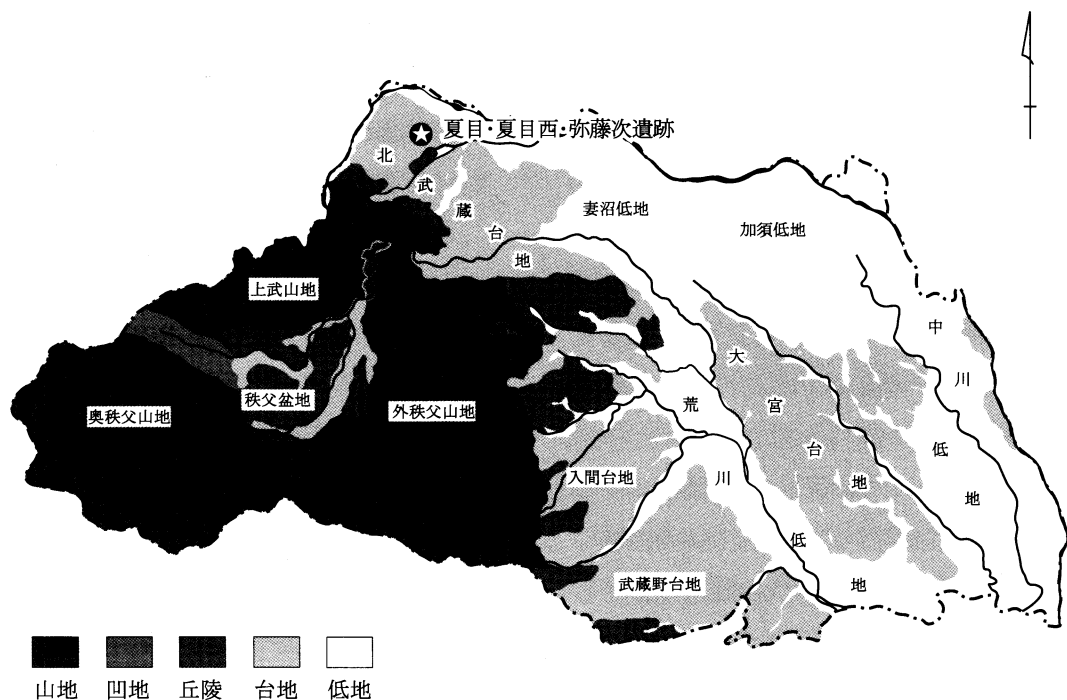
夏目・夏目西・弥藤次遺跡は、埼玉県本庄市大字西富田に所在する古墳時代中期から奈良・平安時代を中心とする集落跡により構成される遺跡群である。JR高崎線本庄駅の南西約2kmに位置している。

夏目遺跡他が位置する本庄市は埼玉県の北西端付近にあたり、平成18年1月10日に児玉町と合併し、新たな本庄市として生まれ変わった。北は利根川によって群馬県と境を接し、西は児玉丘陵を介して上武山地（秩父山地外縁）に連なる。本庄市域の大半が乗る台地は北武蔵台地の一部で本庄台地と呼ばれ、神流川によって形成された洪積扇状地性地形（立川面）を示している。本庄台地は神川町池田付近が扇頂部にあたり標高約110m、北西方向に緩やかに傾斜し、夏目遺跡付近で標高65m前後、本庄市諏訪町で約50mとなる。扇端部

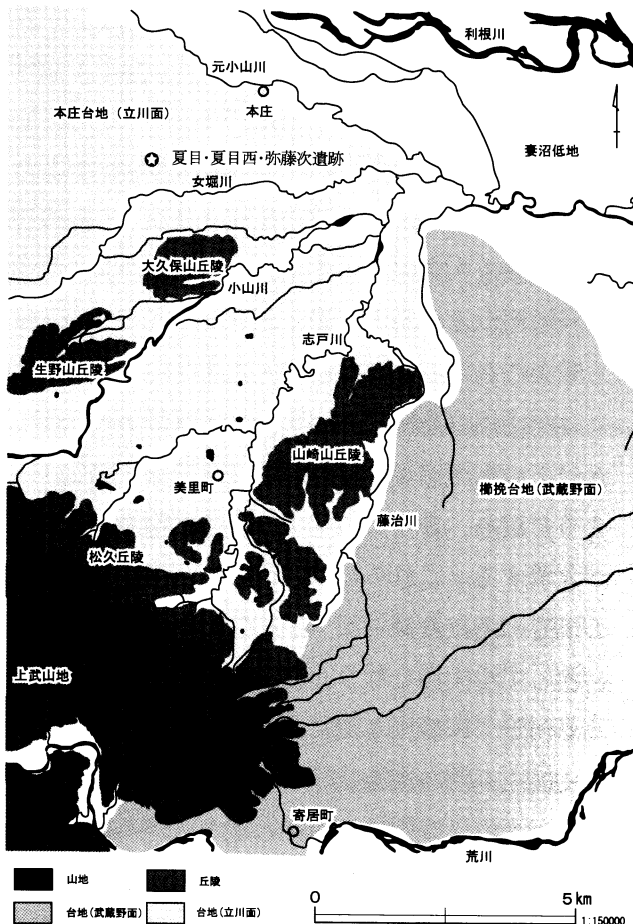
は崖線を形成し、妻沼低地に移行する。

本庄台地の南方には独立丘陵（残丘）として生野山丘陵・大久保山（浅見山）丘陵があり、やや南東に離れる山崎山丘陵とともに「大和三山」にも喩えられる。生野山丘陵・大久保山丘陵の南側には小山川（身馴川）が東流し、西側から北側にかけては女堀川が本庄市街地の南端部をかすめるように流れ、さらに山崎山丘陵の西側には志戸川が北流する。これらは本庄市と深谷市（旧岡部町）の境界にあたる深谷市（旧岡部町）大字岡付近で合流して小山川となり、さらに下流の深谷市大字高島付近で利根川本流に合流している。

山崎山丘陵の東を北流する藤治川・針ヶ谷堀川ラインを境に東側には櫛挽台地が広がる。櫛挽台地は荒川によって形成された洪積扇状地で、武蔵野面に対応する。扇頂部は寄居町、扇端部は深谷



第2図 埼玉県の地形



第3図 遺跡周辺の地形区分図

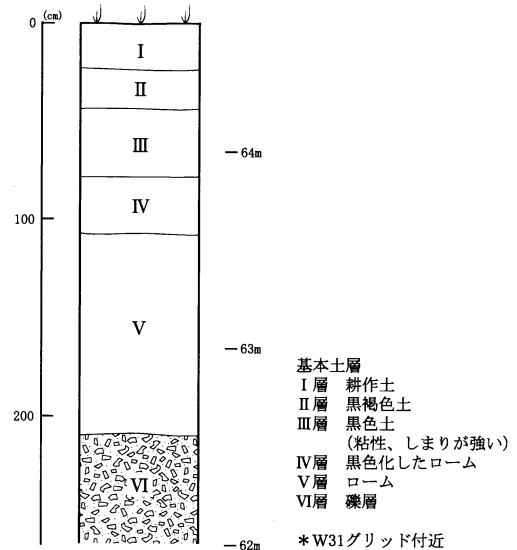
市岡付近では急崖となって妻沼低地に移行する。

妻沼低地は利根川や小山川の乱流によって形成された沖積低地で、南は本庄台地と檜挽台地に画され、北は利根川に及ぶ。東に行くと加須低地に

2. 歴史的環境

ここでは、今回報告する夏目・夏目西・弥藤次遺跡に関連する周囲の遺跡の状況について、本庄市域を中心に概略を述べることにしたい。

旧石器時代の遺跡は、埼玉県北部地域においては、大里ローム層の堆積が確認されている区域に散見されるが、現状では古墳時代の竪穴住居跡等の発掘中に副次的に出土する程度であり、石器が集中して発見される遺跡は乏しい。本庄台地上では上里町寄りの石神境遺跡、市域東端部付近の西五十子田端屋敷遺跡の黒曜石製ナイフ形石器、社具路遺跡で頁岩製ナイフ形石器、小山川右岸の古



第4図 基本土層

連なるものである。概ね利根川を始めとする河川の流向に沿うように自然堤防が発達し、縄文時代後・晩期以降、弥生時代を経て古墳時代には盛んに集落が営まれている。

前述したように本庄台地は扇状地性台地で、概ね砂礫層を主体としているが、粘土層や大里ロームと呼ばれるローム層が複雑に堆積し、地点によってその様相は大きく変化する。第4図に示したように本遺跡における基本土層は、砂礫層を層厚約1.3mの粘質ローム層が被覆しているだけで、未発達な状況であった。

川端遺跡で細石刃・彫器・剝片、市街地北西端部の三ヶ山古墳周辺で尖頭器・舟底形石器、市街地西南部の柏1丁目で尖頭器、大久保山丘陵上では大久保山遺跡B 2道路地区で石核、宥勝寺北裏遺跡で剝片、深谷市北坂遺跡からナイフ形石器などが出土しているにすぎない。

縄文時代草創期～早期の遺跡は市内では大久保山丘陵に限られる。宥勝寺北裏遺跡では爪形文・多縄文・撚糸文・押型文・沈線文・条痕文の各時期、大久保山A遺跡では爪形文・撚糸文・押型文・沈線文の各時期の土器が出土している。また草創

期特有の石器である有舌尖頭器は大久保山A遺跡や女堀川左岸の笠ヶ谷戸遺跡、西方の児玉工業団地内の将監塚・古井戸遺跡で出土している。深谷市北坂遺跡から隆線文系土器が、藤治川流域に位置する西谷・水久保遺跡から爪形文系・多縄文系土器が出土している。

縄文時代前期も大久保山丘陵を中心としているが、大久保山A遺跡では黒浜式・諸磯b式土器、宥勝寺北裏遺跡・大久保山遺跡B2道路地区で黒浜式土器が出土している。大久保山丘陵の東側、栗崎地区の西谷遺跡でも黒浜式土器、市街地北西の御手長山古墳周辺でも黒浜式・諸磯式土器が知られる。隣接する深谷市宮西遺跡から県北部では類例の少ない関山式期の集落跡が検出された。また、深谷市四十坂遺跡では黒浜式期、東光寺裏遺跡で諸磯b式期の集落跡が検出されている。

中期になると、本格的な集落跡が形成されるようになる。特に、児玉工業団地造成事業に伴い調査された将監塚・古井戸遺跡は勝坂～加曾利EIV式に継続する大規模な環状集落を二つ形成していたことが判明している。将監塚遺跡では住居跡114軒、土坑711基等、古井戸遺跡では住居跡154軒、土坑953基等を検出した。また、この遺跡の南方では、平塚遺跡・中下田遺跡・新宮遺跡において加曾利E式期の集落の存在が確認されている。西富田地区では四方田条里遺跡の範囲に所在する西富田前田遺跡から加曾利EIII式土器を出土する住居跡1軒、土坑1基を検出した。また、大久保山丘陵西側微高地上の飯玉東遺跡にも加曾利E式土器を出土する土坑1基が検出されており、雷電下遺跡からも加曾利EIII式～EIV式土器が少量出土している。大久保山遺跡B2道路地区にも縄文時代中期の土器が少量出土する地点がある。

その他市域北端の段丘崖付近の東五十子城跡遺跡、女堀川右岸微高地上の公卿塚古墳、大久保山A遺跡などからも縄文時代中期後半の土器が採集されている。深谷市域では水窪遺跡から勝坂式期

～加曾利E I式期、菅原遺跡から加曾利EIII式期の環状集落が調査されている。

縄文時代後・晩期の遺跡は中期に比べ極端に減ってしまう。古川端遺跡では堀之内II式・安行III a式を中心に後・晩期の土器をある程度出土しており、女堀川左岸の雌濠遺跡でも加曾利BII式土器が採集されている。宥勝寺北裏遺跡・大久保山A遺跡、公卿塚古墳にも称名寺式～堀之内II式の土器が出土し、市域北端段丘崖付近の諏訪新田遺跡・東五十子城跡遺跡にも後・晩期の土器がある。また、深谷市原ヶ谷戸遺跡からは安行III a式期の土器群が調査された。

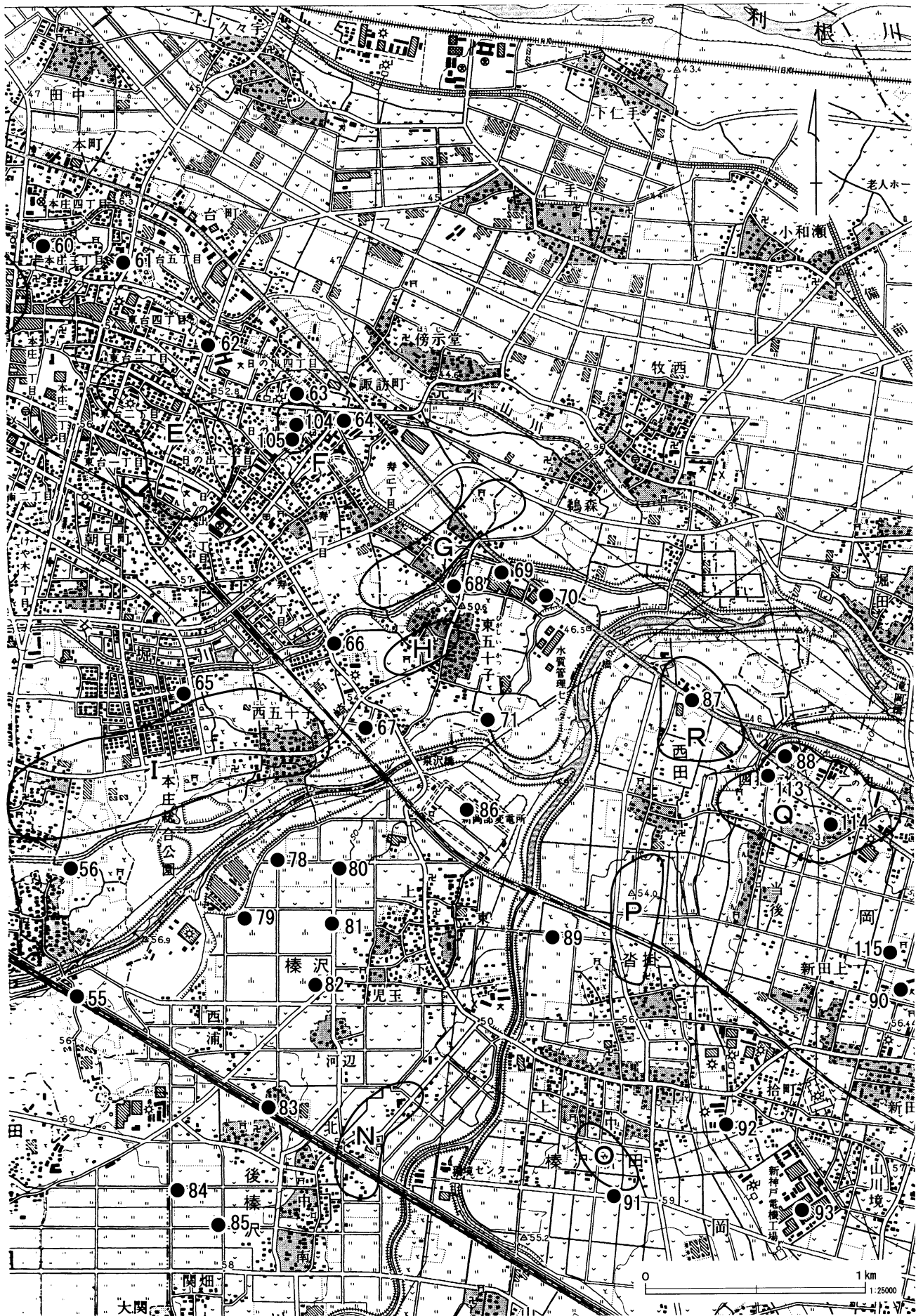
弥生時代の遺跡もあまり多く見つかっていない。児玉郡域周辺では弥生時代の遺跡はほとんどが丘陵上に立地する。本庄市域でも大久保山丘陵内の宥勝寺北裏遺跡・大久保山A遺跡では弥生時代中期～後期の土器が採集されており、大久保山遺跡IIIB地区、IVA地区には後期～終末期の住居跡がそれぞれ2軒と4軒確認されている。また市街地北西端の下野堂遺跡からも中期の土器が採集されている。今回の夏目遺跡でも中期の土坑から筒形土器や甕形土器に伴って石斧が出土した。

隣接する美里町如来堂C遺跡や深谷市四十坂遺跡からは、東海地方の水神平式の影響をもつ土器群や縄文時代晩期最終末の大洞A式系の土器群が検出され、弥生時代前期末に遡る資料が検出されている。中期前半、岩櫃山式段階の再葬墓が四十坂遺跡から検出された。四十坂遺跡は沖積低地を控えた台地縁辺に立地しており、初期農耕集落であった可能性が指摘されている。

古墳時代に入ると市域では女堀川周辺の自然堤防・微高地上や、大久保山丘陵周囲の微高地上に大規模な集落が形成されるようである。西富田地区周辺では社具路遺跡、関越自動車道本庄児玉インターチェンジ付近では川越田・後張遺跡、大久保山丘陵北側の下田・七色塚・久下東遺跡、同じく丘陵西側雷電下遺跡等でS字状口縁台付甕、「叩



第5図 周辺遺跡分布図



周辺遺跡

1 夏目遺跡	28 小島本伝遺跡	55 古川端遺跡	82 宮西遺跡	108 熊野十二社古墳
2 夏目西遺跡	29 元屋敷遺跡	56 東本庄遺跡	83 東光寺裏遺跡	109 元富古墳
3 弥藤次遺跡	30 二本松遺跡	57 宥勝寺北裏遺跡	84 石蒔遺跡	110 前山2号墳
4 窪前遺跡	31 西富田遺跡	58 久下東遺跡	85 地神祇遺跡	111 前山1号墳
5 愛宕遺跡	32 薬師遺跡	59 笠ヶ谷戸遺跡	86 六反田遺跡	112 東谷古墳
6 本郷東遺跡	33 薬師元屋舗遺跡	60 本庄城址遺跡	87 原ヶ谷戸遺跡	113 四十塚古墳
7 久城前遺跡	34 西富田新田遺跡	61 天神林遺跡	88 四十坂遺跡	114 寅稻荷塚古墳
8 八幡太神南遺跡	35 社具路遺跡	62 薬師堂遺跡	89 新井遺跡	115 御手長山古墳
9 熊野太神南遺跡	36 西富田本郷遺跡	63 御堂坂遺跡	90 熊野遺跡	A 本郷古墳群
10 後張遺跡	37 雌濠遺跡	64 諏訪新田遺跡	91 地福院遺跡	B 生野山古墳群
11 川越田遺跡	38 西富田前田遺跡	65 西五十子田端遺跡	92 下道南遺跡	C 旭・小島古墳群
12 梅沢遺跡	39 九反田遺跡	66 西五十子大塚遺跡	93 西龍ヶ谷戸遺跡	D 北原古墳群
13 東牧西分遺跡	40 地神遺跡	67 西五十子台遺跡	94 銚子塚古墳	E 塚合古墳群
14 飯玉東遺跡	41 塔頭遺跡	68 東五十子大塚遺跡	95 金鑽神社古墳	F 御堂坂古墳群
15 雷電下遺跡	42 今井諏訪遺跡	69 赤坂埴輪窯跡	96 鷲山古墳	G 鶴森古墳群
16 中畑遺跡	43 久城前遺跡	70 東五十子城跡遺跡	97 八幡山古墳	H 東五十子古墳群
17 将監塚東遺跡	44 今井遺跡群	71 東五十子田端遺跡	98 三ヶ山古墳	I 西五十子古墳群
18 堀向遺跡	45 将監塚・古井戸遺跡	72 十二町遺跡	99 前の山古墳	J 東富田古墳群
19 藤塚遺跡	46 今井川越田遺跡	73 後田遺跡	100 蚕影山古墳	K 前山古墳群
20 柿島遺跡	47 四方田遺跡	74 砂田遺跡	101 小島御手長山古墳	L 浅見山古墳群
21 左口遺跡	48 観音塚遺跡	75 宮ヶ谷戸遺跡	102 山の神古墳	M 塚本山古墳群
22 共和小学校校庭遺跡	49 下田遺跡	76 村後遺跡	103 下野堂二子塚古墳	N 後榛沢古墳群
23 蛭川坊田遺跡	50 元富遺跡	77 向田遺跡	104 御堂坂1号墳	O 中南古墳群
24 南街道遺跡	51 七色塚遺跡	78 大寄遺跡	105 御堂坂2号墳	P 水窪古墳群
25 吉田林割山遺跡	52 山根遺跡	79 大寄B遺跡	106 公卿塚古墳	Q 四十塚古墳群
26 向田A・B遺跡	53 大久保山遺跡	80 稻荷前遺跡	107 元富東古墳	R 西田古墳群
27 下野堂遺跡	54 東谷遺跡	81 西浦北遺跡		

き甕」など外来系土器を伴う住居跡、方形周溝墓などの遺構が数多く検出されている。

さらに中期から後期にかけては、大集落が西富田地区周辺で展開するようになり、上越新幹線、県道本庄鬼石線（金鑽大通り線）建設、市道南大通り線建設等で確認された二本松・夏目・社具路・今井諏訪・西富田・西富田新田・西富田本郷・薬師・薬師元屋舗（南大通り線内）・雌濠・笠ヶ谷戸等の数多くの遺跡が集落形成のピークを迎えるようになる。また、この時期に住居内にカマドが取り入れられるようになる。県下全域を考慮しても最も古い段階のカマド検出例がこの地域の遺跡に集中している点は注意される。

この時期に集落形成が活況を呈してくるのは、北の市街地北端の段丘崖付近（東五十子城跡・諏訪新田・薬師堂・小島本伝・御堂坂の諸遺跡）や、南の大久保山丘陵の東側微高地（東谷遺跡）、南東の小山川両岸付近（古川端遺跡）、西の今井地区の女堀川流域の微高地（今井川越田・地神・塔頭遺跡）でも同様である。これらの集落遺跡は概ね6世紀中頃を前後する時期に廃絶していくものが多く、薬師元屋舗遺跡・夏目遺跡・下田遺跡・七色

塚遺跡・古川端遺跡等々の「長期間継続型集落」のような少数の例外を除いて集落の占地を大幅に変更する。

6世紀後半あるいは7世紀代以降に集落形成が始まる遺跡を本庄市域で指摘するのはやや困難であるが、市街地北西部の石神境遺跡、西富田地区の薬師遺跡、大久保山丘陵の大久保山遺跡、今井地区から児玉工業団地にかけての区域の立野南遺跡・八幡太神南遺跡・熊野太神南遺跡・今井遺跡群G地点や、将監塚・古井戸遺跡等々の遺跡は、薬師遺跡の6世紀中頃を除くと、7世紀中頃～後半から集落を営み始め、律令期集落として成立する。将監塚・古井戸遺跡には9世紀初頭前後の時期と考えられる官衙風の掘立柱建物跡群を伴う区域もあり、「計画村落」的な位置づけを考えることもできそうである。しかし、市街地周辺ではまだ集落の広がりを十分把握できるほどに、奈良・平安時代の集落を確認していない。薬師元屋舗遺跡が最も多くこの時期の住居跡を調査している。特に、第51号住居跡から出土した石製紡錘車には「武蔵国児玉郡草田郷戸主大田部身万呂」と刻字されており、この地域が古代児玉郡、草田郷に含まれ

ていたことが立証された。

深谷市西部の榛沢地区周辺には古墳時代から律令期の集落が多数存在する。原ヶ谷戸遺跡・水窪遺跡・大寄B遺跡・石蒔A遺跡・地神祇遺跡は古墳時代を中心とする集落である。六反田遺跡・大寄遺跡・宮西遺跡は古墳時代前期以降、小断絶を挟みつつも古墳時代中・後期、奈良・平安時代まで集落が形成された長期継続型集落である。

律令期にはJR岡部駅周辺の岡地区に大規模な集落が形成される。熊野遺跡をはじめ、内出遺跡・白山遺跡・上宿遺跡・中宿遺跡などが調査されている。岡廃寺跡もこの一角に位置する。熊野遺跡からは大規模な建物群や畿内産土師器、中宿遺跡からは整然と並んだ倉庫群が発見され(正倉院)、古代榛沢郡の郡家と正倉院、寺跡がセットとなり存在したと推定されている。郡庁院の発見が待たれるところである。

ところで、本庄市域は数多くの古墳が確認されており、市街地北西部から上里町域にかけて分布する旭・小島古墳群、やや市域をはずれるが大久保山丘陵南斜面の塚本山古墳群等は、古墳分布密度がかなり高い群集墳である。このうち塚本山古墳群は30基以上の内容が半明しており、古墳時代後期後半を中心に築造されている。旭・小島古墳群や市域東端部の東五十子古墳群・西五十子古墳群などのように近年の本庄市教育委員会の調査で様相の判明しつつある区域もあるが、大半は古墳跡の状態での確認であるため、主体的な時期の確認は困難である。その他市街地周辺・女堀川流域・大久保山丘陵には鵜森古墳群、塚合古墳群、北原古墳群、御堂坂古墳群、東富田古墳群・浅見山古墳群等々が所在する。

前期古墳と考えられるものは少ない。本庄市域の近傍では大久保山丘陵の最西端部に前方後方墳の鷲山古墳がある。全長60mを測り、周溝の一部が調査され、口縁部に穿孔された二重口縁壺形土器、手焙形土器等が出土している。この時期には

弥生時代以来の方形周溝墓が造り続けられており、児玉郡域のほとんどの地域では古墳築造よりも方形周溝墓の築造の方が一般的である。本庄市域周辺では、市街地北西部の下野堂遺跡において方形周溝墓・円形周溝墓・方墳・円墳等が検出された。ここでは10号墓出土の碧玉製石釧、17号遺構とされる一辺76mの方形周溝はその性格を巡り注目される。最近の調査では一辺25mの方墳、万年寺つつじ山古墳から刀子、鎌、短冊形鉄斧などの石製模造品が出土している。また、塚本山古墳群においては、概ね4世紀代に属する方形周溝墓が前方後方形を含めて9基確認されている。その他に今井地区の諏訪遺跡や大久保山丘陵北側の飯玉東遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓が検出されている。深谷市榛沢地区では石蒔B遺跡から前方後方形を含む方形周溝墓が12基調査された。四十坂遺跡西側の原ヶ谷戸遺跡からは方形周溝墓5基と円形周溝墓1基が検出されている。

中期に属する古墳としては、大久保山丘陵東部の浅見山古墳群の北堀前山1・2号墳が知られる。北堀前山1号墳は中期前半を遡る全長70mの前方後円墳であることが最近の調査で判明した。児玉地域最古の前方後円墳として位置づけられる。後続する北堀前山2号墳は粘土槨を埋葬施設とする5世紀初頭前後の方墳である。

また、女堀川左岸の微高地の東富田古墳群に属する公卿塚古墳は最近の調査で径約60mの造出し付き円墳であることが明らかにされた。滑石製模造品や特徴的な格子叩き目の円筒埴輪片を数多く出土し、5世紀中葉前後の時期が想定されている。同じ格子叩き目埴輪をもつ本庄市金鑽神社古墳(径68m)、生野山將軍塚古墳(径60m)などの大型円墳が相次いで築造されており、中期後半から後期にかけての集落の広範な出現を理解する上で重要視される。

なお、東富田古墳群には、公卿塚古墳に後続すると思われる熊野十二社古墳(径約35m)、元富古

墳（径約30m）、元富東古墳（径約42m）が現存する。墳丘外表部の踏査からいずれも横穴式石室導入以前の古墳と想定されている。

本庄市街地の古墳にも、旭・小島古墳群内の三杳山古墳（径69m）、万年寺八幡山古墳（径約40m）のような横穴式石室導入以前の大型円墳がある。これらは時期決定の材料がやや不足しているが、5世紀代の築造が想定されている。また下野堂二子塚古墳は全長55mの前方後円墳とされているが、墳丘が現存せず、時期も不明である。

深谷市域では四十塚古墳が注目される。横矧板鋌留短甲や鈴付楯円形鏡板付轡などの馬具を伴い5世紀後葉～末葉の築造と考えられる。美里町では長坂聖天塚古墳（直径60m）と川輪聖天塚古墳（直径40m）が志戸川流域の首長墓（円墳）である。前者からは方格規矩鏡・獣首鏡、後者からは壺形埴輪が出土し、5世紀前半代の築造である。

6世紀以降は市域各所で古墳築造が相次ぐ。旭・小島古墳群内では前の山古墳や御手長山古墳が当該期に位置づけられる。御手長山古墳は埋葬施設・墳丘・周溝の内容が判明する調査が行われた比較的大きな古墳である。径約50m、周溝の幅約14mを測り、榛名山二ツ岳から噴出した角閃石安山岩を側壁・奥壁に使用して構築した緩やかな胴張りの形態の横穴式石室を埋葬施設としていた。出土遺物から6世紀終末前後の築造と考えられる。この時期には角閃石安山岩の横穴式石室は他にも旭・小島古墳群中の調査例があり、塚合古墳群でも調査されている。市街地周辺から上里町域の古墳時代後期後半にはこのタイプの古墳がかなり築造されたと考えられ、銅鏡や須恵器フラスコ瓶・平瓶などを出土した浅間山古墳がその代表例である。深谷市榛沢地区では6世紀後半に全長51mの前方後円墳、寅稻荷塚古墳が築造される。

古代後期の9世紀後半以降は丘陵・台地上に占地していた拠点集落が縮小・解体し、周辺の沖積地に小規模集落を数多く派生するようになる。

将監塚・古井戸遺跡も10世紀前半でほぼ終息し、中下田遺跡・塚島遺跡・柿島遺跡・左口遺跡などの小規模集落を派生する。大久保山丘陵付近でも丘陵下の微高地に占地する雷電下遺跡・根田遺跡などに集落の主体が移行する。一方で大久保山遺跡や深谷市大寄遺跡・宮西遺跡、美里町向田遺跡などでは10世紀後半以降の内黒塚や羽釜を伴う集落が展開することが知られており、中世への胎動を示す資料として注目される。

また最近の発掘調査において古墳時代から奈良・平安時代の水田遺構や溝跡が、今井条里遺跡、児玉条里遺跡、将監塚・古井戸遺跡、八幡太神南遺跡・熊野太神南遺跡・往来北遺跡、真下境東遺跡、堀向遺跡、下田・諏訪遺跡等で検出され、古代の水利と農業経営を考察する手がかりが増加しつつある。おそらく、夏目遺跡の成立を論ずる際にも大溝の掘削と維持・管理を含めた水利との関係は無視できない一面となろう。

中世の本庄市は武蔵七党の一つ、児玉党の本貫地であり、活躍する舞台となる。児玉党は多数の氏族に分かれたことが知られている。将監塚・古井戸遺跡は児玉党真下氏関連、今井遺跡群B地点及び北郭遺跡は今井氏館跡の一部、また真鏡寺後遺跡は児玉党塩屋氏に関連する館跡といわれている。夏目遺跡に近接する西富田本郷遺跡は児玉党本宗家「庄氏」に関わる富田氏の館との説がある。

中世寺院や墳墓としては、大久保山遺跡・東谷中世墳墓群、上里町大光寺裏遺跡、美里町広木上宿遺跡などがある。

戦国期の城跡としては東五十子遺跡が調査されている。15世紀後半、古河公方と関東管領上杉氏との間で繰り返された3度の攻防戦、五十子の陣に関わる遺跡である。溝跡・方形堅穴・土坑などが多数発見され、大半が15世紀代の所産で、五十子の陣の年代に合致する。小山川を隔てて対岸に位置する深谷市六反田遺跡からも同時期の遺物が出土しており、有機的な関連が窺われる。

III 遺跡の概要

夏目・夏目西・弥藤次遺跡は、JR高崎線本庄駅の南西約2kmの本庄台地上に位置する。遺跡は標高64～65mの起伏の少ない平坦地に広がり、遺跡の南方を東流する女堀川とは約600mの距離を隔てた台地内陸部に立地している。

この三遺跡は埼玉県重要遺跡に選定されている西富田遺跡群を構成する古墳時代中期から奈良・平安時代にかけて営まれた集落遺跡で、周辺には北に西富田遺跡、二本松遺跡、東に薬師遺跡、薬師元屋舗遺跡、南に社具路遺跡、西富田新田遺跡がそれぞれ隣接し、古代集落遺跡の密集地帯として知られている（第6図）。

西富田遺跡群における発掘調査は、昭和30年の二本松遺跡の調査を嚆矢に、これまでに本庄市教育委員会をはじめ、本庄市遺跡調査会、早稲田大学考古学研究室、当事業団等によって実施されてきた。とりわけ県道金鑽大通り線（現国道462号）の建設に先立って、昭和55・56年度に調査された二本松・夏目・社具路遺跡と、都市計画街路南大通り線の建設に伴い、昭和59年度から昭和61年度にかけて調査された薬師元屋舗遺跡（南大通り線内遺跡）などの大規模調査は、遺跡群全体を対象に大きなトレンチを入れた観を呈し、その成果は西富田地区の歴史的景観を復元する上で極めて重要な情報をもたらした。その最大の成果としては、5世紀中頃におけるカマド導入期集落の実態が明らかにされ、関東地方の中でもいち早くカマドを導入した地域としての先進性に目を向けさせたことであろう。

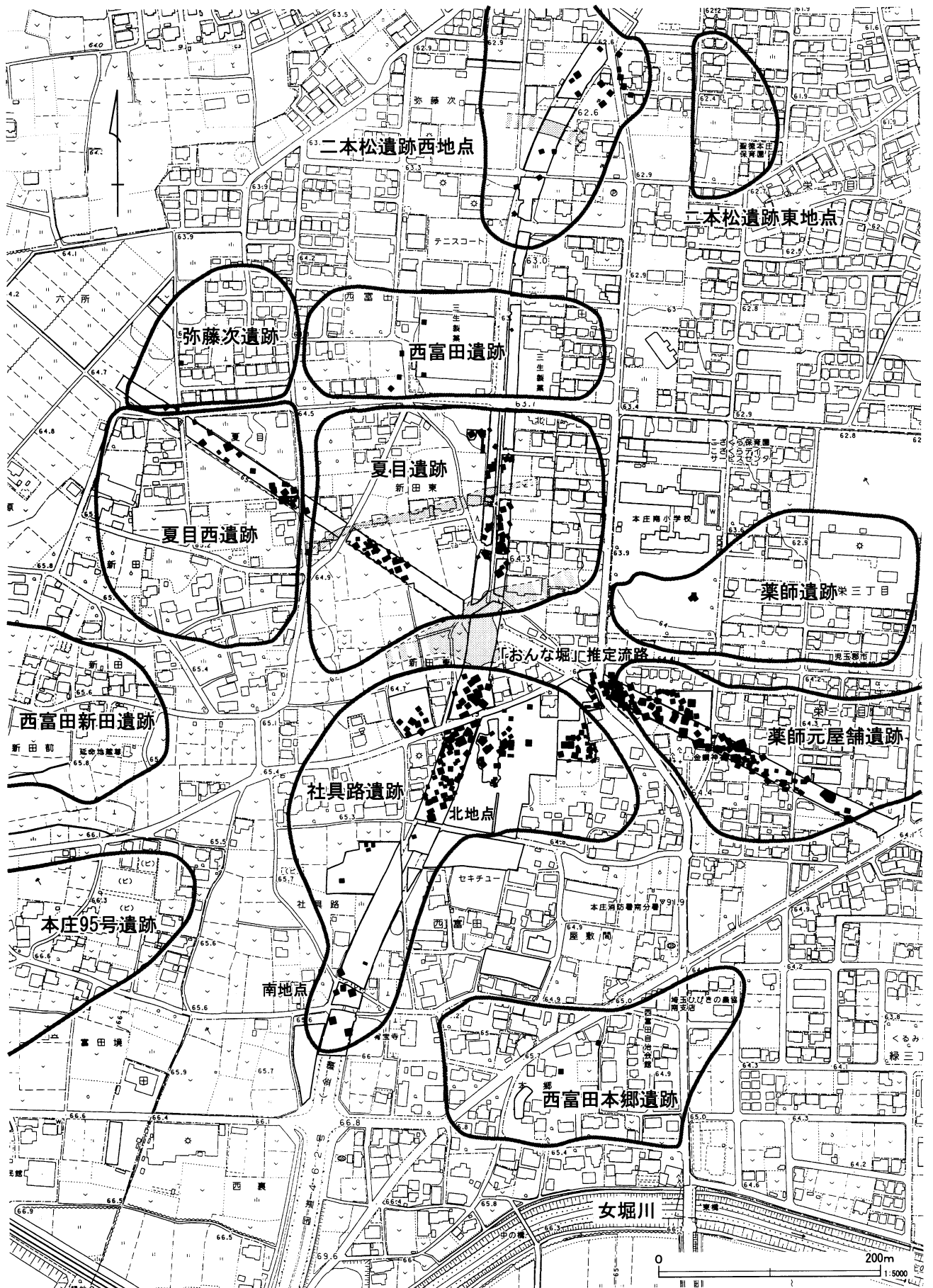
さて、今回調査を実施した三遺跡は、国道462号と南大通り線の交差点から北西へ延びる道路建設予定地内に位置し、南東から北西に向って夏目、夏目西、弥藤次遺跡の順に並び、それぞれ市道を隔てて隣接している。現況では地形的に遮るものがなく、本来同一の遺跡として把握し得るもので

ある。ただし、南に所在する社具路遺跡とは大規模な埋没河川（「おんな堀」埋没河川）によって地理的に隔絶されていることが県道金鑽線大通り線の発掘調査によって確かめられており、微地形の復元や考古学的な成果から、西富田新田遺跡を西端として、扇状地状に東へ広がる微高地上の夏目遺跡周辺の遺跡と西富田遺跡を包括する遺跡群として「西富田新田夏目古代集落」の存在が想定されている（増田1991）。

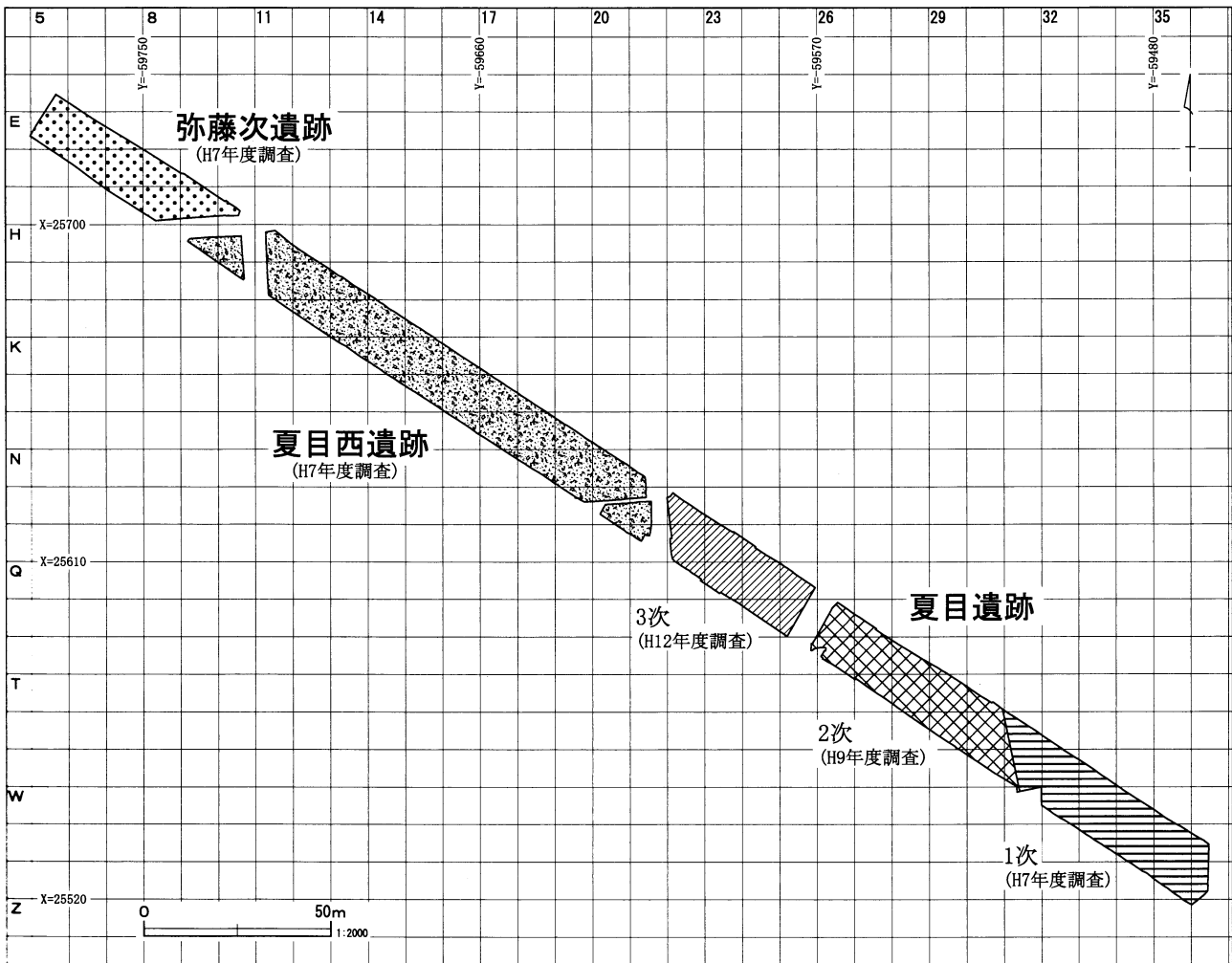
当事業団では、県道藤岡本庄線の建設に係る発掘調査として平成7年度の夏目遺跡ほか三遺跡（第1次調査）の着手以来、平成9年度の夏目遺跡第2次調査を経て、平成12年度の夏目遺跡第3次調査と断続的ながら調査を実施した。こうした夏目・夏目西・弥藤次遺跡の一連の調査によって、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代にわたる数多くの遺構・遺物が検出され、人々の生活の舞台として利用されていたことが明らかにされている。各遺跡において検出された遺構数は以下のとおりである。

夏目遺跡では当事業団における3次にわたる発掘調査によって、弥生時代中期の土坑1基、古墳時代の竪穴住居跡25軒、道路跡4条、大溝跡1条、井戸跡1基、土坑1基、平安時代の竪穴住居跡2軒、中・近世の掘立柱建物跡1棟、柱穴列5条、溝跡23条、井戸跡1基、土坑64基、ピット398基を数え、この他に時期不詳の倒木痕8基が調査された。なお、弥生時代の遺構・遺物の検出例は本庄台地では少なく、貴重な調査例となった。

夏目西遺跡では古墳時代の竪穴住居跡19軒、奈良時代の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡3棟、土坑1基、中・近世の掘立柱建物跡1棟、柱穴列4条、溝跡6条、土坑44基、ピット115基が検出された。調査区北西部に位置する古墳時代中期の第13・14・15号住居跡の3軒からは、夥しい数の土



第6図 遺跡位置図



第7図 グリッド配置図

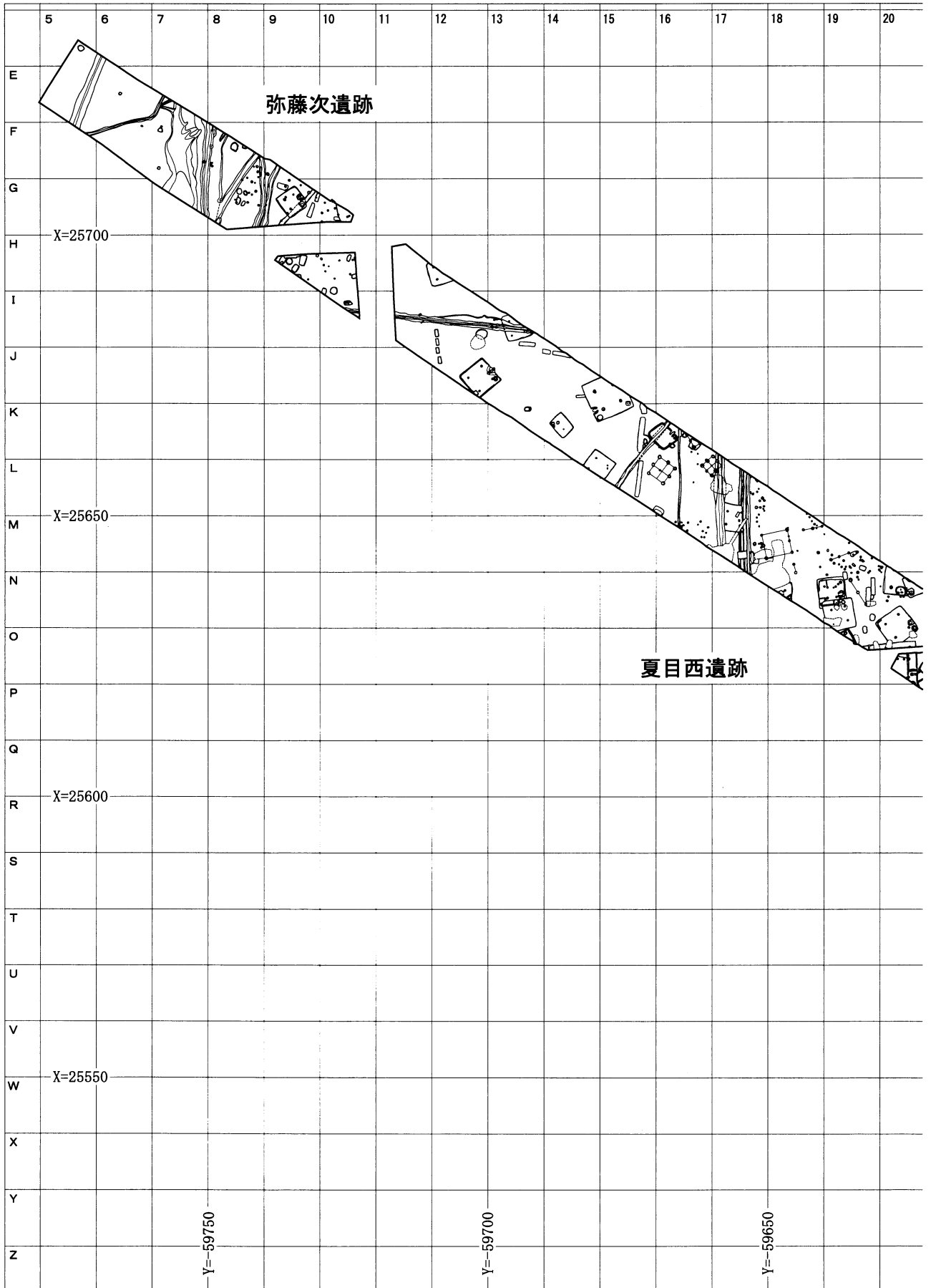
器が床面から検出され、中でも小型の住居跡である第15号住居跡は足の踏み場のないような状態であった。

弥藤次遺跡は、集落域の外縁部に位置するため検出された遺構数は少なかった。古墳時代の竪穴住居跡2軒、溝跡1条、中・近世の溝跡9条、土坑12基、ピット33基が検出された。このうち第6号溝跡とした南北溝からは古墳時代前期後半の赤彩された小型器台と共に和泉式土器が検出されており、夏目遺跡から続く集落域の西限を画する区画溝の可能性が想定される。

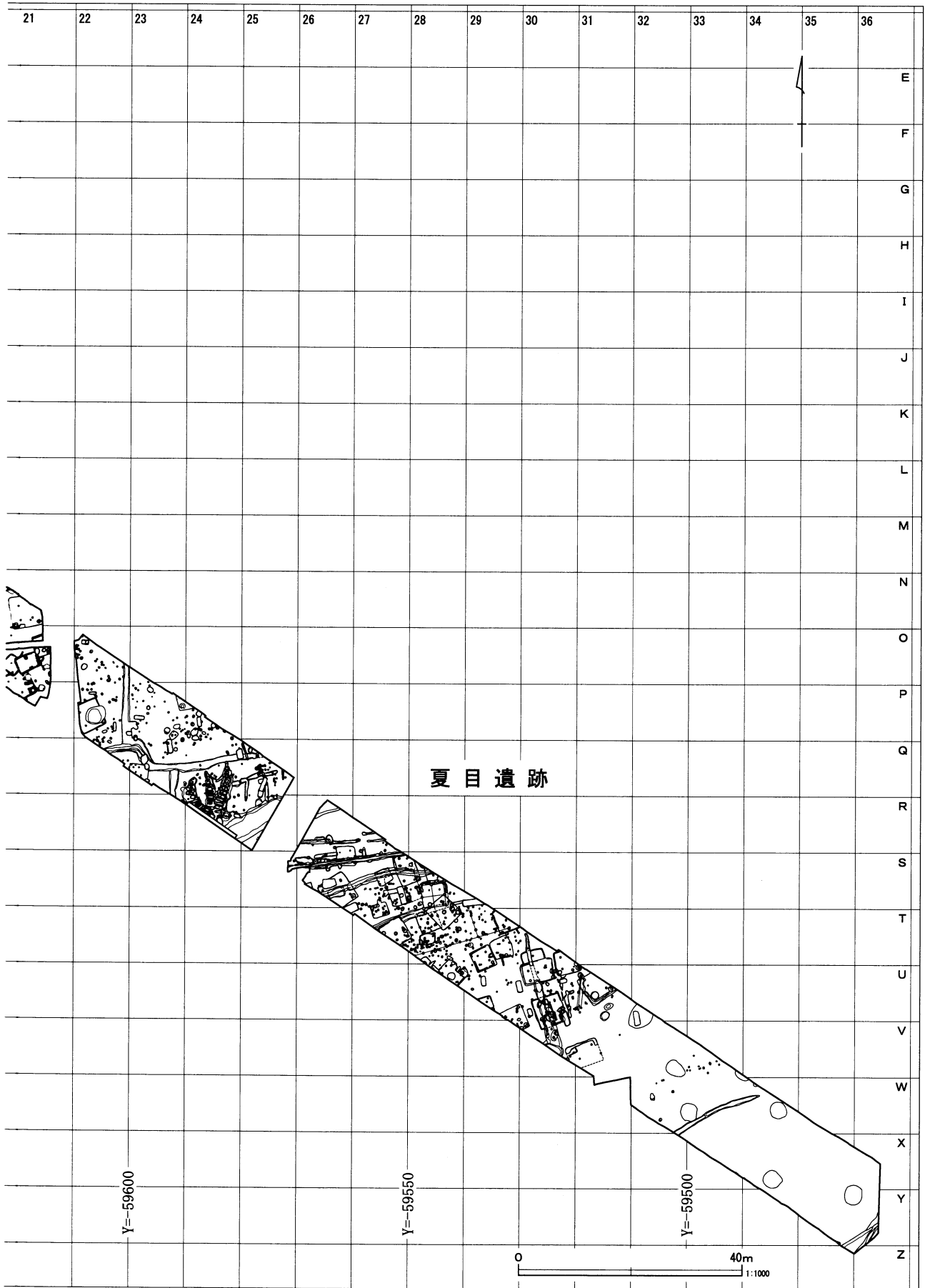
今回の調査において夏目遺跡27軒、夏目西遺跡21軒、弥藤次遺跡2軒の合計50軒の竪穴住居跡が検出された。その内訳は古墳時代中期後半から古墳時代後期前半の住居跡が28軒と大半を占めて

おり、古墳時代中期後半の和泉II式期から後期前半の鬼高I式期を主体に集落が形成されたことが明らかとなった。このうち中期の住居跡には、炉の住居とカマドをもつ住居が混在したあり方が見られ、特徴的構造の初期カマドが数多く検出されている。

また、夏目遺跡では類例の少ない古墳時代後期初頭の大型井戸跡と、ほぼ同時期の大溝跡とそれに付随するスロープ状の道路跡が検出されたことも大きな成果である。第2号井戸跡は、古墳時代後期初頭の住居跡を壊して掘り込まれており、長径約4m、ローム層下の砂礫層まで掘り込んだ大規模なものである。半分ほど埋め戻した段階で土師器坏・埴・高坏・脚付埴・壺・甕・甑などの完形品や半完形品が意図的に置かれたような状況で



第8図 夏目・夏目西・弥藤次遺跡全体図(1)



第9図 夏目・夏目西・弥藤次遺跡全体図(2)

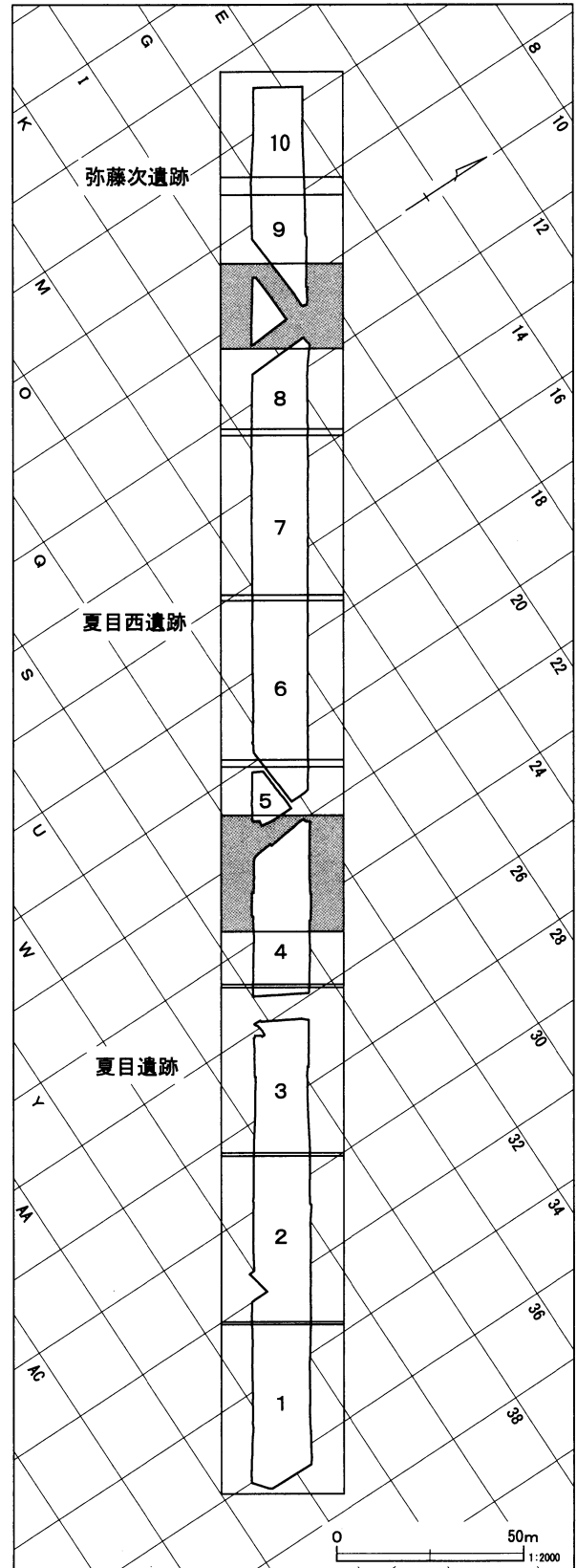
出土した。井戸の廃絶段階に何らかの祭祀行為が行われたものと考えられる。

大溝跡は上幅およそ6mで、調査区の中央を南西から北東に向かって横切るように延び、集落域を大きく二分している。道路跡は、大溝跡に取り付くように4条の道路跡が検出された。道路跡は斜面に形成され、集落から大溝に降りるための通路として機能したものと考えられる。時期を示す良好な遺物はないが、周囲の集落の状況から判断して、大溝とそれに伴う道路跡が整備、機能した年代は古墳時代中期から後期にかけての時期であることはほぼ誤りないであろう。

以前から本庄台地を貫流する古代の大溝跡が数条存在することは知られていたが、その開鑿が古墳時代中期段階にまで遡る公算が大きくなったといえる。調査の制約もあり、大溝の性格や機能がすべて解明されたわけではないが、少なくとも集落の生活用水として利用されていたことは間違いない。一方で飲料用として、井戸の掘削も行われていた点も重要である。奈良・平安時代に一般化する井戸水利用の先駆形態が確認されたことは、大溝の存在とともに、水の得難い、また生産域ともかけ離れた本庄台地上に集落が進出するための前提条件の一つであったといえるであろう。より具体的な集落景観の復元が今後の大きな課題である。

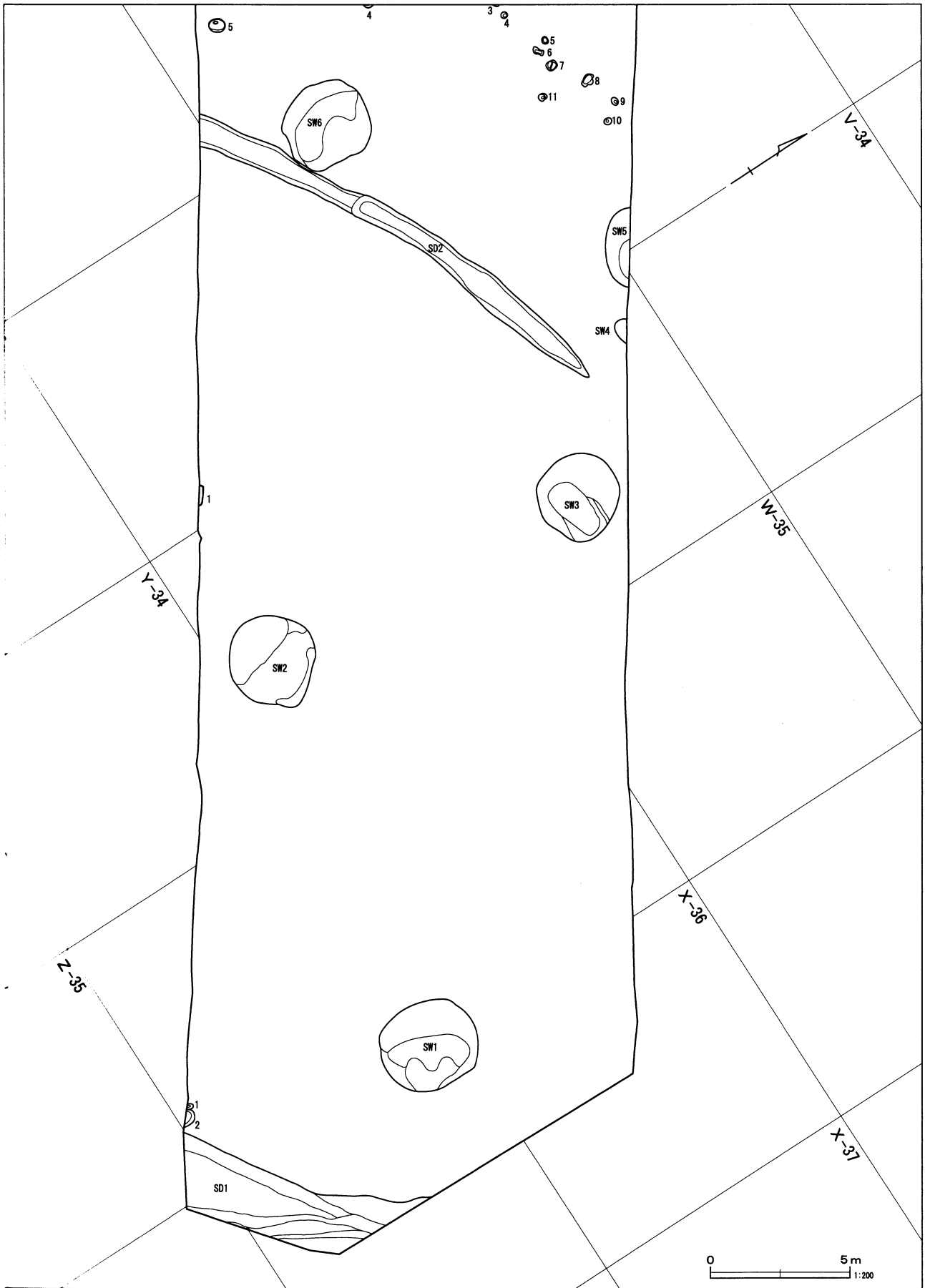
次に、出土遺物では夏目西遺跡で検出された一辺7mを越す大型住居の第14号住居跡から布留式系甕が4個体まとまって出土したことは特筆される。西富田遺跡群周辺のカマド導入期集落から在地産と考えられる布留式系甕が集中して認められることが以前より注目されてきたが、今回の発見によってその特異性がより鮮明になった。従前から指摘されているように造り付けカマドの出現経緯と布留式系甕の存在から、大和・河内地域に居住した渡来人を含む人々の移住についての問題を考えるうえで重要な手がかりが得られた。

また、夏目西遺跡第1号住居跡からは滑石製白

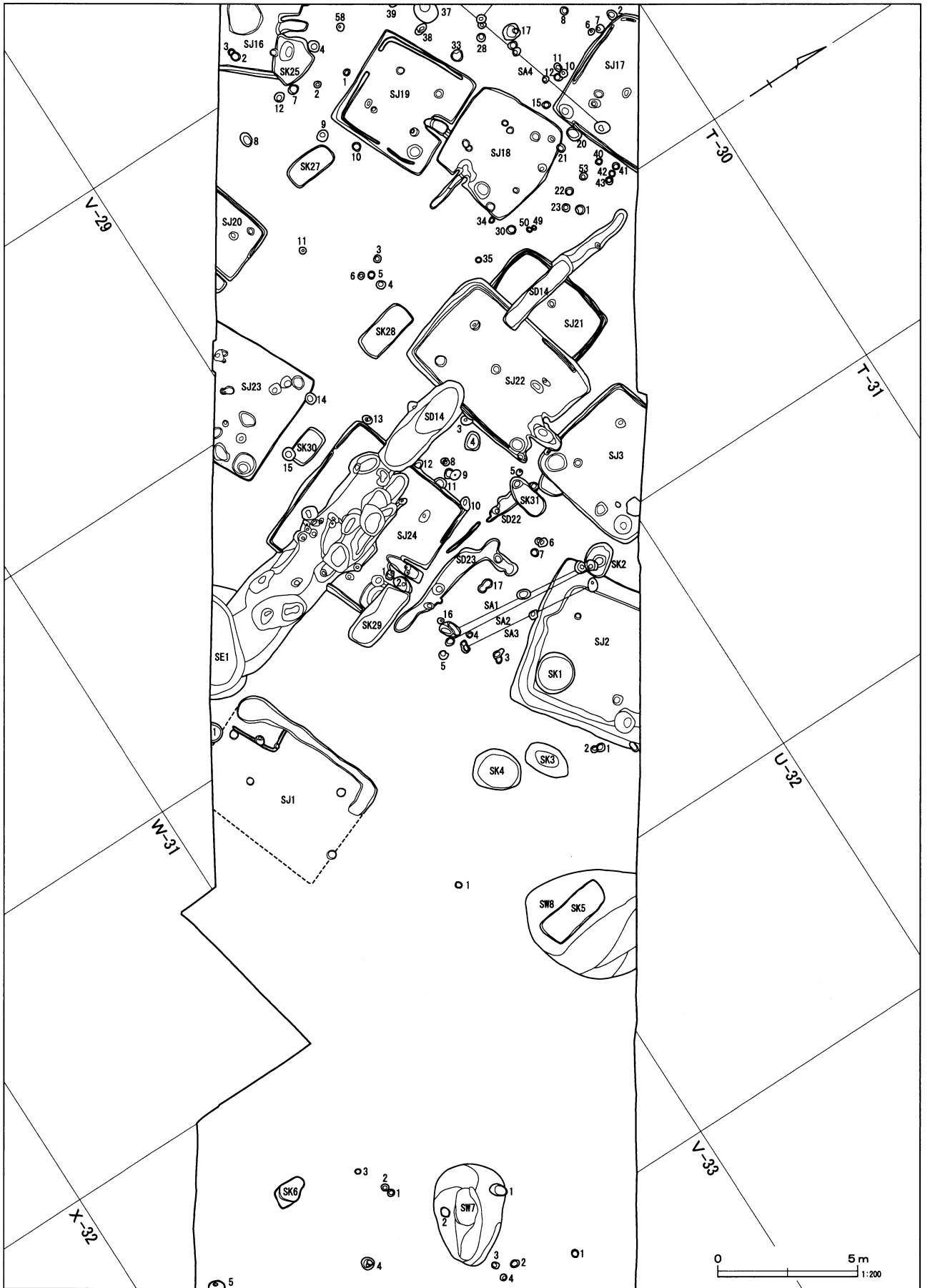


第10図 遺跡全体図区割図

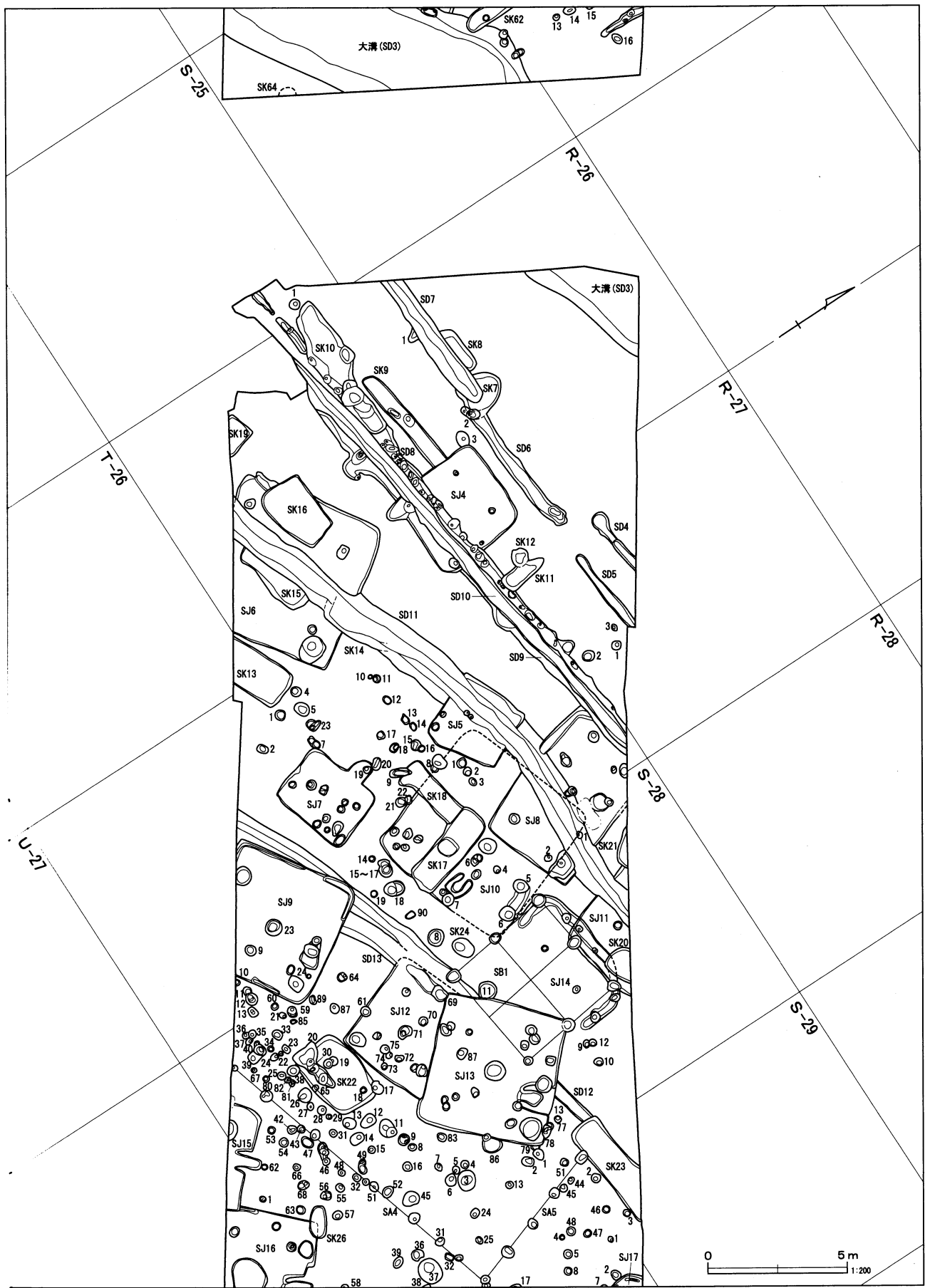
玉を主体とする未成品が70点以上も出土しており、玉作工房跡の可能性が高い。カマドの構築土



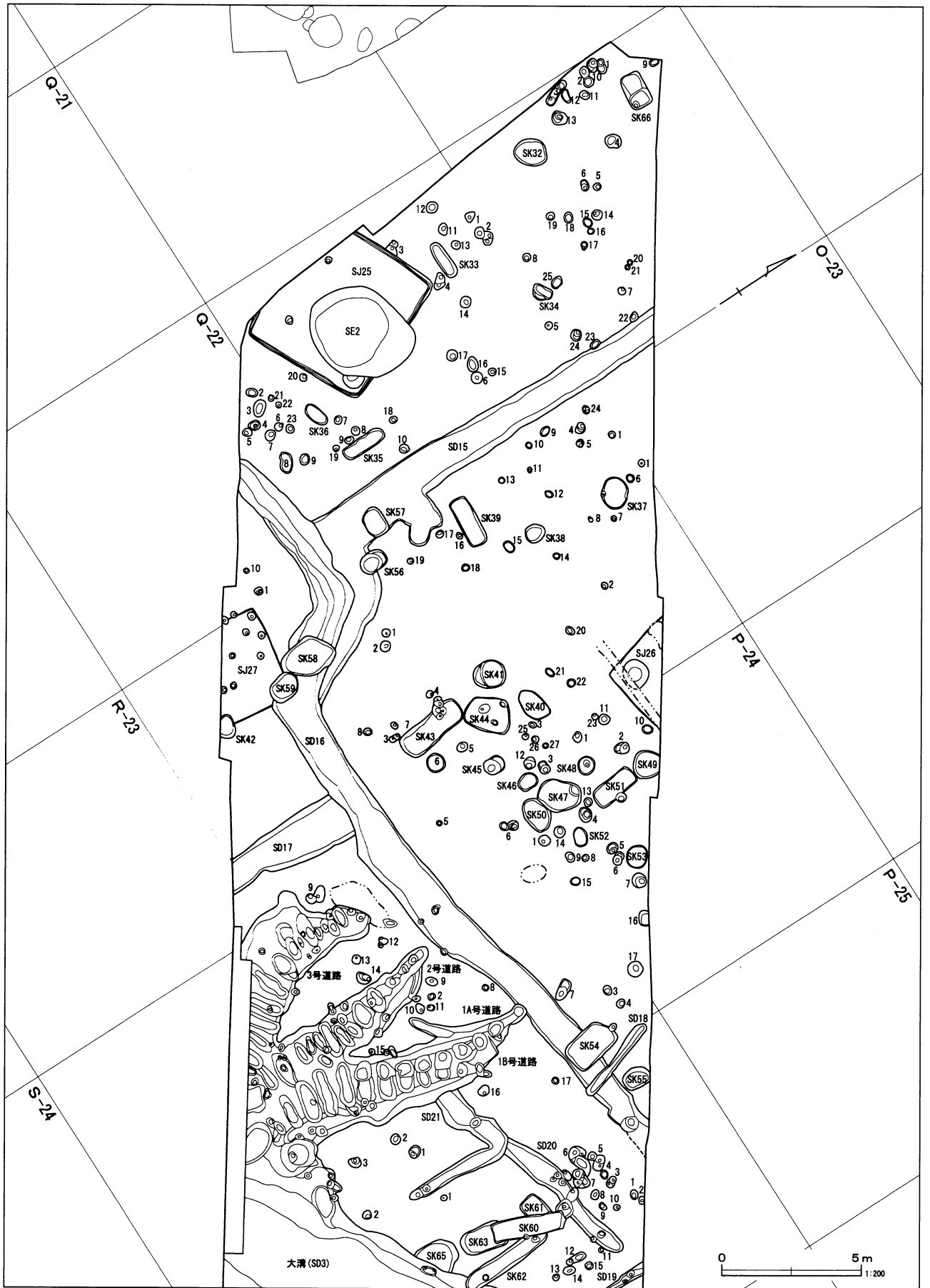
第11図 遺跡区割図(1) —夏目遺跡—



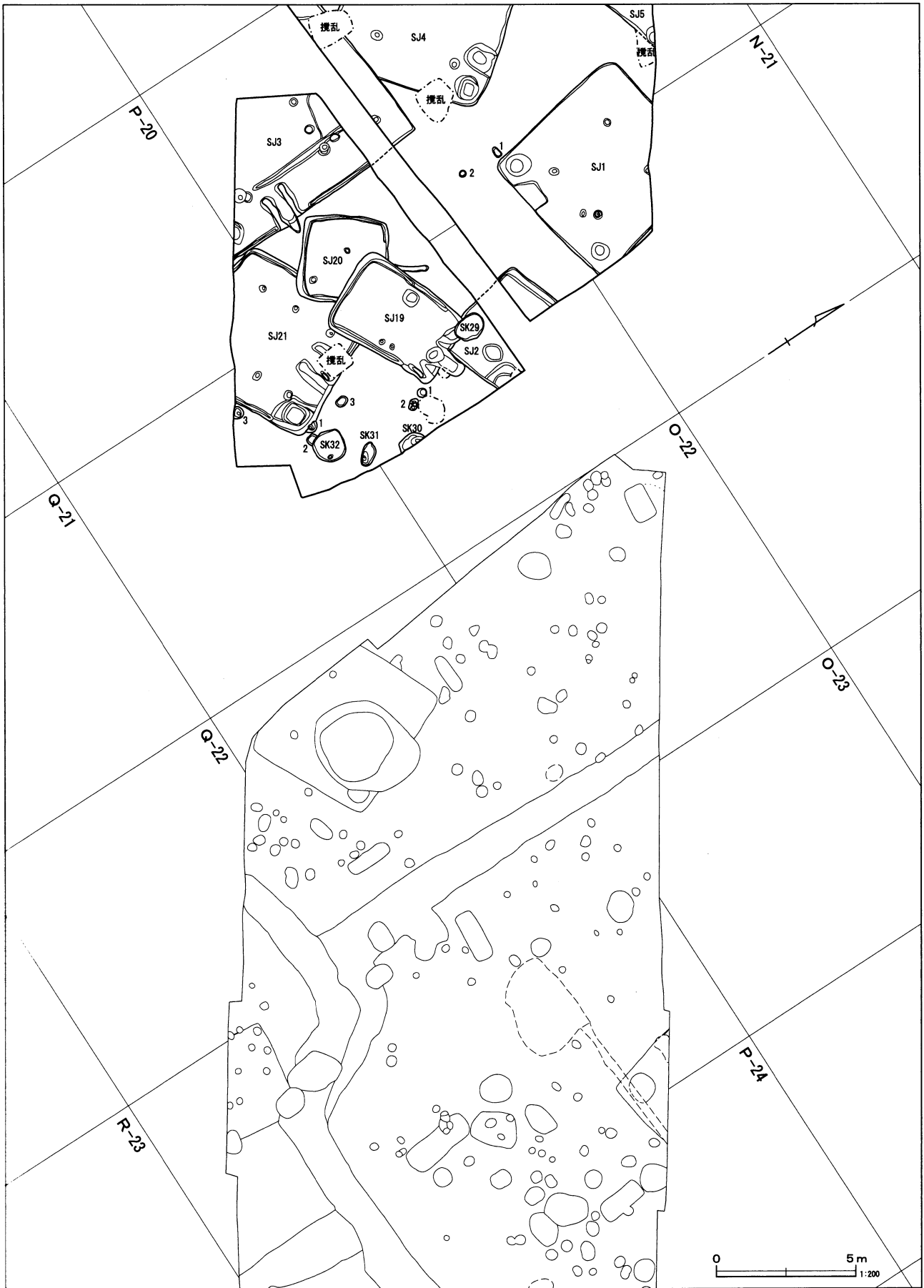
第12図 遺跡区割図(2) -夏目遺跡-



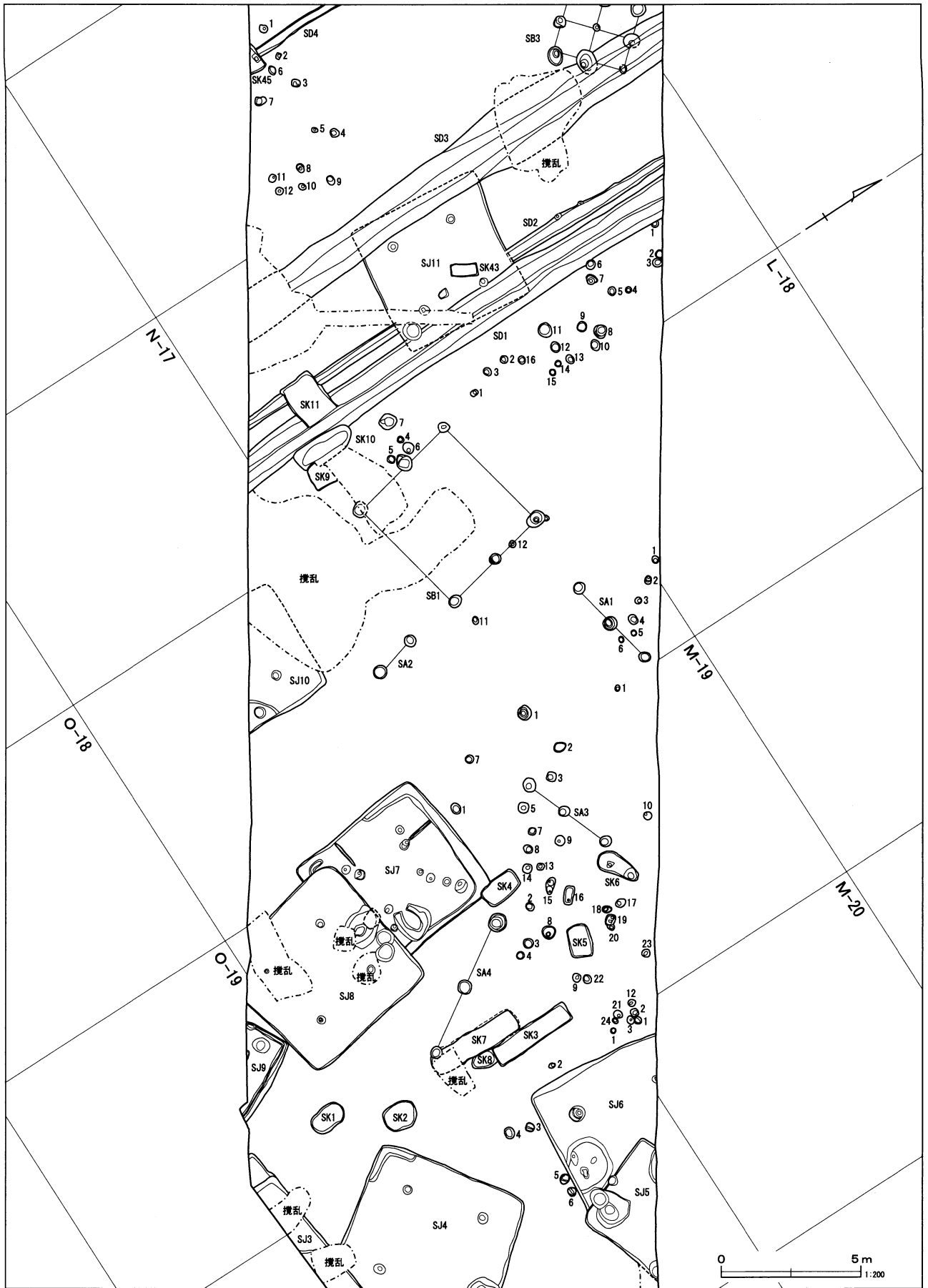
第13図 遺跡区割図 (3) —夏目遺跡—



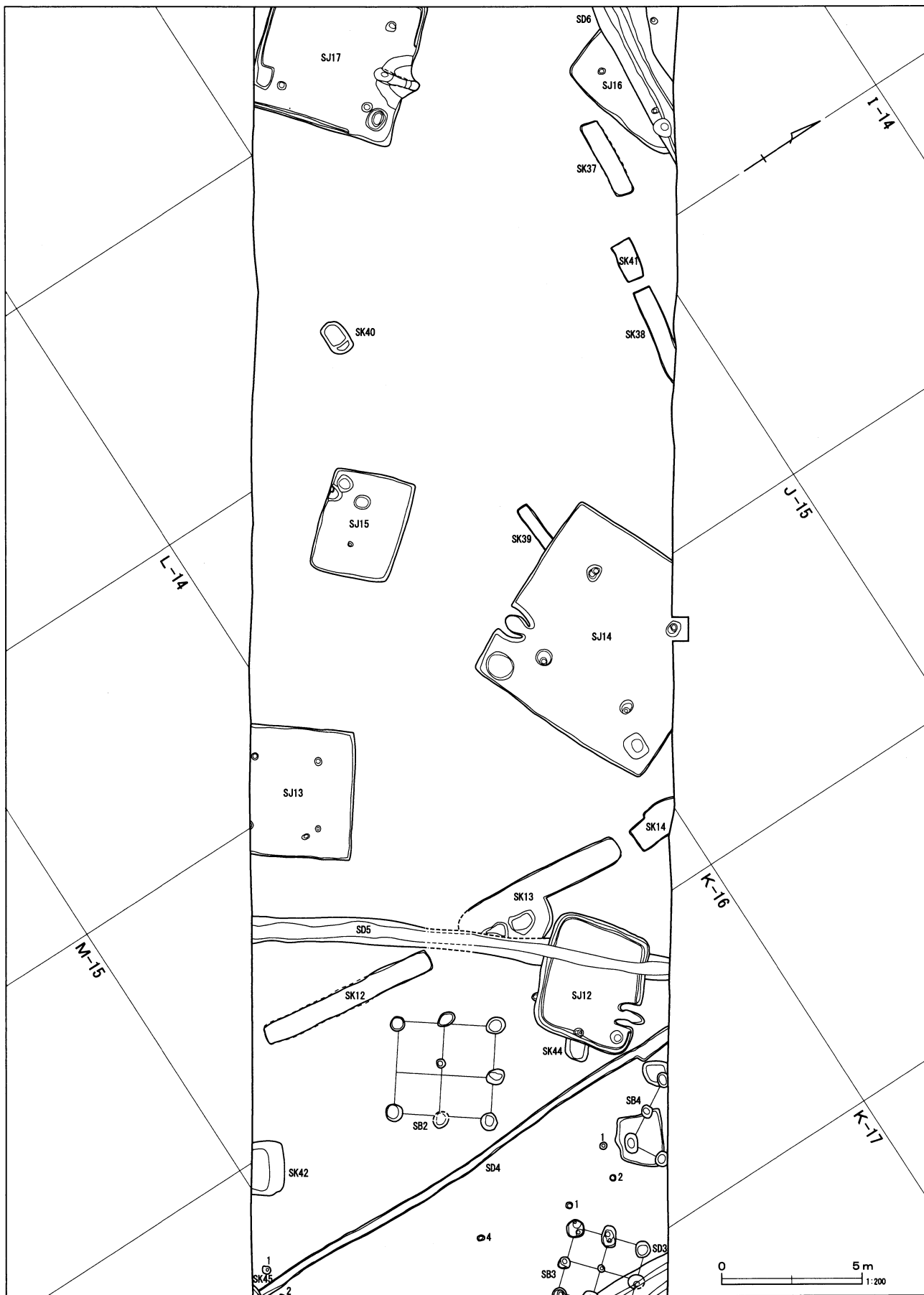
第14図 遺跡区割図(4) —夏目遺跡—



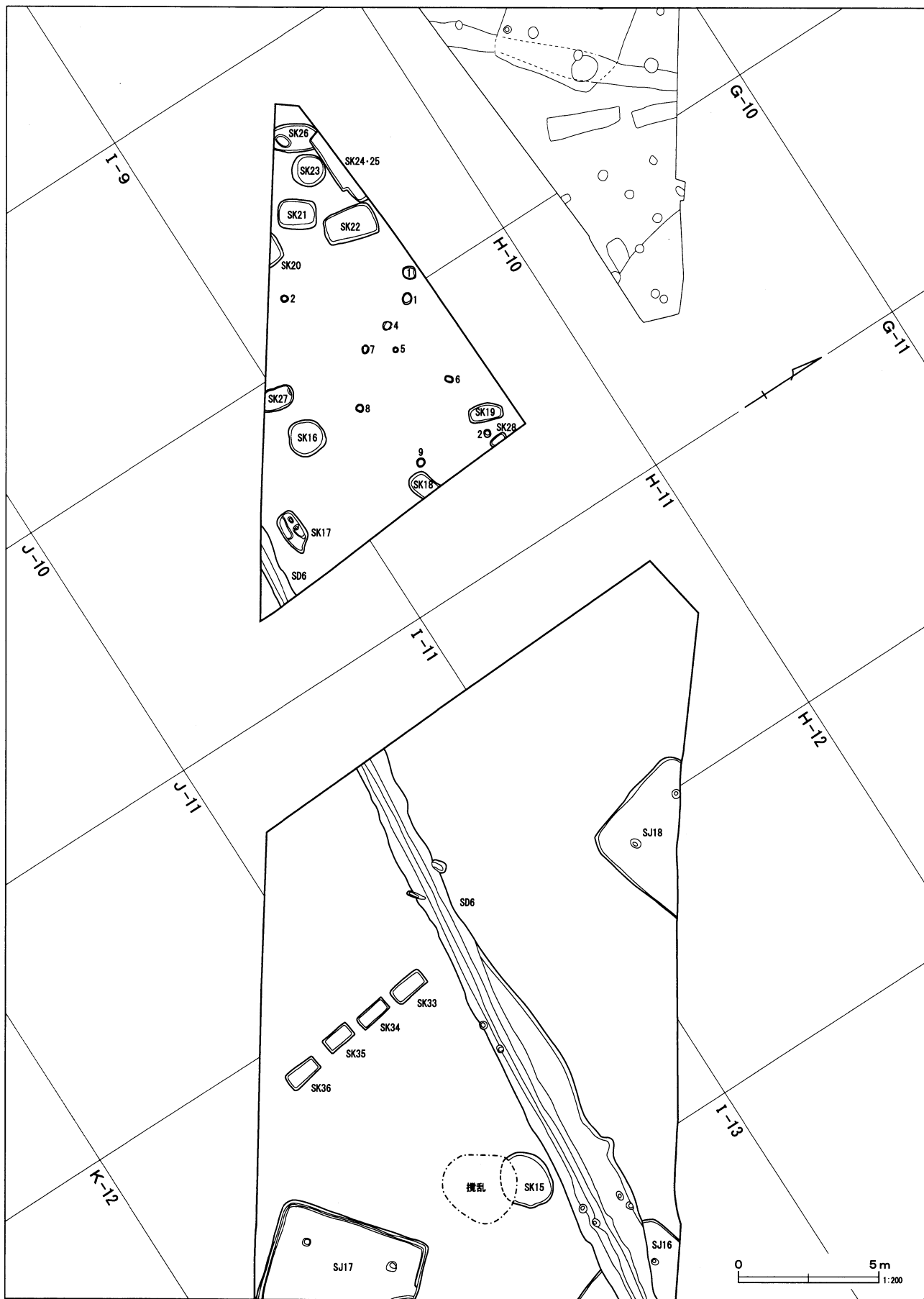
第15図 遺跡区割図(5) —夏目西遺跡—



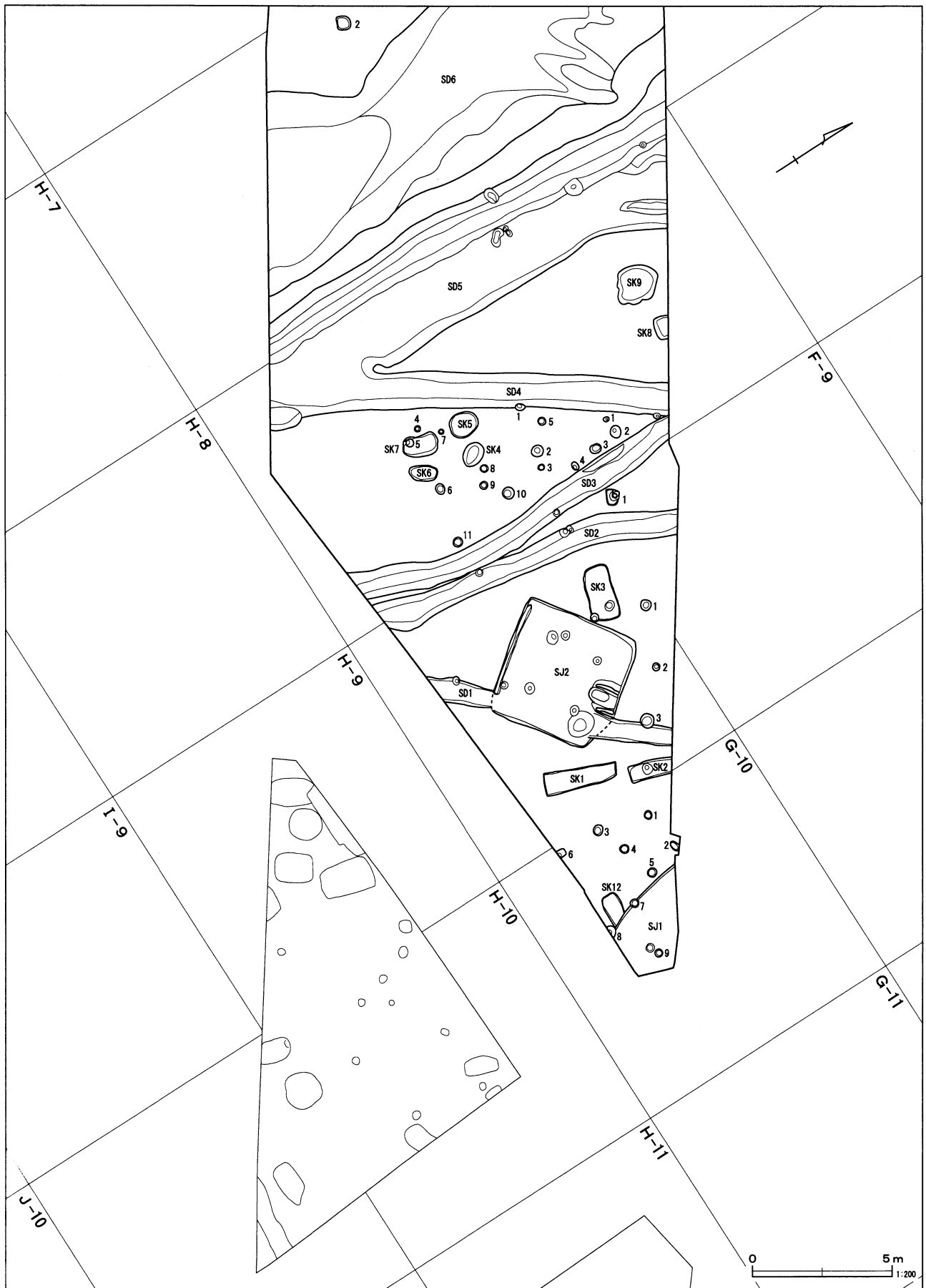
第16図 遺跡区割図(6) — 夏目西遺跡 —



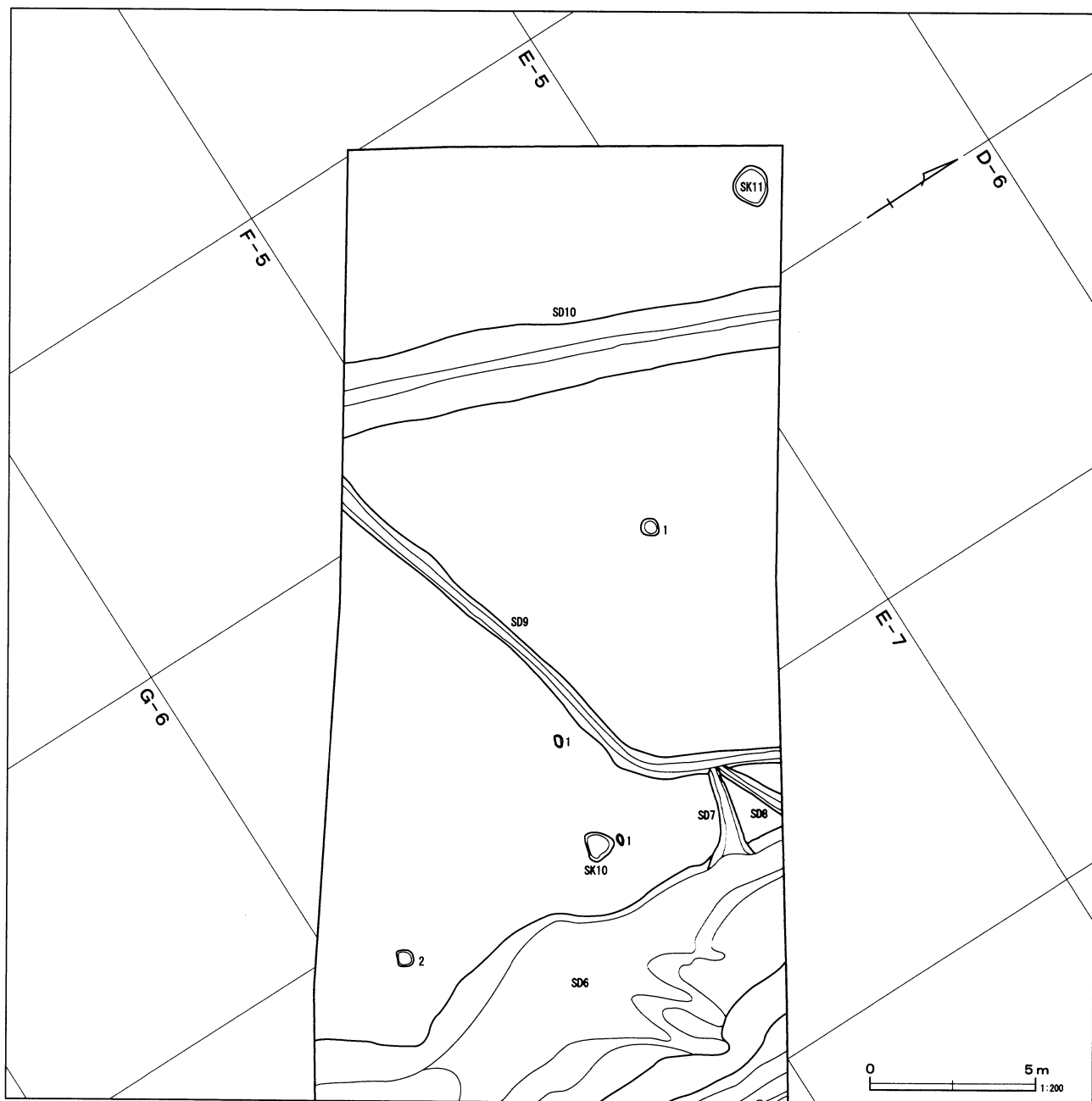
第17図 遺跡区割図(7) —夏目西遺跡—



第18図 遺跡区割図(8) —夏目西遺跡—



第19図 遺跡区割図(9) — 弥藤次遺跡 —



第20図 遺跡区割図 (10) —弥藤次遺跡—

の中に白玉等を埋める祭祀行為の存在が注意されてきたが、これにより集落内部における石製模造品の生産と供給のあり方についてより具体的な検討資料が蓄積されたといえよう。

この他に夏目遺跡第23号住居跡からは高坏の脚部を再利用した転用羽口1点と中空の炉支脚3個体が出土している。これらが直接的に鍛冶工房の存在を示すものではないが、過去の調査において大量の鉄滓や高坏転用羽口を出土した夏目遺跡60号住居跡（長谷川他1984）が確認されているこ

とから、集落内部における鉄器生産を十分に予測させるとともに、玉作集団、鍛冶集団などの手工業集団を内包する拠点集落としての一面を垣間見せている。

こうした5世紀後半における集落跡の急激な展開の背景に、在地首長層の主導によって大規模な地域開発が推し進められ、鉄器や馬匹生産などの新技術の導入を図るために畿内地域の渡来系技術者が積極的に受け入れられたことを物語っているであろう。

IV 夏目遺跡の調査

1. 概要

夏目遺跡の調査で検出された遺構は、弥生時代の土坑1基、古墳時代の竪穴住居跡25軒、道路跡4条、大溝跡1条、井戸跡1基、土坑1基、平安時代の竪穴住居跡2軒、中・近世の掘立柱建物跡1棟、柱穴列5条、溝跡23条、井戸跡1基、土坑64基、ピット398基、時期不詳の倒木痕8基である。以下、各時代ごとにその概略を記す。

今回の調査で初めて弥生時代の遺構・遺物が西富田遺跡群において検出された。第1号土坑から筒形土器の口縁部、網代痕や木葉痕を残す甕の底部、条痕を施した甕の胴部片とともに石斧や石核などの石器類が出土した。中期中葉の池上式併行に位置づけられる。土坑の性格に関しては明確でないが、土坑墓の可能性が高い。これらは当遺跡群形成の端緒を示すものである。

古墳時代の竪穴住居跡は25軒を検出した。その内訳は中期14軒、後期11軒を数える。中期の住居は第1・2・7～14・23・24・26・27号住居跡である。このうち第8・23号住居跡は炉を有する住居、第9・10・13・24号住居跡は初期カマドの住居である。この他に第7号住居跡は炉やカマドの痕跡がなく、竪穴状遺構の可能性も考えられる。

後期の住居跡は中期から連続して営まれ、典型的な模倣坏を出土する鬼高I式期の住居跡8軒を数える(第3・5・6・16・17・19・20・25号住居跡)。その後、6世紀後半には2軒(第4・15号住居跡)、7世紀前半には1軒(第18号住居跡)と集落規模を大幅に縮小する傾向が窺われた。

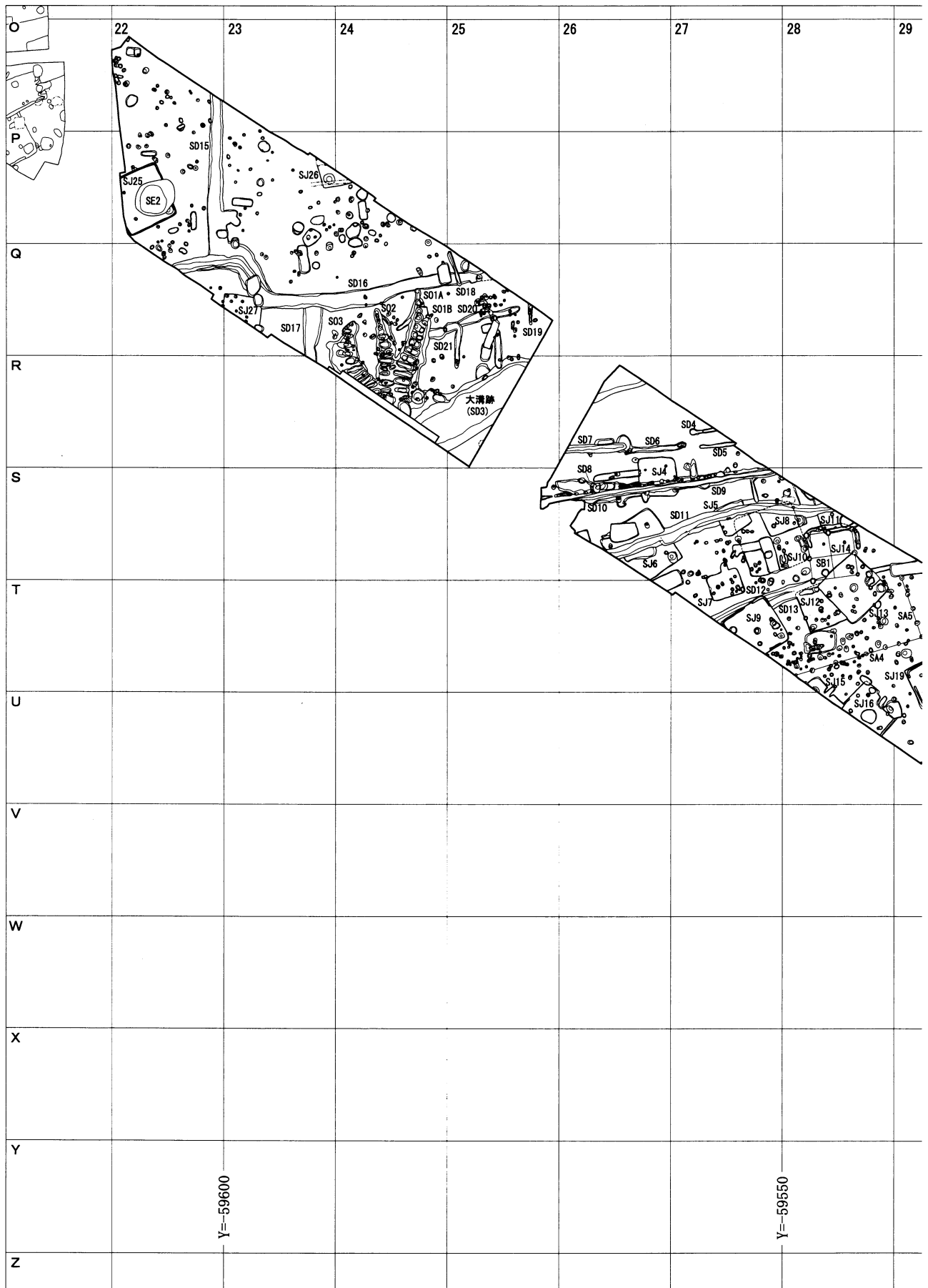
当該期における住居跡以外の遺構には、調査区北西部で検出された井戸跡1基、大溝跡とそれに付随する4条の道路跡、土坑1基(第64号土坑)が注目される。これらの遺構の性格は、前章ならびに遺構各説において詳述しているのでここでは繰り返さないが、本遺跡群の成立背景を考える上

で極めて重要な遺構である。

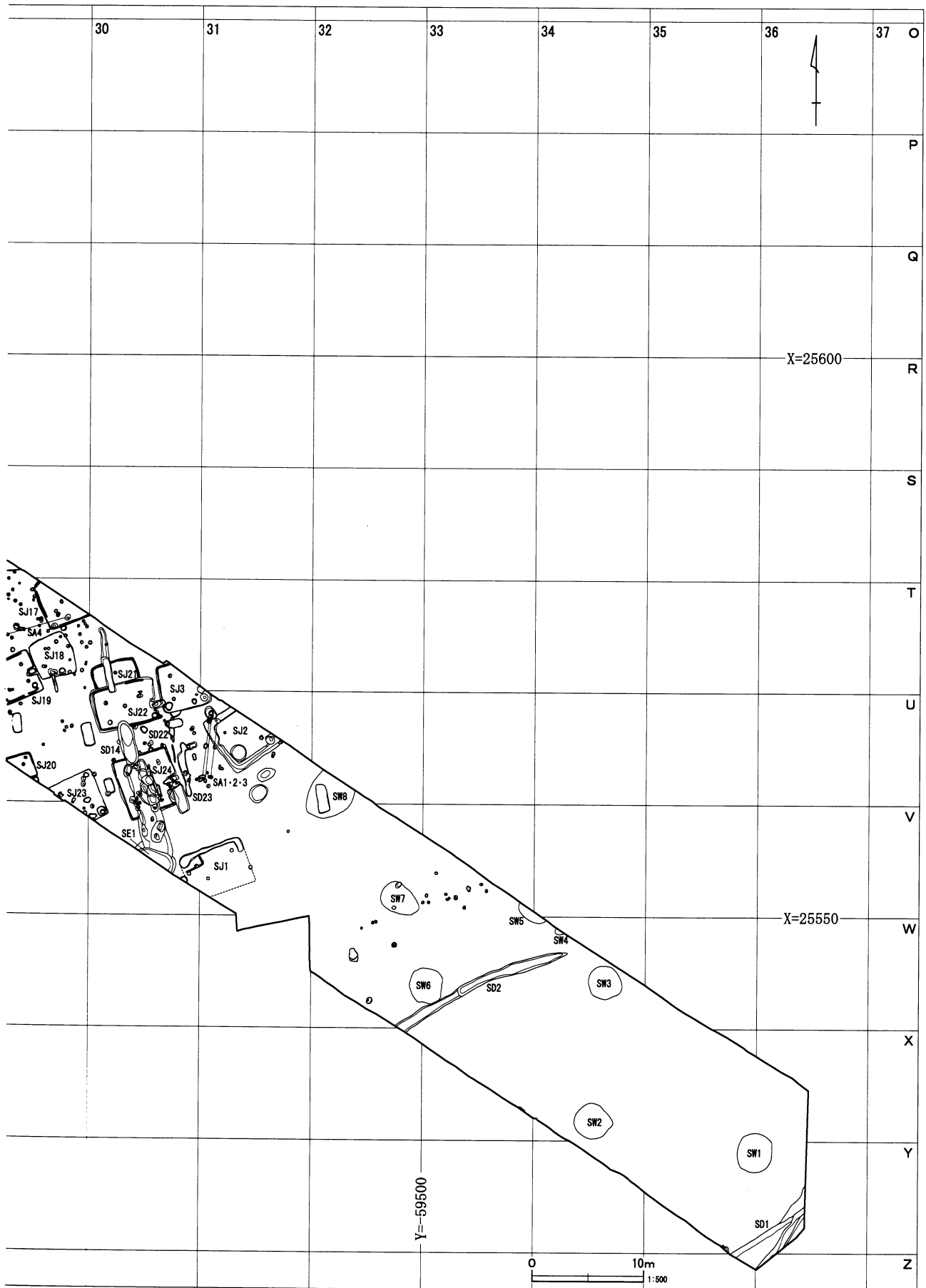
奈良時代以降の集落構成については不明な点が多い。現状では奈良時代の住居跡は夏目西遺跡に限られている。再び住居が営まれるのは、平安時代の第21・22号住居跡の2軒である。両者は切り合い関係にあり、短期間に建て替えられたものと想定される。時期は8世紀末から9世紀初頭で、集落の終焉時期を示す。

次に中・近世の概要について略述したい。調査区北西端には第15・16号溝跡などの溝跡によって区画された内部(方形区画か)に土坑群が群在する。また、調査区中央部北西寄りには東西に並走する第4～10号溝跡が掘削されている。明確な硬化面は確認されなかったが道路跡の可能性も考えられる。このうち第9・10号溝跡には柱穴列が付随しており、注目される。これらの溝跡に隣接して長軸2m程の長方形土坑が集中しており、そのうちの1基は集石土坑(第16号土坑)である。

さらに中央部から南東部寄りには、根石を有する2×2間の第1号掘立柱建物跡を中心に、それを取り囲むように第4・5号柱穴列が存在する。周辺にはピットが多数群在していることからすれば、より多くの建物跡や柱穴列が存在していた可能性が高い。また、南東方には第1号井戸跡があり、屋敷地的な空間を構成していたことは明白である。この他に調査区南東端に位置する第1号溝跡は、南側に対峙する社具路遺跡との境を流れる埋没河川の「おんな堀」の一部と想定される。この河川跡は開鑿時期が古代から中世に遡るものと考えられている。中・近世の遺構の多くは時期を示す遺物に恵まれていなが、南方に所在する西富田本郷遺跡が児玉党本宗家「庄氏」に関わる富田氏館跡に比定されていることから、今後十分な検討が必要であろう。



第21図 夏目遺跡全体図(1)



第22図 夏目遺跡全体図 (2)

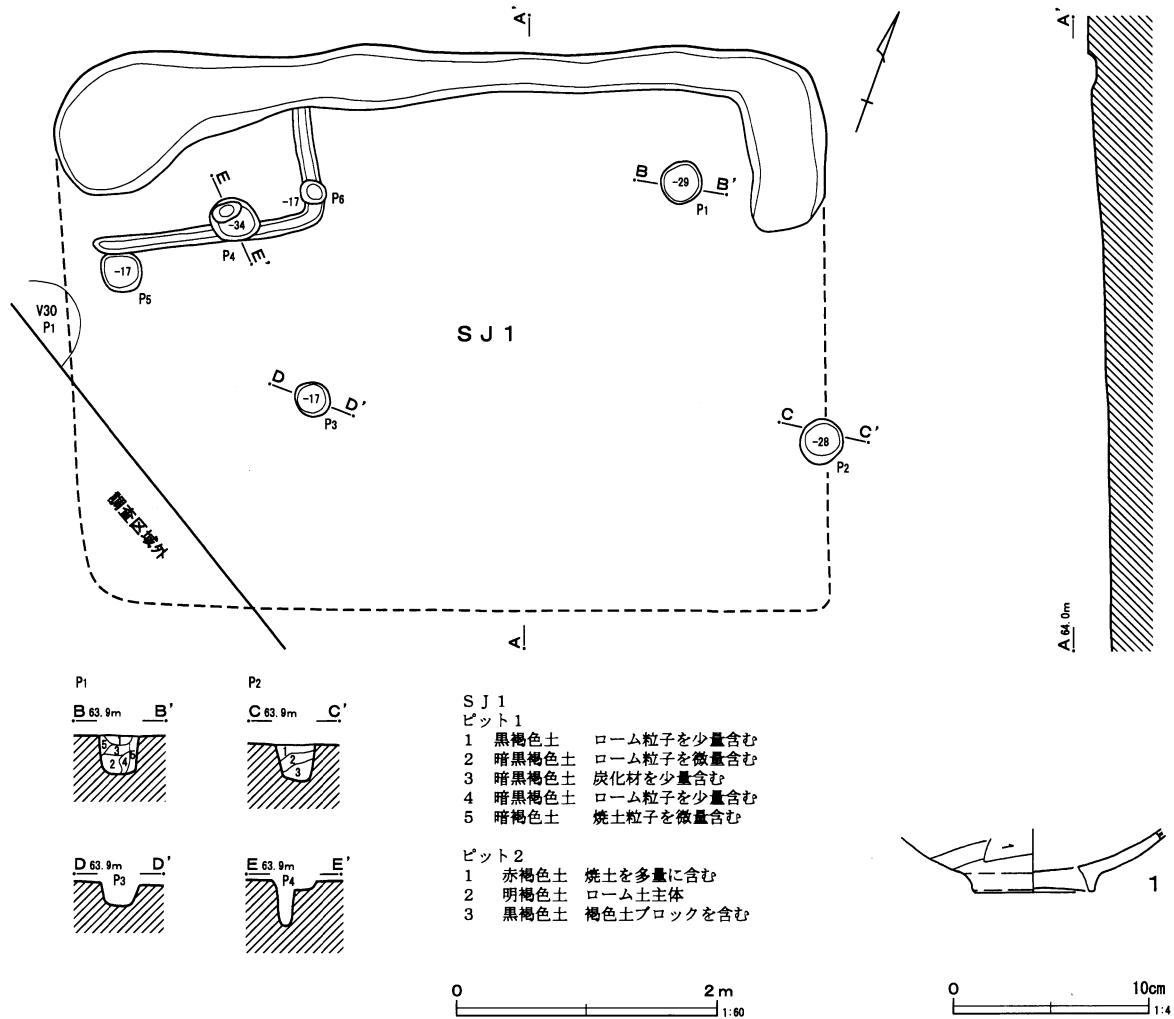
2. 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第23図)

第1号住居跡は調査区南東部のV-30・31グリッドに位置する。調査区の制約により第1次調査と第2次調査の2回に分けて調査を行ったため必ずしも良好な状態で調査を実施することができなかった。住居の掘り込みが非常に浅く、床面が露出した状態で検出されたため、平面形やカマド等の有無については不明な点が多い。北辺を巡る壁溝と土層断面の観察によってかろうじて平面形を復元することができた。平面形は東西に長い長

方形で、規模は長軸長5.82m、短軸長4.30mと推定される。主軸方位はN-71°-Eを指す。

床面は南半分が削平されており、明確な硬化面等は認められなかった。ピットは6本検出された。P1・P4は壁際にやや片寄っているが、深さ30cm前後あり、埋土中に焼土粒子やローム粒子を含むことから柱穴としても良いであろう。P2はローム土や褐色土ブロックによって人為的に埋め戻されていることが明瞭であり、かつ上層に焼土を多量に含む赤褐色土が充填されていることから



第23図 第1号住居跡・出土遺物

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第23図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 壺	埋土	[3.2]	(6.0)	20	A・B・C・F・J	普通 橙5YR6/8	内外面磨耗 突出底部

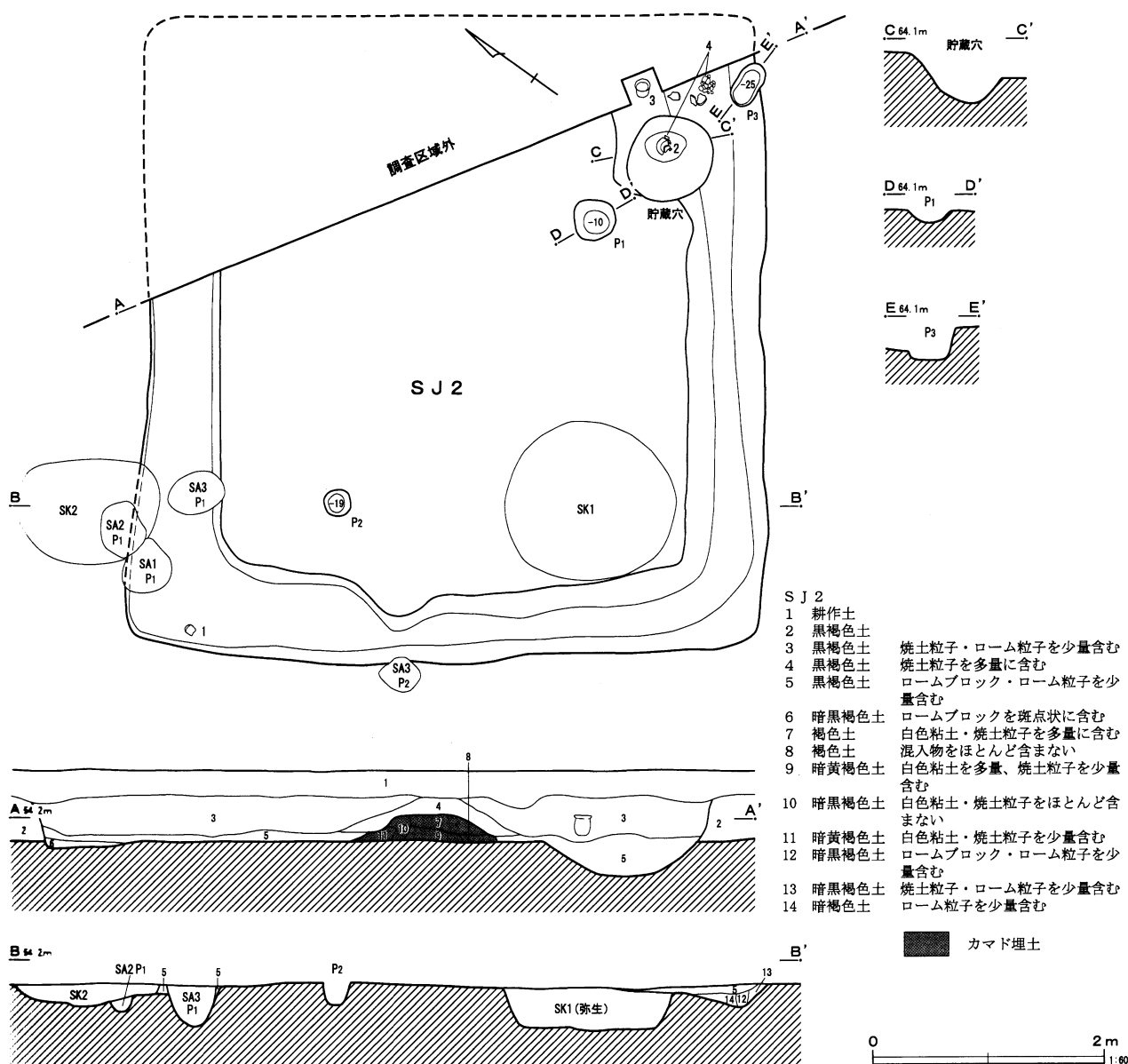
すれば、カマドの痕跡の可能性も考えられよう。位置的に見ても想定される住居の平面プランの東壁際にあたっており問題ない。

壁溝は北壁から東壁にかけて巡る。掘り込みが浅く、幅広の部分があることから、掘方の一部の可能性も捨てきれない。また、北西隅部にはP4と交差するようにL字形の間仕切り溝風の細い溝が認められた。

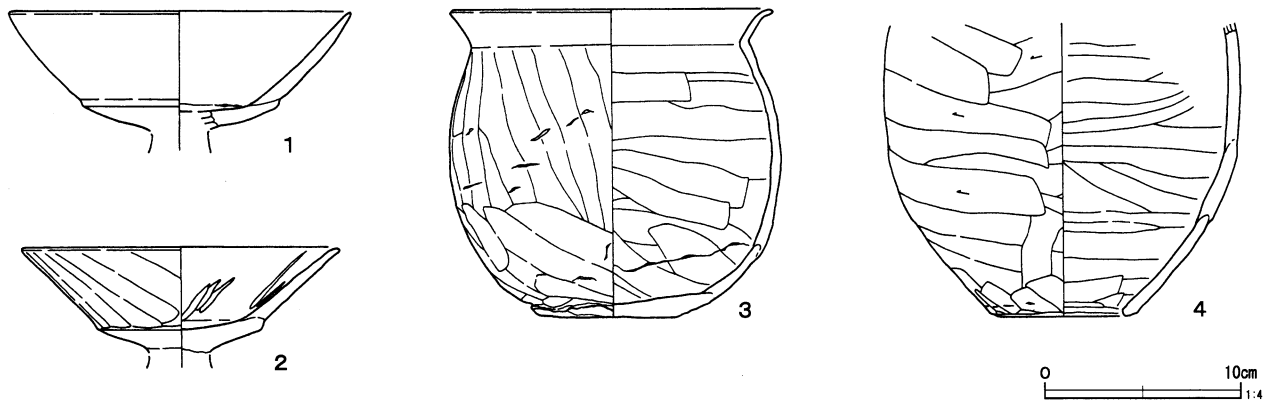
出土遺物は少なく、図示できたのは1の壺底部片のみである(第23図)。小片のため時期は明確でないが、夏目遺跡II・III期に位置づけられる。

第2号住居跡 (第24図)

第2号住居跡は調査区南東部のU-31グリッドに位置する。北東側約3分の1が調査区域外に伸びている。遺構の重複関係は南西隅の床面下に弥生時代中期の第1号土坑が存在し、北西隅部は第1～3号柱穴列と第2号土坑によって切られていた。平面形は一辺約5.5mの正方形に近く復元され、床面までの深さは8cmと非常に浅いが、土層断面の観察では旧表土面から壁高40cm以上の掘り込みが認められる。主軸方位は南辺を基準に採るとN-55°-Eを指す。



第24図 第2号住居跡



第25図 第2号住居跡出土遺物

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器高坏	北西壁際 床面直上	(17.4) [6.1]		20	A・B・D・F・J	良好 橙5YR6/8	内面ハゼ顕著
2	土師器高坏	貯蔵穴 底面上19cm	16.1 [5.5]		90	A・B・D・E・J	良好 明赤褐5YR5/6	坏部内面まばらなヘラミガキ
3	土師器小型甕	調査区際東部 床面上5cm	16.3 15.7	16.9 7.1	100	A・B・C・F・J	良好 赤褐5YR4/6	胴部外面一部スス付着
4	土師器甕	南東壁寄り 床面上5cm	[15.0]	(6.5)	40	A・B・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	胴部内面丁寧なヘラナデ

床面は概ね平坦で、確認した床面の壁際を全周するように壁溝が確認された。幅70cmと幅広く、深さは12cm程度である。

カマドは検出されなかったが、土層断面の観察と貯蔵穴の位置関係から北東壁に設置されていたものと想定される。第7～11層がカマドの埋土か、あるいはカマドの流出土の一部に該当しており、白色粘土や焼土粒子を多量に含んでいた。

貯蔵穴は南東隅部付近にあり、本来はカマドの右脇に位置するものと考えられる。不整形で、規模は長径78cm、短径72cm、深さ43cmである。

出土遺物は土師器高坏・小型甕・甕がある (第25図)。北東隅部の貯蔵穴周辺に集中していた。貯蔵穴底面からかなり浮いた状態で2の高坏坏部が出土した。また貯蔵穴の北側の調査区際から3の小型甕が正位した状態で出土した。4の甕の胴部片は貯蔵穴内の破片と接合した。他に1の高坏坏部が西隅部付近から出土している。

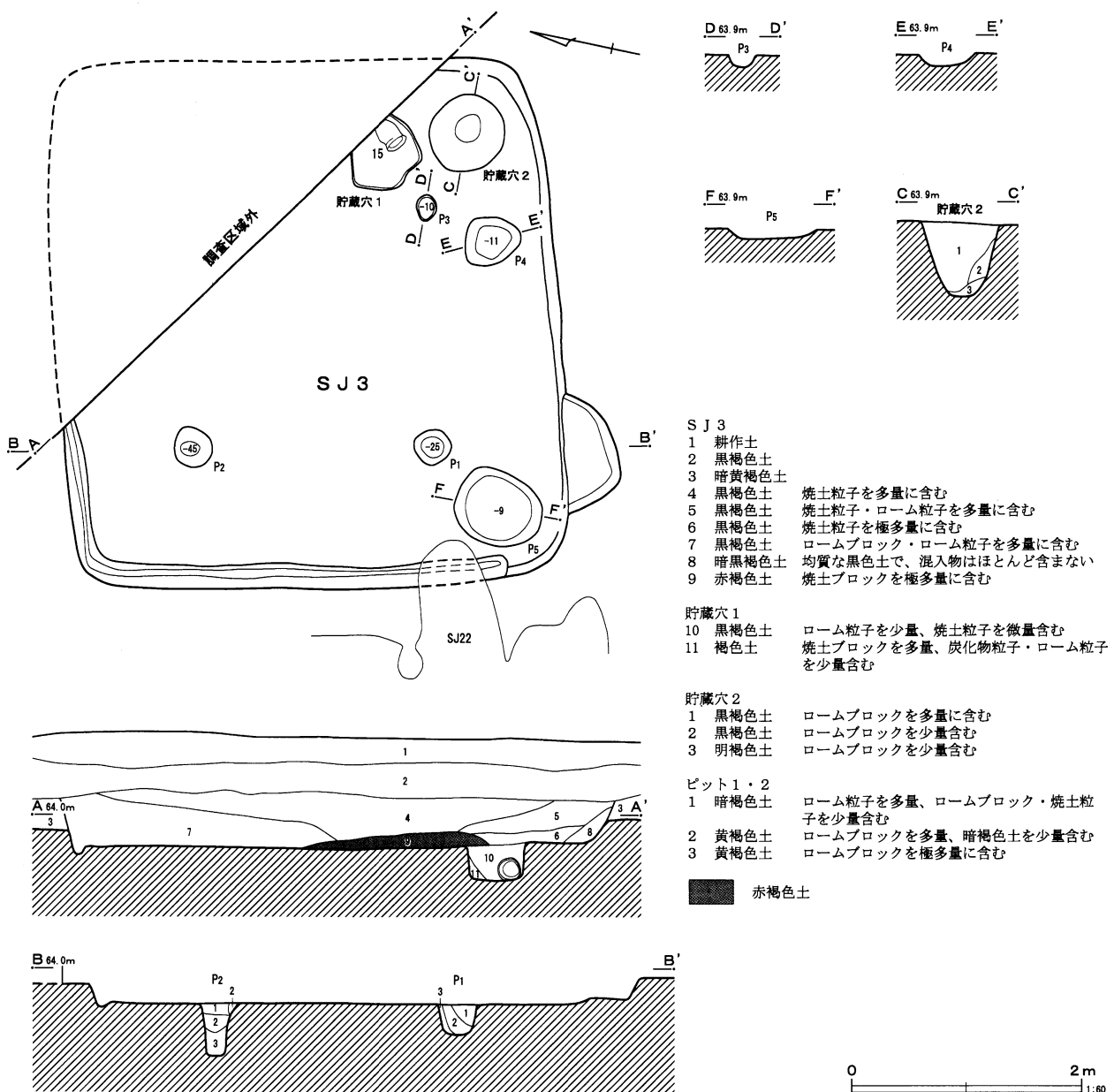
時期は夏目遺跡Ⅲ期と考えられる。

第3号住居跡 (第26・27図)

第3号住居跡は調査区南東部のT・U-30・31グリッドに位置する。北東側約3分の1が調査区域外に延び、西壁部の南西隅寄りが第22号住居跡のカマドによって壊されていた。調査区の制約により第1次調査と第2次調査の2回にわたって調査を実施した。平面形態は方形と推定され、規模は長軸長4.50m、短軸長4.28m、床面までの深さ0.19を測る。主軸方位は南辺を基準にすればN-77°Eを指す。

カマドは確認されていないが、調査区域外の土層断面の床面上に赤褐色土の堆積が確認されたことや貯蔵穴の位置を考え合わせると、東壁に設置されていたと考えられる。

貯蔵穴は南東隅部に2基検出された。貯蔵穴1は不整形で、長径60cm、短径53cm、深さ29cmを測る。下層に焼土ブロックを多量に含む褐色土が流入していた。底面上に堆積していることからカマド使用時における、灰や焼土などの掻き出しに



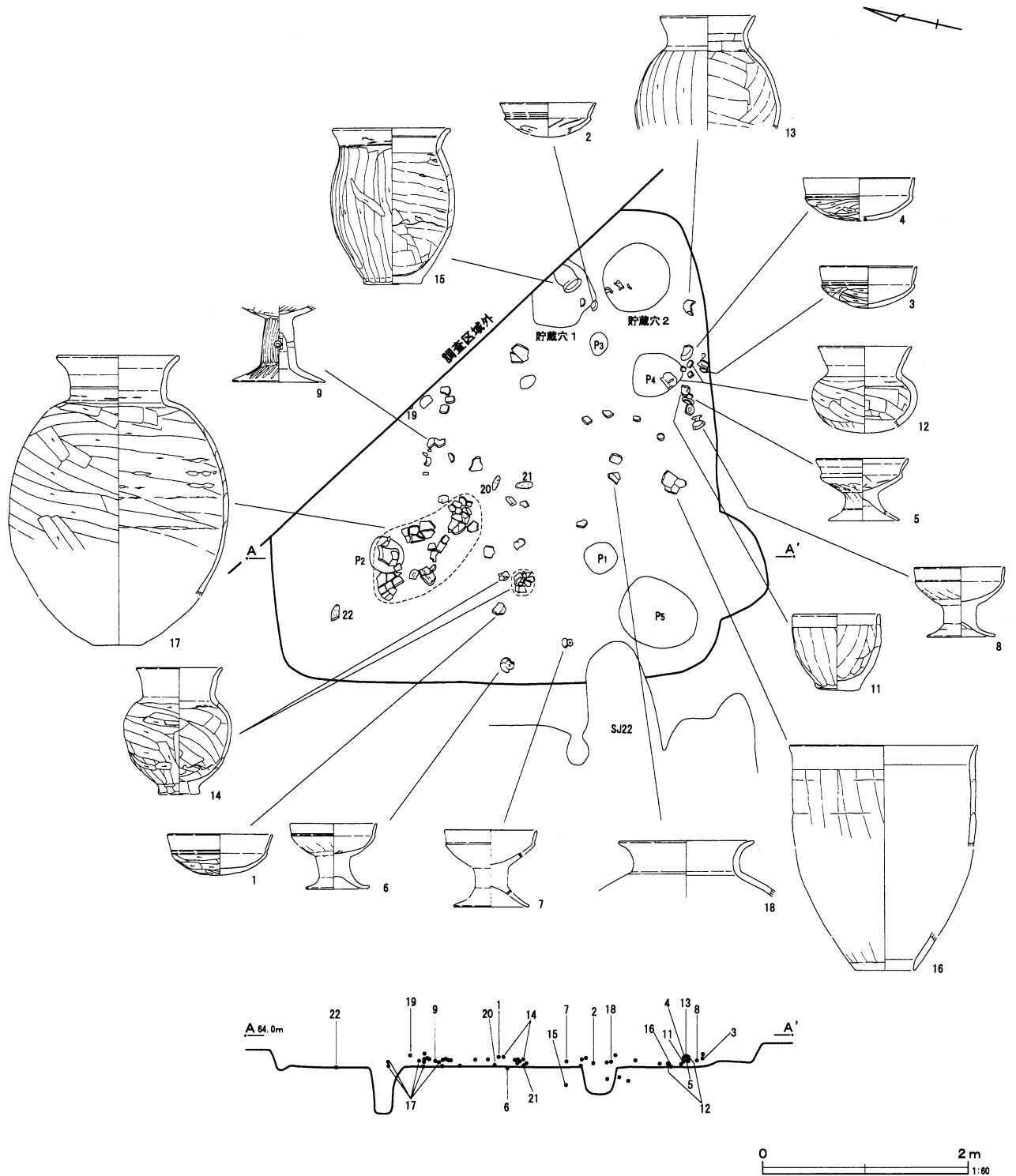
第26図 第3号住居跡

よるものと考えられる。住居廃絶後、貯蔵穴が埋没した後に、カマドの崩壊に伴う流出土が貯蔵穴の上面を覆ったのであろう。

貯蔵穴2は平面円形で、長径68cm、短径64cm、深さ64cmである。埋土はロームブロックの混入が目立つ。おそらくカマドの付け替えによって人為的に埋め戻されたのであろう。貯蔵穴1・2が同時に開口していたとは考えがたいことから、内部に15の小型甕が残された貯蔵穴1を住居廃絶時に開口していたものと考えておきたい。

柱穴は5本検出された。このうちP1～P3が規則的な配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ10cmとやや浅いが、他のピットは深さ25～45cmである。壁溝は幅13～21cm、深さ7cmを測り、西壁から北壁にかけて巡っていた。南壁の西寄りの位置に壁外に掘り込んだ張出部が確認された。土層の堆積状況などによる確認ができず、住居に伴うものであるかどうかは断定できない。

出土遺物は土師器杯・高杯・鉢・甕・小型甕・小型壺・甑、須恵器高杯、編物石がある（第28・

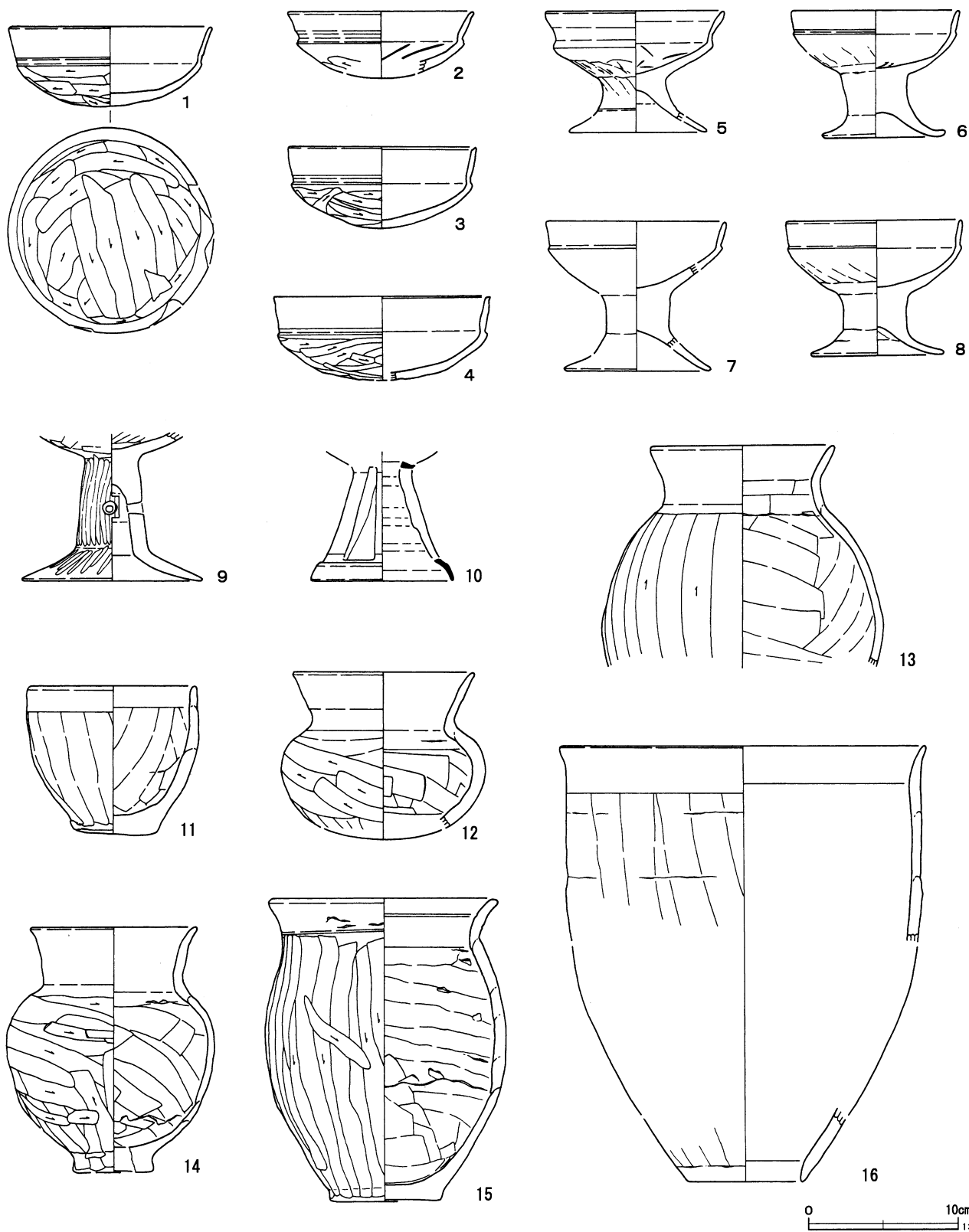


第27図 第3号住居跡遺物出土状況

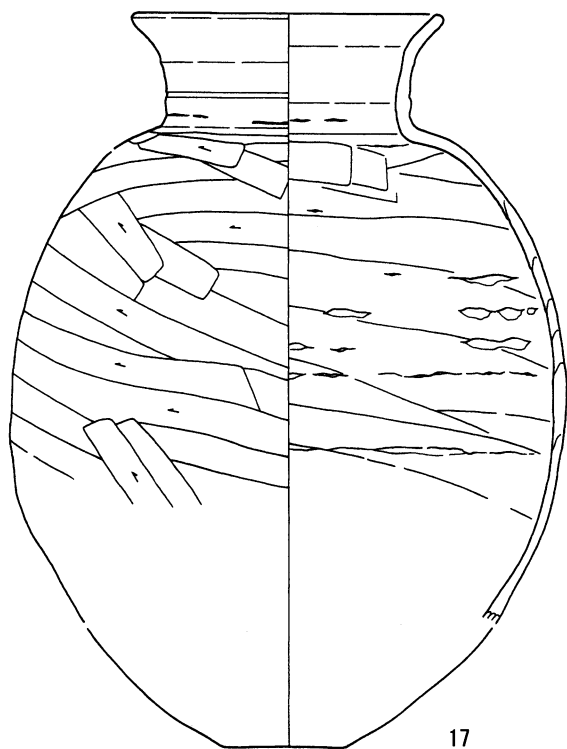
29図)。南壁際から坏、高坏、小型壺、鉢が床面からやや浮いた状態で並んで出土した。他には貯蔵穴1から横倒しの状態で15の小型甕が完形で出土している。さらに住居跡の西半部ではP2周辺から17の大型壺が潰れた状態で出土した。また主

柱穴と西壁の間からは1の坏、5・6の高坏、14の壺が出土している。この他に編物石とした4個の棒状礫が中央部と周辺から出土した。

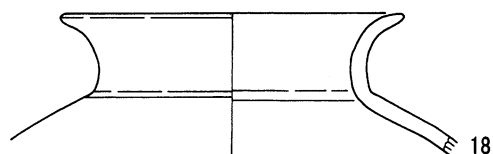
1～4は須恵器坏蓋模倣坏である。1・2のように口唇部を丸く収めるものと、3・4のように面取



第28図 第3号住居跡出土遺物(1)



17



18



19~22



第29図 第3号住居跡出土遺物(2)

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表(第28・29図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	西部 床面上9cm	13.5 5.3		90	A・B・D・F・J	良好 橙7.5YR6/6	坏蓋模倣坏 体部外面ヘラケズリ
2	土師器 坏	貯蔵穴1際 床面直上	(12.3) [4.1]		40	A・B・D・F・J	普通 橙7.5YR6/6	坏蓋模倣坏 体部外面ヘラケズリ 内面弧状ヘラ
3	土師器 坏	南壁際 床面上7cm	(12.5) 5.5		45	A・C・D・F・J	良好 橙5YR6/8	坏蓋模倣坏 体部外面ヘラケズリ
4	土師器 坏	南壁際 床面上8cm	(14.4) 5.6		75	A・D・F・G・J	良好 にぶい赤褐5YR5/4	体部外面ヘラケズリ
5	土師器 高坏	南壁際 床面直上	11.7 [7.3]		90	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	鬼高型高坏 坏部外面亀裂痕あり
6	土師器 高坏	西壁溝際 床面直上	(11.2) 8.5	8.1	75	A・B・D・F・J	普通 橙7.5YR6/8	鬼高型高坏 内外面磨耗 坏部内面 黒色処理か
7	土師器 高坏	西壁溝寄り 床面上6cm	[5.6]		85	A・B・D・F・J	普通 橙7.5YR6/8	鬼高型高坏 内外面磨耗 調整不明 瞭
8	土師器 高坏	南壁際 床面上3cm	11.7 9.0	8.9	90	A・B・D・F・G	良好 橙5YR7/6	鬼高型高坏 坏部外面弱いナデ
9	土師器 高坏	中央部 床面直上	[9.8]	(12.0)	80	A・C・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	脚柱部に円孔を1個だけ穿孔する 混入か
10	須恵器 高坏	埋土	[7.9]	(9.4)	30	A・D・F・I・K	普通 黒褐5YR2/1	末野窯産もしくは藤岡窯産 TK47 型式併行
11	土師器 鉢	南壁際 床面直上	11.1 9.9	5.6	95	A・B・D・I・J	良好 にぶい赤褐5YR5/4	体部外面器面荒れる
12	土師器 小型壺	P4際 床面直上	12.0 [10.4]	13.7	75	A・B・F・J	普通 にぶい赤褐5YR5/4	胴部外面二次被熱痕あり
13	土師器 甕	南壁際 床面上6cm	(12.0) [14.8]	(18.7)	40	A・B・F・J・K	普通 橙5YR6/8	内外面磨耗
14	土師器 小型壺	西部 床面上7cm	11.0 16.3	13.9 (5.3)	85	A・B・D・F・K	良好 明赤褐5YR5/6	脚部外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ
15	土師器 小型甕	貯蔵穴1 底面直上	14.8 20.1	16.1 7.5	95	A・B・C・D・G	良好 にぶい橙5YR6/4	体部外面ヘラケズリ
16	土師器 甕	南部 床面直上	(24.2) [28.9]	(7.6)	20	A・J	普通 橙5YR6/8	内外面磨耗
17	土師器 大型壺	P2周辺 床面直上	(15.4) [31.3]	(28.3)	80	A・C・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部外面器面荒れる
18	土師器 甕	南部 床面上3cm	(17.2) [7.4]		15	A・B・I・J・K	普通 橙7.5YR6/6	内外面磨耗 調整不明瞭

第5表 第3号住居跡出土編物石観察表(第29図)

番号	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存	石質	備考
19	中央部 床面上4cm	14.3	5.7	4.8	576.9	完存	砂岩	一部擦痕 S 1
20	中央部 床面直上	13.7	5.5	3.9	468.5	完存	砂岩	一部擦痕 S 5
21	中央部 床面直上	14.8	6.6	4.4	660.8	完存	砂岩	一部擦痕 S 6
22	北西部 床面直上	(12.1)	6.0	5.0	537.6	上半部欠損	砂岩	一部擦痕 S 7

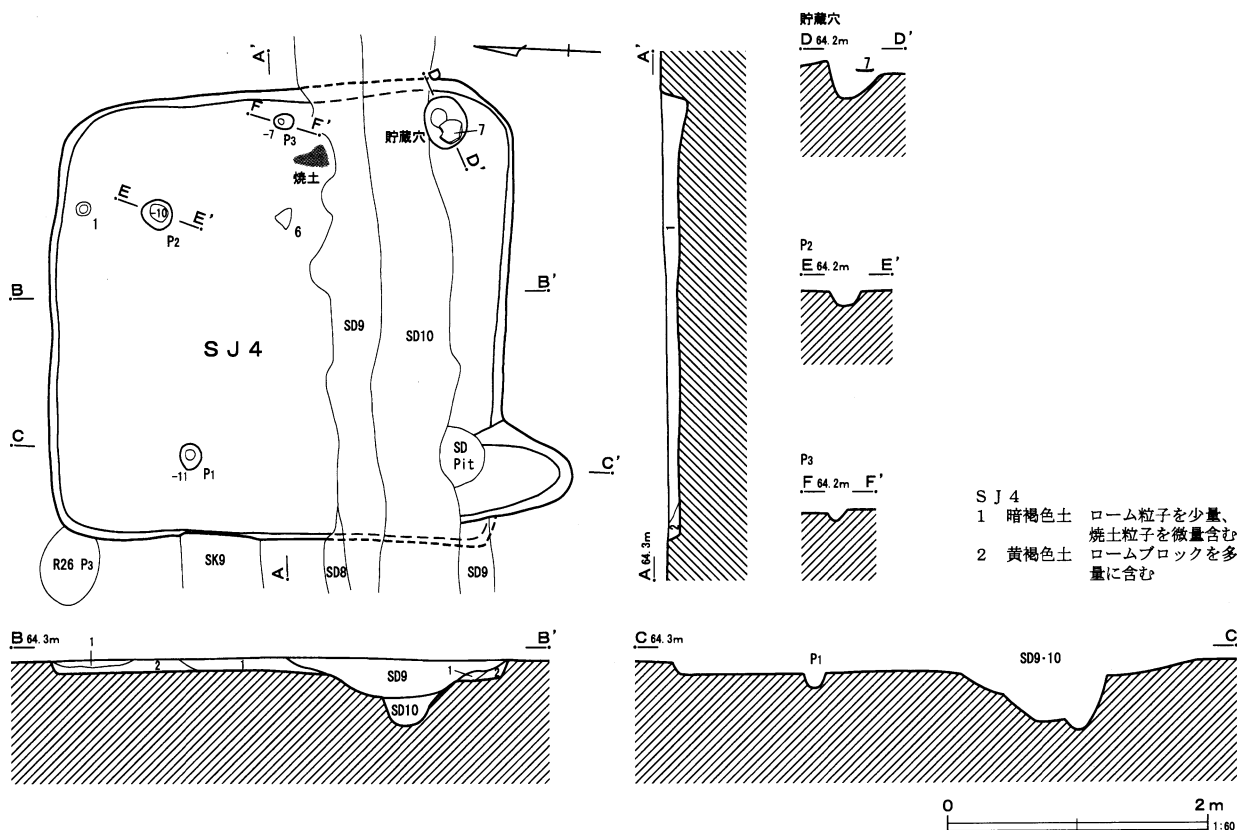
りするものがある。口縁部と体部の境は明瞭な段部が作り出され、口縁部は外傾気味に開く。5～8は模倣坏を乗せた短脚高坏である。脚部の上半は中実で作られ、裾部は大きく開く。9は和泉的な特徴を残す高坏の脚部で、外面にヘラミガキを施し、円孔を一箇所穿孔する。10は須恵器の高坏脚部で三方に長台形の透孔を開ける。胎土中に片岩を含み、黒褐色の軟質の仕上がりから、末野窯産もしくは藤岡窯産であろう。17は口縁部外面下位に凸線状上の段をもつ有段口縁壺である。胴部下半を欠損しているが、復元すると器高38cmの大型のもので、胴部の長胴化が顕著である。

時期は夏目遺跡V期と考えられる。

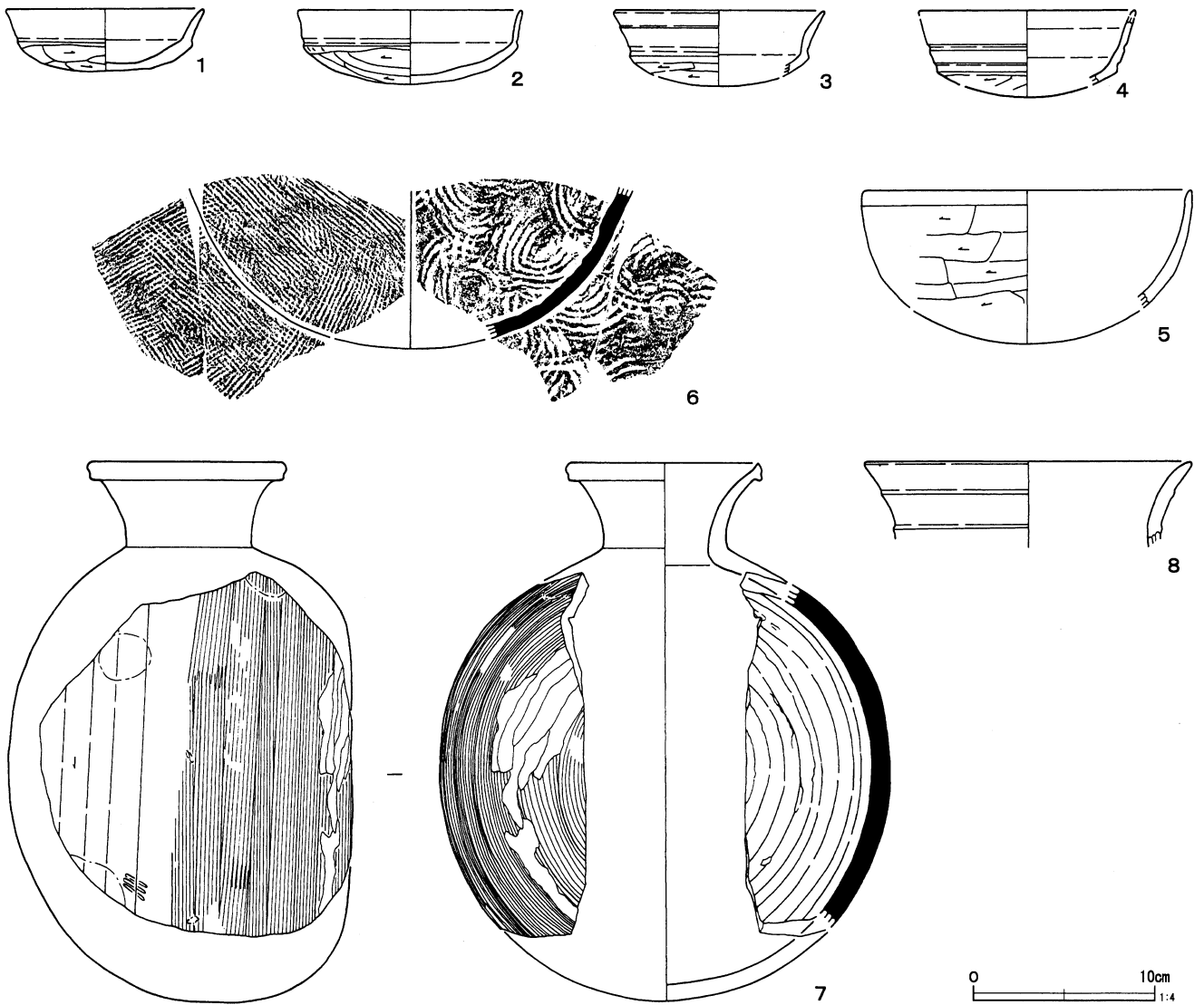
第4号住居跡 (第30図)

第4号住居跡は調査区北西部のS-26グリッドを中心に位置する。住居跡中央南寄りを中心を東西方向に走行する第9・10号溝跡によって切られ、また西壁の一部は第9号土坑によって壊されていた。平面形はやや歪んだ方形で、南西隅部に壁外に舌状に突起する張出部が見られた。規模は長軸長3.52m、短軸長3.32mの小型の住居で、床面までの深さは0.19mと浅い。主軸方位は北辺を基準に採るとN-85°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。特に顕著な硬化面はなかったが、第9号溝跡に切られた東壁寄りの床面の一部が被熱により焼土化していた。おそらくカ



第30図 第4号住居跡



第31図 第4号住居跡出土遺物

第6表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第31図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	北壁寄り 床面上 3 cm	10.8 3.4		95	A・B・D・F・J	良好 橙7.5YR6/6	坏蓋模倣坏
2	土師器 坏	埋土	(12.2) 4.1		25	A・B・C・D・J	良好 橙7.5YR6/6	坏蓋模倣坏
3	土師器 坏	埋土	(11.6) [3.7]		15	A・D・E・J	良好 橙7.5YR7/6	有段口縁坏 無彩
4	土師器 坏	埋土	(11.9) [3.9]		10	A・B・F・J	良好 橙5YR6/6	有段口縁坏 小片のため口径不定
5	土師器 鉢	埋土	(18.0) [6.5]		20	A・B・C・D・F	良好 橙7.5YR6/6	内外面磨耗 調整不明瞭
6	須恵器 甕	中央部東寄り 床面直上	[8.4]		25	A・B・G・J・K	不良 灰黄2.5Y6/2	外面：平行叩き目 内面：同心円文 当て具痕 在地産
7	須恵器 提瓶	P 2 床面直上	[20.0]		30	A・G・J・K	良好 青灰5B6/1	胴部外面の3箇所に焼きムラ有り 重ね焼き痕か
8	土師器 甕	埋土	(18.0) [4.7]		10	A・B・F・J	良好 にぶい橙7.5YR6/4	被熱により口縁部内面の器面荒れる

マドの痕跡と考えられ、後述する貯蔵穴との位置
関係から考え合わせると東壁にカマドを設置して

いたと想定される。

貯蔵穴は南東隅部に位置し、平面楕円形を呈す

る。規模は長径39cm、短径31cm、深さ25cmである。柱穴は3本検出された。P1・P2の2本は位置的に4本支柱穴として良いが、径20cm、深さ10cm前後しかなく支柱穴としてはやや貧弱である。南西隅に壁外への張出部が認められたが、住居跡に伴う出入口部と断定はできない。

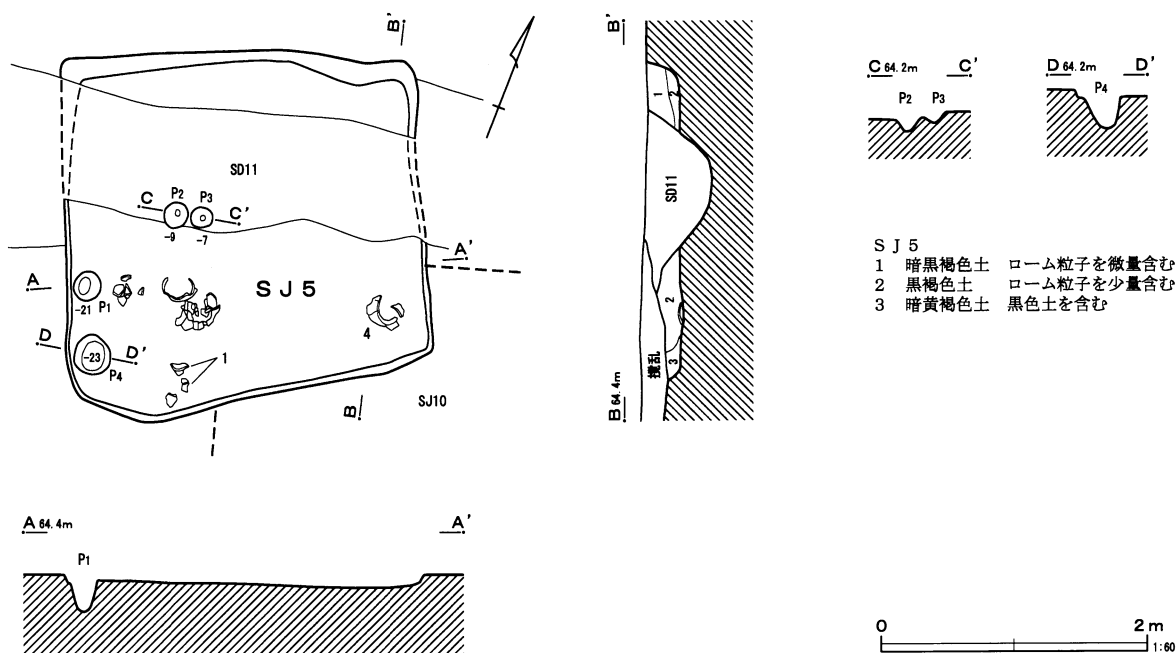
出土遺物は土師器杯・鉢・甕、須恵器甕・提瓶がある(第31図)。1の小振りの模倣杯は北壁東寄

りの壁際から口縁部を上に向けた状態で出土した。中央部東寄りの床面上からは6の須恵器甕底部片が、南東隅の貯蔵穴からは7の須恵器提瓶の胴部片がそれぞれ出土した。

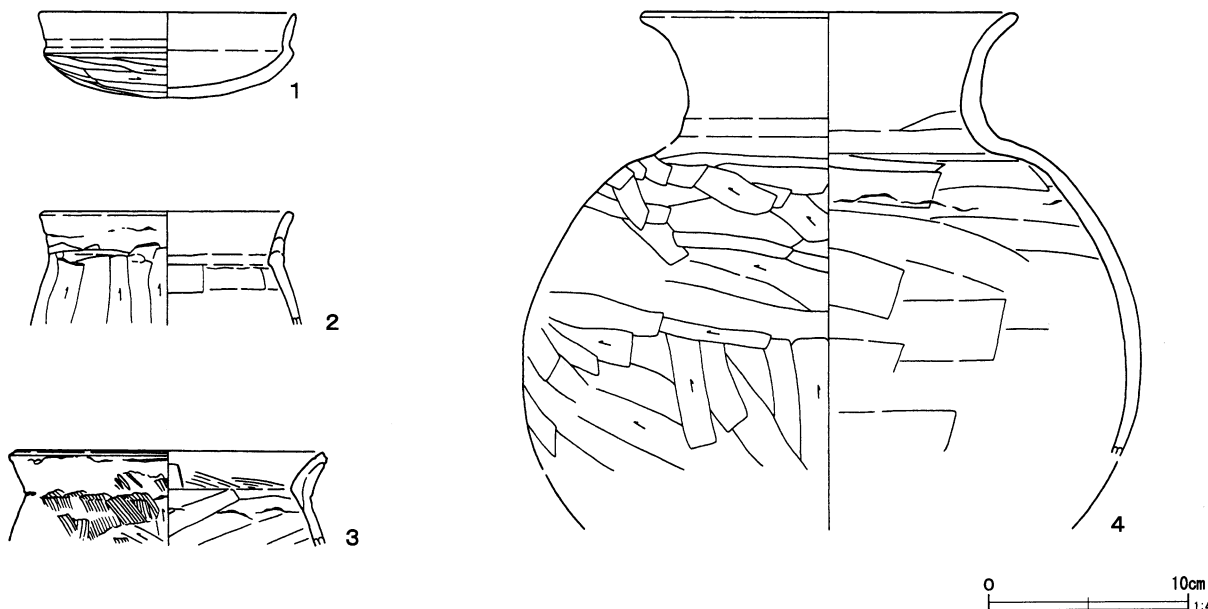
時期は夏目遺跡Ⅷ期と考えられる。

第5号住居跡(第32図)

第5号住居跡は調査区北西部のS-27グリッドに位置する。第10号住居跡を切り、第11号溝跡



第32図 第5号住居跡



第33図 第5号住居跡出土遺物

第7表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第33図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 坏	南壁寄り 床面上5cm	(12.7) [4.3]		75	A・B・D・F・J	良好 橙5YR6/8	体部外面弱いヘラケズリ SD11一 部接合
2	土師器 小型甕	埋土	(12.3) [5.7]		25	A・B・C・F・J	良好 橙5YR7/6	口縁部内面黒変する
3	土師器 小型甕	埋土	15.2 4.7		20	A・B・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	胴部外面ハケ調整
4	土師器 壺	南東隅部 床面直上	(18.4) 22.4	(30.8)	50	A・B・C・F・J	良好 にぶい橙5YR6/4	胴部外面器面荒れる

が住居跡の中央部を東西に横断する。平面形はやや歪んだ方形で長軸長2.75m、短軸長2.73m、床面までの深さ0.21mを測る。西辺を基準とした場合の主軸方位はN-24°-Wである。

床面は概ね平坦である。溝跡によって床面の中央部が壊されているため、カマドの有無は明確でないが、小型の住居であることから当初からカマドをもたない竪穴状遺構の可能性も十分考えられる。壁溝なども確認されなかった。

柱穴は4本検出された。P1・P4は、南西隅の壁際に沿って並列しており、入口施設の可能性もある。深さ20cm程である。P2・P3は第11号溝跡の肩部に位置することから、溝に関連するピットであろう。

出土遺物は土師器坏・小型甕・壺が少量出土した(第33図)。

1は口縁部が緩やかに外反する須恵器坏蓋模倣坏である。南壁寄りから出土した。器肉が全体に厚く作られ、体部外面には弱いヘラケズリを施す。南東隅部には4の壺の上半部が据え置かれていた。口縁部が大きく外反する壺で、胴部外面の器面が荒れている。同様に中央部南西寄りの床面上にも土師器の甕が置かれていたが、胴部片であったため実測図示できなかった。埋土からは2・3の小型甕の口縁部が出土している。3は粗いハケメを施す。

時期は古相を示す大型壺や体部に丸味を残す模倣坏の出土から、鬼高II式期までは下らない夏目遺跡V期に位置づけられる。

第6号住居跡 (第34図)

第6号住居跡は調査区北西部のS-26・27グリッドに位置し、南西隅部は調査区外に延びる。住居跡の中央を第11号溝跡が東西に走り、北東壁中央に構築されていたカマドが壊されている。また、後世の土坑が床面を壊しており全体に残存状態は良くない。

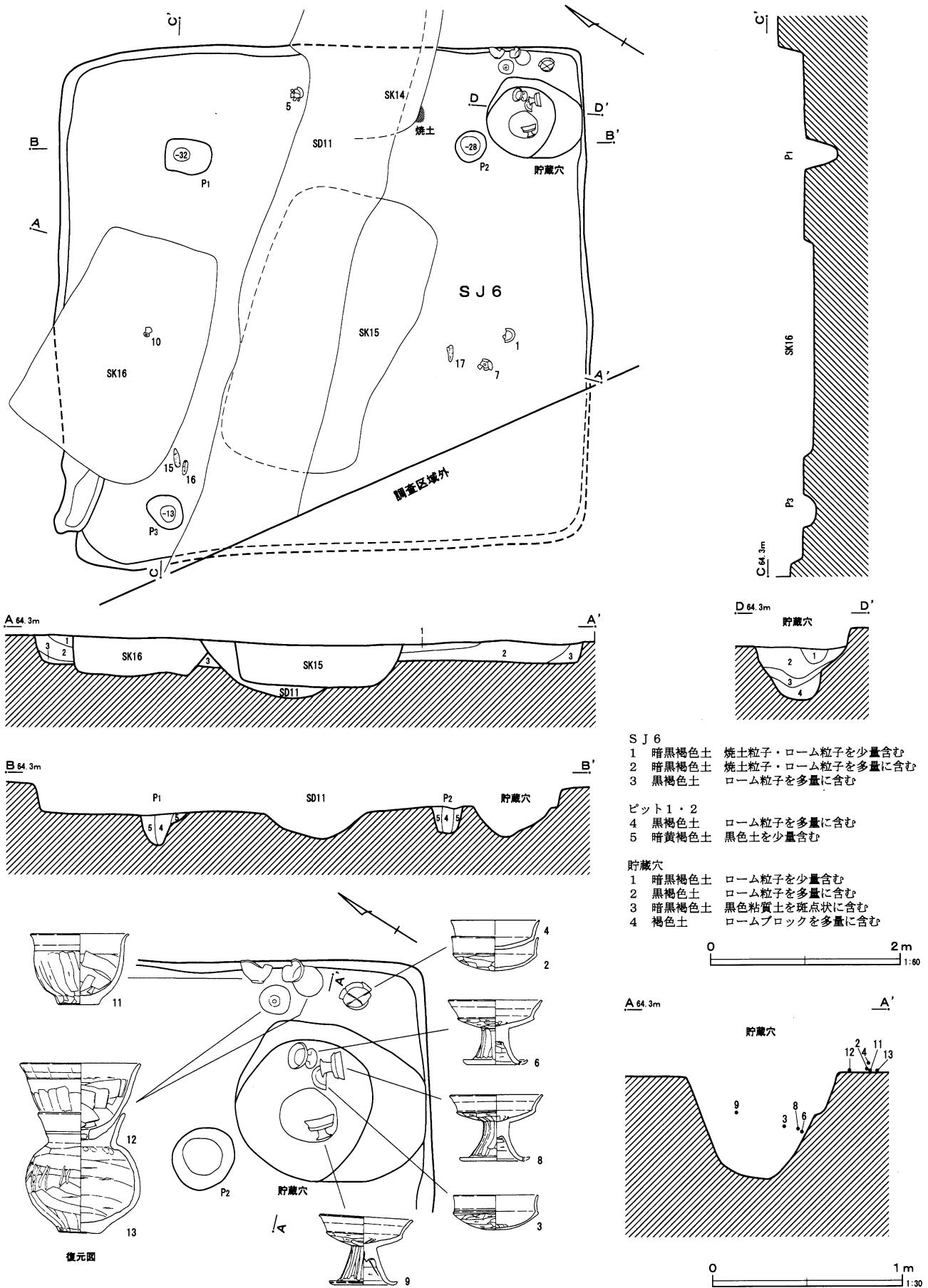
平面形は正方形である。規模は長軸長5.53m、短軸長5.45m、床面までの深さ0.29mである。主軸方位はN-58°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は重複が激しく観察ができないが、基本的に自然堆積である。

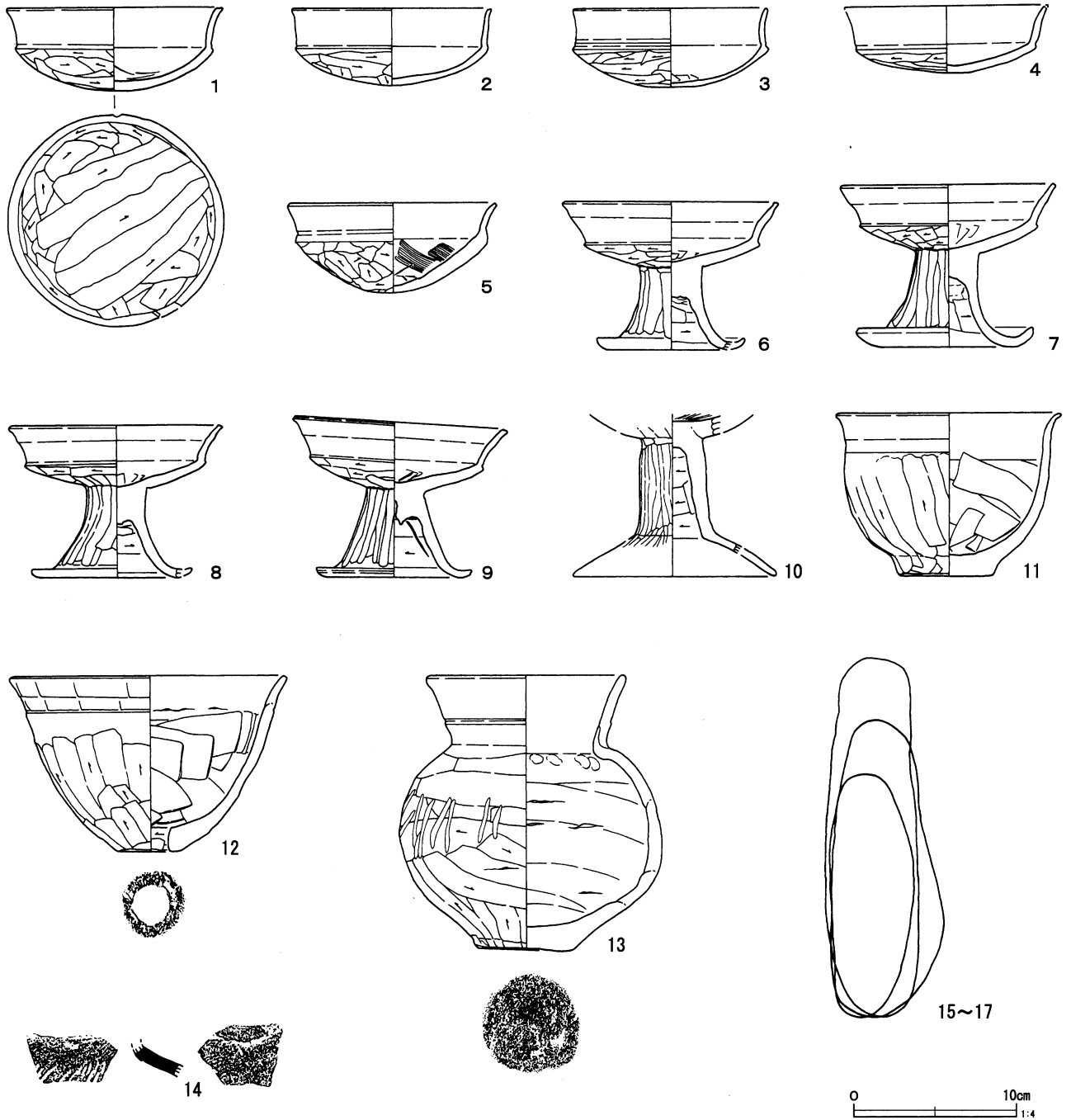
柱穴は3本検出された。深さ30cm前後で、規則的に配置されていることから主柱穴と考えられる。ただしP3のみ他に比べ深さが13cmと浅く、壁際に近接しているのが気にかかる。埋土は第4層が柱抜き取り痕、第5層が掘方埋土である。

貯蔵穴は南東隅部に位置する。平面楕円形で、二段に掘り込まれている。規模は長径100cm、短径83cm、深さ55cmである。埋土はロームブロックやローム粒子の混入が目立ち、特に下層の第3・4層に多い。

出土遺物は土師器坏・高坏・鉢・小型甕・小型壺、須恵器甕、編物石がある(第35図)。南東隅の貯蔵穴周辺からまとまって出土している。東壁の壁際には11の鉢、12の小型甕、13の小型壺が並び、隅部には2・4の坏が、2を下にして重なった状態で上向きに出土した。このうち12・13は小型甕を上に乗せたままの状態での収納されていた可能性も考えられる。また貯蔵穴の中には貯蔵穴際に置



第34図 第6号住居跡・遺物出土状況



第35図 第6号住居跡出土遺物

かれていた3の坏と6・8・9の高坏が貯蔵穴の中に転落した状態で出土した。レベル的には貯蔵穴の中層以上からの出土であり、中程まで埋め戻された段階に流れ込んだのか、意図的に置かれたものかは判然としない。6～7は口唇部を面取りし口縁部が大きく開く模倣坏を乗せた高坏である。脚部上半は中実で、裾部はカール状に大きく外反する特徴的なものである。

この他に5の坏が東壁中央壁寄りから出土した。また南部からは1の坏と7の高坏が出土した。棒状礫はP3の周辺から2個、南部から1個の計3個が出土した。埋土からは14の須恵器甕の頸部破片が出土している。

時期は口縁部が直立する鬼高I式期古段階の模倣坏よりも口縁部が外反する模倣坏が伴っており、夏目遺跡VI期に位置づけられる。

第8表 第6号住居跡出土遺物観察表(第35図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	南部 床面直上	13.2 7.1		95	A・B・F・J	良好 にぶい橙7.5YR6/4	口唇部浅く沈線が巡る 内底面ヘラ オサエ
2	土師器 坏	東隅部 床面上5cm	(12.2) 4.8		50	A・B・F・J	良好 橙5YR7/6	体部外面ヘラケズリ 口唇部に浅い 沈線を巡らす
3	土師器 坏	貯蔵穴 底面上26cm	(11.8) [4.8]		50	A・C・D・F・K	普通 橙5YR7/8	器壁全体に薄く仕上げる 内面ヘラ オサエ
4	土師器 坏	東隅部 床面直上	(12.4) [4.0]		80	A・B・C・F	良好 橙5YR6/8	口縁部の残存部が少なく、口唇部を 二次的に加工する
5	土師器 坏	北東壁寄り 床面直上	12.6 5.5		85	A・C・D・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR4/5	体部外面不定方向のやや雑なヘラケ ズリ
6	土師器 高坏	貯蔵穴 底面上25cm	13.0 [9.1]		90	A・B・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	裾部欠損
7	土師器 高坏	南部 床面直上	13.0 10.0	10.9	90	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	脚部外面ヘラナデによる面取り 裾 部大きく外反する
8	土師器 高坏	貯蔵穴 底面上28cm	12.8 [9.3]		80	A・B・C・F・J	良好 橙2.5YR6/6	脚部外面一部風化磨耗
9	土師器 高坏	貯蔵穴 底面上35cm	12.2 9.5		90	A・B・D・F・J	良好 にぶい橙5YR6/4	口唇部に浅く沈線を巡らす 脚部内 面粘土層付着
10	土師器 高坏	S K16 底面上18cm	[8.6]		90	A・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内面ヘラミガキ S K16へ混入 か
11	土師器 鉢	東隅部 床面直上	13.7 10.0	5.8	55	A・B・F・J	良好 赤褐10YR4/4	体部外面ナデに近いヘラケズリ 口 縁部大きく焼き歪む
12	土師器 小型甑	東隅部 床面直上	16.6 10.7	3.7	100	A・B・C・F・J	良好 浅黄橙10YR8/4	口縁部ヨコナデ工具止痕が明瞭に残 る
13	土師器 小型壺	東隅部 床面直上	12.1 13.9	16.1 5.8	90	A・C・D・F・K	良好 橙7.5YR7/6	胴部外面ヘラケズリ 一部ヘラミガ キ
14	須恵器 甕	埋土			破片	A・G・J	良好 青灰5BG6/1	外面：平行叩き目 降灰が掛かる 内面：ナデ

第9表 第6号住居跡出土編物石観察表(第35図)

番号	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存	石質	備考
15	西部 床面上3cm	21.8	5.7	3.8	782.7	完存	絹雲母片岩	両端部敲打痕
16	西部 床面上5cm	14.9	5.2	4.3	475.3	完存	閃緑岩	一部擦痕
17	中央部南寄り 床面上5cm	18.2	7.0	3.1	546.9	完存	砂岩	一部擦痕

第7号住居跡(第36図)

第7号住居跡は調査区北西部のS・T-27グリッドに位置する。

平面形は横長の長方形である。規模は長軸長3.05m、短軸長2.36m、床面までの深さ0.11mである。主軸方位はN-73°-Eを指す。

床面はやや凹凸が見られる。埋土は暗褐色土を主体とする。北壁の中央に張出部が認められ、調査当初はカマドの可能性を考えて調査を進めたが、埋土を浅く掘り込み被熱痕をもたないことから、カマドの無い、竪穴状遺構であったと考えられる。

柱穴は11本検出された。住居跡に伴うものを特定することは難しいが、P3・4は長軸線上に位置し、2本柱穴と考えられる。北西隅部から北壁に沿って不定形の掘方が認められた。壁溝はない。

出土遺物は土師器埴・壺・高坏、須恵器甕があ

る(第37図)。北壁寄りから1の埴が出土した。埋土からは2の壺底部、3の直線的な裾部の高坏、4の須恵器甕が出土した。4は混入であろう。

時期は夏目遺跡I期に位置づけられる。

第8号住居跡(第38図)

第8号住居跡は調査区北西部のS-27・28グリッドに位置し、北隅部が調査区外に位置する。南隅部を中心に第10号住居跡と重複しているが、第10号住居跡の掘り込みが浅いため両者の新旧関係は明確でない。また、住居跡の中央を東西に第11号溝跡が切り、北壁部を第10号溝跡が削平する。

平面形は縦長の長方形である。規模は長軸長約5.65m、短軸長3.73m、床面までの深さ0.08mである。主軸方位はN-21°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、炉跡周辺の中央部に硬化面が確認された。埋土は第3層がロームブロックを

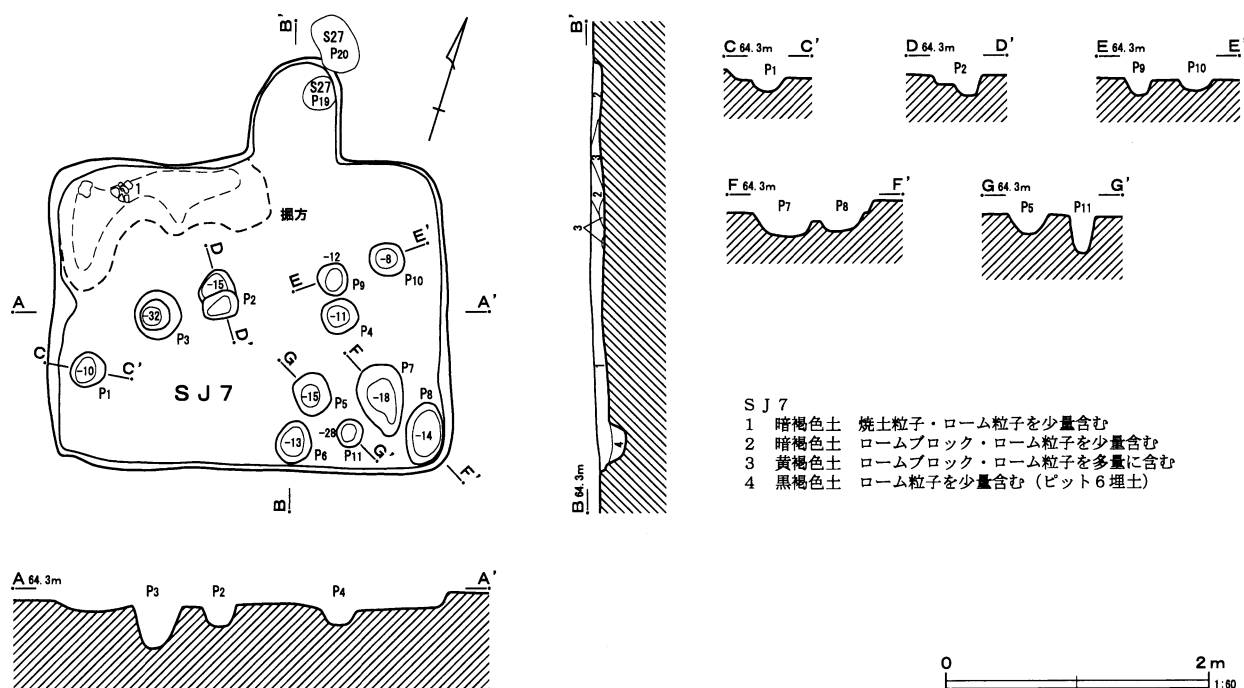
斑状に含むことから貼床の可能性が考えられる。

炉跡は中央部東壁寄りに位置する。平面円形で、規模は径64×62cmである。焼土ブロックを多量に含む暗赤褐色土が厚く堆積しており、明瞭な掘方をもたない。

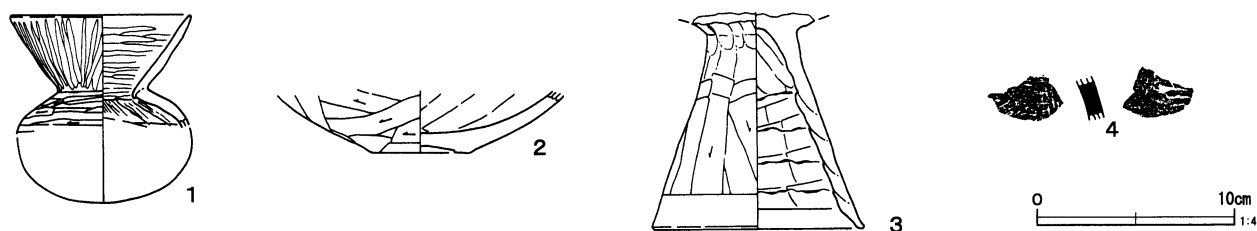
柱穴は8本検出された。すべてが住居跡に伴うものではないが、P1・P2・P5・P6の4本

は隅部に偏った対角線上に位置することから支柱穴と考えられる。またP3・P4・P7も補助的な柱の可能性も考えられるが、P7は炉跡を切り、近すぎるきらいがある。

壁溝は西壁の中央部から北壁にかけて壁際を巡っている。幅29~40cmと幅広く、深さ14cm程である。



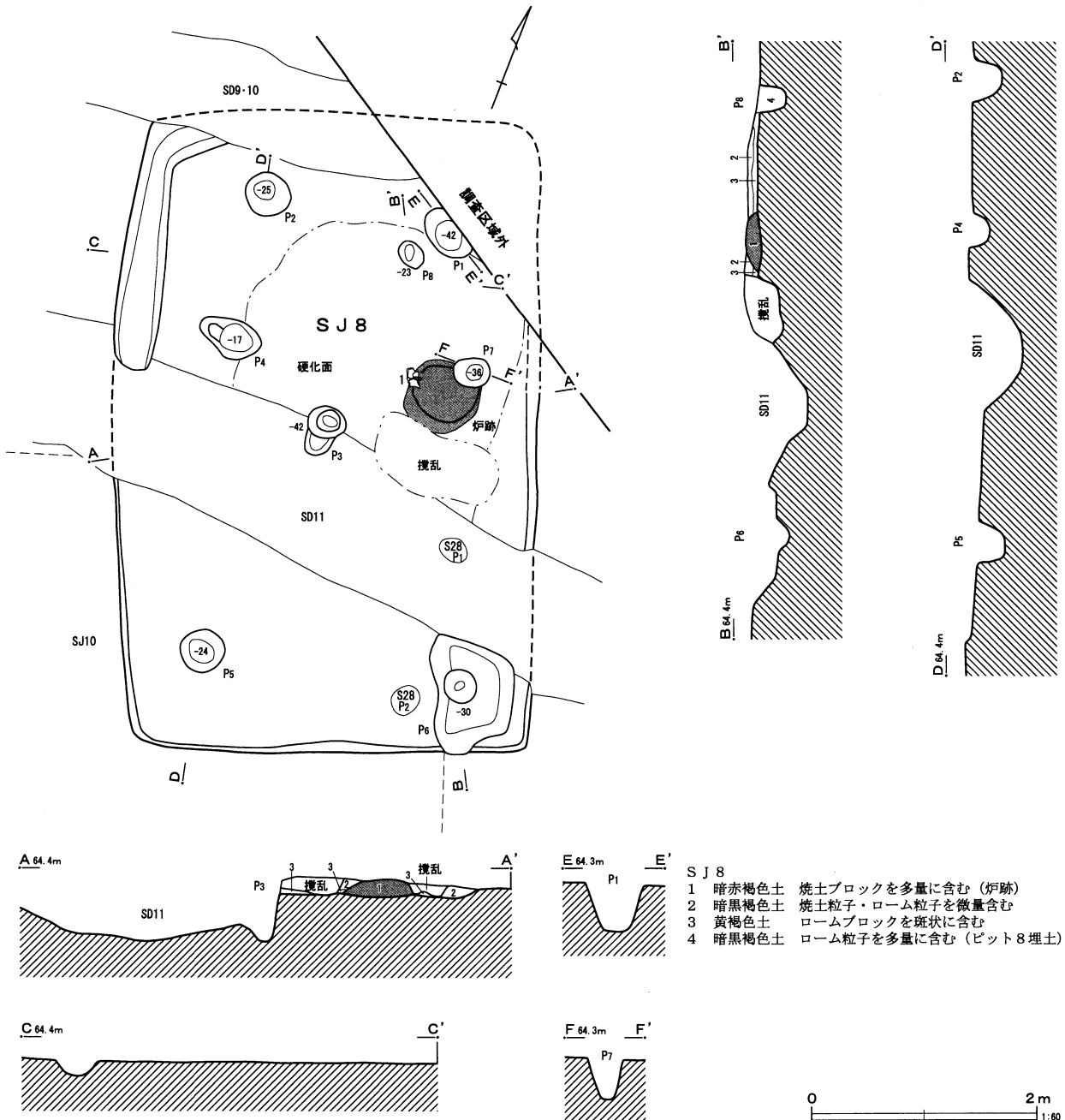
第36図 第7号住居跡



第37図 第7号住居跡出土遺物

第10表 第7号住居跡出土遺物観察表 (第37図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 罎	北壁寄り 床面上5cm	9.0 [5.7]	(8.8)	70	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	外面ヘラミガキ
2	土師器 壺	埋土	[3.3]	5.0	60	B・F・J	普通 にぶい橙7.5YR7/4	内外面被熱ハゼ
3	土師器 高坏	埋土	[11.0]	10.6	脚部	A・C・D・F・J	良好 にぶい橙5YR7/4	脚部内面粘土紐痕明瞭
4	須恵器 甕	埋土			破片	A・B・G・J	不良 明オリープ灰2.5GY7/1	外面：平行叩き目 内面：同心円文 当て具痕 混入か



第38図 第8号住居跡

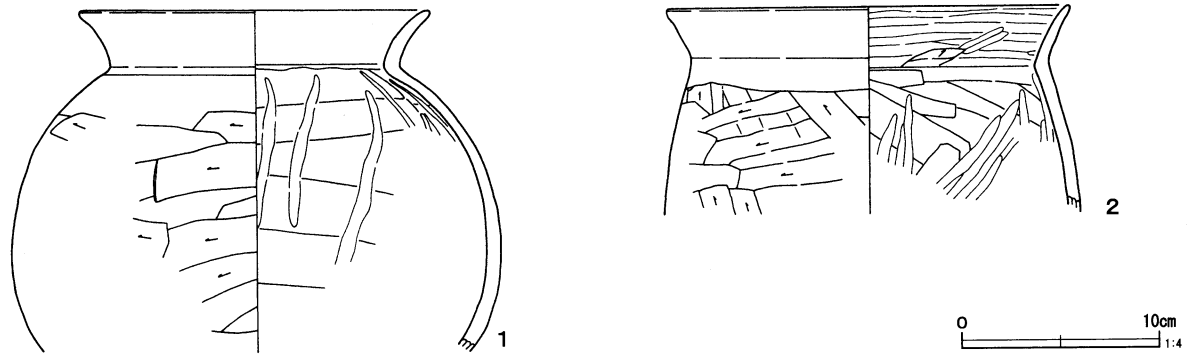
出土遺物は全体に少ない(第39図)。炉跡脇から1の甕上半部が出土した。球胴形の甕で、内面にヘラミガキを一部施す。2は胴部の張りの弱い甕の上半部の破片である、内面にヘラミガキを丁寧に施すことから甕の可能性も残る。

時期は炉跡をもつ住居であること、古相を示す球胴形の甕の存在から夏目遺跡I期に位置づけられる。

第9号住居跡 (第40~43図)

第9号住居跡は調査区北西部のT-27・28グリッドに位置する。第12・13号溝跡によって北西壁部の上面が削平され、南西壁及び南東壁の一部が調査区外に位置する。

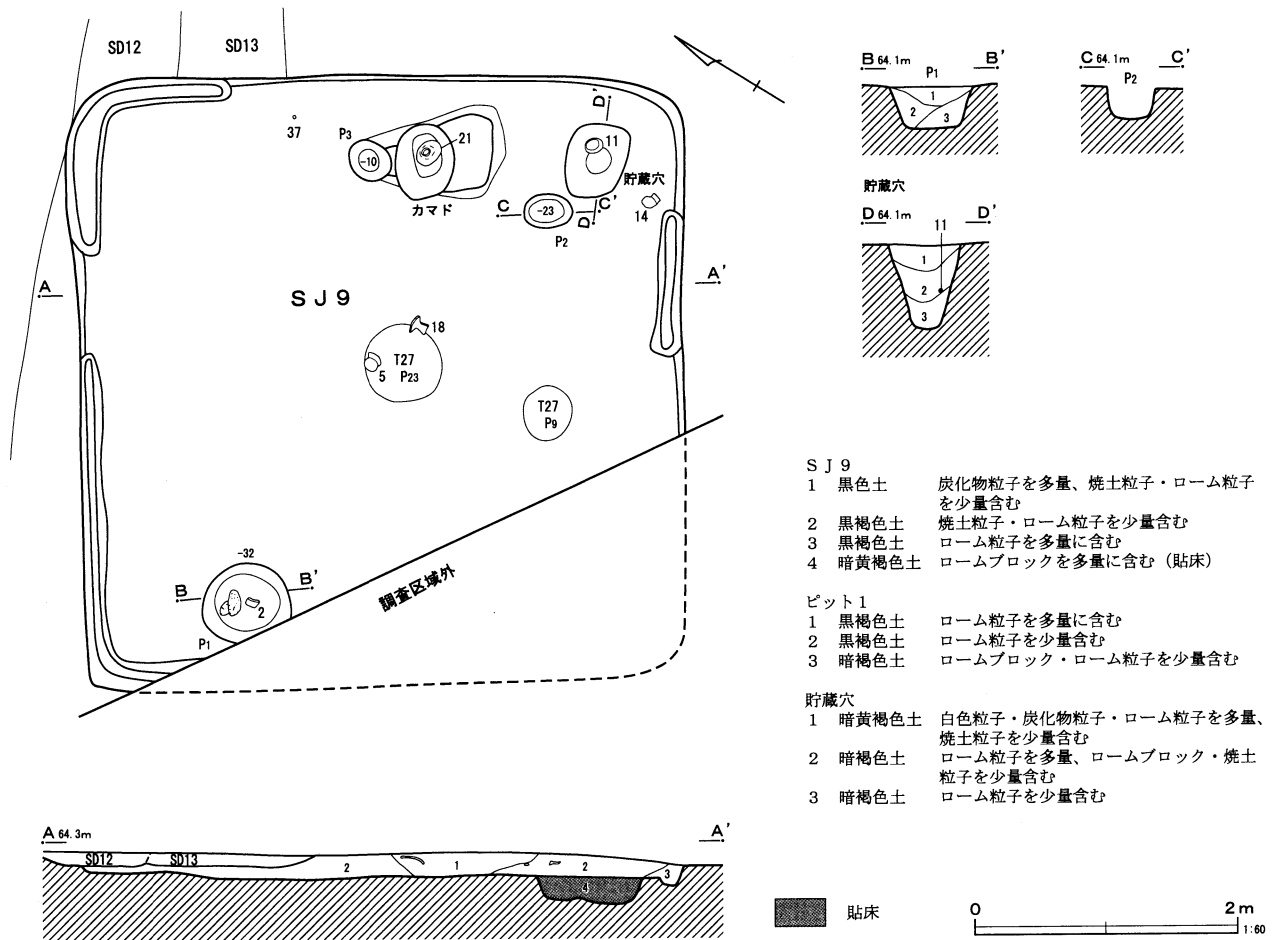
平面形は比較的形の整った方形である。規模は長軸長4.70m、短軸長4.60m、床面までの深さ0.10mである。主軸方位はN-56°-Eを指す。



第39図 第8号住居跡出土遺物

第11表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第39図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器甕	炉際 床面上7cm	17.4 [17.3]	(24.6)	30	A・B・C・F・J	良好 橙2.5YR6/6	胴部内面一部へラミガキ S J 7と一部接合
2	土師器甕	埋土	(20.2) [10.5]	21.0	45	A・B・D・F・J	良好 橙2.5YR6/6	内面口縁から胴部にかけてミガキを施す S J 7と一部接合

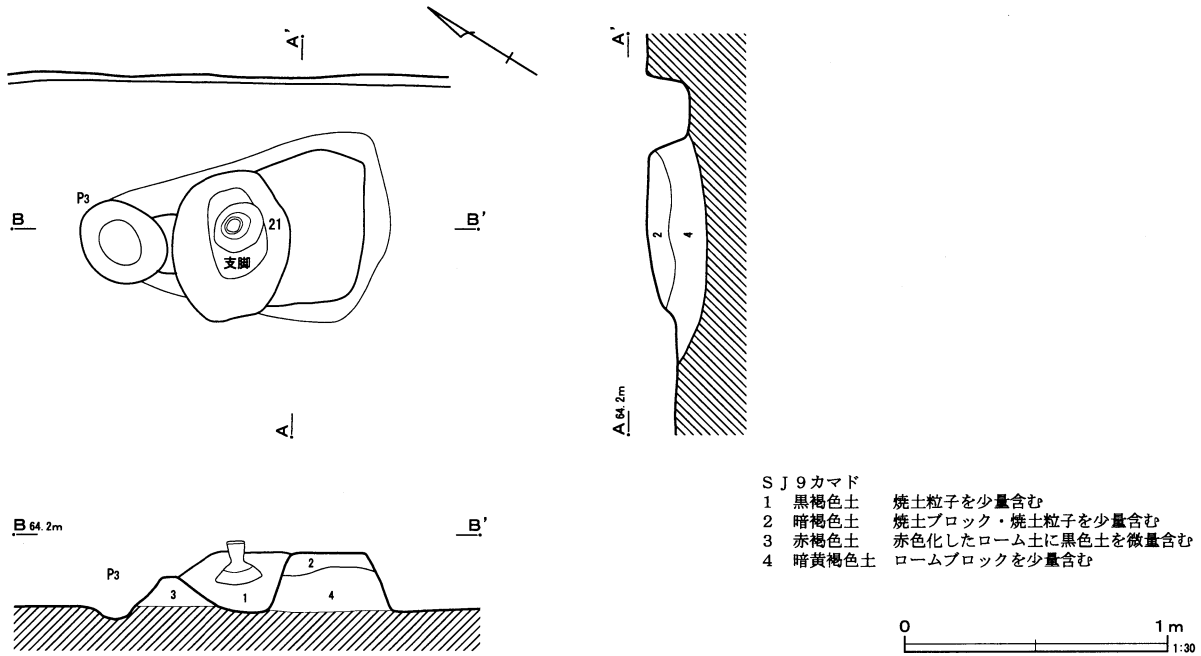


第40図 第9号住居跡

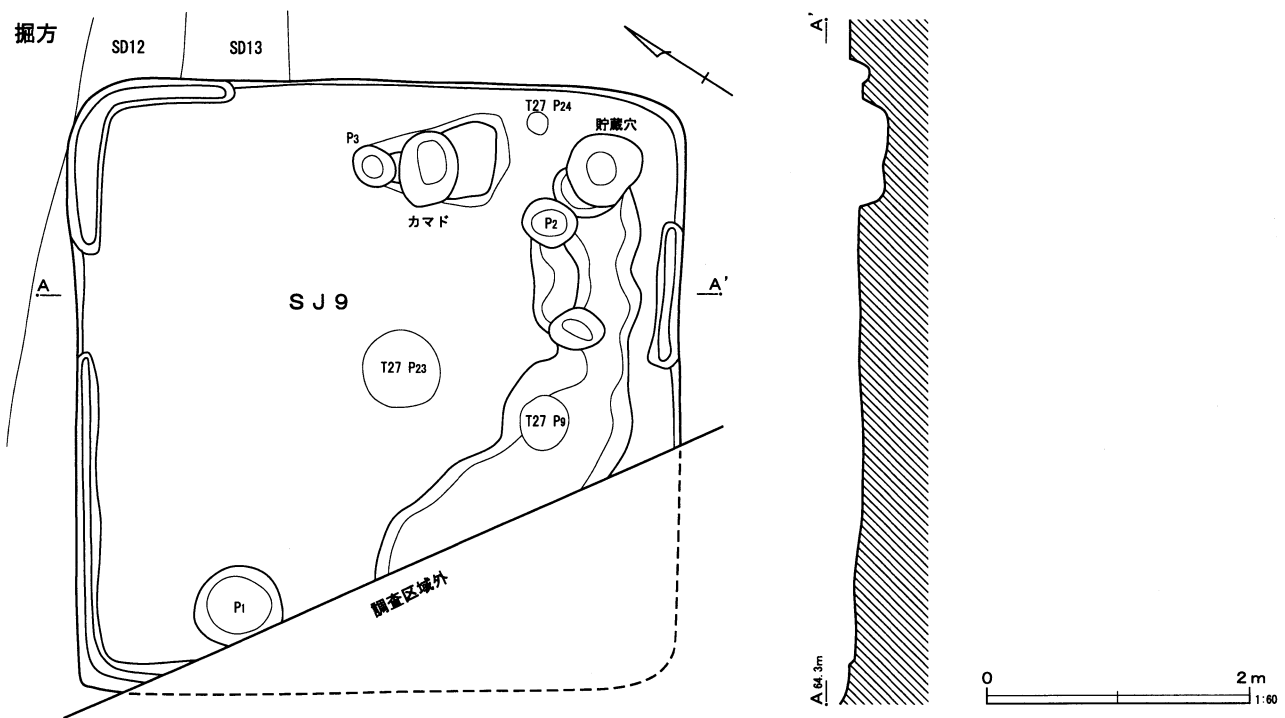
床面は緩やかな凹凸がある。埋土は第1層が土坑状の掘り込みであるため後世の別遺構の可能性が高い。基調はローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土である。

カマドは壁に造り付けられず住居内に独立して設置された典型的な初期カマドである。北東壁中

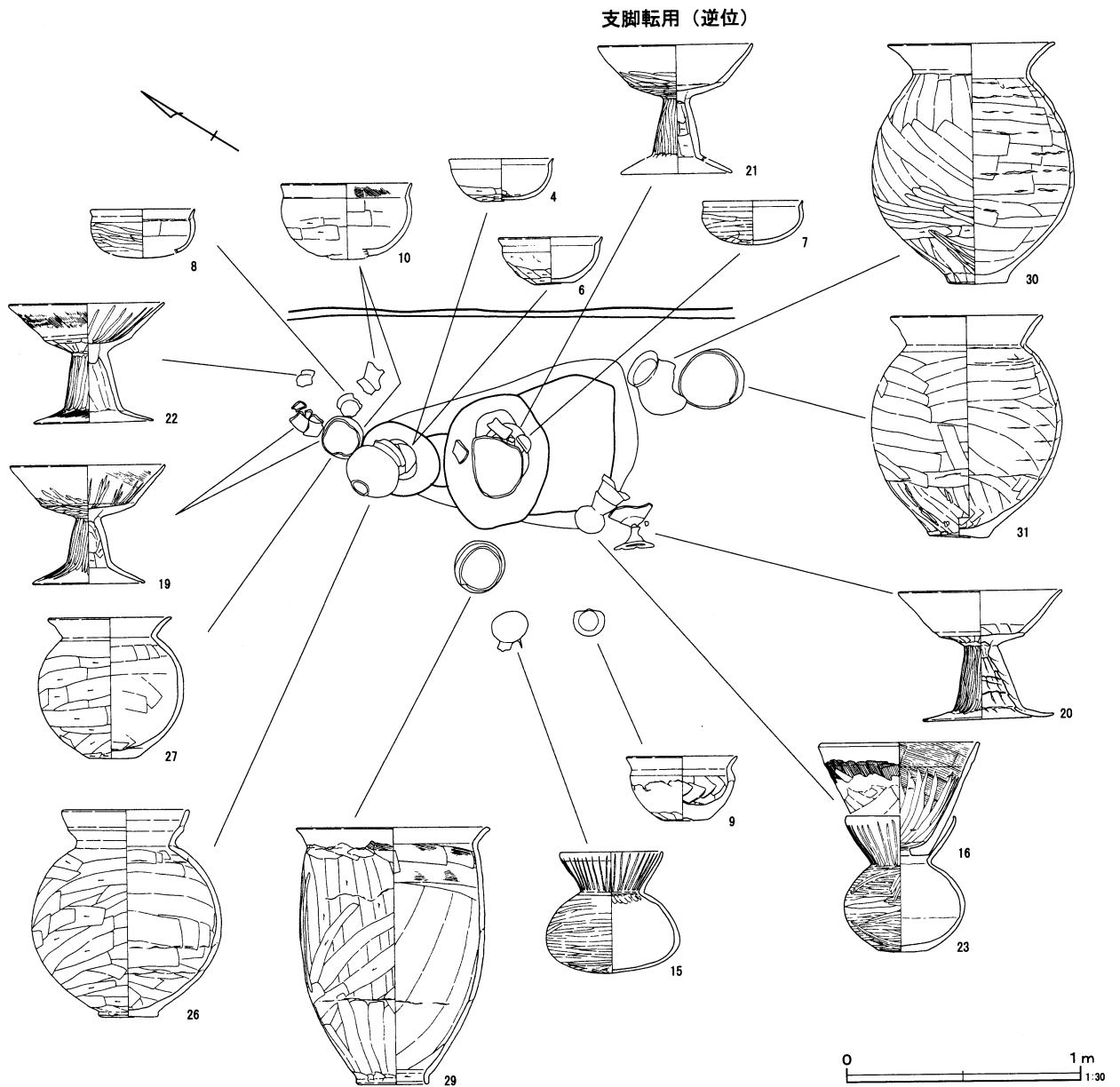
央やや南寄りの壁際に設置されていた。カマドの平面形は不定形で、左袖部に接するようにP3が掘り込まれていた。規模は全長0.57m、幅1.18mである。袖部は第4層としたローム土主体の暗黄褐色土で構築され、第3層が燃焼部内壁の焼け面に相当する。燃焼部は長径0.56m、短径0.46mの



第41図 第9号住居跡カマド



第42図 第9号住居跡掘方



第43図 第9号住居跡遺物出土状況

楕円形で、奥寄りの床面よりも高い位置に高杯を逆位に置いて支脚に転用していた。天井部及び煙出部等の構造については不明である。

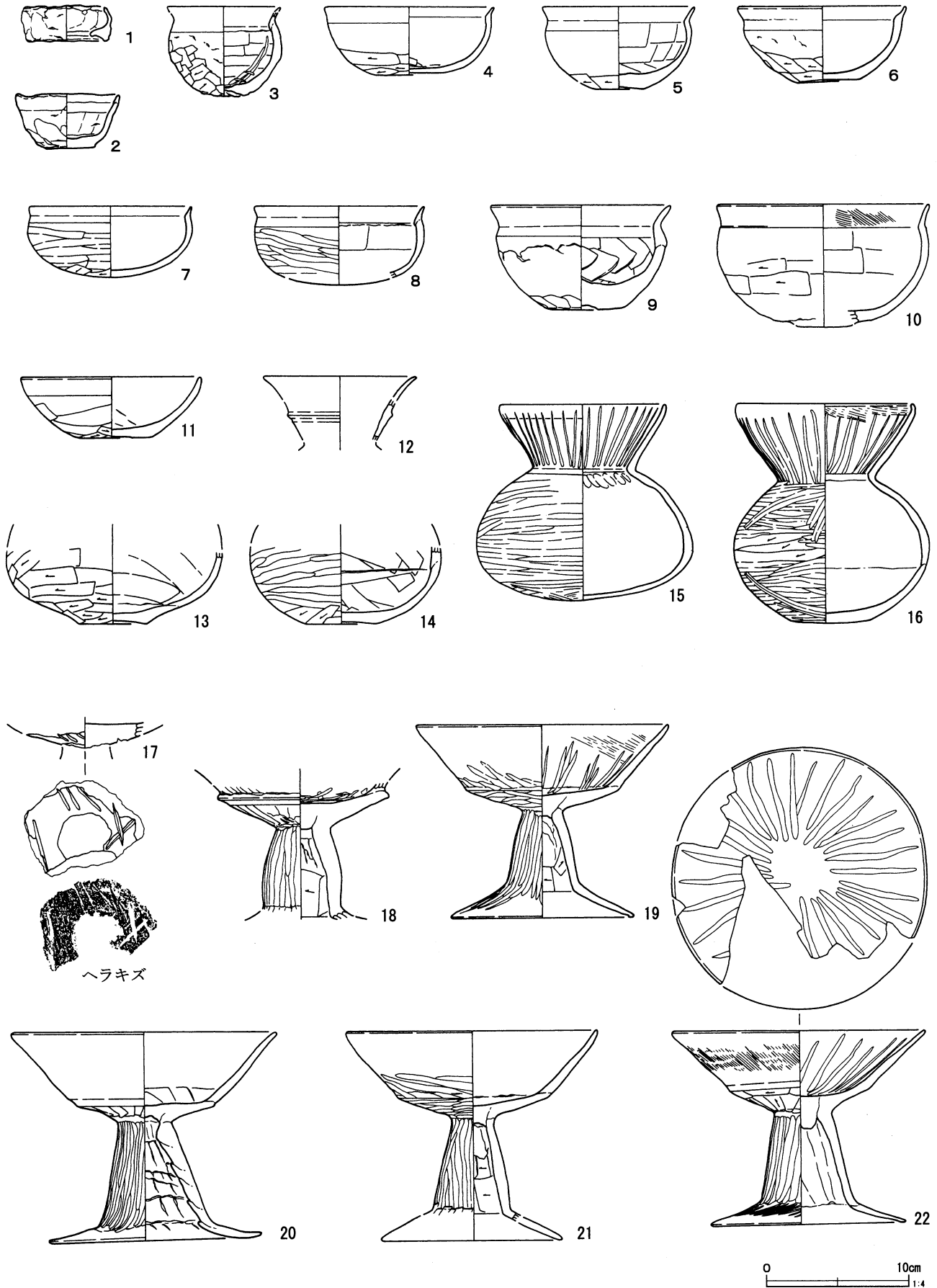
貯蔵穴は東隅部に位置する。平面長方形で、底面は円形になる。規模は長径56cm、短径45cm、深さ63cmである。

柱穴は3本検出された。西隅部に寄った位置にあるP1は楕円形で、長径66cm、短径54cm、深さ32cm。底面の平坦な断面台形で、貯蔵穴の可能性もある。P2はカマドと貯蔵穴の間に位置し、深

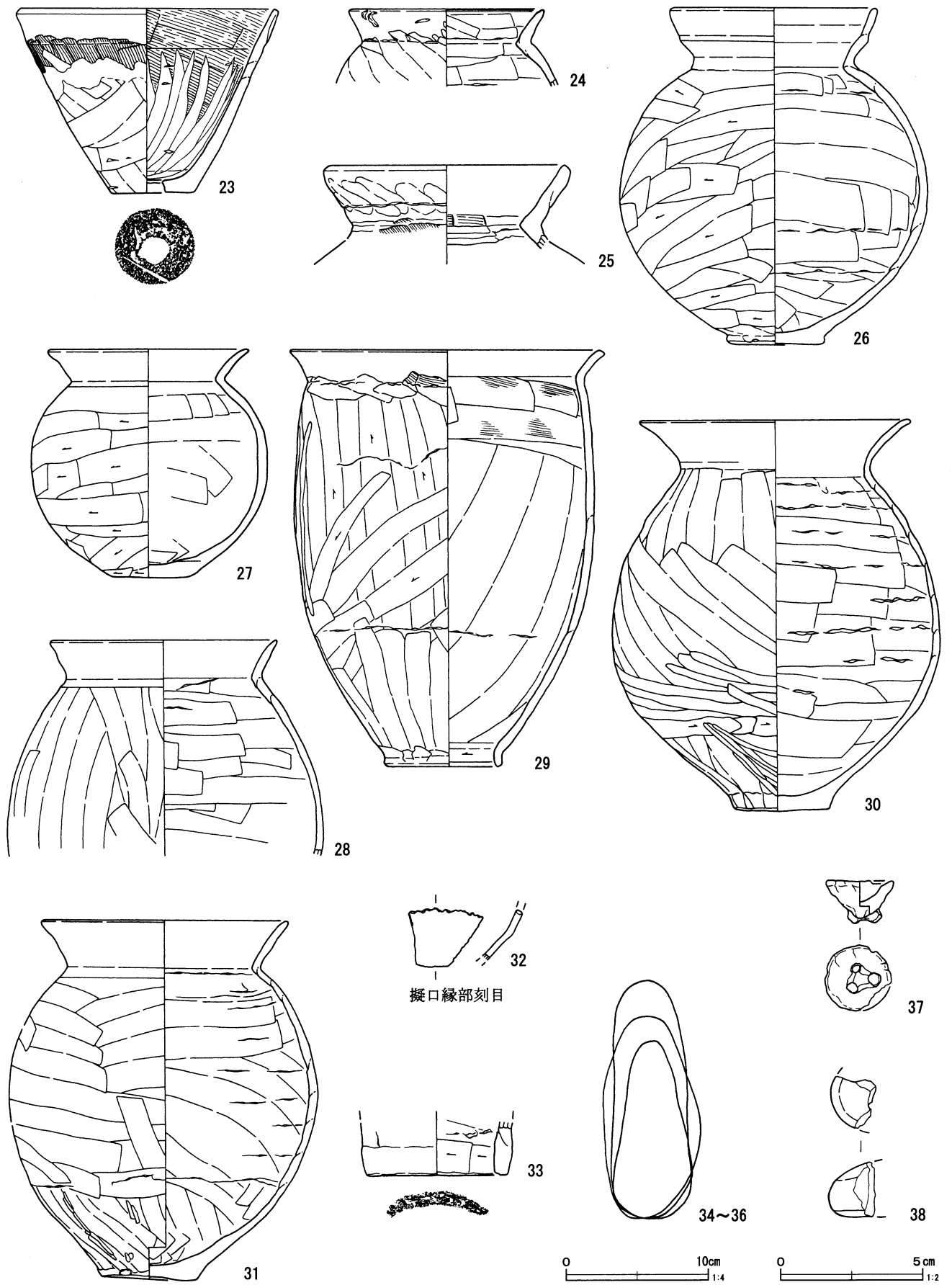
さ23cmである。支柱穴とも考えられるが、対応する柱穴は認められなかった。P3はカマド左袖に接する位置にある浅い掘り込みの小穴である。

壁溝はカマド周辺を除き各壁際に断続的に巡る。幅16~27cm、深さ5cmである。掘方が南壁の内側にのみ不定形な周溝状に掘り込まれていた。掘方はロームブロックを多量に含む暗黄褐色土で埋め戻され、貼床されていた。

出土遺物は土師器杯・埴・鉢・罎・小型壺・高杯・小型甑・大型甑・壺・甕・小型甕・手捏土器、



第44図 第9号住居跡出土遺物(1)



第45図 第9号住居跡出土遺物(2)

第12表 第9号住居跡出土遺物観察表(第44・45図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 手捏土器	埋土	(5.6) 2.5	5.4	30	A・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	小片のため器形不明 底部穿孔か
2	土師器 手捏土器	P1 底面直上	7.2 3.9	3.5	60	A・C・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	塊形ミニチュア土器
3	土師器 手捏土器	埋土	[5.9]	(8.0)	50	A・B・C・F・J	良好 にぶい橙5YR7/4	外面やや乱雑なヘラケズリ 内面ヘラミガキ
4	土師器 坏	カマド 使用面上7cm	11.8 4.8	4.2	95	A・C・D・F・J	良好 赤褐2.5YR4/8	底部弱い丸平底を作り出す
5	土師器 塊	中央部 床面上15cm	(10.6) 5.8	3.4	50	A・C・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	体部外面器面が磨耗する
6	土師器 坏	カマド 使用面上7cm	11.8 5.3	4.5	100	A・B・C・F・K	良好 橙7.5YR7/6	体部内面の仕上げやや雑
7	土師器 坏	カマド 使用面上10cm	11.2 5.0		80	A・D・F・J	良好 橙2.5YR6/8	内面ヨコナデを丁寧に施す
8	土師器 坏	カマド周辺 床面直上	11.8 [5.1]		20	A・B・F・J	良好 橙2.5YR6/6	体部外面粗いヘラミガキ
9	土師器 塊	カマド周辺 床面上15cm	12.6 7.4	5.3	90	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤橙10R6/4	体部外面に粘土紐痕を残す
10	土師器 鉢	カマド際 床面直上	(14.8) [8.4]		30	A・B・F・K	普通 淡橙5YR8/4	二次被熱により器面荒れる
11	土師器 坏	貯蔵穴 底面上28cm	12.6 4.4	5.0	95	A・D・F・J	普通 橙5YR7/8	内外面磨耗顕著 底部小さな丸平底を作り出す
12	土師器 埴	カマド	[3.0]		10	A・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	臙模倣か
13	土師器 小型壺	貯蔵穴 埋土	[5.0]	15.1 4.8	75	A・B・C・F・J	良好 赤褐5YR4/6	扁円形の胴部 小さな底部
14	土師器 小型壺	南壁寄り 床面上9cm	[5.4]	13.4 5.1	80	A・C・D・F・J	良好 赤褐10R5/4	胴部外面ヘラミガキ
15	土師器 小型壺	カマド周辺 床面直上	11.6 13.8	15.2	70	A・D・F・J	良好 橙2.5YR6/8	口縁部内外面暗文を施す
16	土師器 小型壺	カマド 床面直上	12.4 15.4	13.7 5.7	100	A・B・D・F・J	良好 橙5YR7/8	口縁部内外面暗文 胴部外面横方向のヘラミガキ
17	土師器 高坏	埋土	[1.8]		破片	A・B・D・F・J	良好 橙5YR6/6	高坏の坏底部外面に刀子によるヘラキズが残る
18	土師器 高坏	中央部 床面上8cm	[9.5]		90	A・B・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	坏部内面不定方向のヘラミガキ
19	土師器 高坏	カマド周辺 床面直上	(17.6) 13.6	12.7	70	A・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	坏部内面粗い放射暗文
20	土師器 高坏	カマド際 床面上21cm	18.4 14.8	14.8	95	A・B・C・F・J	良好 橙5YR7/6	脚部内面粘土紐痕顕著
21	土師器 高坏	カマド 使用面上11cm	17.5 [13.4]		90	A・C・D・F・J	良好 赤褐5YR4/6	坏部外面下端ヘラミガキ 脚部外面ヘラミガキ
22	土師器 高坏	カマド周辺 床面直上	17.8 13.7	13.6	85	A・C・D・F・J	良好 橙5YR6/6	坏部内面やや粗い放射暗文
23	土師器 小型甗	カマド 床面直上	17.8 13.0	5.8	95	A・C・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	体部上位外面に帯状の剝離痕
24	土師器 小型甗	埋土	(13.5) [5.4]		25	C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	口縁部外面にヘラキズあり 口唇部内面に沈線
25	土師器 壺	埋土	(16.5) [6.0]		25	A・C・D・F・J	良好 橙2.5YR6/8	複合口縁壺
26	土師器 壺	カマド 使用面上8cm	14.2 23.7	21.5 6.8	85	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	有段口縁壺
27	土師器 小型甗	カマド際 床面直上	13.8 16.0	16.5 5.3	75	A・B・C・F・J	良好 橙2.5YR6/8	胴部上半外面器面荒れる 二次被熱か
28	土師器 甗	埋土	(15.8) [15.2]	(22.2)	25	A・B・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部内面木口状工具によるナデ
29	土師器 大型甗	カマド周辺 床面直上	(21.5) 29.4	20.9 (7.6)	85	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部内面丁寧なナデ
30	土師器 甗	カマド際 床面上16cm	18.7 27.3	22.9 6.7	60	A・B・F・J・K	良好 にぶい黄橙10YR6/4	胴部外面ヘラケズリ 一部ミガキ
31	土師器 甗	カマド周辺 床面上4cm	17.0 25.3	21.6 6.7	75	A・C・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	内面の粘土紐痕明瞭
32	土師器 壺	埋土	[5.1]		破片	A・D・F・J	良好 橙2.5YR6/6	胴部下半の接合部に工具による刻み目あり
33	土製品 不明筒形	掘方	[3.8]	(10.0)	25	A・B・F・J・K	良好 橙2.5YR6/8	支脚か

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
37	土師器 三足土器	東壁寄り 床面直上	2.2 1.5	1.2	95	A・B・C・F	良好 にぶい褐7.5YR5/4	ミニチュア土器 内外面ナデ
38	土製品 土玉	埋土	[2.0]		破片	A・G・J	良好 暗青灰5B4/1	瓦質 長径約3.5cmの楕円形土製品 混入か

第13表 第9号住居跡出土編物石観察表(第45図)

番号	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存	石質	備考
34	埋土	12.4	5.5	4.4	357.0	完存	砂岩	
35	埋土	16.7	5.7	4.9	717.9	完存	砂岩	一部擦痕
36	埋土	14.1	6.8	3.9	594.0	完存	砂岩	一部擦痕

編物石などがある(第44・45図)。

遺物はカマド周辺に集中していた。カマド燃焼部には21の高坏を倒立させて支脚に転用していた。高坏はカマド底面より浮いた位置に設置されていた。支脚の上には甕が掛けられた状態で出土したが、胴部の破片であったため実測図示できなかった。また7の坏も燃焼部からの出土である。このように初期カマドの特徴の一つとして、カマド使用面が住居跡の床面よりも高い位置にあることが確認された。

カマド右袖に接して16の小型壺の上に23の小型甕が乗った状態で出土した。厳密には土器の収納状態を示しているが、小型甕については「蒸し器」としての用途以外に「濾過器」あるいは「漏斗」のような用途に使われたとする有力な見解があり、その使用法を巡って注目される事例となるであろう。また、それに接して20の高坏が横倒しの状態で出土した。

カマド奥の壁際には30と31の甕が並んで置かれていた。カマド前面には大型甕の29を逆位に置き、その脇に15の小型壺、9の塊が並んで置かれていた。カマド左袖ではP3に落ち込むように26の壺と、4と6の坏が壺の口縁部下から出土した。P3の脇に置かれた27の小型甕の下からは8の坏、10の鉢、19・22の高坏が出土している。

カマド右脇の貯蔵穴の中層から11の坏が、貯蔵穴と南壁の間からは14の小型壺胴部下半が、東壁際からは37のミニチュア三足土器が、中央部からは5の塊と18の高坏脚部がそれぞれ出土した。ま

た北西隅のP1では、数個の棒状礫とともに2の手捏土器が出土している。

この他に埋土からは混入の可能性もあるが38の瓦質の扁平な土玉?の破片、掘方埋土からは第23号住居跡から出土した炉支脚に類似する筒形の不明土製品(33)が出土している。

時期は、源初坏が出現しているが量的に少ないこと、未だ定量で平底の内斜口縁の塊類が残存すること、また和泉型高坏、長胴化の弱い甕、甕形の大型甕など古い様相が色濃い反面、隼模倣の小型壺など新しい様相も窺えることから夏目遺跡II期に位置づけておきたい。

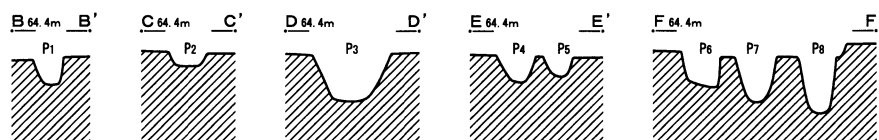
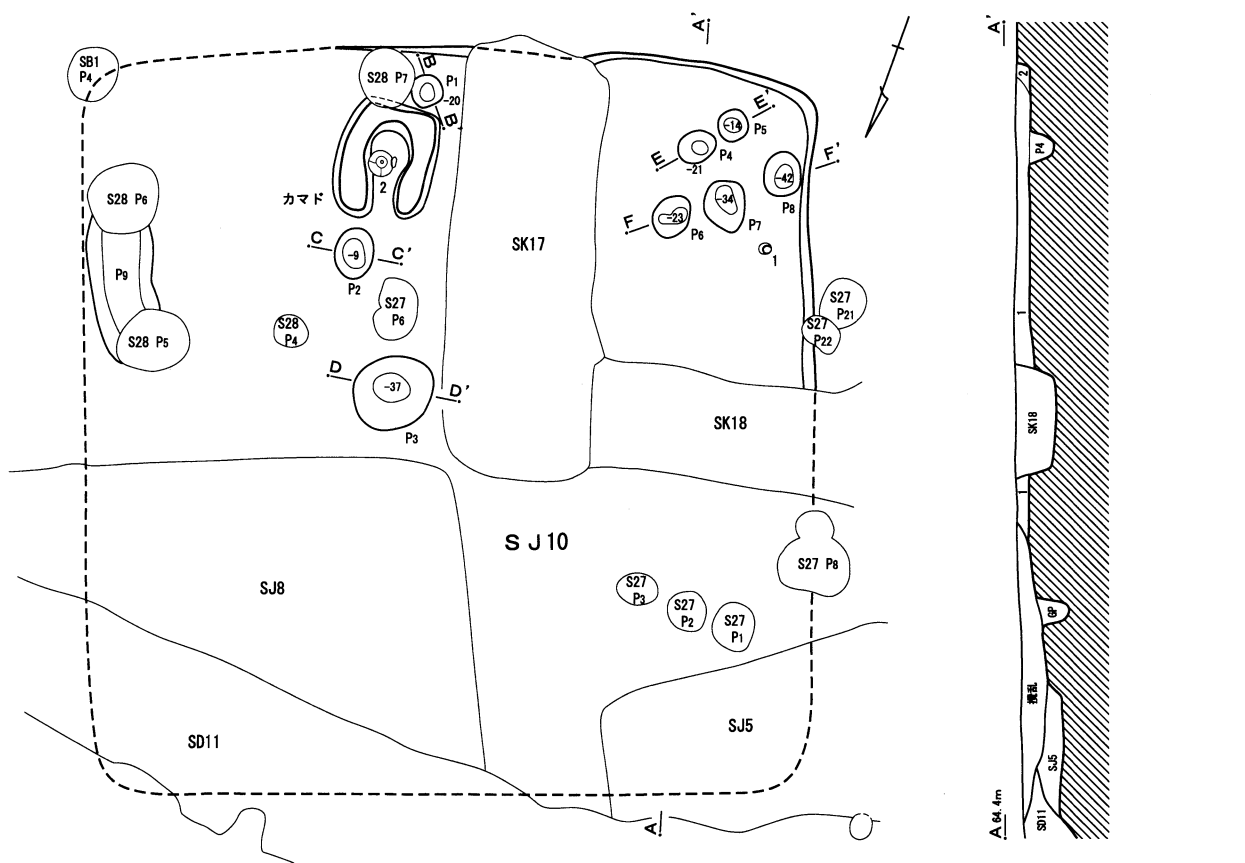
第10号住居跡(第46図)

第10号住居跡は調査区北西部のS-27・28グリッドに位置する。掘り込みが浅く、南西隅部の立ち上がり部とカマド周辺部が遺存していたにすぎない。前述したように第8号住居跡との新旧関係が判然としないほどに、第5号住居跡、第17・18号土坑、第11号溝跡などによって床面の大半が壊されていた。

平面形は方形系と考えられ、一辺約3.50mに復元される。床面までの深さは0.10mほどである。主軸方位は、壁面の残存する西壁を基準とすればN-159°-Eを指す。

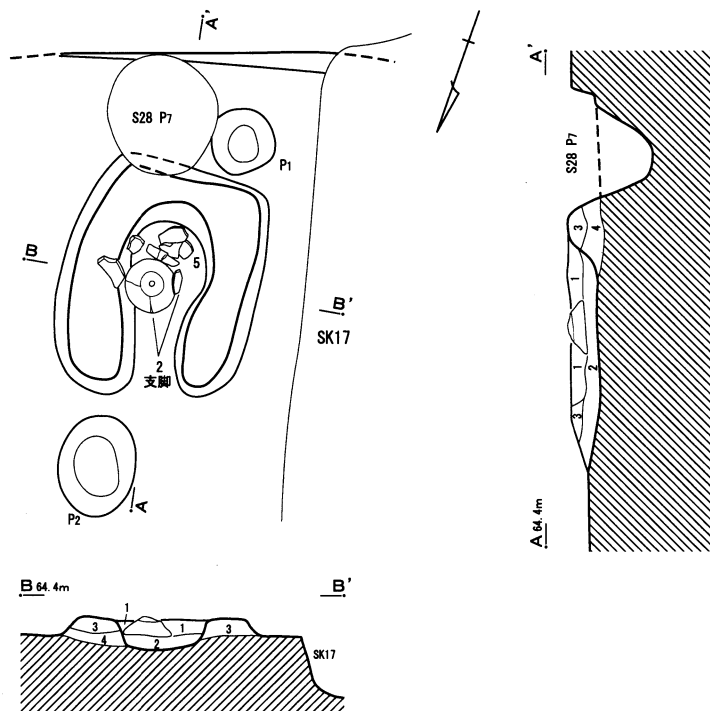
床面は全体に残りが悪く、カマド周辺のみを遺存する。埋土はローム粒子を含む黒褐色土を基調としている。

カマドは南壁ほぼ中央の壁面の内側に設置されていた。ローム粒子混じりの黒褐色土(第4層)



S J 10
 1 黒褐色土 ローム粒子を少量含む
 2 黄褐色土 黒色土を少量含む

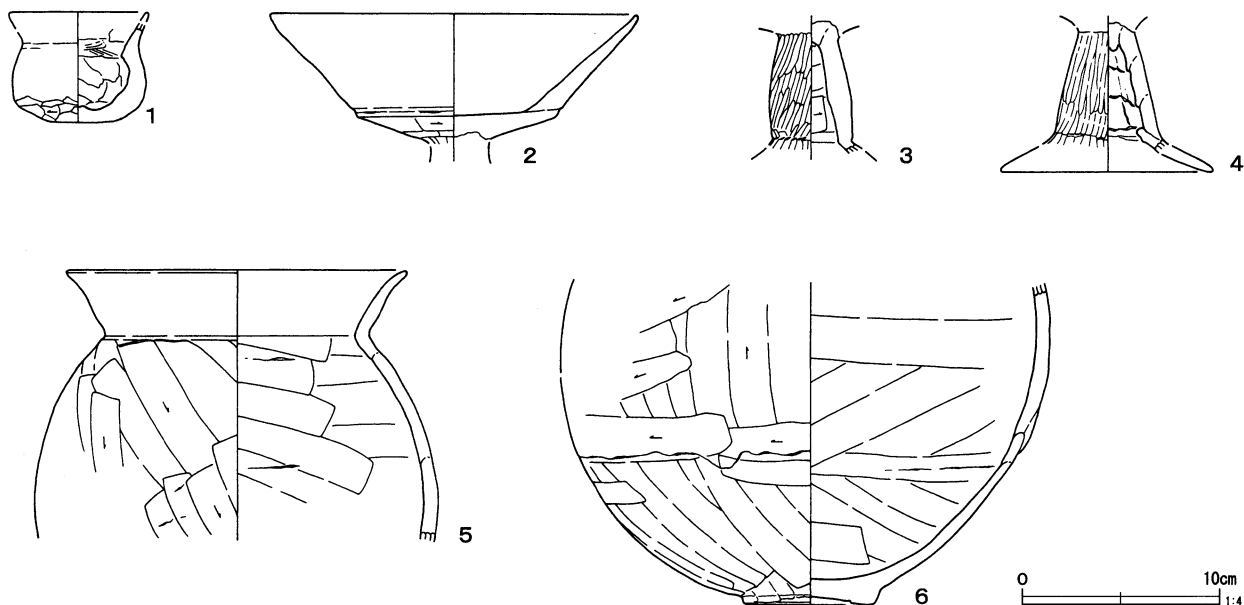
0 2 m
 1:60



S J 10カマド
 1 暗赤褐色土 赤色化したローム土を主体
 2 黒褐色土 ローム粒子を微量含む
 3 赤褐色土 赤色化したローム土を主体
 4 黒褐色土 ローム粒子を少量含む

0 1 m
 1:30

第46図 第10号住居跡・カマド



第47図 第10号住居跡出土遺物

第14表 第10号住居跡出土遺物観察表 (第47図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 埴	西壁寄り 床面直上	[5.0]	6.8 3.2	80	A・C・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	手握土器に近い仕上り
2	土師器 高坏	カマド燃焼部 使用面直上	18.4 [6.3]		90	A・B・D・F・J	良好 橙2.5YR6/6	坏部内面磨耗
3	土師器 高坏	カマド	[6.8]		90	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	柱状部外面ヘラミガキ
4	土師器 高坏	埋土	[6.7]		75	A・C・D・F・J	良好 橙2.5YR6/6	脚部内面粘土紐巻き上げ痕明瞭
5	土師器 甕	カマド燃焼部 使用面上6cm	(17.0) [13.8]	(20.4)	20	A・B・C・F・J	良好 橙2.5YR6/8	胴部外面ヘラケズリ
6	土師器 甕	カマド	[16.4]	(24.5) (6.7)	45	A・B・F・J・K	良好 にぶい橙5YR6/4	内外面磨耗

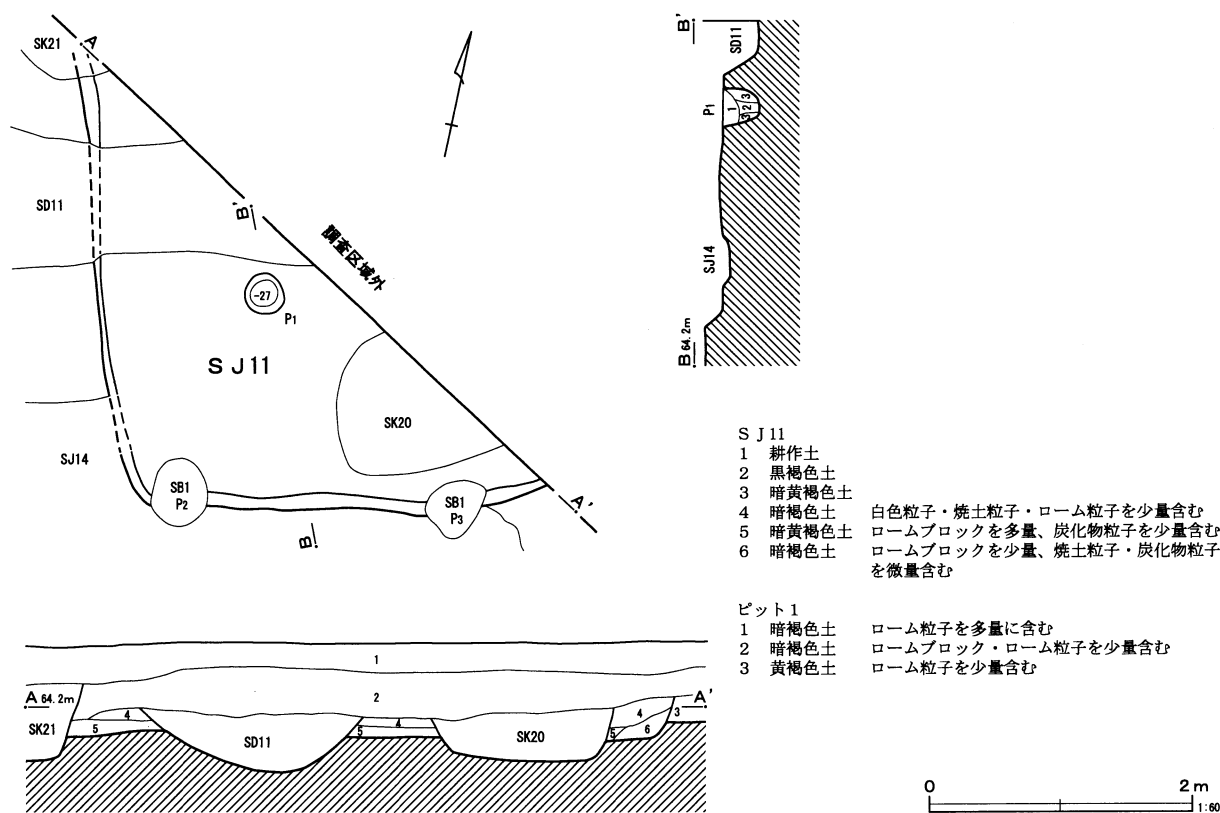
によってベースを作り、赤色化したローム土（第3層）を積み上げて「コ」の字に近い馬蹄形の袖部を構築していた。規模は全長0.92m、幅0.76m、燃焼部内壁幅0.36mである。燃焼部も黒褐色土（第2層）をベースとし、その上に支脚を置き、暗赤褐色土の第1層の上面が火床面にあたる。天井部の構造については明確でない。カマドの主軸方位はN-168°-Eである。

柱穴は9本検出された。グリッドピットとの重複が著しく、支柱穴は明確でない。貯蔵穴や壁溝などの施設についても検出されなかった。

出土遺物は土師器埴・高坏・甕がある（第47図）。1の埴は西壁寄りのP7脇から出土している。手

捏土器に近い作りで、体部から底部にかけて器肉が厚い。2の高坏はカマド燃焼部に支脚として逆さにして置かれていた。坏部のみの遺存であるが、大振りで坏部底面が広く作られており古相を示す。二次被熱のために赤変する。またカマド燃焼部からは3の高坏脚部、5・6の甕が出土している。5は口縁部が「く」の字状に大きく屈曲する甕である。6の甕は口縁部から胴部上半を欠損し、胴部下半外面に接合痕を残す。

時期を示すような遺物に乏しいが、坏・埴類がまったく出土していないことから、夏目遺跡II期に位置づけておきたい。



第48図 第11号住居跡

第11号住居跡 (第48図)

第11号住居跡は調査区北西部のS-28グリッドに位置する。北東部の大半が調査区外にかかり全容は不明である。南壁部が第14号住居跡と重複関係にあるが、掘り込みが浅く両者の関係を即断することは難しい。また第11号溝跡、第20・21号土坑が重複し、床面を大きく壊している。

平面形は方形系と考えられる。規模は長軸長3.30m、短軸長2.89m、確認面から床面までの深さ0.12mである。主軸方位はN-19°-Wを指す。

床面は部分的にしか残存していないが、ほぼ平坦である。埋土はロームブロックの混入が目立つが、概ね水平に堆積しており自然堆積を窺わせる。

柱穴は1本のみ検出された。P1は深さ27cmで、第2層は柱痕と考えられる。位置的に見て主柱穴であろう。カマド、貯蔵穴、壁溝等は検出できなかった。

出土遺物はなく、時期は明確でない。

第12号住居跡 (第49図)

第12号住居跡は調査区北西部のT-28グリッドに位置する。第14号住居跡を切り、第13号住居跡に東側約3分の1が壊されている。また北壁は第12号溝跡によって削平されていた。

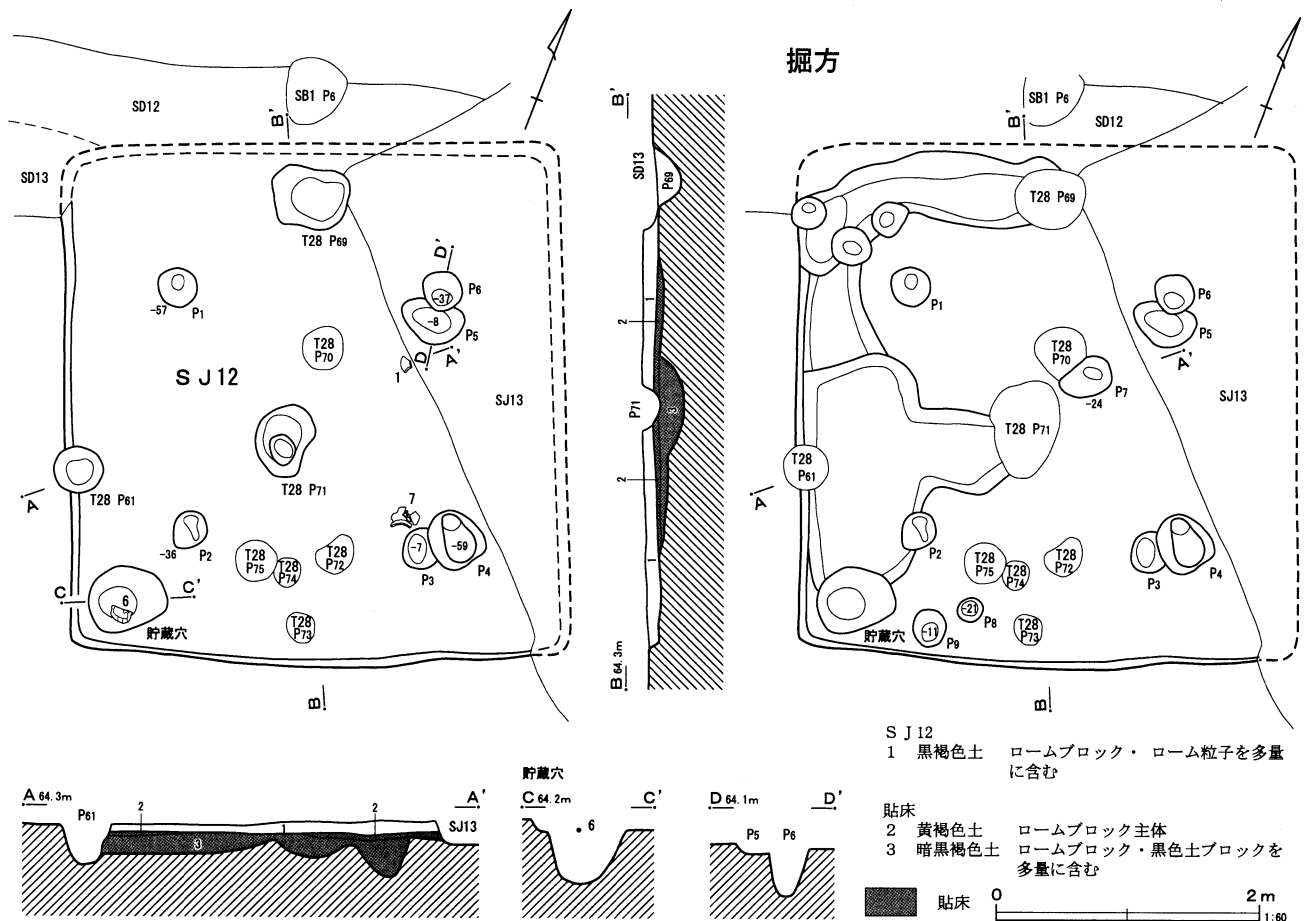
平面形は方形系である。規模は一辺3.50mほどの小型の住居に復元され、床面までの深さ0.08mである。主軸方位はN-21°-Wを指す。

床面は緩やかな凹凸が認められる。埋土は黒褐色土を基調とする。

カマド、炉跡は検出できなかった。後世の遺構による削平によって既に消滅してしまったのか、あるいは小型住居であることから、当初より火処をもたなかったのか明確にすることはできなかった。

貯蔵穴は南西隅部に位置する。平面楕円形で、規模は長径59cm、短径47cm、深さ39cmである。

柱穴は9本検出された。P1・P2・P4・P6の4本が規則的に配置されていることから主柱



第49図 第12号住居跡・掘方

穴と考えられる。深さ36~59cmで、しっかりした掘り込みである。掘方は北壁部から西壁部にかけて不定形な周溝状に深く掘り込み、ロームブロックを多量に含む暗黒褐色土によって埋め戻されていた。

出土遺物は土師器坏・高坏・壺・鉢・甕がある(第50図)。南西隅部の貯蔵穴内から6の鉢が床面とほぼ同じ高さの浮いた状態で出土している。厳密には住居跡に伴う出土状況ではない。その他には中央部東寄りから1の坏、P3脇から7のくの字状に屈曲する素口縁の甕が出土している。

1は口唇部を面取りした深身の半球形坏である。2・3は複合口縁壺で口縁部の作りや法量が異なる。3は頸部外面にハケメを残す。5は中型の鉢である。6は小型甕に近い器形の広口鉢で、胴部外面にヘラケズリを施し、内面に光沢のある

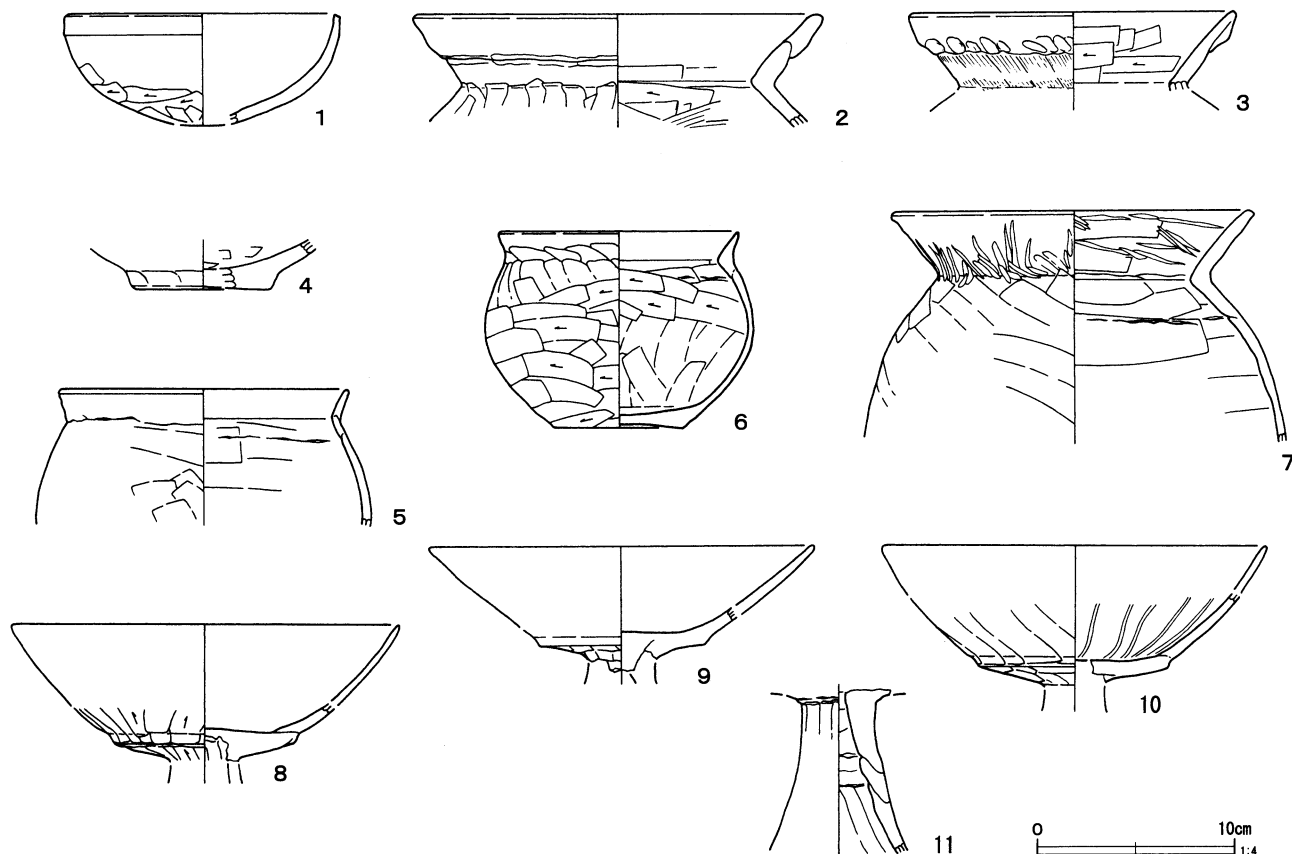
ミガキに近いナデを丁寧に施している。7は「く」の字口縁の素口縁甕で口縁部内外面にヘラミガキを施す。8~11は高坏の破片で、器形の分かるものはないがまだ短脚化の兆しがなく、坏部内面に放射暗文が見られる。器種構成的には定量で坏・埴類が含まれてないことから、時期は夏目遺跡II期に位置づけられる。

第13号住居跡(第51~53図)

第13号住居跡は調査区北西部のS・T-28グリッドに位置する。第12・14号住居跡を切り、第12号溝跡、第1号掘立柱建物跡に切られる。

平面形は方形である。規模は長軸長4.86m、短軸長4.55m、床面までの深さ0.2mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。

床面はやや凹凸があり、硬化面などは確認されなかった。埋土は概ね自然堆積を示す。



第50図 第12号住居跡出土遺物

第15表 第12号住居跡出土遺物観察表 (第50図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	中央部東寄り 床面直上	(13.6) 5.6		25	A・B・C・F・J	良好 橙7.5YR7/6	口唇部面取り
2	土師器 壺	埋土	(20.4) [5.7]		20	A・C・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	複合口縁に近い口縁部
3	土師器 壺	埋土	(16.3) [4.0]		25	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	頸部外面ハケメ後ヨコナデ
4	土師器 壺	埋土	[2.6]	(6.8)	25	A・B・D・F・K	不良 橙5YR6/8	内外面磨耗
5	土師器 鉢	埋土	(14.4) [6.9]	(17.0)	15	A・B・C・F・J	良好 赤褐2.5YR4/8	内外面丁寧なナデ
6	土師器 広口鉢	貯蔵穴 底面上40cm	(12.0) 10.0	(13.6) (6.5)	50	A・C・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部内面ミガキに近いナデ
7	土師器 甕	中央部南東寄り 床面直上	(18.0) [11.9]		20	A・B・F・G・J	良好 にぶい赤褐5YR5/3	口縁部内外面粗いヘラミガキ
8	土師器 高坏	埋土	[2.9]		30	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	坏部外面ヘラケズリ
9	土師器 高坏	埋土	[3.3]		95	A・B・D・F・J	良好 赤褐10R4/4	ホゾ接合痕明瞭
10	土師器 高坏	埋土	[4.6]		30	A・C・D・F・J	良好 赤褐2.5YR4/6	坏部内面に放射暗文
11	土師器 高坏	埋土	[8.3]		60	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	脚部外面光沢のあるナデ

カマドは北東壁の中央やや南寄りに設置されている。燃焼部を壁内に収め、煙道部をもたない造り付けのカマドである。規模は全長0.90m、幅

1.08mである。燃焼部の内壁幅0.56m、奥行き0.90mである。カマドの構造は皿状に掘り窪めたカマド掘方にロームブロック・ローム粒子を含む

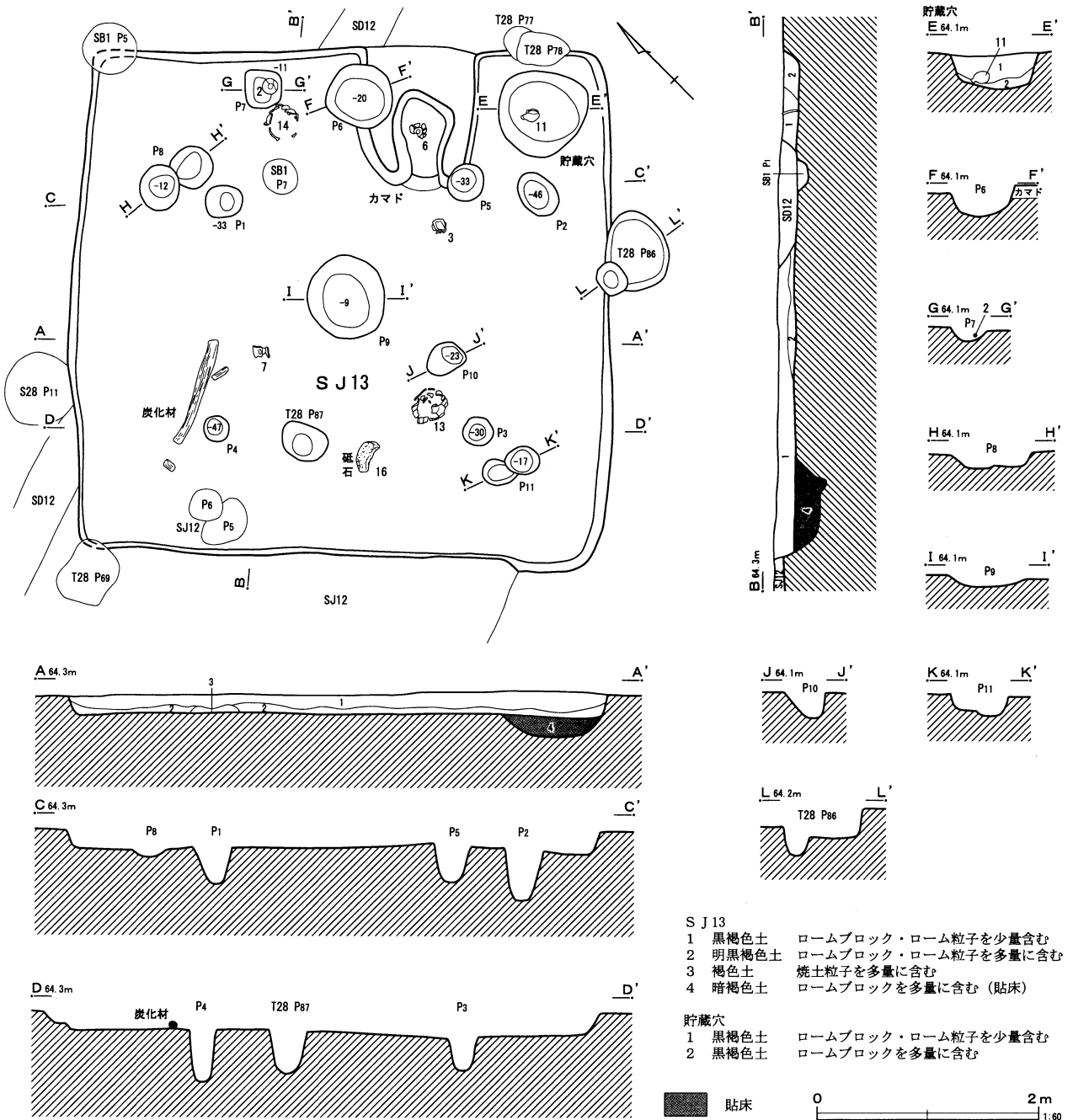
黒褐色土をベースに第4層などのローム土を主体とする暗黄褐色土を用いて袖部を構築している。第5層の上面が火床面に相当し、その中央に暗赤褐色土を置いて、一段高くしたその上に高坏が支脚として置かれていた。天井部の構造については明確でない。

貯蔵穴は東隅部にあり、カマドの右脇に位置する。平面略円形で、規模は長径85cm、短径76cm、

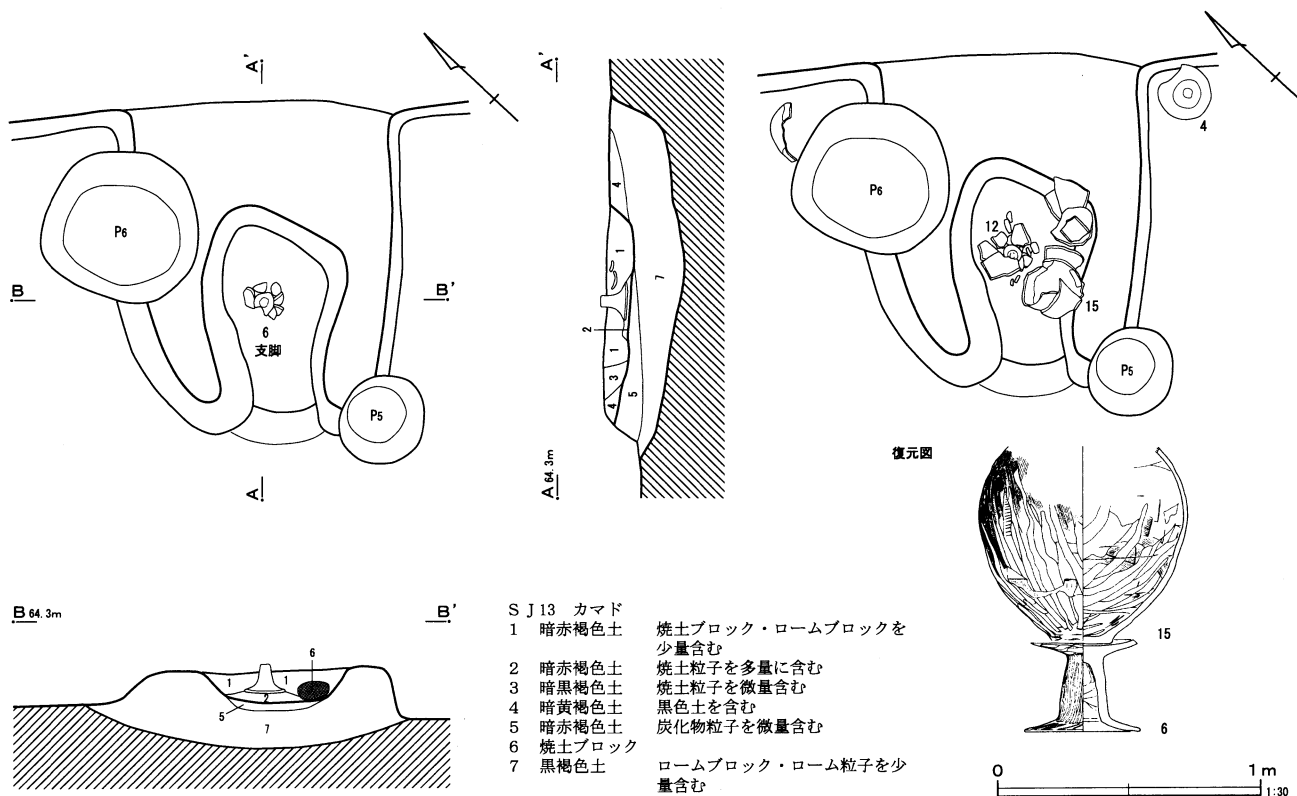
深さ31cmである。

柱穴は11本検出された。P1・P2・P3・P4の4本が主柱穴に該当する。その他のピットも住居跡に伴うものと考えられるが、カマドと重複するP5・P6はグリッドピットとした方が良いであろう。

壁溝は検出されなかった。掘方は南東壁から南西壁に沿って壁際を帯状に深く掘り込み、ローム

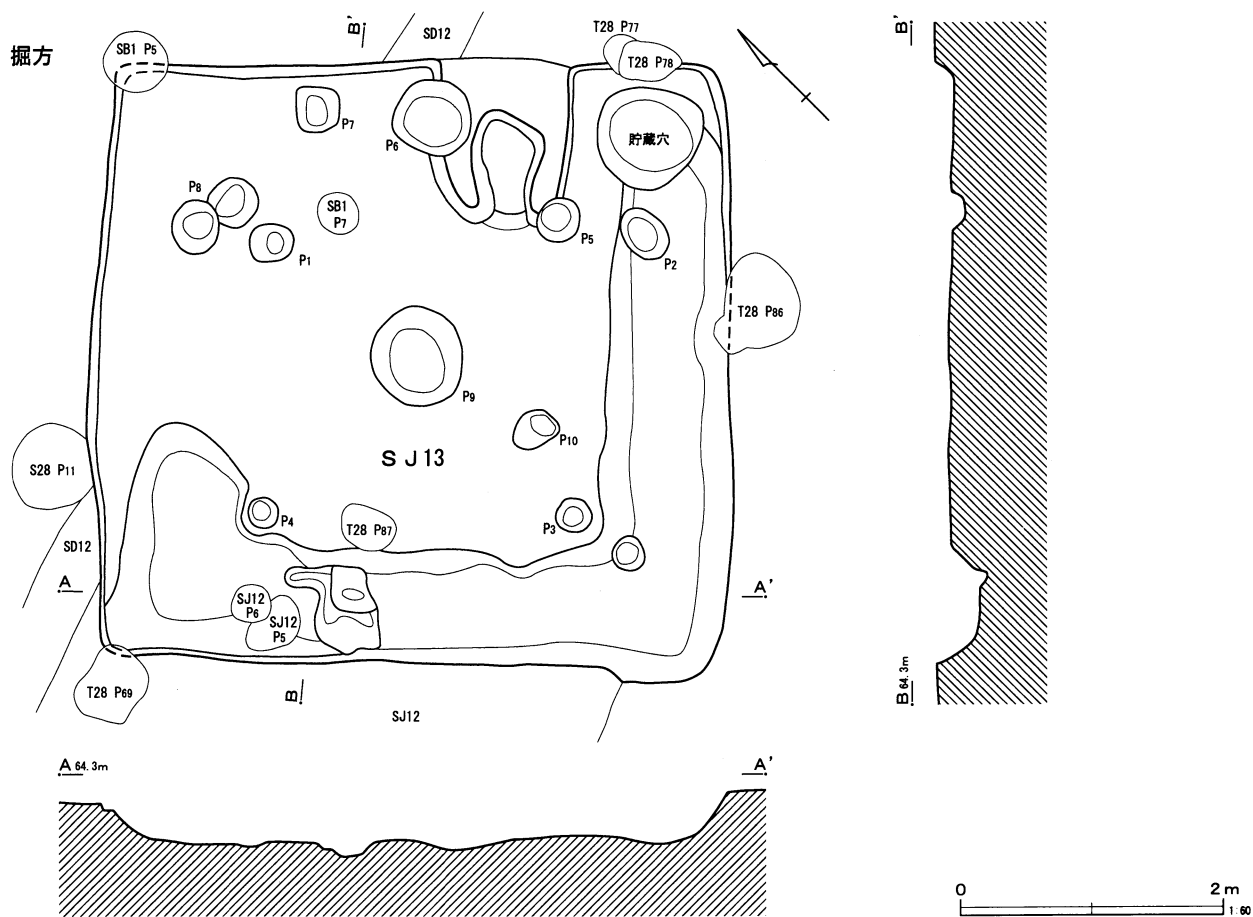


第51図 第13号住居跡

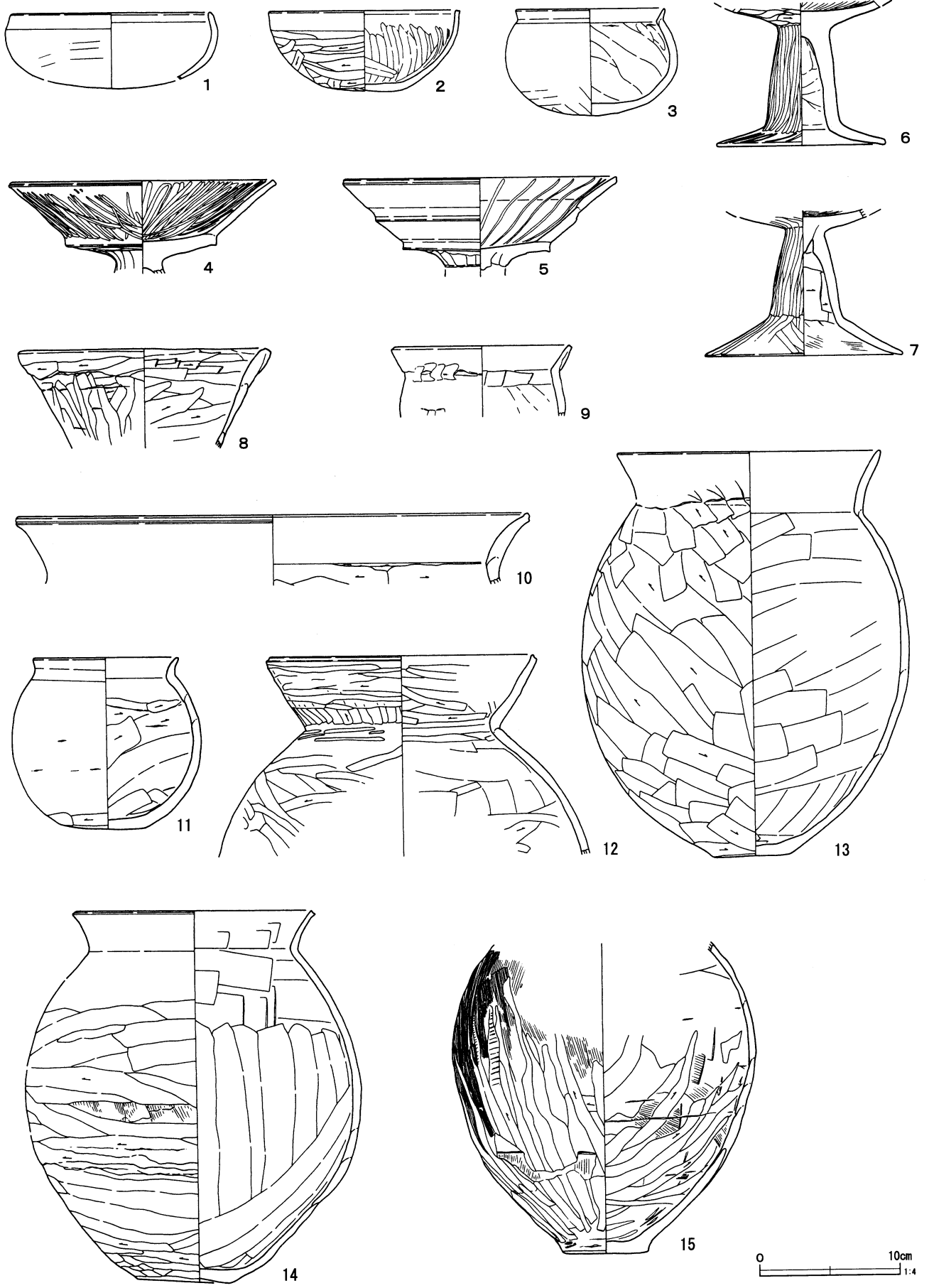


- S J 13 カマド
- | | |
|----------|---------------------|
| 1 暗赤褐色土 | 焼土ブロック・ロームブロックを少量含む |
| 2 暗赤褐色土 | 焼土粒子を多量に含む |
| 3 暗黒褐色土 | 焼土粒子を微量含む |
| 4 暗黄褐色土 | 黒色土を含む |
| 5 暗赤褐色土 | 炭化物粒子を微量含む |
| 6 焼土ブロック | |
| 7 黒褐色土 | ロームブロック・ローム粒子を少量含む |

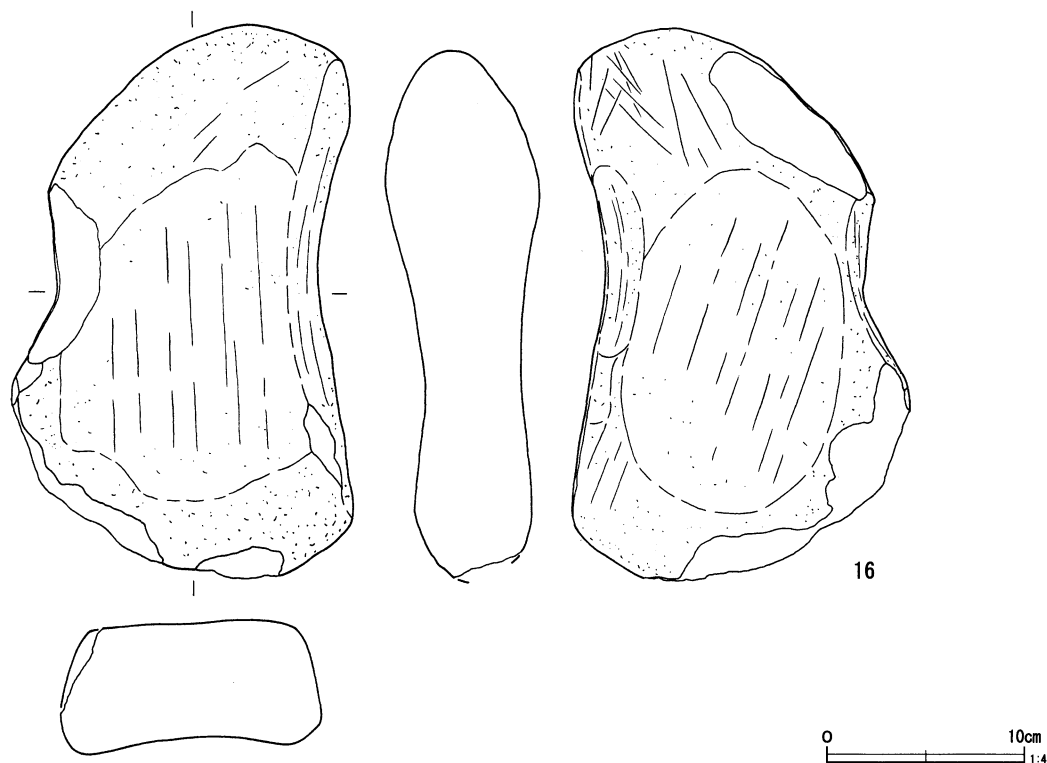
第52図 第13号住居跡カマド



第53図 第13号住居跡掘方



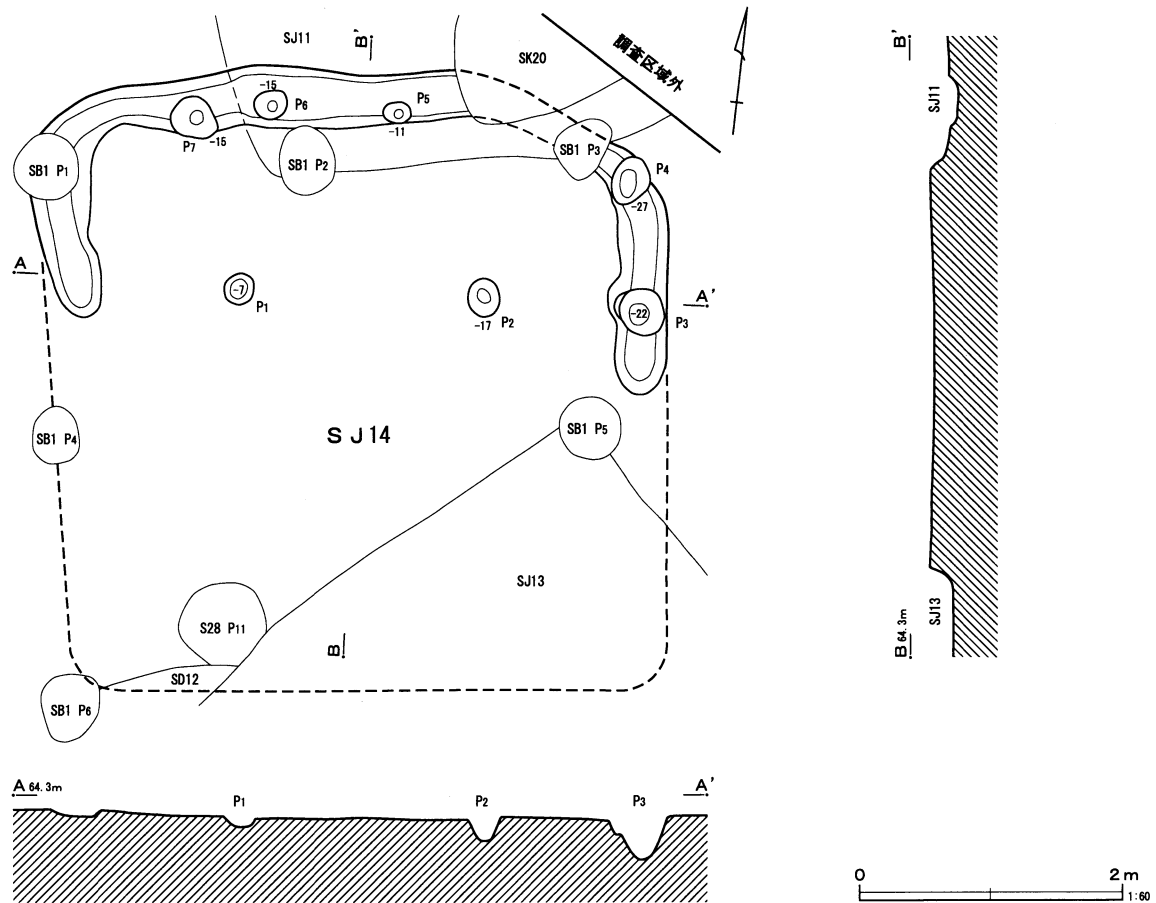
第54图 第13号住居跡出土遺物 (1)



第55図 第13号住居跡出土遺物（2）

第16表 第13号住居跡出土遺物観察表（第54・55図）

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 坏	貯蔵穴 埋土	(14.1) [4.7]		20	A・B・C・F	良好 橙2.5YR6/8	内外面磨耗 調整不明瞭
2	土師器 坏	P 7 底面上 4 cm	13.6 5.8		95	A・B・D・F	良好 にぶい橙5YR6/3	内面光沢のあるヘラミガキ 口唇部 沈線状に窪む
3	土師器 塊	カマド周辺 床面上11cm	10.6 7.6	12.2 2.0	80	A・B・G・J	良好 にぶい橙7.5YR7/3	内外面二次被熱により黒色化
4	土師器 高坏	カマド右袖北東壁際 床面上 4 cm	18.5 [6.6]		90	A・C・D・F	良好 橙2.5YR6/8	坏部内外面ヘラミガキ 精製
5	土師器 高坏	埋土	(29.4) [6.5]		70	A・B・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	有段口縁高坏 坏部内面放射暗文
6	土師器 高坏	カマド燃烧部 使用面直上	[10.3]	12.2	75	A・C・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	裾部外面粗い暗文
7	土師器 高坏	中央部 床面上 4 cm	[10.3]	(14.2)	85	A・B・F・J	良好 橙2.5YR6/6	脚部外面ヘラミガキ 柱状部内面ヘ ラケズリ
8	土師器 小型甕	埋土	(17.4) [7.1]		25	A・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	小型甕か 体部外面ヘラケズリ後粗 いミガキ
9	土師器 鉢	埋土	(12.5) [5.1]		15	A・B・F・J	良好 にぶい赤褐5YR5/4	口縁部折り返しに近い 下端をナデ る
10	土師器 広口壺	埋土	(36.2) [5.1]		20	A・C・D・F・J	良好 橙2.5YR6/8	小片のため口径不定
11	土師器 小型甕	貯蔵穴 底面上 4 cm	10.3 12.1	13.5 6.2	90	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	胴部外面二次被熱あり
12	土師器 壺	カマド燃烧部 使用面直上	(18.8) [14.3]		30	A・D・F・J	良好 橙2.5YR6/6	口縁部内湾気味に立ち上がる 口唇 部沈線状に窪む
13	土師器 甕	中央部南寄り 床面直上	(18.6) 28.8	23.2 5.6	80	A・B・C・F・K	良好 にぶい橙7.5YR6/3	胴部外面スス付着
14	土師器 甕	P 7 際 床面直上	(16.8) 26.5	23.8 6.6	85	A・B・D・F・K	良好 赤褐5YR4/6	胴部下半外面スス付着
15	土師器 甕	カマド燃烧部 使用面直上	[22.1]	(21.7) 6.2	60	A・C・F・K	良好 橙5YR6/6	胴部下半接合部明瞭 胴部外面ヘラ ケズリ一部ノッキング痕あり
16	石製品 砥石	南西部 床面直上	長さ28.1cm 幅17.2cm 厚さ6.8cm 重さ4600g 砂岩 一部欠損 砥面5 上下面浅く窪む S 1					



第56図 第14号住居跡

ブロックを多量に含む暗褐色土で埋戻し、貼床を施していた。P4の北西脇の床面から長さ約1mの炭化材が出土している。多量の焼土などは埋土に含まれておらず、焼失家屋と断定することは難しい状況である。

出土遺物は土師器坏・壺・高坏・小型甕・小型甕・広口壺・壺・甕、砥石がある(第54・55図)。

カマド燃焼部には6の高坏を正位に置いて支脚として使用していた。支脚の周囲からは12の壺の破片や15の甕が出土している。カマド周辺では右袖基部の壁際から4の高坏の坏部が伏せた状態で出土し、カマド前面では床面から少し浮いた状態で3の壺が出土している。東隅の貯蔵穴の底面付近から11の小型甕が出土している。カマド左脇のP7から2の坏が出土しているが、ピットの掘り込みは比較的浅い。またP7の南側に接して14の

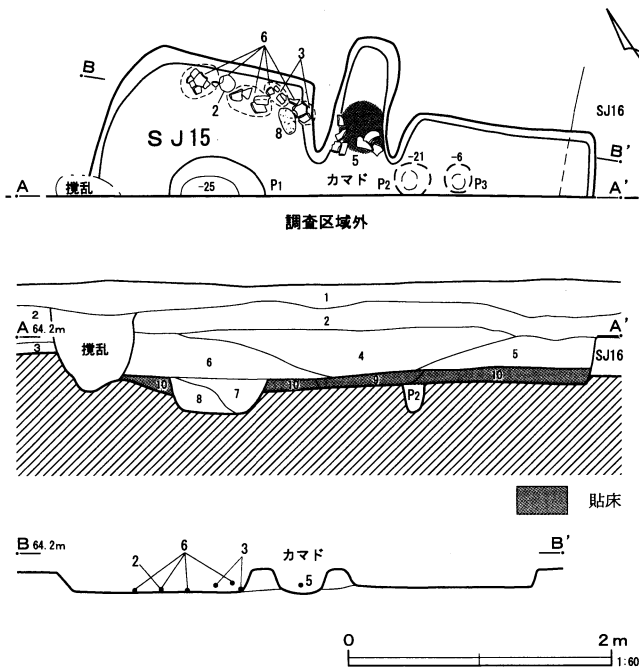
甕が据え置かれた状態で出土している。この他中央部南寄りの床直から16の大型砥石、13の甕が横倒しの状態で出土した。この砥石は半ば床面に埋まった状態であり、原位置を保っていると考えられることから、住居内における作業空間をある程度類推することができる。

時期は夏目遺跡Ⅲ期に位置づけられる。

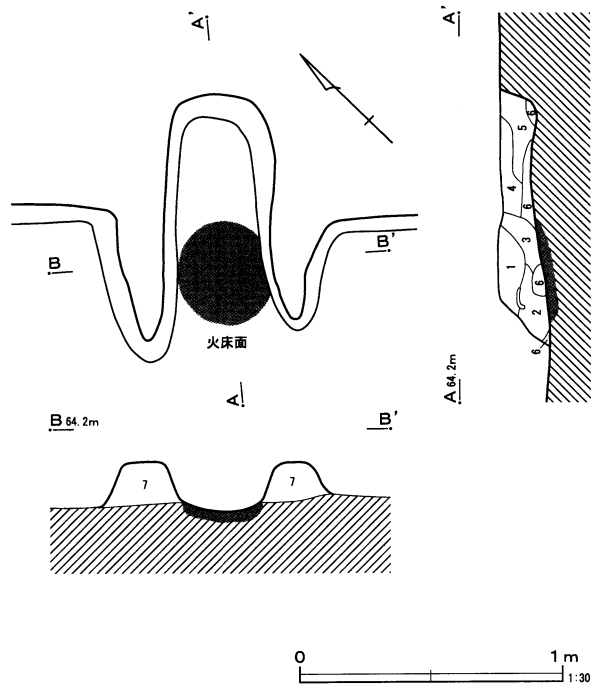
第14号住居跡(第56図)

第14号住居跡は調査区北西部のS-28グリッドに位置する。住居の掘り込みが浅く、床面が露出した状態で検出され、重複する第11・13号住居跡によって床面が壊されていた。また、第1号掘立柱建物跡がほぼ重なるように重複する。

平面形は方形系と考えられる。規模は北壁長4.78m、床面までの深さ0.04mである。主軸方位はN-10°-Wを指す。



- S J 15
- 1 耕作土
 - 2 黒褐色土
 - 3 暗黄褐色土
 - 4 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を多量、炭化物粒子を少量含む
 - 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子を少量含む
 - 6 暗褐色土 焼土粒子を少量含む
- ピット 1
- 7 暗黄褐色土 ロームブロックを多量、焼土粒子を少量含む
 - 8 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む
- 貼床
- 9 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・ロームブロックを多量、焼土ブロックを少量含む
 - 10 黄褐色土 暗褐色土を微量含む



- S J 15 カマド
- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・ロームブロックを多量に含む
 - 2 暗褐色土 焼土粒子を多量に含む
 - 3 黒褐色土 焼土ブロック・ロームブロックを多量に含む
 - 4 暗黄褐色土 焼土粒子・ロームブロックを少量含む
 - 5 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を微量含む
 - 6 黄褐色土 ロームブロックを少量含む
 - 7 黄褐色粘土

第57図 第15号住居跡・カマド

床面は概ね平坦で、特に硬化面などは認められなかった。壁溝は北壁部を中心にコ字形に巡り、幅27~44cm、深さ4cmである。

ピットは7本検出された。P1・2は位置的に見て支柱穴と考えられるが、深さが7~17cmと浅いことからやや問題が残る。他のピットは壁溝の中に掘り込まれている。

出土遺物がまったくないため、時期については明確にし得ない。ただし、遺構の切り合い関係やカマドの痕跡が無いことからすれば、カマド導入期以前に遡る可能性も考えておきたい。

第15号住居跡 (第57図)

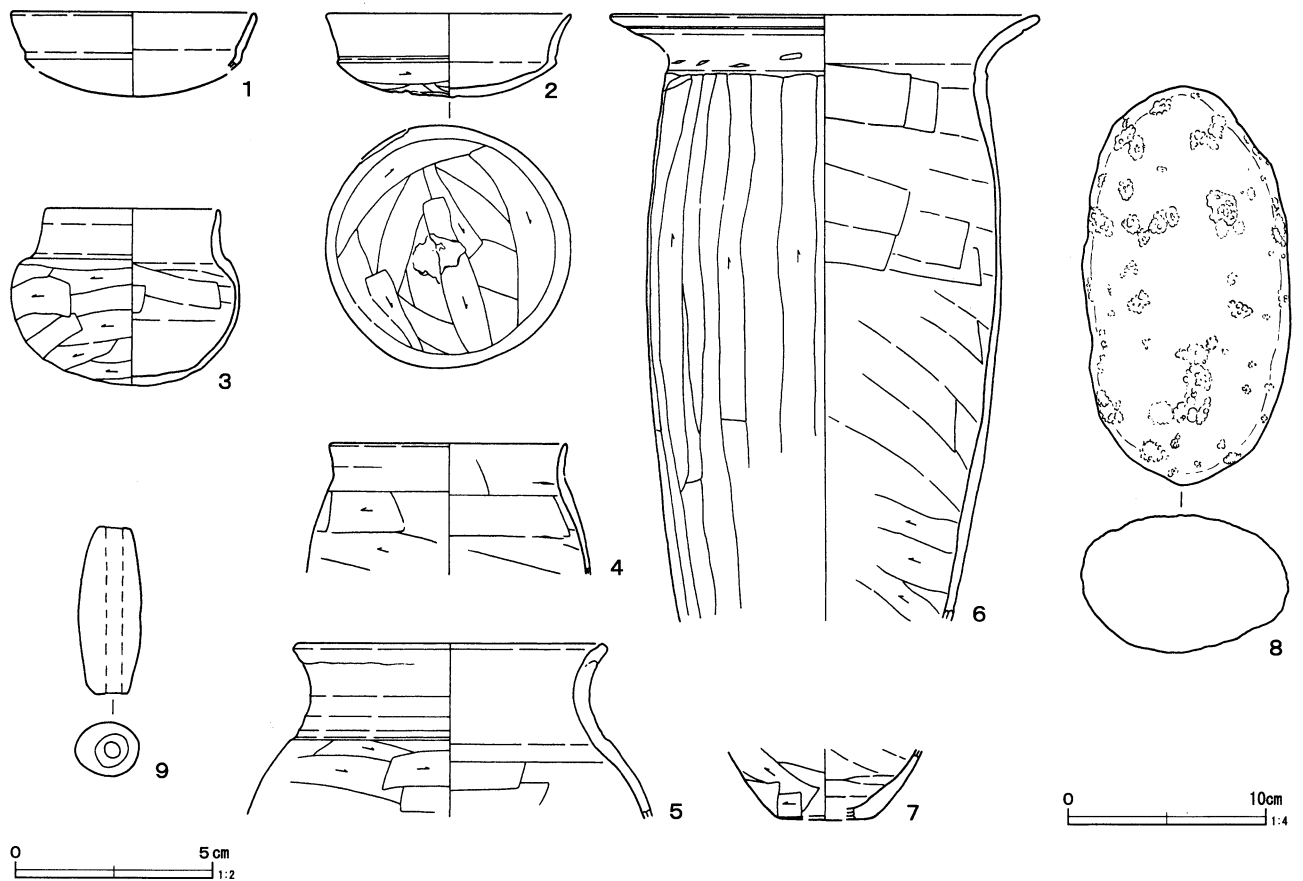
第15号住居跡は調査区北西部のT・U-28グリッドに位置する。住居の大半が調査区外に延びており、カマドをもつ北東壁部を中心に検出され

た。南東隅部は隣接する第16号住居跡を切っている。

平面形は方形系と考えられる。規模は北東壁長3.44m、床面までの深さ0.15mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、カマド手前を中心に硬化面が見られた。床面全体に黄褐色土を基調とする貼床が施され、カマド手前の第9層(貼床)にはカマドから掻き出された焼土や炭化物が多く含まれていた。埋土は概ね自然堆積を示す。

カマドは北東壁のほぼ中央に設置されている。全長1.00m、幅0.90m、燃焼部は壁を0.5mほど切り込んで構築されていた。燃焼部幅は0.36m、袖部は黄褐色粘土を積み上げて構築する。燃焼部には赤色化した明瞭な火床面が残されていた。埋土は第6層が側壁の崩落土、第2・4層は焼土粒子



第58図 第15号住居跡出土遺物

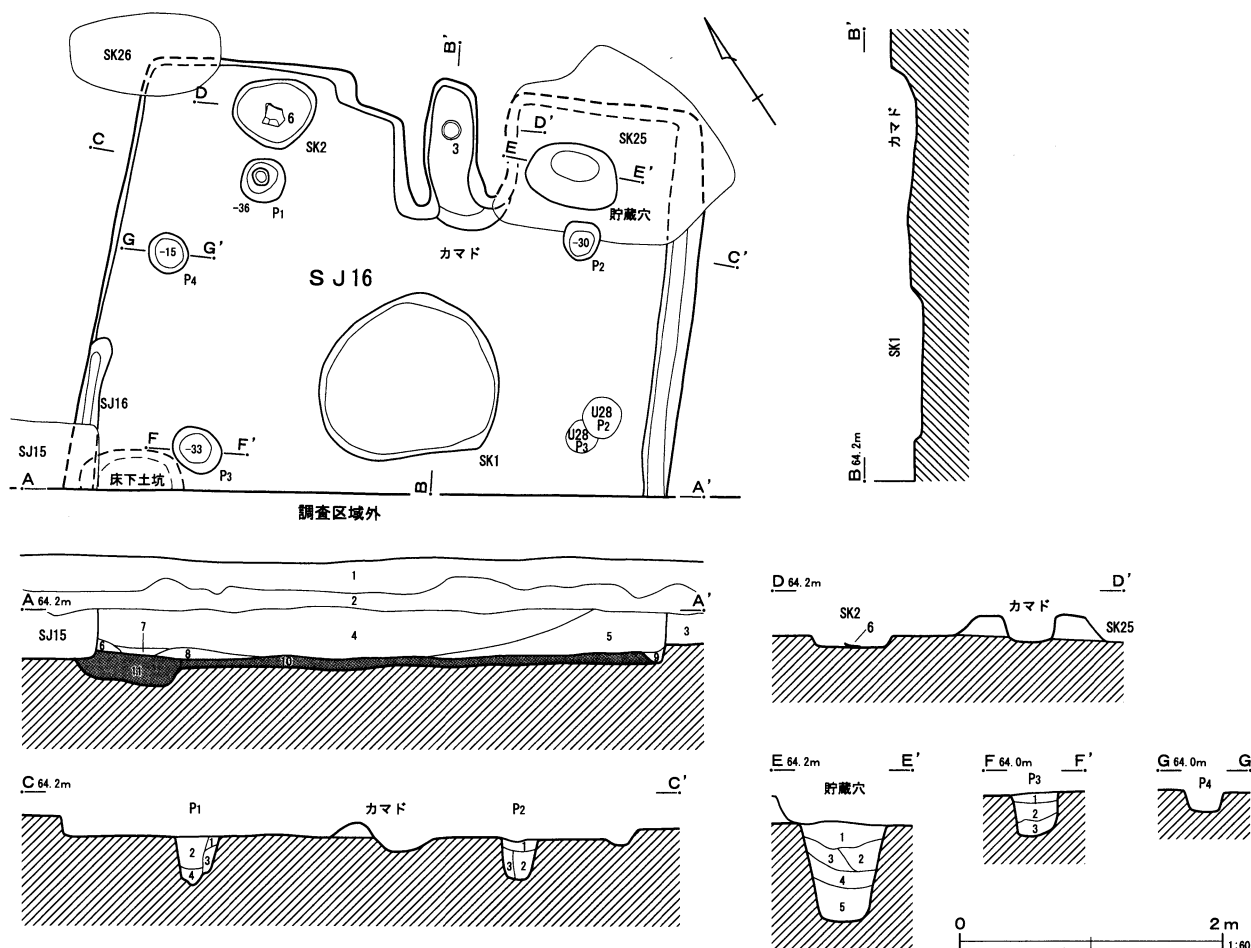
第17表 第15号住居跡出土遺物観察表 (第58図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 坏	埋土	(12.2) [2.9]		10	A・C・D・F・J	普通 橙5YR7/6	小片のため口径不定
2	土師器 坏	北東壁寄り 床面直上	12.3 4.3		95	A・D・F・G・J	良好 にぶい黄橙10YR7/4	底部外面に粘土を貼付した補修痕あり
3	土師器 短頸壺	カマド左袖脇 床面上5cm	8.8 8.9	11.6	80	A・C・D・F・J	普通 橙7.5YR7/6	器壁薄い
4	土師器 鉢	埋土	(11.8) [6.8]	(14.5)	30	A・B・C・F・J	やや不良 にぶい褐7.5YR5/3	内外面が荒れる
5	土師器 甕	カマド燃焼部 使用面上7cm	(15.5) [8.8]		40	A・B・F・J	普通 にぶい黄褐10YR5/3	胎土に角閃石粒子を多く含む
6	土師器 甕	北東壁寄り 床面直上	(21.2) [30.8]	17.8	70	A・B・F・J・K	良好 にぶい橙7.5YR6/4	胴部内外面被熱により器面荒れる
7	土師器 甕	埋土	[3.6]	(5.0)	45	A・B・F・G・J	良好 にぶい褐7.5YR5/4	胎土中に角閃石粒子を多く含む
8	石製品 磨石	カマド左袖脇 床面直上	長さ20.3cm 幅7.5cm 厚さ10.4cm			重さ1062.41g 角閃石安山岩 一部擦痕有り		
9	土製品 土錘	埋土	長さ20.3cm 幅10.4cm 厚さ7.0cm 重さ1062.41g		A・D・J		良好 黒褐7.5YR3/1	両端部を平坦に整形 外面ナデ調整 完存

を多く含むことから内壁の焼け面を含む天井部崩落土に由来するものであろう。

ピットは3本検出された。P1は南西部が調査区外に延びているが、平面楕円形と考えられる。規模は長軸長74cm、深さ25cmで、底面は平坦であ

る。埋土はロームを多量に含む暗黄褐色土が主体で、埋め戻しが考えられる。P2・P3は貼床下から検出されたもので、床面からの深さはP2が21cm、P3が6cmをそれぞれ測る。調査区の制約により支柱穴は確認されなかった。



- S J 16
- 1 耕作土
 - 2 黒褐色土
 - 3 暗黄褐色土
 - 4 暗褐色土
 - 5 暗褐色土
 - 6 暗褐色土
 - 7 赤褐色土
 - 8 暗褐色土
 - 9 暗黄褐色土

貼床

- 10 黄褐色土
- 11 暗黄褐色土

ピット1・2

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 暗黄褐色土



貯蔵穴

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗黄褐色土
- 5 暗黄褐色土

ピット3

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗黄褐色土

第59図 第16号住居跡

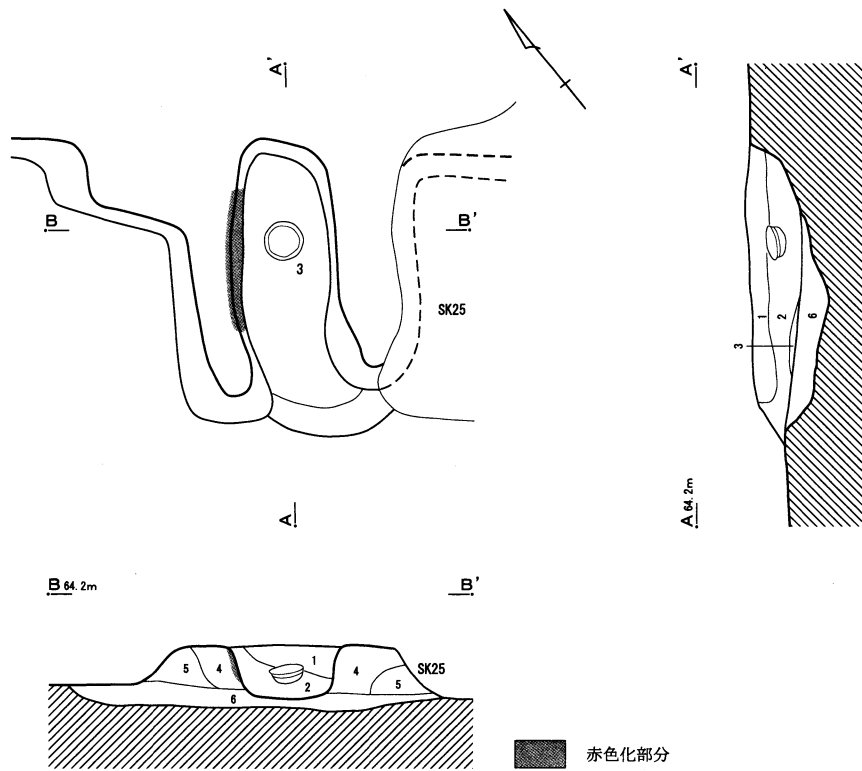
出土遺物は土師器杯・短頸壺・小型甕・長胴甕・丸甕、磨石、土錘がある(第58図)。カマド左脇の壁際にまとまって出土している。2の坏は口縁部を下にした伏せた状態で出土し、その周囲から6の長胴甕と3の短頸壺が出土した。また、カマド左袖に接するように角閃石安山岩の磨石が置かれていた。さらにカマド燃焼部からは5の球胴形の甕が破片の状態で出土している。この他に埋土か

ら土錘が出土した。

時期は口縁部が大きく外反する模倣坏と口縁部に最大径をもつ長胴甕の特徴から7世紀前半の夏目遺跡Ⅷ期に位置づけられる。

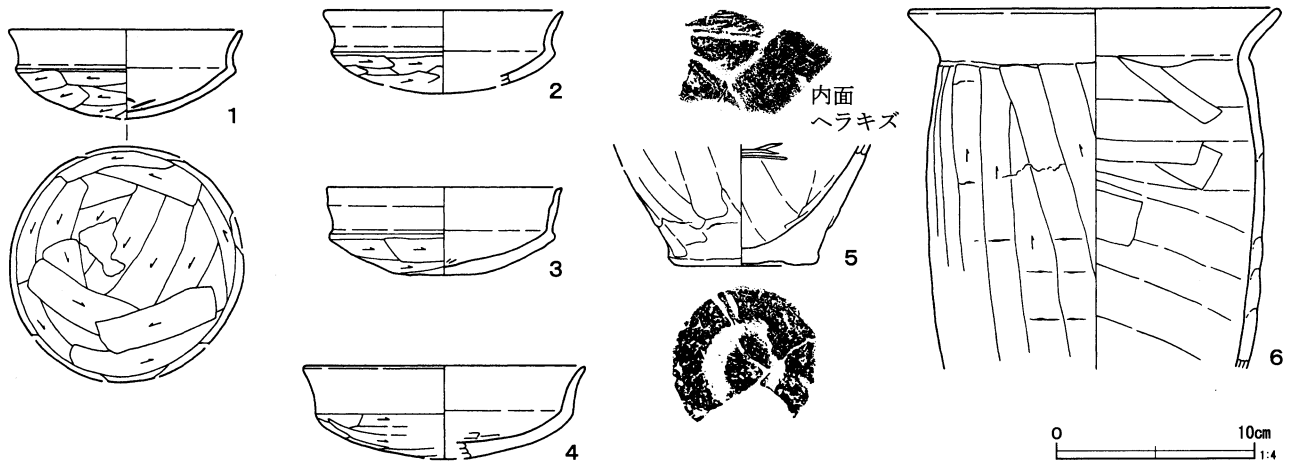
第16号住居跡 (第59・60図)

第16号住居跡は調査区北西部のT・U-28グリッドに位置し、南西側が調査区外に延びる。西側に隣接する第15号住居跡によって北西壁部が



- S J 16 カマド
- 1 黄褐色土 焼土粒子・暗褐色土を多量に含む
 - 2 黒褐色土 焼土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を多量に含む
 - 3 赤褐色土 赤色化したロームブロック
 - 4 黄褐色土 ローム土主体
 - 5 暗褐色土 ローム粒子を少量含む
 - 6 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色土の混合土

第60図 第16号住居跡カマド



第61図 第16号住居跡出土遺物

第18表 第16号住居跡出土遺物観察表 (第61図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 坏	貯蔵穴 埋土	11.8 4.6		90	A・B・C・D・J	普通 橙7.5YR6/6	坏蓋模倣坏 内外面が磨耗する 内 底面ヘラオサエ痕あり
2	土師器 坏	カマド	(12.1) [3.8]		20	A・B・D・F・J	普通 橙5YR6/6	坏蓋模倣坏 内外面磨耗
3	土師器 坏	カマド燃焼部 使用面上13cm	11.9 4.5		100	A・B・C・D・J	普通 橙7.5YR6/8	坏蓋模倣坏 内外面磨耗
4	土師器 坏	埋土	(14.3) [4.7]		15	A・B・D・F・J	良好 橙7.5YR6/6	坏蓋模倣坏 底面ヘラオサエ痕あり 雲母状微粒子の混入目立つ
5	土師器 甕	カマド	[6.2]	7.5	80	A・B・F・J・K	良好 橙7.5YR6/6	外面被熱痕あり 内面にヘラキズあり
6	土師器 甕	S K 2 底面直上	(18.6) [18.3]	(17.1)	20	A・B・D・J・K	普通 にぶい黄橙10YR6/4	胴部外面被熱により器面荒れる

切られる。また東隅部が第25号土坑、北隅部が第26号土坑によって削平されている。

平面形は方形と考えられる。規模は長軸長4.45m、短軸長3.31m、床面までの深さ0.15mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。

床面はほぼ平坦である。埋土は概ね自然堆積を示すが、床面上に堆積する第6～8層にローム粒子・焼土粒子の混入が目立つ。床面はロームブロックを多量に含む黄褐色土で全体に貼床が施され、西隅部付近に床下土坑が検出された。床下土坑は調査区外に延びており詳細は不明であるが、楕円形で、長径0.79m、深さ0.20m。

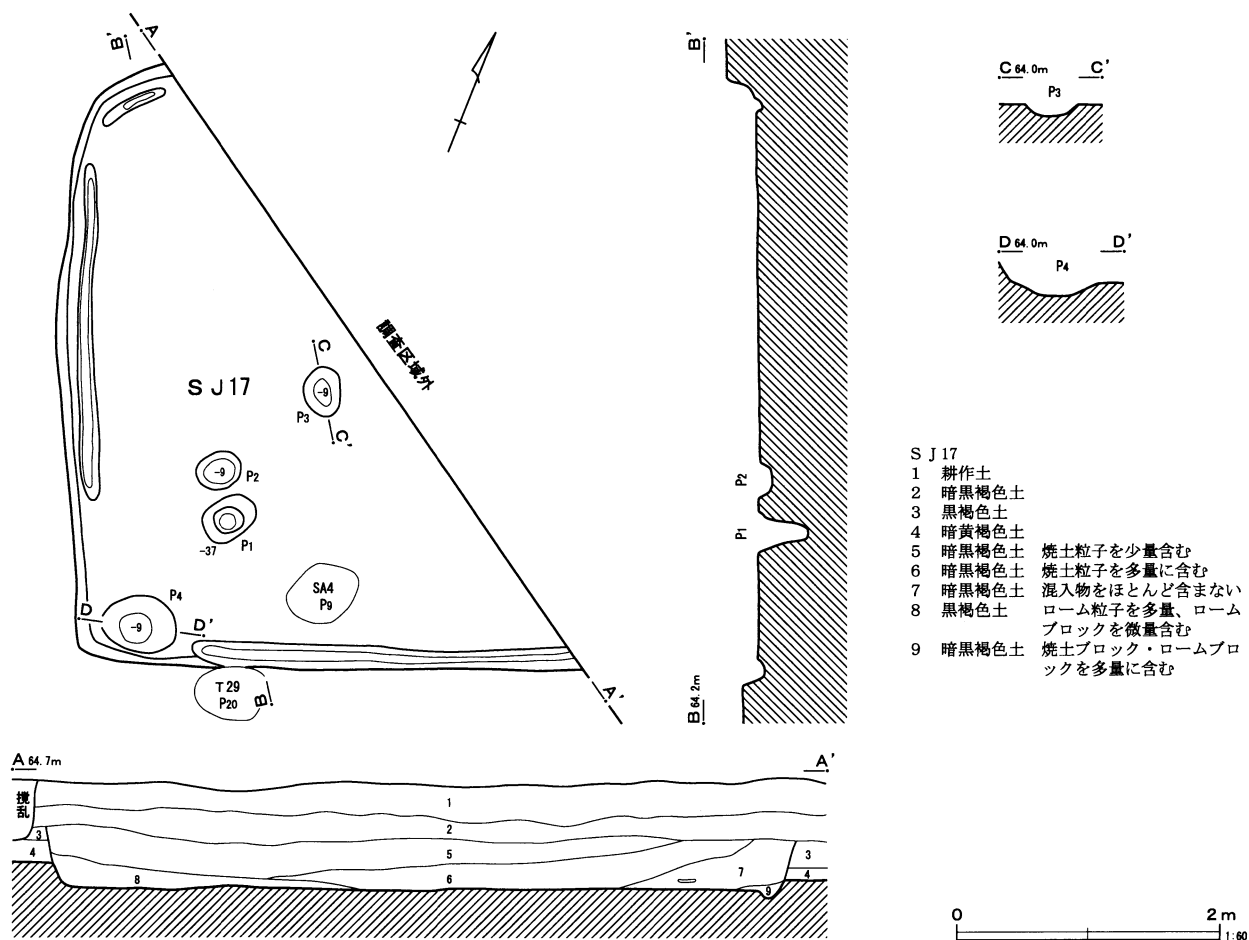
カマドは北東壁のほぼ中央に設置されていた。全長1.03m、幅約0.90m、燃焼部は壁内に収まり、内壁の幅は0.32mである。袖部はローム土を主体とする黄褐色土及び暗褐色土で構築され(第4・5層)、左袖部の内壁面に焼け面が顕著であった。

埋土は第6層が掘方で、その上面に堆積する第3層が火床面、第1層が天井部崩落土である。

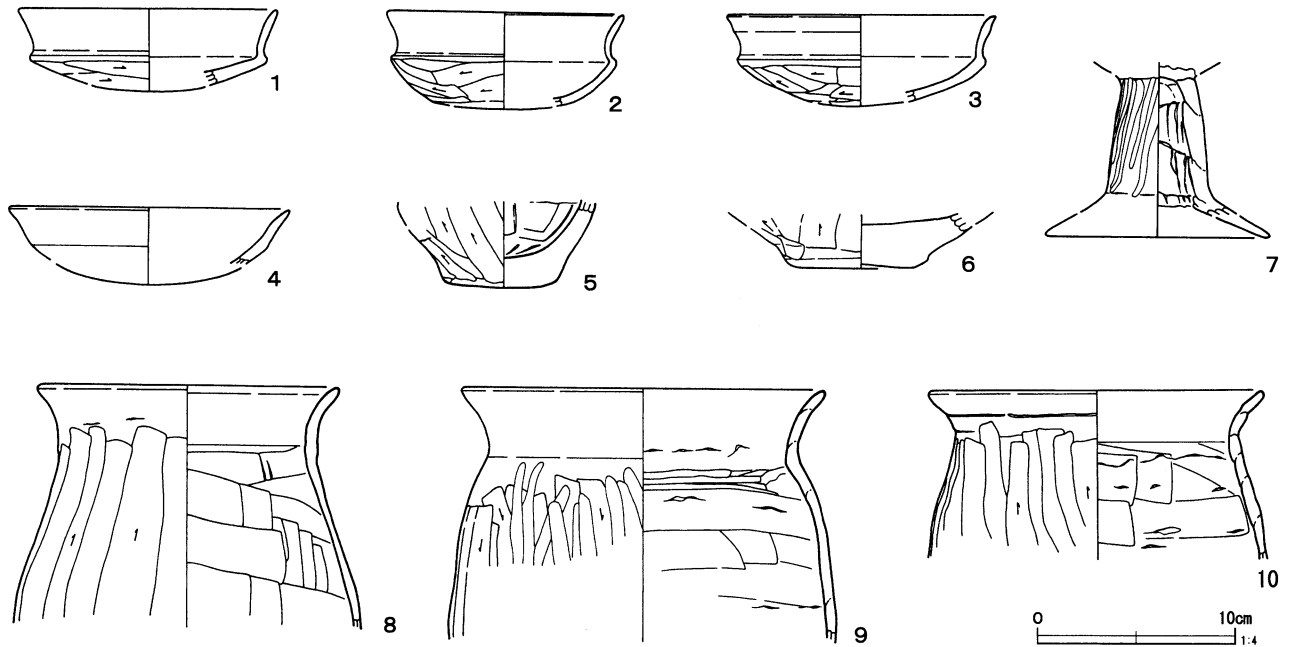
貯蔵穴は東隅部のカマド右脇に位置する。上部を第25号土坑によって削平されているため全容は不明である。横長の楕円形で、規模は長径70cm、短径47cm、深さ85cmである。埋土は下層に暗黄褐色土、上層に暗褐色土が堆積し、ローム粒子の混入が目立つ。

柱穴は4本検出された。P1～P3は規則的に配置されており、支柱穴である。P1・P2は第2層が柱痕、第3・4層は掘方埋土である。これに対しP3は柱抜き取り痕であろう。この他に中央部に第1号土坑と北東壁北寄りに第2号土坑が検出された。第1号土坑は円形で、径1.40×1.28m、深さ0.09m、底面は平坦である。第2号土坑は円形で、径0.64×0.53m、深さ0.09mである。

壁溝はカマドの設置された北東壁を除く、南東



第62図 第17号住居跡



第63図 第17号住居跡出土遺物

第19表 第17号住居跡出土遺物観察表 (第63図)

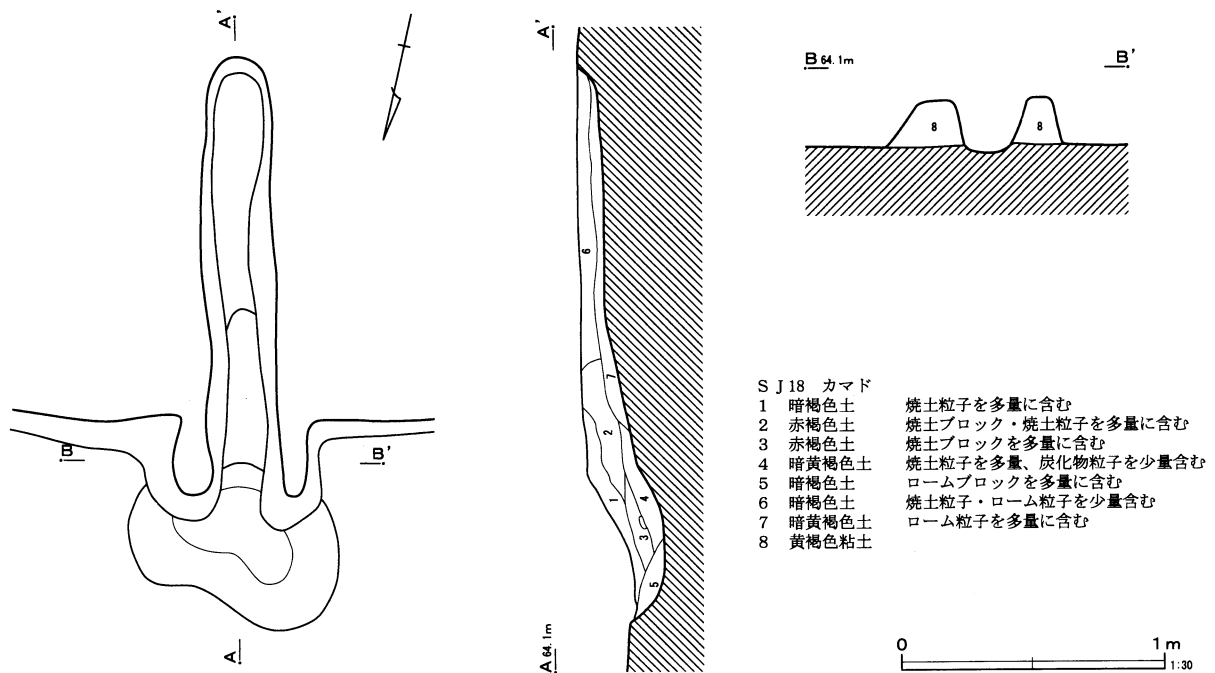
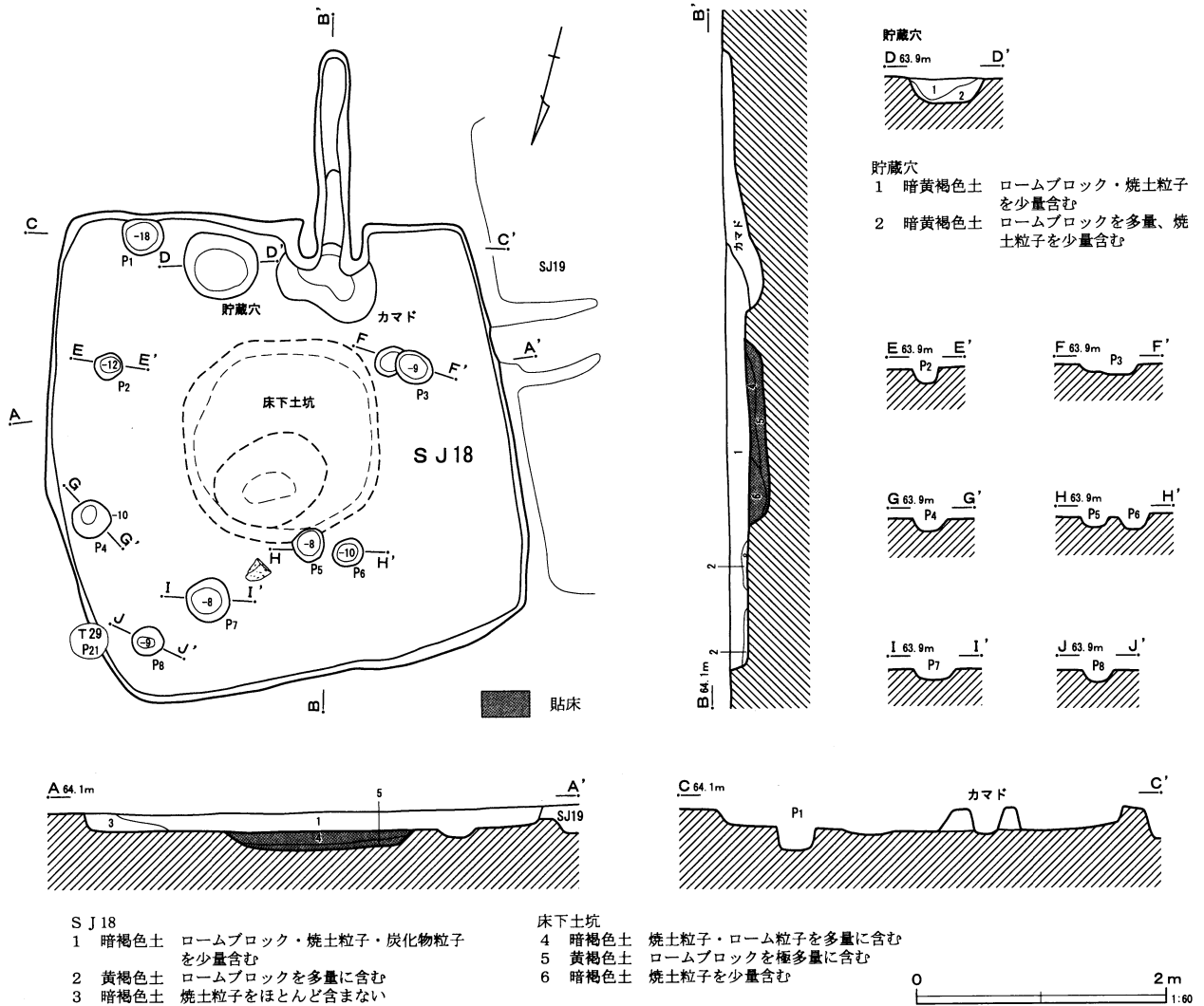
番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 坏	埋土	(12.8) [3.9]		10	A・B・C・F・J	良好 橙7.5YR6/8	坏蓋模倣坏 内外面磨耗
2	土師器 坏	埋土	(12.0) [4.7]		25	A・C・D・G・J	良好 にぶい橙5YR6/4	坏蓋模倣坏 内外面磨耗
3	土師器 坏	埋土	(13.4) 4.6		50	A・B・D・F・J	良好 橙5YR6/6	坏蓋模倣坏 内外面磨耗
4	土師器 坏	埋土	(14.0) [2.8]		15	A・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	口縁部と体部の境に弱い稜 胎土中に雲母状微粒子を多く含む
5	土師器 甕	埋土	[4.4]	5.7	70	A・B・C・G・J	良好 橙2.5YR6/6	胴部上半屈曲気味に歪む
6	土師器 壺	埋土	[2.8]	6.2	90	A・C・F・J	良好 橙5YR6/8	内外面磨耗
7	土師器 高坏	埋土	[7.6]		90	A・D・F・G・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	脚部外面粗いヘラミガキ 内面絞り目
8	土師器 甕	埋土	(15.0) [11.8]		40	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	胎土に砂粒を多く含む
9	土師器 甕	埋土	(18.2) [12.9]		40	A・B・D・F・J	良好 赤褐5YR4/6	胴部外面縦位のヘラケズリ後、幅広のミガキ
10	土師器 甕	埋土	(16.8) 8.6		20	A・C・F・G・J	良好 浅黄橙10YR8/3	内外面磨耗

壁と北西壁の一部を巡り、幅15~24cm、深さ5cmである。

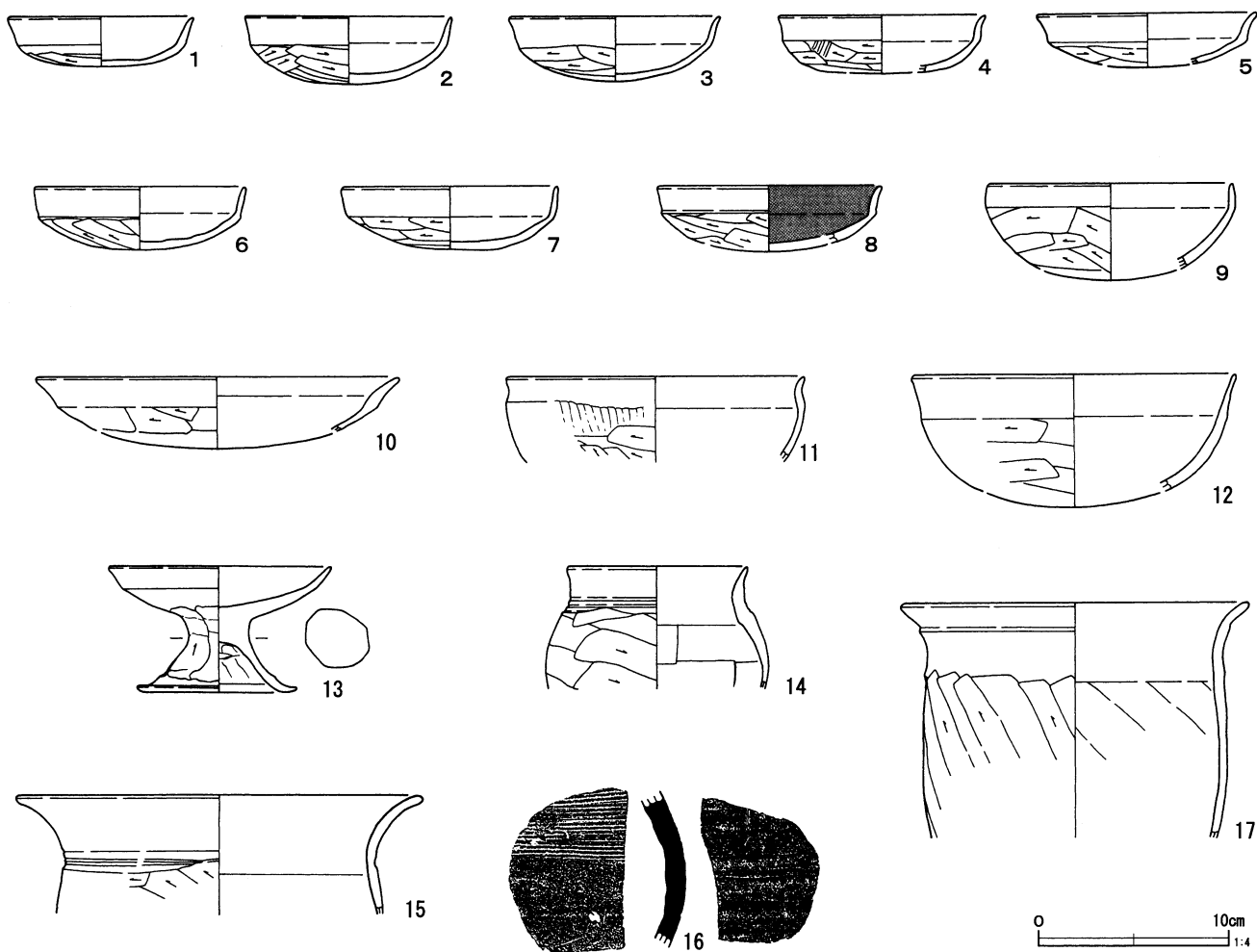
出土遺物は土師器坏・甕がある(第63図)。このうちカマド燃焼部から出土した3の坏は、口縁部を上に向けた状態で使用面に置かれており、明確な被熱痕がないことから、支脚に転用されたものではなく、住居廃絶時におけるカマド祭祀に関わるものと想定される。他にカマド左脇の第2号土

坑の底面上に6の甕上半部が置かれていた。おそらく置台として使用されたのであろう。5の甕の胴部内面に残されたヘラキズは刀子状の刃物による傷である。

時期は口径12cm前後の口縁部の外反する模倣坏が主体であり、6の長胴甕も胴部に張りを残すことから6世紀前葉から中葉を中心とする夏目遺跡VI期に位置づけられる。



第64図 第18号住居跡・カマド



第65図 第18号住居跡出土遺物

第17号住居跡 (第62図)

第17号住居跡は調査区北西部のT-29グリッドに位置する。住居跡の北東部の約2分の1が調査区外に延びるため全容は不明である。第4号柱穴列が重複する。

平面形は方形系と考えられる。規模は長軸長4.56m、短軸長3.56m、床面までの深さ0.19mである。主軸方位はN-25°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、顕著な硬化面などはなかった。埋土は基本的には自然堆積であるが、第6・9層に焼土ブロック・粒子の混入が目立ち、北東壁にカマドが設置されていることを示している。

柱穴は4本検出された。P1は深さ37cm、位置的にも支柱穴としてよいが、対応する位置に柱穴は確認されなかった。南隅部のP4は貯蔵穴にな

る可能性もあるが、深さ9cmで、一般的な貯蔵穴と比較するとやや浅すぎる。

壁溝は途切れているが壁際を巡り、幅9~19cm、深さ6cm程度である。

出土遺物は土師器坏・高坏・壺・甕がある(第63図)。いずれも埋土からの出土で、床直のものはいなかった。1~3の模倣坏は第16号住居跡出土のものと類似しており、近接した時期であることを示唆する。なお6の壺底部、7の高坏脚部は混入品である。時期は6世紀前葉から中葉を中心とする夏目遺跡VI期に位置づけられる。

第18号住居跡 (第64図)

第18号住居跡は調査区北西部のT-29グリッドに位置する。西側に近接する第19号住居跡のカマド煙道部を切っている。

第20表 第18号住居跡出土遺物観察表 (第65図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 坏	埋土	(9.8) 2.6		30	A・B・F・J	良好 橙7.5YR6/6	内外面磨耗
2	土師器 坏	埋土	(10.8) 3.6		35	A・B・D・F・J	良好 橙5YR6/6	内外面磨耗
3	土師器 坏	埋土	11.0 3.5		75	A・B・F・G・J	良好 橙5YR6/6	内外面磨耗
4	土師器 坏	埋土	(10.8) [3.0]		20	A・B・F・G・J	良好 にぶい橙5YR6/4	体部外面一部ノッキングあり
5	土師器 坏	床下土坑 埋土	(11.5) [2.7]		20	A・D・F・G・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	内外面磨耗
6	土師器 坏	埋土	(11.0) [3.3]		50	A・B・C・D・F	良好 橙5YR6/6	内底面凹凸あり
7	土師器 坏	埋土	11.3 3.4		85	A・B・D・F・G	良好 にぶい橙5YR6/4	内外面磨耗
8	土師器 坏	埋土	(11.7) [3.0]		15	A・D・F・J	良好 橙5YR6/6	内面黒色処理 炭素吸着
9	土師器 坏	埋土	(12.8) [4.5]		15	A・D・F・J	良好 にぶい橙2.5YR6/4	深身のタイプ
10	土師器 皿	埋土	(19.0) [2.9]		10	A・D・E・F	良好 にぶい橙7.5YR6/4	体部外面ヘラケズリ
11	土師器 埴	埋土	(15.6) [4.5]		10	A・D・F・G・J	良好 にぶい橙5YR6/4	体部外面ノッキング
12	土師器 埴	埋土	(17.0) [6.2]		20	A・B・D・G	良好 にぶい赤褐5YR5/4	内面平滑
13	土師器 高坏	埋土	11.6 6.7	8.4	90	A・B・F・G・J	良好 橙2.5YR6/6	脚部ヘラケズリにより多角形に削り出す
14	土師器 短頸壺	埋土	(9.4) [6.4]	11.7	40	A・B・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	内外面磨耗
15	土師器 甕	カマド	(21.1) [6.3]		15	A・B・C・F・J	良好 にぶい橙2.5YR6/4	内外面磨耗
16	須恵器 壺	床下土坑 埋土			破片	A・G・J・K	良好 灰白 N7/	外面にカキ目を施す 提瓶の可能性あり
17	土師器 甕	埋土	(18.0) [12.4]	(16.0)	25	A・C・D・F・G	良好 橙5YR6/6	胎土に角閃石粒子を多く含む

平面形はやや歪んだ方形である。規模は長軸長3.94m、短軸長3.71m、床面までの深さ0.14mである。主軸方位はN-157-Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は暗褐色土を主体とし、床面上にはロームブロックを多量に含む黄褐色土が部分的に堆積する。

カマドは南壁中央やや西寄りに設置されていた。皿状に窪む焚口部から燃焼部との明確な区分をもたずに壁外に長く煙道部が延びる。全長1.80m、幅0.68m、燃焼部内壁幅0.16mである。黄褐色粘土を積み上げて袖部を構築している。第1・2・6層が天井部内壁面の崩落土に由来するもので、第3層上面が火床面、第4・5層が焚口部底面の掘方であろう。

貯蔵穴は南壁中央やや東寄りカマド左脇に位置する。平面楕円形で、規模は長径60cm、短径50cm、深さ19cmである。埋土はロームブロックを多量に

含む暗黄褐色土が主体である。

柱穴は8本検出された。いずれも深度が10cm程度しかなく、支柱穴とすることは難しい。

床面中央部に床下土坑が確認された。平面円形で二段に掘り込まれている。規模は長径1.61m、短径1.54m、深さ0.40mである。暗褐色土と黄褐色土を主体に埋め戻されている。

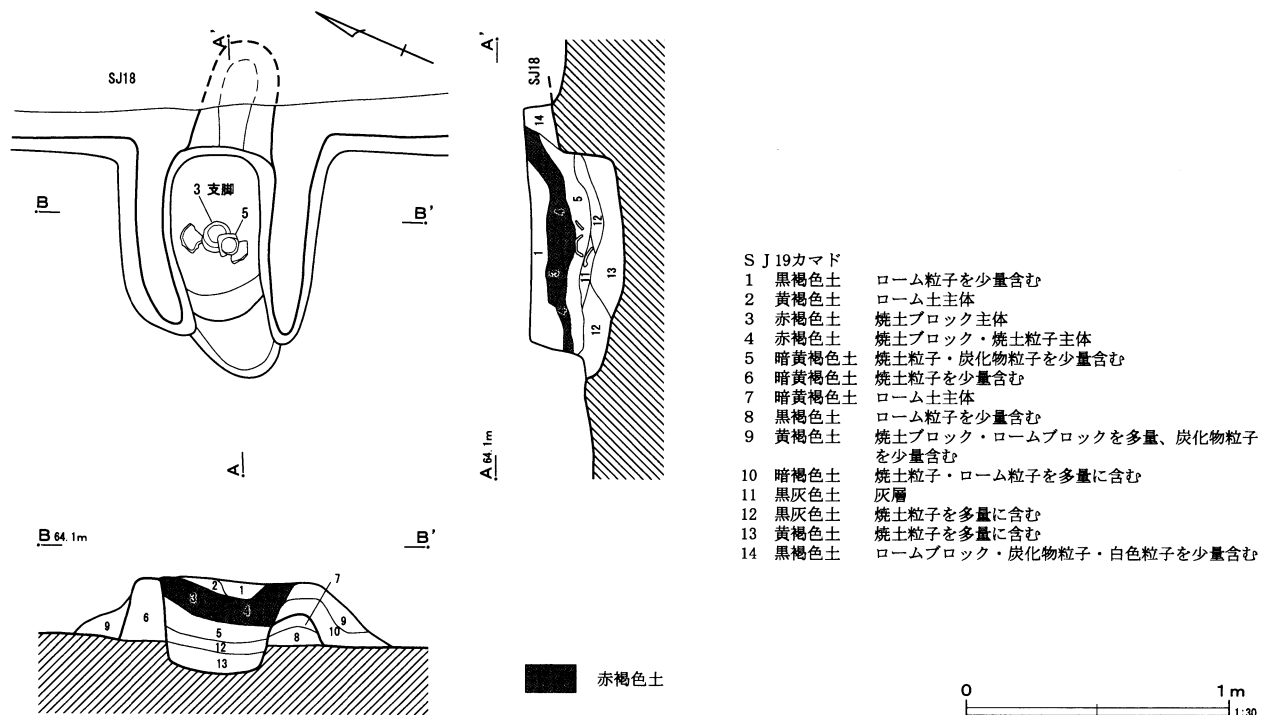
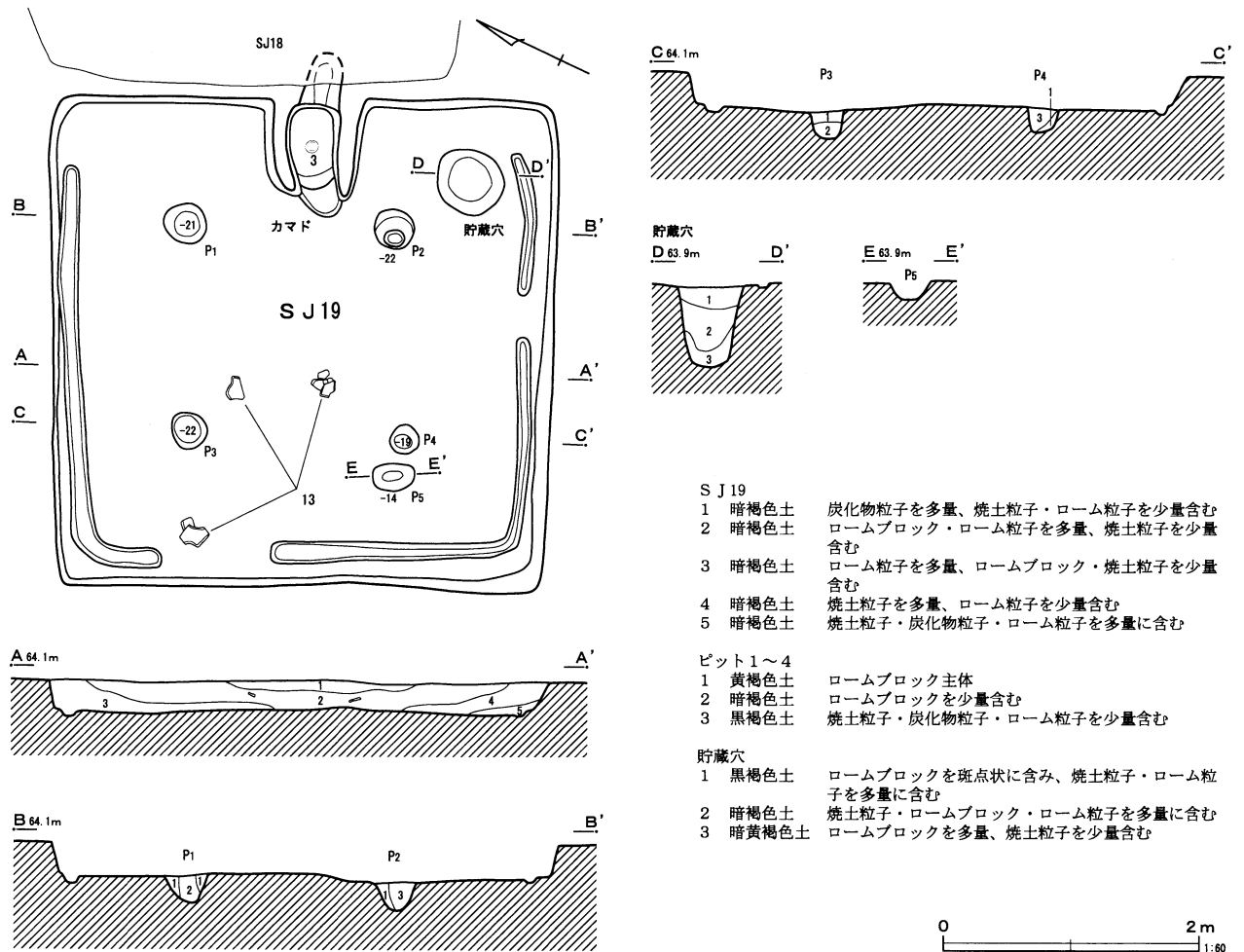
出土遺物は土師器坏・皿・埴・高坏・短頸壺・甕、須恵器壺がある (第65図)。

時期は口径11cm台の模倣坏を主体とし、大振りの皿、深身の埴、短脚高坏を伴うことから7世紀第2四半期の夏目遺跡IX期に位置づけられる。

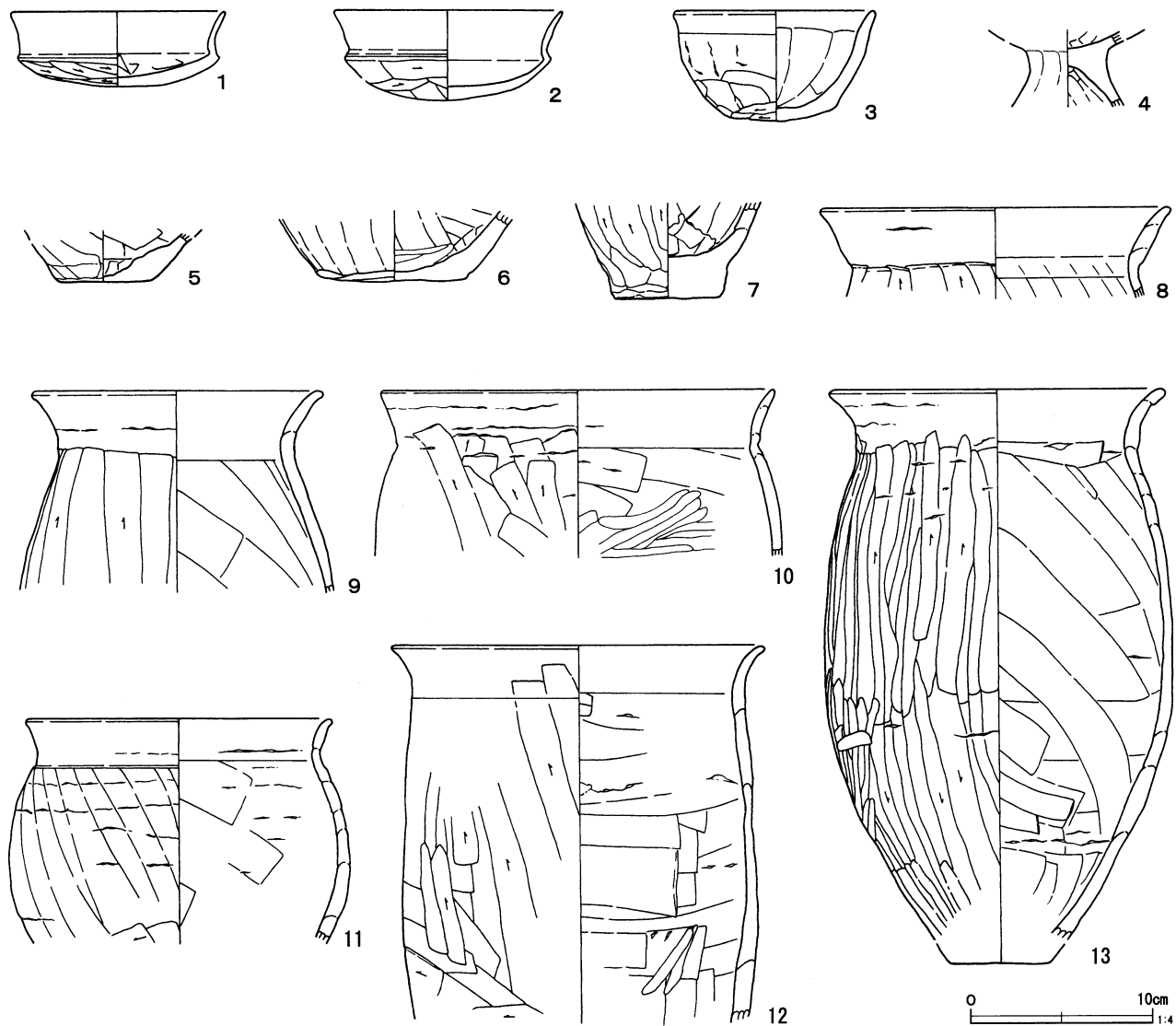
第19号住居跡 (第66図)

第19号住居跡は調査区北西部のT・U-29グリッドに位置する。カマドの煙道部が第18号住居跡によって壊されている。

平面形は比較的形の整った方形である。規模は



第66図 第19号住居跡・カマド



第67図 第19号住居跡出土遺物

長軸長3.98m、短軸長3.81m、確認面から床面までの深さ0.23mである。主軸方位はN-64°-Eを指す。

床面は緩やかな凹凸がある。埋土は焼土粒子や炭化物粒子の混入が多いが、基本的には自然堆積としてよいであろう。

カマドは東壁ほぼ中央に設置されていた。燃焼部を壁内に収め、煙道部との境に明瞭な段差を有するものである。残存長0.91m、幅0.80m、燃焼部内壁幅0.28mである。袖部はローム土を主体とする暗黄褐色土を積み上げて構築されている。第1～4層が天井部崩落土で、特に第3・4層は被

熱により赤色化が顕著であった。第11層が灰層、第12層の上面が火床面、第13層が掘方埋土に相当する。

貯蔵穴は南東隅部に位置する。平面円形で、規模は長径53cm、短径48cm、深さ62cmである。

柱穴は5本検出された。P1～4が主柱穴で、規則的に配列される。深さは20cm前後で、土層断面の観察によれば第2・3層が柱抜き取り痕、第1層が掘方埋土である。

壁溝はカマドのある東壁を除く各壁の壁際の内側を断続的に巡る。幅8～15cm、深さ5cmほどである。

第21表 第19号住居跡出土遺物観察表 (第67図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	埋土	11.6 4.2		95	A・B・C・F・J	普通 にぶい赤橙10YR6/4	体部外面ハゼ
2	土師器 坏	埋土	(12.4) [4.9]		20	A・B・F・G・J	良好 にぶい橙5YR6/4	内外面磨耗
3	土師器 塊	カマド 燃烧部 底面上13cm	10.8 6.1		100	A・B・C・F・G	良好 赤褐2.5YR4/6	体部下端ヘラケズリ
4	土師器 台付甕	埋土	[4.2]		80	A・B・D・F・J	良好 赤褐5YR4/6	脚台部内面指ナデ 内外面磨耗
5	土師器 甕	カマド 燃烧部 底面上17cm	[2.9]	5.1	80	A・B・C・F・K	良好 明黄褐10YR6/6	内底面丸く窪む
6	土師器 甕	埋土	[3.9]	8.2	75	A・B・F・G・K	良好 橙7.5YR7/6	内外面磨耗 内面ヘラオサエ
7	土師器 甕	カマド	[5.3]	5.7	60	A・B・C・F・G	良好 にぶい橙2.5YR6/4	突出底部
8	土師器 甕	埋土	(19.0) [5.1]		25	A・B・C・G・J	良好 にぶい赤褐5YR5/4	内外面磨耗顕著
9	土師器 小型甕	埋土	(15.6) [11.1]	(17.2)	55	A・B・C・F・K	不良 橙5YR6/6	胴部外面スス付着
10	土師器 甕か 甗	カマド	(21.6) [9.2]	(22.5)	20	A・B・D・F・K	良好 赤褐5YR4/6	胴部内面横位のヘラミガキ
11	土師器 小型甕	埋土	(16.6) [12.4]	(18.7)	25	A・B・C・D・F	不良 赤褐10YR5/4	胴部外面スス付着
12	土師器 甕	埋土	(20.0) [25.8]	(19.4)	20	A・B・F・J・K	良好 橙5YR6/6	胴部内外面に黒色付着物あり
13	土師器 甕	中央部 床面上5cm	(18.0) [30.3]	19.1	45	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部上半外面に粘土紐痕の凹凸を残す

出土遺物は土師器坏・塊・台付甕・小型甕・甕がある(第67図)。13の長胴甕が中央部から西壁部にかけて広く分布する。またカマド燃烧部の中央に3の塊を伏せ置き状態で支脚に転用し、それに被さるように5の甕底部片が出土した。

時期は夏目遺跡VI期に位置づけられる。

第20号住居跡 (第68図)

第20号住居跡は調査区北西部のU-29グリッドに位置する。南西部の大半が調査区外に位置し、カマドを設置する東壁を中心に検出された。

平面形は方形系と考えられる。規模は東壁長2.75m、北壁長2.27mを残存し、床面までの深さ0.20mである。主軸方位はN-73°-Eを指す。

床面は平坦で、特に硬化面はなかった。埋土はカマド周辺では焼土粒子や炭化物粒子の混入が増している。概ね自然堆積を示す。

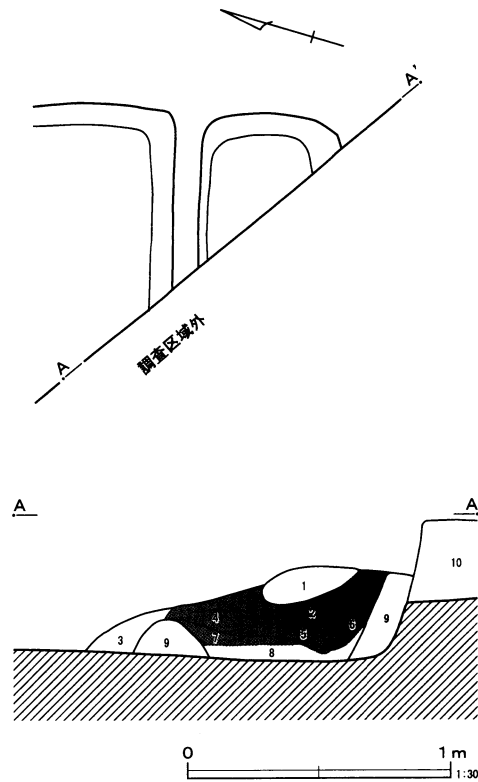
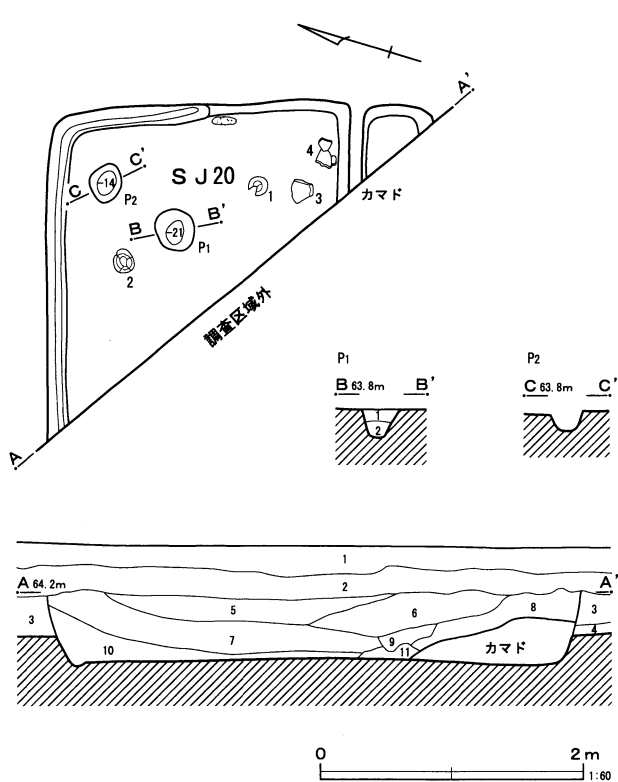
カマドは東壁に設置されていた。焚口部分が調査区外にかかるため全容は不明である。規模は長さ0.76m、幅0.72mを残存し、燃烧部が壁外に延びないタイプである。袖部はローム土を主体とす

る暗黄褐色土(第9層)で構築されていた。第1・2~7層は天井部で、第1層を除いた他の層は被熱による赤色化が顕著であった。第8層は灰層である。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴は2本検出された。P1は深さ21cmで、やや浅いが4本主柱穴の一つであろう。P2は深さ14cmで、埋土から土製小玉が出土した。壁溝はカマドの周辺を除いて全周し、幅16cm、深さ4cm。

出土遺物は土師器坏・高坏・甕、土製小玉、滑石製白玉がある(第69図)。遺物はカマド左脇にまとまっていた。左袖部に接するように4の甕底部が、さらにその左脇から3の甕と完形の坏が床面から少し浮いた状態で並んでいた。この他にP1周辺の床面から2の高坏が潰れた状態で出土した。5の土製小玉はP2の埋土、6・7の滑石製白玉は埋土から出土した。なお、実測図示していないが北壁際から棒状礫1点が出土した。

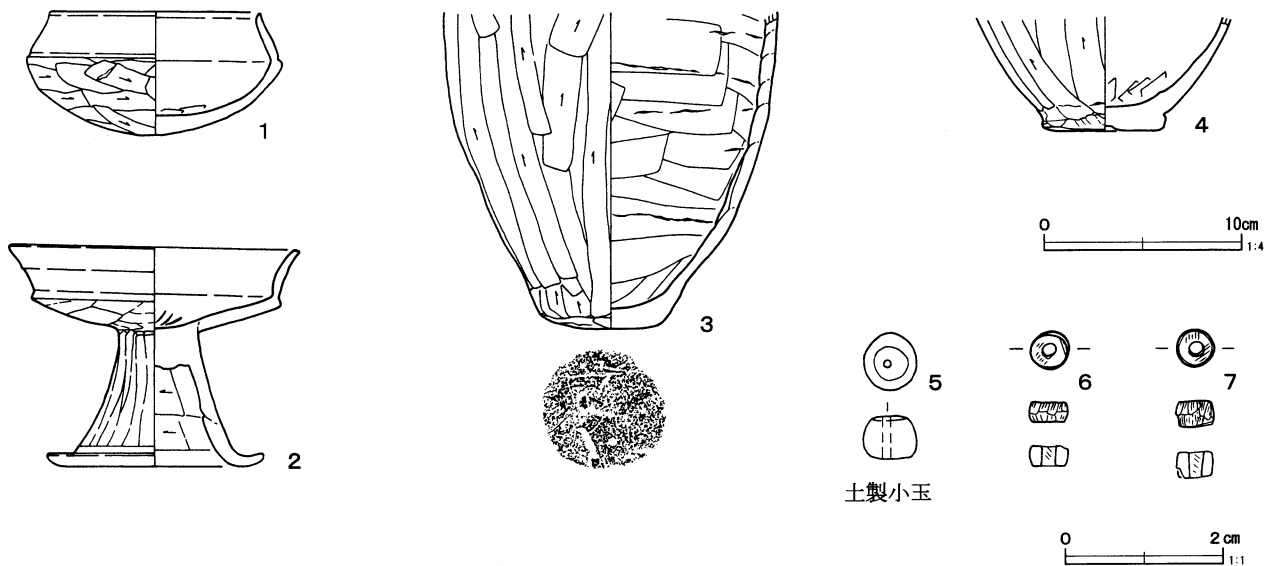
時期は1の坏身模倣の坏や大型化した模倣坏を乗せた高坏などの特徴から6世紀前半の夏目遺跡VI期に位置づけられる。



- S J 20
- 1 耕作土
 - 2 黒褐色土
 - 3 暗褐色土
 - 4 黄褐色土
 - 5 暗褐色土 炭化物粒子を少量含む
 - 6 暗黄褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む
 - 7 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子を斑点状に含み、炭化物粒子を微量含む
 - 8 暗黄褐色土 ロームブロック・焼土粒子を多量に含む
 - 9 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子を微量含む
 - 10 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子を少量含む
 - 11 黄褐色土 ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を少量含む
- P 1
- 1 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む
 - 2 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む

- S J 20 カマド
- 1 黄褐色土 ローム土を主体とし、焼土粒子を斑点状に含む
 - 2 赤褐色土 焼土ブロック・ロームブロックを多量に含む
 - 3 黄褐色土 焼土ブロック・ロームブロックを少量含む
 - 4 赤褐色土 焼土粒子を多量、ローム粒子を少量含む
 - 5 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む
 - 6 赤褐色土 焼土ブロックを少量含む
 - 7 赤黄褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量含む
 - 9 暗黄褐色土 ローム土主体
 - 8 暗灰褐色土 灰層
 - 10 暗褐色土
- 赤褐色土

第68図 第20号住居跡・カマド



第69図 第20号住居跡出土遺物

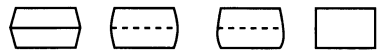
第22表 第20号住居跡出土遺物観察表 (第69図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	東部 床面上5cm	10.5 6.3		95	A・C・D・F	良好 橙7.5YR6/6	坏身模倣坏 粉っぽい胎土
2	土師器 高坏	北部 床面直上	14.5 11.2	11.0	95	A・B・F・G・J	良好 橙5YR6/6	内外面磨耗
3	土師器 甕	東部 床面上8cm	[16.1]	(16.9) 6.0	70	A・B・C・F・K	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	胴部外面ヘラケズリ明瞭
4	土師器 甕	カマド左袖脇 床面上3cm	[5.7]	(6.2)	30	A・B・C・F・K	良好 明赤褐5YR5/6	内外面磨耗
5	土製品 小玉	P 2 埋土	最大径0.69cm 厚さ0.56cm 孔径0.12cm 重さ0.30g			A・F	良好 にぶい赤褐7.5YR5/3	完存

第23表 第20号住居跡出土白玉観察表 (第69図)

番号	種類	出土位置	最大径(cm)	上面径(cm)	下面径(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石材	段階	研磨	外形
6	白玉	埋土	0.50	0.44	0.43	0.24	0.13	0.10	滑石	4	上下側面	中膨れ
7	白玉	埋土	0.48	0.43	0.44	0.25	0.15	0.10	滑石	4	上下側面	中膨れ

I 白玉の形態



1. 中央に稜 2. 中膨れ 3. 下膨れ 4. 直線的

II 白玉の製作段階

- 1 形割
- 1' 側面か端面、もしくは両面に研磨痕を有する
- 2 穿孔
 - 2a 穿孔ミス (欠損 剥離 2箇所開け)
 - 2b 穿孔中途
- 3 端面研磨
- 4 側面研磨 (成品)

第70図 白玉の分類

際を巡り、幅6～16cm、深さ4cm程度である。

出土遺物は土師器坏・甕がある(第72図)。いずれも埋土からの出土で、出土量は全体に少ない。

1～3は平底の北武蔵型坏である。内外面とも器面が磨耗している。1は内面に放射暗文の痕跡を残す。3は口縁部外面に指頭圧痕が顕著である。

5は「コ」の字状口縁のやや崩れた甕である。なお東壁寄りの床面から扁平な円礫が出土している。

時期は平底の北武蔵型坏の特徴から、切り合い関係にある第22号住居跡とほぼ同じ8世紀末から9世紀初頭の夏目遺跡Ⅻ期に位置づけられる。

第22号住居跡 (第73～75図)

第22号住居跡は調査区北西部のT・U-30グリッドに位置する。第3・21号住居跡と重複し、3軒のうちでは最も新しい。

平面形は縦長の長方形である。規模は長軸長5.88m、短軸長4.06m、床面までの深さ0.41mである。主軸方位はN-75°-Eを指す。

床面は緩やかな凹凸がある。埋土は一概に自然堆積とは言えない状況で、中央部を中心に埋め戻されているようである。

カマドは東壁中央やや南寄りに設置されていた。燃焼部を壁外に切り込むタイプで、規模は長さ1.42m、幅1.20m、内壁幅0.46mである。袖部

第21号住居跡 (第71図)

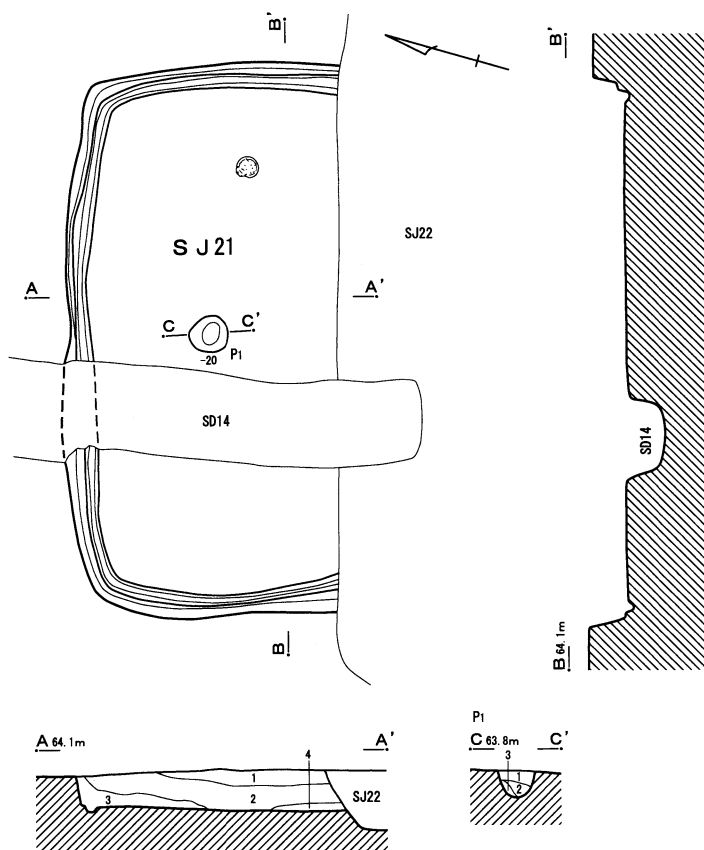
第21号住居跡は調査区北西部のT-30グリッドに位置する。南側に隣接する第22号住居跡に切られ、北半部のみを遺存する。また第14号溝跡が南北に縦断し、床面を壊している。

平面形は方形系である。規模は長軸長4.17m、短軸長2.06m、床面までの深さ0.22mである。主軸方位はN-74°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は自然堆積を示すが、中央部床面上に焼土粒子・ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土が堆積していた。

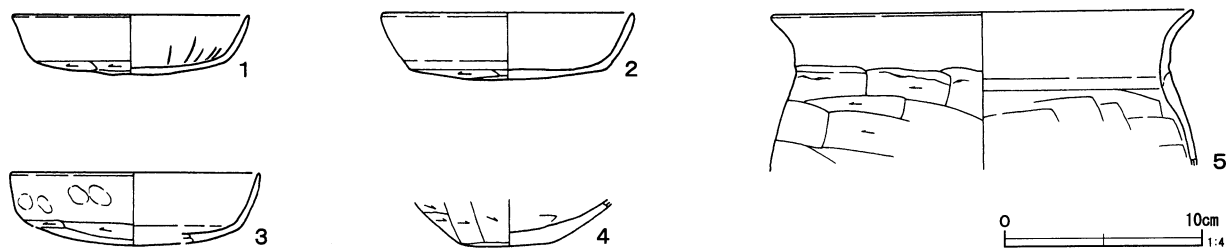
柱穴は1本検出された。P1は北壁寄りの中央部に位置し、深さ20cmである。規則的な配置ではないが、埋土の状態から判断すれば支柱穴と考えられる。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は壁



- S J 21
- 1 黒褐色土 焼土粒子を少量、ローム粒子を微量含む
 - 2 黒褐色土 ローム粒子をやや多量、焼土粒子を少量含む
 - 3 暗褐色土 ロームブロックを少量含む
 - 4 暗黄褐色土 焼土粒子・ロームブロックを多量に含む
- ピット1
- 1 褐色土 ロームブロックを多量に含む
 - 2 暗黄褐色土 暗褐色土を少量含む
 - 3 黄褐色土 暗黄褐色土を少量含む

第71図 第21号住居跡



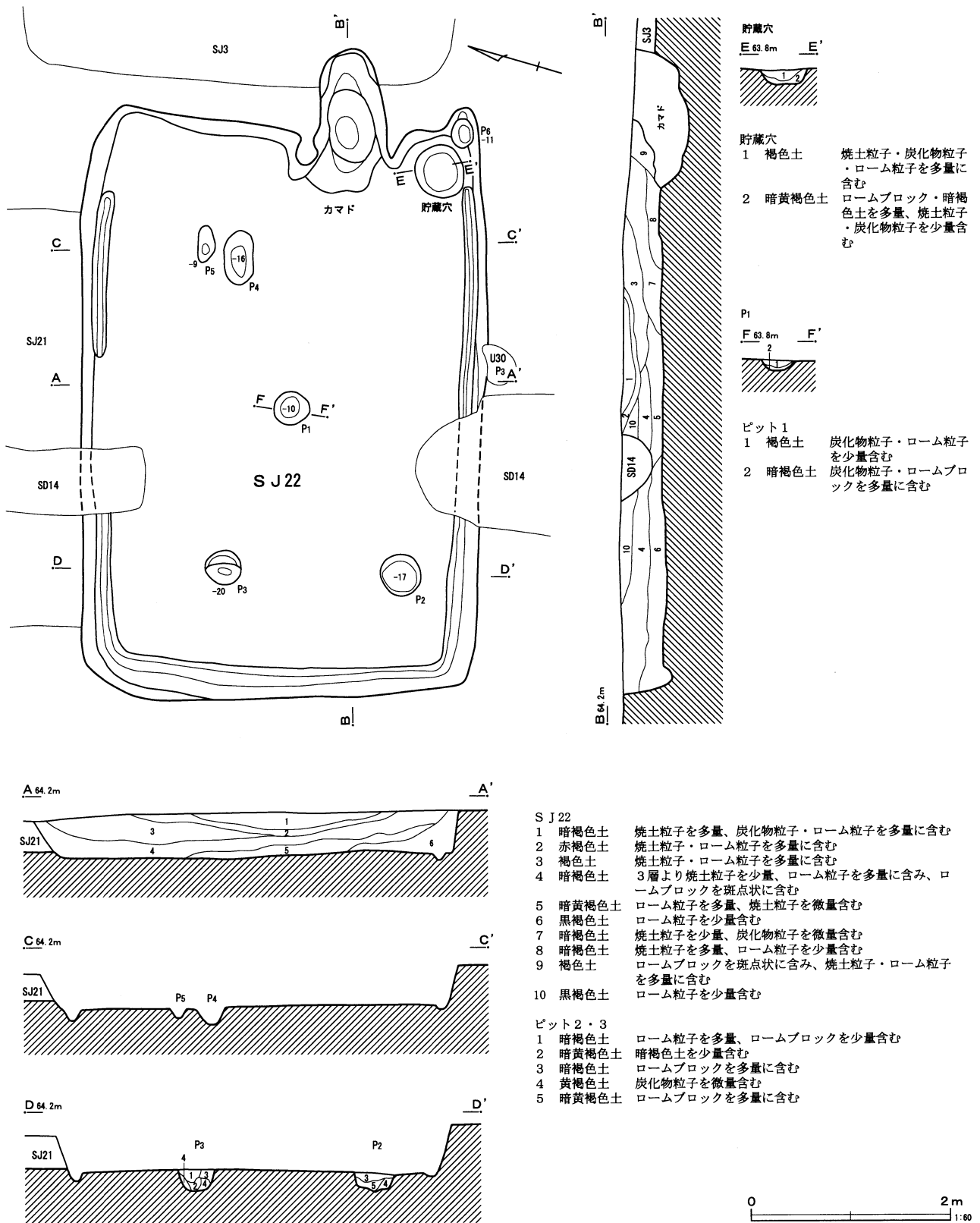
第72図 第21号住居跡出土遺物

第24表 第21号住居跡出土遺物観察表 (第72図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 杯	埋土	11.9 3.1	9.7	95	A・B・C・F・J	普通 橙5YR6/6	体部内面放射暗文かすかに残る 内外面磨耗
2	土師器 杯	埋土	(12.6) 3.4	10.0	50	A・B・F・G・J	良好 橙5YR6/6	内外面磨耗 S J 20・22一部接合
3	土師器 杯	埋土	12.5 [3.6]	(10.9)	50	A・B・F・G	良好 橙5YR6/6	内外面磨耗 口縁部外面に指頭圧痕 S J 22一部接合
4	土師器 甕	埋土	[2.4]	4.3	85	A・B・C・G・J	良好 にぶい橙5YR6/4	胴部ヘラケズリ顕著
5	土師器 甕	埋土	(21.2) [8.0]	(21.6)	20	A・B・C・F・J	普通 にぶい橙5YR7/4	内外面磨耗 「コ」の字状口縁

は第7層の黄白色粘土を積み上げて構築されていた。第6層はカマド掘方埋土、第4・5層は焼土粒子や炭化物粒子を少量含むことから明確な火床

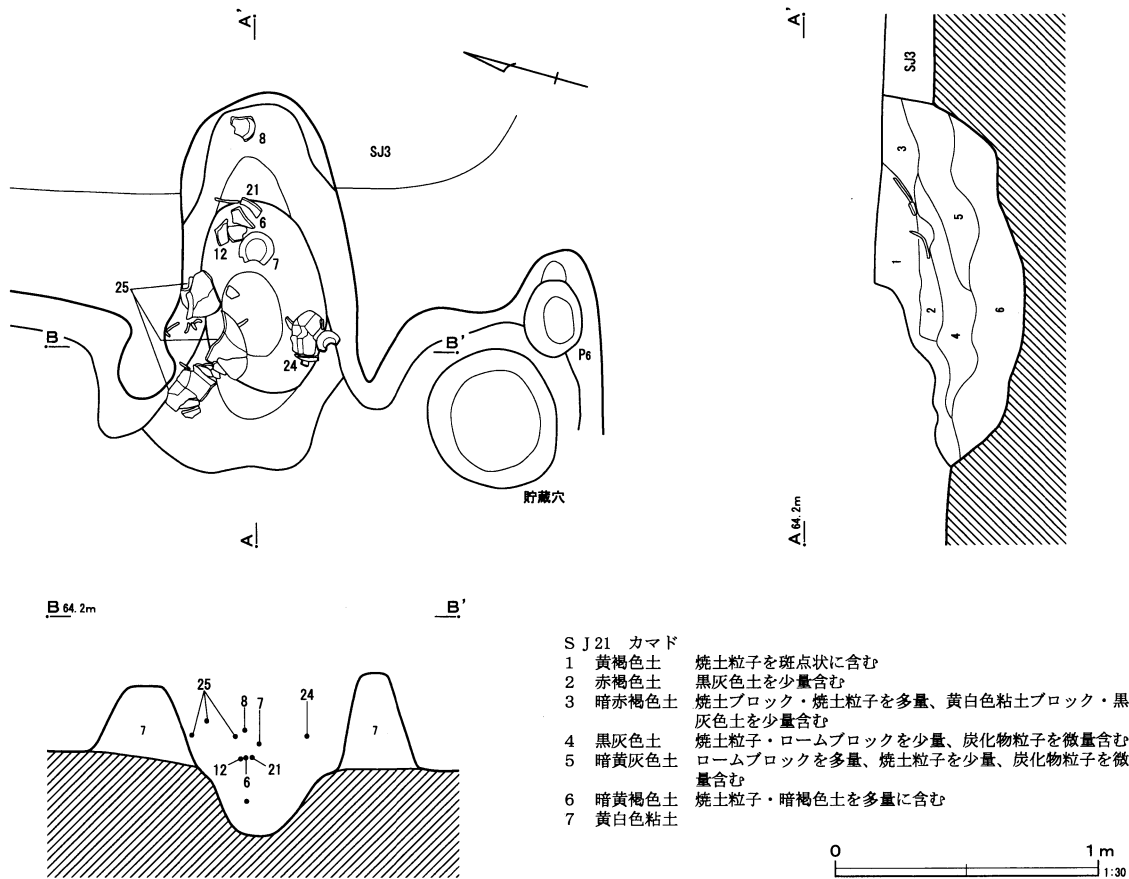
面をもたないが使用面として捉えられる。第2・3層は被熱により赤色化が顕著であることからすれば、天井部もしくは側壁の内壁崩落土であろう。



第73図 第22号住居跡

貯蔵穴は南東隅部のカマド右脇に位置する。平面円形で、規模は長径53cm、短径48cm、深さ14cmである。

柱穴は6本検出された。深さは9～20cmと浅く、配列に規則性は認められない。ただし、P2～P3はそれぞれ線上に乗っているため柱穴の可能性



第74図 第22号住居跡カマド

も残る。埋土の状態はP 3の第1・2層は柱痕である。南東隅部に位置するP 6は深さ11cmと浅く、住居には伴わないであろう。

壁溝はカマドの設置された東壁を除き、各壁を巡る。北壁は一部途切れるが、幅12~36cm、深さ9cmである。

住居跡の掘方は、カマド前面などの床面の一部を掘り残す以外は、大きく床下土坑状に掘り込み、暗黄褐色土を基調に埋め戻し、貼床を施している。

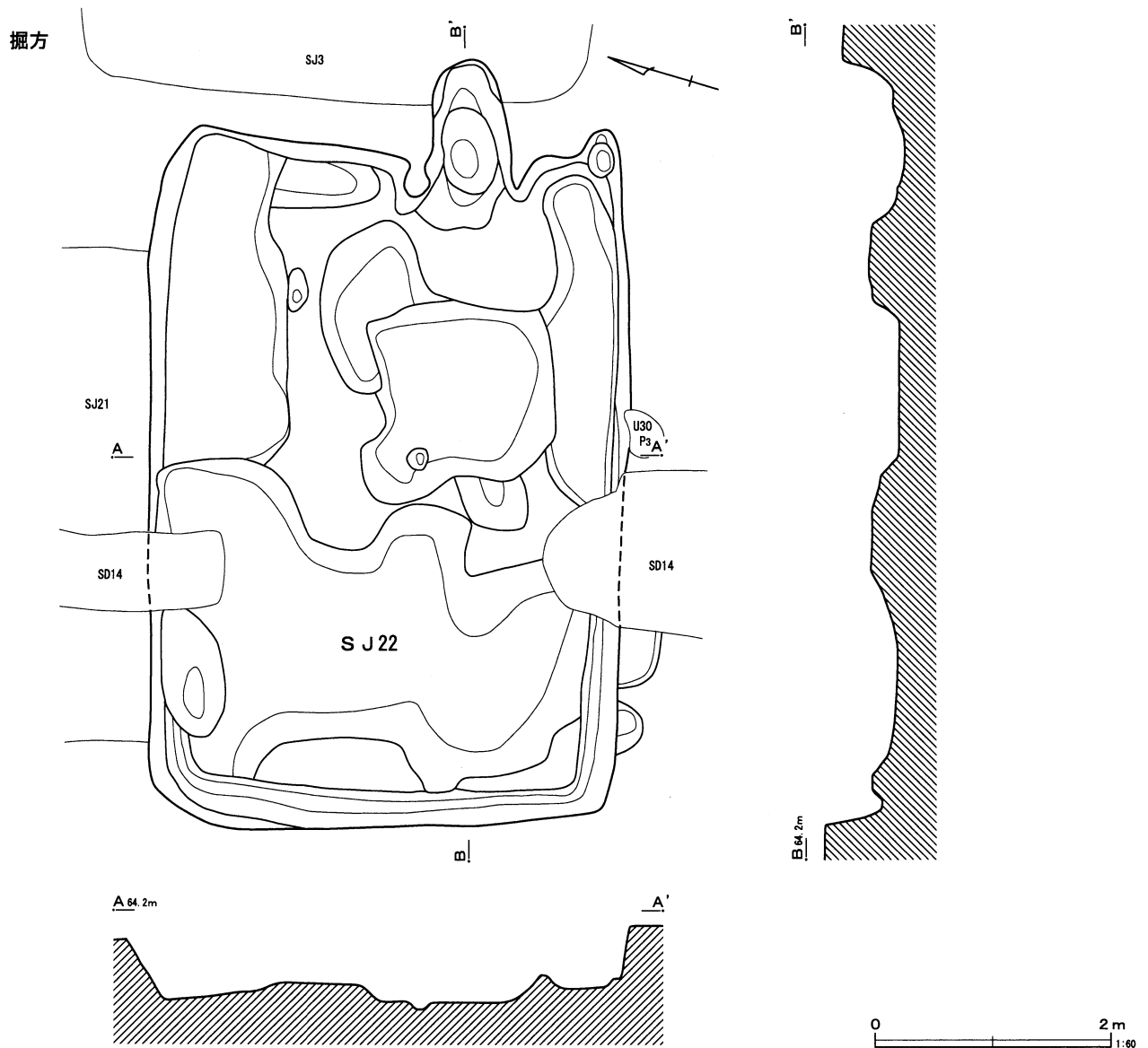
出土遺物は土師器坏・皿・埴・甕・台付甕、須恵器蓋・坏がある（第76図）。

カマド内部からまとまって出土した。左袖部に接して25の武蔵型の「コ」の字甕が、右袖部に接して24の武蔵型台付甕の下半部が倒立した状態で出土した。これらはカマド袖部を補強していた可能性も考えられるが、明確にし得なかった。

燃焼部奥寄りからは6・7・8・12の4個の坏がまとまって出土し、この他に3・4の坏や11の皿もカマド埋土から出土した。1は体部に丸味を残す北武蔵型坏であるが、他は体部外面上半に連続的な指頭圧痕を残す北武蔵型の平底坏である。12は将監塚・古井戸遺跡の土師器坏K類に該当し（赤熊1988）、口縁部に放射暗文、内底面に螺旋暗文を二重に施す。同様の暗文を施す大型埴の13と深身の大型埴の14が埋土から出土している。

須恵器蓋・坏の大半は埋土からの出土である。15は口径10.4cmの小型の蓋で、内面に二次的な平滑面が見られる。他の坏類を含め、いずれも末野窯の製品と考えられる。

時期は須恵器坏や螺旋暗文と放射暗文を施す土師器坏・埴から8世紀末から9世紀初頭の夏目遺跡Ⅱ期に位置づけられ、今回検出した住居跡の中では最も新しい時期のものである。



第75図 第22号住居跡掘方

第23号住居跡 (第77・78図)

第23号住居跡は調査区北西部のU・V-29・30グリッドに位置する。住居跡南西部が調査区外に位置しているため全容は不明である。

平面形は方形と考えられる。規模は長軸長約4.50m、短軸長4.41m、床面までの深さ0.11mである。主軸方位はN-64°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、支柱穴に囲まれた範囲に硬化面が広がり、特に炉跡周辺の中央部が硬く踏み固められていた。埋土は自然堆積を示し、黒褐色土が基調で、ローム粒子の混入が目立つ。

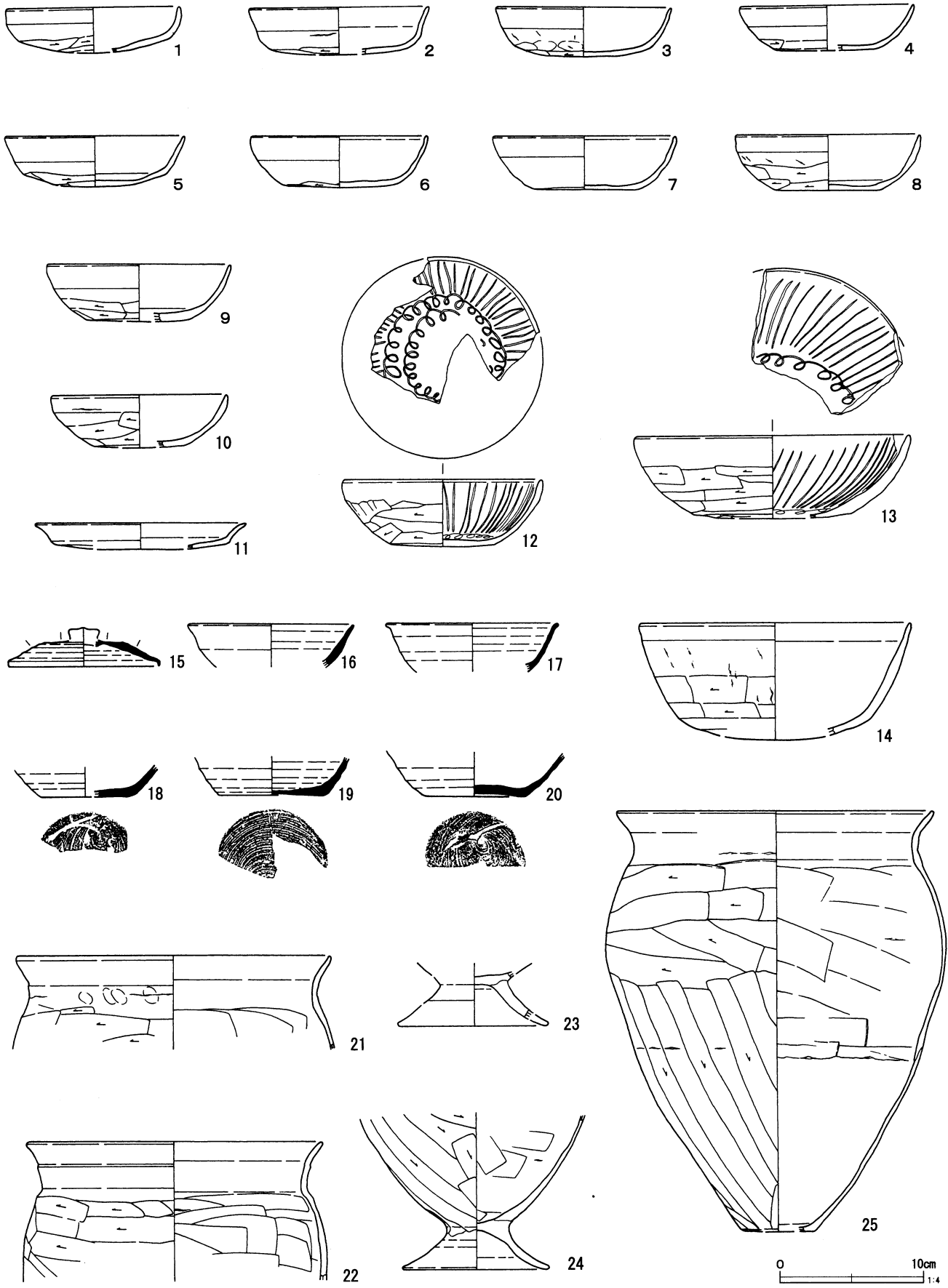
炉跡はP1とP2を結んだライン上の西寄りに

位置する。平面楕円形で、規模は長径68cm、短径50cmである。被熱により火床面は良く焼けていた。

貯蔵穴は南東隅部に位置し、平面円形で二段に掘り込む。規模は長径83cm、短径80cm、深さ36cmである。埋土は2層に分けられる。壁溝は当初からなかったようである。

柱穴は9本検出された。規則的な配列からP1～P3が支柱穴である。第1層が柱痕で、第2・3層が掘方埋土である。

東壁際中央部に床下土坑が検出された。平面楕円形で、長径138cm、短径82cm、深さ13cmである。



第76図 第22号住居跡出土遺物

第25表 第22号住居跡出土遺物観察表 (第76図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	掘方	(12.0) [3.1]		20	A・B・C・D・J	普通 橙2.5YR6/6	内外面磨耗 調整不明瞭 北武蔵型 坏
2	土師器 坏	掘方	(12.4) 3.3		30	B・C・F・G	良好 橙5YR6/6	内外面磨耗
3	土師器 坏	カマド	(12.2) 3.4		30	A・B・D・J	良好 橙7.5YR6/6	内外面磨耗 調整不明瞭
4	土師器 坏	カマド	(12.0) 3.1	(7.6)	25	A・B・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	内外面磨耗 調整不明瞭
5	土師器 坏	貯蔵穴 埋土	(12.3) [3.5]		30	A・B・D・F・G	良好 にぶい橙5YR6/4	内外面磨耗 調整不明瞭
6	土師器 坏	カマド燃焼部 底面上22cm	12.2 3.6	7.5	100	A・B・D・F	良好 明赤褐2.5YR5/8	体部外面指頭圧痕
7	土師器 坏	カマド燃焼部 底面上18cm	12.7 3.8	7.3	80	A・D・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/8	体部外面指頭圧痕
8	土師器 坏	カマド煙道部 使用面直上	(12.8) 3.9	(7.4)	30	A・B・F・G・J	普通 にぶい橙7.5YR5/4	内外面磨耗
9	土師器 坏	埋土	(12.6) 4.0	(7.2)	40	A・B・C・G・J	良好 橙5YR6/6	内外面磨耗 調整不明瞭
10	土師器 坏	掘方	(12.1) 3.7	6.3	20	A・B・C・F・G	良好 にぶい赤褐5YR5/3	内外面磨耗
11	土師器 皿	カマド	(14.5) [1.8]		25	A・B・C・D・F	良好 橙5YR6/6	内外面磨耗 調整不明瞭
12	土師器 坏	カマド燃焼部 底面上22cm	(13.8) 4.6	7.3	50	B・C・D・F	良好 橙5YR6/8	体部内面放射暗文、底部に螺旋暗文 を二重に施す
13	土師器 埴	埋土	(19.0) 5.8	(11.0)	30	A・B・C・D・G	良好 橙5YR6/6	体部内面放射暗文 内底面螺旋暗文
14	土師器 埴	埋土	(18.7) [7.8]		40	A・B・D・F・J	良好 橙2.5YR6/8	器面は磨滅著しく調整は不明瞭
15	須恵器 蓋	埋土	(10.4) [2.8]		25	A・G・J	良好 灰 N6/	天井部外面回転ヘラケズリ 内面二次的 な平滑面 外縁部降灰 重ね焼き痕
16	須恵器 坏	埋土	(11.4) [3.0]		25	A・B・E・G・I	良好 灰5Y6/1	末野窯産 ロクロナデ
17	須恵器 坏	埋土	(12.0) [3.4]		20	A・G・I・J	良好 黄灰2.5Y5/1	末野窯産 内面ロクロ目強い
18	須恵器 坏	埋土	[2.2]	(6.0)	35	A・G・I・K	不良 灰白5Y7/1	末野窯産 底部ロクロ右回転 糸切 り離し未調整
19	須恵器 坏	埋土	[2.7]	(7.4)	45	A・C・I・K	良好 灰 N5/	末野窯産 底部ロクロ右回転 糸切 り離し未調整
20	須恵器 坏	埋土	[3.1]	(7.0)	50	B・F・G・I・K	普通 灰白2.5Y7/1	末野窯産 底部ロクロ右回転 糸切 り離し未調整
21	土師器 甕	カマド燃焼部 底面上22cm	(21.8) [6.6]		10	A・B・F・I・J	良好 にぶい橙2.5YR6/4	コ字状口縁
22	土師器 甕	埋土	(20.4) [9.7]		25	A・B・C・G・J	良好 橙5YR6/6	胴部外面横方向ヘラケズリ
23	土師器 台付甕	埋土	[3.3]		90	A・B・F・J	普通 にぶい赤褐2.5YR5/4	脚台部内外面ヨコナデ 胎土に角閃 石粒子を多く含む
24	土師器 台付甕	カマド燃焼部 底面上20cm	[11.0]	10.1	80	A・B・C・F・J	良好 橙7.5YR6/6	胴部内面器面剝離 胎土中に多量の 砂粒を含む
25	土師器 甕	カマド燃焼部 底面上20cm	21.7 29.3	23.6 (5.0)	90	A・B・F・G・J	良好 橙2.5YR6/8	「コ」の字状口縁

ローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土で埋められている。

出土遺物は土師器坏・埴・脚付埴・埴・鉢・小型壺・壺・高坏・小型甕・甕・手捏土器、炉支脚、土製品、滑石製白玉などがある(第79～82図)。遺物は北半分を中心に分布し、床面直上からの出土例が多い。特に、P 1 周辺に五徳状の炉支脚(67・68)と韃羽口に転用された28の高坏脚部がまとまって廃棄されていた。

各遺物の出土状況を見ると、炉跡周辺から16・19の小型壺、30・31の高坏、41の甕と未実測の甕胴部片が出土した。

P 1 と北隅の間には46の甕とともに67・68の炉支脚が出土し、壁際からは23の鉢形の甕が出土した。またP 1 周辺では25・33の高坏、隣接して13の埴、28の高坏(転用羽口)、45の甕、6の埴がまとまって出土した。さらに炉跡とP 1の間からは1のコップ形のミニチュア土器、32の高坏が出土

した。P 2 周辺からは26の高坏脚部、48の甕が出土し、貯蔵穴からは2の手捏土器、7の埴、11・14の鉢、18の小型壺、43の小型甕などが出土した。また、貯蔵穴周辺には10の埴、東壁際から9の鉢、24の高坏が出土した。炉とP 3 の間には39・49の甕と5の坏が置かれ、その西脇には36の有段口縁壺、29の高坏などがあった。

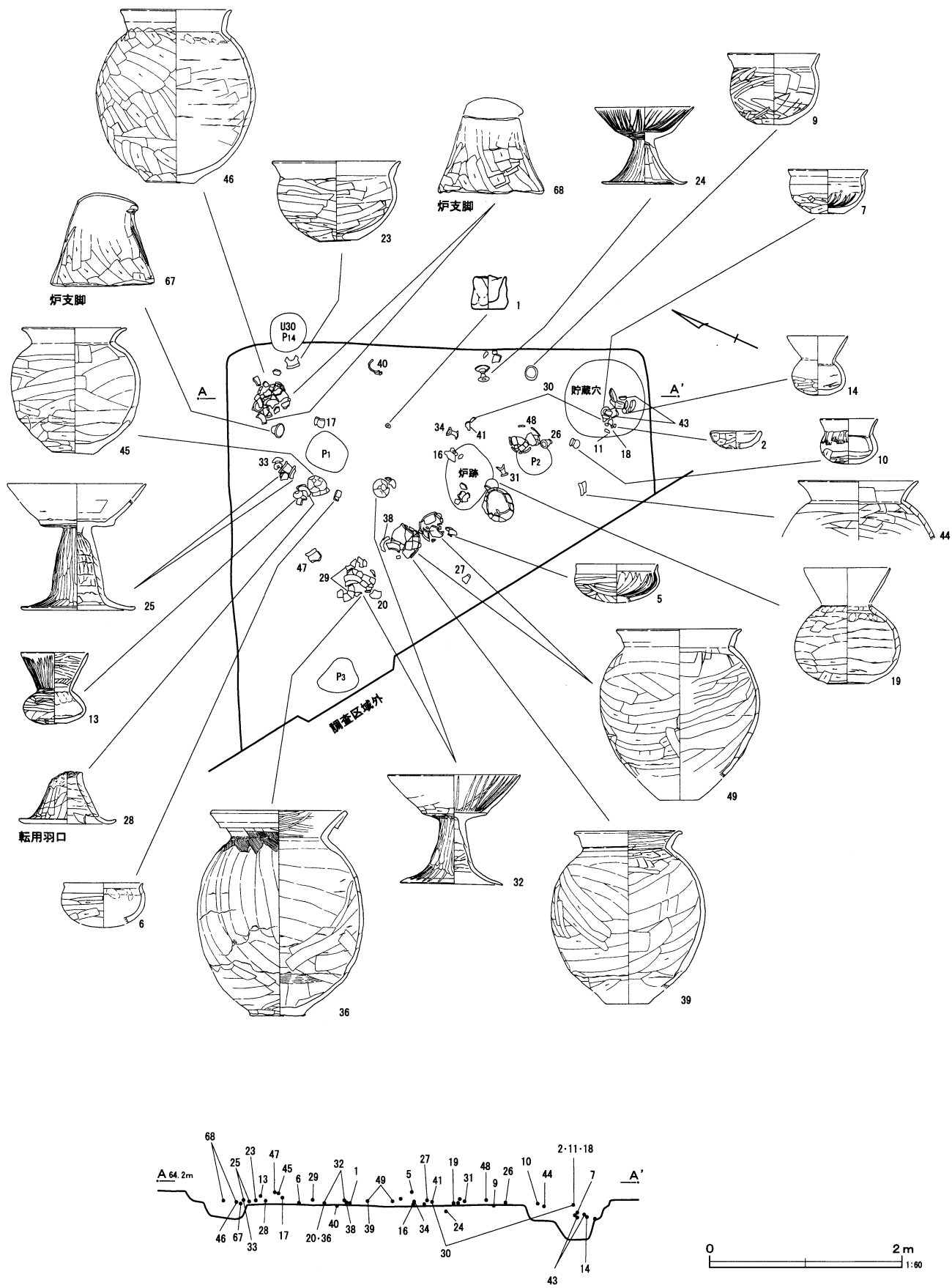
この他に埋土から滑石製白玉11点をはじめ、35の有段高坏、52の粘土粒、66・67の炉支脚などが出土した。また53の焼成粘土塊は炉跡の埋土からの出土である。

炉支脚は破片を含めると4個体が出土した(65~68)。粘土紐の巻上によって形作られた中空の土製品で、類例が少ない。67・68は同形態のもので、上端部は短い嘴状の形態を呈する。一方、66は器高が高く、上端部も円頭形で嘴状の突出もしっかりしている。

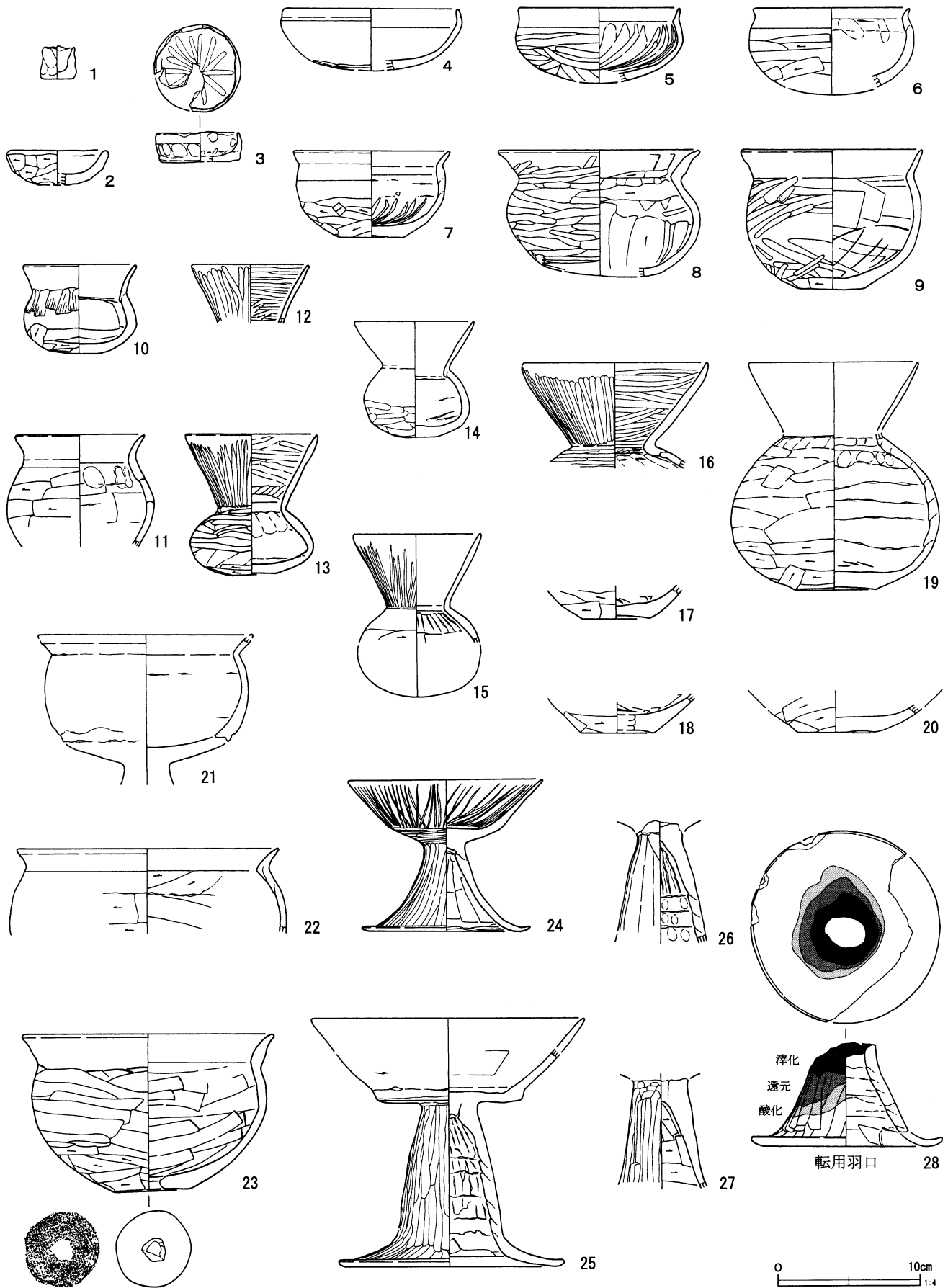
時期は源初坏を含むものの坏・椀類が器種構成に占める割合が低く、25のような和泉型高坏、36の複合口縁壺が残存し、甕の長胴化も顕著でないことから夏目遺跡 I 期に位置づけられる。



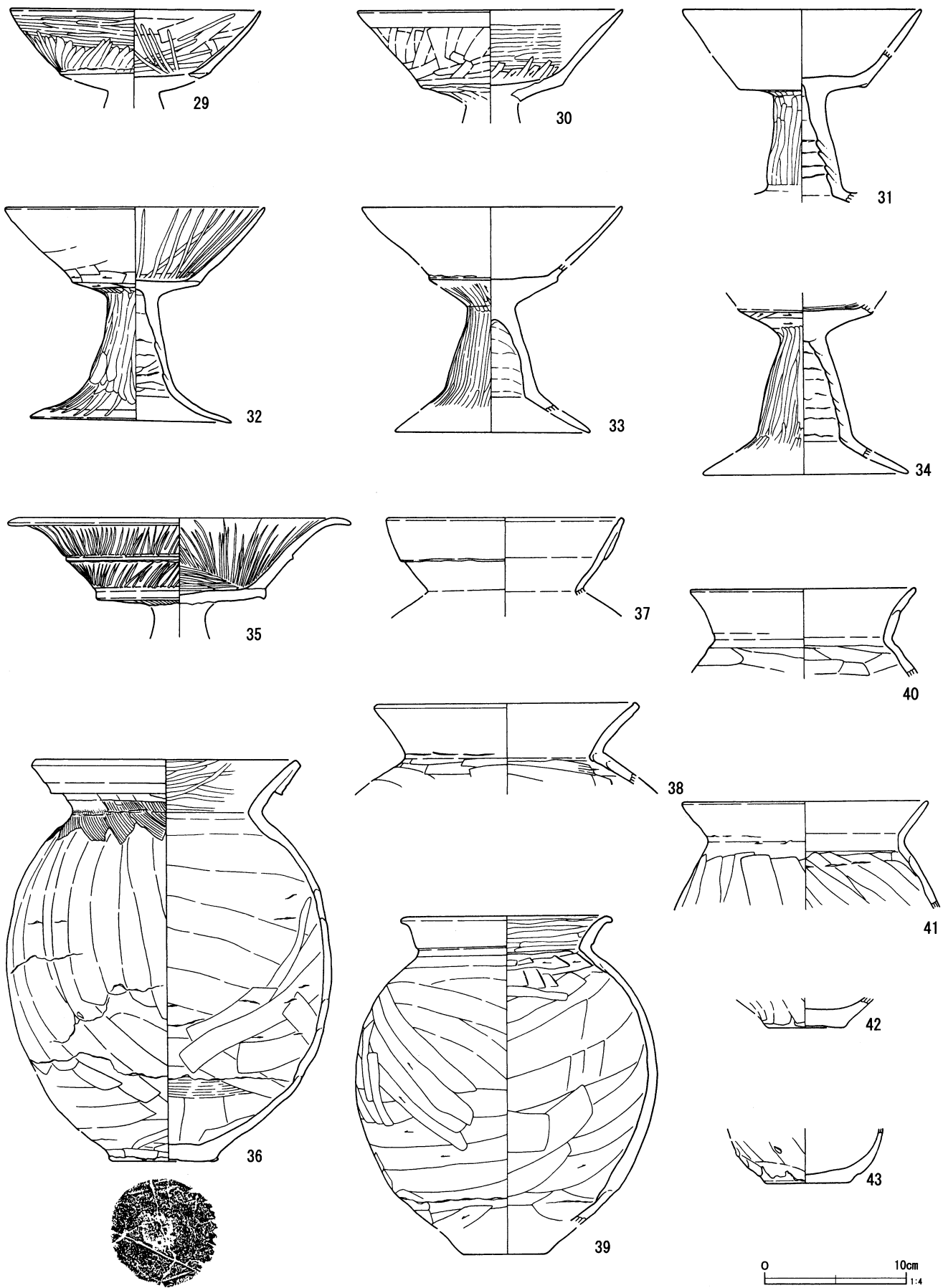
第77図 第23号住居跡



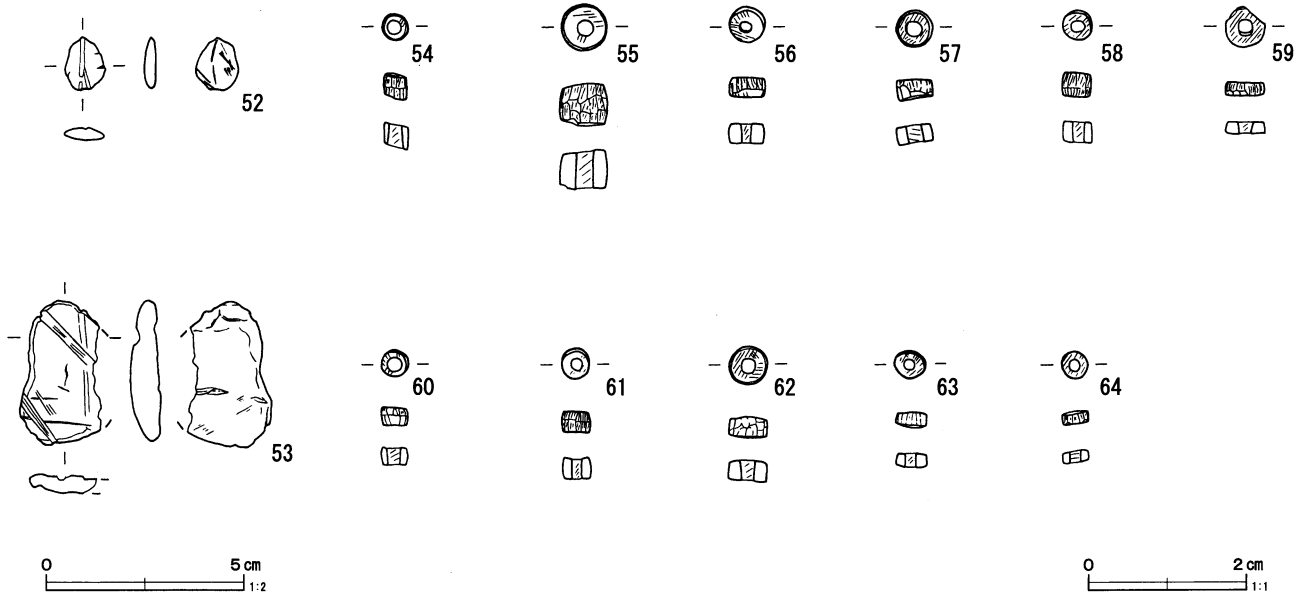
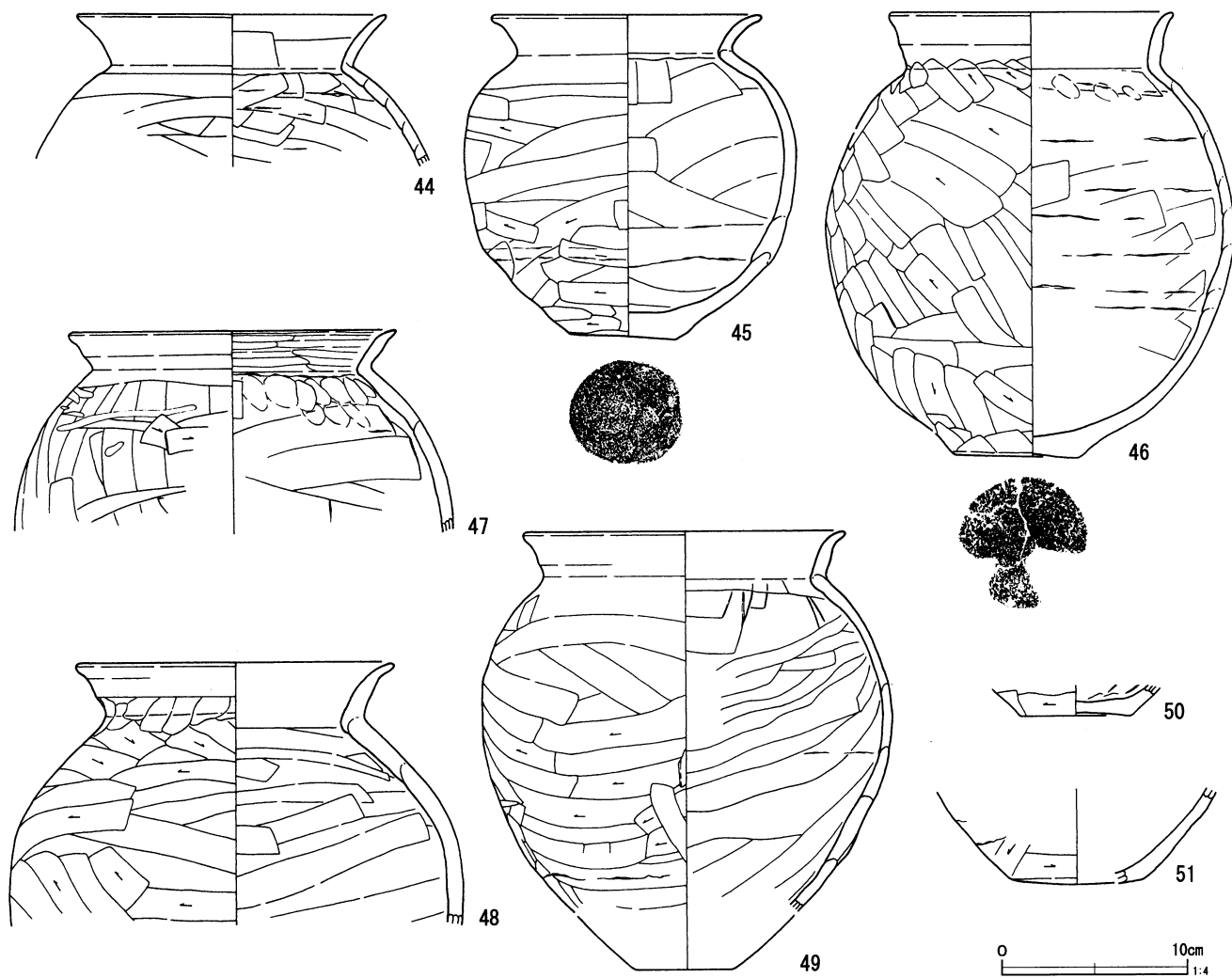
第78图 第23号住居跡遺物出土状况



第79図 第23号住居跡出土遺物(1)



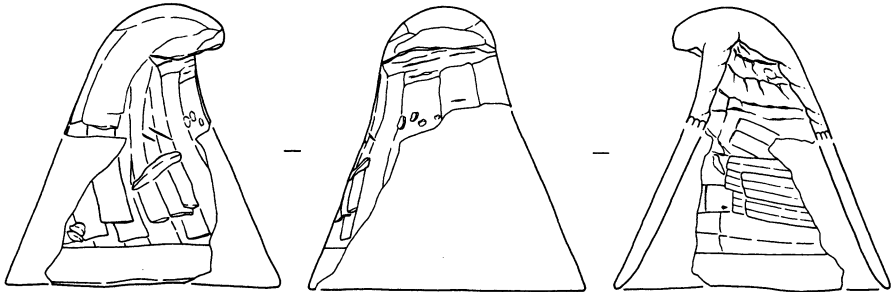
第80图 第23号住居跡出土遺物 (2)



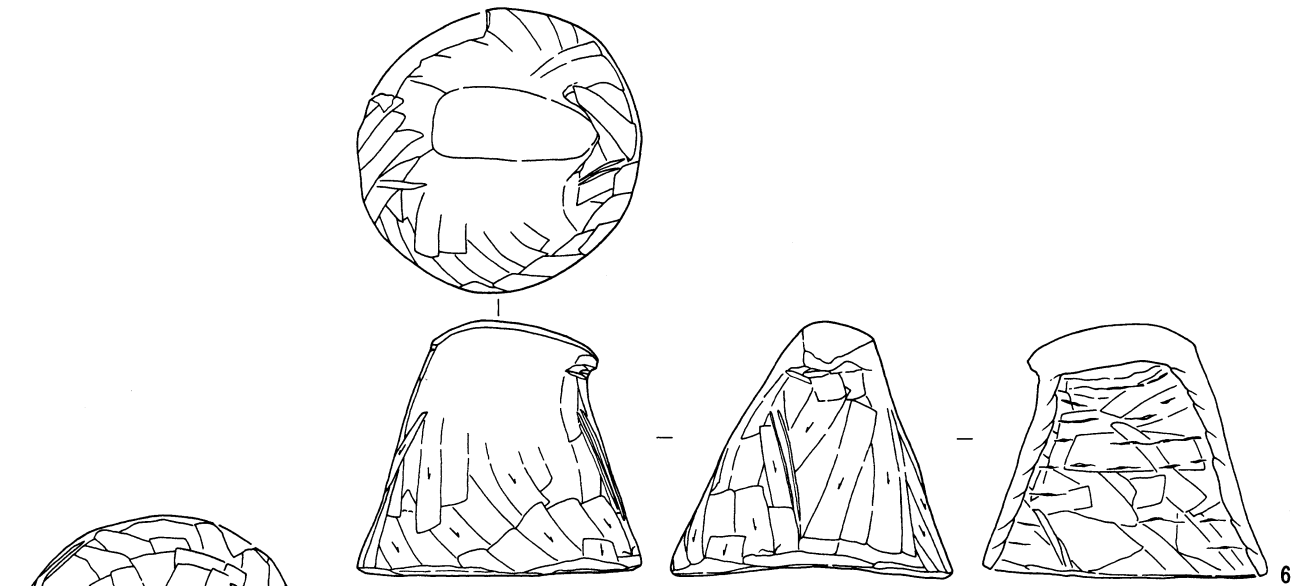
第81图 第23号住居跡出土遺物(3)



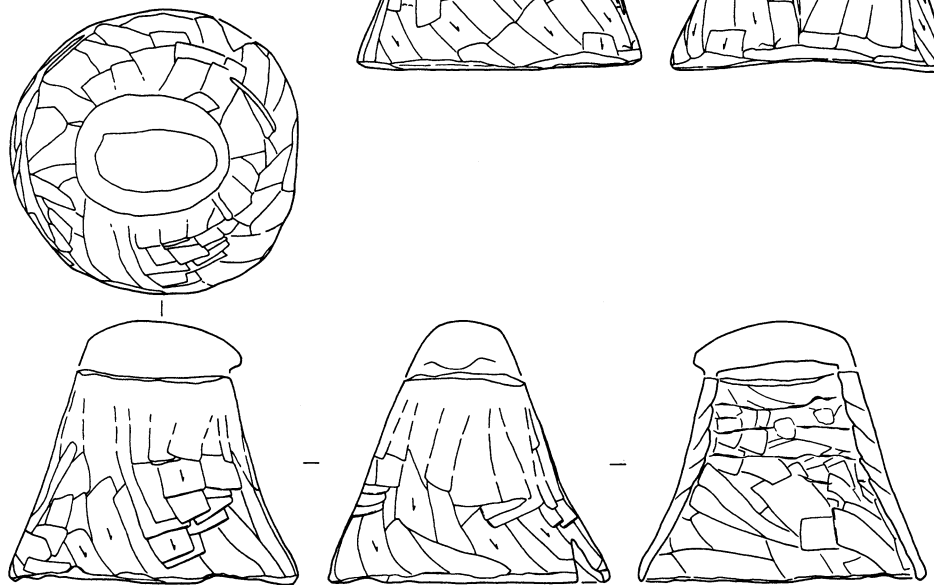
65



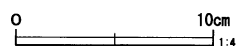
66



67



68



第82图 第23号住居跡出土遺物 (4)

第26表 第23号住居跡出土遺物観察表(第79~82図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 手握土器	東部 床面直上	2.1 2.2	2.1	100	A・C・D・F・J	良好 にぶい橙5YR6/4	体部外面指頭圧痕 コップ型のミ チュア土器
2	土師器 手握土器	P 4 床面直上	(6.6) [2.4]		25	A・B・D・J	良好 にぶい赤褐2.5YR4/4	体部外面やや雑なヘラケズリ
3	土師器 手握土器	埋土	5.7 2.1	5.5	80	A・C・D・F・J	良好 黒褐7.5YR3/1	体部内面放射暗文
4	土師器 坏	埋土	(12.0) [4.3]		40	A・B・C・F・G	良好 橙5YR6/8	胎土中に赤色粒子を多量に含む
5	土師器 坏	中央部 床面上13cm	(11.3) [5.2]		45	A・B・C・F・J	良好 赤褐2.5YR4/6	体部外面丁寧なヘラケズリ 内面放 射状のナデ
6	土師器 塊	P 1 周辺 床面直上	(11.0) [5.6]		70	A・C・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	胎土中に砂粒を多く含む
7	土師器 塊	P 4 底面上28cm	11.0 6.1	10.5 4.5	100	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	体部内面放射状のミガキ
8	土師器 鉢	埋土	14.0 [8.9]	13.7	90	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR4/4	器形やや焼き歪む
9	土師器 鉢	P 5 床面直上	12.6 9.8	12.4 5.1	100	D・F・G・J	良好 橙2.5YR6/6	外面棒状口工具によるミガキ状のヘラナ デ 内面黒色、暗文状の弱い沈線
10	土師器 埴	P 2 周辺 床面上 4 cm	7.7 6.8		100	A・B・D・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部外面木口状工具によるナデ
11	土師器 鉢	P 4 床面直上	(9.1) [7.8]	(10.4)	30	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	体部外面ヘラケズリ
12	土師器 埴	埋土	(8.2) [4.2]		45	A・B・F・J	良好 赤褐5YR4/8	口縁部内外面ともヘラミガキ
13	土師器 埴	P 1 周辺 床面上 9 cm	9.2 9.9	8.7 3.3	95	A・B・G・H・J	良好 にぶい橙5YR6/4	口縁部外面ヨコナデ後ヘラミガキ 底部小さく作り出す
14	土師器 埴	P 4 底面上22cm	(8.4) 8.2	7.4 2.8	80	A・B・D・F・J	良好 黒褐7.5YR3/1	胎土中に角閃石粒子を多く含む
15	土師器 埴	埋土	8.9 [8.0]		50	A・B・C・F	良好 明赤褐5YR5/6	口縁部外面ヘラミガキ密
16	土師器 小型壺	中央部東寄り 床面直上	12.9 [7.4]		90	A・B・C・F	良好 赤褐2.5YR4/6	口縁部内外面とも丁寧なヘラミガキ
17	土師器 小型壺	P 1 際 床面上 6 cm	[2.3]	4.7	80	B・C・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	外面磨耗
18	土師器 小型壺	P 4 床面直上	[2.8]	5.0	70	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR4/4	底部凹底 内面ヘラオサエ痕顕著
19	土師器 小型壺	中央部 床面上 3 cm	[11.0]	14.6 5.8	100	A・B・C・F・G	良好 にぶい橙5YR7/4	胴部内面粘土紐痕顕著
20	土師器 壺	中央部 床面直上	[2.5]	5.4	80	A・C・D・F・J	良好 赤褐5YR4/6	底部内面丁寧にナデを施す
21	土師器 脚付埴	埋土	(14.9) [7.4]		30	A・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	内底面との剝離痕を残す 口唇部欠 損
22	土師器 広口鉢	埋土	(18.3) [5.9]		10	A・B・C・D・F	良好 にぶい赤褐5YR5/4	小破片のため口径不定
23	土師器 小型甗	P 7 周辺 床面直上	17.5 11.1	16.5 5.2	100	A・B・F・I	良好 明赤褐2.5YR5/8	焼成後、鉢の底部に穿孔している
24	土師器 高坏	P 5 底面上 6 cm	13.6 10.7	11.8	95	A・C・D・F・J	良好 にぶい褐7.5YR5/4	坏部内外面暗文を施す
25	土師器 高坏	P 1 周辺 床面上 3 cm	[15.3]	(15.8)	70	A・B・C・F・J	良好 橙2.5YR6/6	柱状部外面ミガキ 内面粘土紐痕を 明瞭に残す
26	土師器 高坏	P 2 際 床面上 4 cm	[8.6]		90	A・B・F・J	良好 赤褐5YR4/8	柱状部外面ナデ 内面絞り目顕著
27	土師器 高坏	中央部 床面上 3 cm	[7.8]		90	A・D・F・J	良好 赤褐5YR4/6	柱状部外面ヘラミガキ 内面ヘラケ ズリ
28	土師器 高坏	P 1 周辺 床面上 4 cm	器高 6.2~7.3	(13.5)	100	A・B・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	高坏脚部を転用した羽口 先端部は 被熱のため発泡する
29	土師器 高坏	中央部 床面上 4 cm	(17.5) [4.9]		95	A・B・C・D・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内面はヘラナデ後、粗いヘラミ ガキを施す
30	土師器 高坏	P 4 床面直上	18.6 [6.5]		95	A・B・C・D・F	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内面ヘラケズリ後、粗いヘラミ ガキ
31	土師器 高坏	炉周辺 床面上 4 cm	[10.8]		45	A・C・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	柱状部外面ミガキ 内面粘土紐痕顕 著
32	土師器 高坏	中央部 床面直上	18.2 15.4	14.2	95	A・C・D・F・J	良好 赤褐2.5YR4/8	坏部内面放射暗文
33	土師器 高坏	P 1 周辺 床面上 5 cm	[10.5]		90	A・B・D・F・J	良好 橙2.5YR6/6	器面は磨滅し、調整不明瞭 坏部内 面は剝離顕著
34	土師器 高坏	P 5 周辺 床面上 5 cm	[10.9]		90	A・B・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	坏部内面ヘラミガキ、柱状部内面粘 土紐積み上げ後ナデを施す

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
35	土師器高坏	埋土	24.2 [6.2]		80	A・C・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	有段口縁高坏 坏部内外面細かいヘラミガキ 外面突帯は粘土紐貼り付け
36	土師器壺	中央部床面直上	(18.2) 28.3	22.8 7.3	80	A・C・F・G・J	良好 橙2.5YR5/6	複合口縁壺 底面棒状圧痕
37	土師器壺	埋土	16.6 [5.4]		90	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	複合口縁部の貼付はやや粗雑である
38	土師器壺	中央部床面直上	18.3 [5.8]		70	A・C・D・J	良好 赤褐5YR4/8	胴部外面ヘラナデ
39	土師器甕	中央部床面上3cm	14.5 [21.7]	21.3	90	A・B・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	頸部内面ヘラケズリ
40	土師器甕	東壁寄り床面直上	15.9 [6.3]		50	A・B・C・F・J	普通 橙5YR6/6	内外面磨耗
41	土師器甕	P 5床面上6cm	(17.2) [7.5]		30	A・C・F・G・K	良好 橙5YR6/6	胎土中に小礫を多く含む 胴部外面木口状工具によるナデ
42	土師器甕	埋土	[2.1]	5.6	90	A・C・D・F・J	良好 にぶい橙2.5YR6/4	胴部外面ヘラナデ 底部弱い上げ底
43	土師器小型甕	P 4底面上22cm	[3.9]	6.0	80	A・C・D・F・J	良好 赤褐5YR4/6	胴部外面ナデ
44	土師器甕	P 11周辺床面直上	(16.1) [8.2]		20	A・B・C・F・J	良好 赤褐5YR4/8	胴部外面弱いヘラナデ
45	土師器甕	P 1周辺床面上12cm	14.3 17.5	18.0 5.8	95	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	胴部下位外面分割成形痕顕著
46	土師器甕	P 7床面直上	15.0 24.1	(22.0) 6.8	55	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐5YR5/4	胴部上半外面木口状工具によるナデ 内面被熱により器面剥落
47	土師器甕	北部床面上14cm	(17.5) [11.1]	(23.6)	25	A・B・C・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部外面ヘラナデ後、ミガキ
48	土師器甕	P 2際床面上6cm	(16.8) [14.2]	(24.4)	60	A・B・C・F・K	良好 明赤褐5YR5/6	やや器面荒れる
49	土師器甕	中央部床面上3cm	16.9 [20.4]	22.2	95	A・C・F・G	良好 にぶい橙5YR6/4	胴部外面下半被熱により器面剥落
50	土師器甕	埋土	[1.7]	(6.0)	50	A・B・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	胴部外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ
51	土師器甕	埋土	[5.0]	(7.2)	20	A・B・C・F・I	良好 赤褐2.5YR4/6	胴部外面ヘラケズリ
52	土製品粘土粒	埋土	長さ1.3cm 厚さ0.3cm	幅1.0cm 重さ0.3g		A・F	良好 明赤褐5YR5/6	雲母状微粒子を含む
53	土製品焼成粘土塊	炉跡	長さ3.6cm 厚さ0.7cm	幅(2.0)cm 重さ4.5g		A・B・F	良好 明赤褐5YR5/6	植物繊維の圧痕が付着
65	土製品炉支脚	埋土			破片	A・B・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	外面ナデ 内面粘土紐痕明瞭
66	土製品炉支脚	埋土	14.4	(13.8)	60	A・B・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	頂部外面磨耗顕著
67	土製品炉支脚	P 8床面直上	12.8	14.4	90	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/3	頂部外面磨耗顕著
68	土製品炉支脚	P 7床面直上	10.7	14.0 13.6	80	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	頂部を欠損する

第27表 第23号住居跡出土白玉観察表 (第81図)

番号	種類	出土位置	最大径(cm)	上面径(cm)	下面径(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石材	段階	研磨	外形
54	白玉	埋土	0.34	0.31	0.28	0.33	0.16	0.05	滑石	4	上下側面	中央に稜
55	白玉	埋土	0.59	0.51	—	0.48	0.19	0.27	滑石	4	上側面	中膨れ
56	白玉	埋土	0.46	0.42	0.41	0.25	0.10	0.10	滑石	4	上下側面	中膨れ
57	白玉	埋土	0.46	0.41	0.45	0.25	0.20	0.09	滑石	4	上下側面	中膨れ
58	白玉	埋土	0.40	0.37	0.37	0.31	0.13	0.08	滑石	4	上下側面	中膨れ
59	白玉	埋土	0.49	0.46	0.49	0.17	0.17	0.06	滑石	4	上下側面	中膨れ
60	白玉	埋土	0.34	0.30	0.31	0.19	0.15	0.04	滑石	4	上下側面	中膨れ
61	白玉	埋土	0.39	0.34	0.35	0.28	0.09	0.08	滑石	4	上下側面	直線的
62	白玉	埋土	0.50	0.45	0.43	0.27	0.15	0.10	滑石	4	上下側面	直線的
63	白玉	埋土	0.37	0.33	0.35	0.17	0.12	0.04	滑石	4	上下側面	直線的
64	白玉	埋土	0.34	0.33	0.34	0.14	0.12	0.03	滑石	4	上下側面	直線的

第24号住居跡 (第83・84図)

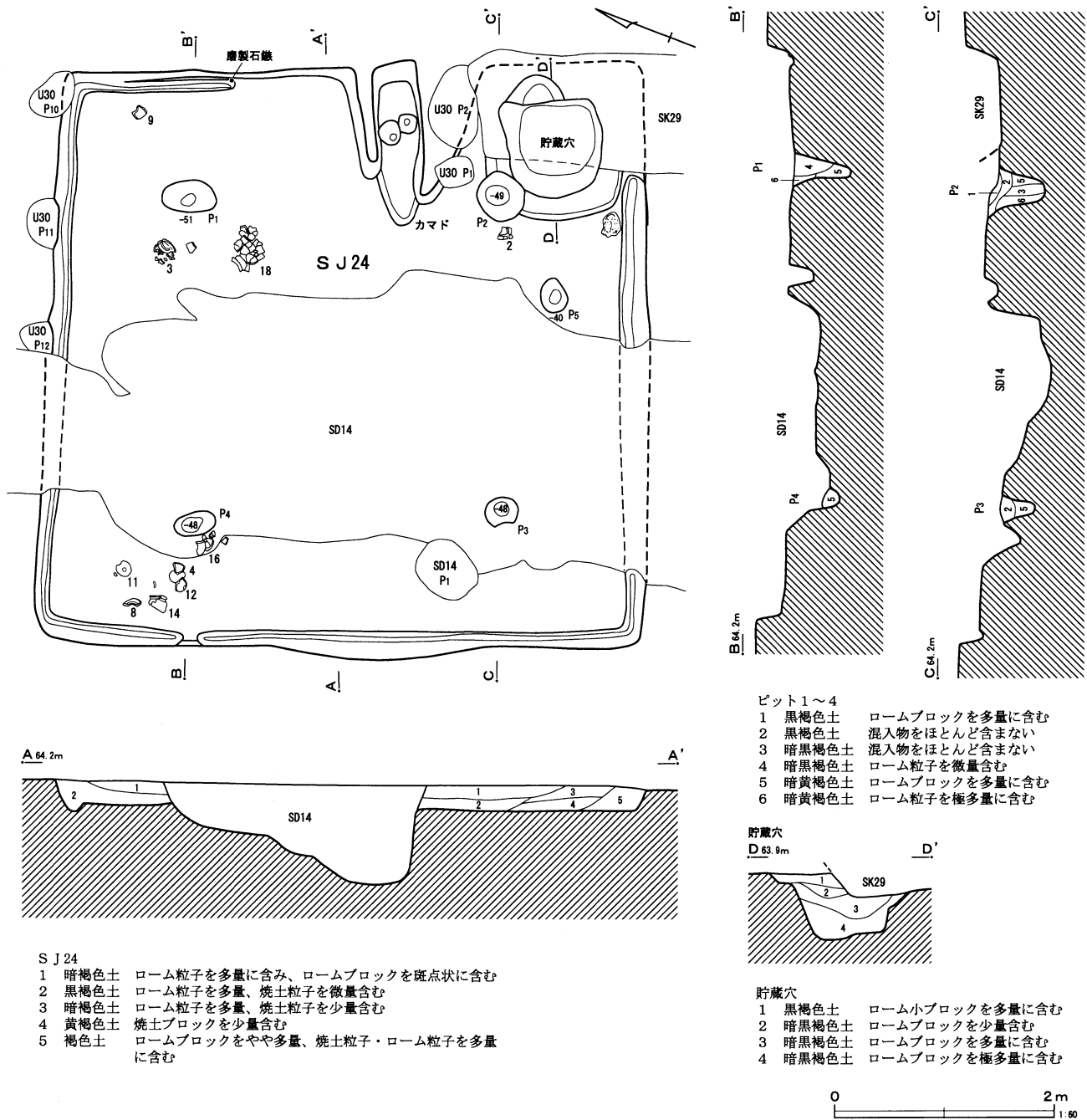
第24号住居跡は調査区北西部のU・V-30グリッドに位置する。住居跡の中央を第14号溝跡が横切り、南東隅部の貯蔵穴の上面を第29号土坑が削平する。

平面形は比較的形の整った方形で、規模は長軸長5.39m、短軸長5.20m、床面までの深さ0.21mである。主軸方位はN-72°-Eを指す。

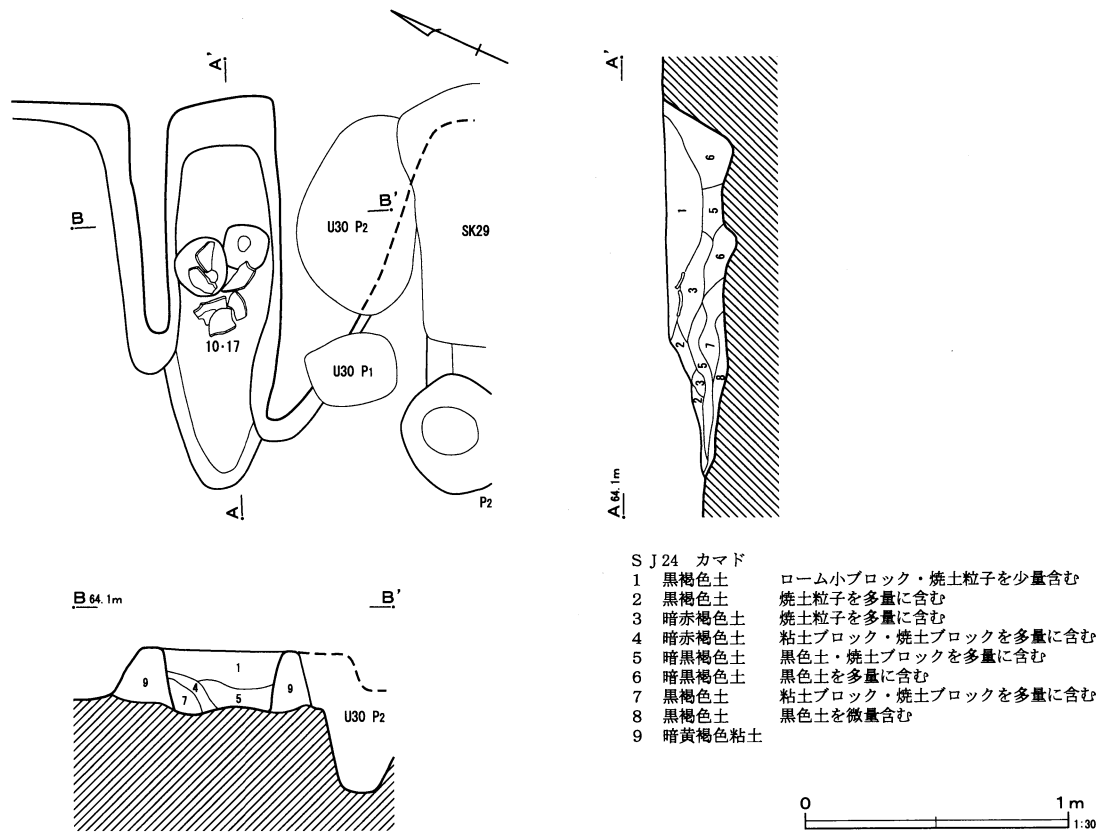
床面は凹凸が目立つ。埋土は概ね自然堆積を示

すが、カマド周辺には焼土の混入が多い。

カマドは東壁中央やや南寄りに設置されており、壁に対して僅かに傾いた状態で造り付けられている。規模は長さ1.50m、幅0.94m、内壁幅0.34mで、カマドの主軸方位はN-65-Eを指す。袖部は第9層の暗黄褐色粘土によって構築されている。第1~3層が天井部崩落土、第4・5層の上面が火床面、第8層がカマド掘方の埋土に相当しよう。



第83図 第24号住居跡



第84図 第24号住居跡カマド

貯蔵穴は南東隅部のカマド右脇に位置する。平面方形で、二段に掘り込み、周囲に幅狭のテラス部を巡らす。規模は長径1.30m、短径1.23m、深さ0.59mである。

柱穴は5本検出された。P 1～P 4が支柱穴で、P 2は貯蔵穴と接する位置にある。埋土は第3・4層が柱抜き取り痕、第5・6層が掘方埋土である。壁溝はカマド周辺を除きほぼ全周し、幅10～27cm、深さ7cmである。

出土遺物は土師器坏・鉢・高坏・壺・小型壺・甕・小型甕・手捏土器、焼成粘土塊、滑石製白玉がある(第85・86図)。カマドから10の高坏と17の甕の破片が出土しているが、高坏が支脚に転用されていたかは不明である。P 2脇の床面上から2の坏、P 1周辺からは18の甕と3の小型甕口縁部が潰れた状態で出土した。またP 4から北西隅部にかけて土器がまとまって出土し、床面上から16の甕、14の鉢が、4の小型壺、12の鉢が、8・11

の高坏はやや浮いた状態で出土した。なお、東壁北寄りの壁溝に接する位置から弥生時代中期の磨製石鏃が出土している。その他の出土遺物として第139図3に掲載した。

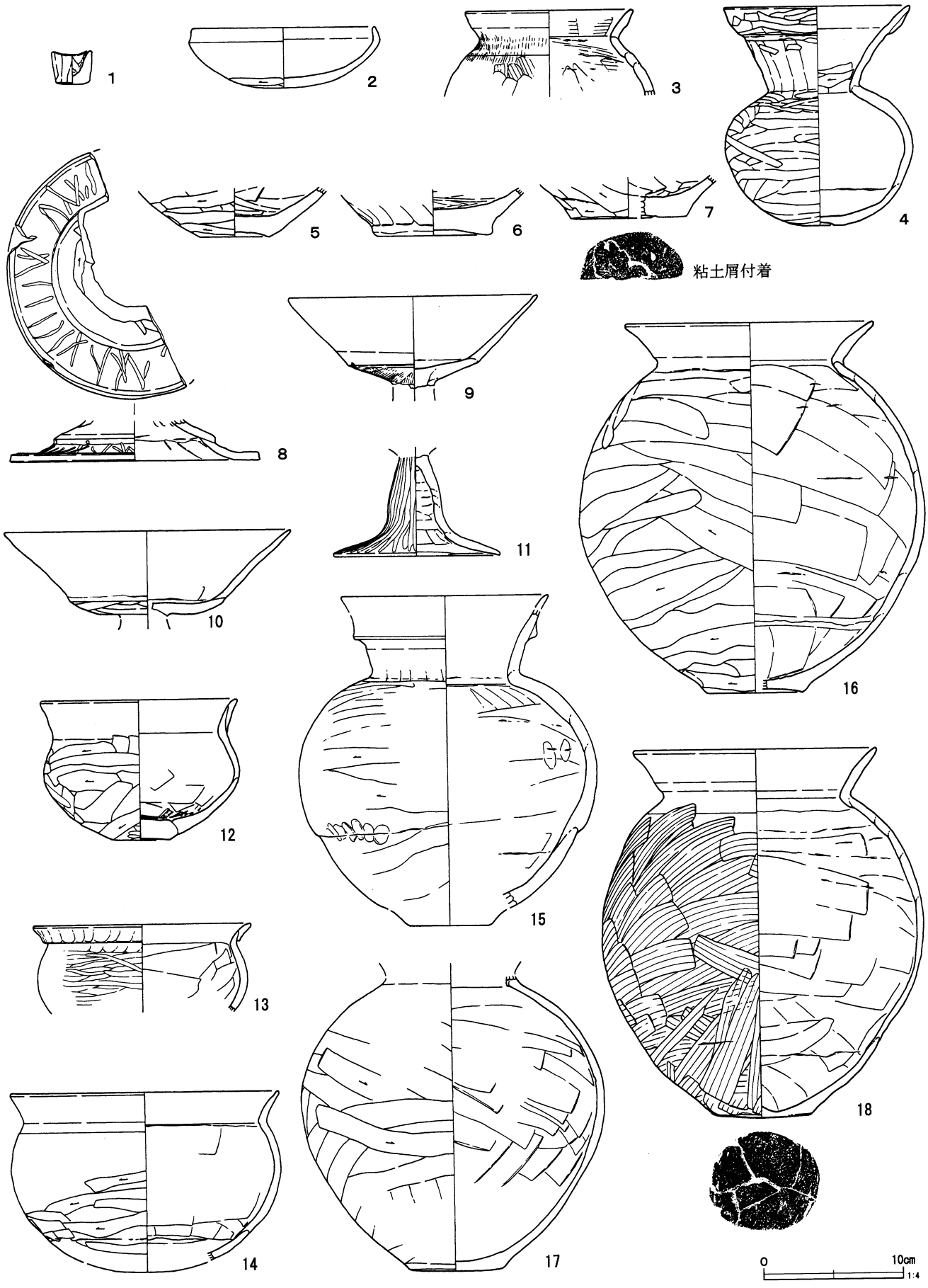
時期は夏目遺跡II期に位置づけられる。

第25号住居跡(第87図)

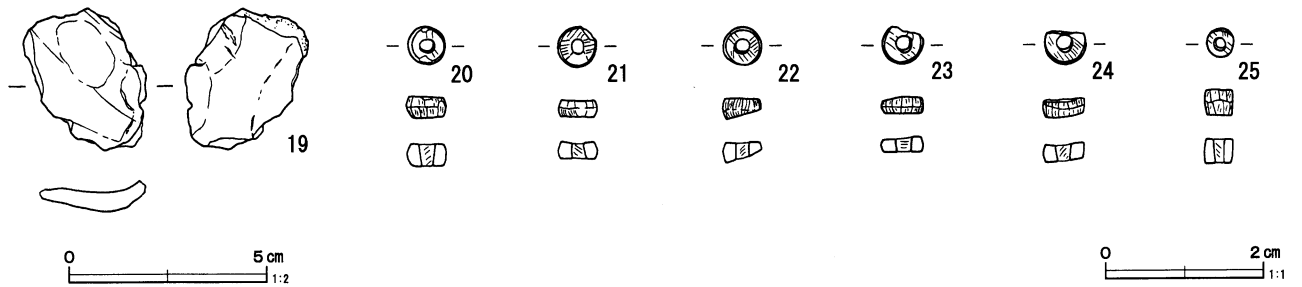
第25号住居跡は調査区北西端部のP-22グリッドに位置する。遺構の上面が攪乱土に覆われていたため調査当初は気づかなかったが、第2号井戸跡が住居跡の中央部から東壁部にかけて重なり、大きく削平されていた。

調査区の制約により西壁から北西隅部が調査区外に位置しているが、平面形は方形と考えられる。規模は長軸長5.17m、短軸長4.74m、確認面から床面までの深さ0.27mである。主軸方位はN-27°-Wを指す。

床面は平坦で、支柱穴内側の中央部床面はガチガチに硬く締まっているのに対し、壁際の床面は



第85図 第24号住居跡出土遺物(1)



第86図 第24号住居跡出土遺物（2）

第28表 第24号住居跡出土遺物観察表（第85・86図）

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 手捏土器	埋土	(2.7) 2.9	2.4	60	A・B・C・F・J	良好 褐灰10YR4/1	コップ形 ミニチュア土器
2	土師器 坏	P 2 周辺 床面上直上	13.0 4.4		50	A・B・C・F・J	普通 橙5YR6/6	器面全体に風化磨耗
3	土師器 小型甕	P 1 周辺 床面上 6 cm	(12.0) [6.2]		40	A・D・F・G・J	良好 灰褐7.5YR4/2	胴部外面木口状工具によるナデ
4	土師器 小型壺	北西部 床面上 3 cm	(13.3) 15.7	13.4 2.2	70	A・C・D・F・J	良好 にぶい橙2.5YR6/4	折返し口縁
5	土師器 壺	埋土	[3.5]	4.9	50	A・B・C・F・K	良好 橙5YR6/6	胴部外面ヘラケズリ
6	土師器 壺	埋土	[3.3]	8.3	60	A・B・C・F・K	良好 明赤褐5YR5/6	弱い上げ底
7	土師器 甕	埋土	[2.9]	(8.3)	40	A・D・F・I・K	良好 にぶい橙7.5YR6/4	底部外面に粘土屑付着
8	土師器 高坏	北西部西壁寄り 床面上17cm	[2.9]	17.8	40	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	有段脚高坏 裾部外面ヘラミガキ
9	土師器 高坏	北東部東壁寄り 床面上 8 cm	17.8 [6.6]		70	A・D・F・J	良好 にぶい橙5YR6/4	SD14一部接合
10	土師器 高坏	カマド燃烧部 使用面上 6 cm	(20.5) [6.1]		70	A・B・D・F・J	良好 明赤褐5YR4/6	坏部外面全体的に指頭圧痕が残る
11	土師器 高坏	北西部 床面上10cm	[7.2]	12.0	95	A・D・F・G・J	良好 橙7.5YR6/6	脚部外面ヘラミガキ
12	土師器 鉢	北西部 床面上14cm	(13.9) 10.0	4.1	75	A・C・D・F・J	良好 橙2.5YR6/6	体部外面ヘラケズリ
13	土師器 鉢	埋土	(15.3) [6.3]		40	A・B・C・F・K	良好 にぶい赤褐5YR5/4	口縁部折返し口縁 指頭圧痕顕著
14	土師器 鉢	北西部西壁寄り 床面上直上	(19.1) [12.0]		25	A・B・F・I・J	良好 にぶい橙5YR6/4	体部外面ヘラケズリ
15	土師器 壺	埋土	[21.1]	(21.3)	40	A・C・D・F・K	良好 にぶい橙5YR6/4	口縁部下端粘土紐貼り付け
16	土師器 甕	P 4 際 床面上 3 cm	(17.8) [26.4]	(24.7) 6.8	30	A・B・C・F・J	普通 にぶい褐7.5YR5/4	胴部内外面に被熱痕あり
17	土師器 甕	カマド燃烧部 使用面上 6 cm	[21.0]	(21.6) (6.8)	25	A・B・C・F・K	良好 にぶい橙7.5YR6/4	胴部外面風化により磨耗
18	土師器 甕	P 1 周辺 床面上 5 cm	17.2 26.3	22.9 7.0	95	A・D・F・J	普通 橙7.5YR6/6	底部外面に補修痕あり
19	土製品 焼成粘土塊	埋土	長さ3.5cm 厚さ0.5cm	幅2.7cm 重さ5.5g		A・D・F・J	良好 橙7.5YR6/6	カール状を呈する

第29表 第24号住居跡出土白玉観察表（第86図）

番号	種類	出土位置	最大径(cm)	上面径(cm)	下面径(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石材	段階	研磨	外形
20	白玉	埋土	0.48	0.45	0.45	0.26	0.13	0.09	滑石	4	上下側面	中央に稜
21	白玉	埋土	0.49	0.44	0.41	0.22	0.15	0.07	滑石	4	上下側面	中央に稜
22	白玉	埋土	0.48	0.45	0.47	0.24	0.17	0.08	滑石	4	上下側面	中央に稜
23	白玉	埋土	0.51	0.48	0.48	0.19	0.17	0.06	滑石	4	上下側面	中央に稜
24	白玉	埋土	0.53	0.51	0.49	0.20	0.17	0.06	滑石	4	上下側面	中膨れ
25	白玉	埋土	0.38	0.36	0.36	0.30	0.13	0.08	滑石	4	上下側面	直線的

やや軟弱である。埋土は基本的には自然堆積を示し、ロームブロック混じりの明褐色土及び暗褐色土がレンズ状に堆積していた。

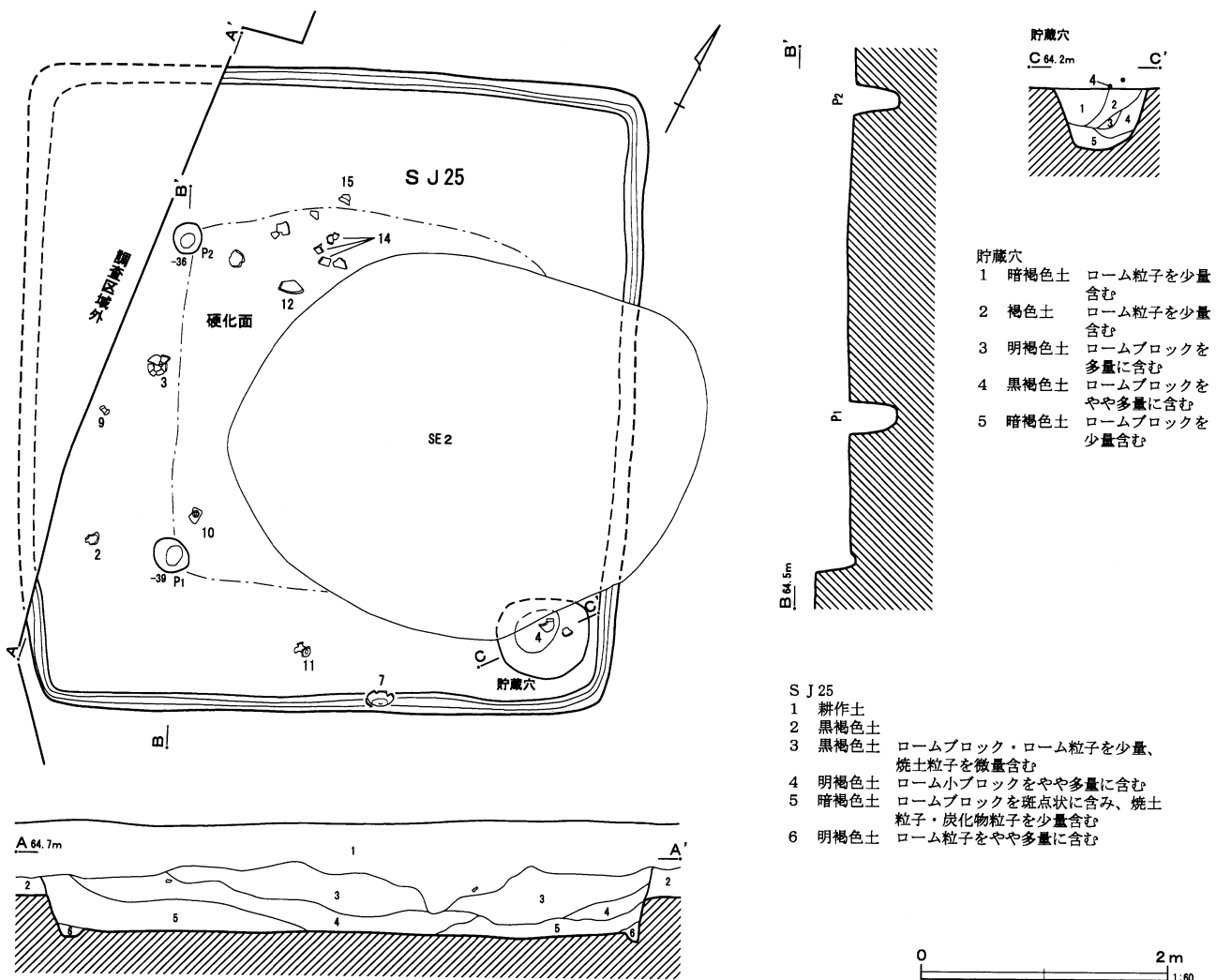
前述したように住居跡中央部が第2号井戸跡によって大きく壊されていたため、本来カマドは存在したものと思われるが、確認することはできなかった。ただし、第2号井戸跡の埋土下層に焼土ブロックが混じっており、本住居跡に由来するものであろう。

貯蔵穴は南東隅部に位置し、第2号井戸跡によって一部壊されていた。平面円形と考えられ、本来はカマドの右脇に位置する。規模は直径76cm、深さ49cmである。埋土はロームブロック混じりの褐色土や暗褐色土を主体とする。壁溝は壁際を全

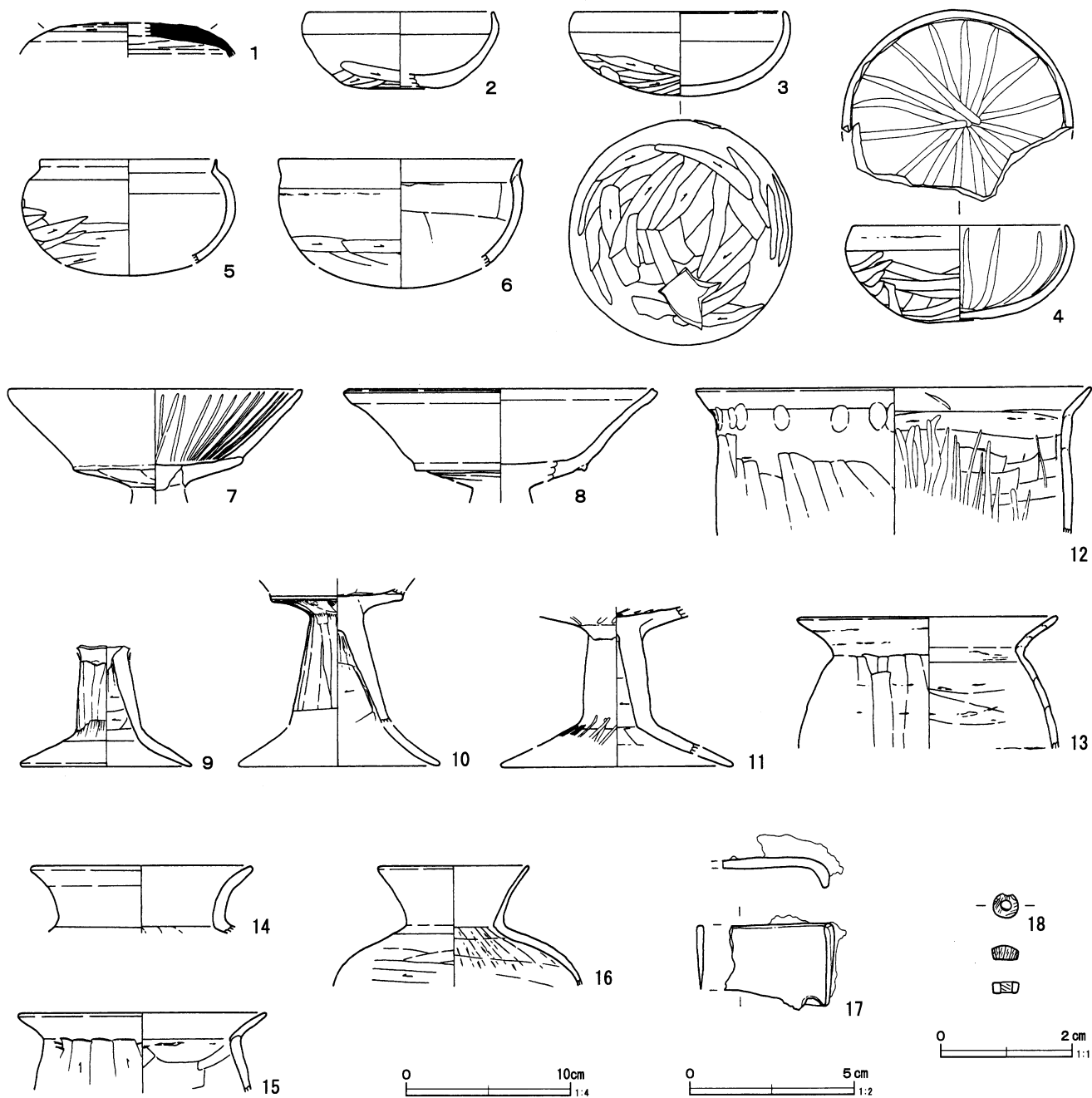
周し、幅9～18cm、深さ8cm。

柱穴は主柱穴を2本検出した。井戸跡によって他の2本は削平されているが、本来は対角線上に4本が規則的に配されていたと考えられる。

出土遺物は比較的多く、須恵器坏蓋、土師器坏・埴・鉢・高坏・壺・小型壺・大型甑・小型甕、鉄製品、滑石製白玉がある(第88図)。住居跡中央部北寄りにやや集中しているが、全体に散漫な分布である。4の坏は埋没後の貯蔵穴上面からの出土であり、住居跡廃絶後に遺棄された可能性もある。南壁中央部に7の高坏坏部が出土したほかは、P1とP2の間から伏せた状態で3の坏が出土した。1の須恵器坏蓋は天井部外面に回転ヘラケズリを施す。17の鉄製品は小片のため明確でないが、



第87図 第25号住居跡



第88図 第25号住居跡出土遺物

鎌の基部の折り返し部分にあたる。18は滑石製白玉で埋土から出土した。

出土した土師器半球形坏が主体で、典型的な模倣坏が存在しないことから、時期は夏目遺跡Ⅳ期に位置づけられる。

第26号住居跡 (第89図)

第26号住居跡は調査区北西部のP-23・24グリッドに位置する。南西隅部を中心に検出され、

大半は調査区外にかかる。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長2.74m、短軸長2.45m、床面までの深さ0.17mである。主軸方位はN-17°-Wを指す。

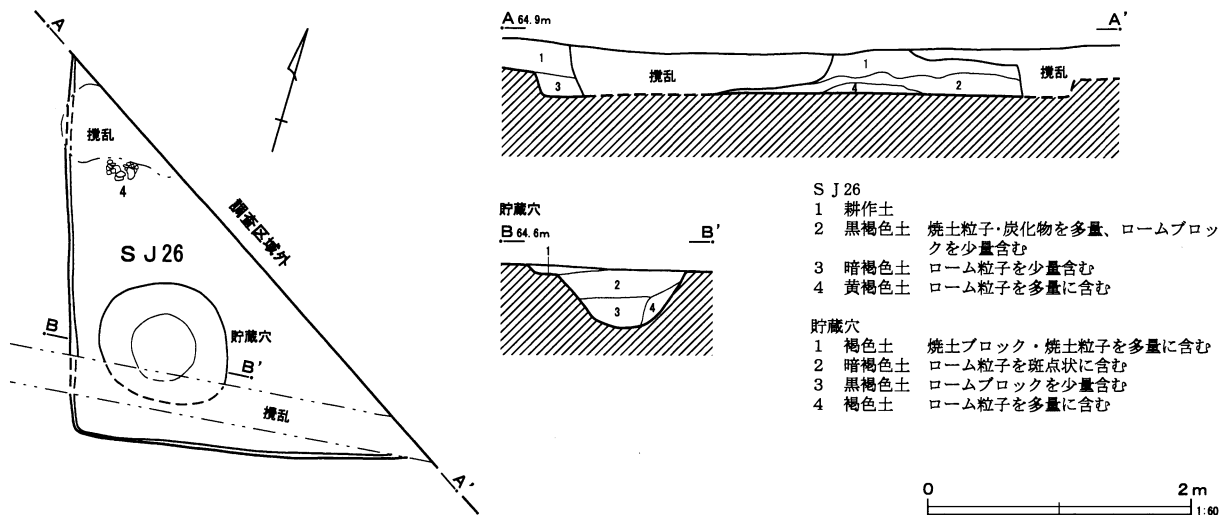
床面は概ね平坦で、硬化面はなかった。埋土は焼土粒子・炭化物粒子の多く含む黒褐色土が主体で、単純な自然堆積のあり方とは異なるようである。また南西隅部の貯蔵穴上面には焼土ブロック

第30表 第25号住居跡出土遺物観察表 (第88図)

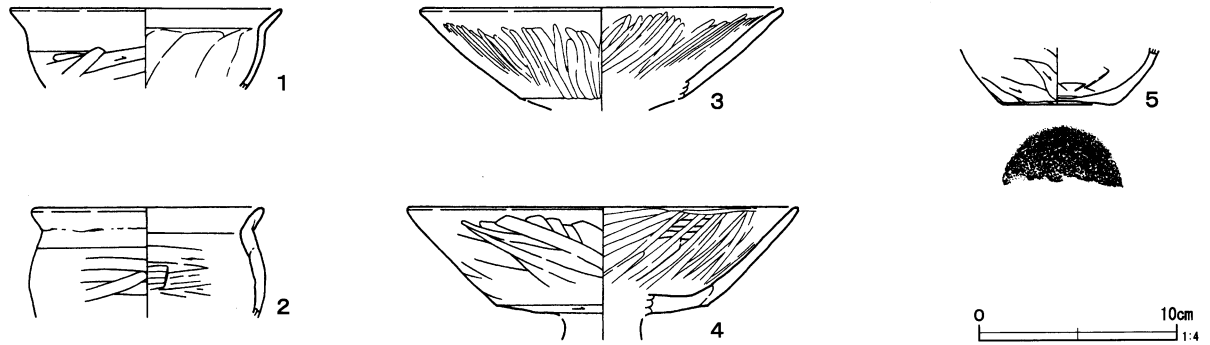
番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	須恵器 坏蓋	埋土	[2.1]		25	A・C・G・I・K	良好 灰白5Y7/2	天井部内面不定方向のナデ
2	土師器 坏	西壁寄り 床面上5cm	(11.2) [4.7]	(4.6)	40	A・B・D・F・J	良好 橙2.5YR6/6	内外面器面風化顕著
3	土師器 坏	西部 床面直上	12.8 5.6		95	A・D・F・J	良好 橙5YR6/6	器面やや風化
4	土師器 坏	貯蔵穴 底面上49cm	13.0 5.9	3.2	60	A・B・D・F・J	良好 橙5YR6/6	体部内面幅広の放射暗文
5	土師器 碗	埋土	(10.7) [6.4]		40	A・B・C・F・J	良好 橙7.5YR6/6	SE2一部接合
6	土師器 鉢	埋土	(14.8) [6.5]		20	A・C・D・F・J	良好 橙5YR6/6	SE2一部接合
7	土師器 高坏	南壁溝 床面上10cm	17.8 [6.2]		95	A・D・F・G・J	普通 にぶい橙5YR6/4	坏部接合痕明瞭 内外面風化顕著
8	土師器 高坏	埋土	(18.6) [5.7]		40	A・B・F・G・J	良好 橙5YR6/6	坏部下端凸線貼付 SE2一部接合
9	土師器 高坏	西部 床面直上	[7.3]	10.3	95	A・B・F・G・J	良好 橙7.5YR6/6	脚部外面ナデ
10	土師器 高坏	P1周辺 床面直上	[8.1]		80	A・D・F・J	良好 橙5YR6/6	坏部剥離痕明瞭
11	土師器 高坏	南壁寄り 床面直上	[8.8]		70	A・D・F・G・J	良好 にぶい橙7.5YR6/4	坏部、裾部に粗いヘラミガキ
12	土師器 甑	中央部 床面上8cm	(24.0) [9.0]		20	A・B・D・F・J	良好 橙5YR6/6	口縁部内外面一部スス付着
13	土師器 小型甕	埋土	(15.5) [8.1]		20	A・B・C・F・K	良好 にぶい橙7.5YR7/4	胴部外面風化顕著 SE2一部接合
14	土師器 壺	中央部北寄り 床面上5cm	13.2 [4.2]		75	A・D・F・G・J	良好 明赤褐5YR5/8	口縁部ヨコナデ
15	土師器 小型甕	北部 床面上15cm	(15.0) [4.9]		20	A・B・F・I・J	良好 にぶい橙7.5YR7/4	体部外面器面荒れている
16	土師器 小型壺	埋土	(9.1) [7.3]		50	A・B・F・J	良好 にぶい橙5YR6/4	器壁薄い
17	鉄製品 鎌か	埋土	長さ3.8cm 刀幅2.0cm 厚さ0.2cm 重さ9.1g			ミニチュアの鎌か 基部を短く折り曲げる 刃部は断面二等辺三角形で刀側基部に挟込みを持つ 裏面には銹着物が付着する		

第31表 第25号住居跡出土白玉観察表 (第88図)

番号	種類	出土位置	最大径(cm)	上面径(cm)	下面径(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石材	段階	研磨	外形
18	白玉	埋土	0.39	0.37	0.37	0.19	0.13	0.04	滑石	4	上下側面	直線的



第89図 第26号住居跡



第90図 第26号住居跡出土遺物

第32表 第26号住居跡出土遺物観察表 (第90図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 碗	埋土	(13.7) [4.1]		20	A・D・F・G・J	良好 橙5YR6/6	器壁薄い
2	土師器 鉢	埋土	(11.6) [5.7]	(12.0)	10	A・C・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	体部外面スス付着
3	土師器 高坏	貯蔵穴 埋土	(18.2) [4.7]		20	A・D・F・G・J	普通 にぶい橙5YR6/4	坏部内外面粗いヘラミガキ
4	土師器 高坏	西部 床面直上	(19.7) [5.6]		40	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐5YR5/3	歪みが大きい
5	土師器 鉢	埋土	[2.9]	5.6	50	A・B・C・F・J	良好 橙5YR6/6	底部内面磨耗

と焼土粒子を多量に含む褐色土が広がっており、人為的な埋め戻しと考えられる。

貯蔵穴は南西隅部に位置する。水道管によって南側が削平されていたが、平面楕円形と推定される。規模は長径100cm、短径約90cm、深さ44cmである。埋土はローム粒子を含む暗褐色土及び黒褐色土が主体である。ピットや壁溝などは確認されなかった。

出土遺物は土師器碗・鉢・高坏などがある(第90図)。量的に少ない。4の高坏は西壁寄りの床面直上から、3の高坏は貯蔵穴内部から出土したほかは、埋土からの出土である。

1は口縁部が短く外反する碗で、器肉が薄い。2の鉢は外面にススが付着する。3の高坏は内外面に粗いヘラミガキを施す。4は外面にヘラナデ、内面に粗いヘラミガキを施す。5は平底の鉢と考えられ、内底面の器面が薄く剝離している。

時期は夏目遺跡I期に位置づけられる。

第27号住居跡 (第91図)

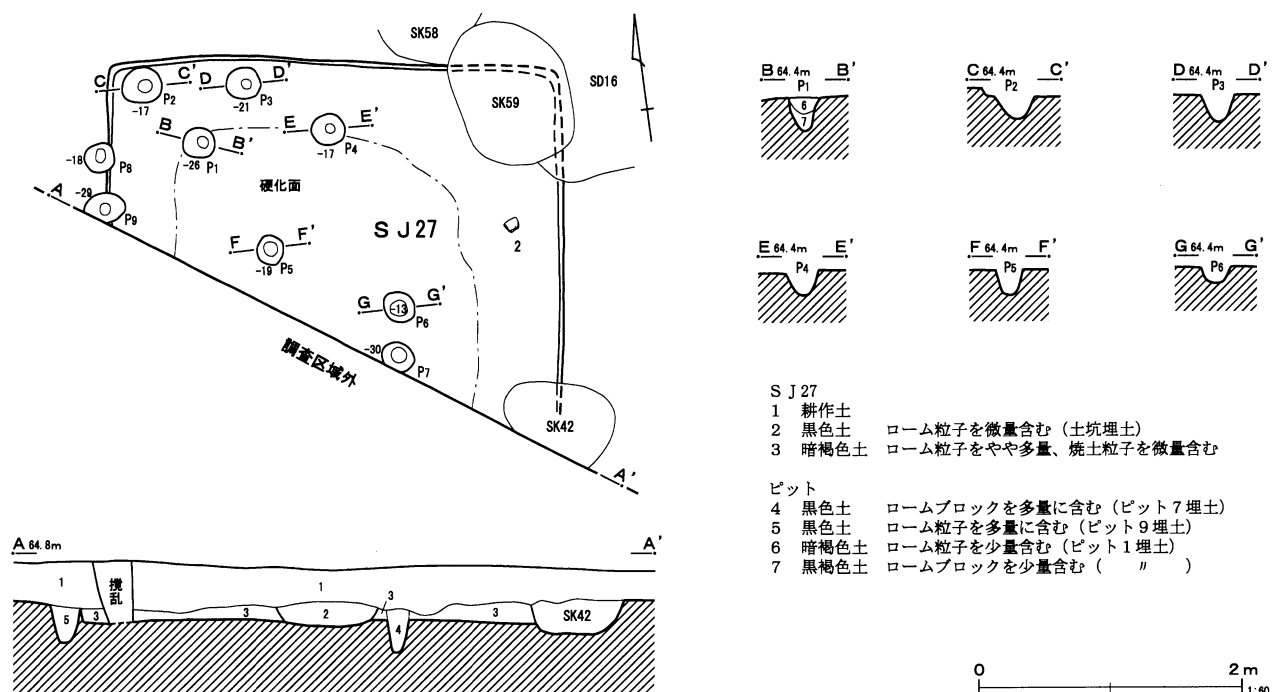
第27号住居跡は調査区北西部のQ-23グリッドに位置する。南西側が調査区外に延び、また東壁部を第42・59号土坑等によって切られるため全容については不明である。

平面形は方形系と推定され、長軸長3.47m、短軸長2.49m、床面までの深さ0.10mである。主軸方位はN-83°-Wを指す。

床面は壁際がやや軟弱であったが、中央部は硬く踏み固められていた。埋土は第2層が後世の土坑状の掘り込みであるが、ローム粒子と焼土粒子を混入する暗褐色土を基調としていた。

カマド・炉跡は検出されなかった。壁溝は巡らしていない。

ピットは9本検出された。深さは13~30cmと幅が認められ、埋土を掘り込んでいるものも含まれている。規則的な配列を示すものはないが、小型の住居になりそうであることから、長軸線上に位



- S J 27
- 1 耕作土
 - 2 黒色土 ローム粒子を微量含む(土坑埋土)
 - 3 暗褐色土 ローム粒子をやや多量、焼土粒子を微量含む
- ピット
- 4 黒色土 ロームブロックを多量に含む(ピット7埋土)
 - 5 黒色土 ローム粒子を多量に含む(ピット9埋土)
 - 6 暗褐色土 ローム粒子を少量含む(ピット1埋土)
 - 7 黒褐色土 ロームブロックを少量含む()

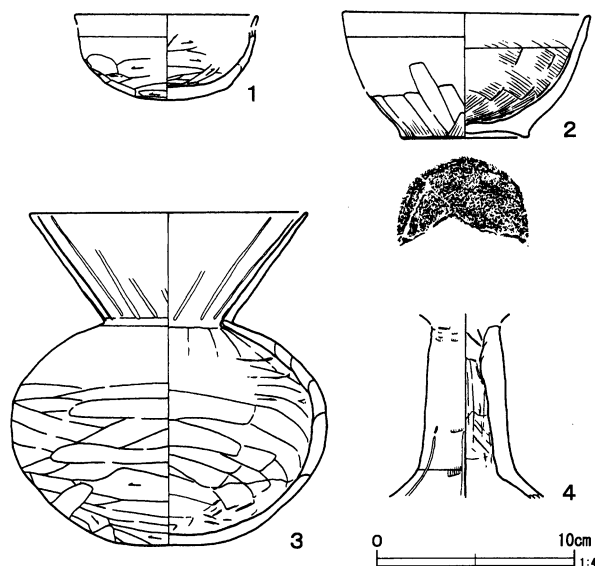
第91図 第27号住居跡

置する P 4 が支柱穴の可能性を残す。

出土遺物は土師器ミニチュア土器・平底鉢・小型壺・高坏がある(第92図)。量的には少ない。東壁寄りの床面から2の平底鉢が出土しているほかは、いずれも埋土からの出土である。

1は塊形のミニチュア土器で、体部内外面ともヘラケズリを施す。2は韓式土器系譜の平底の鉢であろう。底部は上げ底気味で、体部内面に木口状工具によるナデを施す。3は胴部に最大径をもつ小型壺で、大型罌としてよい。口縁部内外面に疎らにヘラミガキを施している。4の高坏は坏接合部にホゾ状粘土塊の剝離痕を明瞭に残す。

時期は坏・壺類を定量で含まず、小型壺も胴部が球形で扁平化していないことから、夏目遺跡I期に位置づけられる。



第92図 第27号住居跡出土遺物

第33表 第27号住居跡出土遺物観察表(第92図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 手捏土器	埋土	[3.6]		50	A・C・D・F・J	良好 橙5YR6/6	塊形 ミニチュア土器
2	土師器 平底鉢	東部 床面上8cm	(12.4) 6.4	6.5	50	A・B・C・F・J	良好 にぶい褐7.5YR5/4	体部内面木口状工具によるナデ
3	土師器 小型壺	埋土	(14.0) 16.9	(15.8)	30	A・B・F・J・K	良好 橙5YR6/6	口縁部と胴部による図上復元
4	土師器 高坏	埋土	[8.7]		50	A・D・F・G・K	良好 にぶい橙7.5YR6/4	坏部接合部剝離痕明瞭

3. 掘立柱建物跡

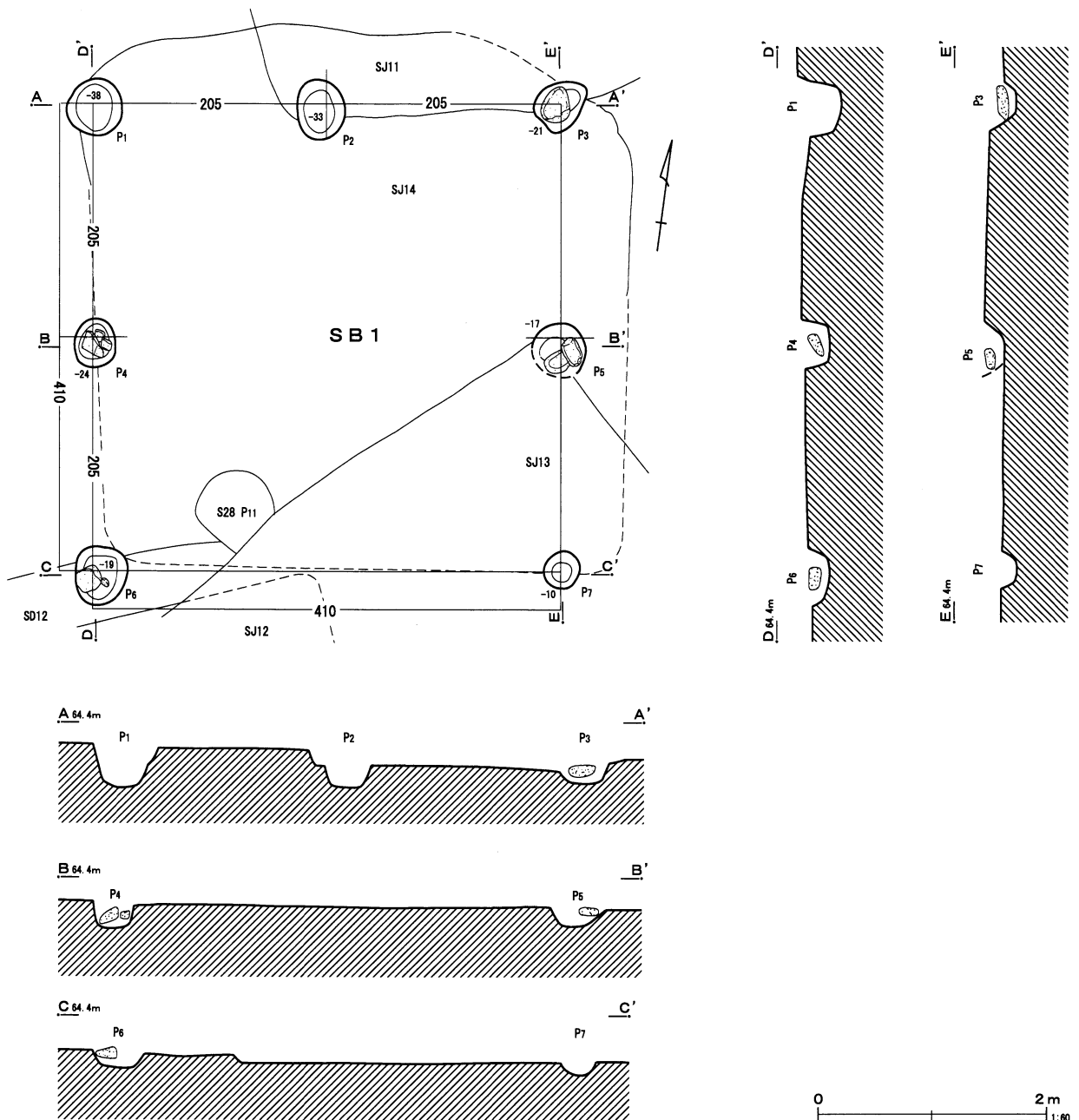
第1号掘立柱建物跡 (第93図)

第1号掘立柱建物跡は調査区中央部のS・T-28・29グリッドに位置する。南へ7.4m程の距離にある第4号柱穴列と概ね軸を揃える。

2×2間の側柱建物跡であるが、P6-P7間の柱間柱を欠く。桁行・梁行寸法は4.10m、主軸方位はN-9°-Wを指す。柱間寸法は2.05m等間に揃えている。

柱穴は直径40~50cm前後、円形で比較的小規模である。深さは17~38cmと全体に浅い。このうちP3~P6の4本の底面には、掌大の扁平な礫が根石として面を揃えて数個置かれていた。柱の沈下を防ぐために設置されたのであろう。

遺物は検出されなかった。時期は不明確であるが、第4・5号柱穴列や溝跡との関連を想定すれば中世頃となろうか。



第93図 第1号掘立柱建物跡

4. 柱穴列

第1・2・3号柱穴列 (第94図)

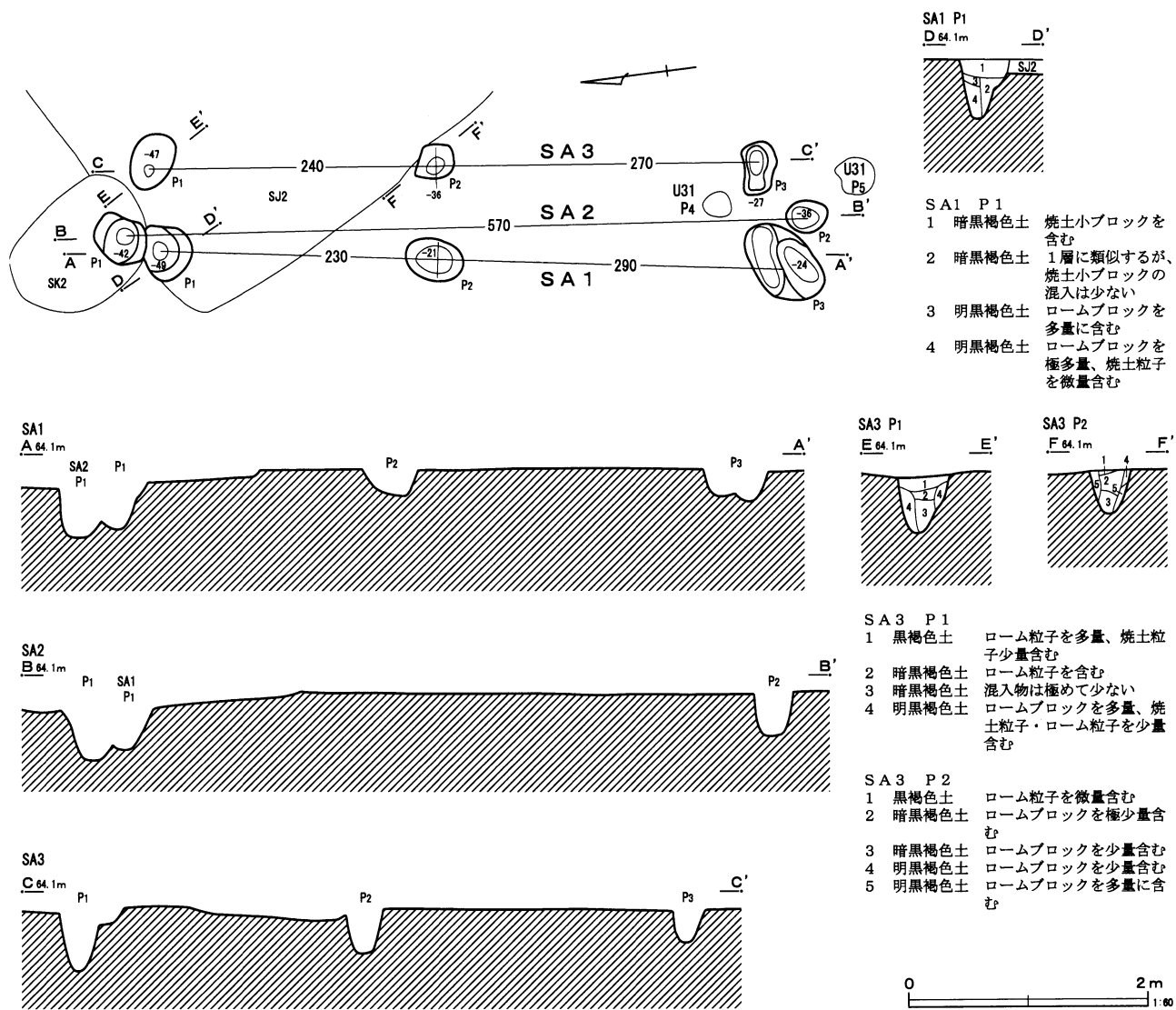
調査区中央部のU-31グリッドに位置する。同一位置における連続的な建替えと考えられるが、先後関係は明確でない。列の主軸方位はN-8°-E前後を指す。第1号柱穴列は3本のピットで、全長5.2m、柱間はP1-2.30m-P2-2.90m-P3である。第2号柱穴列は2本のピットで、全長5.70mである。第3号柱穴列は3本のピットで、全長5.1m、柱間はP1-2.40m-P2-2.70m-P3である。

遺物は奈良・平安時代の土師器片が少量出土しているが、いずれも遺構に伴うものではない。

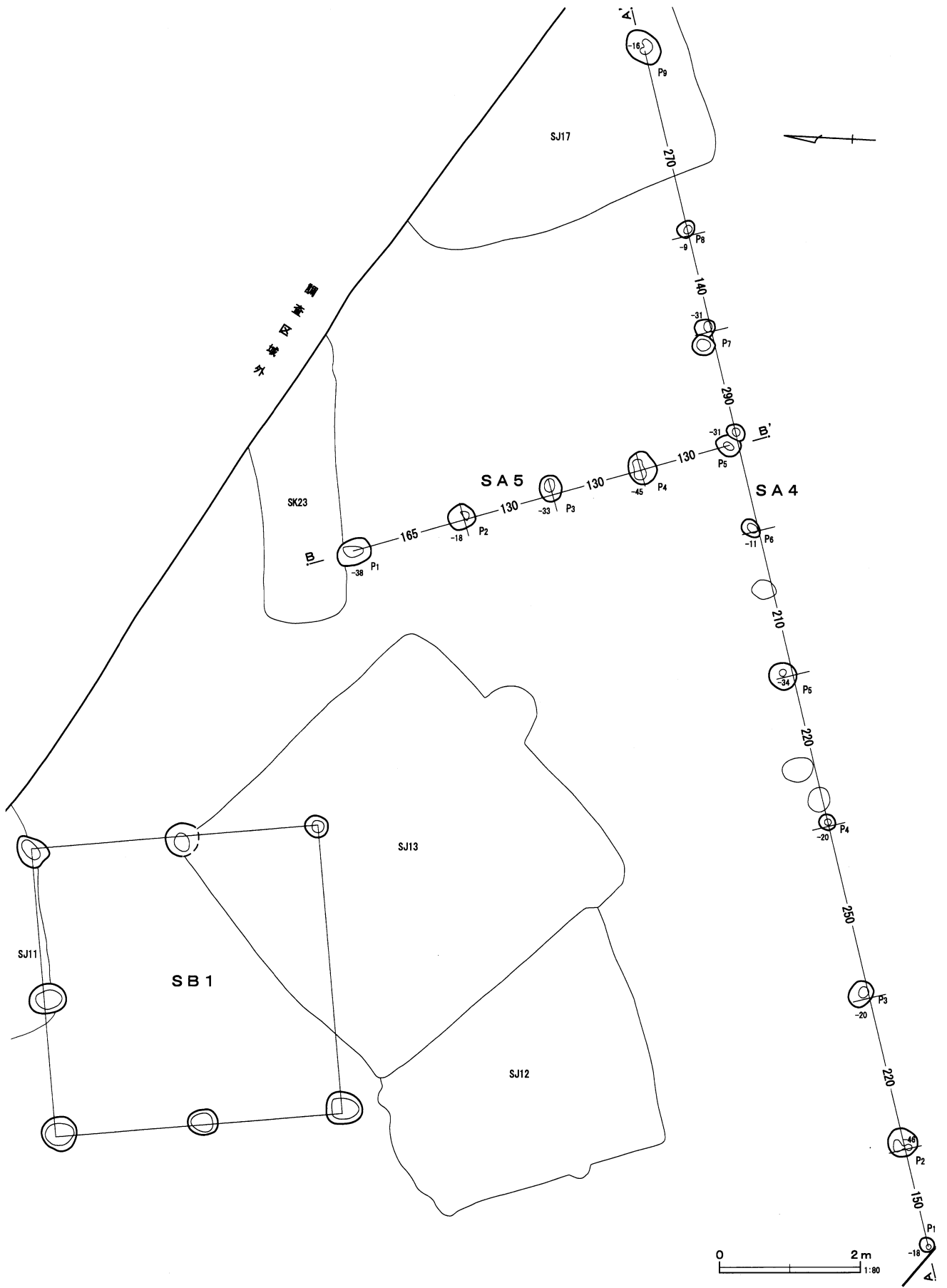
第4・5号柱穴列 (第95・96図)

調査区中央部のS・T-28・29グリッドに位置する。第4号柱穴列は9本のピットが直線的に並ぶ。全長17.5m、柱間寸法は不揃いである。柱穴は円形が主である。第5号柱穴列は5本のピットが直線的に並び、第4号柱穴列のP6-P7間に直交する。全長5.5m、柱間寸法は1.3m等間であるが、P1-P2間はやや広くなり1.6mを測る。列の主軸方位はN-18°-Wである。

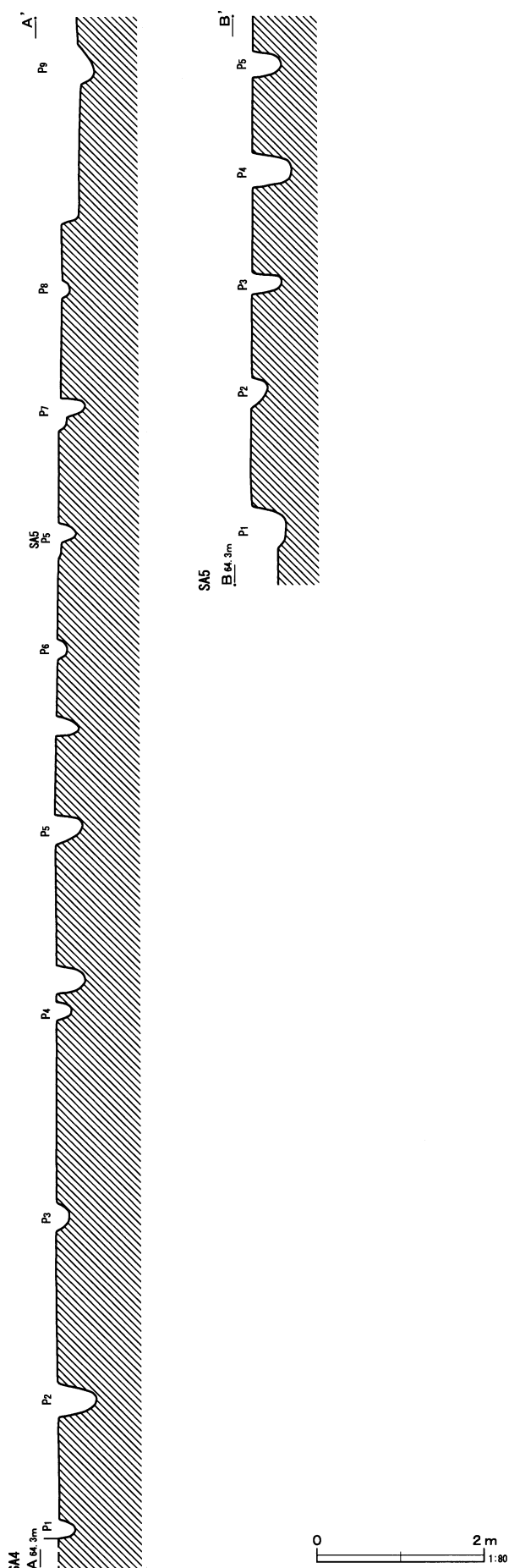
遺物がないため時期は不明確であるが、第1号掘立柱建物跡との関連性から中世頃に位置づけられる。



第94図 第1・2・3号柱穴列



第95図 第4・5号柱穴列(1)



第96図 第4・5号柱穴列(2)

5. 道路跡

大溝跡の西側からは、それに取り付く4条の道路跡が検出された。道路跡は斜面に形成され、集落から大溝(流路跡)に降りるための通路として機能したものと考えられる。

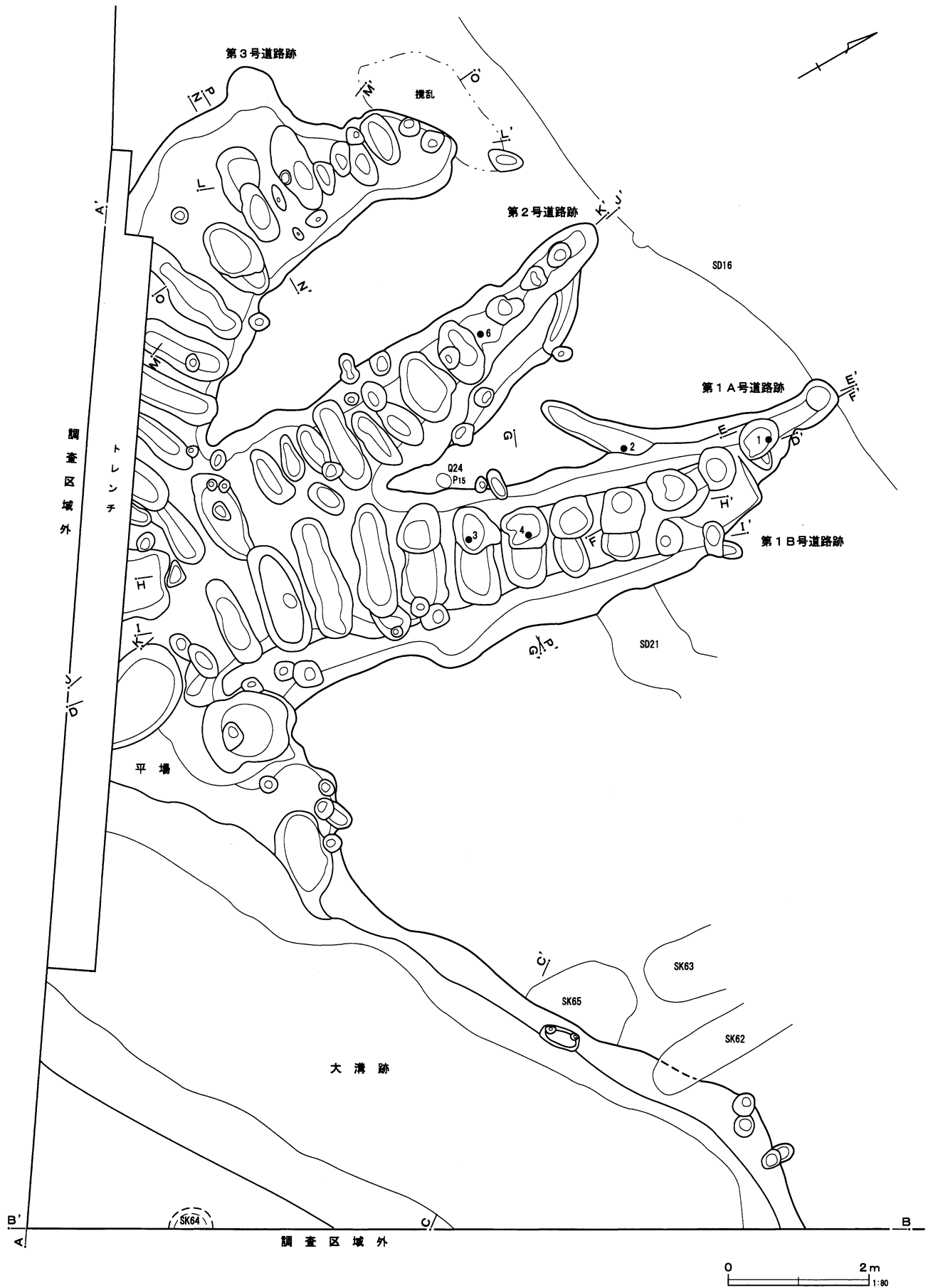
道路跡は完掘した状態ではピットあるいは土坑が連続するような状態であるが、埋土の状態を観察すると、その上面に灰色の粘質土が被っており、底面のみならず全体が非常に硬く踏み固められていた。道路使用時には階段状あるいはスロープ状に整形されていたと考えられる。

底面に掘られたピットや土坑は、斜面の土砂流出を防ぐための当時の道路建設工法と推定される。道路の整備された時期が問題となるが、基本的に大溝跡と同一時期となる。また、4条存在することから一定期間継続して使用されたことは間違いないであろう。大溝及び道路跡から出土した遺物は和泉期から鬼高期のものである。大溝跡から出土したものは7世紀代に降りるものが多く、その時期に機能していたことはほぼ疑いない。どこまで遡るかは非常に難しい問題を含むが、第1号道路跡は6世紀前半から中頃までは遡る可能性がある。夏目遺跡の成立に関わるとすれば、当初(和泉期)から存在した可能性も十分予想されるであろう。

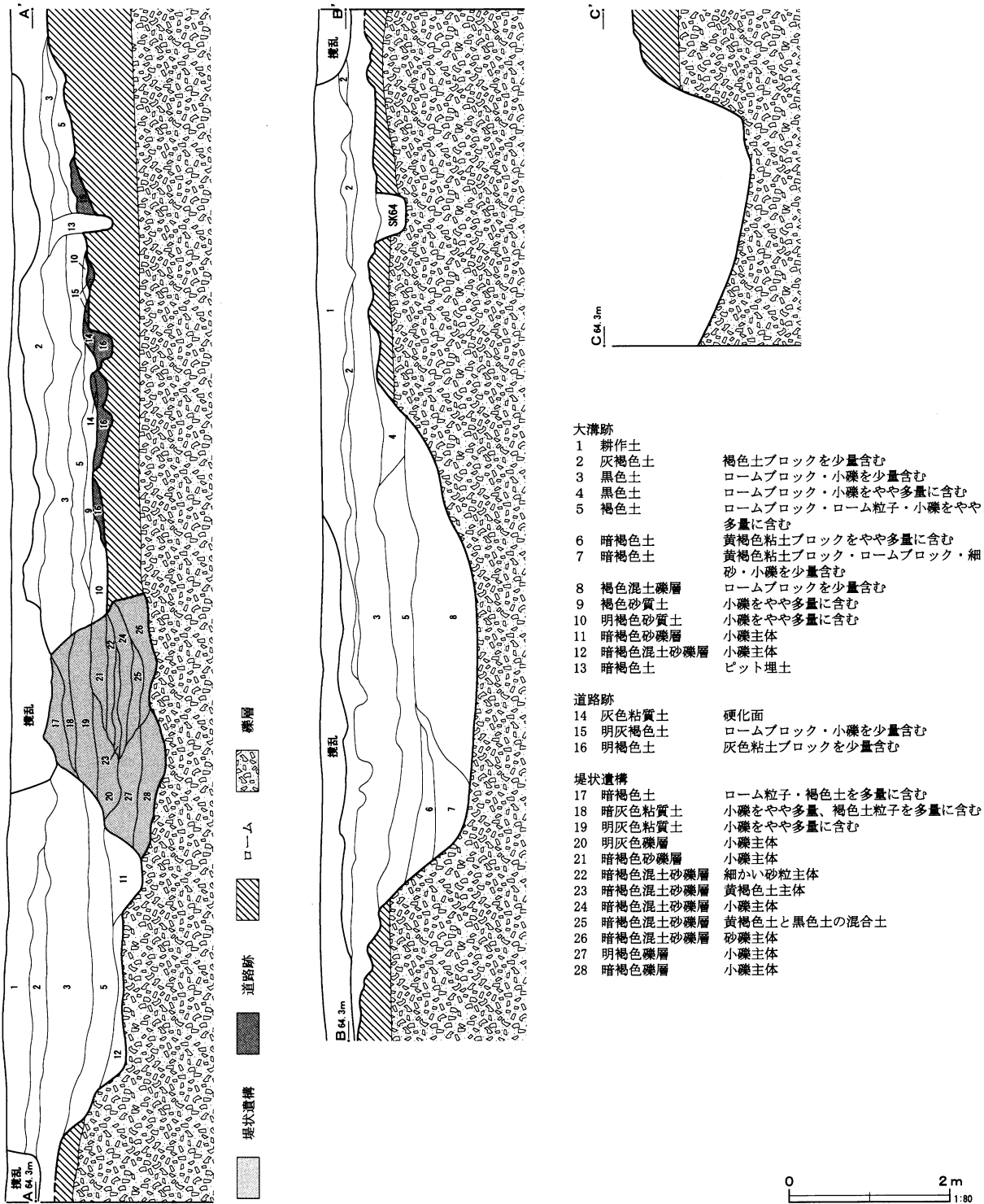
第1号道路跡(第97～99図)

3条の道路跡のうち、一番東側に位置する。当初1条と考えていたが、調査を進めたところ、先端が分岐することが判明した。分岐した古段階と思われるものを第1B号道路跡、当初から認識したものを第1A号道路跡とした。

第1A号道路跡は堀割状の溝の中に14基の土坑が連続した形態を呈する。長さ9.60m、北側から大溝に向かって階段状に傾斜する。土坑埋土には灰色の粘質土が目立ち、非常に硬化していた。底面は小礫混じりでやはり硬化面を形成していた。第1B号道路跡は12基の土坑が連続していた。



第97図 道路跡・大溝跡 (1)



第98図 道路跡・大溝跡（2）

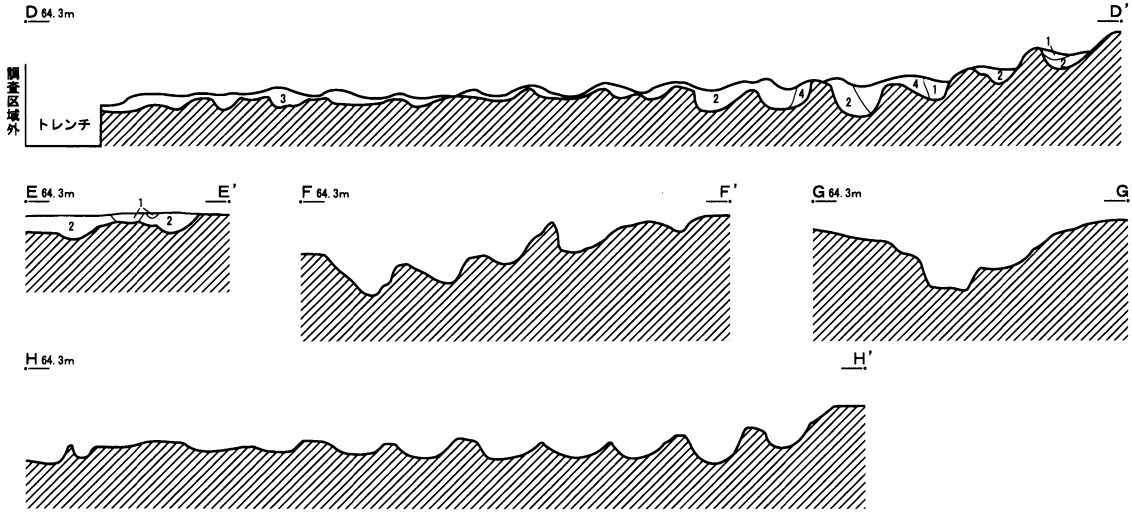
長さ8.0mと第1A号道路跡よりもやや短い。埋土の状況はほぼ同じである。道路を降りた部分は平場状の面が造成されていた。取水や作業をするための作業空間として機能したと推定される。

出土遺物は少ない。第100図1～4は第1A号道路跡から出土した。1は模倣環で、底面から12

cmほど浮いた埋土中から出土した。内面にのみ炭素吸着による黒色処理を施す。2～4は高環の脚部である。2・3は道路上の堆積土、4は道路を構成する土坑埋土から出土した。

時期は1の模倣環や2の短脚化した高環から6世紀前半から中頃となろうか。

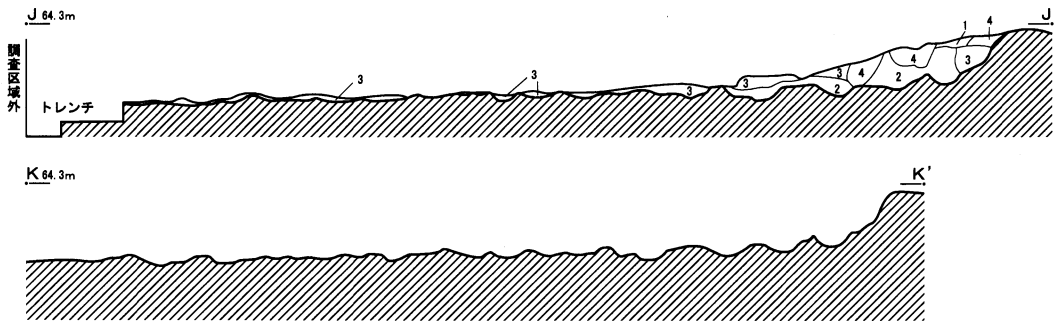
第1号道路跡



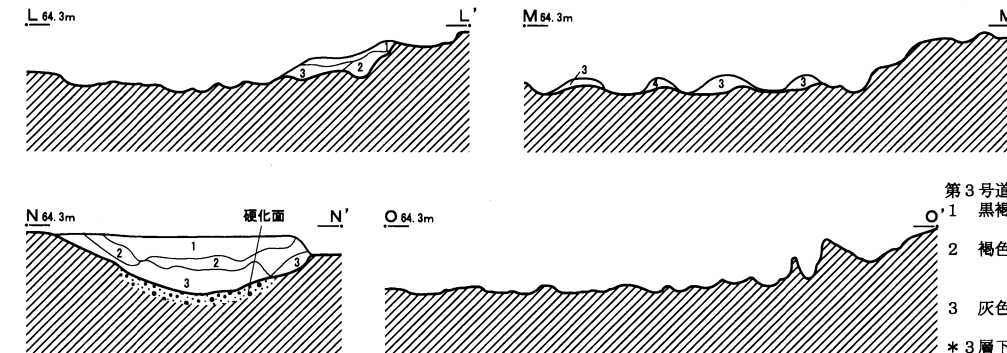
第1・2号道路跡

- 1 褐色土 灰色粘土ブロック・ロームブロックを含み、やや軟質
- 2 灰色粘質土 ロームブロックを含み、非常に硬くしめる
- 3 褐色土 灰色粘質土・小礫を含む
- 4 褐色土 ローム土を含み、やや硬質で、硬くしまっているが2層よりも軟らかい

第2号道路跡



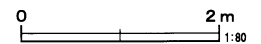
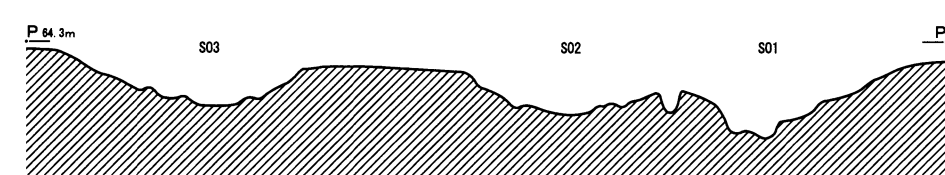
第3号道路跡



第3号道路跡

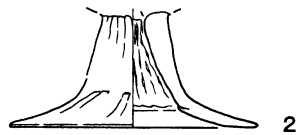
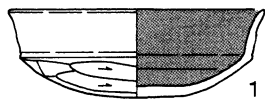
- 1 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子を少量含む
 - 2 褐色土 黒色土ブロックを斑点状に含み、ローム粒子を少量含む
 - 3 灰色砂質土 灰色粘土ブロック・褐色酸化砂質土・小礫を含む
- * 3層下面は非常に硬化した面となり、卵大の小礫を敷く。

第1～3号道路跡

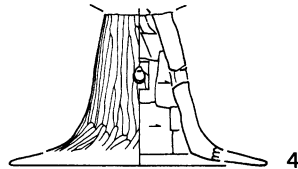
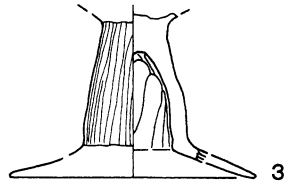
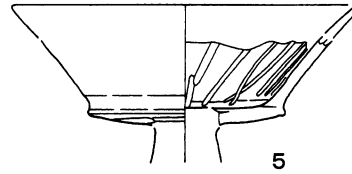


第99図 道路跡

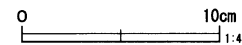
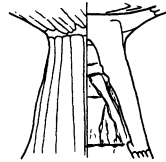
第1A号道路跡



第1・2号道路跡



第2号道路跡



第100図 道路跡出土遺物

第34表 道路跡出土遺物観察表 (第100図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大直径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	第1A号道路跡 底面上12cm	(12.8) 4.5		50	A・B・F・J	良好 橙5YR7/8	内面のみ炭素吸着による黒色処理を施す
2	土師器 高坏	第1A号道路跡 底面上48cm	[5.7]	(12.6)	25	A・B・D・F	良好 明赤褐5YR5/6	器面は磨滅している 柱状部内面絞り目顕著
3	土師器 高坏	第1A号道路跡 底面上51cm	[7.6]		90	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	器面は磨滅著しい 柱状部内面指ナデを丁寧に施す
4	土師器 高坏	第1A号道路跡 底面上7cm	[7.6]		95	A・D・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	柱状部中央に一箇所透孔を穿つ 上端部二次被熱により黒色化する
5	土師器 高坏	第1・2号道路跡 埋土	[4.4]		20	A・B・C・F	良好 明褐5YR5/6	坏部内面放射暗文を施文
6	土師器 高坏	第2号道路跡 底面上43cm	[7.7]		80	A・C・D・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	柱状部外面ヘラナデ 内面絞り目顕著

第2号道路跡 (第97~99図)

第1号道路跡の西側に隣接する。長さ7.6m、堀割状の溝の中に13基の土坑が連続する形態である。第1号道路跡との新旧関係は明確に把握できたわけではないが、土坑の切り合いや埋土の状態からは第2号道路跡の方が古い可能性があると判断した。

出土遺物は少ない。第100図5は第1・2号道路跡から出土した高坏の坏部の破片である。坏部の稜はしっかりしており、内面には放射状のミガキがある。6は第2号道路跡から出土した高坏の脚部である。脚部は長く伸びる。

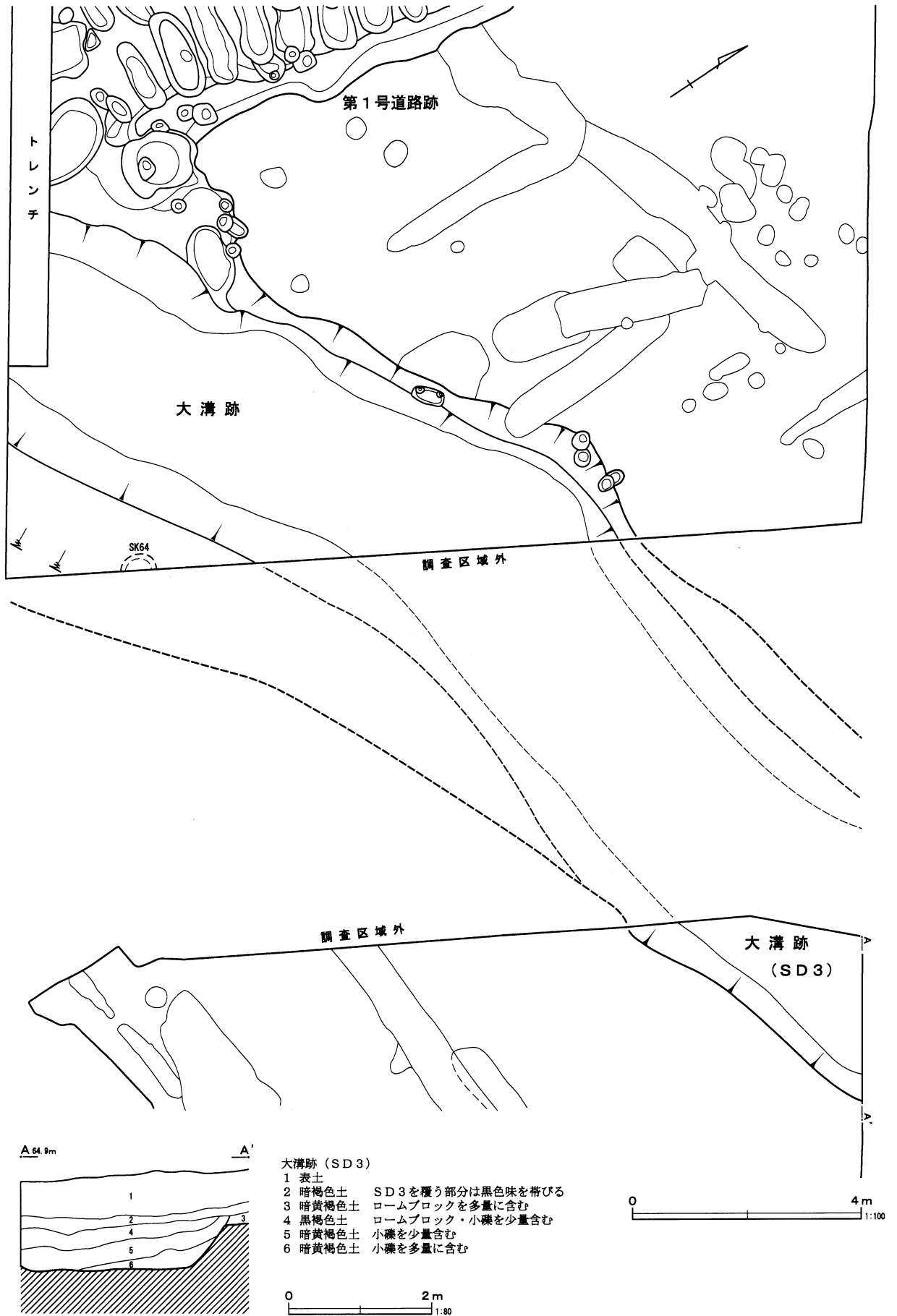
第3号道路跡 (第97~99図)

最も西側に位置する道路跡で、長さ7.2m。やや湾曲して大溝に向かう。基本的な構造は第1・2号道路跡と大差なく、幅2.8mの溝中に波板状の土坑を連続して掘削している。調査時点では明確

に把握できなかったが、土坑の状態から一度掘り直した可能性がある。

調査区際の断面観察において大溝跡と本道路跡との間に不自然な堆積が確認された。大溝跡左岸はローム層を抉り込むようにオーバーハングし、小礫混じりの土が縞状に堆積していた。断面のみの観察であり躊躇されるが、堤防状の盛土ではないかと考えた(第98図)。調査時点では、第3号道路跡の先に堤防状遺構が作られるのも不自然であると認識していたが、第2号、または第1号道路跡に作り替えた段階の築堤と考えれば説明はつくのかもしれない。ただし、調査区東側の第97図B—B'断面では確認できなかった。今後大溝跡西側延長部の調査を待って、その適否を再検討すべきであろう。

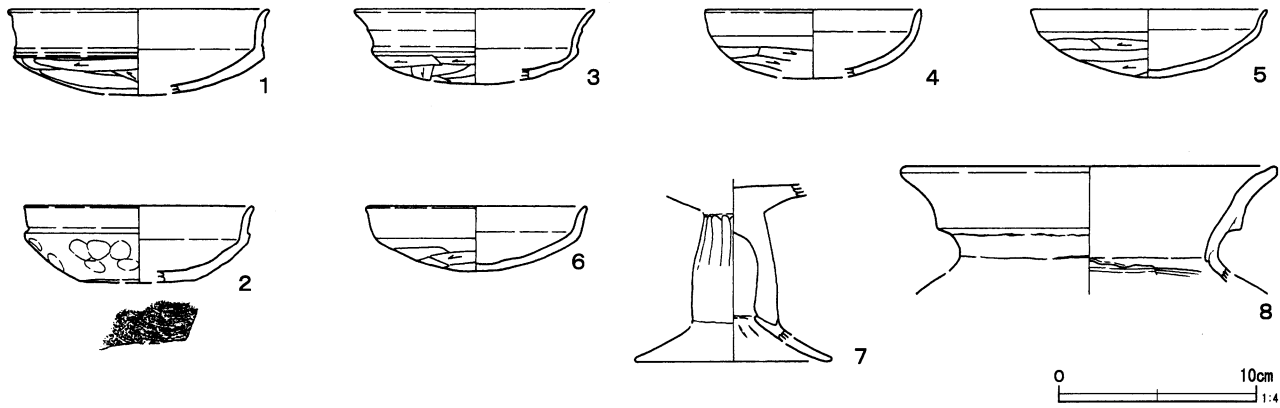
時期は不明確であるが、道路跡の中では最も古い可能性を考えておきたい。



第101図 大溝跡・第64号土坑

SK64

大溝跡



第102図 大溝跡・第64号土坑出土遺物

第35表 第64号土坑出土遺物観察表 (第102図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	S K64 埋土	(13.0) [4.2]		20	A・B・F・J	良好 橙2.5YR6/8	内外面磨耗
2	土師器 坏	S K64 埋土	(11.4) [3.9]	(5.8)	40	A・B・C・F・J	良好 にぶい褐7.5YR5/4	体部外面指頭圧痕が残り粘土亀裂顕著

第36表 大溝跡出土遺物観察表 (第102図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径	残存	胎土	焼成色調	備考
3	土師器 坏	Q24グリッド y区埋土	(12.0) [3.6]		25	A・D・F・J	良好 橙7.5YR6/6	内外面磨耗
4	土師器 坏	Q24グリッド s区埋土	(10.8) [3.4]		35	A・B・C・G	普通 明赤褐5YR5/6	内外面磨耗
5	土師器 坏	R24グリッド i区黒色土	(11.0) [3.3]		50	A・B・C・G・J	普通 橙5YR6/6	内外面とも磨滅著しく、調整痕は不明瞭
6	土師器 坏	R24グリッド i区黒色土	11.8 3.4		70	A・B・C・G・J	普通 橙5YR6/6	内外面とも磨滅著しい
7	土師器 高坏	Q24グリッド u区黒色土	8.1		85	A・C・F・G	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	柱状部外面ヘラナデ
8	土師器 壺	トレンチ	(18.8) [5.9]		20	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胎土中に角閃石粒子を多く含む

6. 大溝跡

第3号溝跡 (第97・98・101図)

大溝跡 (第3号溝跡) は夏目遺跡を二分する道路を挟んで、両側から検出された。現道の下に位置することから全容は不明だが、幅はおおよそ6m前後と推定される。南西から北東方向 (軸方位はN-65°-E前後) に向かって流れることが確認された。下幅は約2.5m、深さは現地表面から約1.8mである。底面は礫層まで達しており、砂や礫の堆積からかなりの水流があったことがわかる。自然流路であるのか、人為的な掘削なのかという判断は難しいが、道路跡と一体となって機能していたことから、少なくとも人為的に維持・管理され、恒常的に利用がなされていたことは疑いない。

出土遺物は摩滅した小片が多い。土師器坏・高坏・壺などがある (第102図3~8)。また、大溝跡調査区際の斜面に位置する第64号土坑から出土した土器も大溝跡に関わる可能性が高いと判断した (第102図1・2)。遺物は大きく新古の2時期に分かれ、古い様相は6世紀中頃以前まで遡る (1・7・8) が、新しい遺物は7世紀前半~後半の模倣坏がある (2~6)。

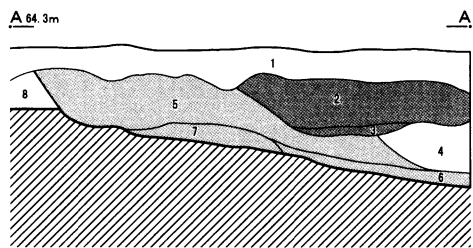
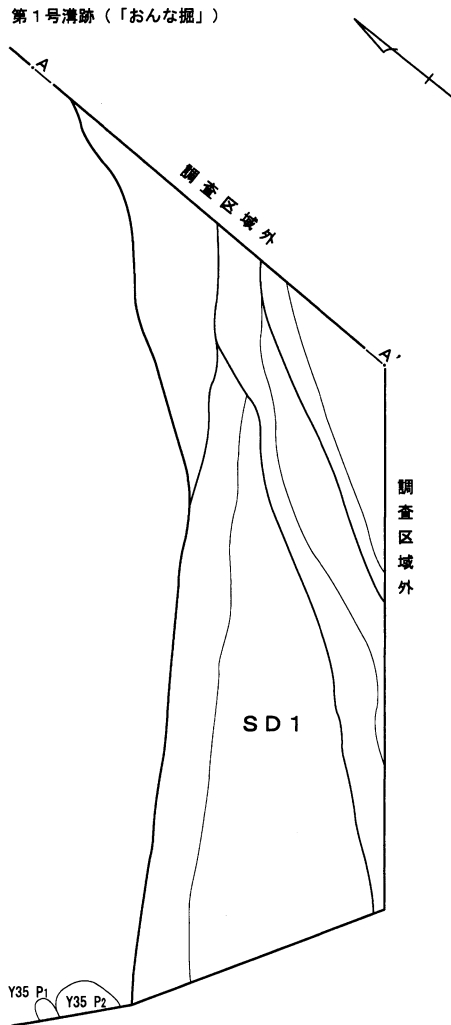
大溝跡は7世紀中頃~後半に機能していたのは確実であろう。問題は開鑿時期である。道路跡の検討からは6世紀またはそれ以前に遡る可能性も考えられる。更なる検討は必要だが、集落の開始時期である5世紀代を射程に入れるべきであろう。

7. 溝 跡

溝跡は大溝跡 (SD 3) を含め、合計23条を検出した。

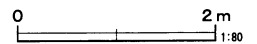
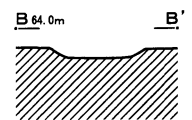
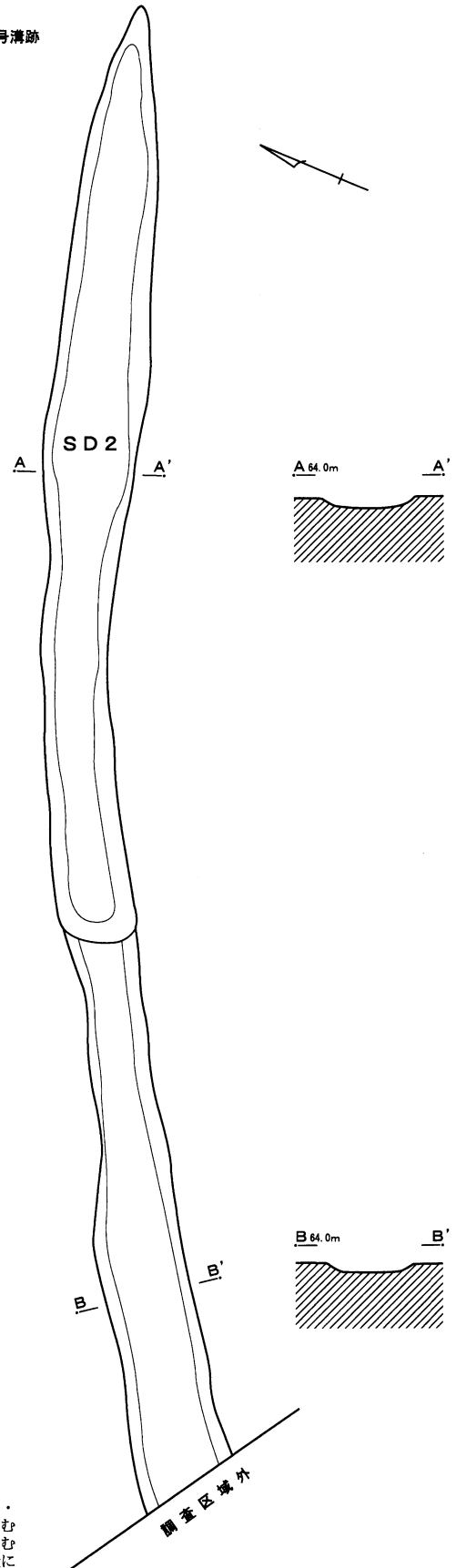
第1号溝跡 (第103図)

調査区南東端のY・Z-35・36グリッドに位置



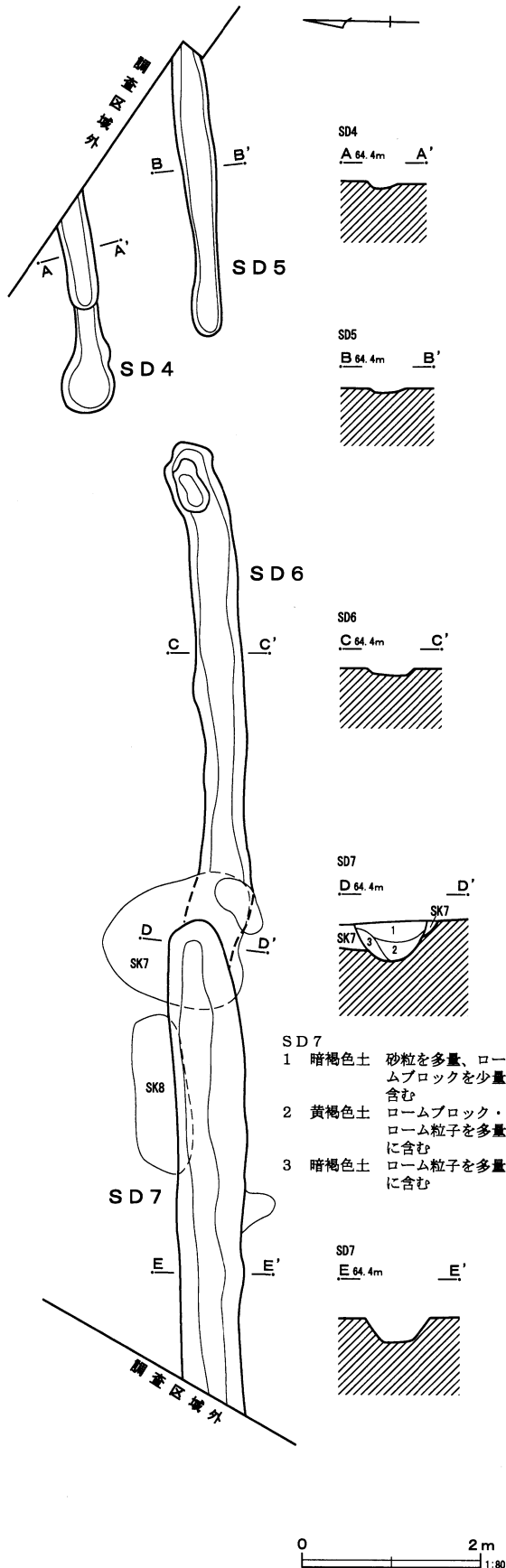
- | | | | |
|--------|-------------|---------|-------------|
| SD 1 | | | |
| 1 耕作土 | 浅間A軽石を多量に含む | 5 暗褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子・ |
| 2 黒褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子・ | 6 暗褐色土 | ローム粒子を多量に含む |
| 3 黒褐色土 | ローム粒子を少量含む | 7 黒褐色土 | ローム粒子を多量に含む |
| 4 黒褐色土 | ローム粒子を多量、焼土 | 8 暗黒褐色土 | ロームブロックを多量に |
| | 粒子・炭化物粒子を少量 | | 含む |
| | 含む | | ローム粒子を少量含む |
| | 焼土粒子・炭化物粒子・ | | |
| | ローム粒子を多量に含む | | |

第2号溝跡



第103図 第1・2号溝跡

第4・5・6・7号溝跡



第104図 第4・5・6・7号溝跡

する。この溝跡は本遺跡の南に広がる社具路遺跡との境界をなす河川跡で、通称「おんな堀」と呼ばれている。南西から北東に向って流下し、確認長9.00m、深さ0.76mである。土層断面の観察から第5～7層、第4層、第2・3層と数次にわたって掘削されたことが判明した。

遺物は出土していないが、周辺の調査により少なくとも古代から中世にかけて人工的に掘削・整備された溝跡（河川跡）と推定される。

第2号溝跡（第103図）

調査区南東部のW-32～34、X-32グリッドに位置する。倒木痕が集中する遺構分布希薄地の緩斜面部に直交するように緩やかに蛇行する。検出された長さは16.75m、幅0.64～1.10m、深さ0.06～0.14mである。

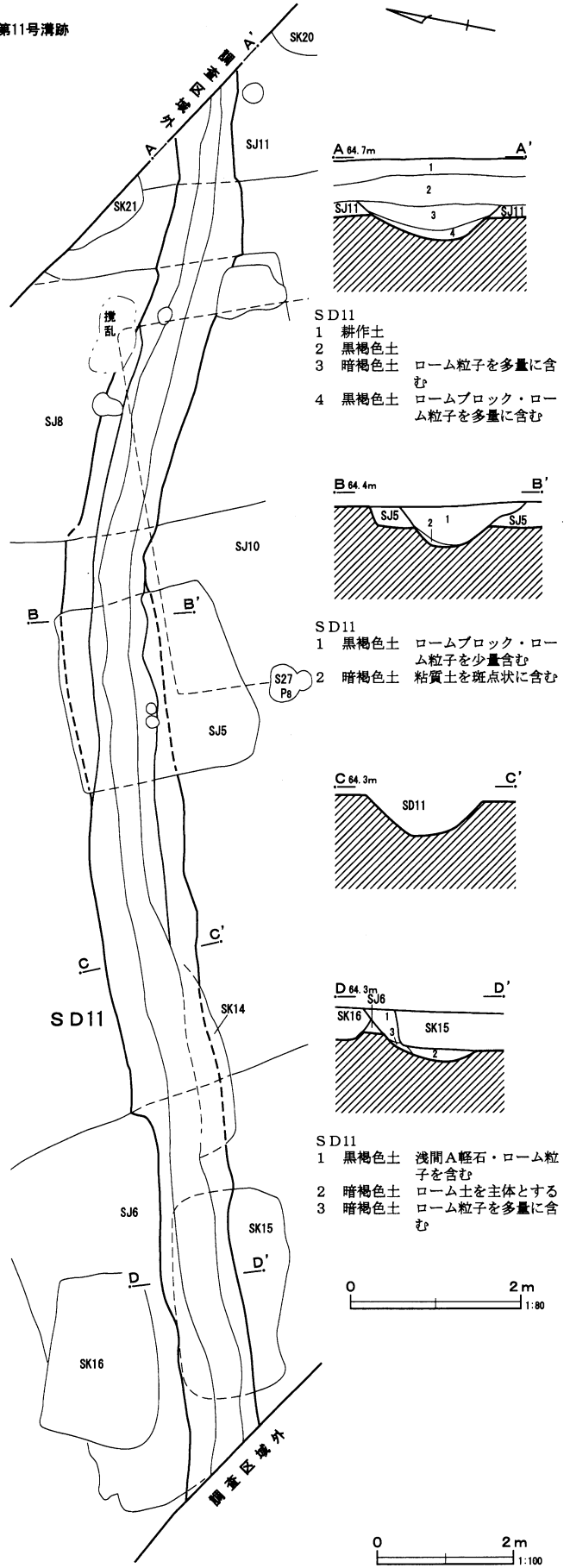
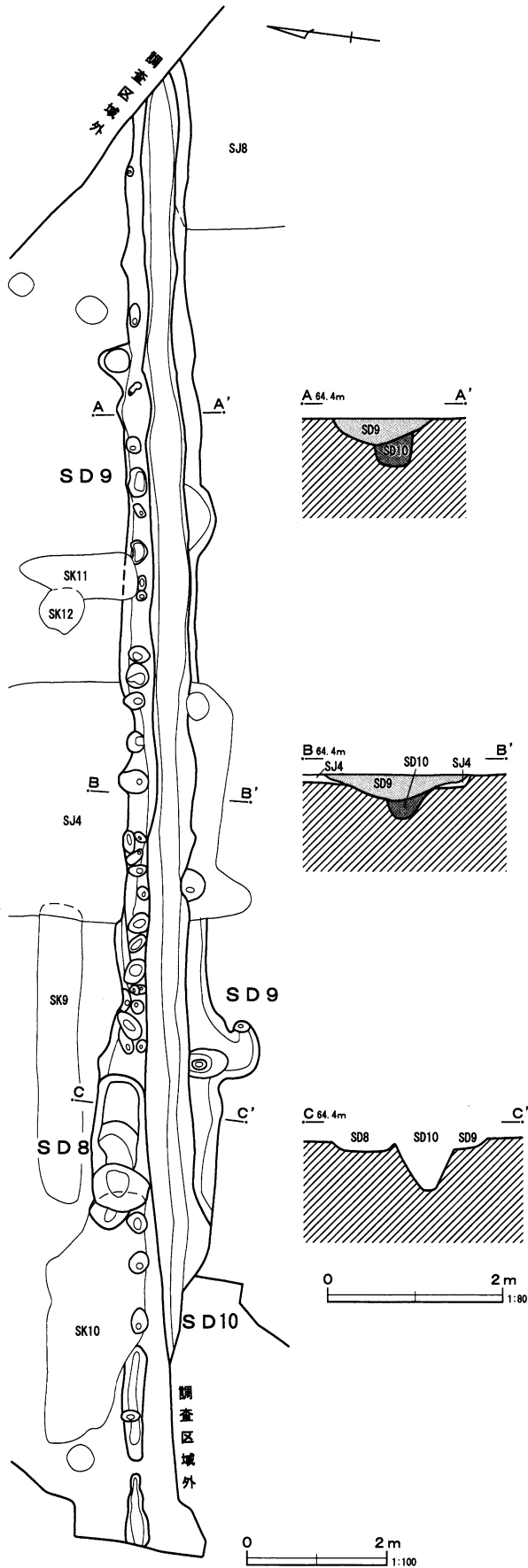
遺物は出土しなかった。

第4～7号溝跡（第104図）

第4～7号溝跡は調査区北西部のR-26・27グリッドに位置する。第5～7号溝跡は東西方向に直線的に延びる同一の溝跡と考えられる。また第4号溝跡も第5号溝跡に並行することから関連が窺われる。幅0.43～0.80m、深さ0.80～0.36mの小規模な溝で、第6号溝跡と第7号溝跡の接合部付近では第7・8号土坑が重複し、それらを切っている。遺物は古墳時代から古代の土器が少量出土しただけで、中世以降の遺物はない。

第8～10号溝跡（第105図）

第8～10号溝跡は調査区北西部のS-25～27グリッドに位置する。この3条は本来一連の溝跡と想定され、調査区を東西方向に横切る。走行方向はN-81°-Eを示す。土層断面の観察から最初に断面V字形の第10号溝跡が掘削され、その後、半分ほど埋没した第10号溝跡をトレースするように第9号溝跡が掘削されている。第10号溝跡は直線的に延び、長さ18.2m、幅0.80m、深さ0.57mである。第9号溝跡は幅2.26m、深さ0.29mで幅広の浅い溝である。また北側斜面部には連続す



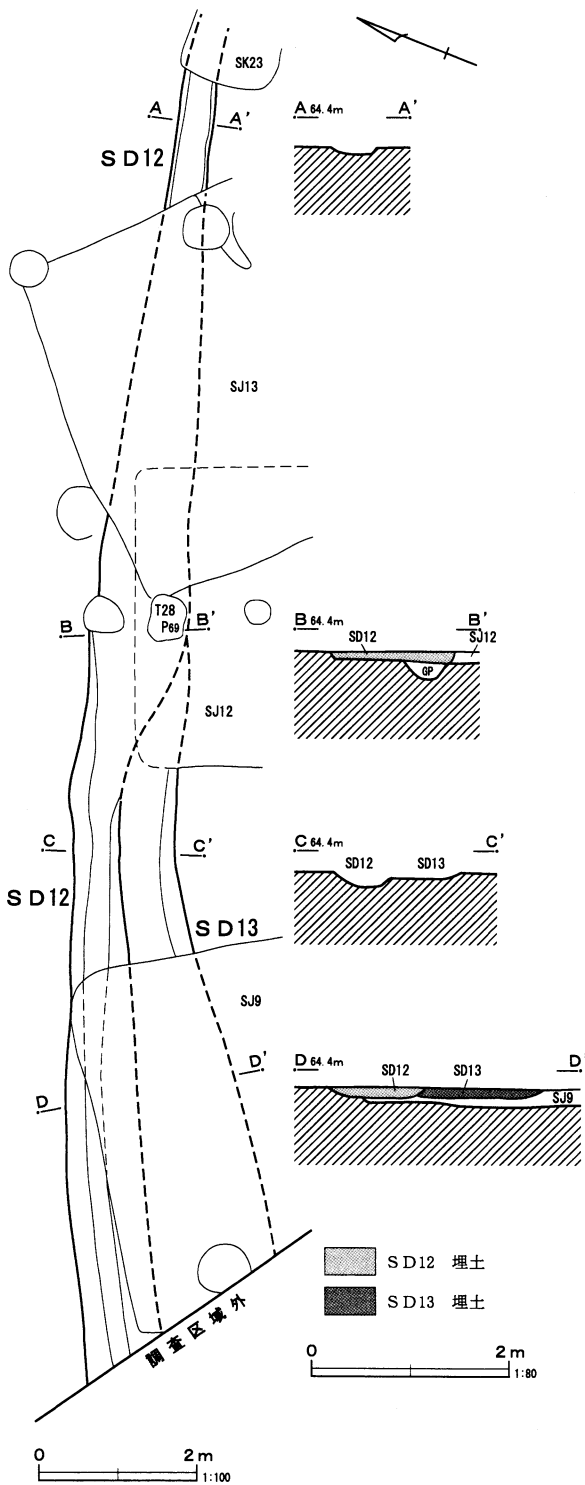
- SD 11
- 1 耕作土
 - 2 黒褐色土
 - 3 暗褐色土
 - 4 黒褐色土
- ローム粒子を多量に含む
ロームブロック・ローム粒子を多量に含む

- SD 11
- 1 黒褐色土
 - 2 暗褐色土
- ロームブロック・ローム粒子を少量含む
粘質土を斑点状に含む

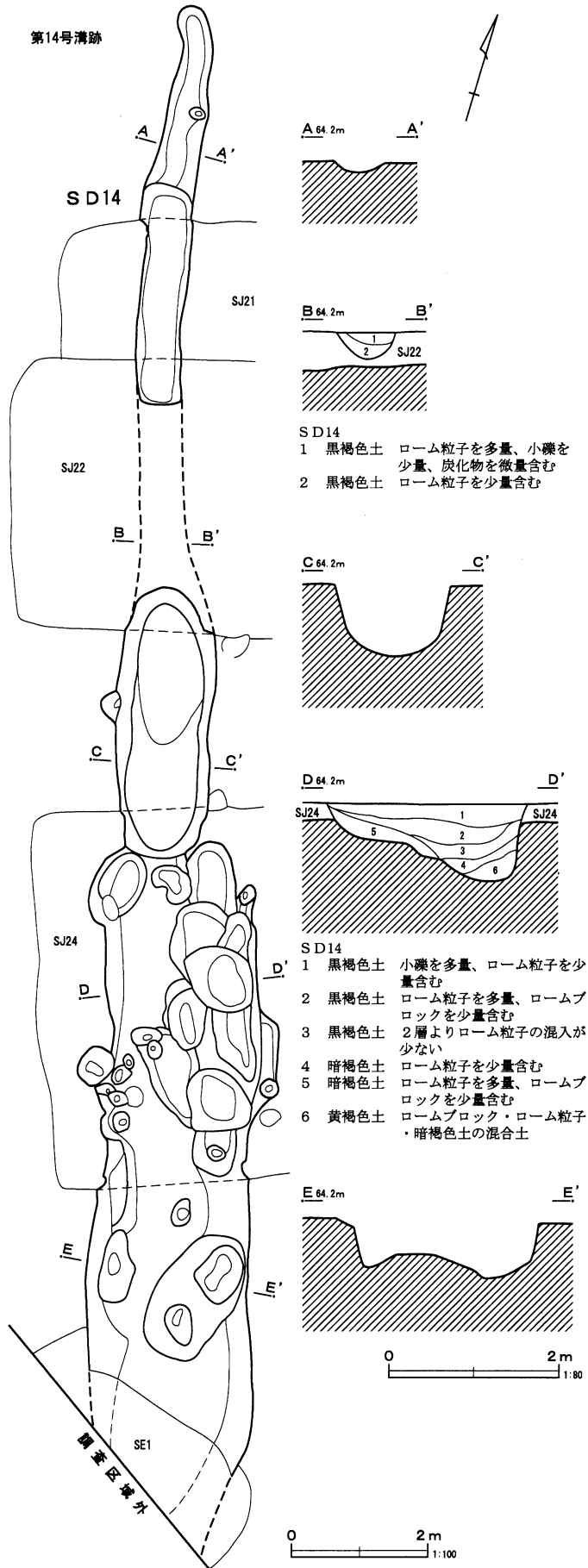
- SD 11
- 1 黒褐色土
 - 2 暗褐色土
 - 3 暗褐色土
- 浅間A軽石・ローム粒子を含む
ローム土を主体とする
ローム粒子を多量に含む

第105図 第8・9・10・11号溝跡

第12・13号溝跡

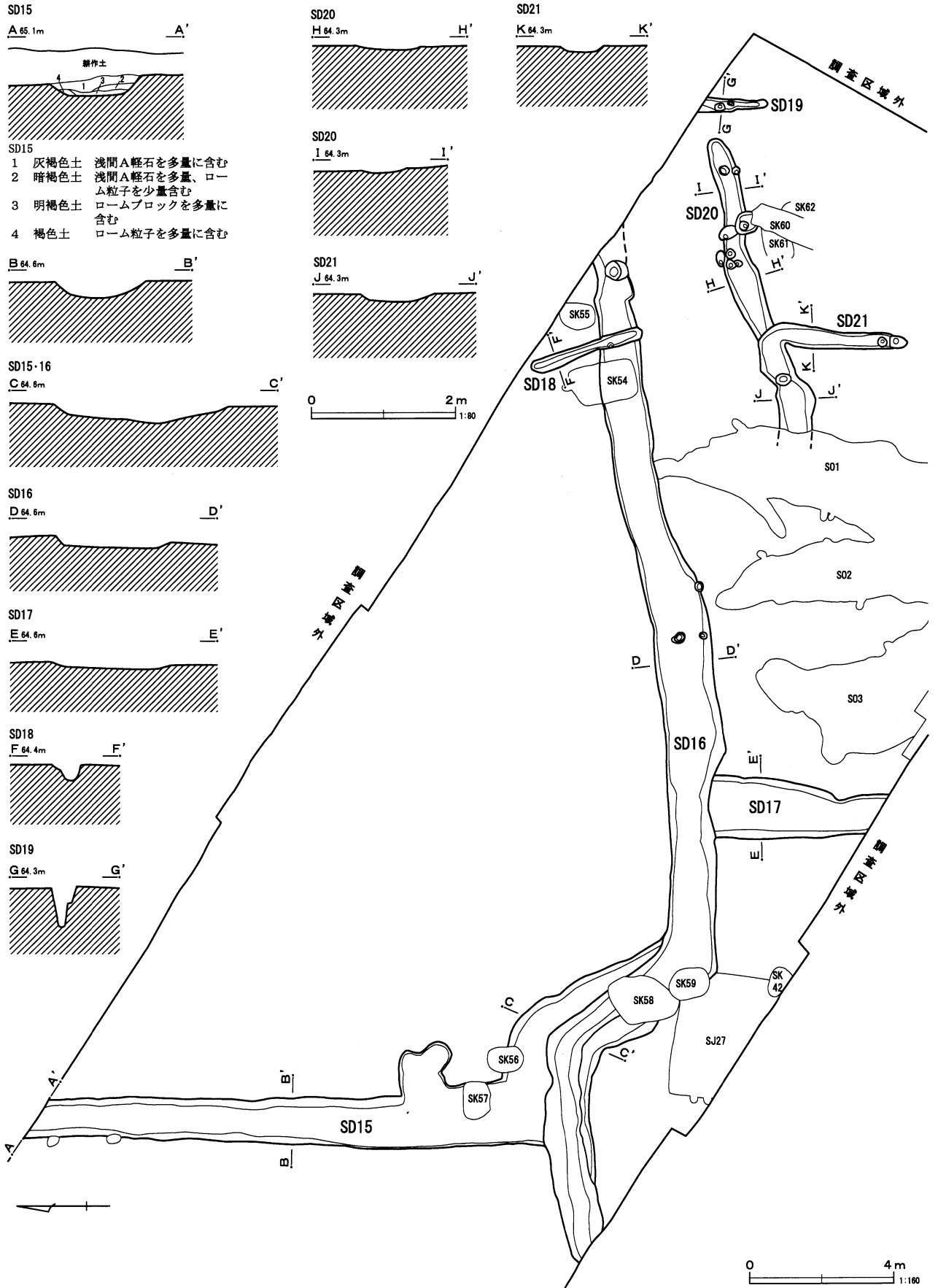


第14号溝跡



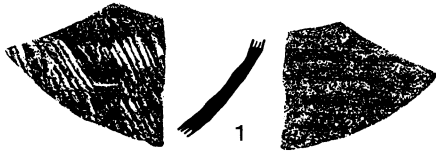
第106図 第12・13・14号溝跡

第15~21号溝跡

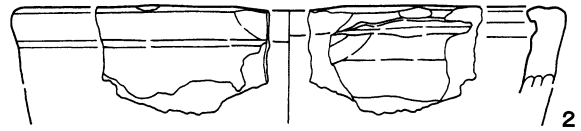


第107図 第15・16・17・18・19・20・21号溝跡

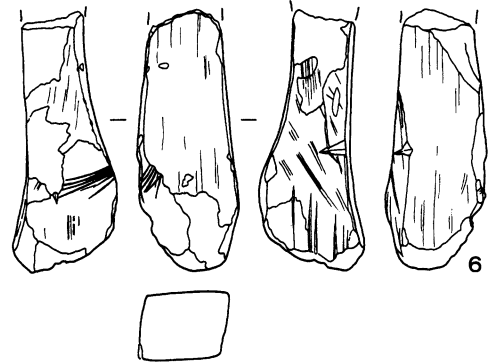
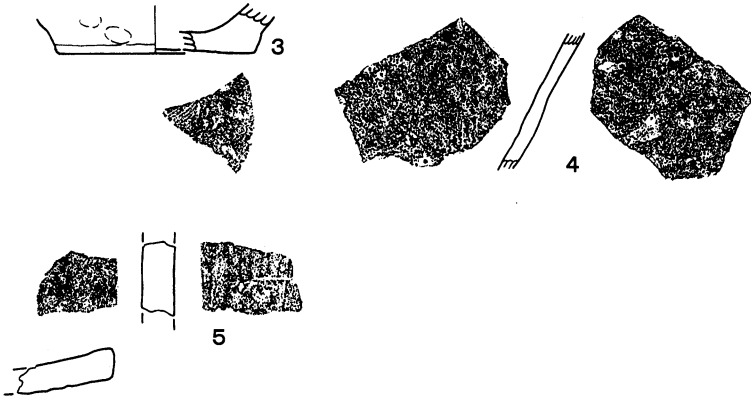
SD10



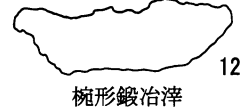
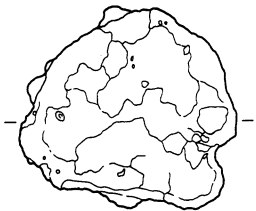
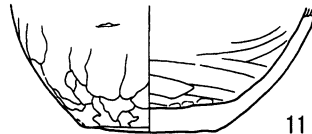
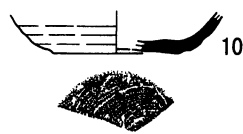
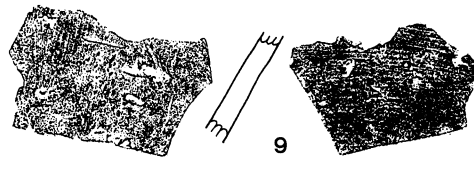
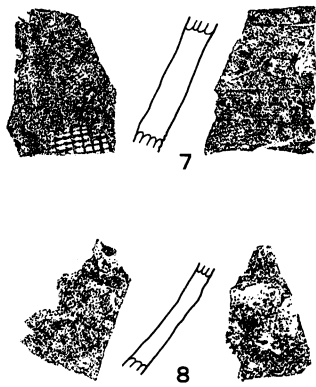
SD12



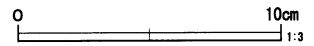
SD11



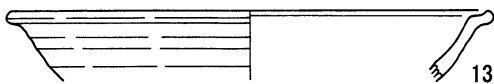
SD14



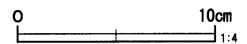
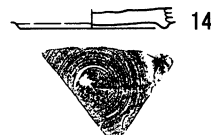
椀形鍛冶滓



SD15



SD16



第108図 溝跡出土遺物

るように小穴が穿たれており、柵列状の機能を有していた可能性が高い。第8号溝跡は第9号溝跡に続くように西へ断続的に延び、第10号土坑と重複する。

遺物は第108図1の須恵器甕が出土したが、時期を示すような遺物はない。

第11号溝跡 (第105図)

調査区北西部のS-26~28グリッドに位置す

第37表 溝跡出土遺物観察表 (第108図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	須恵器甕	S D10 埋土			破片	A・C・G・K	普通 にぶい黄2.5Y6/3	外面：平行叩き目 内面：ロクロナデ 在地産
2	軟質陶器鉢	S D12 埋土	(27.0) [5.5]		10	A・C・G・J	普通 黄灰2.5Y6/1	口唇部押圧により片口状に変形する瓦質
3	陶器鉢	S D11 埋土	[2.5]	(10.0)	15	A・G・J	良好 灰黄2.5Y6/2	底部糸切り離し後ナデ 内面平滑
4	陶器甕	S D11 埋土			破片	A・C・G・J	良好 灰赤7.5R6/2	常滑系
5	瓦平瓦	S D11 埋土			破片	D・F・I・J	良好 橙7.5YR6/6	凸面ナデ調整 凹面砂粒付着
6	石製品砥石	S D11 埋土	長さ13.2cm 幅(長)5.2(短)2.9cm 厚さ5.6cm 重さ349.5g			凝灰岩 各面とも良く砥面が残る		
7	陶器甕	S D14 埋土			破片	A・C・G・J	良好 にぶい赤褐5YR5/3	常滑系 外面に格子状叩きの押印文が残る
8	陶器甕	S D14 埋土			破片	A・C・G・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	常滑系 内面降灰が掛かる
9	陶器甕	V30グリッド S D14 埋土			破片	A・J・K	良好 にぶい褐5YR5/4	常滑系 内面平滑 鉢に転用
10	須恵器坏	V30グリッド S D14 埋土	[2.2]	(6.3)	35	A・B・I・J	不良 にぶい黄褐10YR7/2	末野窯産 底部右ロクロ回転糸切離し未調整
11	土師器甕	S D14 埋土	[6.4]	6.8	80	A・C・D・F・G	良好 灰褐7.5YR6/2	胴部外面二次被熱により赤色化する
12	鉄製品碗形滓	S D14 埋土	長径8.2cm 短径7.6cm 厚さ2.7cm 重さ207.4g			平面形は不整円形で碗形鍛冶滓の可能性をもつ扁平な滓		
13	陶器大皿	S D15 埋土	(24.2) [3.6]		10	A・G・J	良好 灰白5YR7/2	内外面灰釉 内面一部濃緑色の釉が掛かる 瀬戸・美濃系 18世紀
14	陶器皿	S D16 埋土	[1.0]	(7.4)	35	A・G・J	良好 灰黄2.5Y7/2	内面灰釉が掛かる 底部回転ヘラケズリ 瀬戸・美濃系 18世紀

る。第14・15号土坑と重複し、第15号土坑に切られる。S字状に大きく蛇行しながら、東西方向に延びる。底面は西に向って低くなる。埋土は暗褐色土・黒褐色土を基調とし、上層に浅間A軽石を含んでいる。

出土遺物は軟質陶器鉢、陶器常滑系甕、平瓦、砥石(第108図3～6)と鉄滓(約166g)がある。時期は14世紀に位置づけられる。

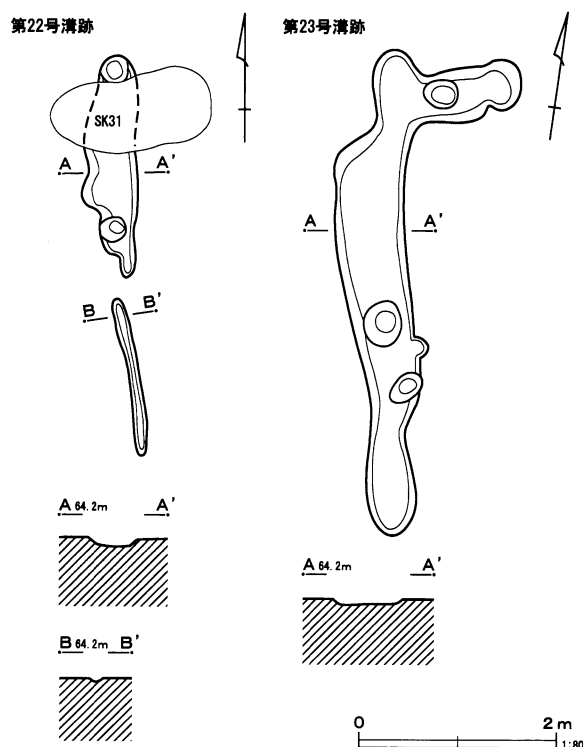
第12・13号溝跡 (第106図)

調査区中央部のS-28、T-27・28グリッドに位置する。第13号溝跡を第12号溝跡が切り込んでいる。概ね東西方向に延び、底面は緩やかに西に向って傾斜する。

遺物は第12号溝跡から出土した軟質陶器の瓦質片口鉢がある(第108図2)。時期は14世紀と考えられる。

第14号溝跡 (第106図)

調査区中央部南東寄りのT・U・V-30グリッドに位置する。第1号井戸跡と重複し、切られる。調査区を斜めに縦断するように南北に延びる。出



第109図 第22・23号溝跡

土遺物は比較的多く、陶器の常滑甕、碗形鍛冶滓などがある(第108図7～12)。時期は14世紀に位置づけられる。

第15号溝跡 (第107図)

調査区北西部のO・P・Q-22、P・Q-23グリッドに位置する。第16号溝跡に合流し、南北に延びる。遺物は瀬戸美濃系の陶器大皿片が出土した(第108図3)。埋土上層に浅間A軽石を多量に含むことから近世以降の所産と考えられる。

第16号溝跡 (第107図)

調査区北西部のQ-22~25グリッドに位置する。東西方向に走行し、西寄りでクランク状に屈曲する。遺物は近世の瀬戸美濃系の灰釉の掛かる陶器皿の底部片がある(第108図14)。時期は18世紀である。

第17号溝跡 (第107図)

調査区北西部のQ・R-23グリッドに位置する。調査区外から北へ直線的に延び、第16号溝跡に合流する。遺物は図示しなかったが、かわらけの破片が出土した。

第18号溝跡 (第107図)

調査区北西部のQ-24・25グリッドに位置する。第16号溝跡と重複するが、新旧関係は明瞭でない。遺物は古代の土器が少量出土した。

第19号溝跡 (第107図)

調査区北西部のQ-25グリッドに位置する。ほぼ直線的に走行し、調査区外に延びる。遺物は出土しなかった。

第20号溝跡 (第107図)

調査区北西部のQ-25グリッドに位置する。第21号溝跡と重複する。ほぼ直線的に延びる。遺物は出土しなかった。

第21号溝跡 (第107図)

調査区北西部のQ-24・25、R-25グリッドに位置する。第20号溝跡、第1B号道路跡と重複し、L字形に屈曲する。遺物は出土しなかった。

第22号溝跡 (第109図)

調査区南東部のU-30グリッドに位置する。第31号土坑と重複する断続的な溝跡である。遺物は出土しなかった。

第23号溝跡 (第109図)

調査区南東部のU-30グリッドに位置する。L字形に屈曲する小規模な溝跡である。底面には小穴が穿たれていた。遺物は出土しなかった。

8. 井戸跡

第1号井戸跡 (第110図)

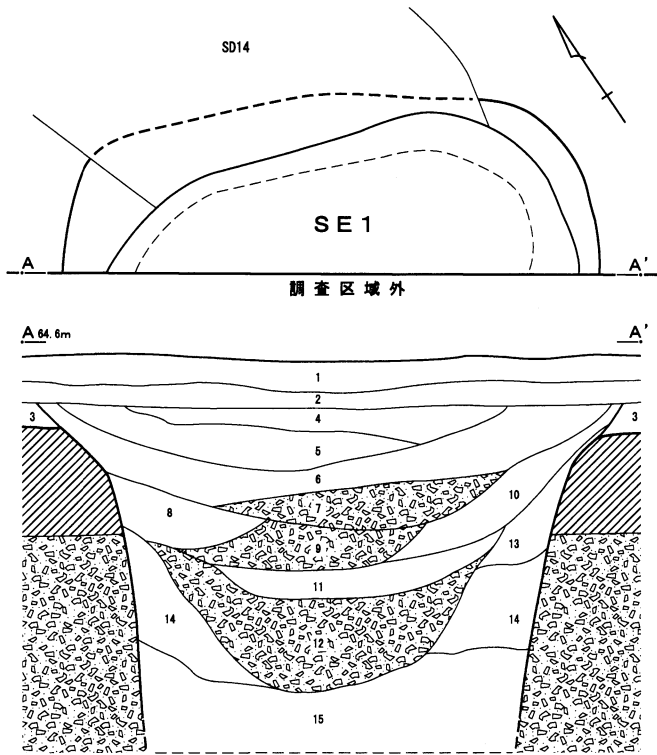
第1号井戸跡は調査区南東部のV-30グリッドに位置し、重複する第14号溝跡を切っている。第1号掘立柱建物跡や柱穴列の集中する区域の南東端に存在し、それらの遺構群と有機的な関連をもつと予想される。

南西部が調査区外にかかるため全容は不明である。平面形態は楕円形と考えられる。規模は確認面における長軸長4.08mを測り、下方へ行くに従い幅を狭め、下部では直径3.1mの円筒状に掘り込まれていた。深さは2.4m前後までを確認したが、礫層を掘り抜いているため壁面崩落の危険性があり、掘り下げを断念した。

埋土は大きく12層に分かれ、第7・9・12層に

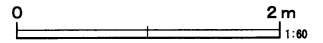
礫層を互層状に挟む。第7層は最大人頭大の円礫で構成される褐色礫層で、礫の間には黒色土を挟んでいる。第9層は暗黒色礫層の純層である。第12層は拳大以下の円礫によって構成される純層で、本層内には数次の堆積が窺われた。第15層はロームブロックを主体とする黄褐色土で、上部壁面の崩落土であろう。観察した範囲には井筒の痕跡は見いだせなかった。

出土遺物は常滑甕、軟質陶器鉢、平瓦、磨石などがある(第111図)。いずれも埋土中からの出土である。3・4の平瓦は凸面、凹面ともに器面に粗砂が付着した中世瓦である。5の磨石は二次被熱によりススが付着している。時期は在地産の鉢の特徴から14世紀後半以降に位置づけられる。

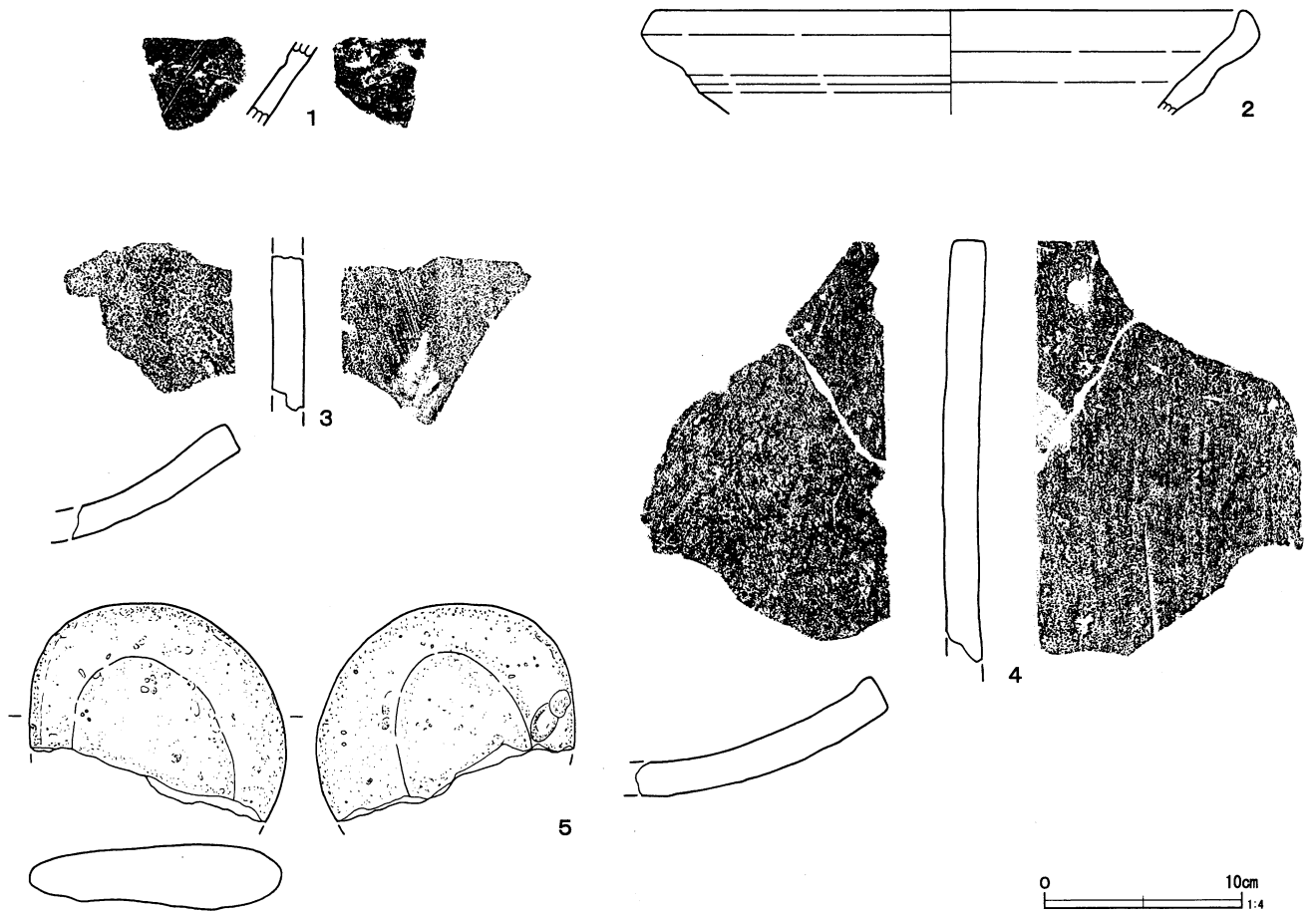


SE 1

- 1 耕作土
- 2 暗褐色土
- 3 暗黄褐色土
- 4 黒褐色土 小礫を少量含む
- 5 黒褐色土 小礫を多量に含む
- 6 暗黒褐色土 混入物をほとんど含まない
- 7 褐色礫層 最大人頭大の礫を多量に含む
- 8 暗黒色土 ローム粒子を少量含む
- 9 暗黒色礫層
- 10 暗黒色土 小礫を微量含む
- 11 暗黒褐色土 ローム粒子を少量含む
- 12 褐色礫層 挙大以下の礫のほぼ純層
- 13 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に含む
- 14 暗黄褐色土 ローム粒子を多量、小礫を少量含む
- 15 黄褐色土 ロームブロックを極多量に含む



第110図 第1号井戸跡



第111図 第1号井戸跡出土遺物

第38表 第1号井戸跡出土遺物観察表 (第111図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	陶器 甕	埋土			破片	A・J	良好 灰黄褐10YR5/2	常滑系
2	軟質陶器 鉢	埋土	(29.8) [5.4]		10	A・B・F・J	不良 褐灰10YR4/1	在地産鉢 角閃石などの砂粒を多く 含む 瓦質
3	瓦 平瓦	埋土			破片	A・B・F・J	良好 灰 N5/	凸面、凹面ともに器面に粗砂が付着 厚さ1.6cm
4	瓦 平瓦	埋土			破片	A・D・F・I・J	普通 浅黄2.5Y7/4	凸面ナデ、粗砂付着 凹面ナデ 厚 さ1.8cm
5	石製品 磨石	埋土	長さ[9.3]cm 幅13.0cm 厚さ3.2cm				重さ619.5g 安山岩 二次被熱を受けスガが付着 1/2残存	

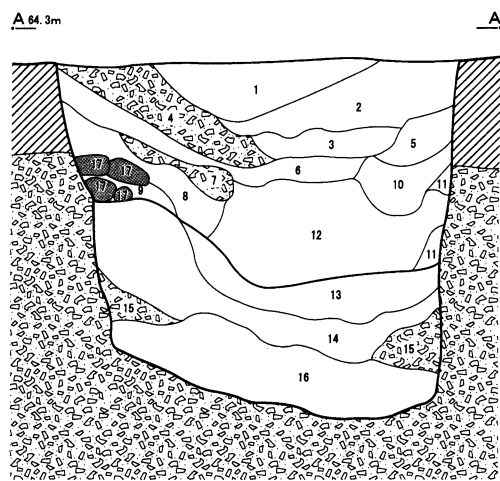
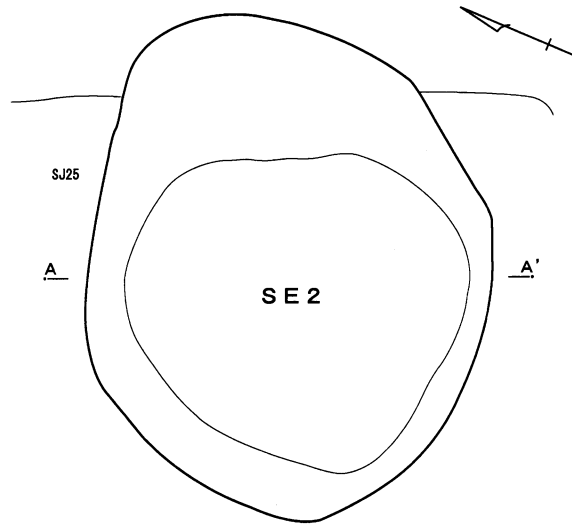
第2号井戸跡 (第112・113図)

第2号井戸跡は調査区北西部、大溝跡西側のP-22グリッドに位置する。第25号住居跡を壊して掘削されている。

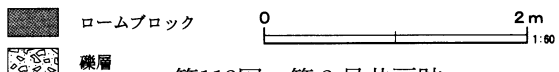
平面形態は楕円形で、長軸長3.84m、短軸長3.21m、深さ2.7mの大規模な井戸跡である。断面形は円筒形に掘り込まれ、観察した範囲では井筒等の痕跡は認められなかった。礫層を掘り抜いているため、壁面の崩落の危険性があり底面の検出は部分的な調査に留めた。

この井戸跡の特徴は、確認面下150~180cmのところから坏・高坏・小型壺等の完形品や半完形品が、意識的に置かれたような状況で出土したことである。おそらく井戸の廃絶段階に何らかの祭祀行為が行われたことを窺わせ、埋井に伴う祭祀跡と推定される (第113図)。

遺物は土師器坏・小型壺・高坏・脚付碗・鉢・小型甕・甕・壺・甑、不明土製品、焼成粘土塊など(第114~116図)、多量に出土した。遺物は第12層を中心に埋置された状態で出土し、その下層(第14・16層)からも遺物が若干出土している。土層の堆積状況から判断すると最下層の第16層から第13層までが短期間に埋め戻されたようで、その中間層には壁面崩落土に起因すると考えられる褐色礫層の第15層が介在している。北西から南東に亙って緩やかな傾斜をもって摺鉢状に埋め戻され、第13層上面に土器がまとめて廃棄されたものと想定される。そのため西側に位置する16の小型壺(正位)と20の脚付碗(横転)は、見かけの上



- SE 2
- 1 暗褐色土 ロームブロック・少礫を少量含む
 - 2 暗褐色土 ロームブロック・少礫をやや多量に含む
 - 3 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む
 - 4 礫層 褐色土を含む
 - 5 暗褐色土 ローム粒子・小礫を少量含む
 - 6 黒褐色土 小礫を少量、褐色土ブロックを微量含む
 - 7 礫層 黒色土ブロックを含む
 - 8 黒褐色土 ロームブロックを少量含む
 - 9 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む
 - 10 褐色土 ロームブロック・ローム粒子をやや多量に含む
 - 11 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む
 - 12 暗褐色土 ロームブロック・褐色土を微量含む
 - 13 黒褐色土 褐色土ブロック・焼土ブロックをやや多量に含む
 - 14 褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを多量に含む
 - 15 褐色礫層 褐色土を含む
 - 16 明褐色土 小礫・ロームブロック・焼土ブロックを少量含む
 - 17 ロームブロック



第112図 第2号井戸跡

第38表 第1号井戸跡出土遺物観察表 (第111図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考	
1	陶器 甕	埋土			破片	A・J	良好 灰黄褐10YR5/2	常滑系	
2	軟質陶器 鉢	埋土	(29.8) [5.4]		10	A・B・F・J	不良 褐灰10YR4/1	在地産鉢 角閃石などの砂粒を多く 含む 瓦質	
3	瓦 平瓦	埋土			破片	A・B・F・J	良好 灰 N5/	凸面、凹面ともに器面に粗砂が付着 厚さ1.6cm	
4	瓦 平瓦	埋土			破片	A・D・F・I・J	普通 浅黄2.5Y7/4	凸面ナデ、粗砂付着 凹面ナデ 厚 さ1.8cm	
5	石製品 磨石	埋土	長さ[9.3]cm 幅13.0cm 厚さ3.2cm 重さ619.5g 安山岩 二次被熱を受けススが付着 1/2残存						

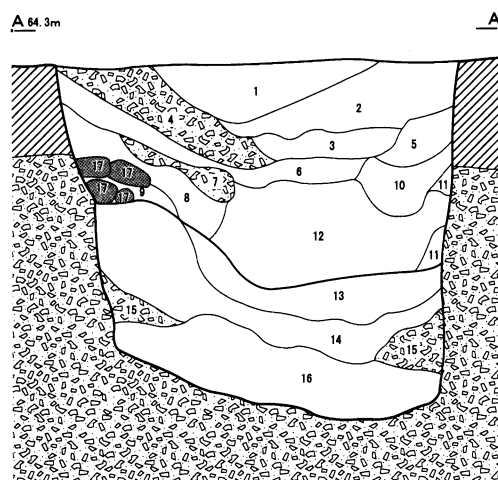
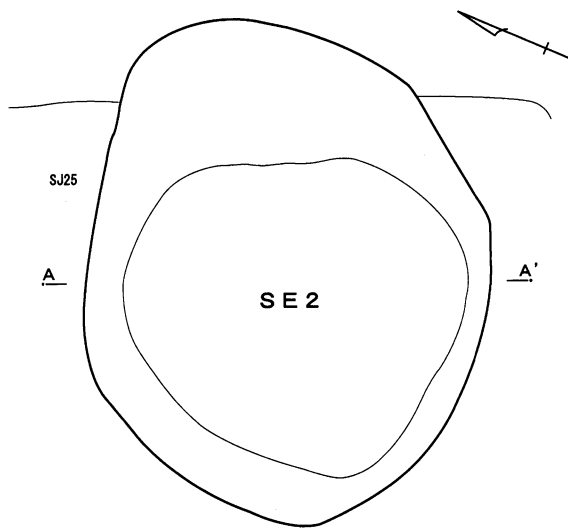
第2号井戸跡 (第112・113図)

第2号井戸跡は調査区北西部、大溝跡西側のP—22グリッドに位置する。第25号住居跡を壊して掘削されている。

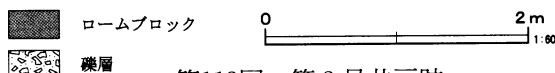
平面形態は楕円形で、長軸長3.84m、短軸長3.21m、深さ2.7mの大規模な井戸跡である。断面形は円筒形に掘り込まれ、観察した範囲では井筒等の痕跡は認められなかった。礫層を掘り抜いているため、壁面の崩落の危険性があり底面の検出は部分的な調査に留めた。

この井戸跡の特徴は、確認面下150~180cmのところから坏・高坏・小型壺等の完形品や半完形品が、意識的に置かれたような状況で出土したことである。おそらく井戸の廃絶段階に何らかの祭祀行為が行われたことを窺わせ、埋井に伴う祭祀跡と推定される (第113図)。

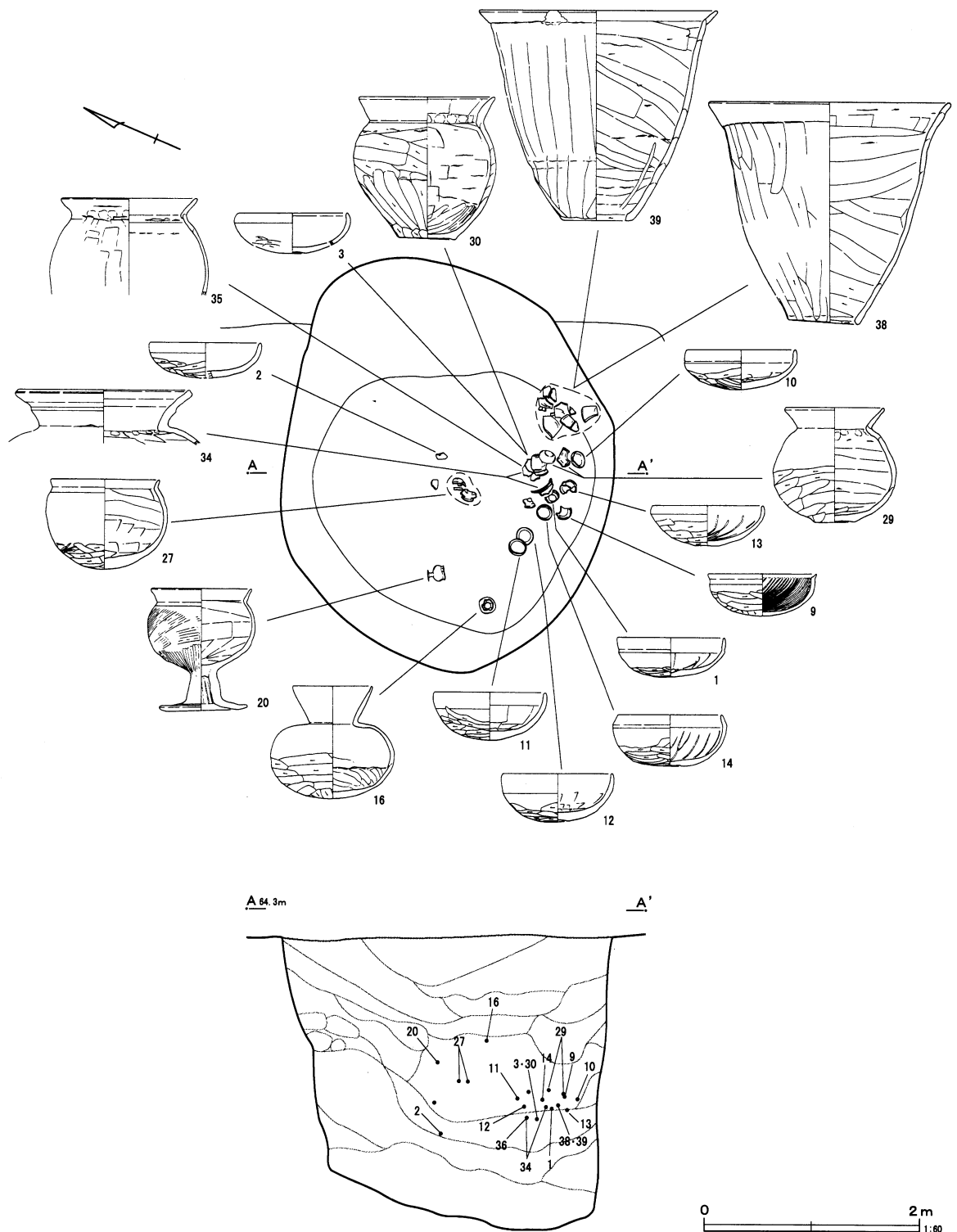
遺物は土師器坏・小型壺・高坏・脚付壺・鉢・小型甕・甕・壺・甌、不明土製品、焼成粘土塊など(第114~116図)、多量に出土した。遺物は第12層を中心に埋置された状態で出土し、その下層(第14・16層)からも遺物が若干出土している。土層の堆積状況から判断すると最下層の第16層から第13層までが短期間に埋め戻されたようで、その中間層には壁面崩落土に起因すると考えられる褐色礫層の第15層が介在している。北西から南東に向って緩やかな傾斜をもって摺鉢状に埋め戻され、第13層上面に土器がまとめて廃棄されたものと想定される。そのため西側に位置する16の小型壺(正位)と20の脚付壺(横転)は、見かけの上



- SE 2
- 1 暗褐色土 ロームブロック・少礫を少量含む
 - 2 暗褐色土 ロームブロック・少礫をやや多量に含む
 - 3 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む
 - 4 礫層 褐色土を含む
 - 5 暗褐色土 ローム粒子・小礫を少量含む
 - 6 黒褐色土 小礫を少量、褐色土ブロックを微量含む
 - 7 礫層 黒色土ブロックを含む
 - 8 黒褐色土 ロームブロックを少量含む
 - 9 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む
 - 10 褐色土 ロームブロック・ローム粒子をやや多量に含む
 - 11 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む
 - 12 暗褐色土 ロームブロック・褐色土を微量含む
 - 13 黒褐色土 褐色土ブロック・焼土ブロックをやや多量に含む
 - 14 褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを多量に含む
 - 15 褐色礫層 褐色土を含む
 - 16 明褐色土 小礫・ロームブロック・焼土ブロックを少量含む
 - 17 ロームブロック



第112図 第2号井戸跡

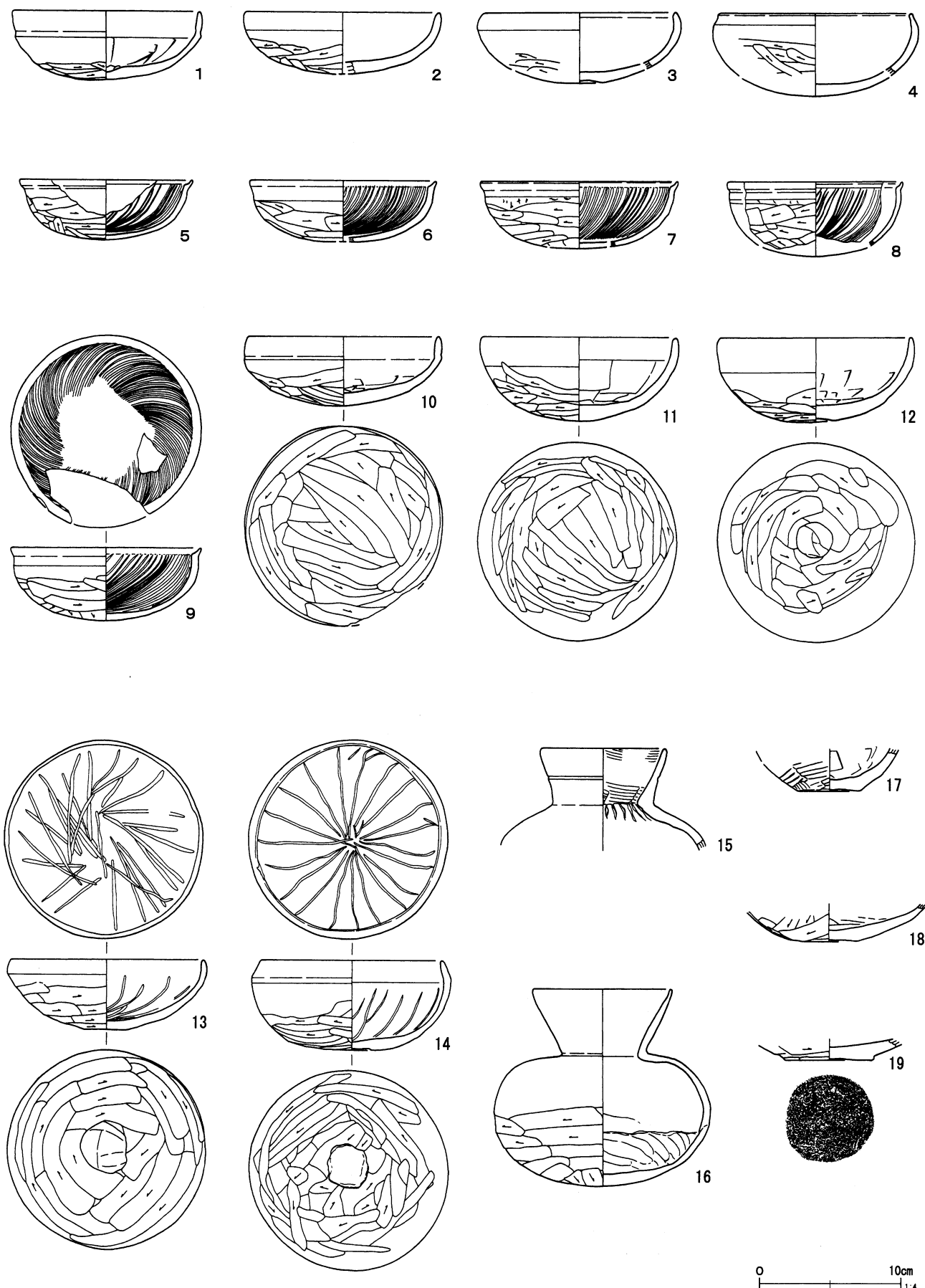


第113図 第2号井戸跡遺物出土状況

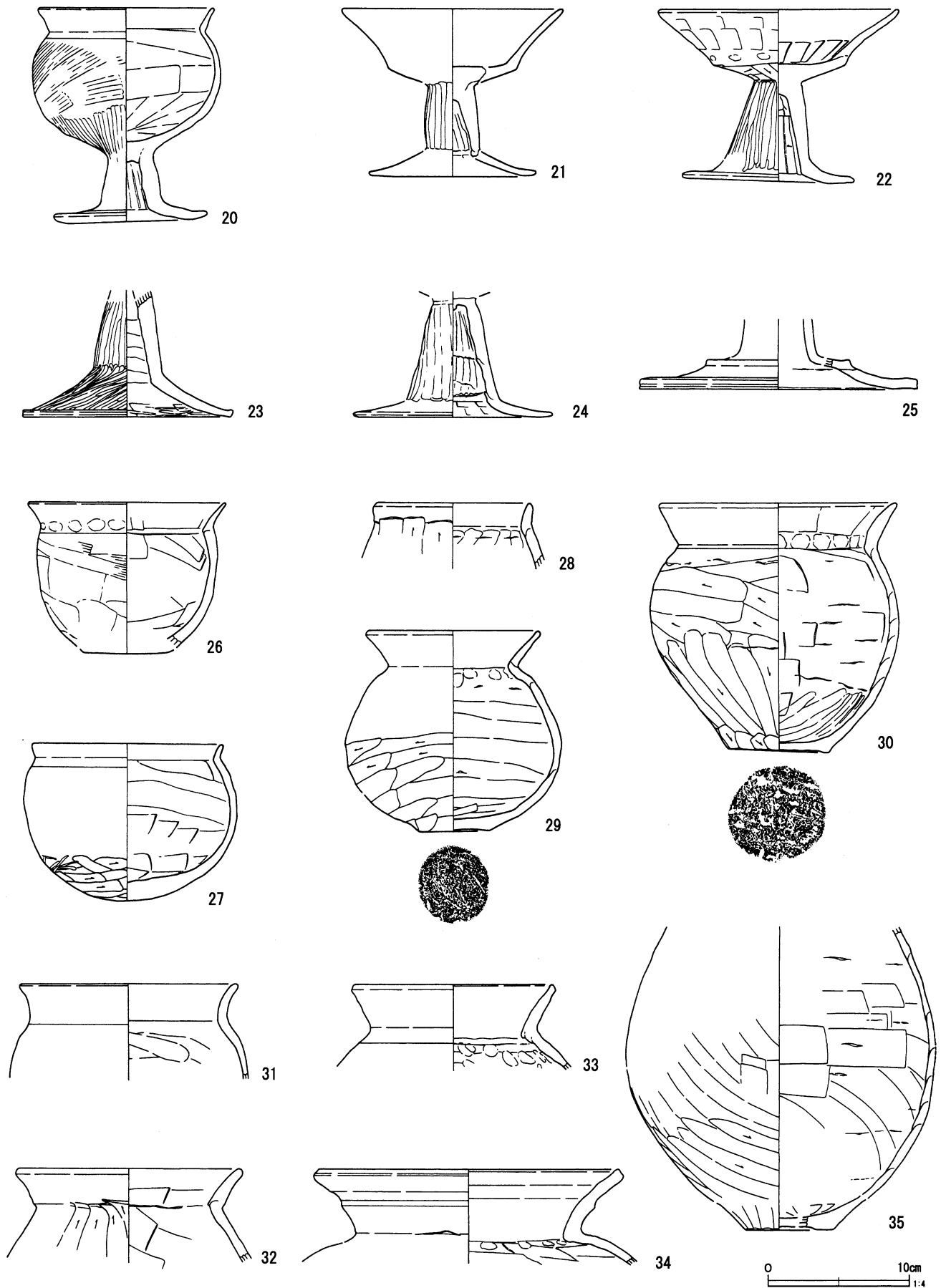
では高い位置から出土したように見受けられるが、基本的には第13層の上面からの出土である。

土器溜り部分では東端から38・39の大型甕が破碎された状態で出土し、それに接して下位からは

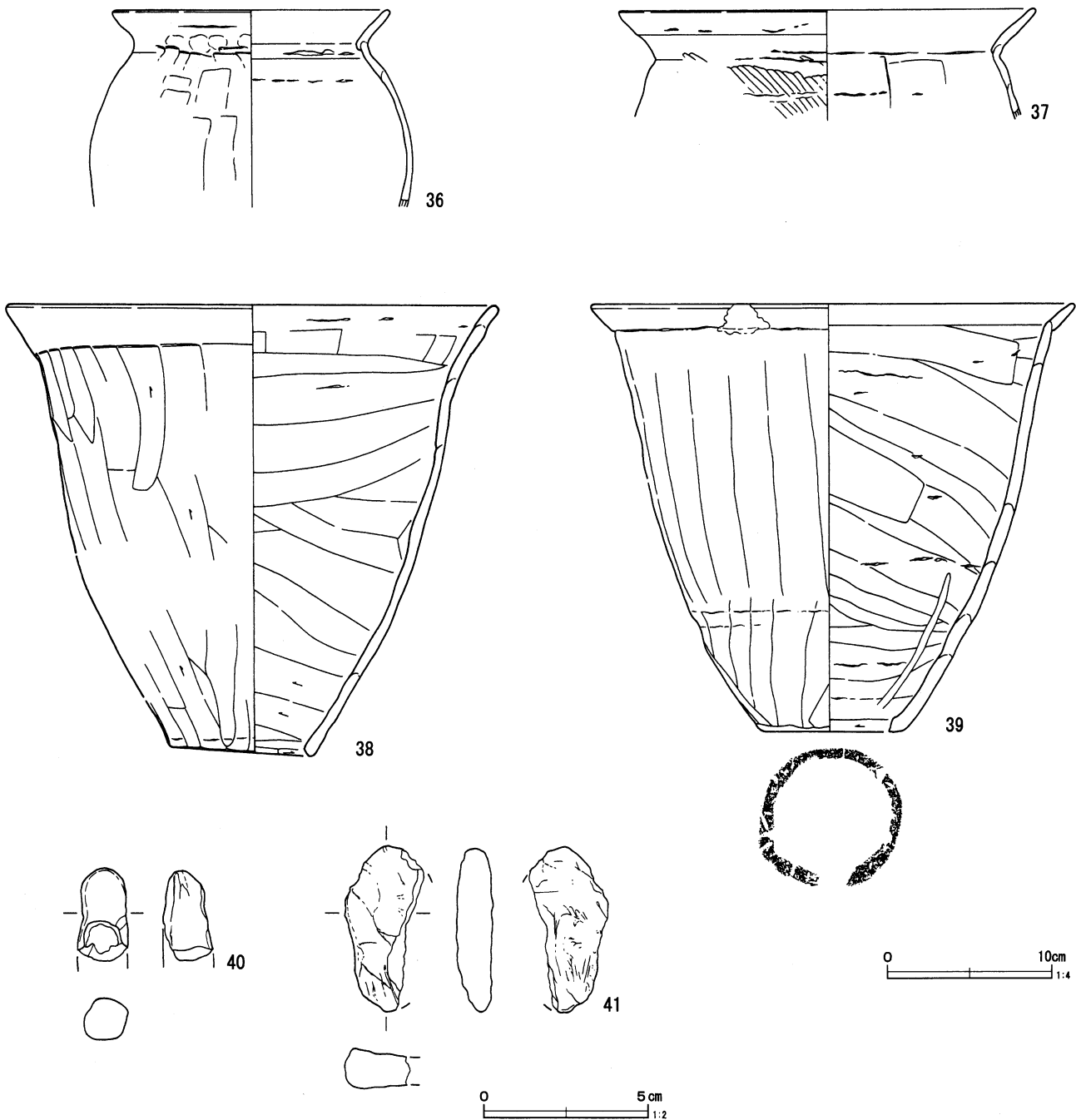
34の有段口縁壺と30・36の小型甕が、その上面には10の坏、29の小型甕が出土し、北へ少し離れて27の鉢が潰れた状態で出土した。それらの西側からは1・9・11～14の内斜口縁坏、模倣坏などが



第114図 第2号井戸跡出土遺物(1)



第115図 第2号井戸跡出土遺物(2)



第116図 第2号井戸跡出土遺物（3）

正位の状態で第13層上面に置かれていたものと復元される。

時期は典型的な模倣坏は出土していないが、内斜口縁坏や半球形坏などが主体を占め、小型壺、有段口縁の大型壺、大型甑などが共伴していることから鬼高Ⅰ式期古段階の夏目遺跡Ⅳ期に位置づけられる。

なお、県内における古墳時代の井戸跡の調査例は、近年の低地部の発掘調査の進展により前期に遡るものが知られている。しかし、古墳時代中期から後期の調査例については本庄市川越田遺跡1号井戸跡など類例に乏しい。とくに集落全体の井泉祭祀に関わるような大型井戸の調査例は他になく、その出現過程を探るうえで注目される。

第39表 第2号井戸跡出土遺物観察表(第114~116図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	底面上113cm	13.1 4.9		80	A・B・D・F・J	良好 橙7.5YR6/6	模倣坏 内底面風化
2	土師器 坏	底面上89cm	(13.6) 4.4		30	A・D・F・J	良好 赤褐5YR4/6	丸底 底部ぶ厚い
3	土師器 坏	底面上102cm	(13.4) [4.0]		20	A・B・E・F	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	口縁部内湾
4	土師器 坏	下層	13.4 [4.5]		20	C・D・F	良好 にぶい赤褐2.5YR4/4	体部外面ヘラケズリ
5	土師器 坏	埋土	(12.1) 4.3		25	A・B・D・F	良好 明赤褐5YR5/6	内斜口縁坏 内面放射暗文
6	土師器 坏	上・下層	13.1 4.3		65	A・C・D	良好 明赤褐2.5YR5/6	内斜口縁坏 内面放射暗文
7	土師器 坏	下層	(13.9) 4.6		40	A・B・C・F	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	内斜口縁坏 内面放射暗文
8	土師器 坏	下層	(12.3) [4.5]		20	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	内斜口縁坏 内面放射暗文
9	土師器 坏	底面上124cm	13.3 5.1		80	B・C・E・F・G	良好 橙2.5YR6/6	内斜口縁坏 内面斜め方向の放射暗文
10	土師器 坏	底面上122cm	13.4 5.0		95	A・C・D	良好 橙2.5YR6/6	模倣坏 体部外面ヘラケズリ後丁寧なヘラナデ
11	土師器 坏	底面上120cm	13.6 6.0		100	A・B・D・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	丸底 底部黒斑あり
12	土師器 坏	底面上115cm	13.5 6.0	2.6	100	A・B・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	凹み底 内面ヘラナデ後ヨコナデ
13	土師器 坏	底面上113cm	13.5 5.0	3.2	100	A・B・E・F・J	良好 赤褐2.5YR4/6	内面不規則な放射暗文 底部平底外底面黒斑あり
14	土師器 坏	底面上119cm	12.8 6.3	2.8	100	A・B・D・F	良好 明赤褐2.5YR5/8	内面疎らな放射暗文 底部外面中心部窪む 無調整
15	土師器 小型壺	上・下層	8.7 [7.2]		75	A・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	器面風化 口縁沈線一条 S J 25一部接合
16	土師器 小型壺	底面上175cm	9.7 13.9	15.3	95	A・B・C・I・J	良好 橙5YR6/8	胴部上半ナデ、下半ケズリ 胴部下半に線状の穿孔か?
17	土師器 小型壺	下層	[3.0]	4.5	75	A・D・F・J	良好 明褐7.5YR5/6	外面木口ナデ
18	土師器 甕	下層	[2.6]	3.9	90	A・D・F・I・K	普通 明赤褐2.5YR5/6	外面ヘラケズリ 胎土中に片岩粒子を多く含む
19	土師器 壺	下層	1.5	6.2	90	A・C・D・F・J	良好 にぶい赤褐5YR5/4	外面ヘラケズリ 底部棒状工具により成形
20	土師器 脚付塊	底面上154cm	12.2 15.3	13.2 10.8	100	A・C・D・F・J	普通 橙5YR7/6	胴部外面木口ナデ後ナデ 脚部外面に赤彩痕残る
21	土師器 高坏	埋土	[6.4]		90	A・B・C・F	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	脚部外面ヘラミガキか
22	土師器 高坏	下層	16.8 12.4	(12.2)	75	A・B・D・F・G	良好 橙2.5YR6/6	脚部外面ヘラミガキ
23	土師器 高坏	下層	[9.0]	14.7	70	A・B・D・F	良好 橙5YR6/8	脚部外面ヘラミガキ
24	土師器 高坏	下層	[8.4]	(14.1)	70	A・B・D・F	良好 明赤褐5YR5/6	脚部外面ヘラナデか
25	土師器 高坏	下層	[2.2]	19.7	50	A・B・D・F	良好 明赤褐5YR5/8	有段脚高坏
26	土師器 鉢	下層	(13.8) 10.2		25	A・B・C・D・K	良好 にぶい褐7.5YR5/4	体部外面木口ナデ後ヘラナデか S J 25一部接合
27	土師器 鉢	底面上136cm	13.3 [11.1]		95	A・B・C・F・G	良好 橙2.5YR6/6	胴部軽いナデ 一部成形時の粘土亀裂残す 底部丸底 ケズリ、一部ミガキ
28	土師器 小型甕	下層	(10.8) [4.7]		30	A・B・C・F・K	普通 にぶい赤褐2.5YR5/3	胴部縦方向のヘラケズリ 二次被熱を受けて器面剝落
29	土師器 小型甕	底面上125cm	(12.0) 14.2	15.1 4.9	75	A・C・D・F・J	良好 橙7.5YR6/6	胴部上半ナデ、下半ケズリ 外面黒斑
30	土師器 小型甕	底面上102cm	16.6 17.6	17.6 7.0	100	A・C・H・I・K	普通 明赤褐5YR5/6	粗い片岩、白色針状物質を含む 見玉から藤岡付近の三波石変成岩地帯で製作
31	土師器 甕	下層	(14.9) [6.6]		15	A・C・D・F・K	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部ナデか 二次被熱を受け器面剝落
32	土師器 甕	下層	(15.6) 6.6	(14.7)	5	A・C・D・F・J	良好 にぶい橙5YR6/4	胴部縦方向のヘラケズリ
33	土師器 壺	下層	14.0 [6.1]		50	A・D・E・F・J	良好 橙2.5YR6/8	胴部外面ナデ 内面指押え後ナデ
34	土師器 壺	底面上104cm	21.2 [6.7]		90	A・B・C・F・G	良好 橙2.5YR6/8	外面器表面荒れている 有段口縁壺

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
35	土師器甕	下層	[21.5]	(21.9) (6.3)	60	A・B・C・F・K	良好 明褐灰5YR7/2	図上復元
36	土師器小型甕	底面上104cm	(16.5) 12.0	(19.5)	5	F・I・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部外面ヘラナデ(縦方向) 頸部外面スス付着
37	土師器甕	下層	(25.2) [6.8]		20	A・B・D・F・J	良好 にぶい褐7.5YR6/3	胴部木口ナデ(斜方向)
38	土師器甕	底面上115cm	29.5 27.5	8.8	80	A・B・C・F・J	良好 にぶい橙5YR6/4	胴部外面ヘラケズリ 内面ナデー部ヘラケズリ
39	土師器甕	底面上115cm	29.1 26.1	8.0	70	A・B・C・G・J	良好 橙2.5YR6/6	口縁部外面に補修痕あり
40	土製品棒状品	下層	残長2.7cm 最大径1.5cm 重さ5.7g			A・B・C・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	棒状粘土塊 内部は中実 図上で下端は欠失
41	土製品焼成粘土塊	下層	長さ5.0cm 厚さ1.1cm 重さ11.0g			A・C・F	普通 にぶい褐7.5YR5/4	両面に葉脈状の圧痕が残る

9. 土 坑

第1号土坑 (第117図)

第1号土坑は調査区南東部のU-31グリッドに位置し、第2号住居跡の床面下から単独で検出された。平面形態は円形で、規模は長径1.48m、短径1.36m、住居跡の床面からの深さは0.34mを測る。主軸方位はN-33°-Wを指す。断面箱形に掘り込まれ、底面は概ね平坦である。最下層に焼土粒子を多量に含む暗褐色土が堆積していた。

遺物は弥生時代中期後葉の筒形土器の口縁部片、底面に網代痕や木葉痕を残す甕形土器の底部、条痕を施した甕形土器の胴部片とともに、石斧や石核が出土した (第118・119図)。

1は筒形土器の口縁部で、外反して開く。口唇部は丸く収まり、縄文、刻み目等は施文されない。外面は平坦面をなす。文様はLR縄文施文後、細かい沈線で直線的な渦巻文が施文されるとみられる。

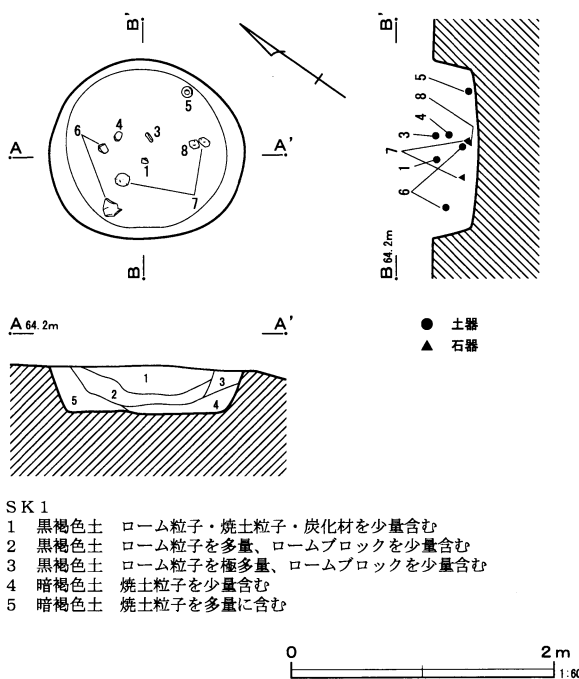
2は条痕施文具、色調、胎土等から6の甕形土器と同一固体と考えられる。

3～5は底部で、3は底面に木葉痕が残り、4と5は網代痕が残る。網代痕はいずれも2本越え2本潜り1本送りであるが、5はやや粗い。

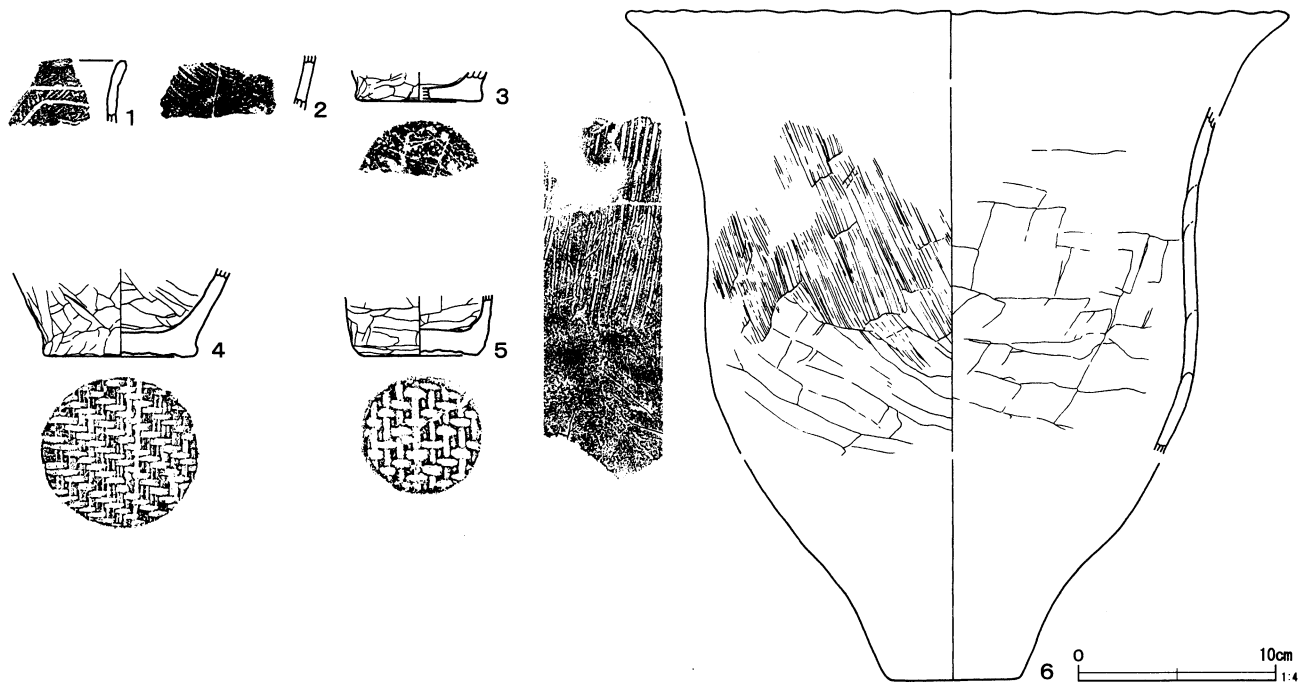
6は甕形土器胴部の大形破片で、器形は胴部がやや膨らみ、口縁部は復元ほどは開かない可能性もある。外面は斜方向の条痕で、施文単位は5本/1.0cmとやや粗い。外面下半部及び内面は丁寧なナデが加わるが、内面は横方向のナデとなっている。

7は大形の打製石斧、基部側上半部が細く刃部平面形状は円刃を呈する有肩石斧である。正面に自然面、裏面に分割面を残し横断面は蒲鉾状である。調整加工をみると、基部付近は正面から裏面に向かって両側縁から大きな剝離が施され、横断面は菱形になっている。刃部は裏面から両面に向かっての細かい剝離で刃縁を整形している。

8は厚手剝片を素材とした石核である。主要剝離面を打面とし、側面に剝片剝離作業が施されている。作業面に残された剝離面の形状から、横広



第117図 第1号土坑



第118図 第1号土坑出土遺物(1)

第40表 第1号土坑出土遺物観察表(第118・119図)

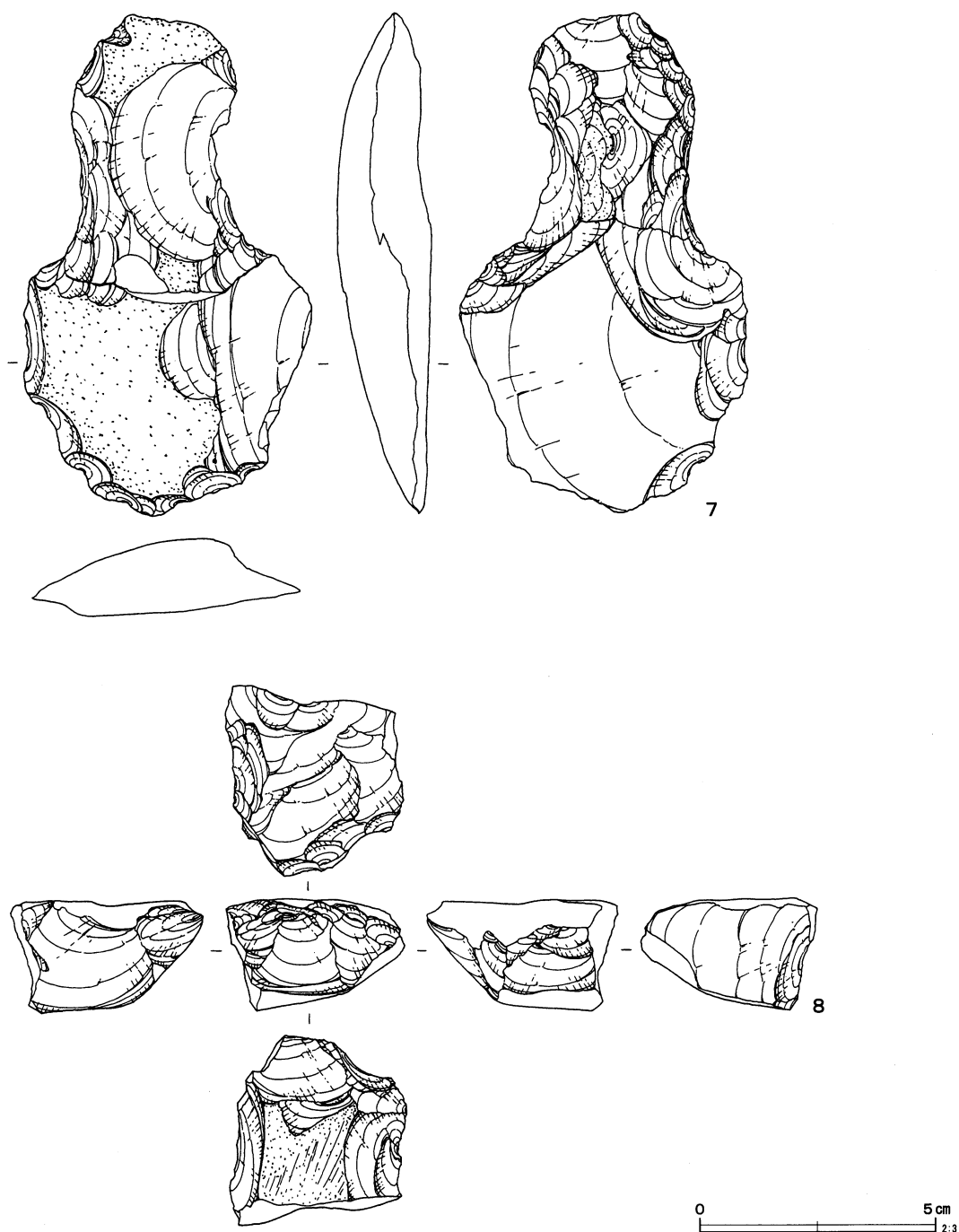
番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	弥生土器筒形土器	底面上24cm			破片	A・B・F・J	良好 にぶい黄橙10YR7/4	外面沈線により重四角文を施し縄文を充填する
2	弥生土器甕	埋土			破片	A・B・E・F・J	良好 褐色10YR4/4	図版番号6と同一個体と考えられる
3	弥生土器甕	底面上24cm	[1.5]	(6.3)	45	A・B・E・F・J	良好 にぶい橙7.5YR6/4	内外面ともナデ 底面木葉痕
4	弥生土器甕	底面上17cm	[4.4]	7.7	80	A・B・F・J	良好 にぶい褐7.5YR5/4	内外面ともヘラナデを施す 底面網代痕
5	弥生土器甕	底面直上	[3.0]	5.8	80	A・B・F・J	良好 赤褐5YR4/6	外面ナデ 内面ヘラナデ 底面網代痕
6	弥生土器甕	底面上18cm	[17.6]		15	A・B・F・K	普通 にぶい黄褐10YR5/34	胴部外面ナデ調整後上半部に粗い条痕を施す 内面ヘラナデ調整
7	石器石斧	底面上3cm	長さ21.0cm 幅12.0cm 厚さ4.1cm 重さ834.5g 砂岩 刃部調整粗い 両側縁部潰れている					
8	石器石核	底面直上	長さ4.6cm 幅7.4cm 厚さ8.0cm 重さ319.3g 砂岩 磨石からの転用					

の小形剥片が作出されたと思われる。

次に、出土土器について若干の検討を試みたい。筒形土器の類例は、本庄市周辺では同市浅見山I遺跡で土坑、美里町村後遺跡で住居跡、深谷市大寄遺跡ではグリッドから出土している。浅見山例は沈線による重四角文が重畳し、口縁部はカナムグラが回転施文される。村後遺跡例は磨消縄文による崩れた重四角文が2段に施される。両者とも上下の重四角文は、ほぼ同期するものとなっている。大寄遺跡例は磨消縄文によりC字状文が2段に施される。熊谷市周辺でも池上遺跡、小敷田遺

跡、古宮遺跡等で出土し、その他さいたま市東裏遺跡、春日部市須釜遺跡でも出土している。池上、小敷田遺跡ではややまとまって出土し、重四角文が多数を占めるが、半単位ずらすものや、磨消縄文のものが出土している。古宮例は住居跡出土であるが沈線化が著しく、方形区画内に波状文が密に充填される。東裏例は沈線で連結された重四角文が1段配置されるもので、飛鳥山遺跡例に近い。

以上のような筒形土器は、群馬県西部の所謂「甘楽の谷」に比較的多く分布し、神保富士塚、神保植松、長根安坪遺跡等が調査されている。長根安



第119図 第1号土坑出土遺物（2）

坪遺跡では大部分が土坑からの出土で、縦方向の条痕が施された甕形土器その他石器類を伴う。本遺跡例に近い磨消縄文破片も出土しているが、沈線化が顕著となっている。

甕形土器の類例は、村後遺跡や熊谷市池上、小敷田、一本木前、関下遺跡等で出土している。条痕は縦、斜方向ともにある。筒形土器、石斧等と組成化している例は少ない。

以上の筒形、甕形土器の特徴から、本遺跡例はほぼ池上遺跡に併行し、群馬県西部の長根安坪遺跡に併行する段階に位置づけられる。長根安坪遺跡では土坑の性格について検討した結果、埋土の特徴から墓坑の可能性を示唆したが、本遺跡例も同様な性格のものと考えられ、本庄台地周辺では弥生時代中期の遺構は希少であり、貴重な資料を提供することとなった。

第2号土坑 (第120図)

第2号土坑はU-31グリッドに位置する。第2号柱穴列のP1を切っている。平面形態は楕円形で、規模は長径1.25m、短径0.91m、深さ0.19mである。主軸方位はN-36°-Wを指す。

遺物は土師器片が少量出土した。

第3号土坑 (第120図)

第3号土坑はU-31グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.70m、短径1.00m、深さ0.31mである。主軸方位はN-66°-Eを指す。出土遺物はない。

第4号土坑 (第120図)

第4号土坑はU-31グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径1.70m、短径1.42m、深さ0.23mである。主軸方位はN-39°-Eを指す。出土遺物はない。

第5号土坑 (第120図)

第5号土坑はU・V-32グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径2.61m、短径1.06m、深さ0.15mである。主軸方位はN-10°-Wを指す。遺物は土師器片が少量ある。

第6号土坑 (第120図)

第6号土坑はW-32グリッドに位置する。平面形態は不定形で、規模は長径1.18m、短径0.77m、深さ0.19mである。主軸方位はN-0°-Sを指す。出土遺物はない。

第7号土坑 (第120図)

第7号土坑はR-26グリッドに位置する。第6・7号溝跡に切られている。平面形態は不定形で、規模は長径1.56m、短径1.39m、深さ0.26mである。主軸方位はN-8°-Eを指す。

遺物は土師器片が少量出土した。

第8号土坑 (第120図)

第8号土坑はR-26グリッドに位置する。第7号溝跡を切っているが、調査時平面形を確認できなかった。平面形態は長方形と考えられ、規模は長径1.79m、短径0.46m、深さ0.32mである。主

軸方位はN-85°-Eを指す。

出土遺物はない。

第9号土坑 (第120図)

第9号土坑はS-26グリッドに位置する。第4号住居跡と重複し、切っている。平面形態は長方形で、規模は長径4.06m、短径0.65m、深さ0.06mである。主軸方位はN-84°-Eを指す。

出土遺物はない。

第10号土坑 (第120図)

第10号土坑はS-25・26グリッドに位置する。第8号溝跡を切っている。平面形態は不定形で、規模は長径3.16m、短径1.40m、深さ0.16mである。主軸方位はN-87°-Wを指す。

出土遺物はない。

第11号土坑 (第120図)

第11号土坑はR・S-27グリッドに位置する。第12号土坑に切られる。平面形態は不定形で、規模は長径1.66m、短径0.67m、深さ0.27mである。主軸方位はN-6°-Wを指す。埋土は暗褐色土を基調とする。出土遺物はない。

第12号土坑 (第120図)

第12号土坑はR・S-27グリッドに位置する。第11号土坑を切る。平面形態は不定形で、規模は長径0.66m、短径0.58m、深さ0.36mである。主軸方位はN-60°-Wを指す。埋土は黒褐色土で、浅間A軽石を含みパサパサしている。

出土遺物はない。

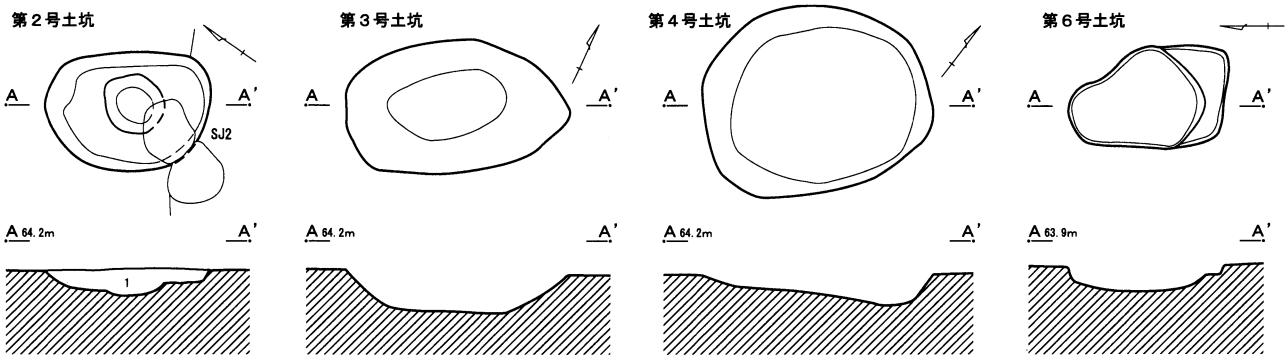
第13号土坑 (第120図)

第13号土坑はS・T-26・27グリッドに位置する。南西側が調査区外に延びる。平面形態は長方形で、規模は長径2.63m、短径1.47m、深さ0.51mである。主軸方位はN-67°-Eを指す。埋土はロームブロック・ローム粒子の混入が多いことから人為的な埋め戻しの可能性がある。

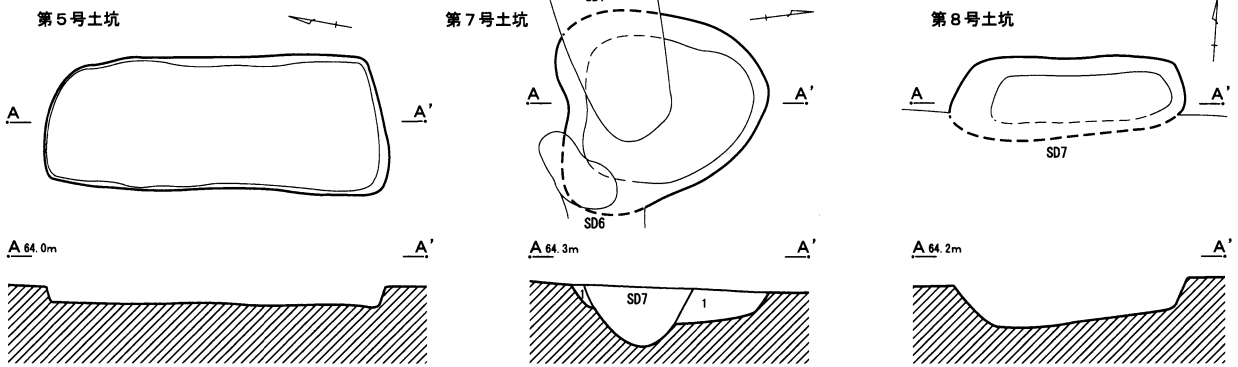
出土遺物はない。

第14号土坑 (第120図)

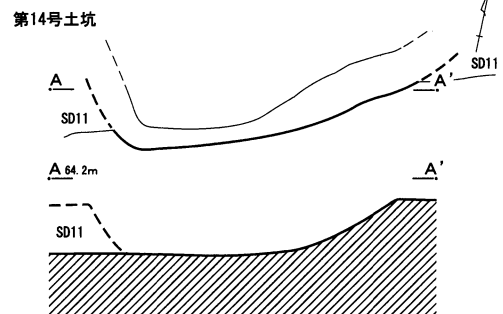
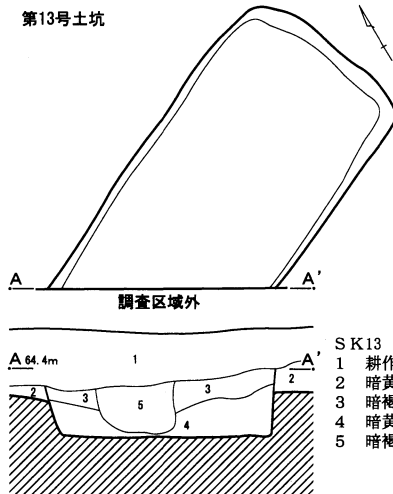
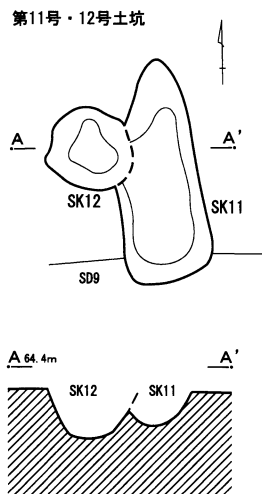
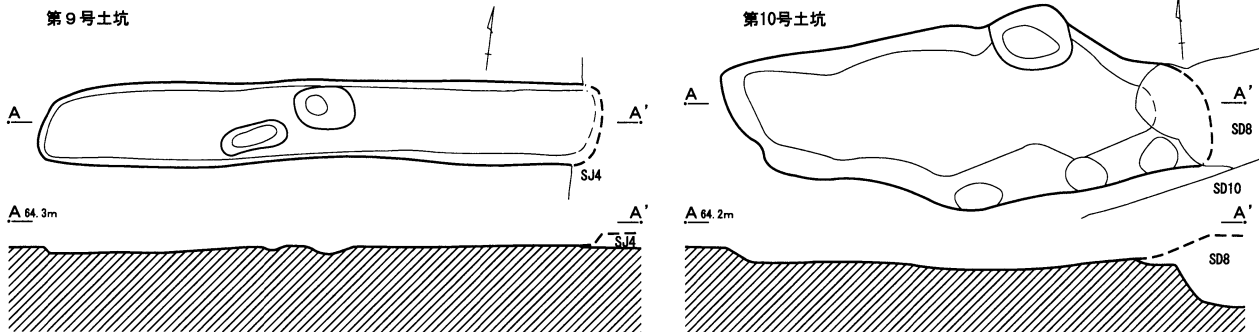
第14号土坑はS-26・27グリッドに位置する。



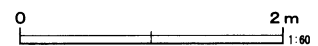
SK 2
1 明褐色土 焼土粒子を少量含む



SK 7
1 暗褐色土 ローム粒子を多量、ロームブロック・小礫・砂粒を少量含む



SK 13
1 耕作土
2 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む
3 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む
4 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む
5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子を少量含む



第120図 土坑 (1)

北側の第11号溝跡を切っているが、調査時平面形を明らかにし得なかった。平面形態は長方形に近いと考えられる。規模は長径2.90m以上、深さ0.39mである。第11号溝跡より新しい。

出土遺物はない。

第15号土坑 (第121図)

第15号土坑はS-26グリッドに位置する。第11号溝跡を切っている。平面形態は長方形で、規模は長径2.97m、短径0.83m、深さ0.45mである。主軸方位はN-74°-Eを指す。

出土遺物はない。

第16号土坑 (第121図)

第16号土坑はS-26グリッドに位置する。平面形態は台形で、規模は長径2.59m、短径1.69m、深さ0.40mである。主軸方位はN-81°-Eを指す。埋土はローム粒子を比較的均一に含む埋め戻し土で、人頭大から拳大の円礫が西半分を中心に検出された。意図的に石を組み上げたものではなく、一括して廃棄したような状態であった。

出土遺物は重複する第6号住居跡に帰属する土師器片や、奈良・平安時代の須恵器甕の胴部片が混入していたが(第125図1)、遺構の性格や時期を示すような遺物は認められなかった。

こうした集石土坑の類例として本庄市地神遺跡第535号土坑のように、かわらけを伴う中世土坑が知られている。

第17号土坑 (第121図)

第17号土坑はS-27グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径3.35m、短径1.12m、深さ0.30mである。主軸方位はN-18°-Wを指す。埋土は黒色土を基調とし、ロームブロックを多量に混入する埋め戻し土である。

出土遺物はなかった。

第18号土坑 (第121図)

第18号土坑はS-27グリッドに位置する。平面形態は長方形に近く、規模は長径2.48m、短径0.80m、深さ0.30mである。主軸方位はN-78°

-Eを指す。遺物は土師器坏・甕底部がある(第125図2・3)。混入であろう。

第19号土坑 (第121図)

第19号土坑はS-26グリッドに位置する。平面形態は長方形に近く、規模は長径1.20m以上、短径1.04m、深さ0.27mである。主軸方位はN-16°-Wを指す。出土遺物はない。

第20号土坑 (第121図)

第20号土坑はS-28グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.16m以上、短径1.10m、深さ0.37mである。主軸方位はN-68°-Eを指す。

出土遺物は、重複する第11号住居跡から混入したと考えられる土師器埴の口縁部片がある(第125図4)。混入であろう。

第21号土坑 (第121図)

第21号土坑はS-28グリッドに位置する。大半が調査区外に延びる。平面形態は長方形と考えられる。規模は長径1.29m、短径0.36mが残存し、深さ0.66mである。主軸方位はN-45°-Wを指す。出土遺物はない。

第22号土坑 (第121図)

第22号土坑はT-28グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径2.81m、短径1.99m、深さ0.11mである。主軸方位はN-83°-Eを指す。遺物は土師器片と鉄片が少量出土した。

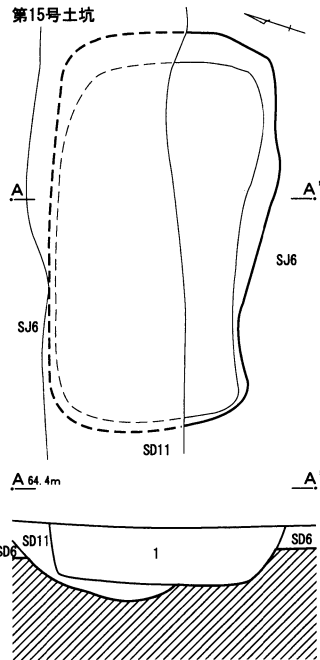
第23号土坑 (第122図)

第23号土坑はS-28・29グリッドに位置する。第12号溝跡に切られ、東端は調査区外に延びる。平面形態は長方形と考えられる。規模は長径4.04m、短径1.21m、深さ0.27mである。主軸方位はN-85°-Eを指す。

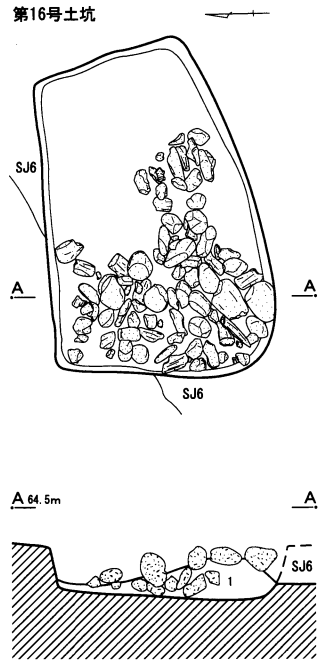
出土遺物は土師器片が少量ある。

第24号土坑 (第122図)

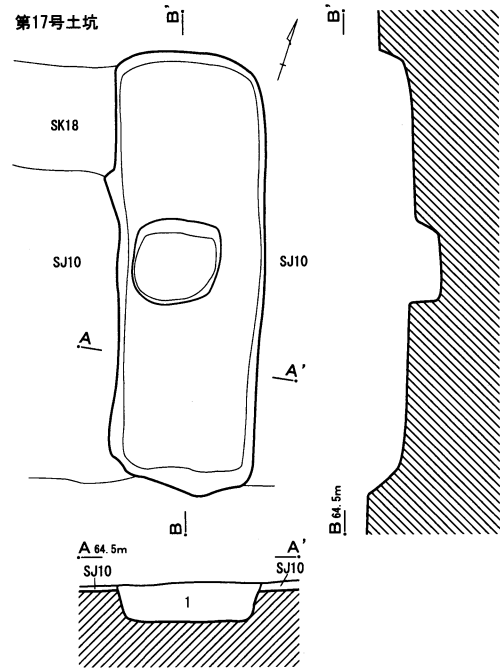
第24号土坑はS-28グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.82m、短径0.60m、深さ0.14mである。主軸方位はN-64°-Eを指



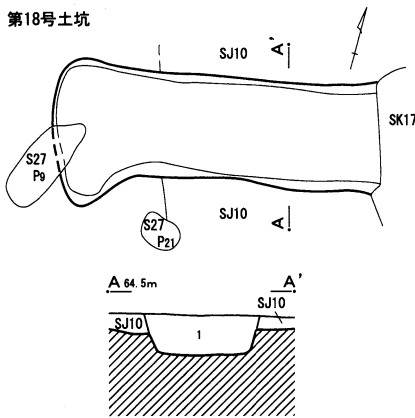
SK15
1 黒褐色土 浅間A軽石・小礫を含む



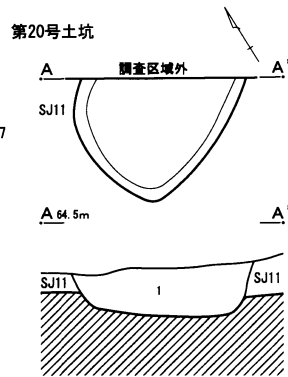
SK16
1 黒褐色土 ローム粒子を比較的均一に含む



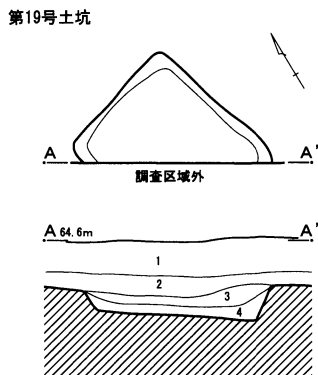
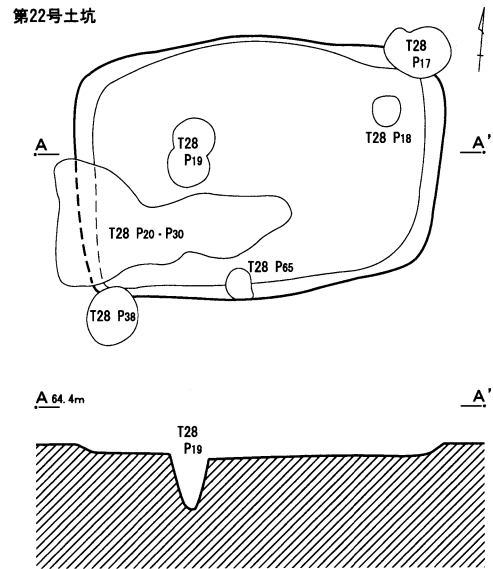
SK17
1 黄褐色土 黒色土・ロームブロックを含む



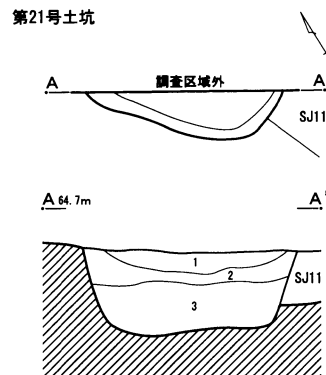
SK18
1 暗黒褐色土 ロームブロックを少量含む



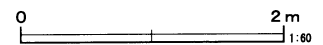
SK20
1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・砂粒を少量含む



SK19
1 耕作土
2 黒褐色土
3 黒褐色土 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを少量含む
4 黄褐色土 ロームブロック主体



SK21
1 暗褐色土 ローム粒子を微量含む
2 暗褐色土 1層よりローム粒子を多量に含む
3 暗黄褐色土 黒色土をブロック状に含む



第121図 土坑(2)

す。遺物は土師器片が少量ある。

第25号土坑 (第122図)

第25号土坑はU-28・29グリッドに位置する。第16号住居跡の貯蔵穴を削平する。平面形態は不定形で、規模は長径1.67m、短径1.52m、深さ0.19mである。主軸方位はN-88°-Eを指す。

遺物は土師器片がある(第125図5)。口縁部が外反して開く模倣坏で、第16号住居跡からの混入であろう。

第26号土坑 (第122図)

第26号土坑はT-28グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.15m、短径0.60m、深さ0.23mである。主軸方位はN-53°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第27号土坑 (第122図)

第27号土坑はU-29グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径1.78m、短径0.87m、深さ0.16mである。主軸方位はN-4°-Wを指す。埋土は暗褐色土を主体とし、ロームブロック・白色粒子を多量に含む。

遺物は出土しなかった。

第28号土坑 (第122図)

第28号土坑はU-29・30グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径2.10m、短径0.96m、深さ0.36mである。主軸方位はN-14°-Wを指す。埋土は褐色土を主体とし、ロームブロック・ローム粒子を多量に含んだ埋め戻し土である。遺物は出土しなかった。

第29号土坑 (第122図)

第29号土坑はU・V-30グリッドに位置する。第24号住居跡の貯蔵穴を削平する。平面形態は長方形で、規模は長径2.43m、短径1.07m、深さ0.41mである。主軸方位はN-20°-Wを指す。埋土は暗褐色土を主体とし、大粒のローム粒子を多量に含む。

出土遺物は古墳時代後期の土器片が多く、重複する第24号住居跡からの混入であろう。

第30号土坑 (第122図)

第30号土坑はU-30グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径1.39m、短径0.80m、深さ0.27mである。主軸方位はN-19°-Wを指す。遺物は土師器片が少量ある。

第31号土坑 (第122図)

第31号土坑はU-30グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.63m、短径0.76m、深さ0.16mである。主軸方位はN-80°-Eを指す。埋土は浅間A軽石を多量に含んだ褐色土で、しまりがいい。遺物は土師器片が少量出土した。

第32号土坑 (第122図)

第32号土坑はO-22グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.16m、短径0.99m、深さ0.14mである。主軸方位はN-66°-Eを指す。出土遺物はないが、埋土の状態から古代に遡る可能性がある。

第33号土坑 (第122図)

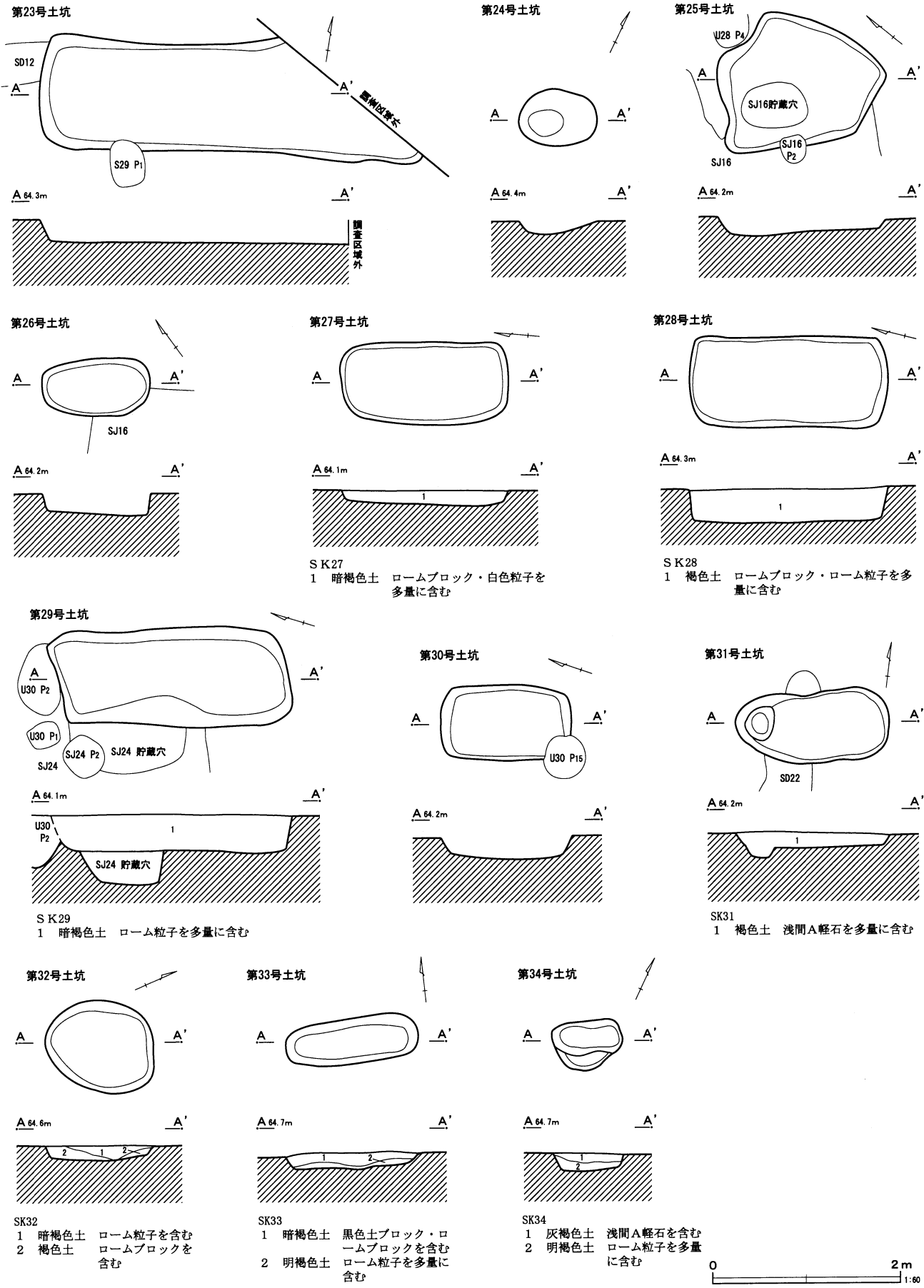
第33号土坑はP-22グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形で、規模は長径1.41m、短径0.49m、深さ0.16mである。主軸方位はN-89°-Eを指す。遺物は土師器片が少量出土しただけで、時期を示すものはない。埋土の状態から古代に遡る可能性がある。

第34号土坑 (第122図)

第34号土坑はO-22グリッドに位置する。平面形態は不定形で、規模は長径0.76m、短径0.54m、深さ0.19mである。主軸方位はN-69°-Eを指す。遺物は土師器片が少量出土しているが、第1層に浅間A軽石を含むことから、近世以降の所産と考えられる。

第35号土坑 (第123図)

第35号土坑はP-22グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形で、規模は長径1.64m、短径0.54m、深さ0.08mである。主軸方位はN-0°-Sを指す。遺物は土師器片が少量出土したが、埋土の状態から近世以降と考えられる。



第122図 土坑 (3)

第36号土坑 (第123図)

第36号土坑はP-22グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.95m、短径0.48m、深さ0.05mである。主軸方位はN-73°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第37号土坑 (第123図)

第37号土坑はP-23グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径1.13m、短径0.97m、深さ0.14mである。主軸方位はN-46°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第38号土坑 (第123図)

第38号土坑はP-23グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.74m、短径0.64m、深さ0.17mである。主軸方位はN-0°-Sを指す。遺物は出土しなかった。

第39号土坑 (第123図)

第39号土坑はP-23グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径1.86m、短径0.71m、深さ0.27mである。主軸方位はN-86°-Wを指す。埋土は褐色土と黒色土の混土層で、黒色土は縞状に薄く堆積し、ロームブロックが混じる。

遺物は土師器片が少量出土しただけで時期を示すものはないが、埋土の状態から近世以降の所産と考えられる。

第40号土坑 (第123図)

第40号土坑はP-23グリッドに位置する。平面形態は不定形で、規模は長径1.23m、短径0.78m、深さ0.09mである。主軸方位はN-80°-Eを指す。

遺物は出土していないが、埋土中に浅間A軽石を混入することから近世以降の所産としてよいであろう。

第41号土坑 (第123図)

第41号土坑はP-23グリッドに位置する。平面形態は不定形で、規模は長径1.16m、短径1.00m、深さ0.27mである。主軸方位はN-30°-Eを指す。遺物は土師器片が少量ある。

第42号土坑 (第123図)

第42号土坑はQ-23グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.85m、短径0.55m、深さ0.26mである。主軸方位はN-65°-Wを指す。遺物は土師器片が少土した。

第43号土坑 (第123図)

第43号土坑は、Q-23グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径2.55m、短径0.97m、深さ0.16mである。主軸方位はN-6°-Wを指す。

遺物は土師器片と焼成粘土塊が少量出土した。時期は埋土中に浅間A軽石を混入することから近世以降と考えられる。

第44号土坑 (第123図)

第44号土坑はP・Q-23グリッドに位置する。平面形態は方形で、規模は長径1.69m、短径1.24m、深さ0.11mである。主軸方位はN-56°-Eを指す。遺物は土師器片が少量出土した。時期は埋土中に浅間A軽石が含まれることから近世以降と考えられる。

第45号土坑 (第123図)

第45号土坑はP・Q-23グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.77m、短径0.60m、深さ0.29mである。主軸方位はN-0°-Sを指す。

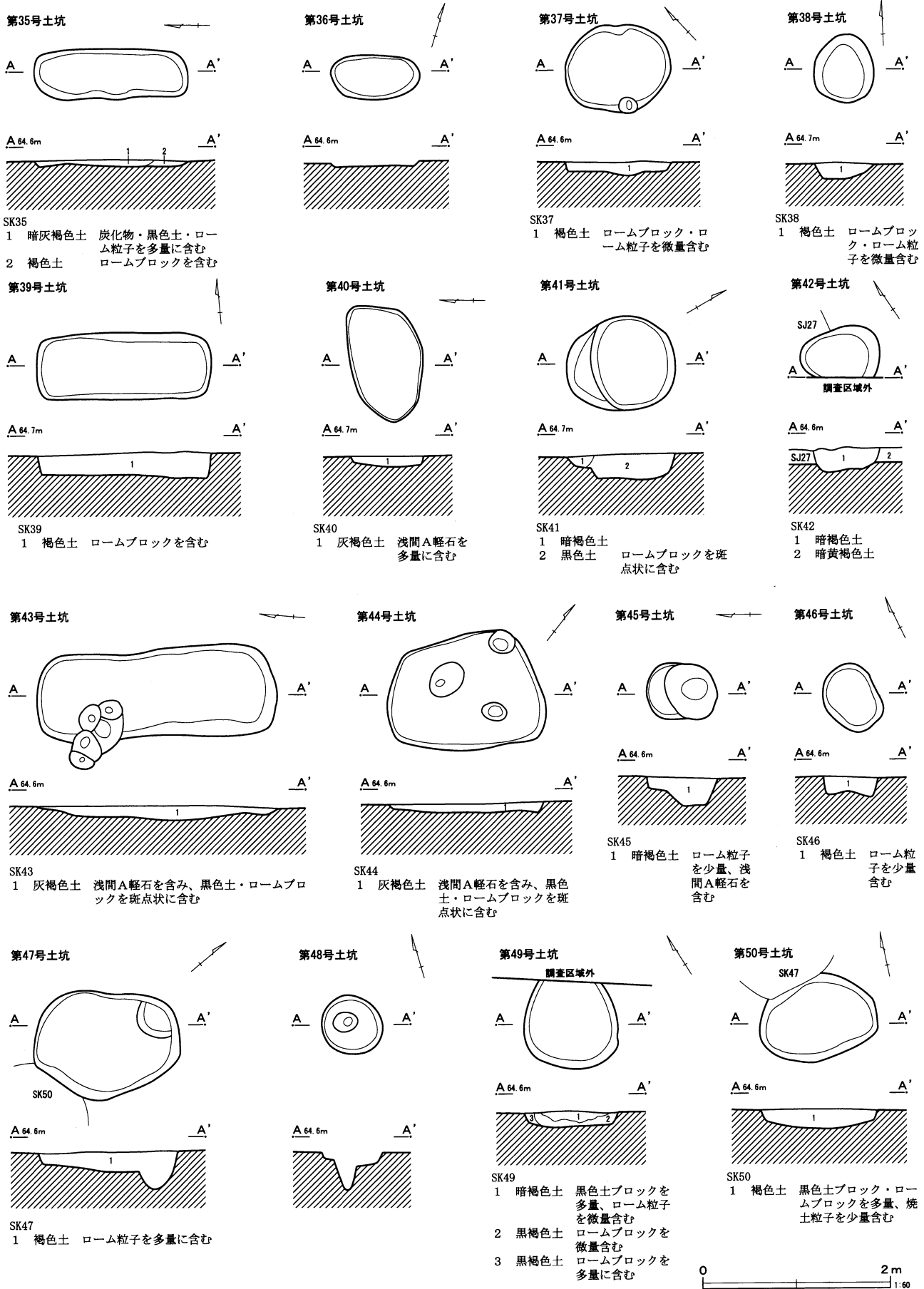
遺物は出土していないが、埋土中に浅間A軽石を混入することから近世以降と考えられる。

第46号土坑 (第123図)

第46号土坑はP-24グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.72m、短径0.58m、深さ0.20mである。主軸方位はN-7°-Wを指す。遺物は土師器片が少量ある。

第47号土坑 (第123図)

第47号土坑はP-24グリッドに位置する。平面形態は不定形で、規模は長径1.56m、短径1.15m、深さ0.20mである。主軸方位はN-32°-Eを指す。遺物は土師器片が少量ある。



第123図 土坑 (4)

第48号土坑 (第123図)

第48号土坑はP-24グリッドに位置する。平面形態は円形で二段に掘り込まれる。規模は長径0.67m、短径0.62m、深さ0.13m、最深部で0.40mである。主軸方位はN-37°-Wを指す。埋土中から土師器高坏や坏の破片が出土しており、隣接する第26号住居跡との関連も考えられる。

第49号土坑 (第123図)

第49号土坑はP-24グリッドに位置する。北東部が調査区外に延びる。平面形態は円形で、規模は長径1.09m、短径0.90m、深さ0.18mである。主軸方位はN-14°-Wを指す。

遺物は土師器片が少量出土した。

第50号土坑 (第123図)

第50号土坑はP・Q-24グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.27m、短径0.88m、深さ0.21mである。主軸方位はN-86°-Wを指す。遺物は土師器片が少量出土した。時期は埋土の状態から近世以降と判断される。

第51号土坑 (第124図)

第51号土坑はP-24グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径1.70m、短径0.76m、深さ0.44mである。主軸方位はN-8°-Wを指す。埋土に浅間A軽石を含むことから近世以降の所産と考えられる。

第52号土坑 (第124図)

第52号土坑はP-24グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.70m、短径0.48m、深さ0.13mである。主軸方位はN-70°-Wを指す。遺物は土師器片と焼成粘土塊が少量出土したが、図示できるものはない。

第53号土坑 (第124図)

第53号土坑はP-24グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径0.83m、短径0.78m、深さ0.06mである。主軸方位はN-8°-Wを指す。遺物は古墳時代中期の土師器片が出土しているが、図示できるものはない。

第54号土坑 (第124図)

第54号土坑はQ-24・25グリッドに位置する。第16号溝跡によって上面が壊される。平面形態は長方形で、規模は長径1.83m、短径1.13m、深さ0.17mである。主軸方位はN-10°-Wを指す。遺物は土師器片が少量出土した。

第55号土坑 (第124図)

第55号土坑はQ-25グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.99m、短径0.74m、深さ0.16mである。主軸方位はN-0°-Sを指す。遺物は土師器片が少量出土した。

第56号土坑 (第124図)

第56号土坑はP・Q-23グリッドに位置する。平面形態は不定形で、規模は長径1.00m、短径0.71m、深さ0.44mである。主軸方位はN-0°-Sを指す。遺物は出土しなかった。

第57号土坑 (第124図)

第57号土坑はP-22・23グリッドに位置する。第15号溝跡によって上面が壊されている。平面形態は長方形で、規模は長径1.03m、短径0.75m、深さ0.22mである。主軸方位はN-88°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第58号土坑 (第124図)

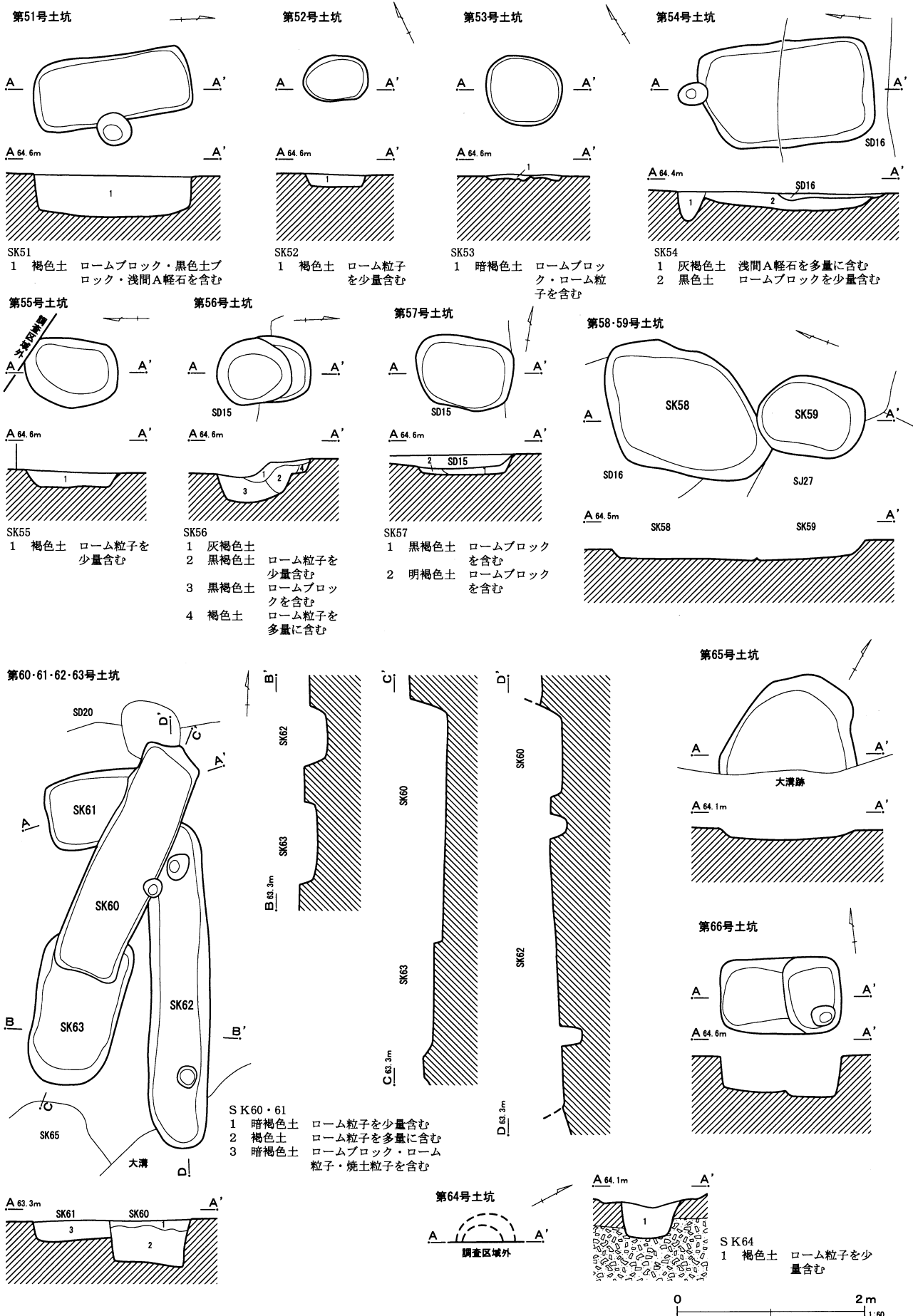
第58号土坑はQ-23グリッドに位置する。平面形態は不定形で、規模は長径2.00m、短径1.40m、深さ0.15mである。主軸方位はN-17°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第59号土坑 (第124図)

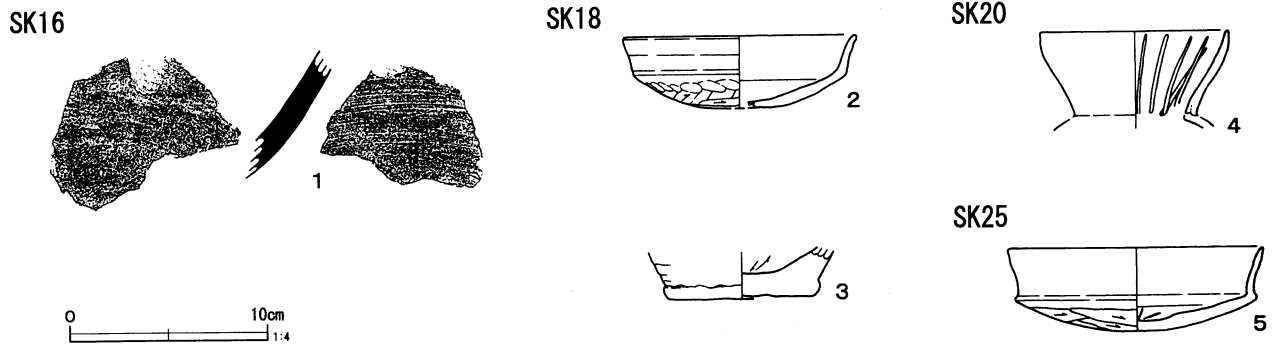
第59号土坑はQ-23グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.14m、短径0.86m、深さ0.17mである。主軸方位はN-20°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第60号土坑 (第124図)

第60号土坑はQ-25グリッドに位置する。第61号土坑を切っている。平面形態は長方形で、規模は長径2.61m、短径0.72m、深さ0.45mである。主軸方位はN-22°-Eを指す。



第124図 土坑 (5)



第125図 土坑出土遺物

第41表 土坑出土遺物観察表 (第125図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	須恵器甕	S K16埋土			破片	A・C・G・I・K	良好 灰 N5/0	末野窯産 内外面ロクロナデ
2	土師器坏	S K18埋土	(11.6) 3.7		30	A・B・F・J	良好 橙5YR6/6	口縁部と体部の境に棒状工具による押引きによる沈線 体部上位に指頭圧痕
3	土師器甕	S K18埋土	[2.5]	(7.4)	30	A・B・C・K	良好 にぶい赤褐5YR5/4	胴部外面は磨滅が著しく調整不明瞭 底面ヘラケズリ
4	土師器埴	S K20埋土	(9.4) [4.4]		10	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	口縁部内面放射暗文
5	土師器坏	S K25埋土	(12.8) 4.2		50	A・C・D・F・J	不良 黄褐10YR5/8	器面は磨滅著しく調整は不明瞭

遺物は土師器片が少量出土した。

第61号土坑 (第124図)

第61号土坑はQ-25グリッドに位置する。平面形態は長方形と考えられる。規模は長径0.89m、短径0.76m、深さ0.22mである。主軸方位はN-77°-Eを指す。

遺物は土師器片が少量出土した。

第62号土坑 (第124図)

第62号土坑はQ・R-25グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形で、規模は長径3.46m、短径0.63m、深さ0.22mである。主軸方位はN-4°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

第63号土坑 (第124図)

第63号土坑はQ・R-25グリッドに位置する。第60号土坑と切り合う。平面形態は長方形で、規模は長径1.23m、短径0.94m、深さ0.15mである。主軸方位はN-12°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

第64号土坑 (第124図)

第64号土坑はR-25グリッドの大溝跡東側斜面部に位置する(第97図)。土層断面の精査中に土師器坏が出土したことから確認されたものである。平面形態は円形と考えられ、規模は長径0.63m、短径0.30m、深さ0.38mである。主軸方位はN-28°-Eを指す。

大溝跡との関連性が窺われるため出土遺物は第102図に掲載した。

第65号土坑 (第124図)

第65号土坑はR-25グリッドに位置する。南半分が大溝跡と重複する。平面形態は不定形で、規模は長径1.45m、短1.03m、深さ0.12mである。主軸方位はN-59°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第66号土坑 (第124図)

第66号土坑は、O-22グリッドに位置する。平面形態は長方形で二段に掘り込まれる。規模は長径1.29m、短径0.81m、深さ0.43mである。主軸方位はN-84°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第42表 土坑一覧表

番号	グリッド	平面形	長軸方向	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構	遺物	挿図
1	U-31	円形	N-33°-W	1.48	1.36	0.34	SJ2	弥生土器 石器	第117図
2	U-31	楕円形	N-36°-W	1.25	0.91	0.19	SJ2 SA1・2	土師器	第120図
3	U-31	楕円形	N-66°-E	1.70	1.00	0.31			第120図
4	U-31	円形	N-39°-E	1.70	1.42	0.23			第120図
5	U・V-32	長方形	N-10°-W	2.61	1.06	0.15		土師器	第120図
6	W-32	不定形	N-0°-S	1.18	0.77	0.19			第120図
7	R-26	不定形	N-8°-E	1.56	1.39	0.26	SD6・7	土師器	第120図
8	R-26	長方形	N-85°-E	1.79	(0.46)	0.32	SD7		第120図
9	S-26	長方形	N-84°-E	(4.06)	0.65	0.06	SJ4		第120図
10	S-25・26	不定形	N-87°-W	(3.16)	1.40	0.16	SD8		第120図
11	R・S-27	不定形	N-6°-W	1.66	0.67	0.27	SD9 SK12		第120図
12	R・S-27	不定形	N-60°-W	(0.66)	0.58	0.36	SK11		第120図
13	S・T-26・27	長方形	N-67°-E	(2.63)	1.47	0.51			第120図
14	S-26・27	不定形	N-0°-S	(2.90)	-	0.39	SJ6 SD11		第120図
15	S-26	長方形	N-74°-E	2.97	(0.83)	0.45	SJ6 SD11		第121図
16	S-26	台形	N-81°-E	2.59	1.69	0.40	SJ6	土師器 須恵器	第121図
17	S-27	長方形	N-18°-W	3.35	1.12	0.30	SJ10 SK18		第121図
18	S-27	不定形	N-78°-E	(2.48)	0.80	0.30	SJ10 SK17 P9(S-27G)	土師器	第121図
19	S-26	長方形	N-16°-W	(1.20)	1.04	0.27			第121図
20	S-28	楕円形	N-68°-E	(1.16)	1.10	0.37	SJ11・14	土師器	第121図
21	S-28	長方形	N-45°-W	(1.29)	(0.36)	0.66	SJ11		第121図
22	T-28	長方形	N-83°-E	2.81	1.99	0.11	P17~20・30・38・65(T-28G)	土師器	第121図
23	S-28・29	長方形	N-85°-E	4.04	1.21	0.27	SD12 P1・3(S-29G)	土師器	第122図
24	S-28	楕円形	N-64°-E	0.82	0.60	0.14		土師器	第122図
25	U-28・29	不定形	N-88°-E	1.67	1.52	0.19	SJ16	土師器	第122図
26	T-28	楕円形	N-53°-W	1.15	0.60	0.23	SJ16		第122図
27	U-29	長方形	N-4°-W	1.78	0.87	0.16			第122図
28	U-29・30	長方形	N-14°-W	2.10	0.96	0.36			第122図
29	U・V-30	長方形	N-20°-W	2.43	1.07	0.41	SJ24 P2(U-30G)	土師器	第122図
30	U-30	長方形	N-19°-W	1.39	0.80	0.27	P15(U-30G)	土師器	第122図
31	U-30	楕円形	N-80°-E	1.63	0.76	0.16	SD22	土師器	第122図
32	O-22	楕円形	N-66°-E	1.16	0.99	0.14			第122図
33	P-22	隅丸長方形	N-89°-E	1.41	0.49	0.16		土師器	第122図
34	O-22	不定形	N-69°-E	0.76	0.54	0.19		土師器	第122図
35	P-22	隅丸長方形	N-0°-S	1.64	0.54	0.08		土師器	第123図
36	P-22	楕円形	N-73°-E	0.95	0.48	0.05			第123図
37	P-23	円形	N-46°-W	1.13	0.97	0.14			第123図
38	P-23	楕円形	N-0°-S	0.74	0.64	0.17			第123図
39	P-23	長方形	N-86°-W	1.86	0.71	0.27		土師器	第123図
40	P-23	不定形	N-80°-E	1.23	0.78	0.09			第123図
41	P-23	不定形	N-30°-E	1.16	1.00	0.27		土師器	第123図
42	Q-23	楕円形	N-65°-W	0.85	(0.55)	0.26	SJ27	土師器	第123図
43	Q-23	長方形	N-6°-W	2.55	0.97	0.16		土師器 焼土塊	第123図
44	P・Q-23	長方形	N-56°-E	1.69	1.24	0.11		土師器	第123図
45	P・Q-23	不定形	N-0°-S	0.77	0.60	0.29			第123図
46	P-24	楕円形	N-7°-W	0.72	0.58	0.20		土師器	第123図
47	P-24	不定形	N-32°-E	1.56	1.15	0.20	SK50	土師器	第123図
48	P-24	円形	N-37°-W	0.67	0.62	0.13		土師器	第123図
49	P-24	円形	N-14°-W	1.09	0.90	0.18		土師器	第123図
50	P・Q-24	楕円形	N-86°-W	1.27	0.88	0.21	SK47	土師器	第123図
51	P-24	長方形	N-8°-W	1.70	0.76	0.44		土師器	第124図
52	P-24	楕円形	N-70°-W	0.70	0.48	0.13		土師器 焼土塊	第124図

番号	グリッド	平面形	長軸方向	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構	遺物	挿図
53	P-24	円形	N-8°-W	0.83	0.78	0.06		土師器	第124図
54	Q-24・25	長方形	N-10°-W	1.83	1.13	0.17	SD16		第124図
55	Q-25	楕円形	N-0°-S	0.99	0.74	0.16			第124図
56	P・Q-23	不定形	N-0°-S	1.00	0.71	0.44	SD15		第124図
57	P-22・23	長方形	N-88°-W	1.03	0.75	0.22	SD15		第124図
58	Q-23	不定形	N-17°-E	2.00	1.40	0.15	SD15・16		第124図
59	Q-23	楕円形	N-20°-W	1.14	0.86	0.17	SD16		第124図
60	Q-25	長方形	N-22°-E	2.61	0.72	0.45	SD20 SK61~63	土師器	第124図
61	Q-25	長方形	N-77°-E	(0.89)	0.76	0.22	SK60	土師器	第124図
62	Q・R-25	隅丸長方形	N-4°-W	3.46	0.63	0.22	SK60		第124図
63	Q・R-25	長方形	N-12°-E	(1.23)	0.94	0.15	SK60		第124図
64	R-25	円形	N-28°-E	0.63	(0.30)	0.38	大溝跡(SD3)		第124図
65	R-25	不定形	N-59°-E	1.45	(1.03)	0.12	大溝跡(SD3)		第124図
66	O-22	長方形	N-84°-W	1.29	0.81	0.43			第124図

10. 倒木痕

調査区南東部の緩斜面部を中心に倒木痕が8基検出された。いわゆる土層捻転址で、基本土層が捻転した部分と二次的に堆積した層から形成される。遺構確認面で、捻転した部分の土層が帯状に見られる特徴があり、非人為的な風倒木痕としての性格づけがなされている。倒木方向は一定していないが大きくは台地側への倒木と考えられる。

第1号倒木痕 (第126図)

第1号倒木痕はX・Y-35・36グリッドに位置する。平面形は略円形、規模は長径3.50m、短径3.10mである。焼土を多量に含む黒色帯が環状に巡り、内側に基本土層が捻転している。捻転方向はN-70°-Wを指す。

第2号倒木痕 (第126図)

第2号倒木痕はX-34グリッドに位置する。平面形は略円形、規模は長径3.49m、短径3.17mである。黒色帯に挟まれた内側に基本土層が捻転する。捻転方向はN-101°-Wを指す。

第3号倒木痕 (第126図)

第3号倒木痕はW-34グリッドに位置する。平面形は円形、規模は長径3.14m、短径2.95mである。環状の黒色帯の内側に基本土層が捻転する。捻転方向はN-166°-Eを指す。

第4号倒木痕 (第126図)

第4号倒木痕はW-34グリッドに位置し、大半

が調査区外に延びる。平面形、規模等は不明である。小規模な倒木痕である。

第5号倒木痕 (第126図)

第5号倒木痕はV・W-33・34グリッドに位置し、北東部が調査区外にかかる。平面形は楕円形と考えられる。規模は長径2.83mである。黒色帯の内側にロームが捻転している。

第6号倒木痕 (第126図)

第6号倒木痕はW-32・33グリッドに位置する。平面形は略円形、規模は長径3.28m、短径3.05mである。片側に三日月状の黒色帯が堆積する。捻転方向はN-100°-Wを指す。

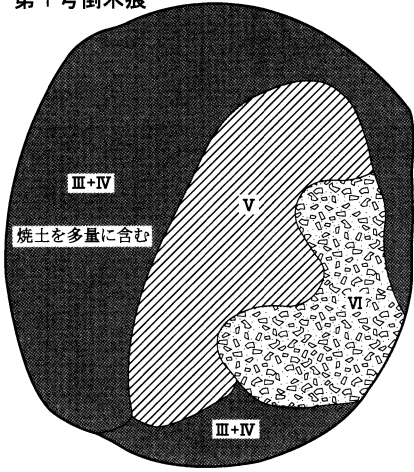
第7号倒木痕 (第126図)

第7号倒木痕はV-32グリッドに位置する。平面形は不定形、規模は長径3.61m、短径2.46mである。基本土層が複雑に捻転する。捻転方向はN-138°-Wを指す。

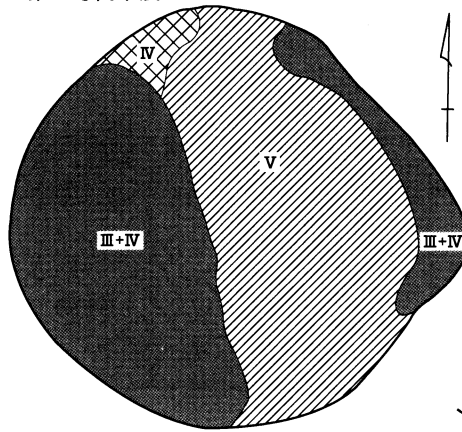
第8号倒木痕 (第126図)

第8号倒木痕はU・V-31・32グリッドに位置する。北東端部が調査区外にかかるため平面形は明確でないが、楕円形に近いと考えられる。規模は長径3.96m以上、短径3.88mである。黒色帯の内側に基本土層が捻転している。捻転方向はN-109°-Wを指す。時期不詳であるが第5号土坑が重複する。

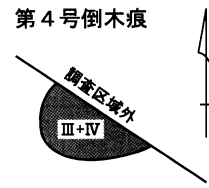
第1号倒木痕



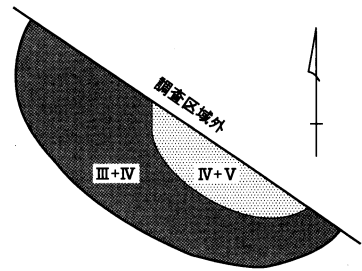
第2号倒木痕



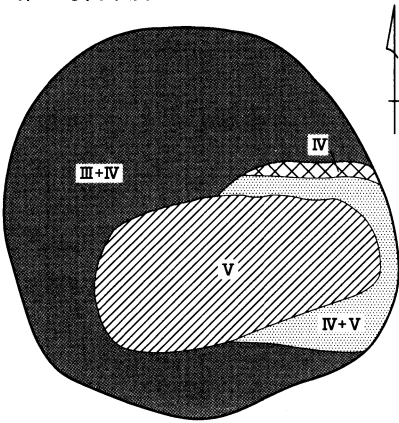
第4号倒木痕



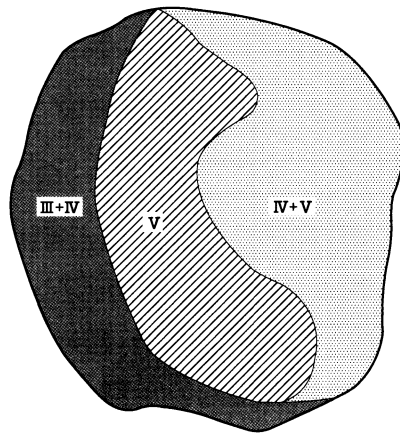
第5号倒木痕



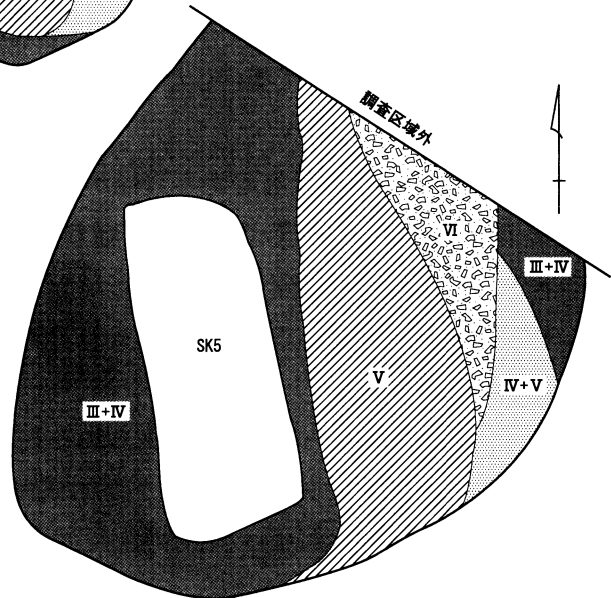
第3号倒木痕



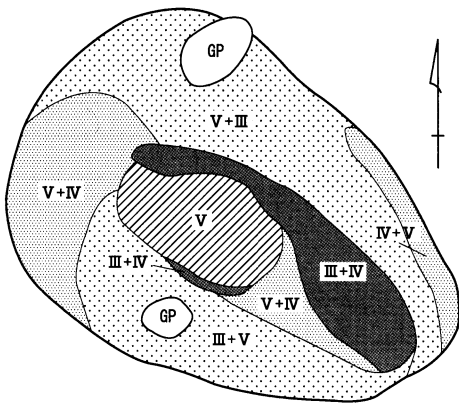
第6号倒木痕



第8号倒木痕

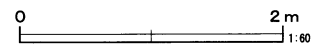


第7号倒木痕

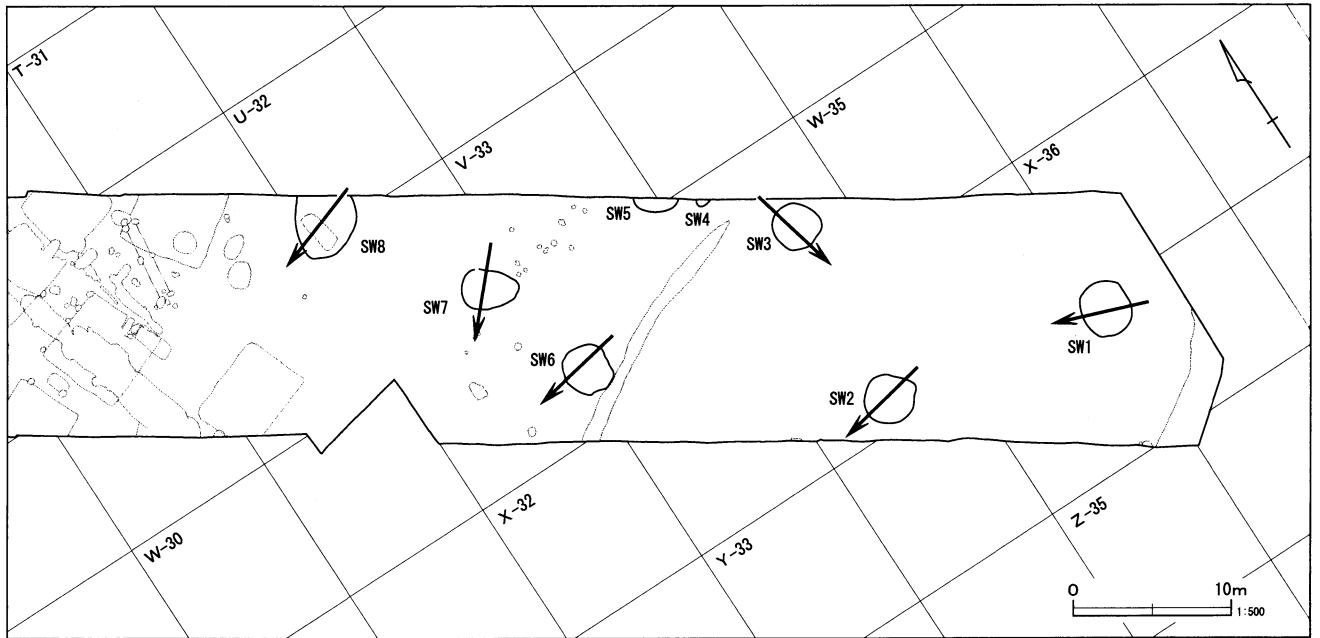


- III+IV層
- III+V層
- IV層
- IV+V層
- V層
- VI層

土層説明 (基本土層に同じ)
 III層 黒色土 (粘性、しまりが強い)
 IV層 黒色化したローム
 V層 ローム
 VI層 礫層



第126図 倒木痕



第127図 倒木痕分布図

11. ピット

調査区内からは単独のピット（小穴）が398基検出された（第129～138図）。その分布状況は、調査区北西部の第15・16号溝跡によって区画された範囲と、掘立柱建物跡や柱穴列が検出された調査区中央部から南東部にかけて集中したあり方が窺われた。

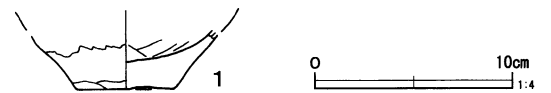
直径20cm程の小規模なものから長径が1mを超える大型のものまで規模・形状とも多様であり、住居跡などの遺構との重複も著しいことから、掘立柱建物跡や柱穴列として認識することのできなかったものも多い。

出土遺物も住居跡からの混入と考えられる土師器片がほとんどで、ピットに直接伴う遺物は皆無である。このため性格については不明とせざるを得ない。なお、規模などの詳細については第44表ピット一覧表に記載した。

出土遺物は調査区北西部のP-24グリッドP1から出土した土師器の小型壺1点のみを図示した（第128図1）。

微かに上げ底となる底部から緩やかに湾曲しながら球形の胴部へと立ち上がる。底部の器肉が厚く、胴部は内外面ともヘラナデを施し、底面にヘラケズリが施されている。特徴が少なく時期は明確ではないが、古墳時代中期後半から後期初頭に比定される。周辺の住居跡からの混入であろう。

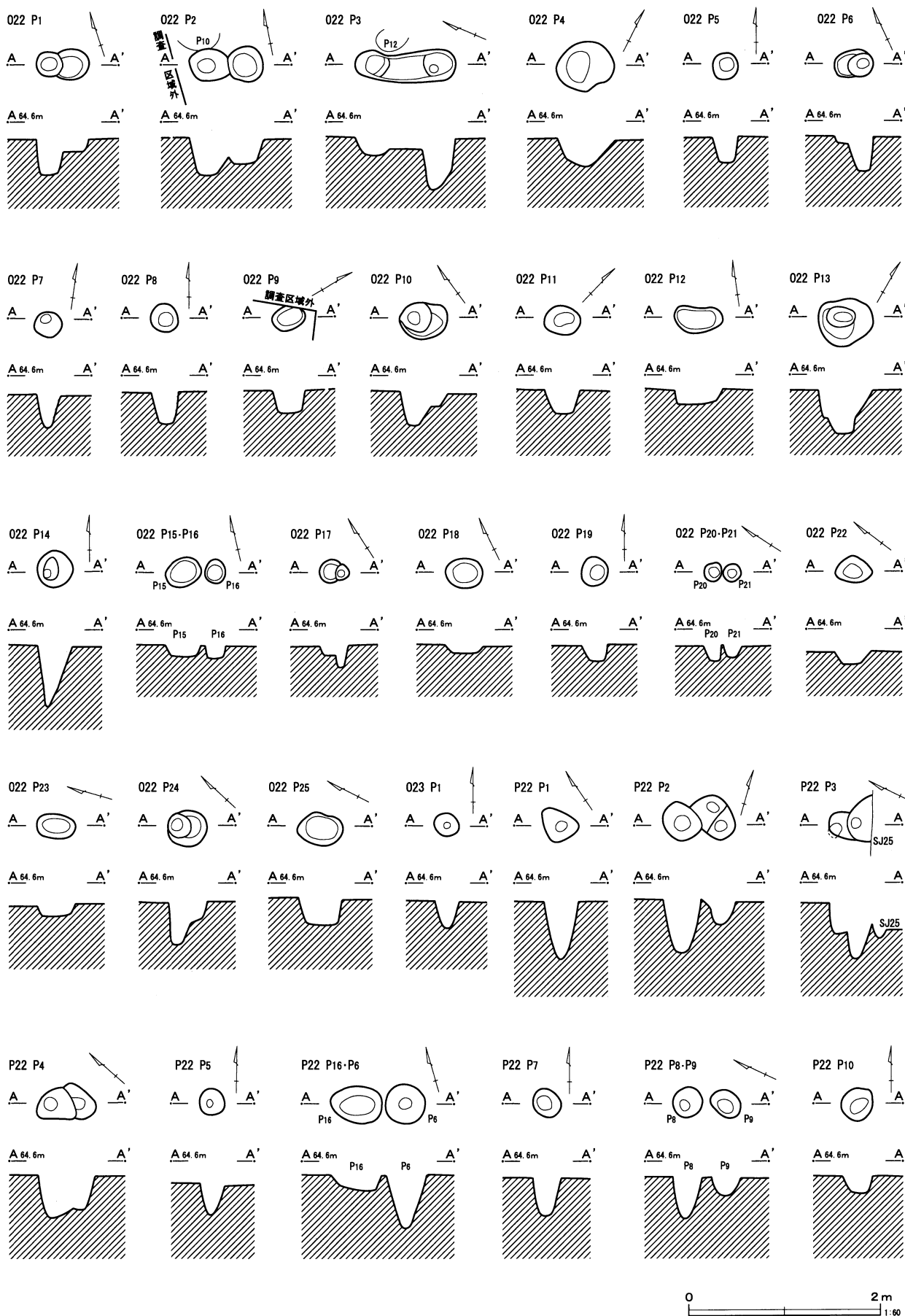
P24G P1



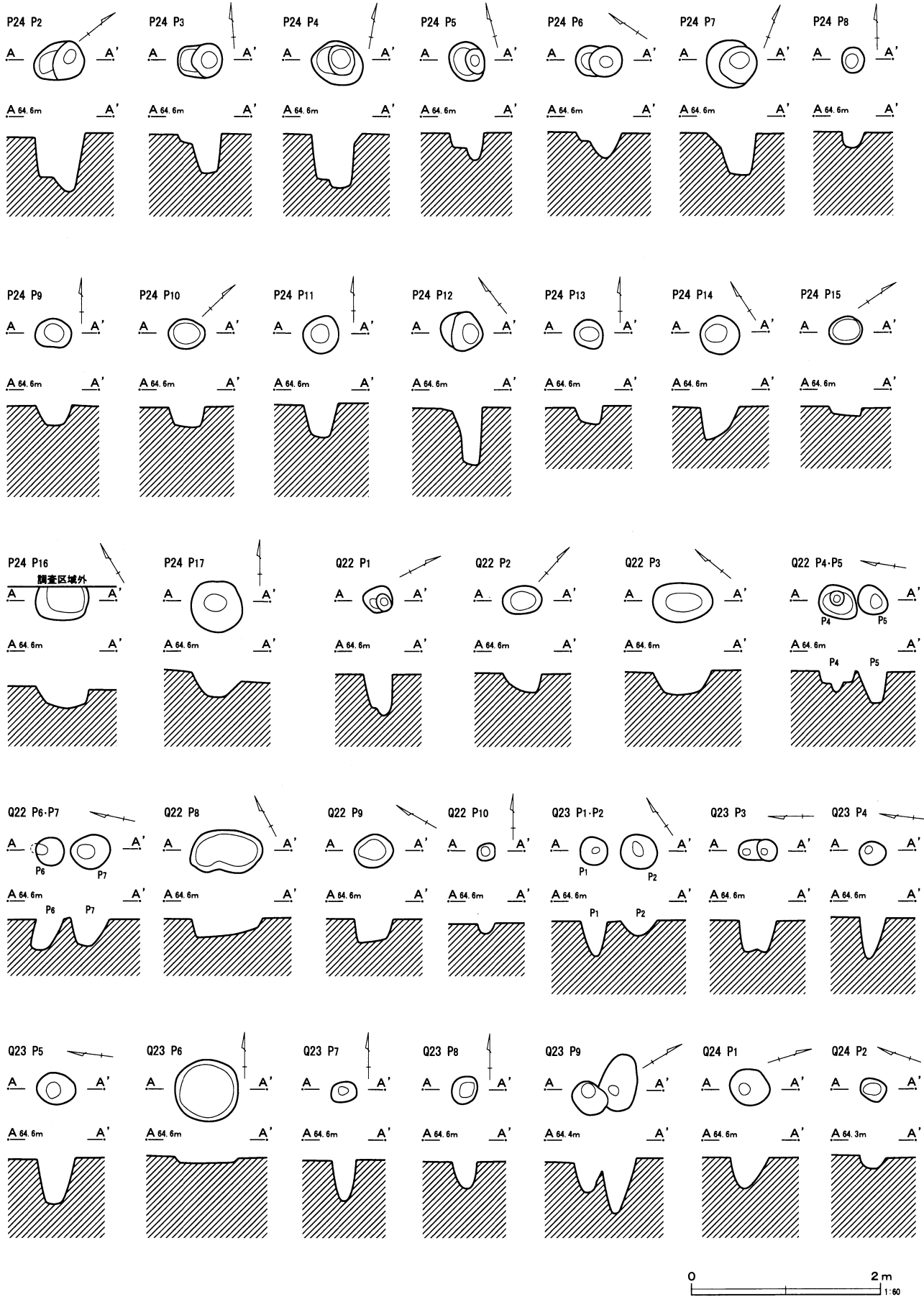
第128図 ピット出土遺物

第43表 ピット出土遺物観察表（第128図）

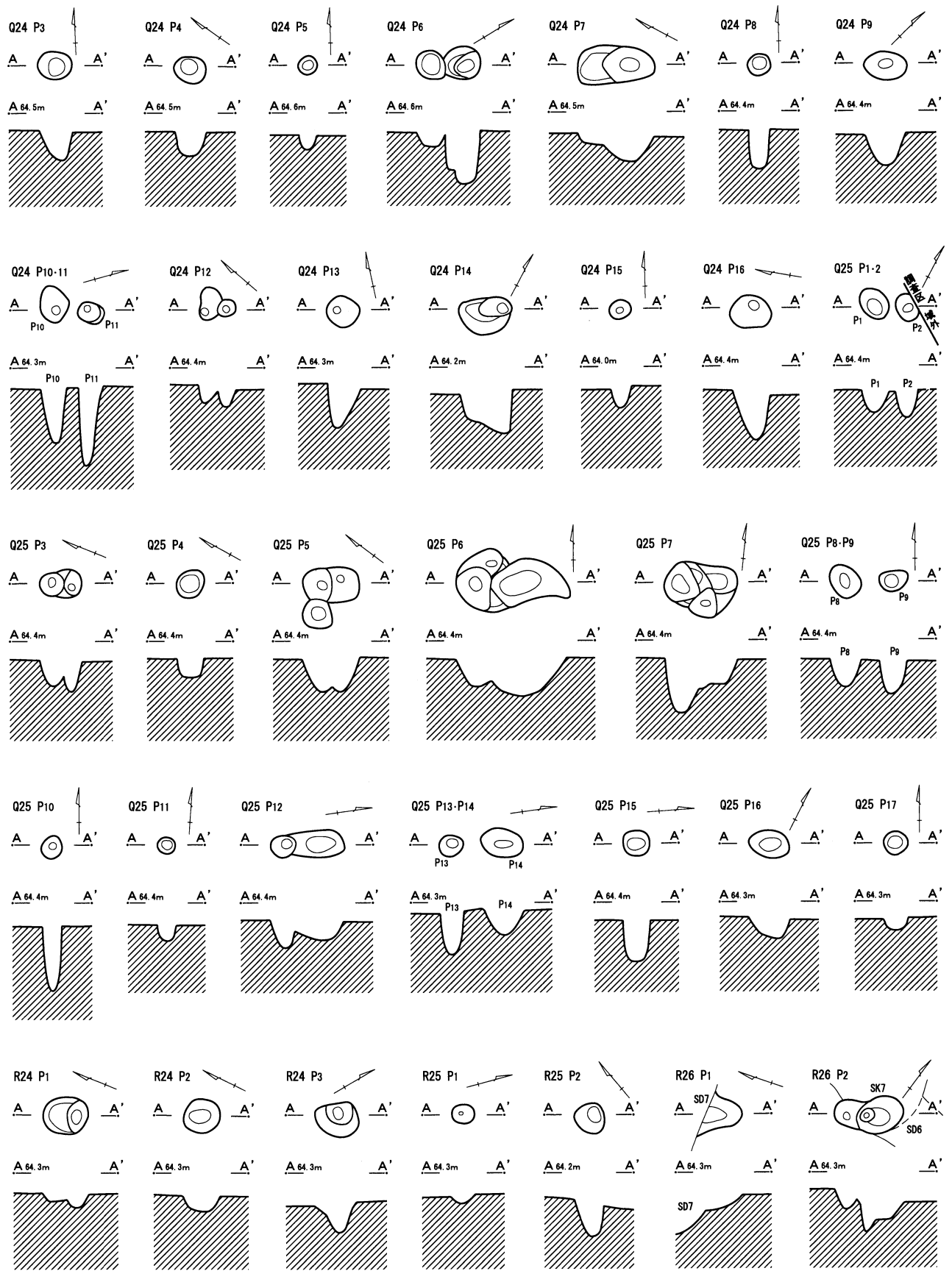
番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 小型壺	P24グリッド P1 埋土	[1.9]	5.0	95	A・C・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	底面ヘラケズリ



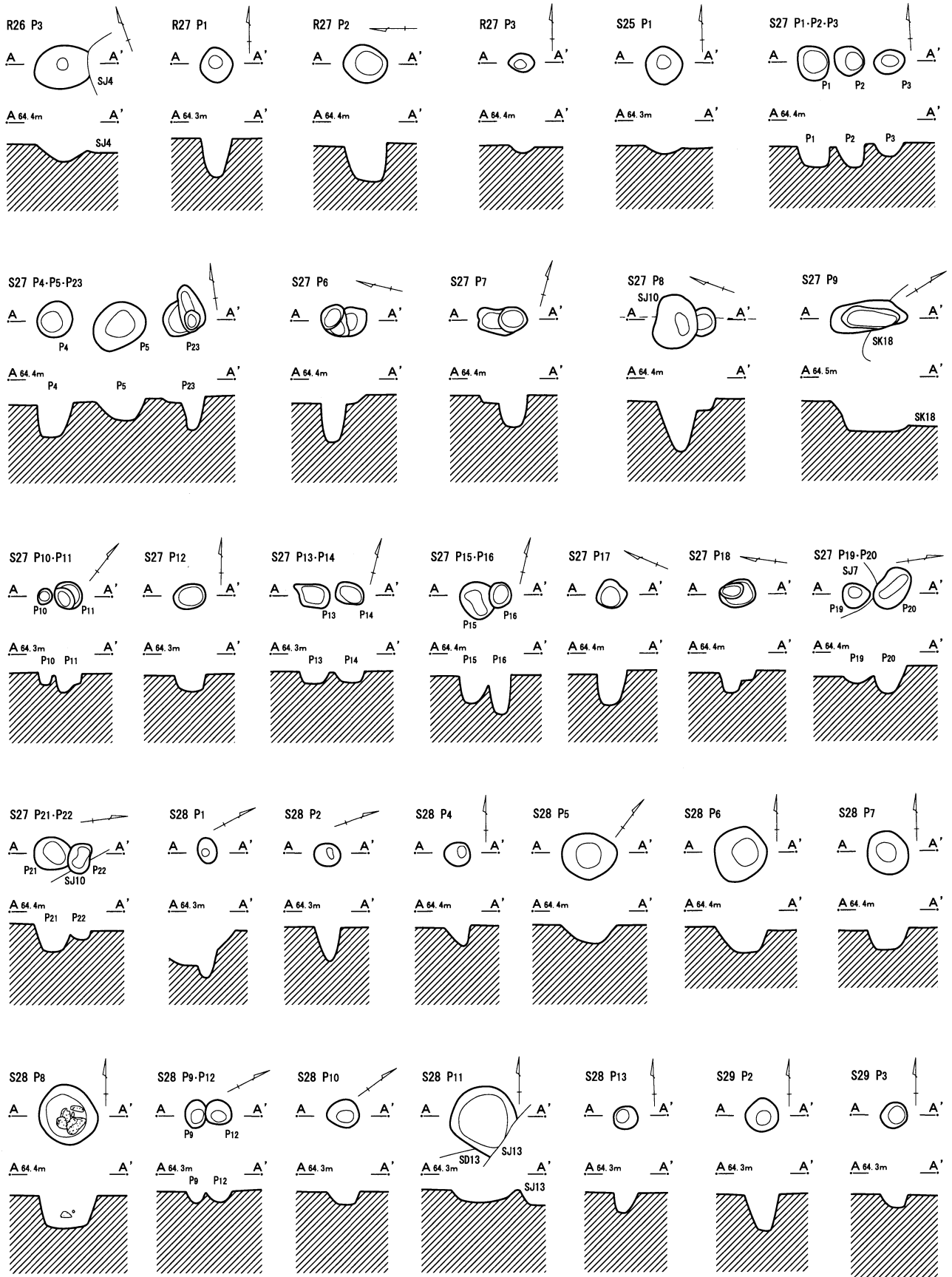
第129図 ピット (1)



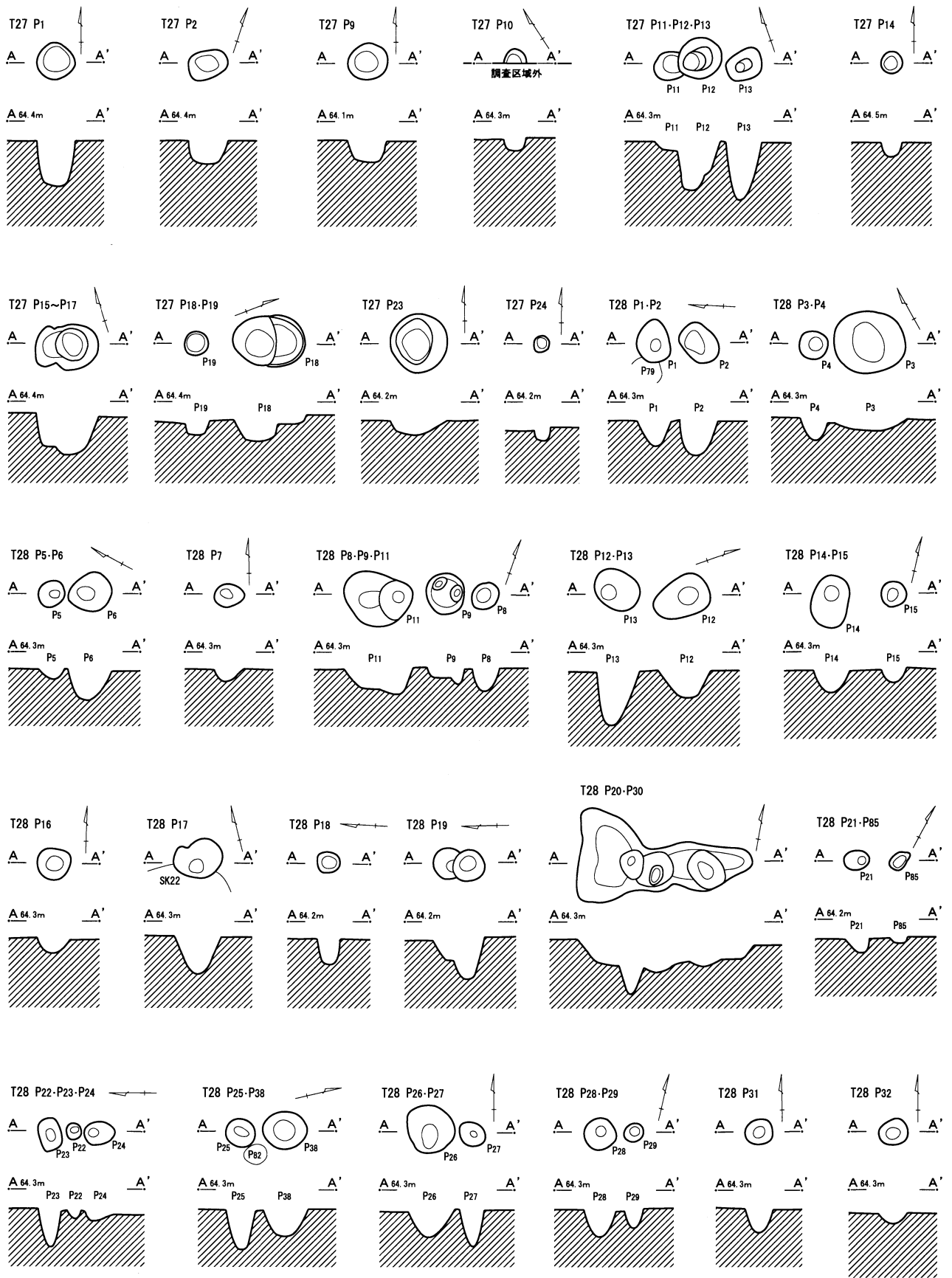
第131図 ピット (3)



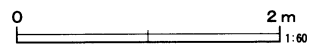
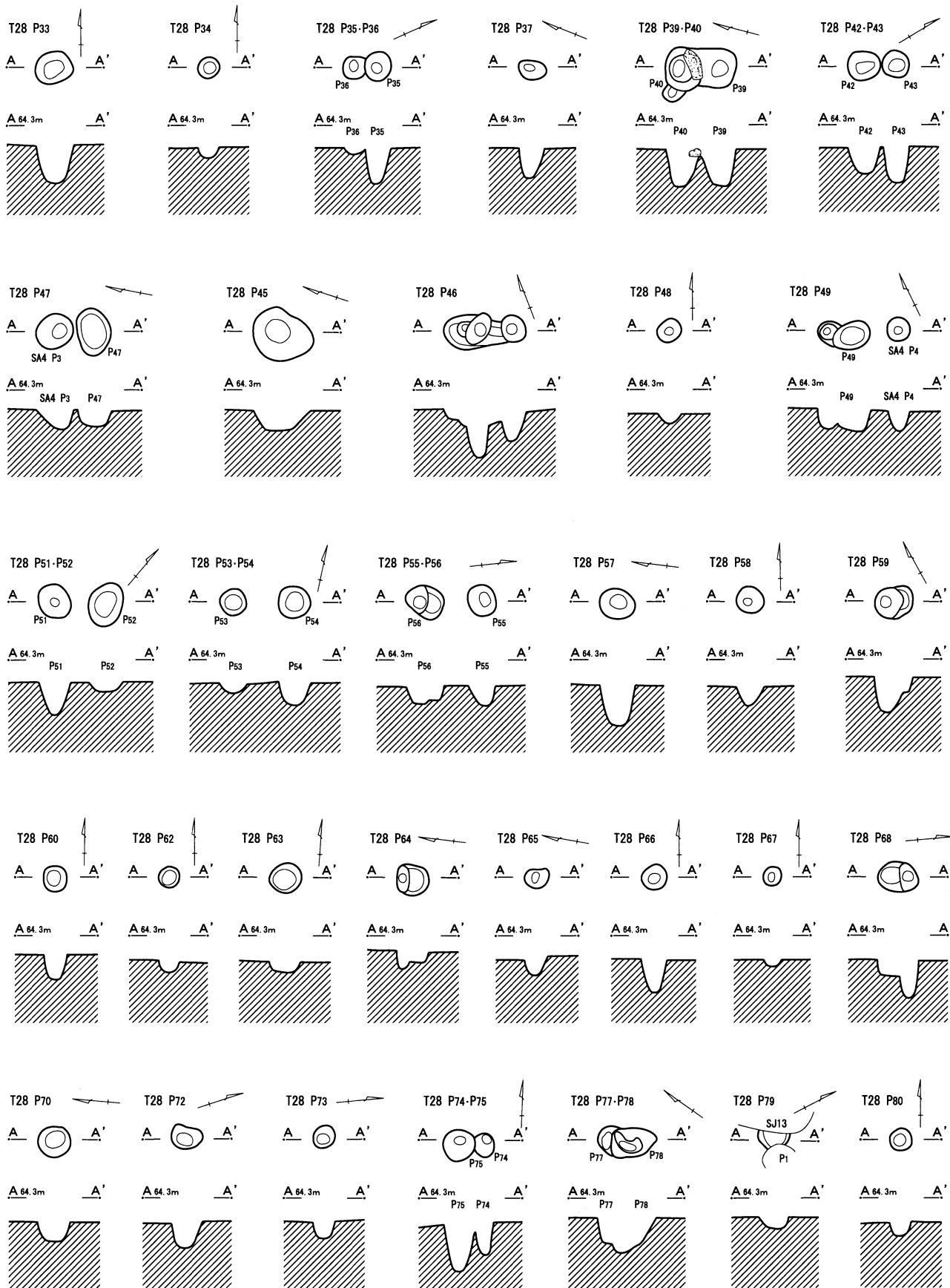
第132図 ピット (4)



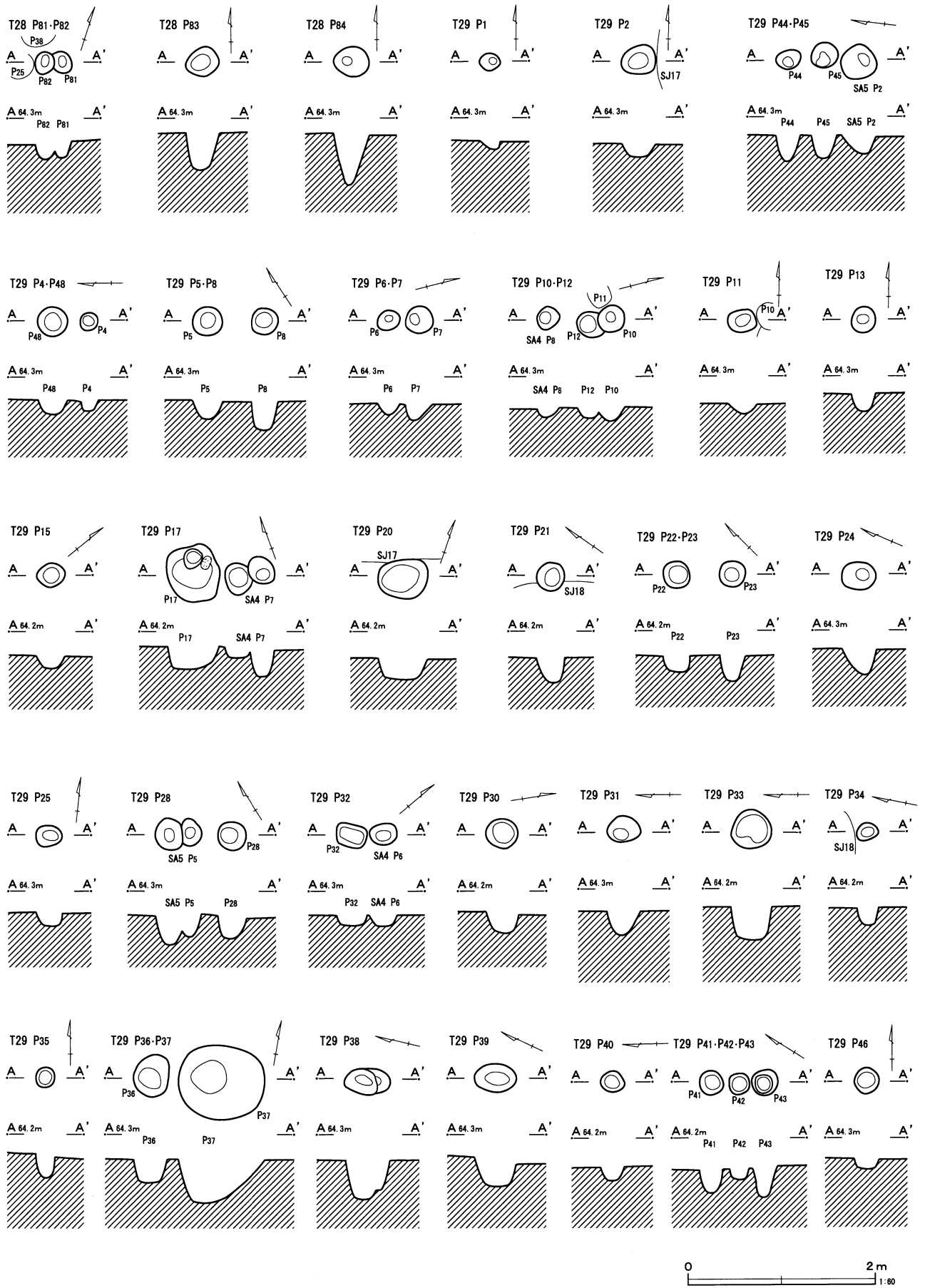
第133図 ピット (5)



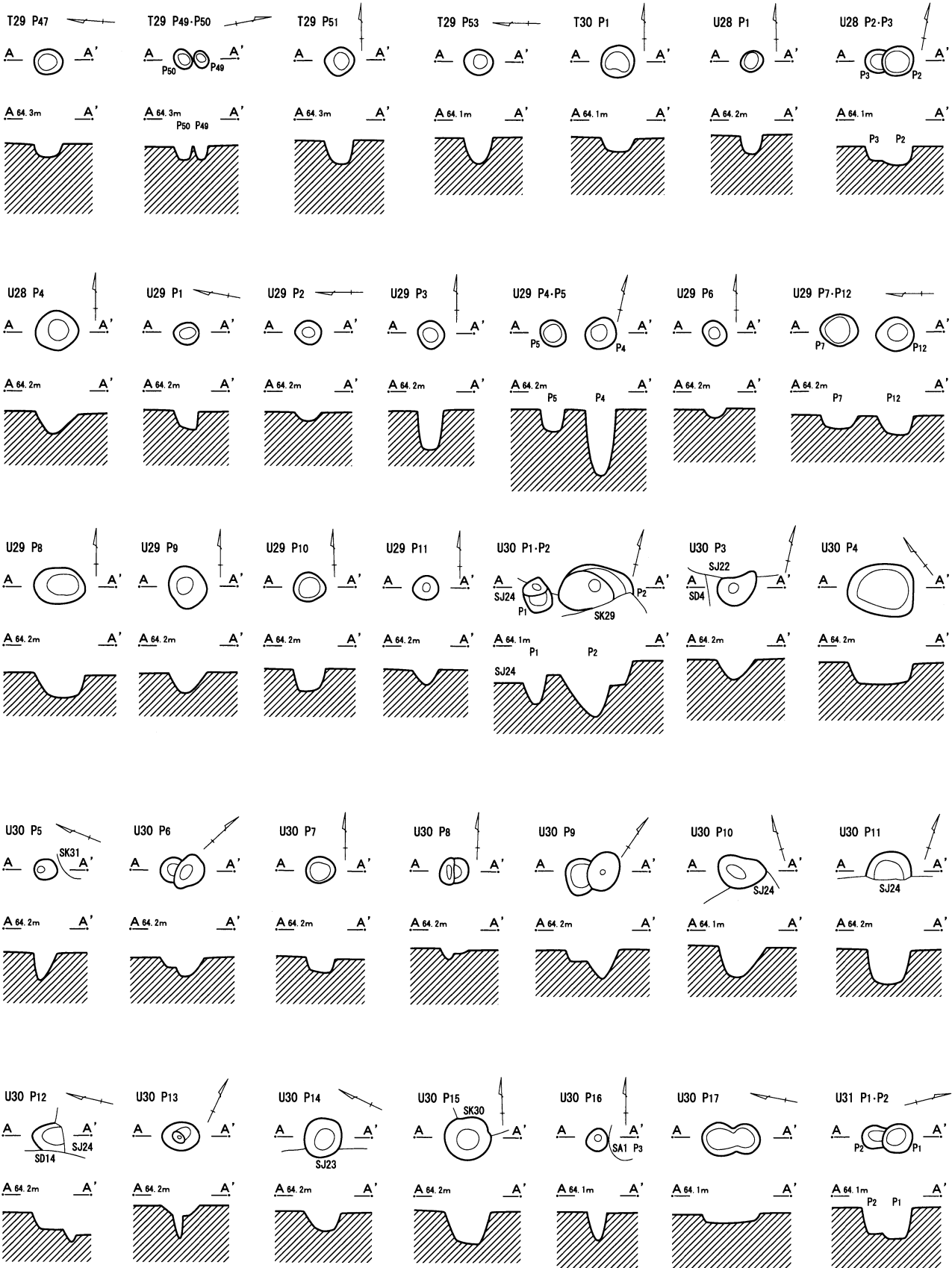
第134図 ピット (6)



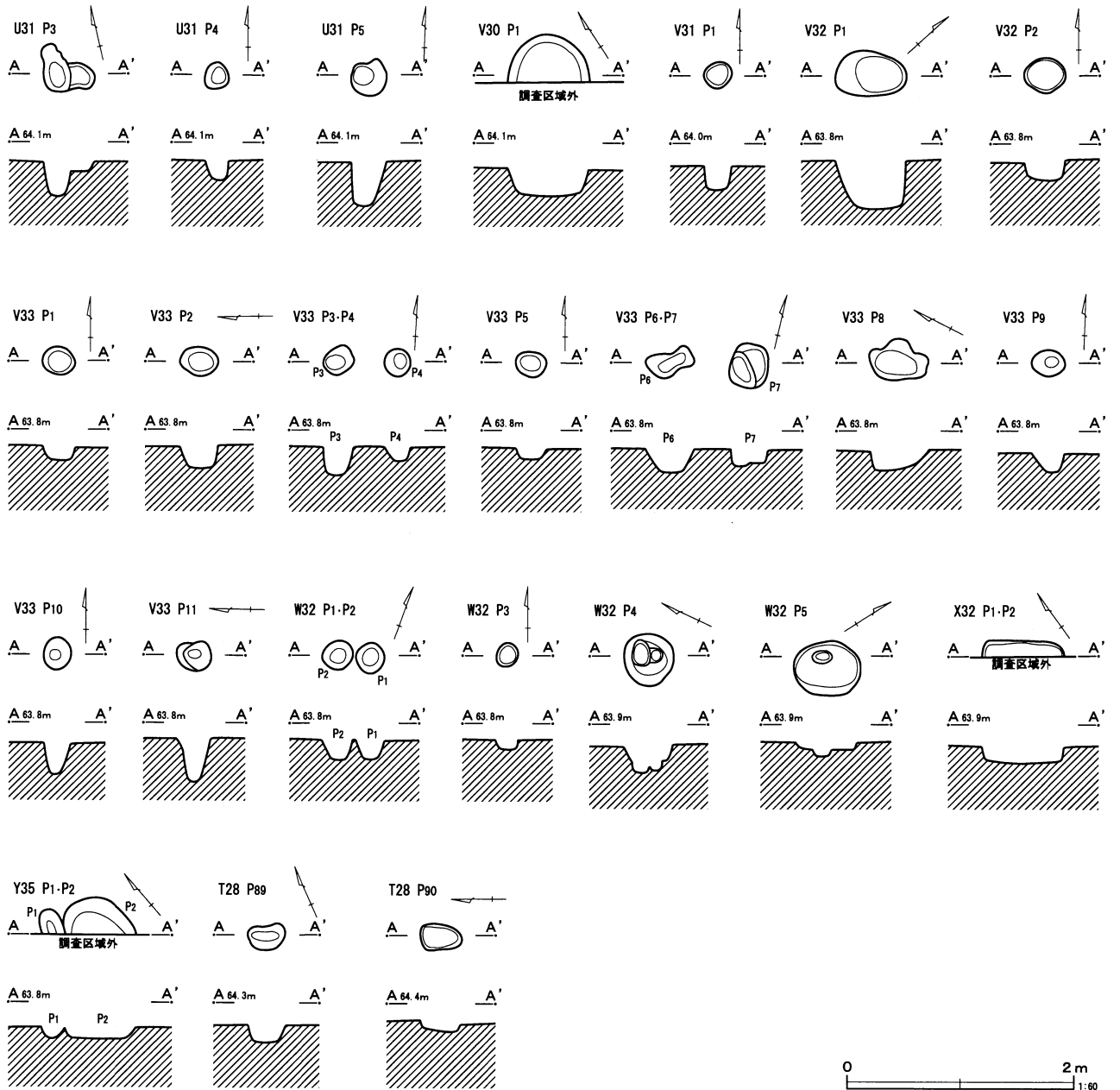
第135図 ピット (7)



第136図 ピット (8)



第137図 ピット（9）



第138図 ピット (10)

第44表 ピット一覧表

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
O-22	P 1	55	32	38	土師器
O-22	P 2	76	37	39	土師器・須恵器
O-22	P 3	104	34	53	土師器・須恵器
O-22	P 4	60	50	27	土師器
O-22	P 5	27	26	27	土師器
O-22	P 6	40	28	36	土師器
O-22	P 7	27	26	35	土師器
O-22	P 8	30	28	33	
O-22	P 9	34	25	23	
O-22	P10	50	38	35	
O-22	P11	37	30	24	
O-22	P12	50	27	15	
O-22	P13	56	49	45	
O-22	P14	38	37	63	
O-22	P15	38	29	11	
O-22	P16	25	22	13	
O-22	P17	31	24	23	
O-22	P18	38	31	8	
O-22	P19	30	28	17	
O-22	P20	20	18	16	
O-22	P21	19	19	12	
O-22	P22	38	27	13	SD15
O-22	P23	40	25	12	SD15
O-22	P24	41	38	44	
O-22	P25	47	34	27	
O-23	P 1	25	23	28	土師器
P-22	P 1	39	32	59	土師器
P-22	P 2	74	45	56	土師器
P-22	P 3	47	(44)	58	SJ25 土師器
P-22	P 4	60	37	44	土師器
P-22	P 5	27	26	32	土師器
P-22	P 6	42	40	54	土師器
P-22	P 7	30	26	40	土師器
P-22	P 8	31	30	42	土師器
P-22	P 9	33	25	19	土師器
P-22	P10	34	32	17	土師器
P-22	P11	43	31	46	土師器
P-22	P12	44	40	52	
P-22	P13	33	30	17	
P-22	P14	40	37	28	
P-22	P15	27	26	20	
P-22	P16	53	38	17	
P-22	P17	41	40	41	
P-22	P18	28	24	25	
P-22	P19	23	22	18	
P-22	P20	29	27	34	
P-22	P21	23	20	24	
P-22	P22	23	21	32	
P-22	P23	33	30	37	
P-23	P 1	25	25	20	小礫
P-23	P 2	26	23	14	土師器
P-23	P 3	28	21	21	土師器
P-23	P 4	41	33	50	

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
P-23	P 5	28	26	19	
P-23	P 6	31	27	10	
P-23	P 7	20	19	11	
P-23	P 8	21	14	18	
P-23	P 9	41	27	9	
P-23	P10	24	22	13	
P-23	P11	21	16	13	
P-23	P12	32	24	8	
P-23	P13	23	22	16	
P-23	P14	24	24	19	
P-23	P15	45	34	6	
P-23	P16	25	21	28	
P-23	P17	30	25	25	
P-23	P18	30	26	7	
P-23	P19	23	21	29	
P-23	P20	35	26	32	
P-23	P21	37	23	14	
P-23	P22	30	28	22	
P-23	P23	22	22	32	
P-23	P24	31	24	19	
P-23	P25	24	22	25	
P-23	P26	26	25	20	
P-23	P27	20	18	16	
P-24	P 1	35	29	48	
P-24	P 2	52	39	60	土師器
P-24	P 3	47	35	40	土師器
P-24	P 4	54	44	57	土師器
P-24	P 5	42	36	29	土師器
P-24	P 6	49	32	26	土師器
P-24	P 7	52	49	45	土師器
P-24	P 8	27	23	17	土師器
P-24	P 9	37	30	21	土師器
P-24	P10	39	31	21	
P-24	P11	38	36	36	
P-24	P12	45	40	61	
P-24	P13	32	30	18	
P-24	P14	41	40	35	
P-24	P15	35	28	11	
P-24	P16	55	(36)	21	
P-24	P17	57	56	22	
Q-22	P 1	30	27	44	土師器
Q-22	P 2	41	30	21	
Q-22	P 3	62	41	24	
Q-22	P 4	44	35	23	
Q-22	P 5	32	28	32	
Q-22	P 6	30	30	32	
Q-22	P 7	42	37	29	
Q-22	P 8	70	43	20	土師器
Q-22	P 9	40	36	24	
Q-22	P10	18	18	11	
Q-23	P 1	30	30	37	土師器
Q-23	P 2	38	38	16	土師器
Q-23	P 3	40	21	34	土師器

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
Q-23	P 4	28	24	42	
Q-23	P 5	40	33	48	
Q-23	P 6	66	66	7	
Q-23	P 7	27	21	45	
Q-23	P 8	31	26	28	
Q-23	P 9	66	58	57	
Q-24	P 1	41	38	33	土師器
Q-24	P 2	27	22	13	土師器
Q-24	P 3	35	29	29	土師器
Q-24	P 4	32	28	24	土師器
Q-24	P 5	20	18	14	
Q-24	P 6	66	34	54	
Q-24	P 7	79	40	26	
Q-24	P 8	24	22	40	
Q-24	P 9	44	29	32	
Q-24	P10	36	30	16	
Q-24	P11	27	21	81	
Q-24	P12	37	34	19	
Q-24	P13	32	30	44	
Q-24	P14	54	36	44	
Q-24	P15	22	19	20	
Q-24	P16	43	33	47	
Q-25	P 1	35	27	22	
Q-25	P 2	28	(20)	26	
Q-25	P 3	43	29	32	
Q-25	P 4	30	26	19	
Q-25	P 5	62	58	35	
Q-25	P 6	115	64	39	
Q-25	P 7	74	53	56	
Q-25	P 8	36	28	28	
Q-25	P 9	30	20	34	
Q-25	P10	23	21	66	
Q-25	P11	18	16	16	
Q-25	P12	76	28	28	
Q-25	P13	25	22	43	
Q-25	P14	43	29	26	
Q-25	P15	27	27	41	
Q-25	P16	41	29	20	
Q-25	P17	25	24	12	
R-24	P 1	47	36	14	
R-24	P 2	36	33	16	
R-24	P 3	46	36	29	
R-25	P 1	23	19	8	
R-25	P 2	31	30	35	
R-26	P 1	(38)	36	15	SD7
R-26	P 2	72	44	38	SD6
R-26	P 3	(54)	44	17	SJ4
R-27	P 1	33	33	40	
R-27	P 2	42	38	38	
R-27	P 3	26	19	8	
S-25	P 1	39	38	7	
S-27	P 1	38	34	20	SJ10
S-27	P 2	31	29	22	SJ10
S-27	P 3	31	25	13	SJ10

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
S-27	P 4	39	35	34	
S-27	P 5	56	44	20	
S-27	P 6	46	32	42	SJ10
S-27	P 7	50	28	32	
S-27	P 8	60	54	52	SJ10
S-27	P 9	78	30	30	SK18
S-27	P10	16	15	12	土師器
S-27	P11	30	27	19	
S-27	P12	32	25	18	
S-27	P13	32	24	12	
S-27	P14	30	22	10	
S-27	P15	39	33	28	
S-27	P16	26	23	40	
S-27	P17	28	27	33	
S-27	P18	37	27	21	
S-27	P19	28	24	8	SJ7
S-27	P20	46	30	23	SJ7
S-27	P21	(35)	34	26	
S-27	P22	31	23	10	SJ10
S-27	P23	44	44	34	
S-28	P 1	26	20	28	SD11 土師器
S-28	P 2	27	23	34	SJ8 土師器
S-28	P 3	—	—	—	欠番
S-28	P 4	26	24	20	SJ10
S-28	P 5	56	46	19	SJ10 土師器・須恵器
S-28	P 6	55	53	25	SJ10 土師器
S-28	P 7	44	43	21	SJ10 土師器
S-28	P 8	60	56	34	
S-28	P 9	26	23	12	
S-28	P10	34	29	13	
S-28	P11	64	(60)	12	SJ13・14 SD13
S-28	P12	26	25	12	
S-28	P13	25	24	20	土師器
S-29	P 1	—	—	—	SA5 P1に変更
S-29	P 2	34	34	37	土師器
S-29	P 3	28	25	14	SK23
T-27	P 1	36	36	47	
T-27	P 2	41	29	25	
T-27	P 3	—	—	—	欠番
T-27	P 4	—	—	—	欠番
T-27	P 5	—	—	—	欠番
T-27	P 6	—	—	—	欠番
T-27	P 7	—	—	—	欠番
T-27	P 8	—	—	—	欠番
T-27	P 9	41	36	22	SJ9 土師器
T-27	P10	22	(14)	12	
T-27	P11	29	(24)	10	土師器
T-27	P12	47	43	50	土師器
T-27	P13	37	30	59	土師器
T-27	P14	22	22	15	
T-27	P15~17	64	47	40	土師器
T-27	P18	75	52	24	
T-27	P19	24	24	13	
T-27	P20	—	—	—	欠番

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
T-27	P21	—	—	—	欠番
T-27	P22	—	—	—	欠番
T-27	P23	61	59	16	SJ9 土師器
T-27	P24	16	16	13	SJ9 土師器
T-28	P 1	43	33	27	
T-28	P 2	43	32	36	
T-28	P 3	73	64	11	
T-28	P 4	30	30	20	
T-28	P 5	27	26	11	
T-28	P 6	45	40	31	
T-28	P 7	31	24	12	
T-28	P 8	31	26	23	
T-28	P 9	41	41	16	
T-28	P10	—	—	—	SA4 P 5に変更
T-28	P11	68	54	27	
T-28	P12	60	42	28	
T-28	P13	48	39	54	
T-28	P14	54	38	22	
T-28	P15	26	26	14	
T-28	P16	34	31	14	
T-28	P17	50	40	37	SK22
T-28	P18	24	22	26	SK22
T-28	P19	53	32	43	SK22
T-28	P20・30	179	97	55	SK22
T-28	P21	26	20	15	
T-28	P22	17	15	9	
T-28	P23	32	22	37	
T-28	P24	32	24	8	
T-28	P25	30	29	39	
T-28	P26	50	48	27	
T-28	P27	29	24	38	
T-28	P28	34	34	26	
T-28	P29	21	18	19	
T-28	P31	29	26	25	
T-28	P32	30	26	11	
T-28	P33	38	32	38	
T-28	P34	23	21	10	
T-28	P35	30	26	38	
T-28	P36	(23)	22	8	
T-28	P37	30	20	31	
T-28	P38	45	39	27	SK22
T-28	P39	46	40	38	
T-28	P40	56	37	38	
T-28	P41	—	—	—	SA4 P 2に変更
T-28	P42	33	29	27	
T-28	P43	27	27	37	
T-28	P44	—	—	—	SA4 P 3に変更
T-28	P45	63	49	21	
T-28	P46	84	36	49	
T-28	P47	46	34	16	
T-28	P48	24	22	10	
T-28	P49	53	29	23	
T-28	P50	—	—	—	SA4 P 4に変更
T-28	P51	37	30	32	

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
T-28	P52	47	34	11	
T-28	P53	25	24	10	
T-28	P54	34	32	23	
T-28	P55	32	27	20	
T-28	P56	39	30	18	
T-28	P57	36	31	42	
T-28	P58	28	27	19	
T-28	P59	39	31	36	
T-28	P60	25	24	25	
T-28	P61	37	35	31	SJ12
T-28	P62	22	21	11	
T-28	P63	32	29	10	
T-28	P64	32	32	18	
T-28	P65	24	20	16	SK22
T-28	P66	26	24	33	
T-28	P67	19	18	7	
T-28	P68	42	31	38	
T-28	P69	59	46	(18)	SJ12
T-28	P70	33	30	20	SJ12 土師器
T-28	P71	57	42	13	SJ12
T-28	P72	32	22	28	SJ12
T-28	P73	24	22	17	SJ12
T-28	P74	23	(20)	32	SJ12
T-28	P75	33	31	49	SJ12
T-28	P76	—	—	—	SJ12 P 2に変更
T-28	P77	30	(14)	25	SJ13
T-28	P78	46	29	34	SJ13 土師器
T-28	P79	32	(15)	12	SJ13
T-28	P80	24	23	14	
T-28	P81	24	20	15	土師器
T-28	P82	25	20	15	
T-28	P83	34	29	39	
T-28	P84	38	32	54	
T-28	P85	24	16	5	土師器
T-28	P86	72	69	43	SJ13
T-28	P87	43	32	39	SJ13
T-28	P88	—	—	—	SA4 P1に変更
T-28	P89	33	21	16	
T-28	P90	36	22	8	
T-29	P 1	22	18	10	
T-29	P 2	36	30	14	
T-29	P 3	—	—	—	SA5 P 2に変更
T-29	P 4	19	18	10	
T-29	P 5	30	30	20	
T-29	P 6	25	20	12	
T-29	P 7	30	28	17	
T-29	P 8	27	27	30	
T-29	P 9	—	—	—	SA5 P 3に変更
T-29	P10	29	27	15	
T-29	P11	30	22	10	
T-29	P12	30	27	12	
T-29	P13	28	25	19	
T-29	P14	—	—	—	SA4 P 8に変更
T-29	P15	29	25	14	

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
T-29	P16	—	—	—	SA5 P 4 に変更
T-29	P17	59	55	24	
T-29	P18	—	—	—	SA4 P 7 に変更
T-29	P19	—	—	—	SA4 P 7 に変更
T-29	P20	53	41	23	SJ17
T-29	P21	29	29	26	SJ18
T-29	P22	29	28	17	
T-29	P23	27	27	27	
T-29	P24	37	29	28	
T-29	P25	27	22	15	
T-29	P26	—	—	—	SA5 P 5 に変更
T-29	P27	—	—	—	SA5 P 5 に変更
T-29	P28	30	30	23	
T-29	P29	—	—	—	SA4 P 6 に変更
T-29	P30	34	31	21	
T-29	P31	36	28	26	
T-29	P32	33	24	10	
T-29	P33	42	41	35	
T-29	P34	23	19	19	
T-29	P35	21	19	22	
T-29	P36	44	36	26	
T-29	P37	91	78	45	
T-29	P38	49	27	41	
T-29	P39	44	30	27	
T-29	P40	24	23	15	
T-29	P41	26	25	25	
T-29	P42	23	22	12	
T-29	P43	28	27	32	
T-29	P44	26	20	25	
T-29	P45	29	27	23	
T-29	P46	28	26	11	
T-29	P47	30	26	12	
T-29	P48	32	30	15	
T-29	P49	18	15	13	
T-29	P50	22	17	13	
T-29	P51	30	30	24	
T-29	P52	—	—	—	SA4 P 9 に変更
T-29	P53	30	25	29	
T-30	P 1	33	33	14	
U-28	P 1	22	21	21	
U-28	P 2	32	30	20	SJ16
U-28	P 3	24	(17)	15	SJ16
U-28	P 4	44	40	20	
U-29	P 1	25	22	18	
U-29	P 2	26	23	8	
U-29	P 3	28	26	40	
U-29	P 4	32	30	66	
U-29	P 5	27	24	23	
U-29	P 6	27	22	8	
U-29	P 7	38	33	14	

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
U-29	P 8	53	37	26	
U-29	P 9	42	37	20	
U-29	P10	33	30	21	
U-29	P11	26	24	15	
U-29	P12	39	33	18	
U-30	P 1	34	28	28	SJ24 土師器
U-30	P 2	75	(44)	42	SJ24 SK29 土師器
U-30	P 3	43	32	19	
U-30	P 4	68	52	20	
U-30	P 5	24	20	28	
U-30	P 6	45	32	20	
U-30	P 7	29	26	14	
U-30	P 8	30	25	12	
U-30	P 9	54	38	29	
U-30	P10	49	33	31	SK24
U-30	P11	46	(26)	37	SJ24
U-30	P12	(32)	(28)	18	SJ24 SD14
U-30	P13	38	29	31	
U-30	P14	41	37	18	SJ23
U-30	P15	47	42	32	SK30
U-30	P16	22	21	28	
U-30	P17	59	34	10	
U-31	P 1	32	30	31	土師器
U-31	P 2	24	(21)	26	
U-31	P 3	44	40	32	土師器
U-31	P 4	23	21	18	土師器
U-31	P 5	32	32	39	
V-30	P 1	72	(43)	26	SJ1 土師器
V-31	P 1	24	22	23	土師器
V-32	P 1	63	40	44	土師器
V-32	P 2	37	32	18	
V-33	P 1	28	25	13	
V-33	P 2	34	26	22	土師器
V-33	P 3	26	23	26	
V-33	P 4	24	22	11	
V-33	P 5	27	21	11	
V-33	P 6	39	22	22	
V-33	P 7	38	33	15	
V-33	P 8	51	37	17	
V-33	P 9	29	23	17	
V-33	P10	28	24	28	
V-33	P11	30	24	40	
W-32	P 1	27	24	16	
W-32	P 2	28	26	18	
W-32	P 3	21	20	9	
W-32	P 4	46	43	24	
W-32	P 5	59	47	13	
X-33	P 1	72	(14)	15	
Y-35	P 1	(22)	19	9	
Y-35	P 2	(46)	46	10	

12. その他の遺物

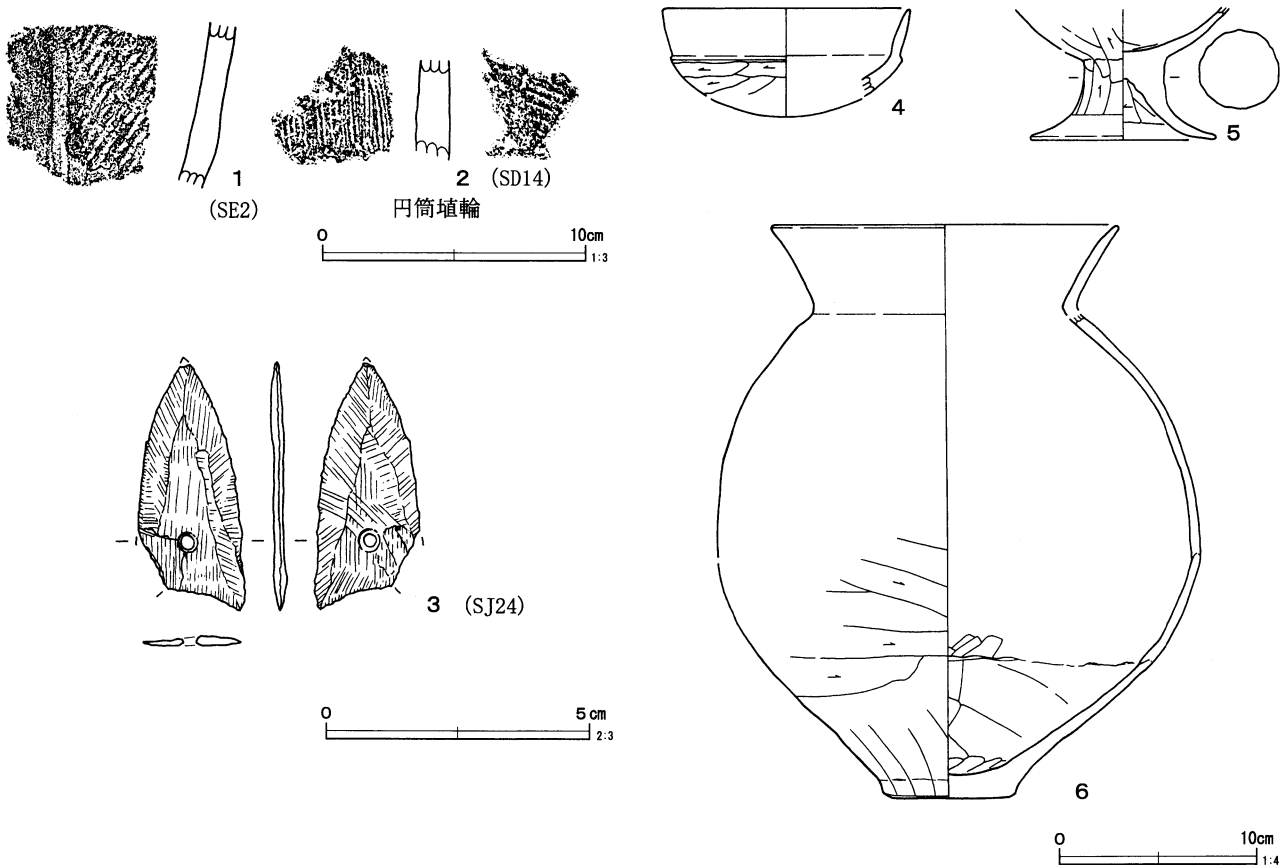
グリッド出土・表採の遺物は第139図に一括して示した。1は縄文土器深鉢の胴部破片で、2本沈線で画された懸垂文が垂下する。沈線間は磨り消され、地文にはRLの単節縄文が縦位に施文される加曾利E III式である。

2は円筒埴輪の破片である。外面にタテハケ、内面にナナメハケを施す6世紀代の通有の特徴を示す。現状では周辺に埴輪をもつ古墳の所在は知

られておらず、未知の古墳の所在を窺わせる。

3は磨製石鏃である。先端及び左脚部を一部欠損する。基部の穿孔は表裏から施されており、基部の研磨は入念に施されている。

4は典型的な模倣坏である。5は短脚の台付甕で、台部はヘラケズリによって稜をもつ断面多角形に整形される。6は口縁部を欠損する和泉期の甕で胴部下半内面に明瞭な接合痕を残す。



第139図 その他の遺物

第45表 その他の遺物観察表 (第139図)

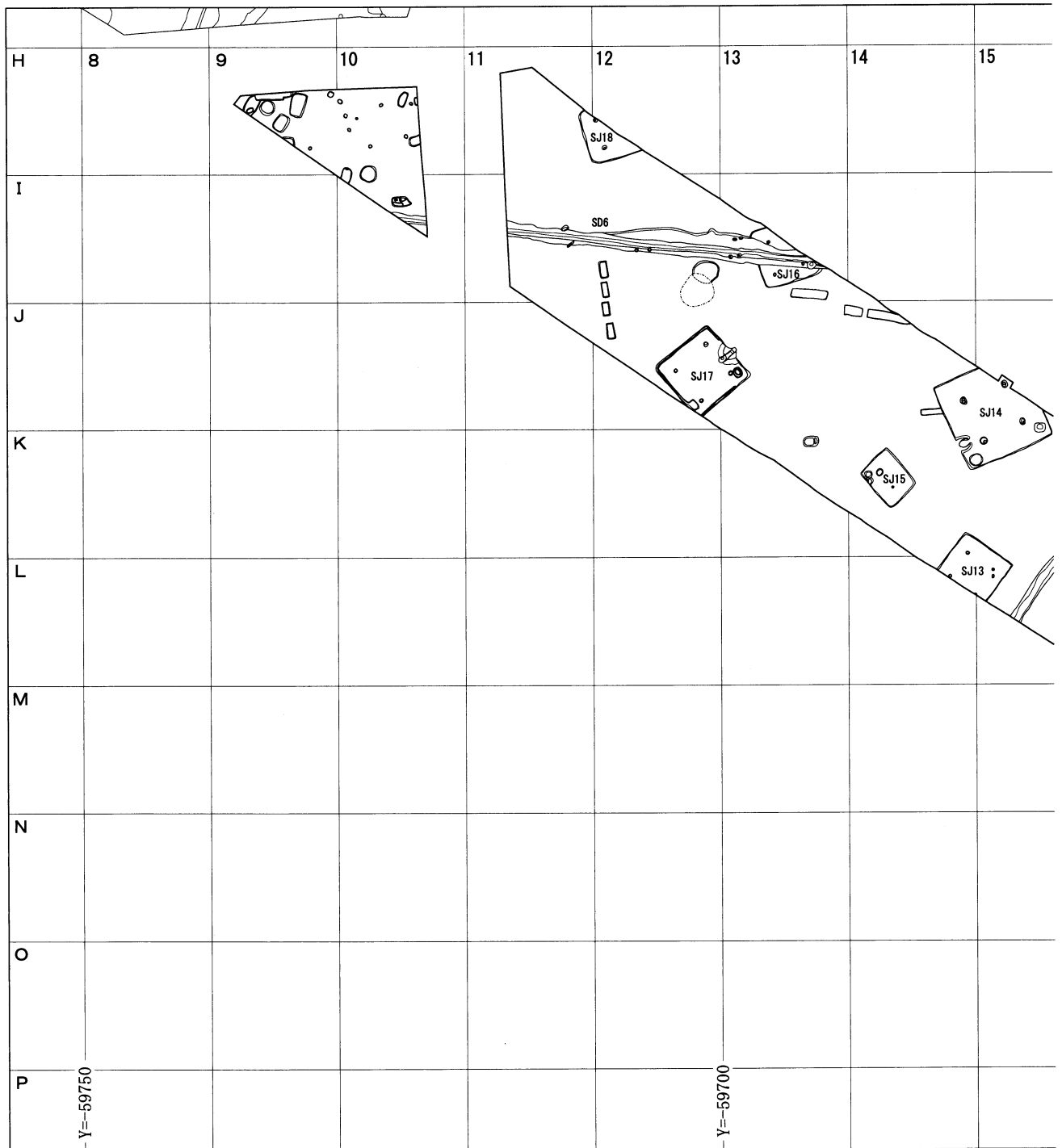
番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	縄文土器 深鉢	SE 2 上層			破片	A・D・F・I・K	良好 にぶい褐7.5YR5/4	加曾利E III式
2	埴輪 円筒埴輪	SD14 埋土			破片	A・B・C・F・J	普通 橙5YR6/6	外面タテハケ 内面ナナメハケ ハケメは2cmあたり13本を数える
3	石器 磨製石鏃	SJ24 埋土	長さ4.66cm 幅1.96cm 厚さ0.3cm 重さ3.18g 粘板岩 一部欠損 No.1					
4	土師器 坏	グリッド	(12.4) [4.5]		20	A・C・D・F・J	普通 橙5YR6/6	内外面磨耗
5	土師器 台付甕	グリッド	[6.7]	(9.2)	60	A・B・C・G・J	良好 明赤褐5YR5/6	脚台部外面ヘラケズリによる面取り 胴部外面灰が付着
6	土師器 甕	グリッド	[24.5]	24.4 6.4	35	A・B・C・F・J	良好 にぶい橙5YR6/3	胴部下半内面接合痕明瞭

V 夏目西遺跡の調査

1. 概要

夏目西遺跡の調査により古墳時代の竪穴住居跡19軒、奈良時代の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡3棟、土坑1基、中・近世の掘立柱建物跡1棟、柱穴列4条、溝跡6条、土坑44基、ピット115基を検出した。

古墳時代の住居跡は中期14軒、後期5軒を数える。中期の住居跡は調査区南東端部から中央部にかけて分布するグループ (SJ1~4・6~11・21) と北西部のグループ (SJ13~15) に大きく区分される。前者は大型住居の第3号住居跡を中心に玉



第140図 夏目西遺跡全体図 (1)

作工房跡の第1号住居跡、炉からカマドへの移行期の様相を示す第6号住居跡など古相を示すものが集中している。一方、後者は布留式系甕を出土した大型住居の第14号住居跡や、大量の遺物が廃棄されていた第13・15号住居跡が分布する。

後期の住居跡は第12・16～18・20号住居跡の5軒である。調査区北西部に有段口縁坏と坏身模倣坏を出土する第16～18号住居跡が6世紀後半か

ら6世紀末にかけて営まれ、後続して第12・20号住居跡の2軒が7世紀前半に出現する。

奈良時代の住居跡は第5・19号住居跡の2軒である。調査区南東端部に位置し、北武蔵型坏や須恵器坏の特徴から7世紀末から8世紀前半に位置づけられる。また調査区中央部の3棟の掘立柱建物跡群（SB2～4）も同時期のものであろう。



第141図 夏目西遺跡全体図（2）

2. 竪穴住居跡

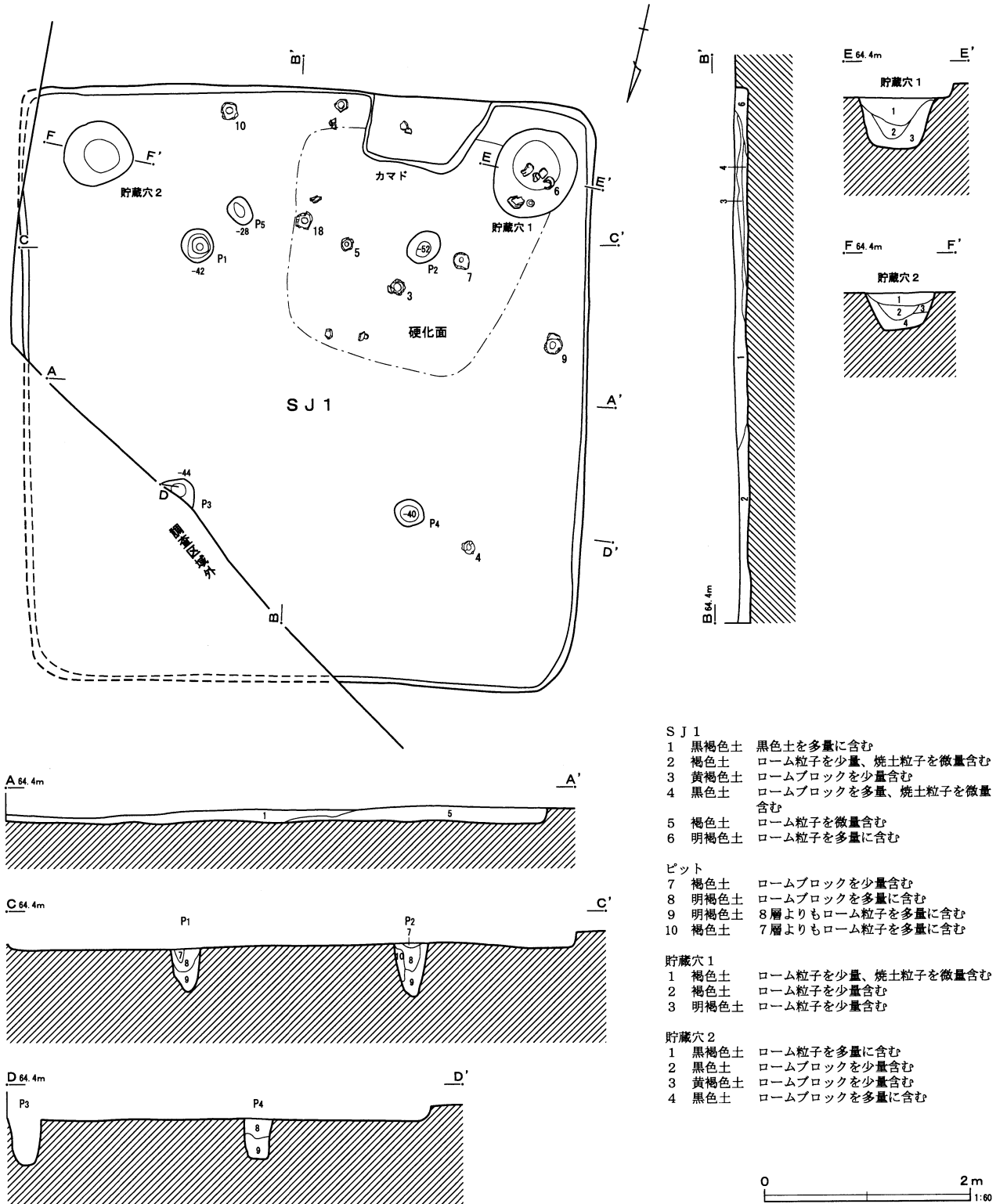
第1号住居跡 (第142~144図)

第1号住居跡は調査区の南東端部のN・O—20・21グリッドに位置する。

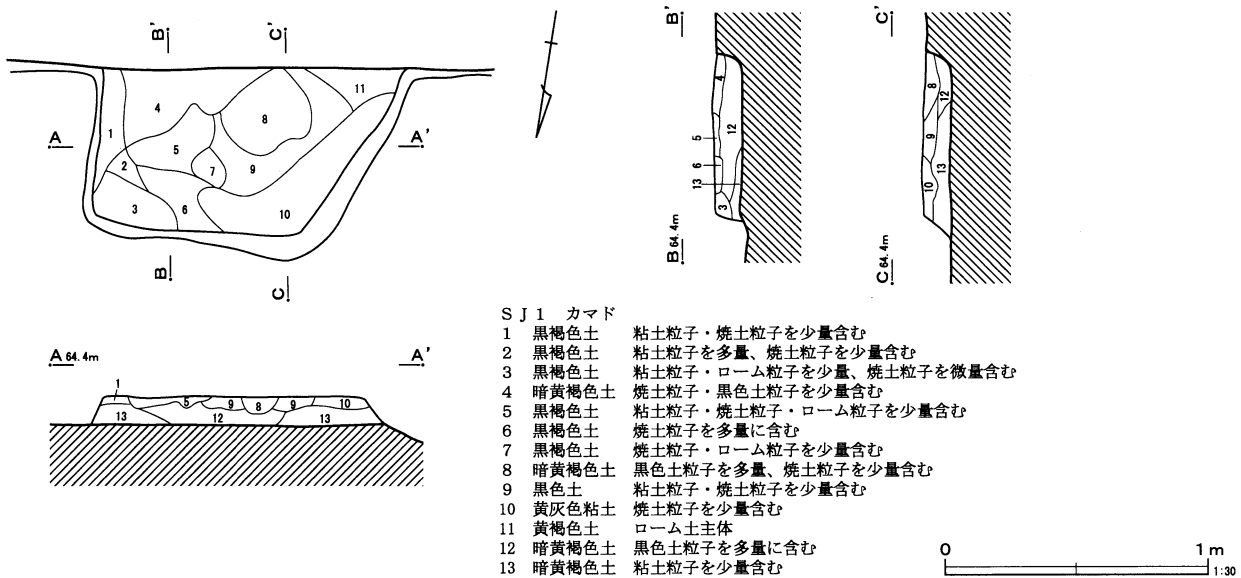
住居跡北東隅部が調査区外に位置するが、平面

形は方形と考えられる。規模は長軸長5.74m、短軸長5.50m、床面までの深さは0.10mである。主軸方位はN—169°—Eを指す。

床面は概ね平坦で、カマド前面が硬く踏み固め



第142図 第1号住居跡



第143図 第1号住居跡カマド

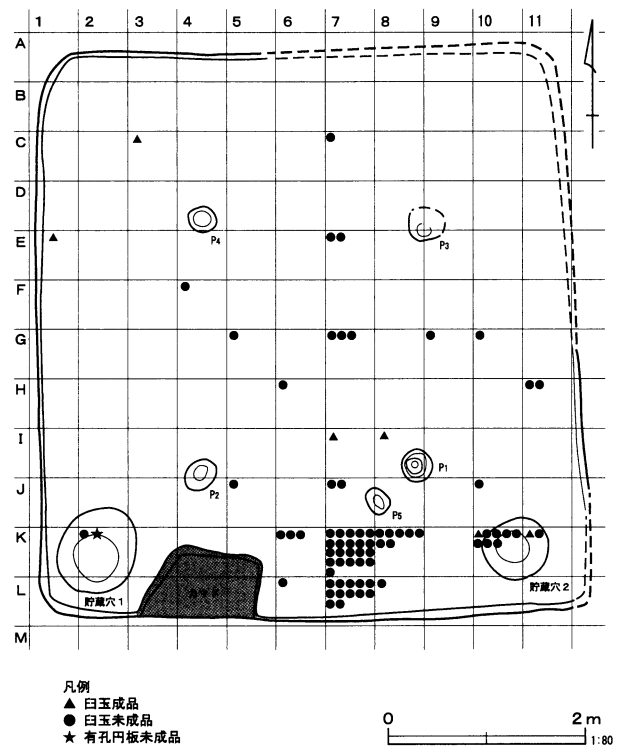
られていた。カマドは南壁の中央から西に寄った位置に設置されていた。奥行き0.74m、幅0.90mの範囲に焼土混じりの粘土が検出された。具体的な構造は不明確であったため、平面的な土質と色調変化を観察した(第143図)。これによれば、第6層に焼土粒子が多量に含まれていたが、通例のカマドのような燃焼部内壁の焼け面は観察できなかった。また、断面観察では左右の袖部に対応するベース土は焼土混じりの暗黄褐色土が堆積していた(第13層)。第12層を燃焼部掘方と見るか、側壁の崩落土または流入土と見るのか確証は得られなかった。

貯蔵穴は2基検出された。貯蔵穴1(楕円形、長径0.90×短径0.78×深さ0.50m)がカマドとの位置関係や遺物の遺存状態から開口していたものである。貯蔵穴2(円形、長径0.66×短径0.62×深さ0.34m)はロームブロックが多量に含まれ、埋め戻されていた。貯蔵穴2から貯蔵穴1に掘り直されたと考えられる。

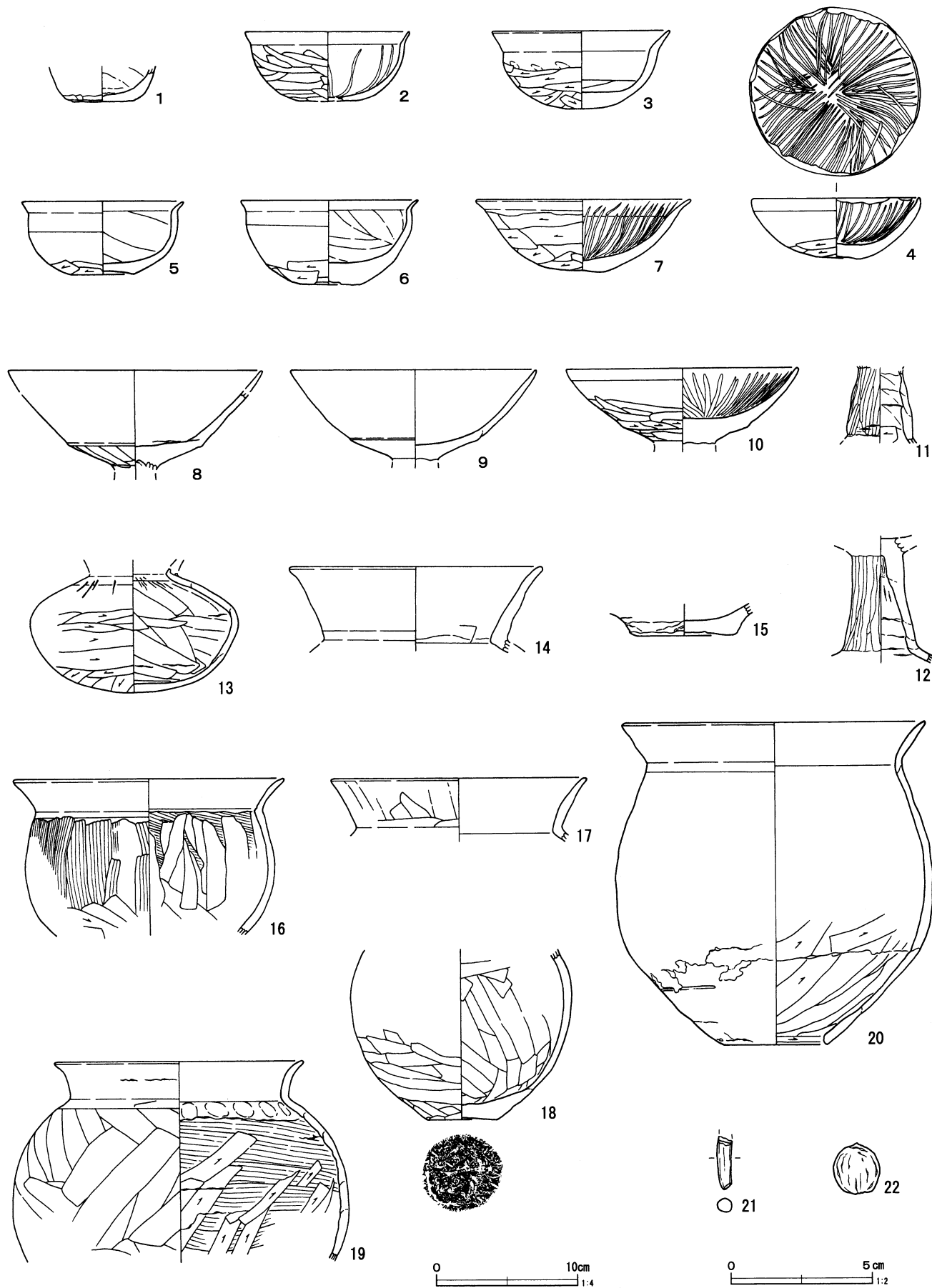
柱穴は5本検出された。規則的に配されたP1～P4が支柱穴である。深さは0.40～0.52m。P5は深さ0.28mと浅い。

出土遺物は土師器杯・埴・高杯・壺・鉢・甕・

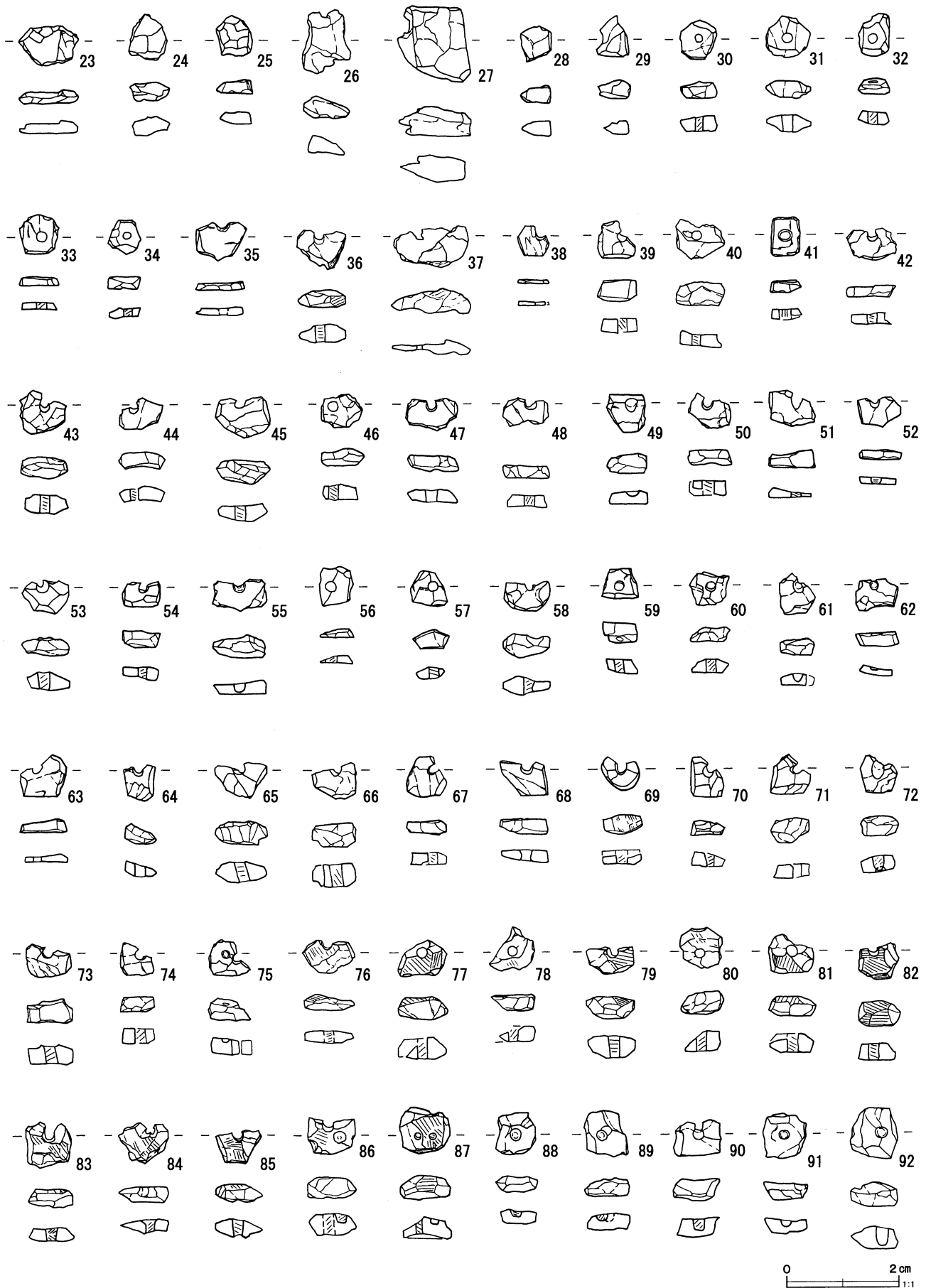
甗・手捏土器、棒状土製品、滑石製白玉・未成品(白玉・有孔円板)、桃核がある(第145～147図)。土器類は住居跡中央部からカマド周辺にかけて比較的まとまって出土した。P2の周辺から3・5・7の坏が、貯蔵穴の内部からは6の埴が床面とほぼ同じ高さで出土したほか、テラス部分から



第144図 第1号住居跡石製模造品分布図

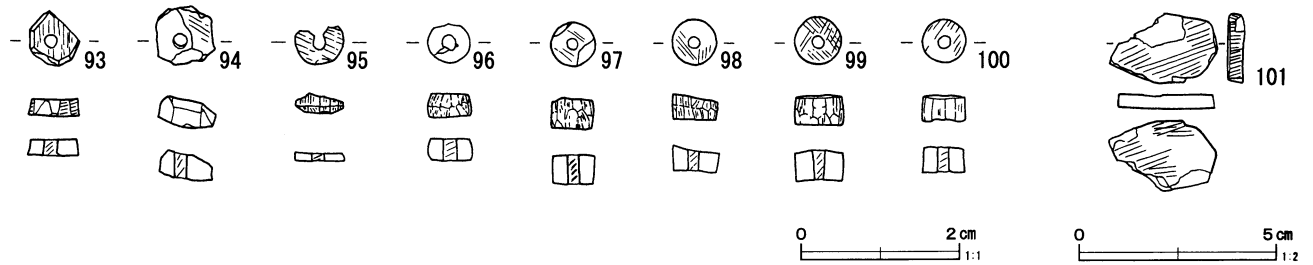


第145图 第1号住居跡出土遺物(1)



0 2 cm
1:1

第146図 第1号住居跡出土遺物(2)



第147図 第1号住居跡出土遺物(3)

第46表 第1号住居跡出土遺物観察表(第145・147図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 手捏土器	貯蔵穴 埋土	[2.6]	(4.5)	40	A・D・F・J	良好 赤褐5YR4/6	内外面ナデ
2	土師器 坏	貯蔵穴 埋土	(11.6) 4.9	(4.0)	55	A・B・F・G・J	良好 暗赤褐5YR5/8	体部内面疎らな放射暗文
3	土師器 坏	P 2 周辺 床面上 5 cm	12.4 5.5		90	A・C・D・F・I	良好 にぶい橙5YR7/4	体部外面ヘラケズリ
4	土師器 坏	P 4 周辺 床面上 7 cm	11.8 4.3	3.0	95	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	体部内面放射暗文
5	土師器 坏	P 2 周辺 床面上 5 cm	11.3 5.2	4.5	90	A・E・F・I・J	良好 明赤褐5YR5/6	体部外面ヘラケズリ
6	土師器 塊	貯蔵穴 1 底面上 45cm	12.4 6.0	4.3	90	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐5YR5/3	体部内面丁寧なナデ
7	土師器 坏	P 2 周辺 床面上 6 cm	15.0 6.1	4.6	85	A・B・D・F・J	良好 赤褐5YR4/6	体部内面放射暗文
8	土師器 高坏	埋土	[5.5]		40	A・B・D・F・J	良好 赤褐5YR4/6	底面磨耗
9	土師器 高坏	西壁寄り 床面直上	17.3 [6.5]		80	A・B・D・F・G	良好 明赤褐5YR5/8	内外面磨耗
10	土師器 高坏	南壁寄り 床面直上	16.3 [5.4]		85	A・B・C・F・I	良好 明赤褐5YR5/6	坏部内面入念なヘラミガキ
11	土師器 高坏	カマド	[5.5]		95	A・B・C・F・J	良好 暗赤褐5YR3/4	裾部内面ヘラケズリ
12	土師器 高坏	埋土	[8.8]		85	A・B・D・E・G	良好 橙5YR6/6	底面器面薄く剝離
13	土師器 小型壺	埋土	[8.7]	14.7	45	A・B・C・F・J	良好 赤褐5YR4/6	胴部外面ヘラケズリ
14	土師器 壺	埋土	17.8 [6.0]		65	A・B・F・I	良好 明赤褐5YR4/8	口縁部ヨコナデ
15	土師器 壺	埋土	[2.2]	7.4	85	A・B・D・E・F	良好 明赤褐5YR3/6	底面植物繊維圧痕
16	土師器 鉢	埋土	(18.8) 11.0	(17.6)	15	A・B・D・F・G	良好 にぶい褐7.5YR6/3	体部外面木口状工具ナデ
17	土師器 甕	埋土	(18.0) [4.5]		30	A・B・F・I・K	良好 にぶい赤褐5YR5/3	口縁部外面ナデ
18	土師器 小型甕	P 5 周辺 床面上 7 cm	[12.0]	(15.7) (5.0)	45	A・D・F・I・J	良好 暗褐7.5YR3/4	底部上げ底 植物繊維圧痕が残る
19	土師器 甕	埋土	(17.5) [14.1]	(23.8)	25	A・B・D・F・J	良好 にぶい赤褐5YR4/3	胴部内面凸凹のあるヘラナデ
20	土師器 甕	埋土	(21.3) 22.8	(22.4) 7.3	40	A・B・C・F・K	良好 橙7.5YR6/6	胴部中位外面に布目圧痕
21	土製品 棒状品	埋土	長さ1.88cm 幅0.53cm 厚さ0.48cm 重さ0.58g			A・F・J	良好 にぶい赤褐5YR4/4	不明品 一部欠損
22	自然遺物 桃核	埋土	長さ1.8cm 幅1.6cm 厚さ1.3cm 重さ1.5g					
101	石製品 未成品	貯蔵穴 埋土	長さ1.82cm 幅3.12cm 厚さ0.40cm 重さ3.11g				滑石 研磨：側面縦・斜	有孔円板の未成品か

高坏の脚部片などが出土した。カマドからは甕の破片が出土しているにすぎない。カマド左脇の南壁際から10の高坏、同じく西壁際から9の高坏、

P 4 周辺から暗文坏が出土した。石製模造品は大半が白玉で、かつ未成品が主体である。出土位置はカマド東側の南壁部に集中する傾向が認められ

第47表 第1号住居跡出土白玉未成品観察表(第146・147図)

番号	種類	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石材	段階	研磨	備考
23	白玉未成品	G 7区	0.69	1.05	0.21	—	0.87	滑石	1		
24	白玉未成品	K 7区	0.83	0.70	0.33	—	0.23	滑石	1		
25	白玉未成品	K 8区	0.75	0.61	0.23	—	0.14	滑石	1		
26	白玉未成品	K 8区	1.17	0.87	0.34	—	0.29	滑石	1		
27	白玉未成品	K10区	1.36	1.30	0.39	—	0.91	滑石	1		
28	白玉未成品	K10区	0.61	0.55	0.25	—	0.11	滑石	1		
29	白玉未成品	K10区	0.75	0.59	0.30	—	0.13	滑石	1		
30	白玉未成品	J 5区	0.73	0.63	0.25	0.13	0.15	滑石	2		
31	白玉未成品	K 7区	0.76	0.79	0.31	0.15	0.21	滑石	2		
32	白玉未成品	L 7区	0.79	0.55	0.23	0.14	0.14	滑石	2		
33	白玉未成品	L 7区	0.70	0.67	0.13	0.15	0.09	滑石	2		
34	白玉未成品	K10区	0.62	0.58	0.21	0.12	0.09	滑石	2		
35	白玉未成品	F 4区	0.67	0.87	0.12	0.21	0.10	滑石	2a		穿孔欠損
36	白玉未成品	G 5区	0.68	0.88	0.28	0.15	0.21	滑石	2a	側面	穿孔欠損
37	白玉未成品	H 6区	0.73	1.37	0.38	0.08	0.33	滑石	2a	側面	穿孔欠損
38	白玉未成品	K 7区	0.52	0.56	0.08	—	0.03	滑石	2a		穿孔欠損
39	白玉未成品	K 7区	0.68	0.65	0.34	0.15	0.20	滑石	2a		穿孔欠損
40	白玉未成品	K 6区	0.68	0.85	0.39	0.14	0.25	滑石	2a		穿孔剝離
41	白玉未成品	K 7区	0.69	0.52	0.19	0.19	0.10	滑石	2a		穿孔剝離
42	白玉未成品	L 6区	0.60	0.89	0.20	0.16	0.14	滑石	2a		穿孔欠損
43	白玉未成品	C 7区	0.74	0.85	0.36	0.14	0.28	滑石	2a		穿孔欠損
44	白玉未成品	G 7区	0.54	0.66	0.31	0.14	0.17	滑石	2a		穿孔欠損
45	白玉未成品	K 8区	0.73	0.97	0.38	0.14	0.34	滑石	2a		穿孔欠損
46	白玉未成品	J 7区	0.64	0.75	0.28	0.16	0.16	滑石	2a		穿孔剝離
47	白玉未成品	L 7区	0.57	0.91	0.24	0.15	0.17	滑石	2a		穿孔欠損
48	白玉未成品	K 7区	0.49	0.78	0.23	0.15	0.15	滑石	2a		穿孔欠損
49	白玉未成品	K 7区	0.64	0.67	0.29	0.16	0.19	滑石	2a		穿孔欠損
50	白玉未成品	L 7区	0.66	0.77	0.23	0.16	0.12	滑石	2a		穿孔欠損
51	白玉未成品	K 7区	0.63	0.82	0.25	0.14	0.16	滑石	2a		穿孔欠損
52	白玉未成品	K 7区	0.53	0.74	0.17	0.15	0.09	滑石	2a		穿孔欠損
53	白玉未成品	L 7区	0.60	0.85	0.32	0.19	0.19	滑石	2a		穿孔欠損
54	白玉未成品	K 8区	0.48	0.67	0.27	0.13	0.13	滑石	2a		穿孔欠損
55	白玉未成品	L 7区	0.55	0.96	0.30	0.17	0.21	滑石	2a		穿孔欠損
56	白玉未成品	K 7区	0.72	0.56	0.15	0.20	0.08	滑石	2a		穿孔剝離
57	白玉未成品	J 10区	0.68	0.66	0.28	0.14	0.13	滑石	2a		穿孔剝離
58	白玉未成品	L 7区	0.52	0.82	0.35	0.17	0.18	滑石	2a		穿孔欠損
59	白玉未成品	K10区	0.56	0.65	0.31	0.12	0.15	滑石	2a		穿孔剝離
60	白玉未成品	J 7区	0.60	0.68	0.23	0.16	0.12	滑石	2a		穿孔剝離
61	白玉未成品	K 7区	0.71	0.64	0.26	0.14	0.17	滑石	2a		穿孔欠損
62	白玉未成品	K 8区	0.60	0.75	0.21	0.12	0.11	滑石	2a		穿孔欠損
63	白玉未成品	K 7区	0.74	0.79	0.26	0.14	0.19	滑石	2a		穿孔欠損
64	白玉未成品	L 7区	0.62	0.56	0.28	0.12	0.12	滑石	2a		穿孔欠損
65	白玉未成品	K11区	0.60	0.96	0.37	0.14	0.28	滑石	2a		穿孔欠損 穿孔斜め
66	白玉未成品	L 8区	0.71	0.79	0.42	0.16	0.27	滑石	2a		穿孔欠損
67	白玉未成品	K10区	0.76	0.71	0.20	0.15	0.14	滑石	2a		穿孔欠損
68	白玉未成品	L 7区	0.62	0.85	0.26	0.15	0.20	滑石	2a		穿孔欠損
69	白玉未成品	K10区	0.59	0.61	0.31	0.14	0.15	滑石	2a	側面	穿孔欠損
70	白玉未成品	K 8区	0.75	0.58	0.23	0.14	0.11	滑石	2a		穿孔欠損
71	白玉未成品	H11区	0.69	0.73	0.42	0.15	0.22	滑石	2a		穿孔欠損
72	白玉未成品	L 7区	0.64	0.70	0.31	0.18	0.17	滑石	2a		両面穿孔 中途・欠損
73	白玉未成品	G 9区	0.58	0.78	0.33	0.14	0.20	滑石	2a		穿孔欠損
74	白玉未成品	床面下	0.63	0.58	0.28	0.14	0.11	滑石	2a		穿孔欠損

番号	種類	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石材	段階	研磨	備考
75	白玉未成品	K 7区	0.63	0.72	0.26	左0.12 右0.14	0.15	滑石	2a	下面	2ヶ所穿孔 穿孔中途 穿孔剝離
76	白玉未成品	K 6区	0.61	0.91	0.25	0.14	0.14	滑石	2a	上面	穿孔欠損
77	白玉未成品	K 7区	0.62	0.82	0.36	0.16	0.25	滑石	2a	上面	穿孔剝離
78	白玉未成品	K 7区	0.73	0.75	0.24	0.16	0.14	滑石	2a	上面	穿孔剝離
79	白玉未成品	K 7区	0.49	0.86	0.37	0.19	0.20	滑石	2a	上下面	穿孔欠損
80	白玉未成品	K 8区	0.72	0.77	0.33	0.14	0.24	滑石	2a	上面	穿孔剝離
81	白玉未成品	K 7区	0.70	0.80	0.30	0.15	0.21	滑石	2a	上面	穿孔剝離
82	白玉未成品	G 7区	0.60	0.70	0.37	0.15	0.22	滑石	2a	上側面	穿孔欠損
83	白玉未成品	K 7区	0.75	0.82	0.30	0.15	0.23	滑石	2a	上面	穿孔欠損 両面穿孔
84	白玉未成品	K 7区	0.74	0.89	0.27	0.12	0.19	滑石	2a	上面	穿孔欠損
85	白玉未成品	K 7区	0.59	0.80	0.33	0.15	0.18	滑石	2a	上面	穿孔欠損
86	白玉未成品	E 7区	0.64	0.86	0.34	左0.20 右0.19	0.26	滑石	2a	上面	2ヶ所穿孔 穿孔中途 穿孔剝離
87	白玉未成品	K 7区	0.82	0.93	0.37	左0.09 右0.12	0.37	滑石	2a	上面	2ヶ所穿孔 穿孔中途 穿孔剝離
88	白玉未成品	E 7区	0.74	0.74	0.23	0.18	0.15	滑石	2b		
89	白玉未成品	L 7区	0.86	0.74	0.31	0.15	0.30	滑石	2b		2孔重複
90	白玉未成品	L 7区	0.63	0.81	0.37	0.15	0.29	滑石	2b		
91	白玉未成品	G10区	0.80	0.78	0.26	0.13	0.23	滑石	2b		
92	白玉未成品	H11区	0.96	0.85	0.37	0.18	0.38	滑石	2b		
93	白玉未成品	K 2区	0.69	0.61	0.21	0.14	0.12	滑石	3	上面研磨 側面切削	
94	白玉未成品	K 6区	0.73	0.69	0.30	0.15	0.26	滑石	3	上面	

第48表 第1号住居跡出土白玉観察表(第147図)

番号	種類	出土位置	最大径(cm)	上面径(cm)	下面径(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石材	段階	研磨	外形
95	白玉	K10区	0.62	0.61	0.59	0.27	0.15	0.08	滑石	4	上側面	中膨れ
96	白玉	K11区	0.53	0.49	0.50	0.30	0.16	0.14	滑石	4	上下側面	中膨れ
97	白玉	E 1区	0.56	0.54	0.55	0.35	0.13	0.21	滑石	4	上下側面	直線的
98	白玉	C 3区	0.57	0.56	0.55	0.32	0.13	0.17	滑石	4	上下側面	直線的
99	白玉	I 7区	0.61	0.58	0.60	0.36	0.12	0.26	滑石	4	上下側面	直線的
100	白玉	I 8区	0.56	0.52	0.56	0.34	0.14	0.20	滑石	4	上側面	直線的

た(第144図)。未成品が多いことから、その場所が製作・加工の場となろうか。

土師器坏類が定量で含まれ、模倣坏がないことなどから夏目遺跡II期と考えられる。

第2号住居跡(第148図)

第2号住居跡は調査区南東部のO-21グリッドに位置する。重複する第19号住居跡と第29号土坑に切られていた。東半部は調査区外に位置し、調査区の制約のために中央部に未調査部を残す。

平面形は方形系と推定される。規模は長軸長3.85m、短軸残存長2.94m、床面までの深さは0.24mである。主軸方位はN-19°-Wを指す。

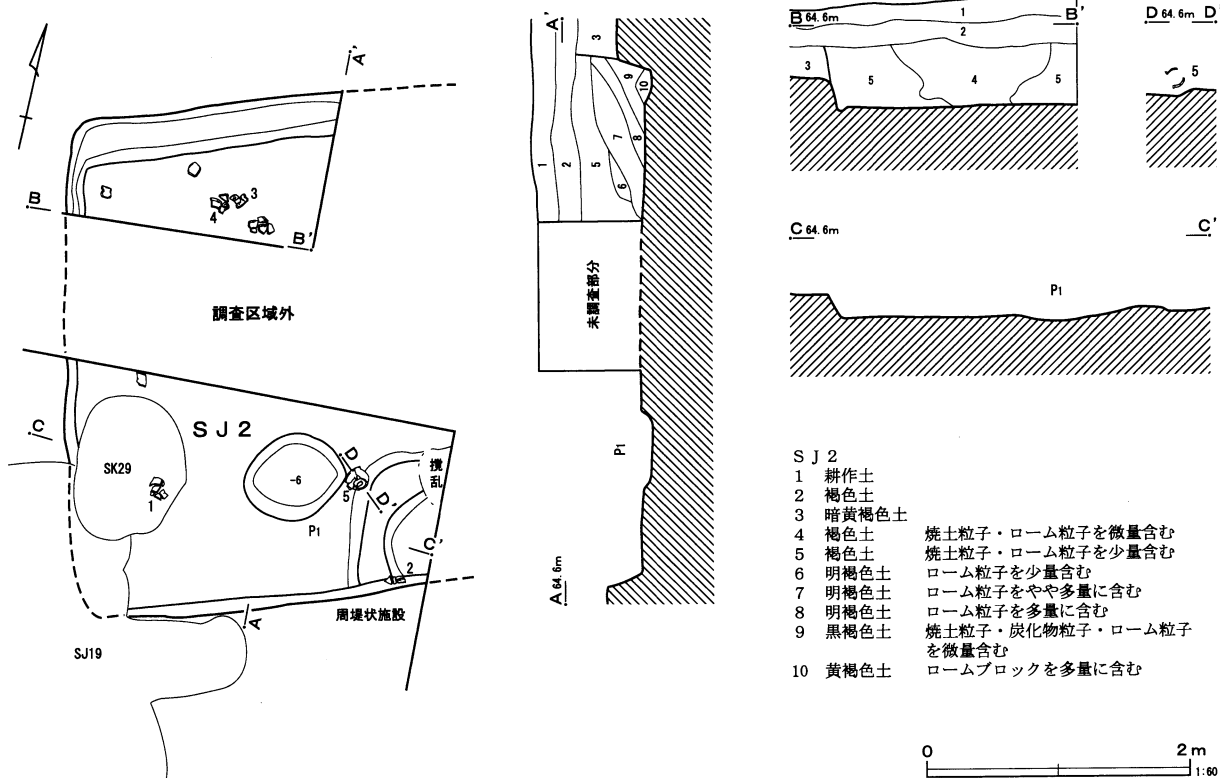
床面は平坦である。埋土は褐色土(第5層)をベースとし、北壁際にローム粒子を多量に含む明

褐色土が堆積していた。

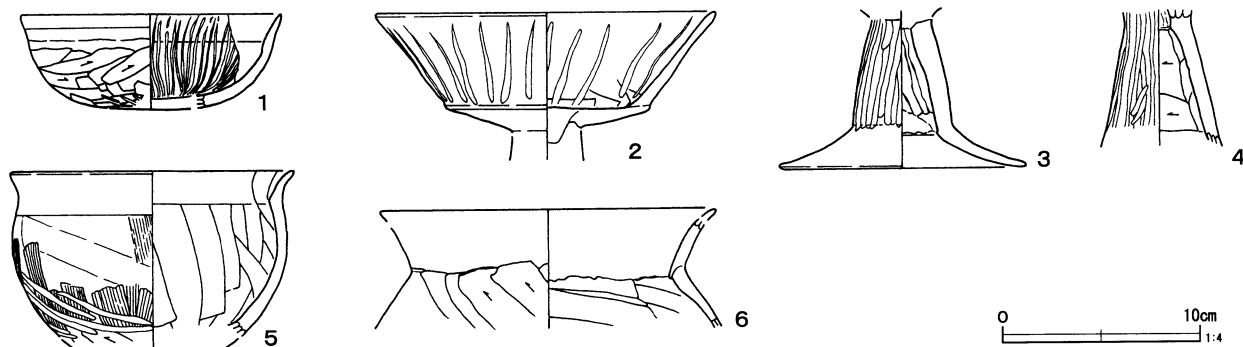
カマドは検出されなかった。貯蔵穴も検出されなかったが、周堤状施設の内側に存在した可能性がある。周堤状施設は幅35cm、高さ5~10cmの堤防状に盛土を施している。

ピットは1本検出されたが、深さ6cmで柱穴とは異なる。壁溝は北壁から西壁にかけて検出された。深さは約5cm。

出土遺物は土師器坏・高坏・鉢・甕がある(第149図)。量的には少ない。北壁沿いの床面から少し浮いた状態で3・4の高坏脚部の破片が出土している。また南壁際の周堤状施設周辺からは2の高坏と、5の鉢が出土した。5は体部外面に粗いハケメを残す。なお、1の坏は第29号土坑に重複



第148図 第2号住居跡



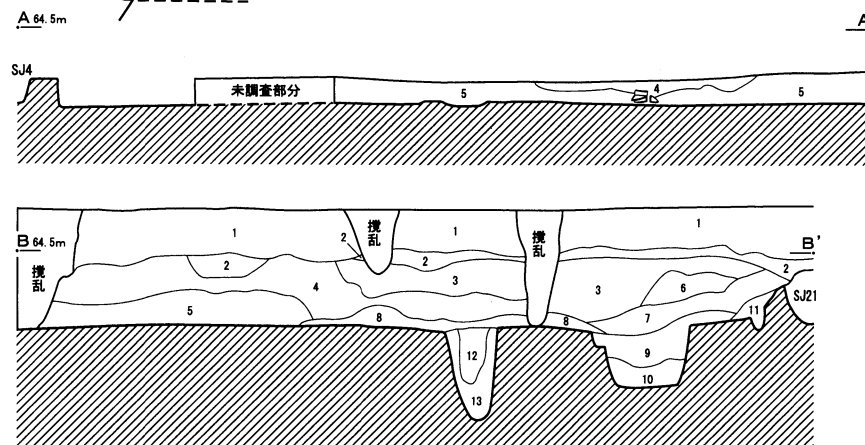
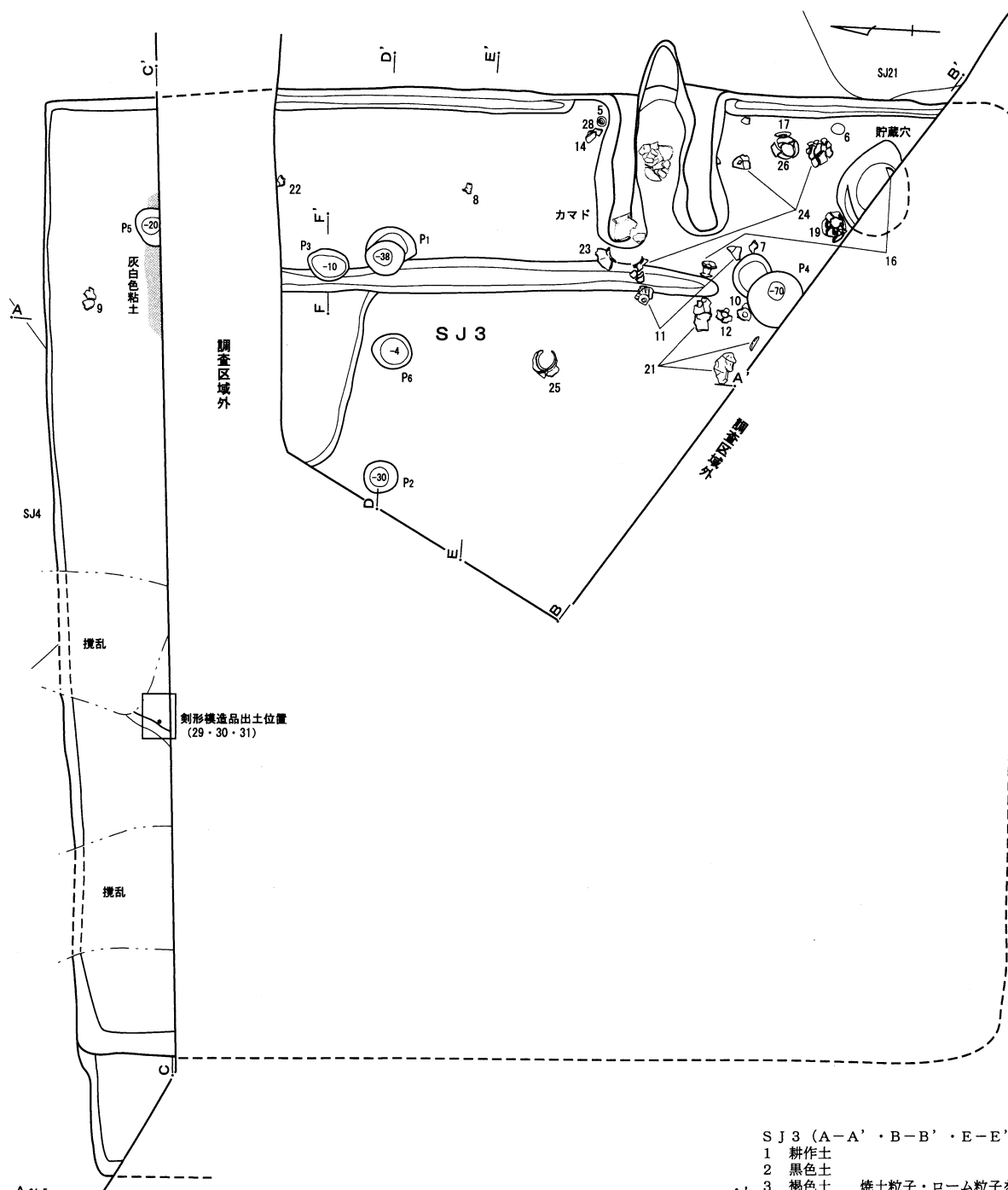
第149図 第2号住居跡出土遺物

第49表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第149図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	西部SK29 埋土中	(13.0) [4.8]		15	A・B・D・F・K	良好 赤褐5YR4/6	内面放射暗文
2	土師器 高坏	南壁際 床面上直上	17.0 [6.7]		60	A・B・C・D	良好 明赤褐5YR5/6	坏部内外面放射暗文
3	土師器 高坏	北西部 床面上10cm	[7.5]	(12.2)	70	A・B・D・E・F	良好 にぶい赤褐5YR5/4	脚部外面ミガキ
4	土師器 高坏	北西部 床面上13cm	[7.0]		85	A・C・D・F・J	良好 にぶい赤褐5YR4/4	柱状部内面ヘラケズリ
5	土師器 鉢	P1際 床面上5cm	14.1 [8.4]		65	A・D・E・I・J	良好 橙5YR6/6	体部外面木口状工具ナデ
6	土師器 甕	埋土	[5.6]		15	A・B・D・F・J	良好 暗褐7.5YR3/3	胴部外面ヘラケズリ

する部分からの出土であることからすれば、厳密な意味では本住居跡に伴うとは言いがたい。体部

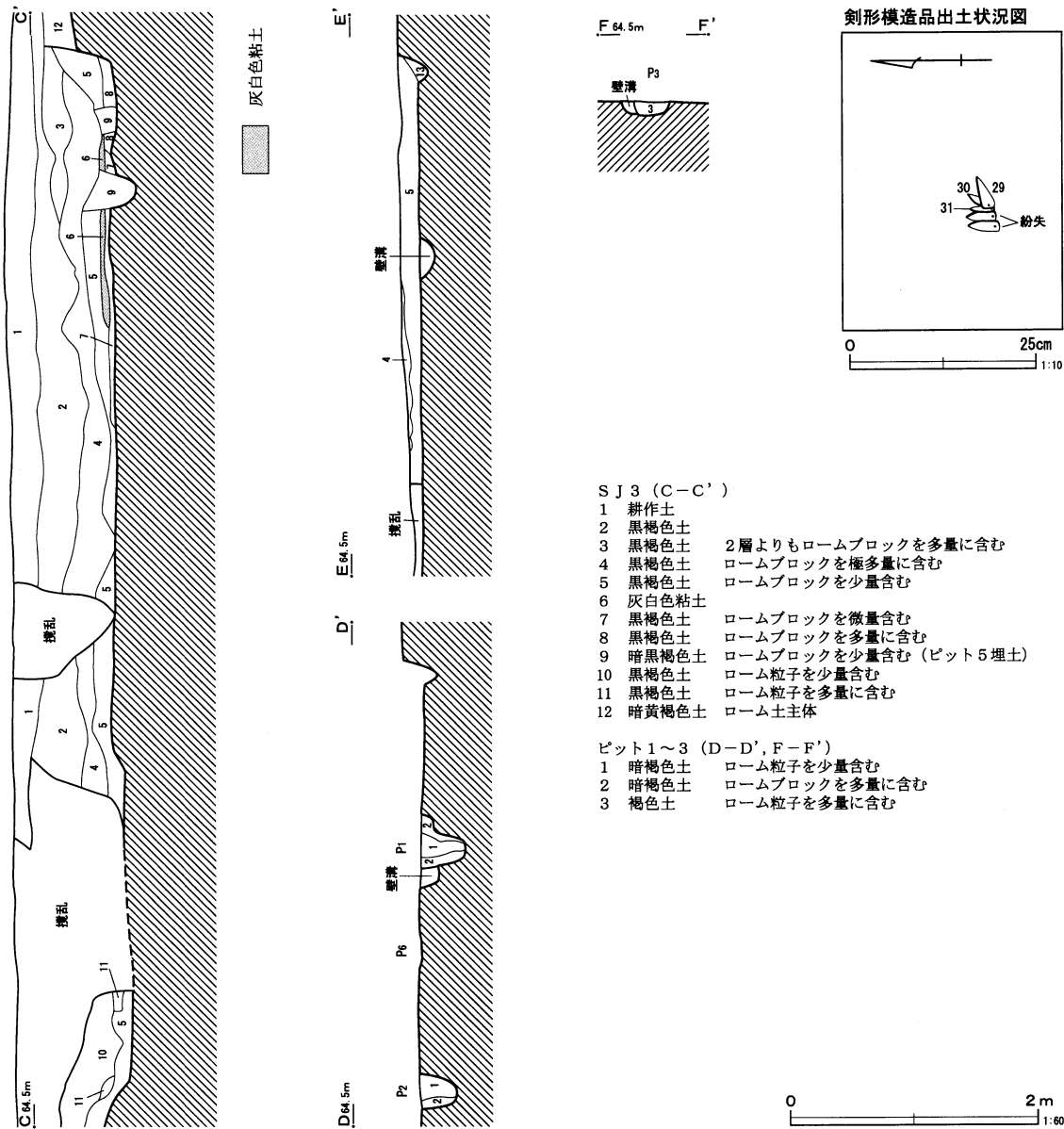
内面に放射暗文を施し、底部は平底に近い。時期は夏目遺跡II期と考えられる。



- SJ3 (A-A'・B-B'・E-E')
- 1 耕作土
 - 2 黒色土
 - 3 褐色土 焼土粒子・ローム粒子を少量含む
 - 4 暗褐色土 焼土粒子・ロームブロックを少量含む
 - 5 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む
 - 6 黒褐色土 炭化物粒子を多量に含む
 - 7 褐色土 ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物粒子を少量含む
 - 8 黄褐色土 ロームブロックを多量、焼土粒子・白色粘土粒子を少量含む
- 貯蔵穴
- 9 暗褐色土 ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む
 - 10 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・白色粘土粒子を多量に含む
 - 11 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む (壁溝埋土)
- ピット4
- 12 黒色土 ローム粒子を少量含む
 - 13 褐色土 ロームブロックを多量に含む



第150図 第3号住居跡(1)



第151図 第3号住居跡(2)

第3号住居跡 (第150～152図)

第3号住居跡は調査区南東部のO-19・20グリッドに位置する。調査区の制約や攪乱を受け遺存状態はあまり良くない。重複する第4号住居跡を切っていた。第21号住居跡との重複関係は微妙であるが、本住居跡の方が古いと判断した。また西壁部に建て替え、または別遺構が重複するような痕跡が認められたものの攪乱の影響もあり確定できなかった。

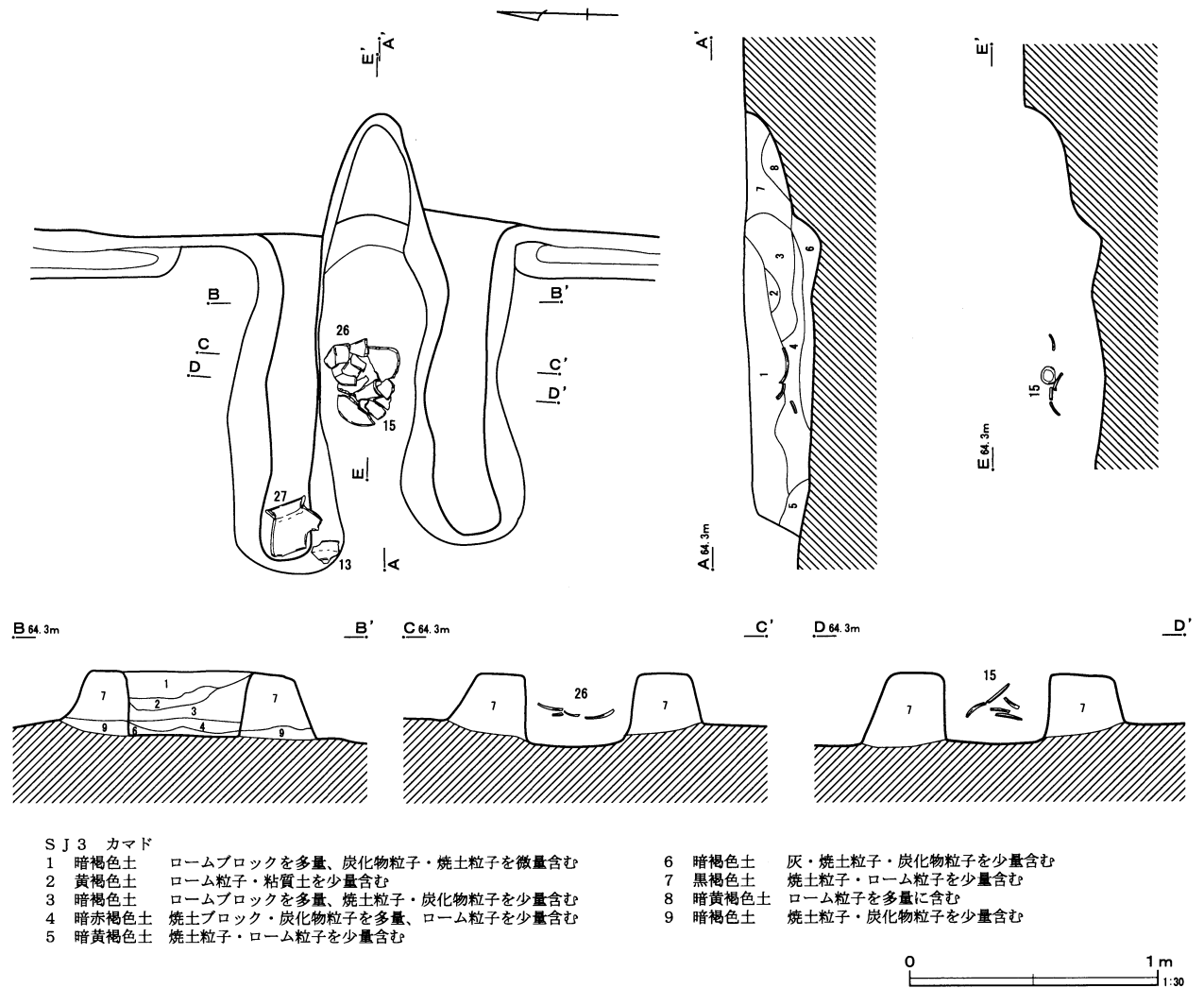
平面形は方形の大型住居跡と推定され、規模は長軸長8.56m、短軸残存長7.98m、床面までの深

さは0.30mである。主軸方位はN-84°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。北西隅部近くの床面には灰白色粘土が薄く堆積していた。

カマドは東壁に設置されていた。燃烧部は壁内に収まり、燃烧部長1.38m、幅1.50m、燃烧部内壁幅は0.42mである。煙道部は壁を0.45m切り込んでいた。燃烧部には高坏を転用した支脚が据えられていた。

貯蔵穴はカマド脇の東壁南端部に位置し、半分は調査区外に延びる。規模は直径0.80m、深さ0.45mである。



- S J 3 カマド
- | | |
|---------|----------------------------|
| 1 暗褐色土 | ロームブロックを多量、炭化物粒子・焼土粒子を微量含む |
| 2 黄褐色土 | ローム粒子・粘質土を少量含む |
| 3 暗褐色土 | ロームブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を少量含む |
| 4 暗赤褐色土 | 焼土ブロック・炭化物粒子を多量、ローム粒子を少量含む |
| 5 暗黄褐色土 | 焼土粒子・ローム粒子を少量含む |

- | | |
|---------|-------------------|
| 6 暗褐色土 | 灰・焼土粒子・炭化物粒子を少量含む |
| 7 黒褐色土 | 焼土粒子・ローム粒子を少量含む |
| 8 暗黄褐色土 | ローム粒子を多量に含む |
| 9 暗褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子を少量含む |

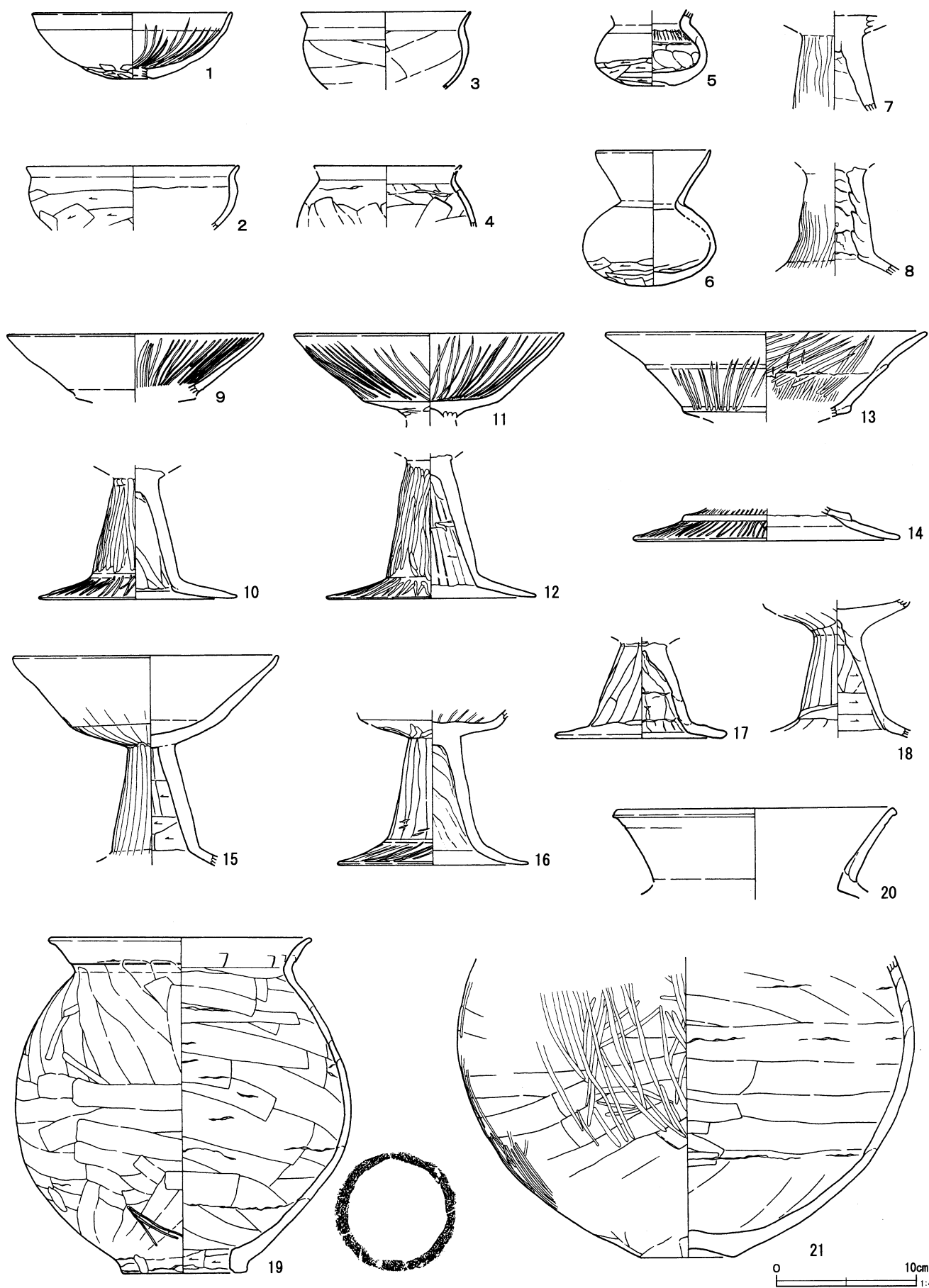
0 1m
1:30

ピットは6本検出された。P 4は深さ0.70mと深く主柱穴と考えてよい。P 1(深さ0.38m)、P 2(深さ0.30m)は主柱穴の可能性もある。壁溝はカマドのある東壁際で確認された。深さ約10cm。また、P 3とP 4を結ぶ位置に壁溝風の浅い溝が検出された。間仕切り溝と見るにはカマド前面にある点から首肯しがたい。カマドが付け替えられたのであれば、間仕切り溝、そうでなければ建て替え前の壁溝と考えるのが妥当であろうか。

出土遺物は土師器坏・埵・鉢・鉢・高坏・壺・甕・甗、石製模造品(剣形)などがあり(第153・154図)、カマド周辺を中心に検出された。

カマド燃焼部中央には15の高坏が逆位に置かれ、支脚として利用されていた。26の甕の一部も

燃焼部出土。カマド左袖先端からは27の甕、13の高坏が出土している。カマド左袖基部には5の埵、14の高坏とともに28の滑石の加工痕の残る原石が置かれていた。カマド右脇の壁際には6の埵、17の高坏脚部、24の小型甕、26の甕がまとめて出土した。さらに、カマド前面からP 4にかけて、21の壺胴部下半、23の甕口縁部、7・10・11・12の高坏がまとめて出土した。貯蔵穴脇からは19の甗がほぼ完形の状態で出土した。この他に25の甕上半部が住居跡中央部の床面上に置かれていた。また北壁中央部寄りから5個の滑石製剣形模造品が紐を通した状態で並んで出土した。(第151図) 出土状態の微細図作成後、一部が不幸な事件によって紛失してしまった。

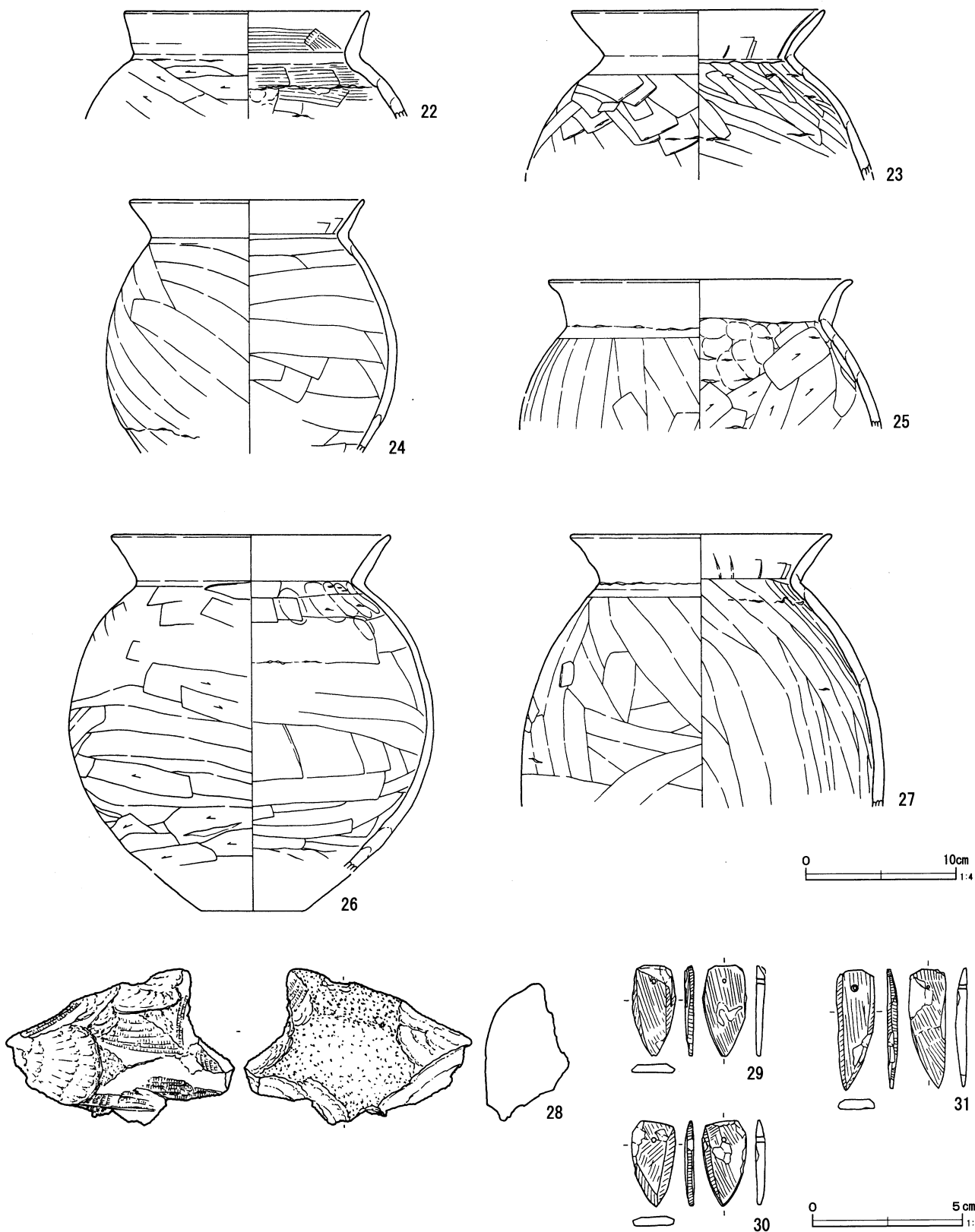


第153図 第3号住居跡出土遺物(1)

時期は源初坏が見られることと、扁平な胴部の
 埴、短脚化した高坏の存在から夏目遺跡Ⅲ期に位
 置づけられる。

第4号住居跡 (第155・156図)

第4号住居跡は調査区南東部のN・O-19・20
 グリッドに位置する。重複する第3号住居跡に南



第154図 第3号住居跡出土遺物 (2)

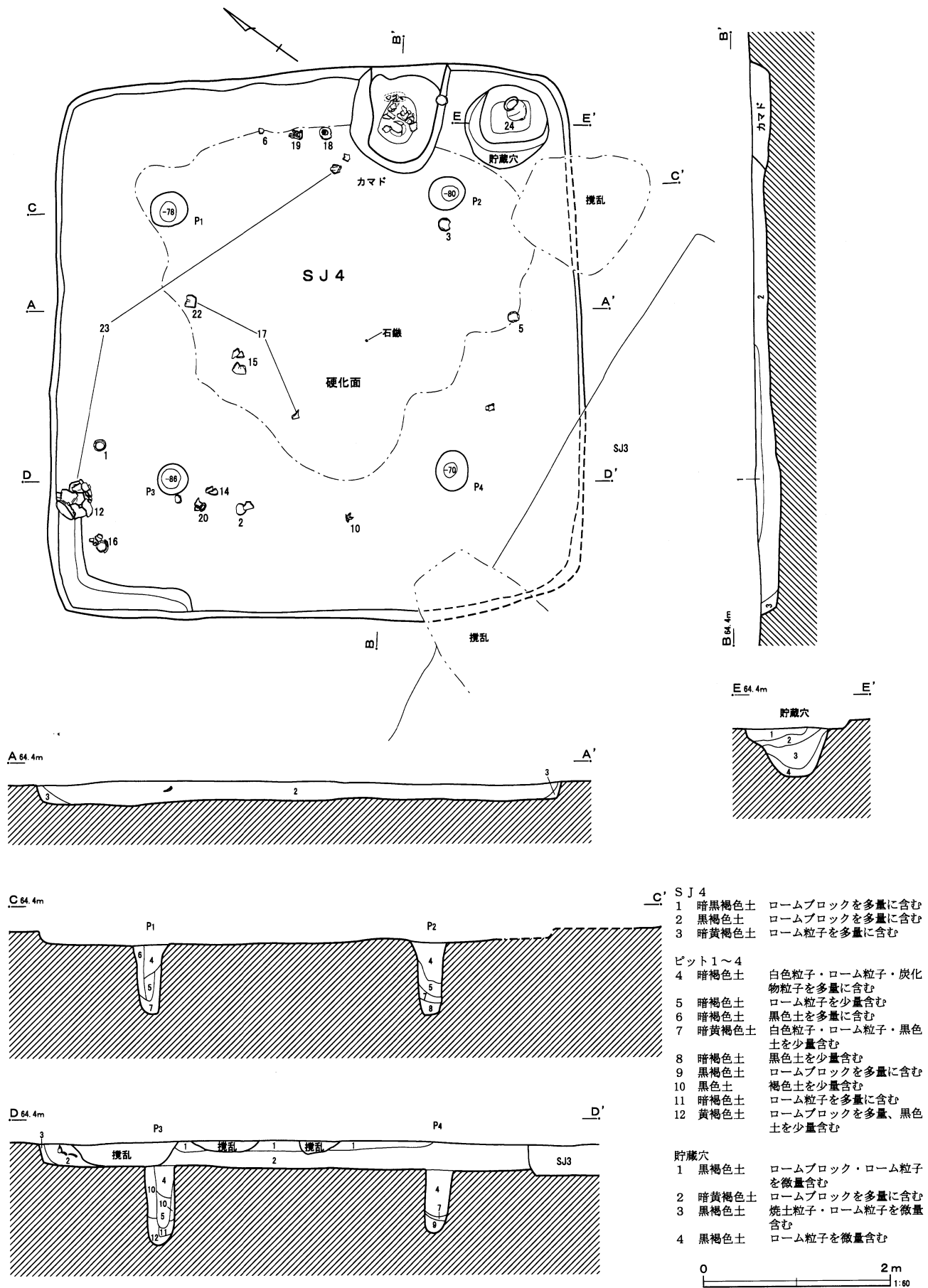
第50表 第3号住居跡出土遺物観察表(第153・154図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 坏	埋土	(14.0) 4.8	(3.0)	25	A・B・C・D・F	良好 にぶい赤褐5YR4/4	内面放射暗文
2	土師器 坏	埋土	(15.1) [4.6]	(14.9)	30	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐5YR5/4	体部外面ヘラケズリ
3	土師器 塊	埋土	(12.0) [5.6]		25	A・B・E・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	体部内外面ナデ
4	土師器 鉢か	埋土	[4.1]		20	A・B・D・F・J	良好 赤褐2.5YR4/6	体部外面ナデ
5	土師器 埴	カマド左袖際 床面直上	[5.5]	8.0 3.3	90	A・B・C・E・F	良好 にぶい橙5YR6/6	胴部外面下半ヘラケズリ
6	土師器 埴	東壁際 床面上17cm	(8.2) [9.7]	9.5	80	A・B・E・G・I	良好 橙5YR6/6	口縁部を2/3欠損する以外は完存
7	土師器 高坏	P4周辺 床面上4cm	[6.9]		80	A・B・C・F・I	良好 赤褐5YR4/6	柱状部ヘラミガキ
8	土師器 高坏	東部 床面上4cm	[7.6]		85	A・C・F・I・K	良好 赤褐5YR4/6	柱状部粘土紐を右回りに4段巻き上げ
9	土師器 高坏	北壁寄り 床面上6cm	(18.0) [4.5]		30	A・B・D・F・J	良好 暗赤褐5YR4/3	坏部内面放射暗文
10	土師器 高坏	P4際 床面直上	[9.4]	14.0	90	A・D・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	脚部外面ヘラミガキ
11	土師器 高坏	カマド周辺 床面上9cm	19.0 [6.1]		70	A・D・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内外面放射暗文
12	土師器 高坏	P4周辺 床面上6cm	[10.2]	(14.8)	70	A・B・C・D・F	良好 にぶい赤褐5YR5/4	脚部外面ヘラミガキ
13	土師器 高坏	カマド左袖端部 床面上8cm	(22.4) [6.1]		20	A・B・C・F・J	良好 暗赤褐5YR3/4	坏部内外面ヘラミガキ
14	土師器 高坏	カマド左袖際 床面直上	[2.4]	(19.0)	25	A・B・D・F・G	良好 橙2.5YR6/6	裾部外面ヘラミガキ
15	土師器 高坏	カマド燃烧部 使用面上7cm	18.7 14.9		90	A・B・C・D・F	良好 橙5YR6/6	坏部底面ミガキ
16	土師器 高坏	カマド右袖周辺 床面直上	[11.1]	(13.5)	75	A・B・D・F・I	良好 明赤褐5YR5/6	坏部内面及び脚部外面ヘラミガキ
17	土師器 高坏	東壁際 床面上5cm	[6.8]	12.3	95	A・B・F・G・J	良好 赤褐2.5YR4/8	脚部外面ナデ
18	土師器 高坏	埋土	[9.7]		70	A・B・D・F・J	良好 にぶい赤褐5YR5/4	坏部内面剥落顕著
19	土師器 甗	貯蔵穴際 床面直上	18.5 24.0	24.0 8.8	85	A・B・F・G・J	良好 橙5YR6/8	胎土に赤色粒子の混入目立つ
20	土師器 壺	埋土	(19.6) [5.3]		15	A・B・E・F・J	良好 褐7.5YR4/3	口縁部ヨコナデ
21	土師器 壺	P4周辺 床面上4cm	[21.4]	(32.6) 6.7	55	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐5YR4/4	胴部外面縦位のヘラミガキ
22	土師器 甗	東部 床面上6cm	(16.0) [7.1]		20	A・B・D・F・J	良好 にぶい橙7.5YR7/4	粗製
23	土師器 甗	カマド左袖端際 床面上10cm	(16.7) [11.3]		45	A・B・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	口縁部外面ススが一部付着
24	土師器 小型甗	カマド周辺 床面直上	15.4 [16.8]	19.3	75	A・B・C・F・I	良好 橙5YR6/6	胴部下半外面にスス付着
25	土師器 甗	中央部 床面直上	20.0 10.0	24.2	70	A・B・C・F・J	良好 橙7.5YR6/8	胴部内面ヘラケズリ顕著
26	土師器 甗	カマド周辺 床面直上	(18.4) [22.3]	(24.4)	50	A・B・C・F・J	良好 赤褐2.5YR4/6	胴部外面一部スス付着
27	土師器 甗	カマド左袖端部 直上	17.2 18.2	24.2	55	A・B・D・E・I	良好 にぶい赤褐2.5YR4/4	口縁部から胴部にかけてススが一部付着
28	石製品 未成品	カマド左袖際 床面直上	長さ5.91cm 幅4.85cm 厚さ2.85cm 重さ103.85g 滑石 紡錘車の未成品と思われる No.5					
29	石製品 剣形品	北壁寄り 床面上6cm	長さ2.96cm 幅1.34cm 厚さ0.30cm 孔径0.12cm 重さ2.07g 滑石 研磨：側面縦 No.3					
30	石製品 剣形品	北壁寄り 床面上6cm	長さ2.86cm 幅1.38cm 厚さ0.29cm 孔径0.10cm 重さ1.91g 滑石 研磨：側面縦 No.2					
31	石製品 剣形品	北壁寄り 床面上6cm	長さ3.93cm 幅1.18cm 厚さ0.33cm 孔径0.09cm 重さ2.47g 滑石 研磨：側面縦斜め 背面屈曲 No.1					

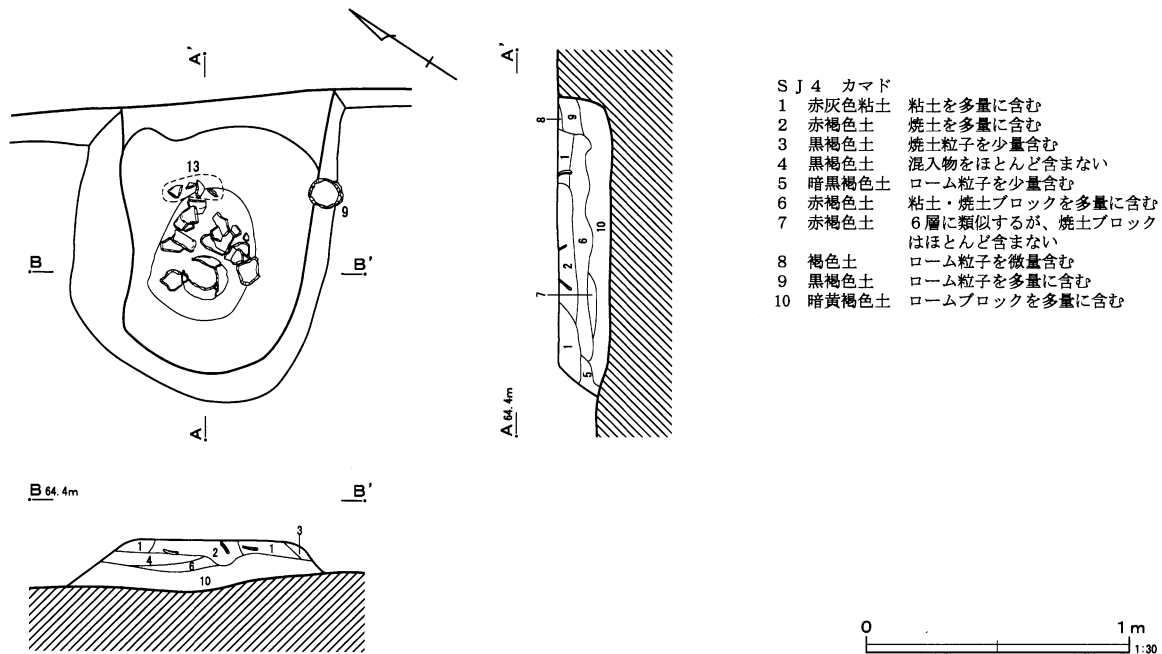
隅部を切られていた。

平面形は方形で、規模は長軸長5.80m、短軸長

5.68m、床面までの深さは0.20mである。主軸方位はN-53°-Eを指す。



第155図 第4号住居跡



第156図 第4号住居跡カマド

床面は中央部が高く、壁際がやや低くなる傾向が認められ、方形周溝状の掘方をもつと推定された。床面の高い部分であるカマド前面から住居跡中央部付近にかけて硬く踏み固められていた。

埋土はロームブロックを多量に含む黒褐色土が主体で、大きな土層変化が観察されないことから、人為的に埋め戻された可能性がある。

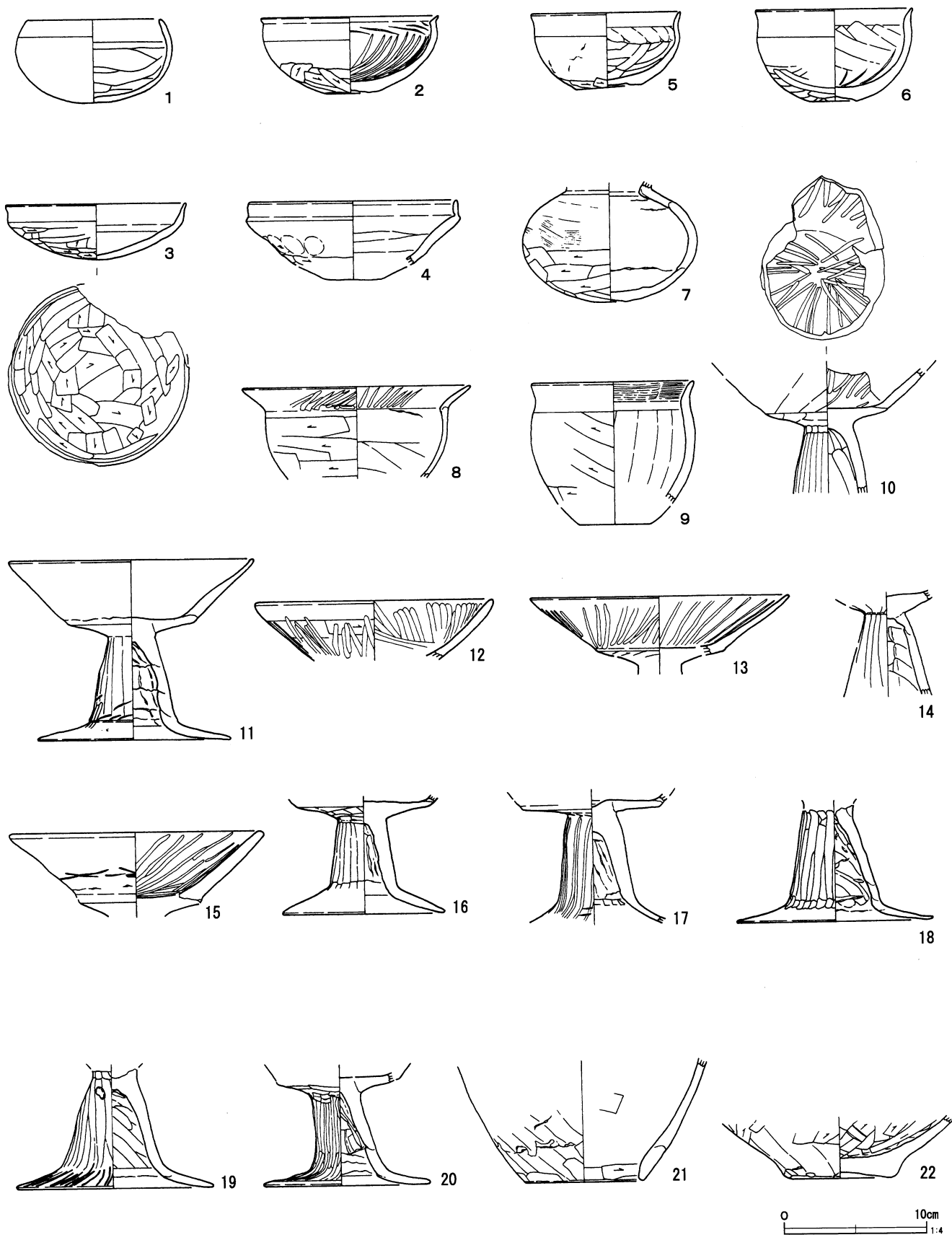
カマドは北東壁の中央から東に寄った位置に設けられていた(第156図)。いわゆる初期カマドで、袖部と燃焼部は明確に把握できない。長さは1.14m、幅0.96mで、壁外に延びる煙道部は存在しない。底面にはロームブロックを多量に含む暗黄褐色土が15cm前後の厚さで敷いたような状況が観察された(第10層)。焼土・粘土を含む堆積土(第1～3・5～7層)はその上面に乗っていることからカマド火床面は住居床面よりも一段高く設けられたと考えられる。燃焼部と袖部との境は平面・断面観察によっても明確に把握できなかった。また、壁際の堆積土(第8・9層)には焼けた跡や焼土がほとんど含まれないことから、煙道は壁まで達していなかった可能性があろう。いずれにせよ定型化したカマドの構造とは異質である。

貯蔵穴はカマド脇の東隅部に設けられていた。不整形で、直径0.90m、深さ0.50mである。貯蔵穴内からは土師器甕が1点、半ばまで埋没した段階(第3層堆積時か)で、落ち込んだような状態で出土した。

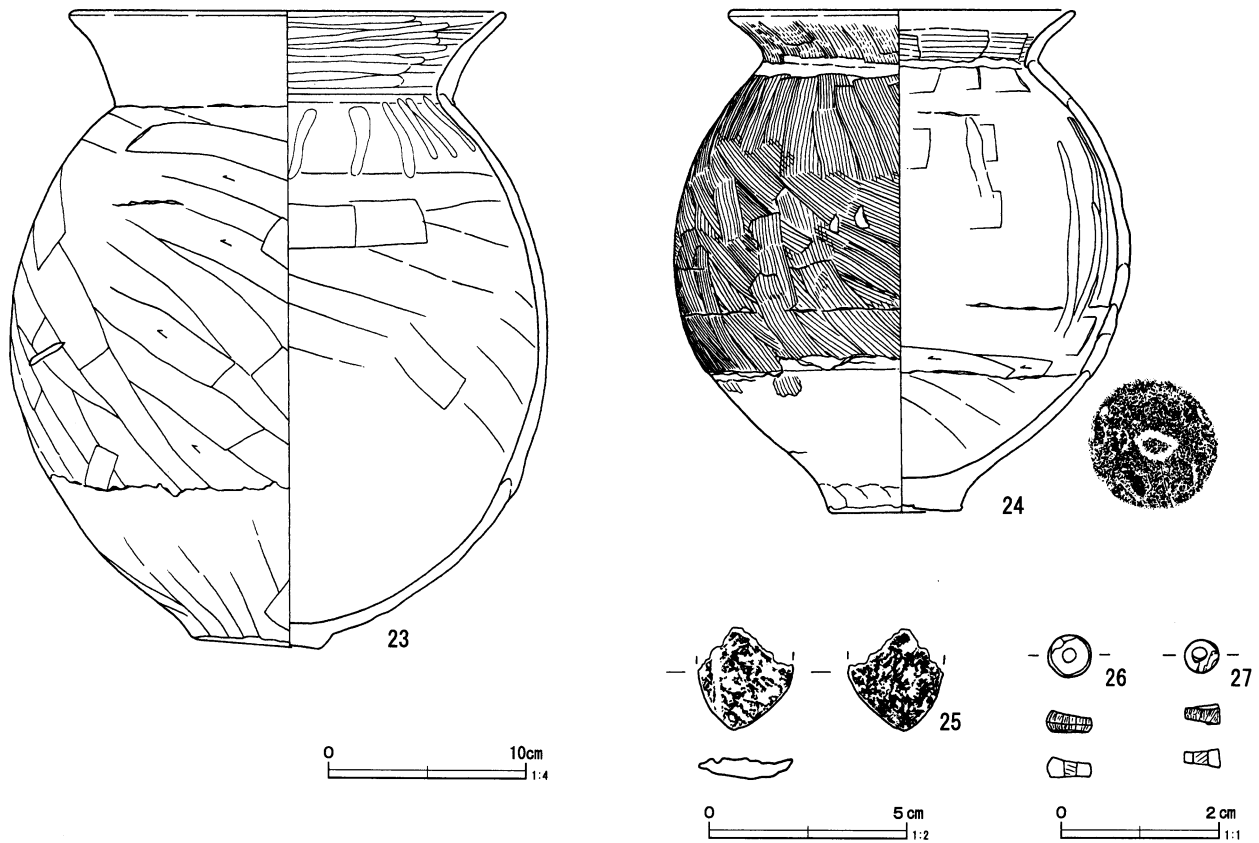
柱穴は4本あり、規則的に配置され深さも0.70～0.86mと深く、いずれも支柱穴と考えられる。

壁溝は住居西隅部で一部確認された。深さ15cm程度である。

出土遺物は土師器坏・埵・鉢・埴・高坏・壺・甕・甗、焼成粘土塊、滑石製白玉がある(第157・158図)。遺物は、カマド周辺及び西隅部からまとまって出土した。カマド燃焼部には被熱のため赤色化した甕の胴部片(非掲載)と13の高坏が出土した。また右袖基設部に接して9の鉢が置かれていた。カマド右脇の貯蔵穴からは24の甕が出土している。カマド左脇の壁沿いには6の埵、18・19の高坏脚部が並んで出土した。他にP2の脇から3の坏が伏せた状態で、中央部西寄りからは15・17の高坏、22の壺底部が出土している。南東壁際からは5の埵が出土している。時期は異なるが中央部から縄文時代の石鏃(第260図3)が出土して



第157图 第4号住居跡出土遺物(1)



第158図 第4号住居跡出土遺物(2)

いる。西隅部の北西壁沿いには1の半球形坏、23の甕、16の高坏脚部が出土し、P3の南側からは2の内斜口縁坏、14・20の高坏が、やや離れたP3・P4の間からは10の坏部に暗文を施す高坏が出土している。25の焼成粘土塊は埋土から出土した。26・27の滑石製白玉は床面下からの出土である。

時期は夏目遺跡II期と考えられる。

第5号住居跡(第159図)

第5号住居跡は調査区南東部のN-20グリッドに位置する。調査区外に延びているため、東半部は調査できなかった。第6号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しいことが判明した。

方形系の小型住居跡と推定され、規模は長軸長3.66m、短軸残存長3.48m、床面までの深さは0.34mである。主軸方位はN-26°-Wを指す。

床面は起伏が顕著で一定しない。埋土にはロームブロックとローム粒子が多量に含まれ(第5

~7層)人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドと貯蔵穴は検出されなかった。

ピット状の小穴は南壁東端から1基検出されたが、明確なものではない。また、北壁に土坑が1基存在する。土層観察から住居跡に伴うのは確実であるが、性格は不明である。掘方の一部であろうか。

出土遺物は土師器坏、須恵器甕、桃核があるが、量的には少ない(第160図)。1~4は北武蔵型坏である。南壁際からまとまって出土した。西から2の坏が床直、1の坏が壁方向から流れ込んだ状態で出土し、周囲には拳大の礫があり、坏の中にも卵大の円礫が入っていた。P1の脇から4の坏が出土し、床直と埋土の破片が接合している。その他に埋土から桃核が1点出土している。

時期は夏目遺跡X期、7世紀末葉から8世紀初頭頃と推定される。

第51表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第157・158図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	北西壁寄り 床面直上	9.3 5.9		95	A・B・D・F・J	良好 赤褐2.5YR4/8	内外面磨耗のため調整不明瞭
2	土師器 坏	P 3 周辺 床面上 5 cm	12.3 5.4	3.1	100	A・B・C・D・F	良好 赤褐2.5YR4/6	体部内面に放射暗文を施す
3	土師器 坏	P 2 周辺 床面上 5 cm	12.4 3.9		80	A・B・C・D・F	良好 にぶい橙5YR6/4	体部外面中位に強い指ナデを施す
4	土師器 坏	カマド	(14.5) [4.6]		20	A・B・D・F・J	良好 にぶい褐7.5YR5/3	外面スス付着 蓋の可能性を残す
5	土師器 塊	南東壁寄り 床面直上	10.4 5.4	4.5	95	A・C・D・F・J	良好 明褐7.5YR5/6	体部内面光沢を持つ入念なナデ
6	土師器 塊	北東壁寄り 床面上 3 cm	(11.0) 6.5	3.0	45	A・D・F・G・J	良好 橙2.5YR6/6	体部内面弧状ヘラ圧痕を残す
7	土師器 埴	埋土	[8.4]	12.3 2.1	75	A・B・F・J・K	良好 明褐7.5YR5/8	胴部外面ヘラケズリ
8	土師器 鉢	埋土	(15.8) [6.5]		10	A・B・D・F・J	良好 赤褐10R5/4	口縁部内外面赤彩一部残存
9	土師器 鉢	カマド右袖 直上	11.2 [8.6]		80	A・B・F・G・J	良好 明赤褐5YR5/8	体部外面ヘラケズリ
10	土師器 高坏	中央部 床面上15cm	[8.8]		60	A・B・C・D・F	普通 橙5YR6/6	坏部内面ヘラミガキを施す
11	土師器 高坏	埋土	(17.0) [10.6]	(13.4)	60	A・B・D・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	脚部外面ナデ
12	土師器 高坏	北西壁溝際 床面直上	16.4 [4.2]		70	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	坏部内外面ヘラミガキ
13	土師器 高坏	カマド燃焼部 使用面上12cm	(18.2) [4.2]		40	A・D・E・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内外面ヘラミガキ
14	土師器 高坏	P 3 周辺 床面上16cm	[7.3]		75	A・B・C・D・G	良好 にぶい赤褐5YR4/4	坏部内面平滑
15	土師器 高坏	中央部 床面上15cm	17.4 [5.0]		70	A・B・C・F・J	良好 褐7.5YR4/6	坏部内面放射暗文
16	土師器 高坏	西隅部 床面直上	[8.3]	11.2	70	A・B・E・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部底面クレータ状の剝落痕顕著
17	土師器 高坏	中央部 床面上6cm	[9.1]		50	A・B・D・F・G	良好 橙2.5YR6/6	脚部外面縦位のヘラミガキ 坏内底面中央丸く窪む
18	土師器 高坏	カマド周辺 床面上 3 cm	[8.1]	13.7	95	A・B・C・D・F	良好 明赤褐5YR5/6	接合部の剝離痕明瞭
19	土師器 高坏	北東壁寄り 床面上 9 cm	[8.3]	13.6	50	A・B・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	裾部外面ヘラミガキ
20	土師器 高坏	P 3 周辺 床面上19cm	[7.8]	11.6	70	A・B・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	脚部外面ヘラミガキ
21	土師器 甗	埋土	[8.5]	8.2	20	A・B・E・F・J	良好 にぶい赤褐5YR5/4	体部内外面に一部スス付着
22	土師器 壺	中央部 床面上 9 cm	[4.3]	7.3	80	A・B・D・F・K	良好 明赤褐5YR5/6	胴部内外面一部ヘラケズリ
23	土師器 甕	北西壁溝際 床面直上	21.7 32.3	27.2 6.6	85	A・C・D・F・K	良好 明赤褐5YR5/6	胴部外面ヘラケズリ
24	土師器 甕	貯蔵穴 底面上15cm	17.3 25.5	23.1 6.6	100	A・C・E・F・J	良好 にぶい黄橙10YR7/4	胴部外面ハケメ
25	土製品 焼成粘土塊	埋土	長さ2.6cm 厚さ0.5cm	幅2.4cm 重さ2.5g		A・G・J 良好	にぶい褐7.5YR5/4	植物繊維の圧痕を残す 木葉形か胎土に角閃石・白色粒子を含む

第52表 第4号住居跡出土白玉観察表 (第158図)

番号	種類	出土位置	最大径(cm)	上面径(cm)	下面径(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石材	段階	研磨	外形
26	白玉	床面下	0.55	0.52	0.52	0.23	0.15	0.10	滑石	4	上下側面	中央に稜
27	白玉	床面下	0.43	0.42	0.43	0.23	0.15	0.06	滑石	4	下側面	直線的

第6号住居跡 (第159図)

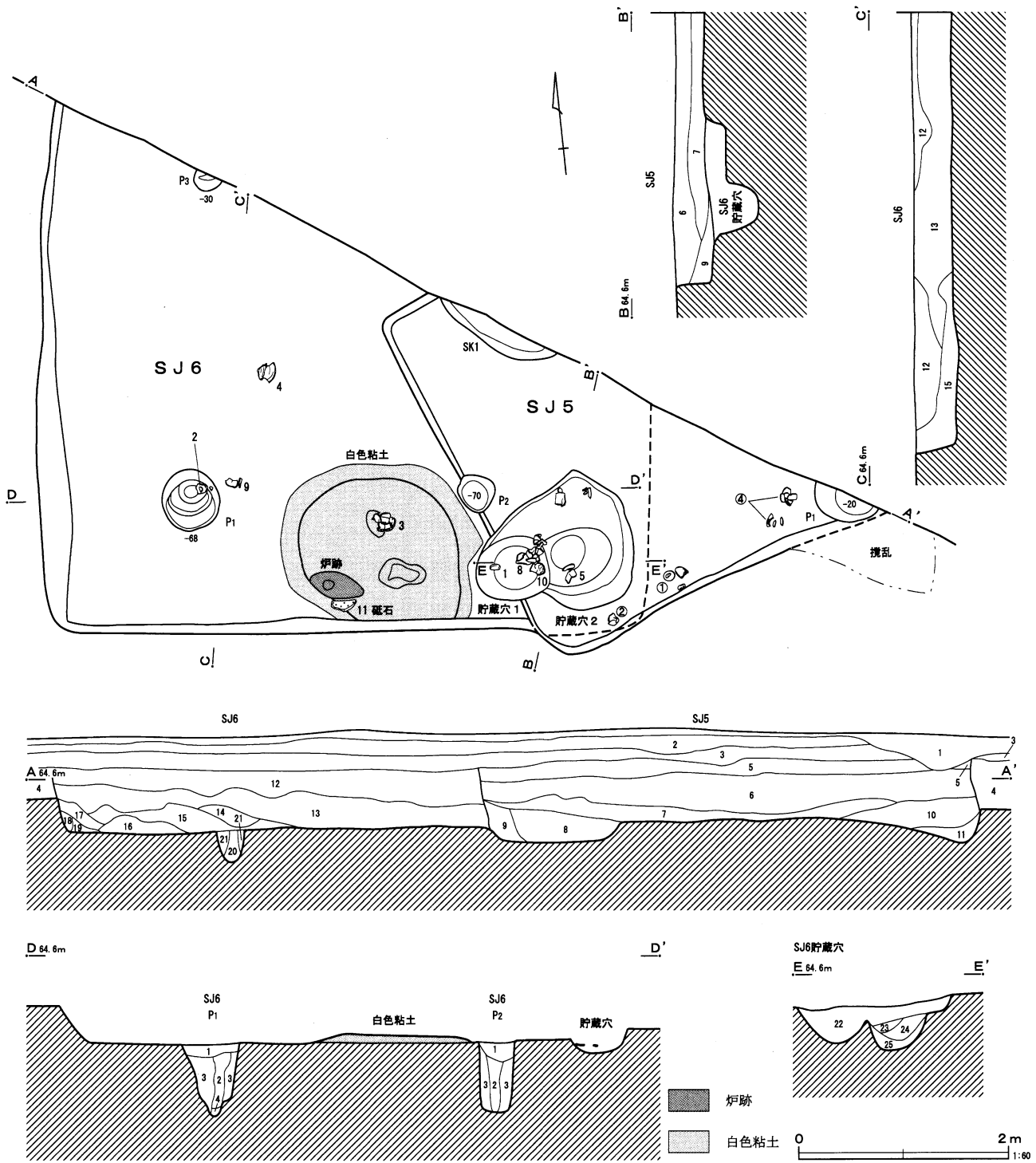
第6号住居跡は調査区南東部のM・N-20グリッドに位置する。調査区外に延び、また東壁部を第5号住居跡に切られており全容は不明である。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長

5.08m、短軸長4.68m、床面までの深さは0.40mである。主軸方位はN-170°-Wを指す。

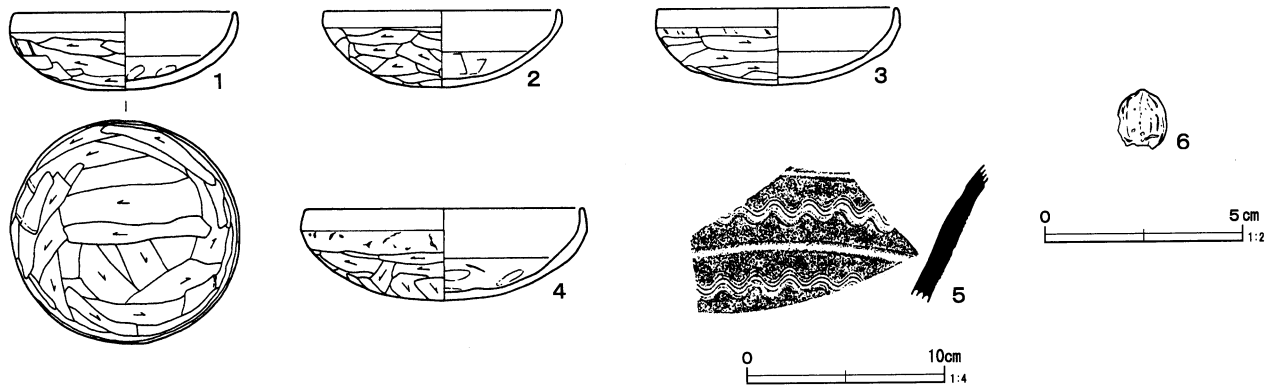
床面は平坦である。埋土はローム混じりの明褐色から暗褐色土が主体であった。

南壁際の床面には、1.80×1.50m不整円形の範



- | | | | | |
|--|---|--|--|---|
| <p>S J 5</p> <p>1 耕作土</p> <p>2 黒褐色土</p> <p>3 暗褐色土</p> <p>4 暗黄褐色土</p> <p>5 褐色土</p> <p>6 暗褐色土</p> <p>7 暗褐色土</p> <p>8 黒褐色土</p> <p>9 褐色土</p> <p>10 褐色土</p> <p>11 黒褐色土</p> | <p>S J 6</p> <p>12 褐色土</p> <p>13 暗褐色土</p> <p>14 褐色土</p> <p>15 明褐色土</p> <p>16 明褐色土</p> <p>17 明褐色土</p> <p>18 明褐色土</p> <p>19 明褐色土</p> | <p>焼土粒子・ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む</p> <p>ロームブロックを多量、白色粒子・焼土粒子・ローム粒子を少量含む</p> <p>ロームブロックを少量含む</p> <p>ロームブロック・ローム粒子を多量に含む</p> <p>ロームブロック・ローム粒子を少量含む</p> <p>ローム粒子を多量に含む</p> <p>ロームブロックを多量に含む</p> <p>ロームブロックを少量含む</p> <p>(SK 1埋土)</p> <p>ローム粒子を少量含む</p> <p>ローム粒子を多量に含む</p> <p>(ビット1埋土)</p> | <p>ビット3</p> <p>20 褐色土</p> <p>21 褐色土</p> <p>貯蔵穴1・2 (E-E')</p> <p>22 褐色土</p> <p>23 黒褐色土</p> <p>24 黒褐色土</p> <p>25 黄褐色土</p> <p>S J 6ビット1・2 (D-D')</p> <p>1 暗黄褐色土</p> <p>2 黒褐色土</p> <p>3 暗黄褐色土</p> <p>4 黄褐色土</p> | <p>ローム粒子を多量に含む</p> <p>ロームブロックを多量に含む</p> <p>ローム粒子を多量に含む (貯蔵穴1埋土)</p> <p>ロームブロックを少量含む (貯蔵穴2埋土)</p> <p>ローム粒子を多量に含む (")</p> <p>ロームブロックを多量に含む (")</p> <p>ローム土主体</p> <p>ローム粒子を微量含む</p> <p>ロームブロックを多量に含む</p> <p>黒色土粒子を微量含む</p> |
|--|---|--|--|---|

第159図 第5・6号住居跡



第160図 第5号住居跡出土遺物

第53表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第160図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 坏	南東壁寄り 床面上8cm	11.1 4.0		100	A・B・F・G・H	良好 橙5YR6/6	内底面指頭圧痕顕著
2	土師器 坏	南隅部 床面直上	11.8 3.9		70	A・B・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	北武蔵型坏 内底面ヘラ押圧痕あり
3	土師器 坏	埋土	12.0 3.9		90	A・B・C・D・F	良好 明赤褐5YR5/6	北武蔵型坏
4	土師器 坏	南東隅部 床面直上	14.0 4.7		85	A・B・C・D・F	良好 にぶい橙5YR6/4	北武蔵型坏
5	須恵器 甕	埋土			破片	A・G・J・K	良好 灰5B4/1	沈線区画内に楡描波状文を1段施文 内外面降灰
6	自然遺物 桃核	埋土	長さ1.5cm 幅1.2cm 厚さ1.0cm 重さ0.8g 炭化					

囲で白色粘土が敷き詰められていた。厚さは約10cmほどである。白色粘土上には長さ45cm、幅25cm、深さ5cmほどの楕円形の火床(炉跡)が検出された。火床に隣接して出土した砥石も被熱していた。後述するように貯蔵穴が隣接し、火床が壁に接する位置にあること、白色粘土を意識的に敷設することを考えると、通常の炉跡というよりもいわゆる初期カマドに限りなく近い構造といえる。ただし、白色粘土上に焼土ブロックや粘土など天井部や側壁の崩落土の痕跡が見出せない点はカマドの認定根拠に否定的に働く要因でもある。カマド導入の過渡的な施設といえようか。

貯蔵穴はこの火床の東側に隣接して設けられていた。上面は第5号住居跡に削平されていたが、貯蔵穴そのものは残存していた。貯蔵穴は楕円形で2基連結しており、断面観察や遺物の出土状態から東側の貯蔵穴(貯蔵穴2)から西側のそれ(貯蔵穴1)に掘り直されたと考えられる。また、貯

蔵穴は北側にはテラス面をもつ。貯蔵穴1は長径0.72×短径0.60m、深さ0.36m、貯蔵穴2は長径0.62×短径0.45m、深さ0.48mである。

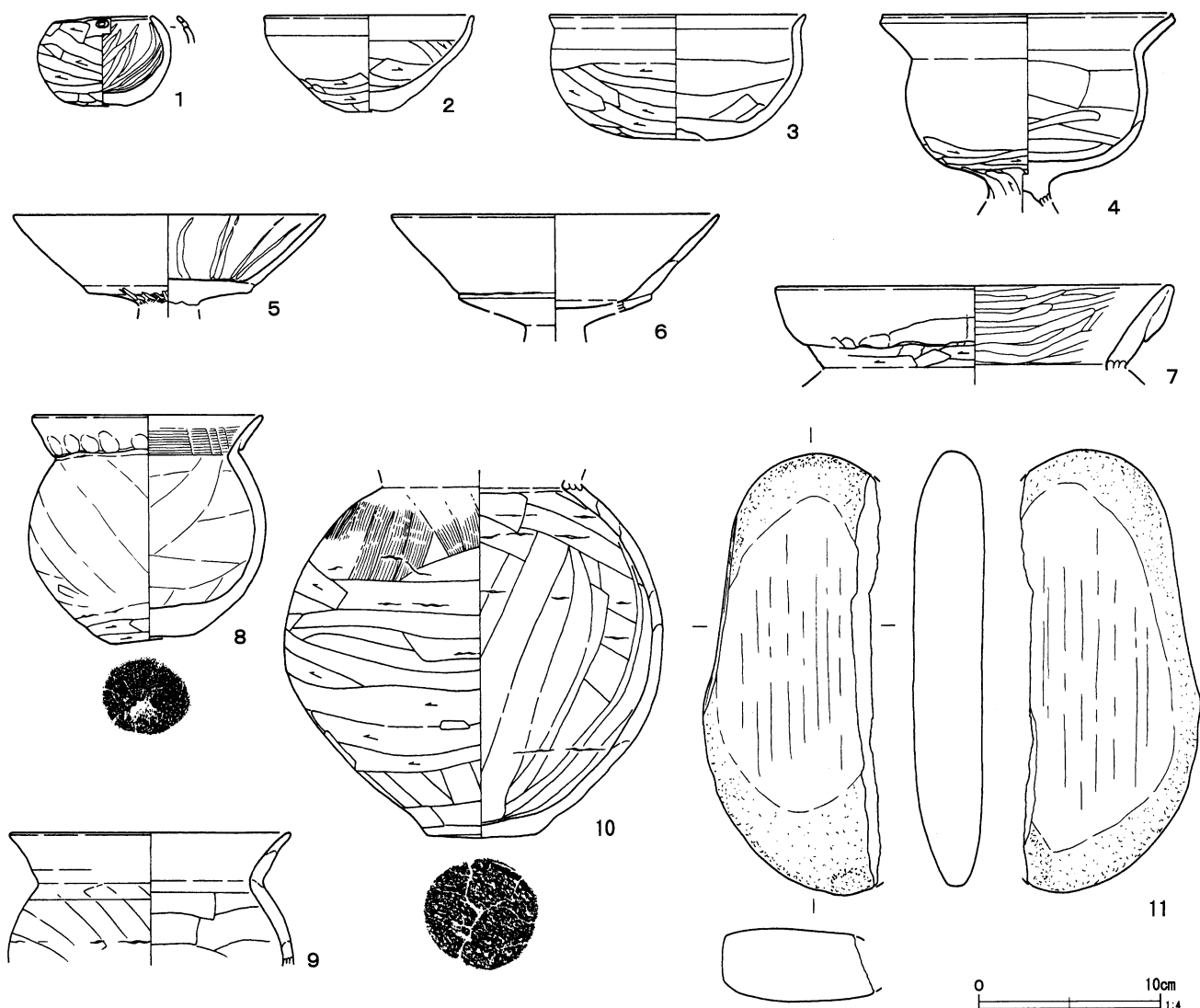
柱穴は3本検出された。規則的な配置から支柱穴と考えてよからう。

出土遺物は土師器無頸壺・坏・塊・脚付塊・高坏・壺・小型甕・甕、砥石がある(第161図)。量的には少ないが、南壁際に加熱施設(火床を含めた粘土敷き部分)と貯蔵穴付近に集中している。加熱施設からは炉跡に接して砥石が、中央には3の塊が正位の状態で置かれていた。貯蔵穴からは1の有孔無頸壺、8の小型甕、10の口縁を欠いた甕、5の高坏が床面と同じ高さから出土した。この他にP1の床面と同じ高さで2の坏が、脇からは9の甕上半部、中央部から脚付塊が出土している。

時期は夏目遺跡I期と考えられる。

第7号住居跡(第162・163図)

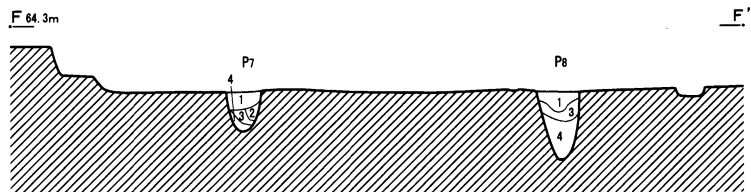
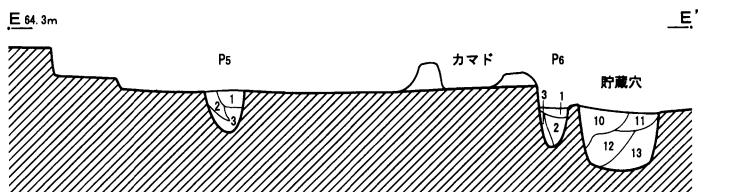
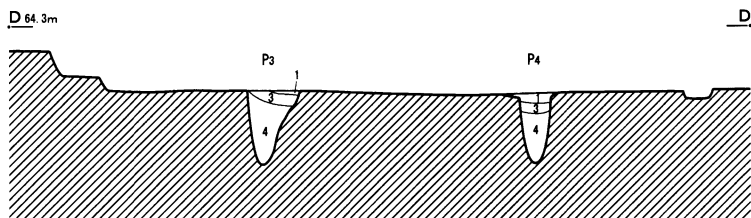
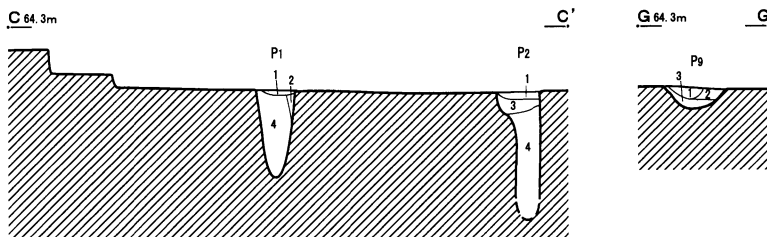
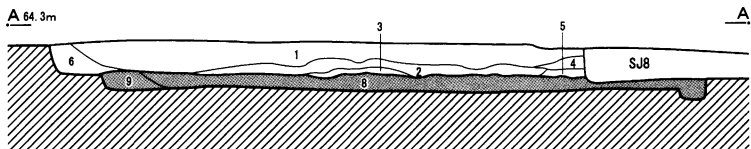
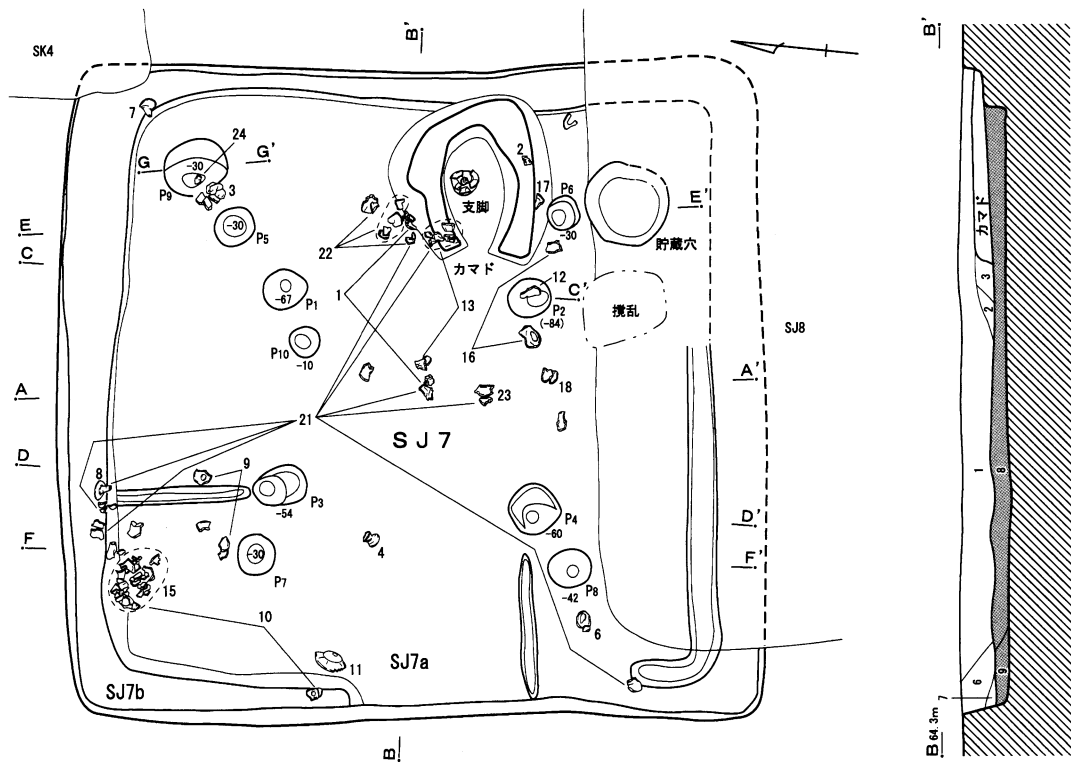
第7号住居跡は調査区南東部のN-18・19グ



第161図 第6号住居跡出土遺物

第54表 第6号住居跡出土遺物観察表 (第161図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 無頸壺	貯蔵穴 底面上17cm	5.5 4.9	7.3 2.4	95	A・B・C・D・F	良好 橙5YR6/6	口唇部直下に小円孔が対向する位置に一对穿孔されている
2	土師器 坏	P 1 底面上60cm	11.3 5.3	2.3	85	A・B・E・F・J	良好 にぶい橙7.5YR6/4	粗製品
3	土師器 塊	炉跡 使用面直上	14.1 6.9	3.5	80	A・C・D・F・J	良好 橙5YR6/6	体部内面に不定方向の線刻あり
4	土師器 脚付塊	中央部 床面上24cm	15.8 [10.6]		60	A・B・E・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	口唇部沈線状に浅く窪む
5	土師器 高坏	貯蔵穴 底面上36cm	17.0 [5.0]		30	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	坏部内面粗い放射暗文
6	土師器 高坏	埋土	(18.0) [5.4]		30	A・D・F・H・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	口縁部ヨコナデ
7	土師器 壺	埋土	(21.4) [4.6]		15	A・B・C・F・J	良好 橙5YR6/6	複合口縁壺
8	土師器 小型甕	貯蔵穴 底面上7cm	(12.4) 12.6	(13.0) 4.5	60	A・B・D・F・K	普通 明赤褐5YR5/6	胴部外面被熱のため器面磨耗顕著
9	土師器 小型甕	P 1 周辺 床面上9cm	(15.0) [7.3]		25	A・B・D・F・G	良好 明赤褐5YR5/6	外面一部スス付着
10	土師器 甕	貯蔵穴 底面上7cm	[19.6]	20.8 6.0	70	A・B・E・F・J	普通 赤褐5YR4/6	胴部外面上半木口状工具によるナデ
11	石製品 砥石	炉跡 直上	長さ24.3cm 幅(9.8)cm 厚さ4.0cm				重さ1518.9g 砂岩 半分欠損 砥面3	平滑 被熱痕あり S 1



- SJ7**
- 1 褐色土 ロームブロック・黒色土ブロックを多量、焼土粒子を少量、白色粒子を微量含む
 - 2 明褐色土 ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子を多量に含む
 - 3 黄褐色土 白色粒子・焼土粒子を多量に含む
 - 4 黒色土 ロームブロックを少量含む
 - 5 黄褐色土 ロームブロックを少量含む
 - 6 赤褐色土 ロームブロックを多量に含む
 - 7 赤褐色土 ロームブロックを極多量に含む
 - 8 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む (7a住埋土)
 - 9 黒褐色土 ロームブロックを少量含む (7a住埋土)

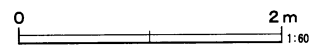
- 貯蔵穴**
- 10 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に含む
 - 11 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子を少量含む
 - 12 暗黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子を少量含む
 - 13 黄褐色土 ロームブロック・黒色土を少量含む

- SJ7a ビット1~4**
- 1 暗黄褐色土 ロームブロックを少量含む (貼床)
 - 2 黒褐色土 ロームブロックを少量含む
 - 3 暗黒褐色土 黒色土を多量に含む
 - 4 暗黒褐色土 焼土小ブロックを少量含む

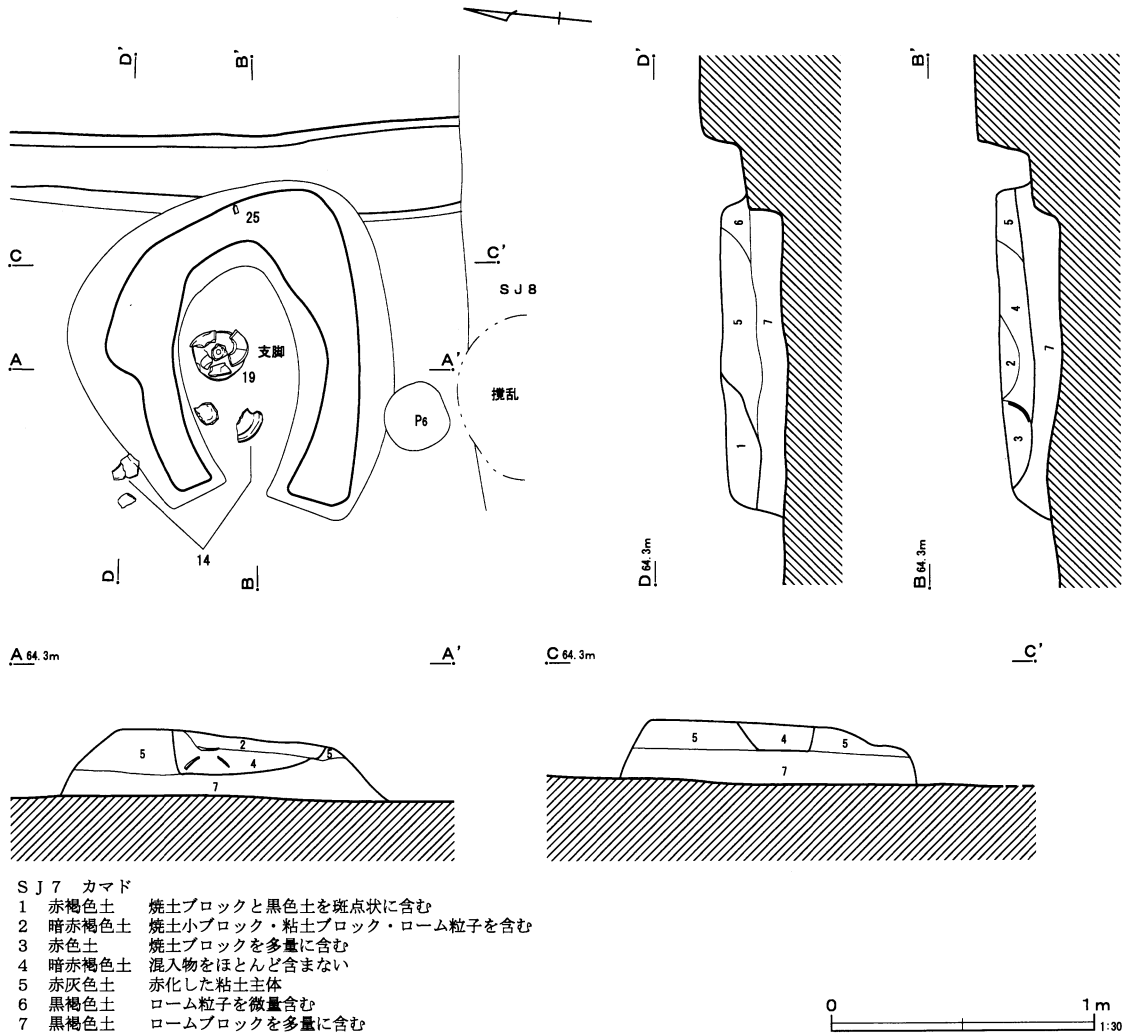
- SJ7b ビット5~8**
- 1 暗黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子を少量含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒子を少量含む
 - 3 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む
 - 4 暗褐色土 ロームブロックを少量含む

- SJ7b ビット9**
- 1 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む
 - 2 暗黒褐色土 混入物をほとんど含まない
 - 3 明暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む

■ 貼床 (7a住埋土)



第162図 第7号住居跡



第163図 第7号住居跡カマド

リッドに位置する。重複する第8号住居跡と第4号土坑に切られていた。また調査の結果、住居跡を相似形に拡張（建て替え）したことが判明した。建て替え前の住居跡を第7 a号住居跡、建て替え後のそれを第7 b号住居跡とした。

第7 b号住居跡の平面形は方形で、規模は長軸長5.25m、短軸長5.00m、床面までの深さは0.26mである。主軸方位はN-85°-Eを指す。

床面は第7 a号住居跡を埋め戻して造られていた（第8・9層）。概ね平坦でカマド前面は硬く踏み固められていたが、壁際は軟弱であった。埋土はロームブロックと黒色土ブロックを多量に含む褐色土が厚く堆積していた。

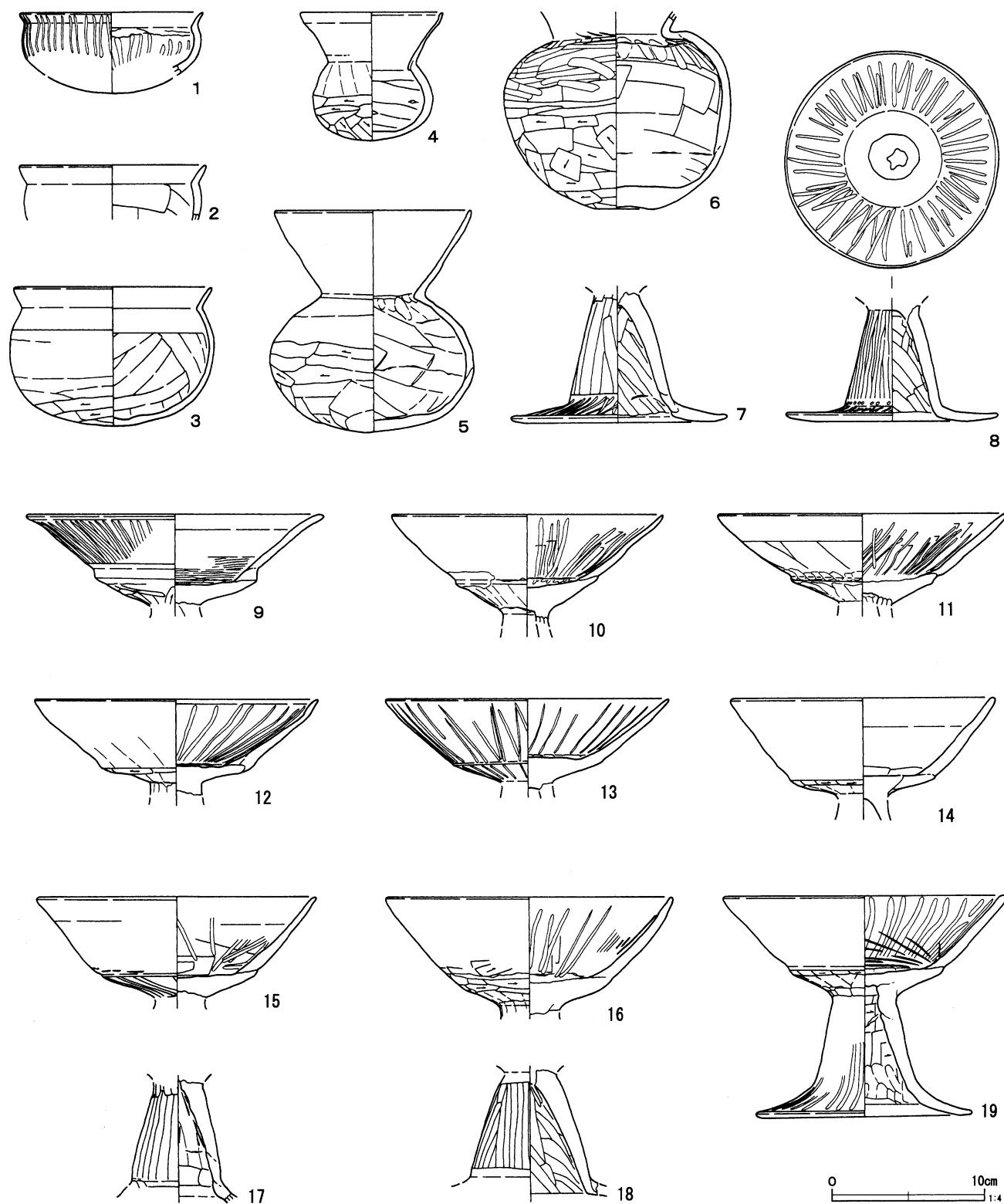
カマドは東壁から約20cm離れて設置されてい

た。第7 a号住居跡埋め戻し土（第7層）をベースにして、長さ約1.26m、幅1.23mの範囲に粘土を馬蹄形に積んで側壁を構築していた。側壁は良く焼けていた。燃烧部は奥行き0.93m、内壁部の幅約0.60m、焚口部の幅は0.24mほどである。燃烧部内部には焼土を多量に含む土が詰まっており、袖部あるいは天井部崩落土に由来するものと考えられる。壁外に延びる煙道は存在しない。また、壁との間に空隙が存在するため、どのような煙出し構造になっていたのかは不明である。

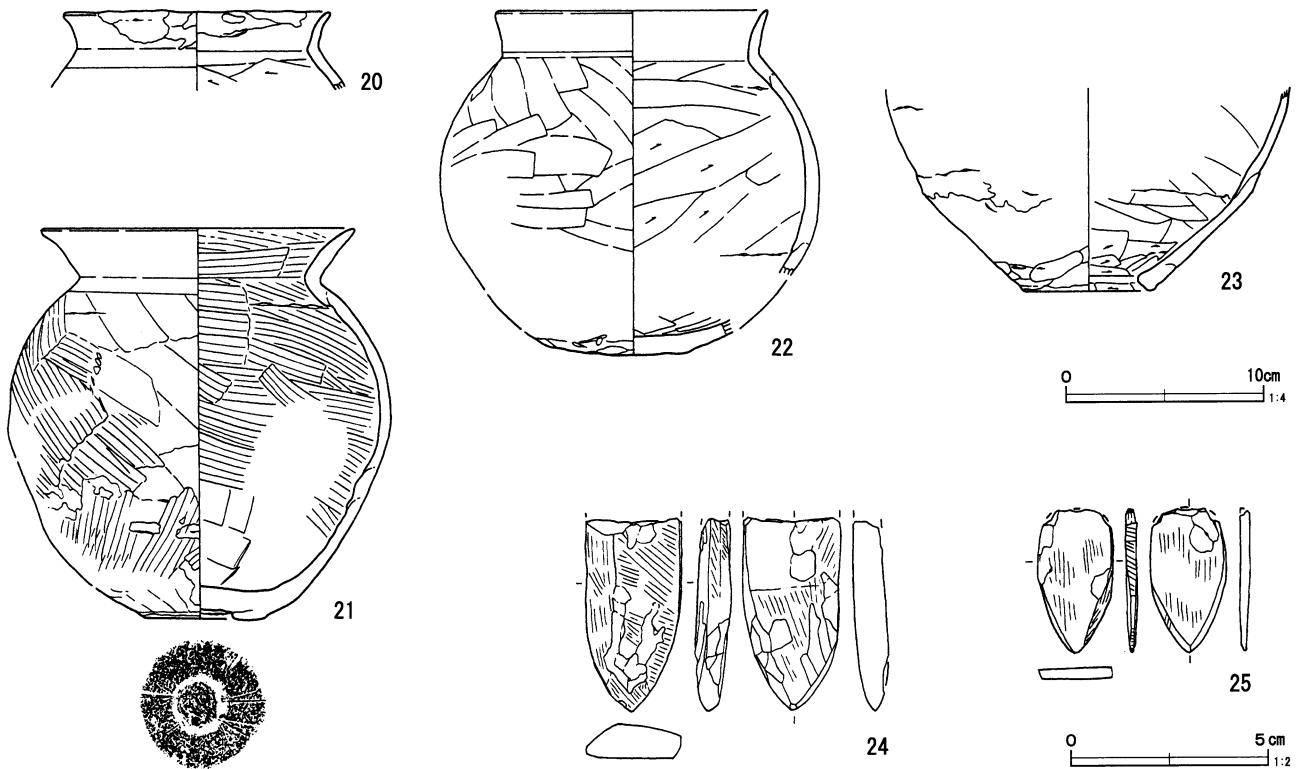
貯蔵穴はカマド右側の南東隅部に位置する。第8号住居跡の貯蔵穴と一部重複しているが、平面円形と推定され、規模は直径0.65m、深さ0.45mである。

ピットは10本検出された。第7 b号住居跡に伴う柱穴はP5～P8と考えたが、P6がカマドに

接することを考えると、P1・P2・P7・P8という組み合わせも考えられる。P9・P10は主



第164図 第7号住居跡出土遺物(1)



第165図 第7号住居跡出土遺物(2)

第55表 第7号住居跡出土遺物観察表(第164・165図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	中央部 床面上23cm	12.0 [3.1]		30	A・B・D・F・G	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	体部内外面ヘラミガキ
2	土師器 塊	カマド右袖 直上	(12.1) [3.6]		25	A・C・F・G	良好 橙2.5YR6/6	内外面器面風化磨耗
3	土師器 鉢	S K 2 際 床面上17cm	12.8 9.1		95	A・B・D・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	体部外面ヘラケズリ
4	土師器 埴	中央部 床面上20cm	(9.2) 8.4	7.8	70	A・B・D・E・F	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部外面下半ヘラケズリ
5	土師器 小型壺	埋土	12.8 14.6	13.4	75	A・B・C・F・J	良好 赤褐2.5YR4/6	胴部外面下半ヘラケズリ
6	土師器 小型壺	P 8 周辺 床面上20cm	[13.0]	14.9 3.5	80	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	胴部外面上半ヘラミガキ
7	土師器 高坏	S J 7 b 北東部 床面上5cm	[8.4]	(14.0)	75	A・B・C・F・G	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	裾部外面ヘラミガキ
8	土師器 高坏	S J 7 b 北壁寄り 床面上9cm	[7.7]	14.0	100	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR4/4	脚部外面ヘラミガキ
9	土師器 高坏	P 3 周辺 床面上18cm	19.2 [5.9]		50	A・C・E・F・K	良好 にぶい褐7.5YR5/4	坏部内外面ヘラミガキ
10	土師器 高坏	S J 7 b 西壁際 床面上12cm	17.7 [7.3]		80	A・B・C・F	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内面ヘラミガキ
11	土師器 高坏	西壁寄り 床面上20cm	18.9 [6.0]		100	A・B・D・F・G	良好 明赤褐5YR5/6	坏部内底面の器面剝離
12	土師器 高坏	P 2 床面上18cm	(18.6) [6.3]		45	A・C・D・E・F	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内底面風化顯著
13	土師器 高坏	中央部 床面上21cm	18.5 [5.9]		70	A・B・F・I・K	良好 にぶい赤褐5YR4/4	坏部内外面ヘラミガキ S J 8 一部 接合
14	土師器 高坏	カマド燃焼部 使用面直上	17.2 [6.7]		90	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐5YR4/4	坏部内面使用による磨耗痕
15	土師器 高坏	北壁寄り 床面上18cm	18.3 [6.6]		75	A・B・D・F・G	良好 橙2.5YR6/6	坏部内面やや雑なヘラミガキ

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
16	土師器高坏	P 2 周辺 床面上25cm	(18.7) [7.7]		50	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	坏部内底面の器面剝離
17	土師器高坏	カマド右袖 直上	[8.0]		90	A・B・E・F・J	良好 赤褐5YR4/6	脚部内面ヘラ先によるナデつけ
18	土師器高坏	中央部 床面上24cm	[8.4]		55	A・B・C・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	裾部の貼付痕明瞭
19	土師器高坏	カマド燃焼部 使用面直上	18.3 14.5	14.3	100	A・B・C・D・F	良好 にぶい橙7.5YR6/4	坏部内面螺旋状のヘラオサエ後、ヘラミガキ
20	土師器小型甕	埋土	(13.3) [4.0]		20	A・C・D・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR6/4	口縁部内外面に補修痕
21	土師器甕	カマド左袖際 床面上20cm	15.7 20.9	19.3 6.2	75	A・B・C・E・F	良好 橙5YR6/6	胴部内外面に粗いハケメ
22	土師器小型甕	カマド左袖周辺 床面上20cm	(13.6) [17.5]	19.2 5.0	50	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐5YR5/4	胴部外面一部スス付着
23	土師器甕	中央部 床面上23cm	[10.3]	(6.7)	15	A・B・C・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	孔部ヘラケズリ
24	石製品 剣形品	P 9 底面直上	長さ4.85cm 幅2.41cm 厚さ0.79cm		重さ14.98g 滑石 研磨：側面斜め No35			
25	石製品 剣形品	カマド	長さ3.61cm 幅1.89cm 厚さ0.26cm		重さ2.93g 滑石 研磨：側面斜め No42			

柱穴にはならないであろう。

第7 a 号住居跡は第7 b 号住居跡内部に入れ子状に入る。規模は長軸長4.62m、短軸長4.56m、深さは0.36mである。

カマドまたは炉跡は検出されなかった。P 1～P 4 が支柱穴となる可能性が高いがP 3～P 6 という組み合わせも考えられる。

壁溝は南壁から西壁にかけての一部に検出された。幅15～24cm、深さ8～12cmである。P 3 から北壁に延びる溝とP 4 から西壁に延びる溝は、間仕切り溝と考えられる。

出土遺物は土師器坏・埵・鉢・埴・高坏・小型壺・小型甕・甕・甗、石製模造品（剣形）がある（第164・165図）。遺物は住居跡全域から出土し、特にカマド周辺と北西隅部に多い傾向が見られた。

カマド内には19の高坏を燃焼部中心よりやや左側、逆位に設置し支脚としていた。焚口付近から14の高坏、右袖に接して2の埵、17の高坏、左袖脇からは21・22の甕が出土した。21は胴部外面に粗いハケメを施す底部が輪台状の平底甕である。さらに馬蹄形の袖部奥からは25の剣形模造品が出土している。カマド前面のP 2・P 4 の周辺から1の坏、12・13・16・18の高坏が出土した。北西隅部に位置するP 8 脇からは6の小型壺、西

壁沿いには4の埴、10・11の高坏が出土。北西隅部からは8・9・15の高坏がまとまって出土した。北東隅部のP 9 底面からは24の剣形模造品が出土した。また、このピットに接する床面から3の鉢が出土している。他に7の高坏も第7 b 号住居跡の床面上からの出土である。

なお、24・25の剣形模造品は2点とも穿孔されておらず、未成品の可能性もある。明確な鋳などの表現も見られないこともその傍証になろう。

時期は器種組成においてで坏・埵類が定量で存在していないことから、夏目遺跡II期に位置づけられる。

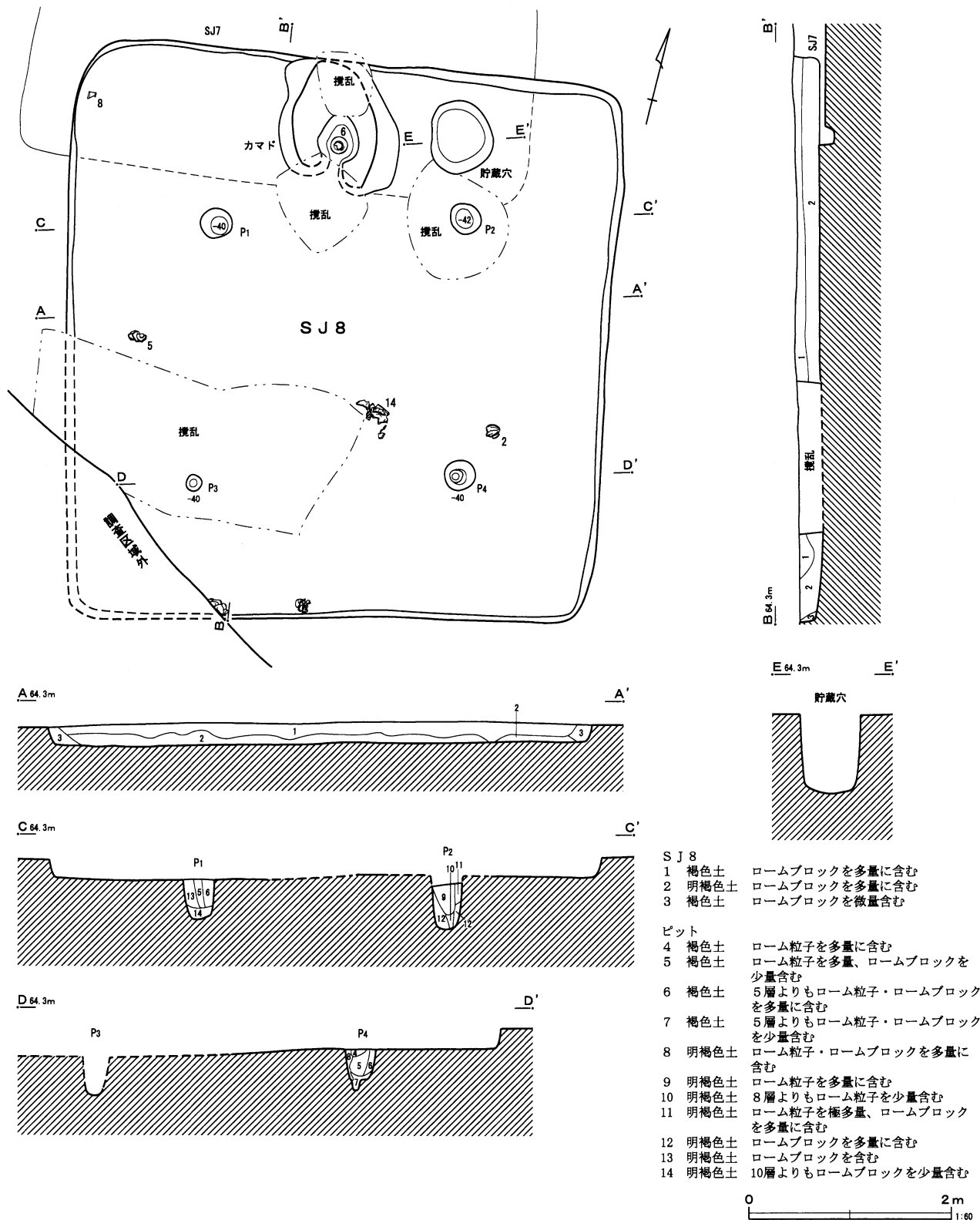
第8号住居跡（第166・167図）

第8号住居跡は調査区南東部のN-18・19、O-19グリッドに位置する。南西隅部は調査区外に延び、一部攪乱を受けていた。重複する第7号住居跡よりも新しいことが確認された。

平面形は方形で、規模は長軸長5.60m、短軸長5.34m、床面までの深さは0.22mである。主軸方位はN-13°-Wを指す。

床面は平坦で、埋土にはロームブロックが多量に含まれていた。

カマドは北壁に設置されていた（第167図）。焚口部と燃焼部奥壁に攪乱があり、特に煙道部の構

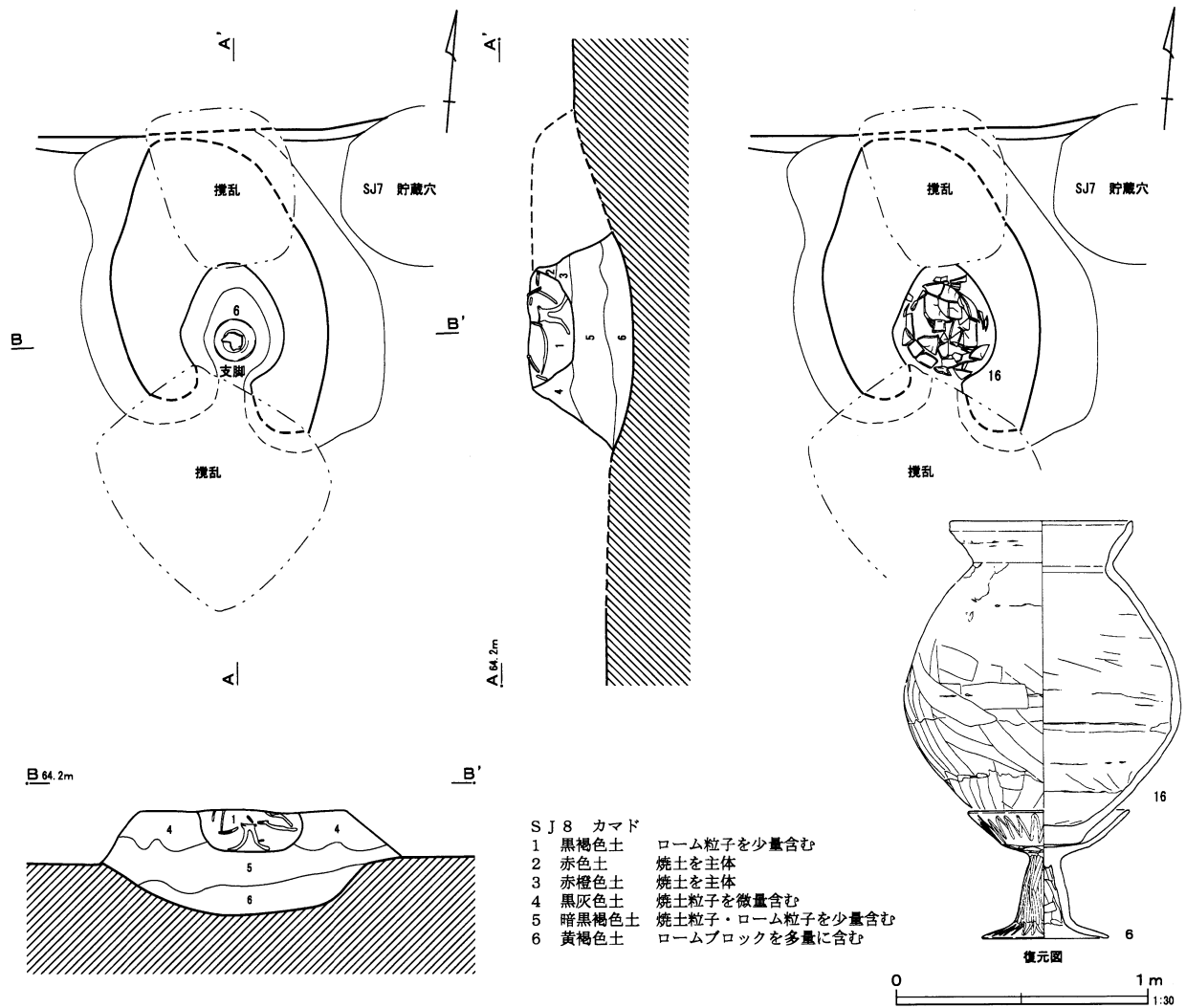


第166図 第8号住居跡

造は明確にできないが、壁外への煙道の切り込みは認められない。

全長は1.32m、幅1.20mである。構造は全体を浅く掘り込んだ(第6層)後、床面よりも10~30

cmほど盛土をする(第5層)。その上に黒灰色土を馬蹄形(円形?)に巡らしたものと考えられる。燃焼部底面(第5層上面)には高坏が正位に置かれた状態で出土し、その上部には土師器壺が散乱



第167図 第8号住居跡カマド

していた。本来高坏を支脚に用い、その上部に壺を設置した状態であったと考えられる。燃焼部には焼土と黒褐色土が堆積していた（第1～3層）が、左右側壁内面の焼け面は明確ではない。

貯蔵穴はカマドの東側に隣接して設けられていた。平面形は円形で、直径0.68×0.61m、深さ0.78mである。

柱穴は4本規則的に配置され、いずれも支柱穴と考えられる。深さは0.40～0.54m。

出土遺物は全体的に少ない。土師器壺・鉢・高坏・壺・甕・ミニチュア土器、焼成粘土塊がある（第168図）。

カマドには、6の高坏を正位に置いて支脚とし、掛口に16の壺が掛けられた状態で出土した。2の模倣坏はP4周辺の床面から出土しており、确实

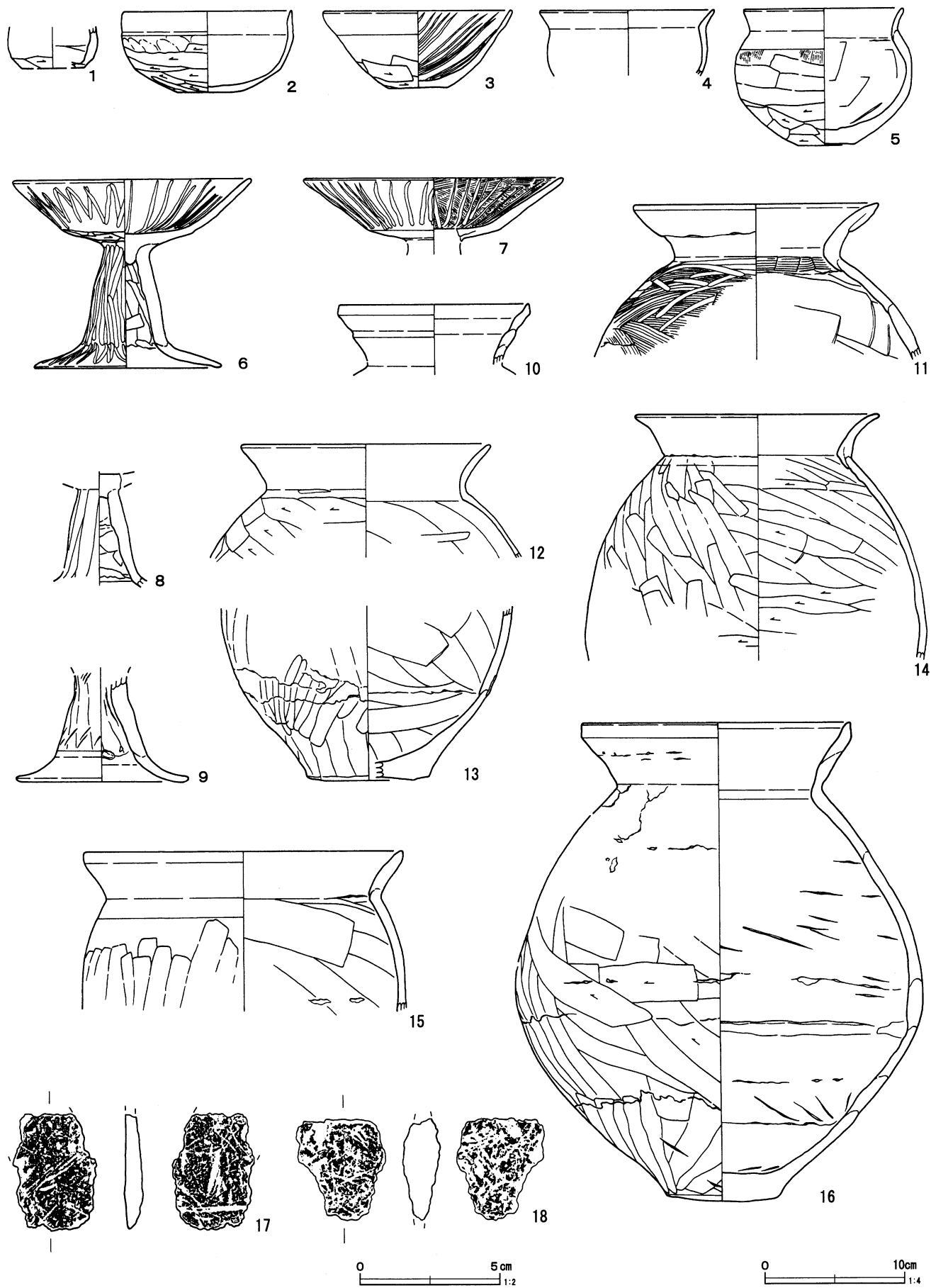
に住居跡に伴う遺物と考えられる。中央部南寄りから14の甕上半部、西壁沿いから5の鉢、北西隅部から8の高坏脚部が出土している。さらに南壁西寄りの壁際から拳大の円礫が5個まとまった状態で置かれていたが、編物石のような棒状を呈するものではなかった。用途・性格については不明である。

時期は典型的な模倣坏出現前の夏目遺跡Ⅲ期に位置づけられる。

第9号住居跡（第169図）

第9号住居跡は調査区南東部のO-19グリッドに位置する。遺構の大半は調査区外にかかり、詳細は不明である。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長3.24m、短軸長1.74m、床面までの深さは0.24m



第168図 第8号住居跡出土遺物

第56表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第168図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 手捏土器	埋土	[3.0]	(4.4)	30	A・D・F・J・K	良好 にぶい褐7.5YR5/4	坩形 ミニチュア土器
2	土師器 坏	P4周辺 床面直上	(12.0) 5.8	4.6	55	A・C・F・I・K	良好 明褐7.5YR5/6	体部外面上位指頭圧痕を残す
3	土師器 鉢	埋土	(13.4) 5.5	(4.4)	30	A・B・C・D・F	良好 明赤褐5YR5/6	内面放射暗文
4	土師器 鉢	埋土	(12.4) [4.7]		20	A・B・C・F・I	普通 橙5YR6/6	器面全体に風化顕著
5	土師器 鉢	西部 床面上14cm	11.3 9.9	12.7 3.9	60	A・B・F・G・J	良好 赤褐5YR4/6	SJ7一部接合
6	土師器 高坏	カマド燃焼部 使用面直上	(16.6) 13.5	13.3	70	A・B・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内外面及び脚部外面に入念にヘラミガキを施す
7	土師器 高坏	埋土	(18.2) [4.5]		30	A・B・D・F・J	良好 暗赤褐5YR3/6	坏部内外面ヘラミガキ
8	土師器 高坏	北西部 床面上17cm	[7.9]		85	A・B・C・F・J	良好 暗赤褐5YR3/3	脚部外面ナデミガキ
9	土師器 高坏	埋土	[7.5]	(12.0)	25	A・B・E・F・J	良好 橙7.5YR6/6	脚部外面ナデ
10	土師器 壺	埋土	(13.4) [4.3]		25	A・B・F・I・J	良好 橙2.5YR6/8	二重口縁壺 胎土に赤色粒子を多く含む
11	土師器 壺	埋土	17.3 [11.1]	(23.2)	35	A・B・D・F・G	良好 橙5YR6/6	複合口縁壺 胴部外面ハケメ
12	土師器 甕	埋土	(17.6) [8.1]		25	A・B・C・F・I	良好 にぶい褐7.5YR5/4	口縁部外面一部スス附着
13	土師器 甕	埋土	[12.3]	(20.8) (8.8)	25	A・B・D・F・G	普通 橙5YR6/6	胴部下半外面スス附着 補修痕あり
14	土師器 甕	中央部 床面上9cm	(17.0) [17.5]	(24.3)	30	A・B・C・E・F	良好 にぶい褐7.5YR5/4	胴部外面中位にヘラケズリ
15	土師器 甕	埋土	(22.5) [9.4]	(23.2)	25	A・C・E・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	甕の可能性も残る
16	土師器 壺	カマド燃焼部 使用面上5cm	19.0 34.1	29.1 8.0	75	A・B・D・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	肩部外面に補修痕がある
17	土製品 焼成粘土塊	貯蔵穴 埋土	長さ4.1cm 幅3.0cm 厚さ0.6cm 重さ7.5g			A・D・F	良好 黒褐10YR3/1	植物繊維の圧痕を残す 胎土に赤色粒子・角閃石を含む
18	土製品 焼成粘土塊	埋土	長さ3.6cm 幅3.1cm 厚さ0.8cm 重さ12.0g			A・G・J 良好	にぶい橙7.5YR7/4	植物繊維の圧痕を残す 胎土に白色粒子・角閃石を含む

である。主軸方位はN-32°-Wを指す。

床面は緩やかな凹凸がある。埋土はロームを少量含む黒褐色土を基調としており、自然堆積に近い印象を受ける。

調査された範囲からは炉跡またはカマドは検出されなかった。

貯蔵穴は北東隅部に位置する。不整円形で、規模は径0.62×0.52m、深さ0.45mである。

柱穴は1本検出された(P1)。遺構に伴うが、主柱穴となるか否かは不明である。

壁溝は全周すると思われる。深さ15cm前後。

出土遺物は少ない。土師器坩・平底鉢・鉢・甕がある(第170図)。1の坩は貯蔵穴の底面から少し浮いた状態で出土した。また、北壁際から3の鉢、P1の脇から2の平底鉢が出土した。このほか図示できなかったが土師器の大型壺の破片が床

面からやや浮いた状態で出土している。

時期は夏目遺跡II期に位置づけられる。

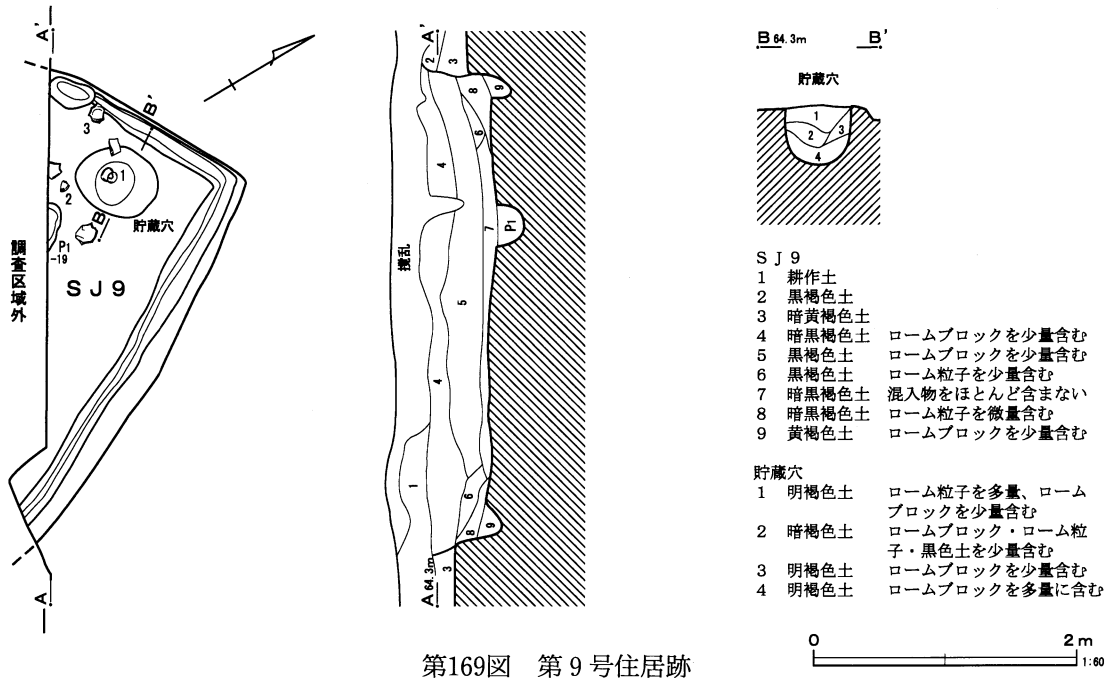
第10号住居跡 (第171図)

第10号住居跡は調査区南東部のN-18グリッドに位置する。遺構の大半は調査区外にかかり、北壁部は攪乱を受けており、遺存状態は良くない。

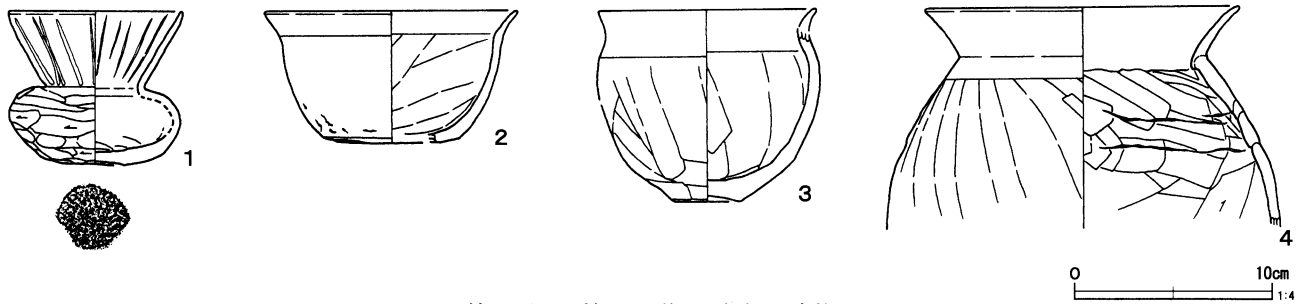
平面形は方形系と推定され、残存規模は東辺3.36m、北辺0.42m、床面までの深さは0.25mである。主軸方位はN-89°-Eを指す。

床面はローム混じりの暗褐色土で貼床されていた。攪乱の影響を受け、堆積状況は不明確である。

カマドは東壁の壁際に設置されていた。底面を浅く掘り窪めた上にロームブロック混じりの褐色土を盛土しベース土を構築していた。その上に皿状の堆積が観察される(第4層)が、焼土は最上層にレンズ状に堆積しており、火床面は第1層下



第169図 第9号住居跡



第170図 第9号住居跡出土遺物

第57表 第9号住居跡出土遺物観察表 (第170図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 埴	貯蔵穴 底面上6cm	8.6 7.8	8.7 3.2	100	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	底面に木目様圧痕
2	土師器 平底鉢	貯蔵穴周辺 床面上6cm	(12.7) [6.7]	(7.0)	30	A・B・D・F・J	良好 にぶい赤褐5YR4/4	体部外面ナデ
3	土師器 鉢	北壁周溝際 床面上10cm	[8.8]	(11.3) 3.2	75	A・B・E・F・J	良好 暗赤褐5YR3/6	体部外面ナデ
4	土師器 甕	埋土	(15.8) [11.2]	(20.0)	25	A・B・D・F・G	良好 赤褐5YR4/6	胴部外面一部スス付着

面とみるべきであろうか。側壁や天井部の構造はよく分からない。

柱穴は1本検出されたが深さ0.12mと浅く、主柱穴と想定することは難しい。

床面の貼床を除去したところ、床下土坑が1基検出された。円形と推定され、規模は直径1.02m、深さ0.15m、ローム粒子を少量含む黒褐色土が充填されていた。

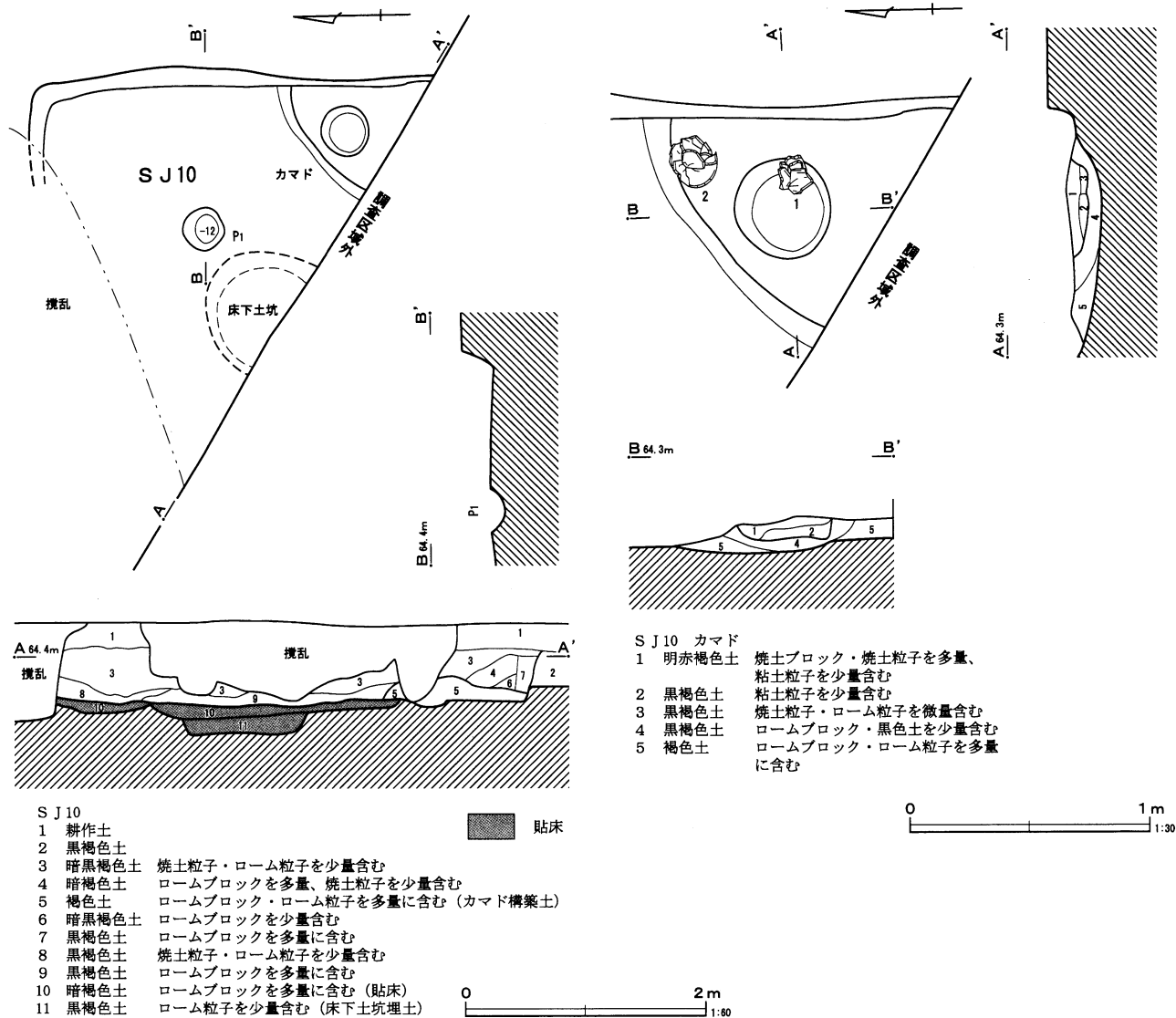
出土遺物は少なく、土師器小型甕と小型壺があ

る(第172図)。いずれも東壁に設けられたカマドから出土している。燃焼部から1の小型甕、左袖の上面から2の小型壺が出土した。

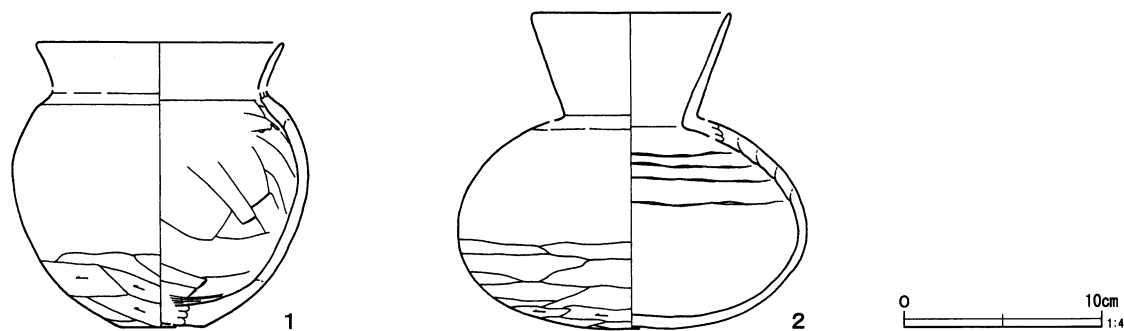
時期は不明確であるが、夏目遺跡II期と考えておきたい。

第11号住居跡 (第173～175図)

第11号住居跡は調査区中央付近のL・M-17グリッドに位置する。南北方向に平行して延びる第1～3号溝跡と第43号土坑の攪乱を受けて遺存



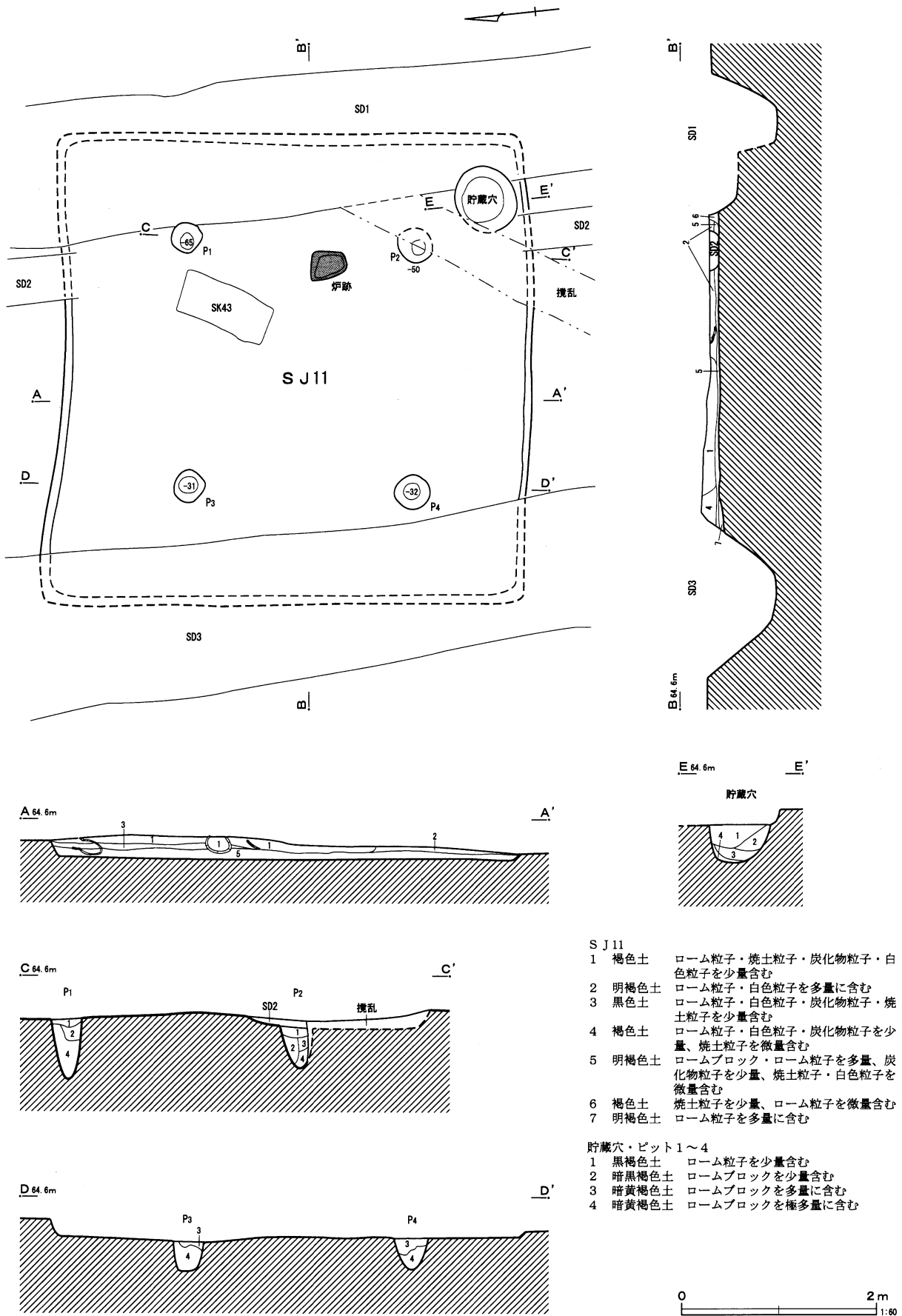
第171図 第10号住居跡・カマド



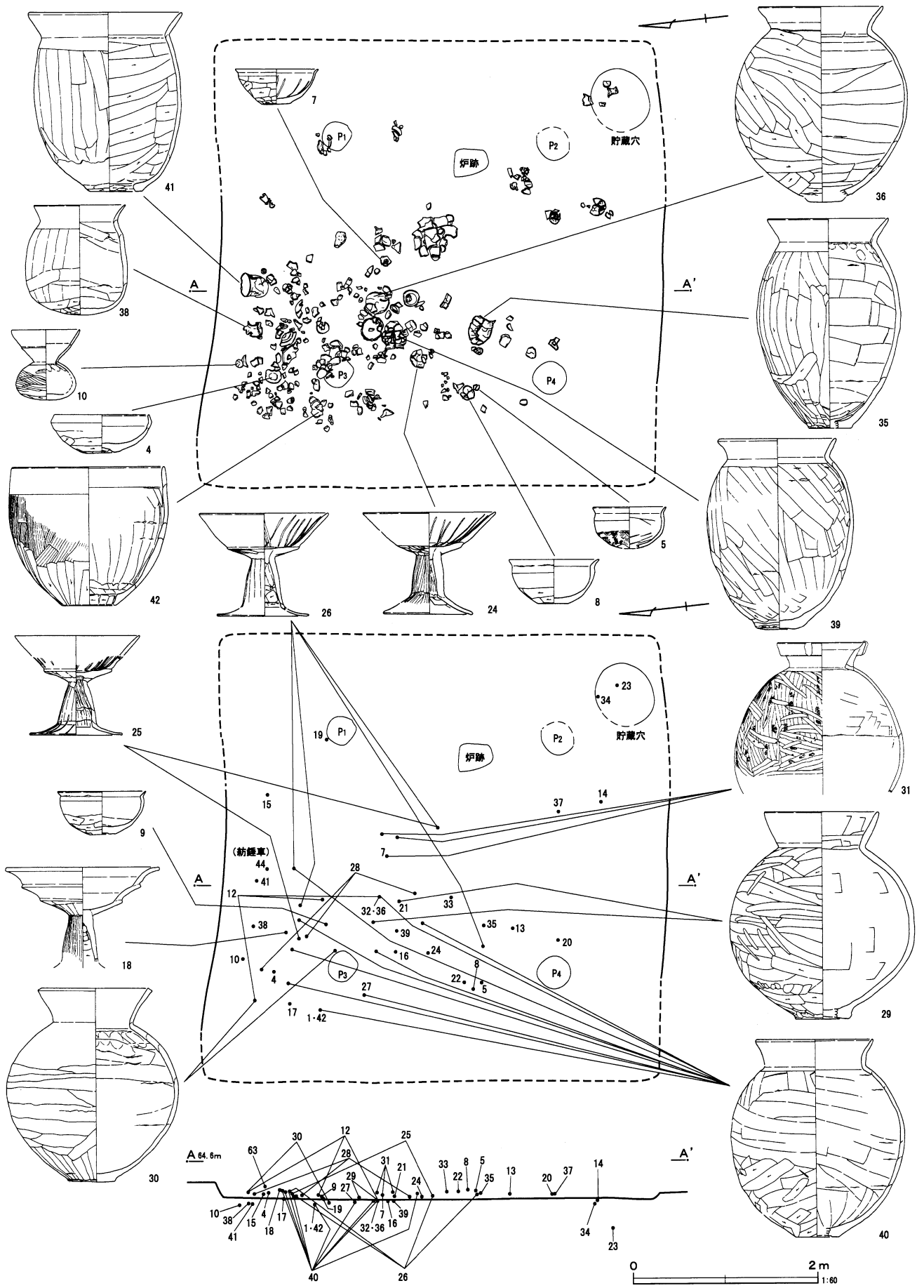
第172図 第10号住居跡出土遺物

第58表 第10号住居跡出土遺物観察表 (第172図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 小型甕	カマド 底面上16cm	[12.0]	(4.2)	30	A・B・D・F・J	良好 赤褐5YR4/6	底部内面ミガキ
2	土師器 小型壺	カマド際 床面上6cm	[10.5]	17.7	85	A・D・E・F・J	良好 赤褐5YR4/6	胴部外面風化顕著



第173図 第11号住居跡



第174图 第11号住居跡遺物出土状况

状態は良くない。

平面形は方形系と推定され、規模は南北長4.92m、東西残存長は3.90m以上となる。床面までの深さは0.18mである。主軸方位は南壁を基準に採ればN-97-Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土にはロームブロックや焼土・炭化物粒子の混入が目立ち、人為的な関与が想定される。

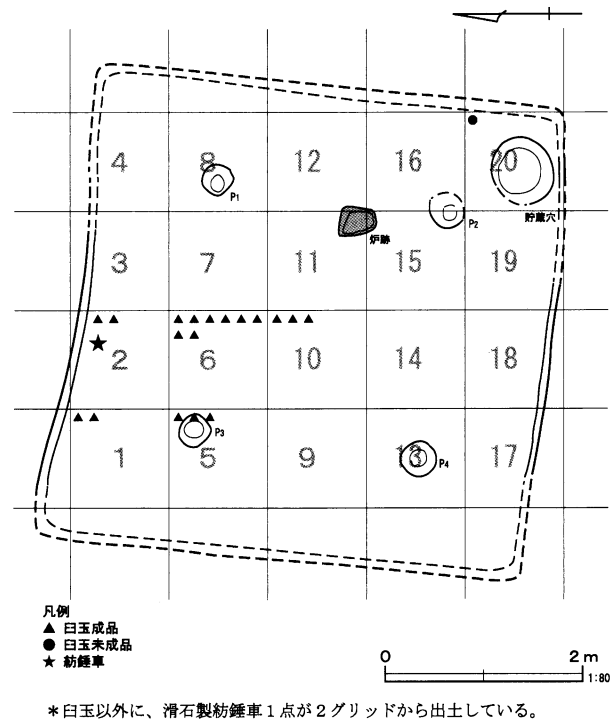
炉跡はP1とP2を結んだラインのやや内側（西側）に設けられていた。不整形の地床炉で長径0.36m、短径0.28m。底面は緩やかに窪み被熱していた。カマドは検出されなかったが、貯蔵穴の位置関係などから第1号溝跡に削平された東壁に存在した可能性は十分に想定される。

貯蔵穴は南東隅部に位置する。円形で、規模は径0.68×0.60m、深さ0.40mである。

柱穴は4本規則的に配置されていた。深さは0.31~0.65mで、いずれも支柱穴と考えられる。土層観察によれば、柱痕はなく、抜き取られた可能性が高い。

攪乱を受けているにも関わらず、出土遺物は極めて多い。住居跡中央からやや北壁に寄った付近を中心にまとまって出土している。床面または覆土下層から出土したものが多く、住居廃絶後、間もなく一括廃棄されたものであろう。土師器坏・塊・埴・高坏・壺・甕・小型甕・甑・ミニチュア土器、鉄製品（錐か?）、滑石製紡錘車、滑石製白玉などがある（第176~179図）。

1は鉢もしくは埴の胴部であろう。2は舟形のミニチュア土器と考えられる。埋土中からの出土のため、出土位置・状態については不明である。周縁部を欠損するため、木の葉形などになる可能性は残る。内面は丁寧にヘラミガキが施される。3は北武蔵型坏で、8世紀前半。おそらく溝跡からの混入資料であろう。坏・塊類では、住居跡中央部から7、P3周辺から4・9、P3・4の間から5・8がそれぞれ出土している。4の口縁

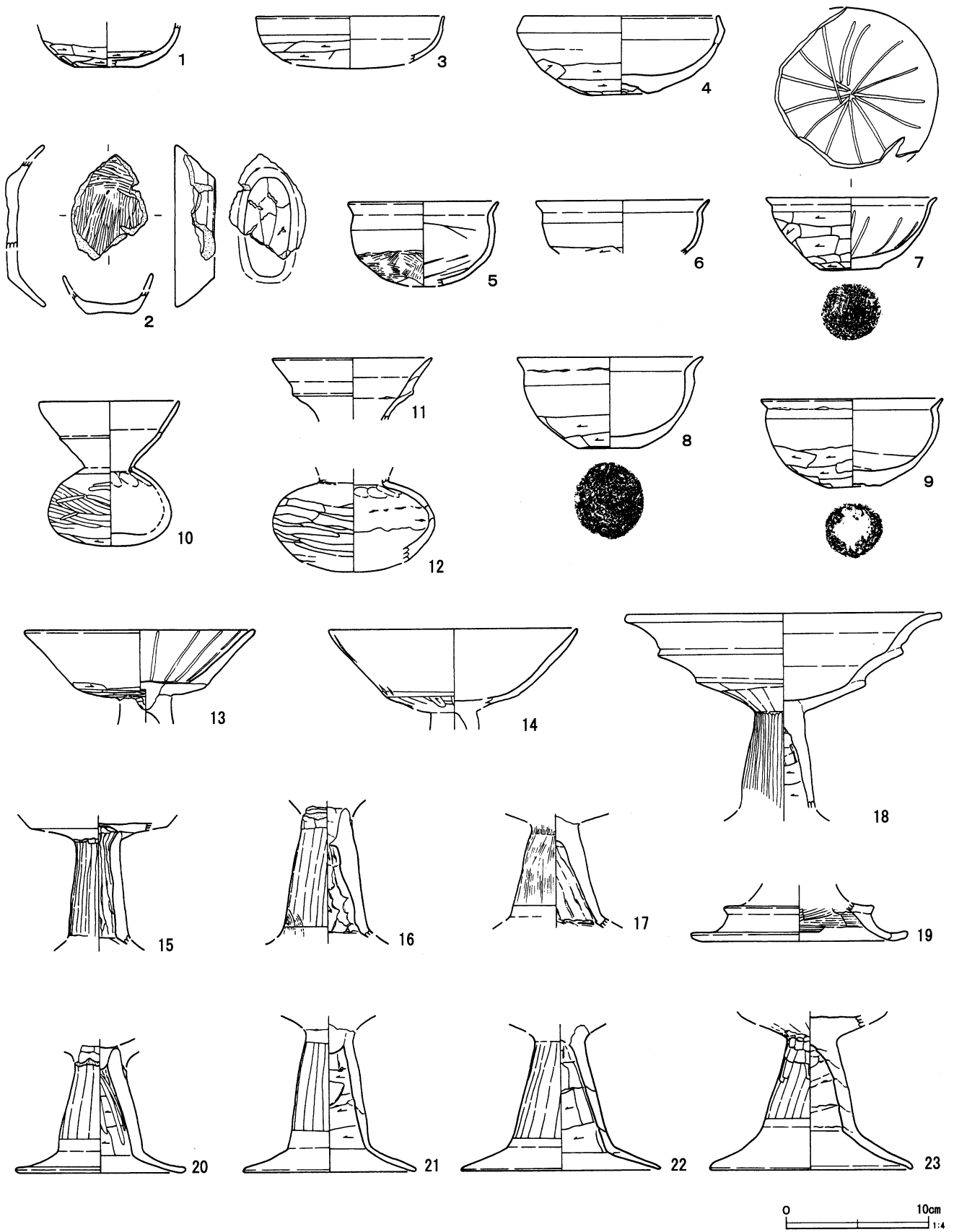


第175図 第11号住居跡石製模造品分布図

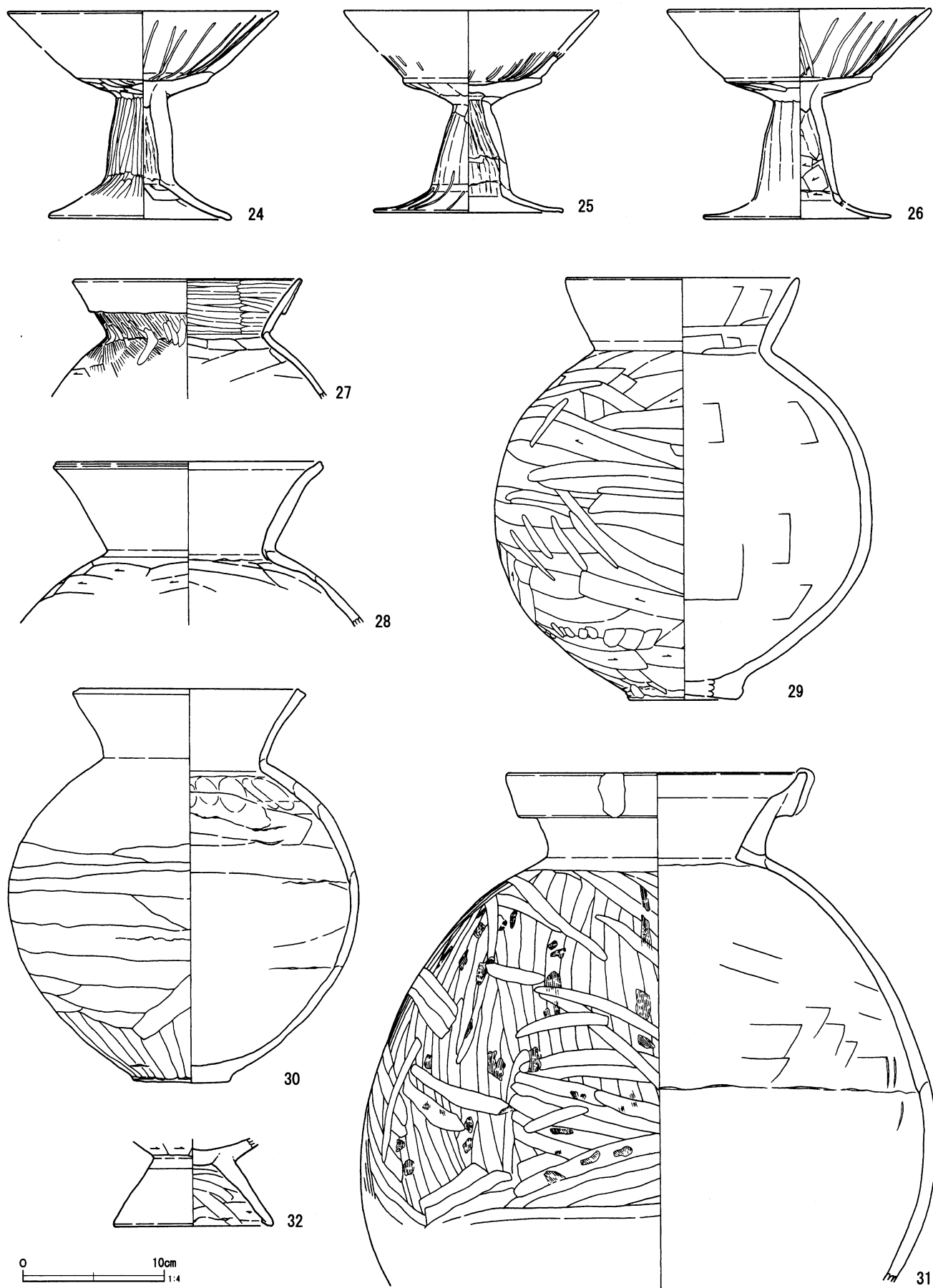
部が短く内屈する坏、バリエーションをもつ内斜口縁の塊が見られる。高坏の大半は破片の状態で出土し、離れたものが接合した例が目立つ。完形に近い状態で出土したものには、P3・P4の中間から24が出土しているほか、25・26は中央部を中心に接合している。18の有段口縁高坏はP3と北壁の間から出土している。これ以外では貯蔵穴内から23の高坏脚部が出土した。

10の埴は北壁寄りの床面から出土した。完形品で、口縁部に段を有し、須恵器の隄模倣である。同様の隄模倣の口縁部形態の埴が埋土中から出土している(11)。甑は2点出土している。41の大型甑は北壁中央から横倒しになった状態で出土し、東脇には44の石製紡錘車、西脇には38の小型甕が置かれていた。42の甑はP3の西側から1の鉢とともに出土した。

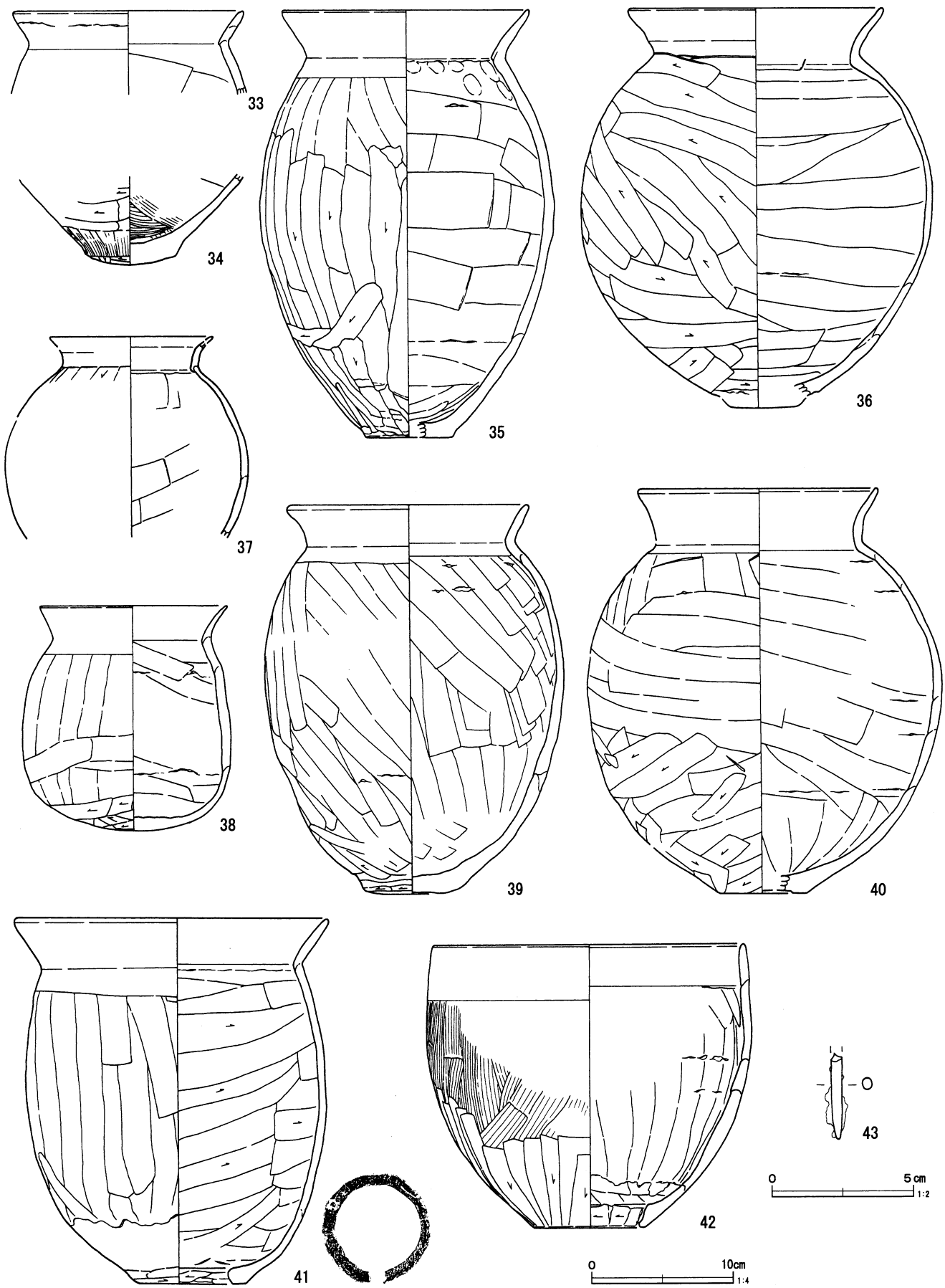
壺・甕類は、出土個体数が多い。中央部の炉跡脇から31の複合口縁の大型壺が床面から出土した。大型壺は複合口縁部の外面に単位は不明であるが、棒状浮文が貼付されていたことを示す剝離



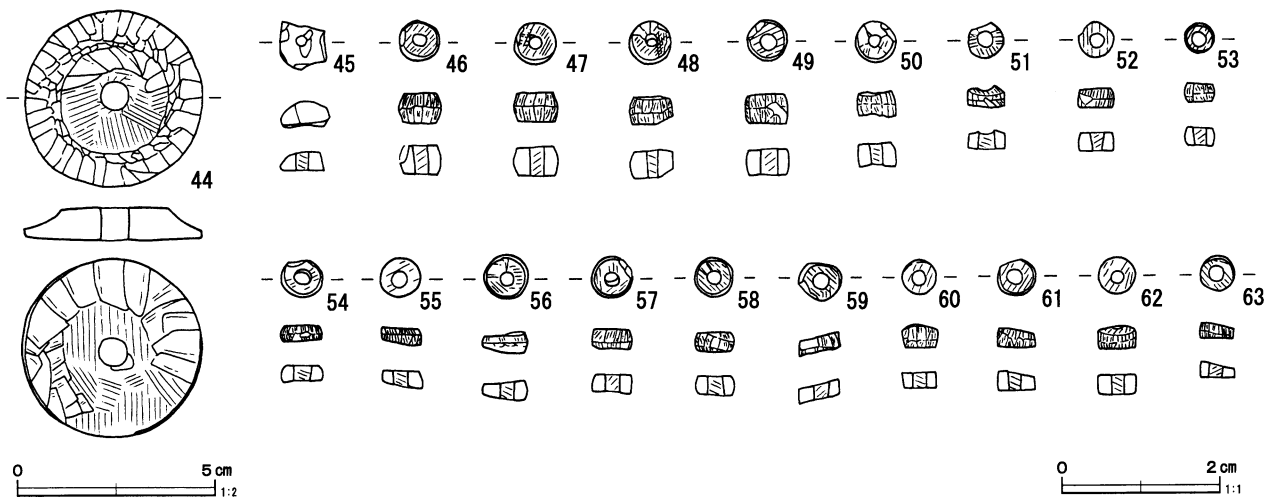
第176图 第11号住居跡出土遺物(1)



第177図 第11号住居跡出土遺物（2）



第178図 第11号住居跡出土遺物 (3)



第179図 第11号住居跡出土遺物（4）

痕が認められ、注意される。また、P3の南東脇から29の壺と36・39の甕が並んだ状態で置かれていた。そのやや南には35の長胴甕、P3東脇からは30の広口壺が出土している。完形に近い状態で置かれたもの以外に40の甕のようにP3周辺に散在するものも認められた。この他に32の台付甕の脚台部が埋土から出土した。端部を内側に僅かに折り返えしているが、S字甕とは異なる。厚手のしっかりした作りである。

44の石製紡錘車は北壁直下から出土した。断面低台形を呈し、側面は匙面を形成する。石製模造品の白玉はほとんどが製品で、住居跡中央からやや北西部にかけて多く出土する傾向が認められた（第175図）。計19点が出土した。特に第175図6区から8点が出土し、集中度が高い。白玉は側面中央に稜線または中膨らみする製品が主体を占める。白玉の未成品は貯蔵穴周辺の20区から45の1点のみが出土した。製作工程3段階とした穿孔後端面研磨段階のものである。鉄製品は断面円形で先端部が尖る。錐の可能性はあるが、埋土中から出土しており、伴うか否かも不明である。

土師器坏類を定量で含み、甕は長胴化が始まっている（35・39）ことなどから、夏目遺跡Ⅲ期と考えられる。

第12号住居跡（第180・181図）

第12号住居跡は調査区中央からやや北西域のK-15・16グリッドに位置する。第5号溝跡と第44号土坑の攪乱を受けていた。

平面形は長方形で、規模は長軸長4.32m、短軸長3.74m、床面までの深さは0.40mである。主軸方位はN-46°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土にはローム粒子とロームブロックの混入が目立ち、すべて自然堆積とは言い難い面がある。カマド西側の床面には黄褐色粘土（1.14×0.78m、厚さ0.15cm）が堆積していた。カマド袖に近い部分では焼土混じりの黒色土の上に被っており、二次的な堆積環境が想定されるが、カマド由来であるのか、それ以外の性格の粘土溜まりなのか明らかにできなかった。

カマドは北東壁に設置されていた。全長1.05m、幅0.90m、燃焼部は壁を0.25m程切り込んで構築されていた。燃焼部幅は約0.35m、袖（側壁）は明黄灰色粘土を積み上げて構築されていた。左右袖部先端には土師器長甕を逆位に埋置して、芯材としていた。埋土は第5層に焼土ブロックが多量に含まれ、天井部内壁の崩落土の可能性が高い。火床面は第6層中、または第6層下面と思われる。

貯蔵穴はカマド東脇のコーナー部に位置する。

第59表 第11号住居跡出土遺物観察表 (第176~179図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 鉢か	北西部 床面上7cm	[3.2]	4.3	60	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	内面ナデ調整が丁寧なことから鉢・ 碗類の可能性が高い
2	土師器 舟形土器	埋土	[2.2]	(7.0) ×3.3	45	A・B・C・G・J	良好 橙5YR6/8	底部平底 内面丁寧なヘラミガキ 本庄市九反田遺跡1号溝から類例出土
3	土師器 坏	埋土	(13.0) [3.3]		20	A・B・C・F・J	不良 橙5YR6/8	北武蔵型坏 溝からの混入か
4	土師器 坏	北西部 床面上16cm	13.5 5.6	4.0	95	A・B・C・F・K	良好 明赤褐2.5YR5/6	胎土中に赤色粒子(径2~3mm大)を 多く含む
5	土師器 碗	西部 床面上23cm	(10.4) [5.9]		25	A・B・C・F・J	良好 明褐7.5YR5/6	体部外面弱いハケメ
6	土師器 坏	埋土	(12.1) [3.8]		25	A・B・C・F・J	良好 褐7.5YR4/3	内面風化のため器面剥離
7	土師器 碗	中央部 床面上9cm	(11.8) 5.1	4.3	60	A・B・E・F	良好 橙7.5YR7/6	内面放射暗文
8	土師器 碗	北部 床面上11cm	13.0 6.4	4.4	95	A・B・C・F・K	良好 橙7.5YR6/6	体部外面下半ヘラケズリ
9	土師器 碗	西部 床面上24cm	12.7 6.3	3.7	70	A・B・F・I・K	良好 明赤褐2.5YR5/6	胎土中に小礫の混入が目立つ
10	土師器 埴	北部 床面上3cm	9.7 10.2	8.7	100	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	須恵器腿模倣
11	土師器 埴	埋土	(11.0) [4.5]		25	A・B・C・F・G	良好 橙7.5YR6/6	須恵器腿模倣
12	土師器 埴	北部 床面上9cm	[6.0]	(11.3)	40	A・B・D・F・J	良好 にぶい橙7.5YR6/4	胴部外面ヘラミガキ
13	土師器 高坏	中央部 床面上14cm	(16.0) [5.5]		45	A・B・C・F・K	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部ホゾ接合
14	土師器 高坏	南部 床面上11cm	17.3 [5.5]		95	A・B・C・E・F	良好 橙7.5YR6/6	口縁部外面にヘラキズあり
15	土師器 高坏	北部 床面上20cm	[8.4]		80	A・B・C・F・J	良好 にぶい橙7.5YR6/4	坏部接合部明瞭
16	土師器 高坏	中央部西寄り 床面上10cm	[9.2]		脚部	A・B・E・F	良好 橙5YR6/6	坏部剥落痕明瞭
17	土師器 高坏	北西部 床面上12cm	[7.8]		脚部	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	柱状部外面ハケ調整後、ナデ
18	土師器 高坏	北部 床面上12cm	22.0 [13.6]		55	A・C・E・F・J	良好 橙5YR6/6	有段高坏
19	土師器 高坏	P1際 床面上13cm	[2.6]	(15.3)	40	A・B・C・E・J	良好 にぶい褐7.5YR5/4	有段脚高坏
20	土師器 高坏	P4周辺 床面上14cm	[8.8]	(12.0)	80	A・B・C・F・I	良好 にぶい黄橙10YR6/3	坏部のホゾ状の接合痕明瞭
21	土師器 高坏	中央部 床面上9cm	[10.3]	12.1	90	A・B・C・F・J	普通 橙5YR6/8	柱状部内面ヘラケズリ
22	土師器 高坏	西部 床面上22cm	[10.1]	(14.0)	45	A・B・C・F・J	良好 橙5YR6/6	柱状部内面ヘラケズリ
23	土師器 高坏	貯蔵穴 底面上26cm	[10.7]	(14.1)	75	A・B・C・F・J	良好 にぶい橙7.5YR6/4	柱状部内面ナデ調整
24	土師器 高坏	中央部西寄り 床面上11cm	(18.9) 14.8	(12.9)	75	B・C・F・H	良好 明赤褐5YR5/6	坏部内面ヘラミガキ
25	土師器 高坏	中央部 床面上12cm	[11.4]	(13.3)	80	A・B・C・D・J	良好 橙5YR6/8	柱状部内面絞り目顕著
26	土師器 高坏	中央部 床面上12cm	18.4 [14.1]		85	A・C・E・G・J	良好 橙5YR6/6	坏部内面ヘラミガキ
27	土師器 壺	西部 床面上10cm	15.8 [8.4]		75	A・B・D・F・J	良好 赤褐2.5YR4/6	複合口縁 粘土帯貼付明瞭
28	土師器 広口壺	中央部 床面上10cm	18.6 [11.5]		75	A・B・C・F・J	良好 にぶい黄橙10YR7/6	口縁部ヨコナデ
29	土師器 壺	中央部 床面上9cm	16.2 29.9	26.6 7.9	45	A・B・C・F・J	良好 橙5YR6/6	S D 3 一部接合
30	土師器 広口壺	P3際 床面上5cm	15.4 27.8	24.7 6.7	70	A・B・F・G・K	良好 橙5YR6/8	胴部外面ナデ
31	土師器 大型壺	中央部 床面上11cm	(21.0) [36.2]	(40.7)	60	A・B・F・G・J	良好 にぶい黄橙10YR5/4	口縁部外面浮文剥落痕あり
32	土師器 台付甕	中央部 床面上8cm	[6.2]	11.2	脚部	B・C・E・I・J	良好 橙7.5YR7/6	内底面胎土中に砂粒を多く含む
33	土師器 小型甕	中央部 床面上17cm	(16.0) [5.9]		25	A・B・C・F・J	普通 橙5YR6/6	口唇部内側弱い内ソギ
34	土師器 甕	貯蔵穴際 床面上14cm	[6.3]	6.4	70	A・B・C・F・K	良好 橙5YR6/6	胴部外面ハケメ

番号	種別	出土位置	口径高	最大直径	残存	胎土	焼成色調	備考	
35	土師器甕	中央部 床面上12cm	17.2 30.2	(20.7) (6.1)	45	A・B・E・F・J	良好 赤褐2.5YR4/6	胴部外面一部スス附着	
36	土師器甕	中央部 床面上 8 cm	17.5 27.5	24.7	60	C・F・G・I・K	良好 にぶい橙5YR6/4	胎土に片岩などの小礫を多く含む	
37	土師器 小型甕	中央部南寄り 床面上17cm	[13.8]	(17.1)	40	B・C・E・J・K	普通 赤褐2.5YR4/8	緻密な胎土 丁寧な調整	
38	土師器 小型甕	北部 床面上 5 cm	(13.1) 15.8	14.6	90	A・B・F・J・K	普通 橙5YR6/6	胴部中位外面被熱により器面が荒れる	
39	土師器 甕	中央部 床面上 7 cm	16.6 27.3	21.2 7.0	90	A・B・C・F・K	良好 赤褐5YR4/6	胴部下半の接合単位明瞭	
40	土師器 甕	北部 床面上17cm	(16.6) [28.5]	(25.0) 6.0	65	A・B・C・F・K	良好 赤褐5YR4/6	胴部外面スス附着	
41	土師器 甕	北部 床面直上	21.8 25.9	21.0 7.5	90	A・B・F・G・K	良好 橙5YR6/6	胴部内面ヘラケズリ	
42	土師器 甕	西部 床面上 7 cm	(21.8) 19.9	(22.9) 8.0	45	A・B・C・E・F	良好 にぶい赤褐5YR4/4	胴部外面粗いハケメ	
43	鉄製品 錐か	埋土	長さ3.0cm 径0.3cm 重さ1.2g 断面円形 先端部は尖る						
44	石製品 紡錘車	北部 床面上 6 cm	長さ4.54cm 幅4.50cm 厚さ0.87cm 孔径(上)0.70(下)0.65cm 重さ24.77g 滑石 研磨：上下面 研磨と削り No.32						

第60表 第11号住居跡出土白玉未成品観察表 (第179図)

番号	種類	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石材	段階	研磨	備考
45	白玉未成品	貯蔵穴	0.59	0.59	0.24	0.11	0.13	滑石	3	上面	粗い研磨

第61表 第11号住居跡出土白玉観察表 (第179図)

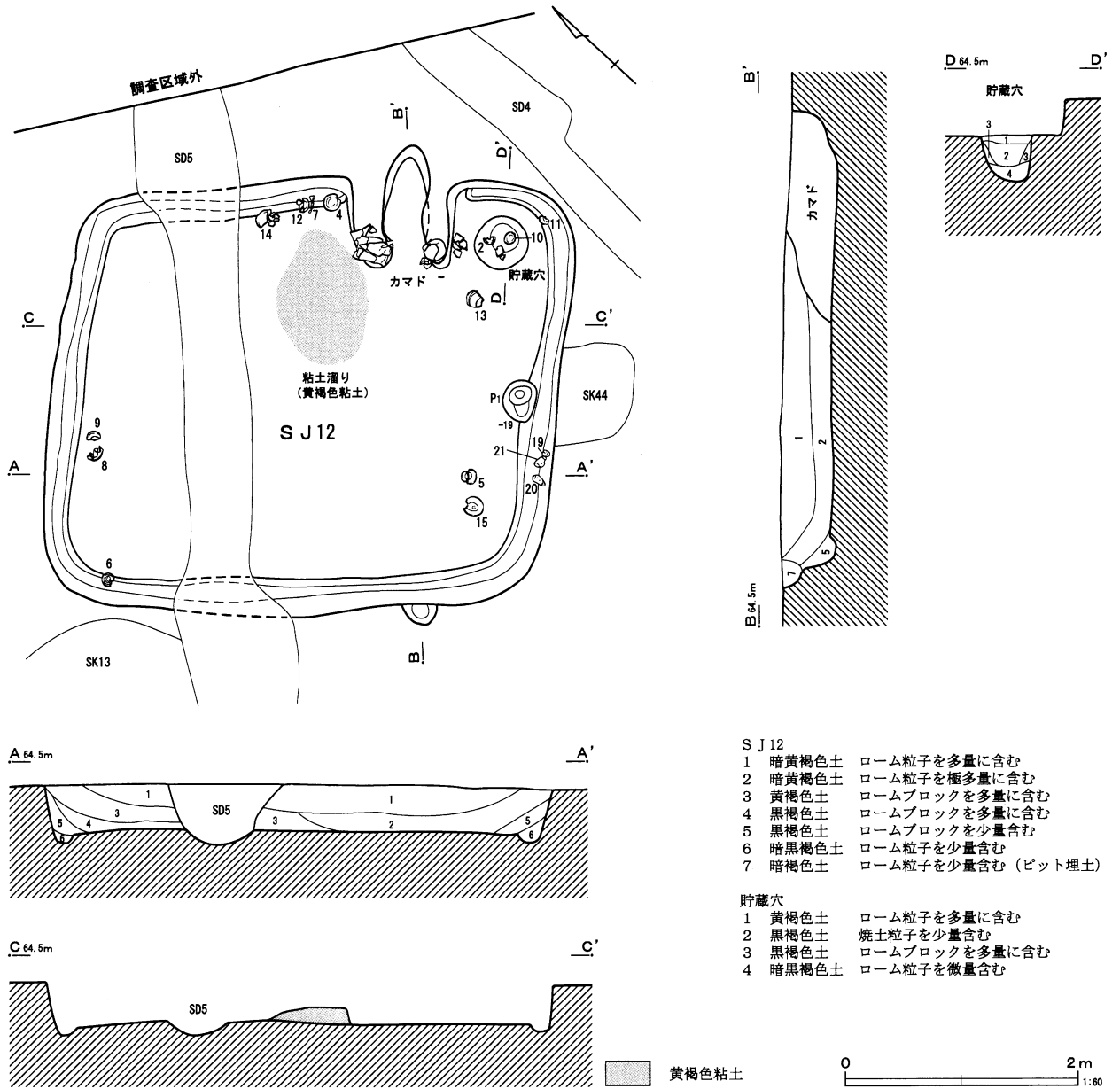
番号	種類	出土位置	最大径(cm)	上面径(cm)	下面径(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石材	段階	研磨	外形
46	白玉	6区	0.52	0.48	0.48	0.36	0.15	0.16	滑石	4	上下側面	中央に稜
47	白玉	6区	0.53	0.48	0.48	0.36	0.16	0.18	滑石	4	上下側面	中央に稜
48	白玉	5区	0.53	0.51	0.50	0.35	0.11	0.17	滑石	4	上下側面	中央に稜
49	白玉	10区	0.53	0.48	0.48	0.36	0.20	0.14	滑石	4	上下側面	中央に稜
50	白玉	2区	0.53	0.49	0.49	0.31	0.13	0.12	滑石	4	上下側面	中膨れ
51	白玉	2区	0.47	0.42	0.45	0.22	0.15	0.06	滑石	4	上下側面	中膨れ
52	白玉	6区	0.45	0.39	0.41	0.27	0.18	0.09	滑石	4	上下側面	中膨れ
53	白玉	1区	0.38	0.32	0.34	0.26	0.15	0.05	滑石	4	上下側面	中膨れ
54	白玉	5区	0.53	0.48	0.47	0.22	0.17	0.09	滑石	4	上下側面	中膨れ
55	白玉	10区	0.50	0.48	0.49	0.19	0.19	0.08	滑石	4	上下側面	中膨れ
56	白玉	1区	0.54	0.50	0.51	0.22	0.14	0.11	滑石	4	上下側面	中膨れ
57	白玉	6区	0.52	0.50	0.51	0.25	0.16	0.11	滑石	4	上下側面	下膨れ
58	白玉	5区	0.50	0.46	0.46	0.22	0.17	0.09	滑石	4	上下側面	下膨れ
59	白玉	10区	0.52	0.51	0.48	0.26	0.19	0.09	滑石	4	上下側面	直線的
60	白玉	6区	0.45	0.39	0.41	0.30	0.17	0.08	滑石	4	上下側面	直線的
61	白玉	6区	0.48	0.45	0.46	0.24	0.18	0.09	滑石	4	上下側面	直線的
62	白玉	6区	0.47	0.45	0.46	0.24	0.15	0.09	滑石	4	上下側面	直線的
63	白玉	6区	0.46	0.43	0.43	0.20	0.17	0.07	滑石	4	上下側面	直線的

円形プランで、規模は直径0.45m、深さ0.40mである。

ピットは1本検出された。深さ19cmで、住居跡に伴う柱穴ではなかろう。壁溝は幅20~30cm、深さ8~10cm程度で、カマドを除き全周する。

出土遺物は土師器坏・甕、須恵器甕、編物石がある(第182・183図)。

遺物はカマド及び貯蔵穴の周辺と壁際から土師器の坏を中心に出土した。カマドは22・23の長筒甕を袖部に埋め込み芯材として用いられていた。右袖に使われた22の甕は逆位に置いていたのに対し、23の甕は口縁部を燃焼部側に向けて横倒しの状態で検出され、住居廃絶後カマドの一部が崩壊したと考えられる。



第180図 第12号住居跡

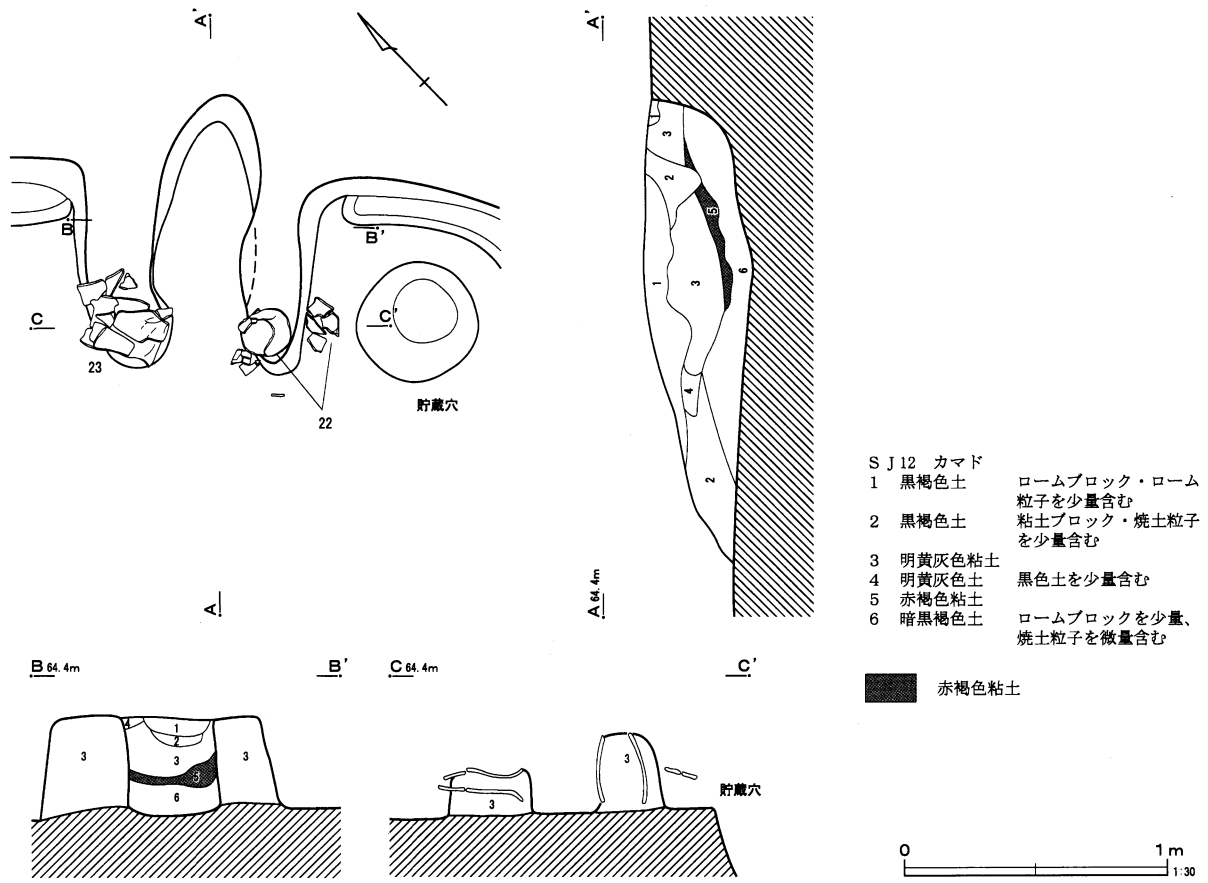
カマド右脇の貯蔵穴内部からは2・10の坏が、貯蔵穴周辺では東隅部から11の坏、南西脇から13の坏が出土している。またカマド左脇の壁沿いから4・7・12・14の坏が並んで出土した。南隅部付近では壁際で3個の編物石が出土したほか、5の坏と大振りの15の坏が出土している。北西壁際に8・9の坏、西隅部には底部に意図的な穿孔をもつ坏6が出土した。

土師器坏は、いずれもいわゆる模倣坏である。口径10.0~11.6cmの小振りの一群を主体に口径

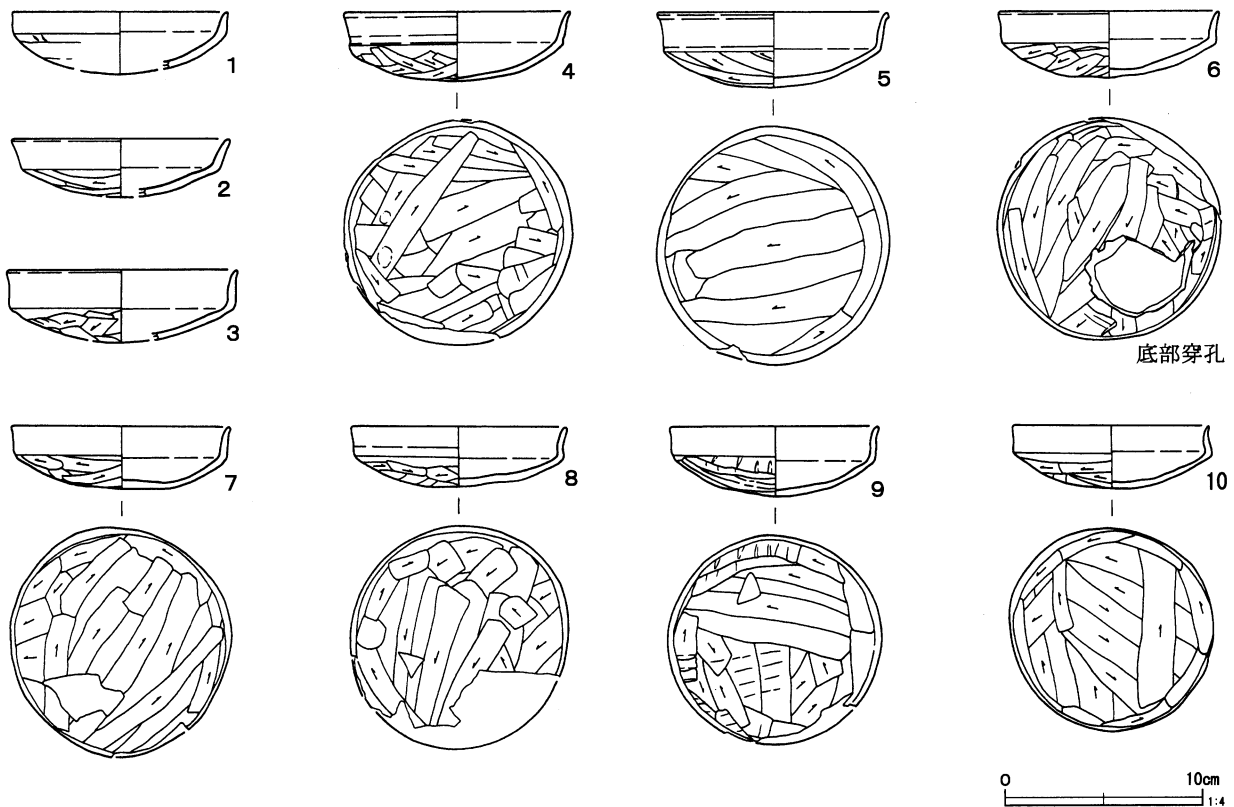
12.6~15.0cmの大振りの一群を伴う。

土師器甕は長胴化の最も進行した段階で、口縁部に最大径をもつ。22は口縁部が大きく外反して開くのに対し、23は緩やかに外反する。外面調整は縦方向のヘラケズリ後胴部上半に斜め方向のヘラケズリを加えるように変化している。器厚も薄く仕上げられ、鬼高的な長胴甕を脱却している。

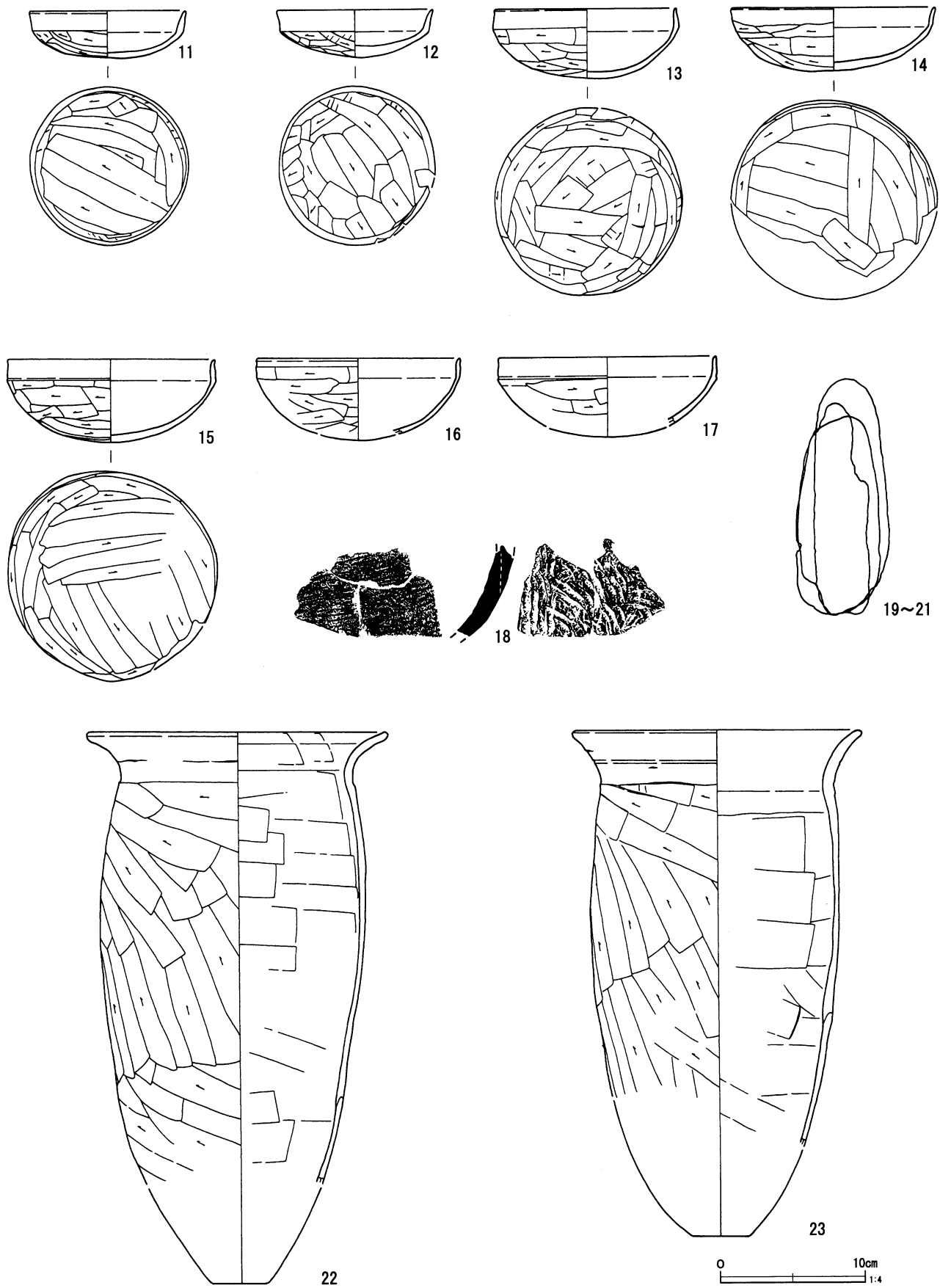
須恵器甕は外面平行叩き、内面同心円文当て具痕を残す在地産の製品である。幅広の粘土帯を接合して成形された痕跡を残す。



第181図 第12号住居跡カマド



第182図 第12号住居跡出土遺物 (1)



第183図 第12号住居跡出土遺物（2）

第62表 第12号住居跡出土遺物観察表(第182・183図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 坏	埋土	(10.9) [2.9]		20	A・B・E・F・G	普通 橙7.5YR6/6	北武蔵型坏
2	土師器 坏	貯蔵穴 底面上13cm	(11.0) [2.9]		25	A・B・C・D・F	普通 橙7.5YR6/6	内底面指頭による凹凸顕著
3	土師器 坏	埋土	(11.6) [3.6]		40	B・C・D・F・G	良好 橙7.5YR6/6	内底面指頭による凹凸あり
4	土師器 坏	北東壁際 床面直上	11.5 3.6		85	B・C・D・F・J	良好 橙7.5YR7/6	内底面指頭圧痕顕著
5	土師器 坏	南部 床面直上	11.6 3.8		95	A・B・C・D・F	良好 橙5YR6/8	内底面指頭圧痕顕著
6	土師器 坏	西隅壁溝 床面上3cm	11.1 3.4		85	C・D・E・F・G	良好 橙5YR6/8	内底面に人為的な穿孔あり
7	土師器 坏	北東壁際 床面直上	11.0 3.2		90	A・B・C・D・E	良好 橙2.5YR6/8	体部外面ヘラケズリ
8	土師器 坏	北西壁寄り 床面直上	10.9 3.1		65	A・C・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	内底面指頭圧痕
9	土師器 坏	北西壁寄り 床面直上	10.6 3.6		90	A・C・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	体部外面ノッキング、内面凹凸顕著
10	土師器 坏	貯蔵穴 底面直上	10.0 3.2		100	A・B・C・D・F	普通 にぶい黄橙10YR6/3	内外面器面荒れる
11	土師器 坏	貯蔵穴周辺 床面上21cm	10.7 3.3		95	A・B・C・D・E	良好 にぶい黄橙10YR7/4	内底面指頭による凹凸あり
12	土師器 坏	北東壁際 床面上27cm	10.8 3.3		95	B・C・D・E・J	良好 橙7.5YR7/6	内底面指頭による凹凸顕著
13	土師器 坏	貯蔵穴周辺 床面上4cm	12.6 4.9		95	A・C・D・F・G	良好 にぶい橙7.5YR6/4	体部外面ヘラケズリ、ノッキング顕著
14	土師器 坏	北東壁溝際 床面直上	14.0 4.4		65	A・B・F・J	普通 橙7.5YR6/8	内外面とも風化顕著
15	土師器 坏	南部 床面上4cm	14.2 5.8		95	B・C・D・F・G	良好 橙5YR6/8	内底面一定方向のナデ
16	土師器 坏	埋土	(14.0) [5.2]		20	B・C・D・F・G	良好 明赤褐5YR5/6	体部外面ヘラケズリ
17	土師器 坏	埋土	(15.0) [4.8]		15	A・C・D・F・G	普通 橙5YR6/8	内外面風化により磨耗
18	須恵器 甕	埋土			破片	A・F・G・J・K	良好 灰黄2.5Y7/2	外面：平行叩き目 内面：同心円文 当て具痕 在地産
22	土師器 甕	カマド右袖 床面直上	20.3 [31.1]	18.1	95	A・B・C・E・F	普通 橙7.5YR6/6	胴部外面焼土化した粘土付着
23	土師器 甕	カマド左袖 床面直上	19.6 [28.8]	17.1	95	A・B・C・F・J	普通 にぶい褐7.5YR5/3	胴部外面下半焼土化した粘土付着

第63表 第12号住居跡出土編物石観察表(第183図)

番号	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存	石質	備考
19	南東壁溝 底面上37cm	14.6	5.0	3.2	280.6	完存	絹雲母片岩	No.12
20	南東壁溝 底面上40cm	16.3	5.2	1.9	231.9	完存	絹雲母片岩	No.10
21	南東壁溝 底面上37cm	13.7	5.9	2.4	268.6	完存	絹雲母片岩	No.11

編物石は3点出土した。南東壁の壁溝から浮いた状態で出土し、長さ13.7～14.6cmにまとまる。絹雲母片岩による棒状礫である。

時期は7世紀第2四半期に位置づけられ、夏目遺跡Ⅸ期に該当する。

第13号住居跡(第184・185図)

第13号住居跡は調査区中央からやや西に寄ったK・L-14・15グリッドに位置する。住居跡西壁部は調査区外にかかっている。

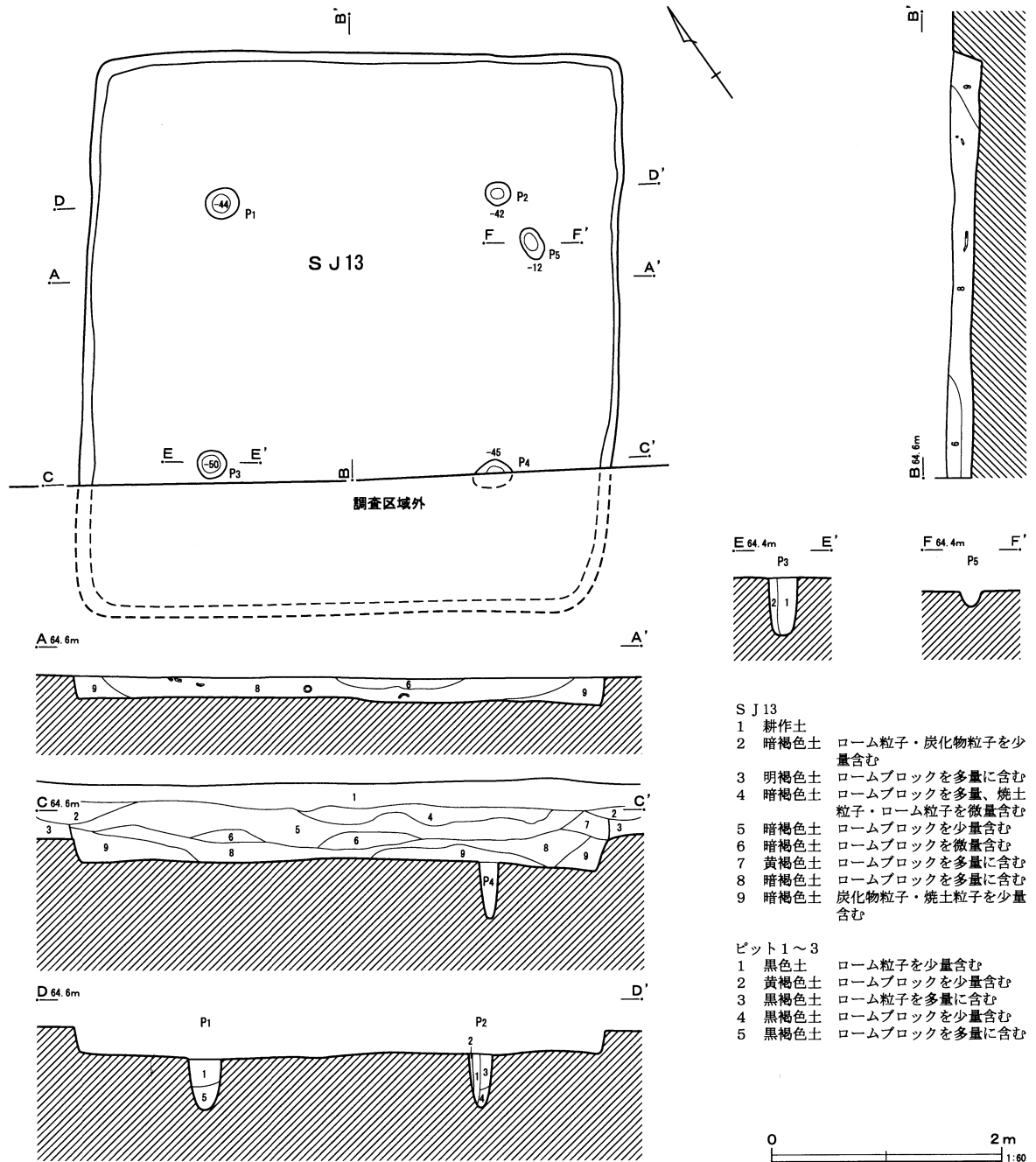
平面形は方形と推定され、規模は長軸長4.62

m、短軸残存長3.78m、床面までの深さは0.25mである。主軸方位はN-35°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、特に硬化面は見られなかった。埋土下層にはロームブロックを多量に含む暗褐色土が厚く堆積していた。

調査区内からはカマドまたは炉跡、貯蔵穴は検出されなかった。出土遺物の様相から見てカマドをもつ公算が大きい。仮にカマドが存在すれば、南壁際に設置されたものであろうか。

柱穴は5本検出された。P1～P4は規則的に

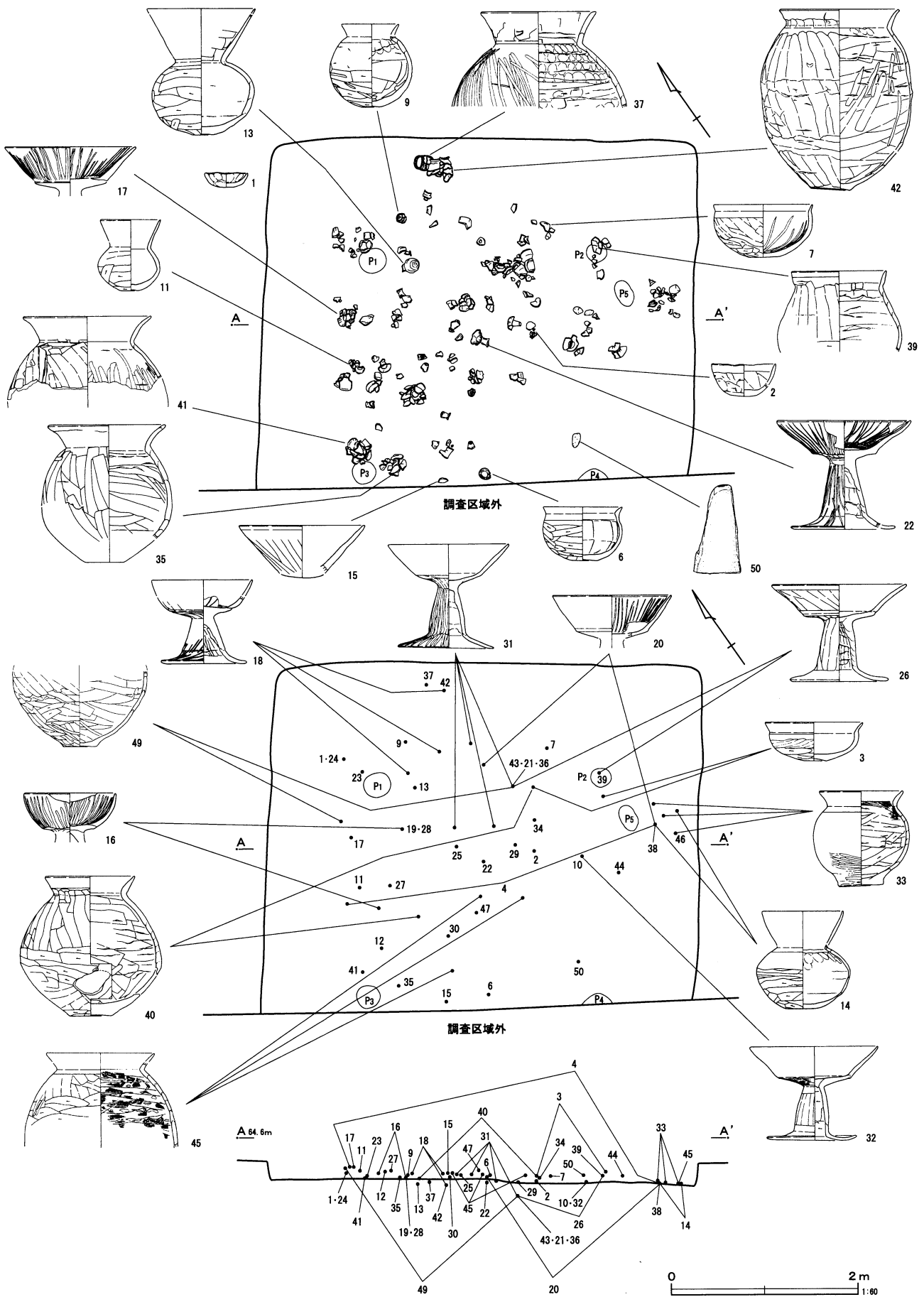


第184図 第13号住居跡

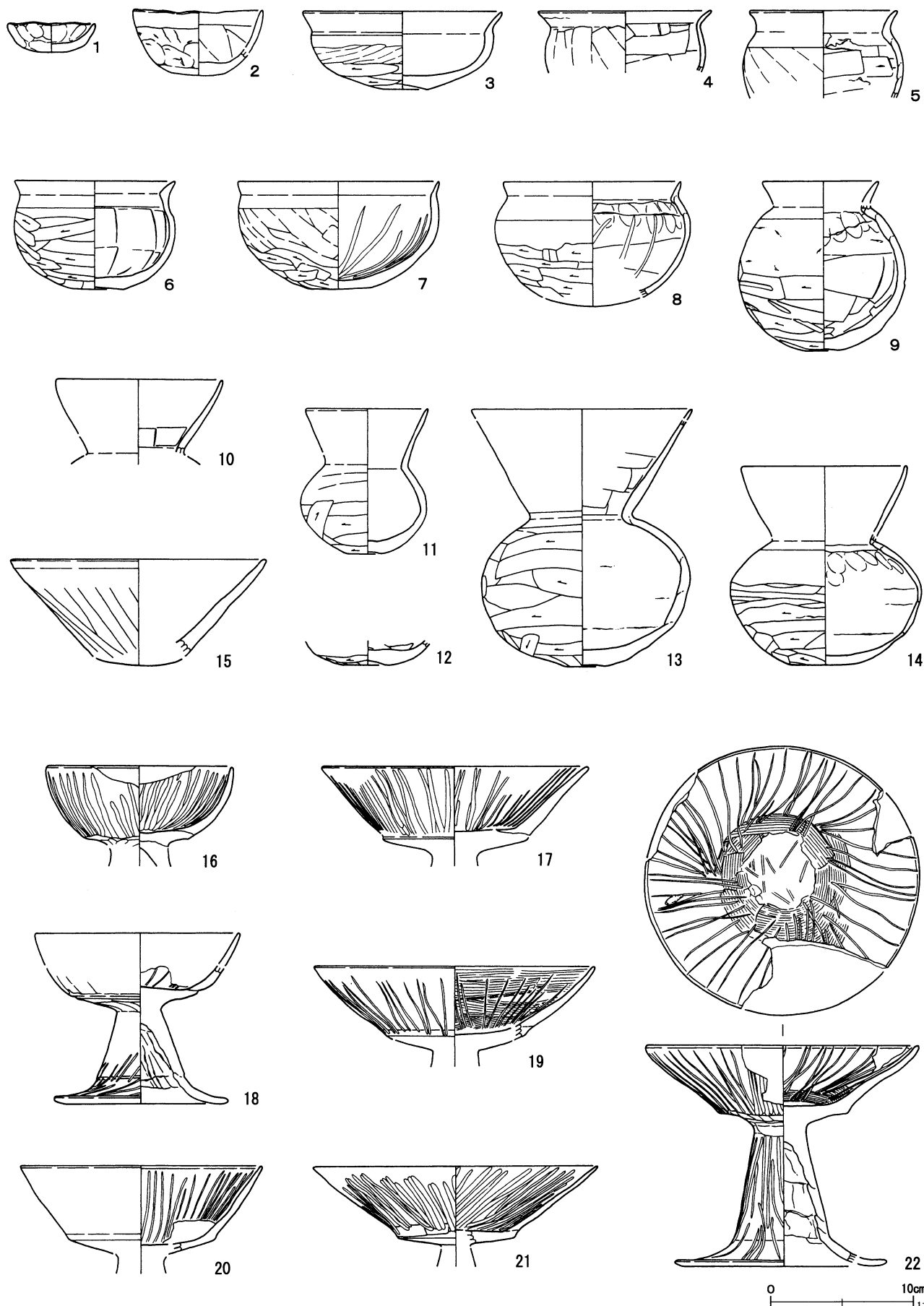
配置され、4本支柱穴を構成すると考えられる。深さは0.42～0.50m。第1層が柱痕、第2～5層が掘方埋土に相当する。

出土遺物は土師器手捏土器・坏・埴・鉢・罎・高坏・甕・小型甕・台付甕・小型壺・壺・土製小玉、敲石、石製模造品の白玉がある(第186～188図)。遺物は住居跡全域に広く分布し、床面直上のものと若干浮いた状態のものが混在していた。手

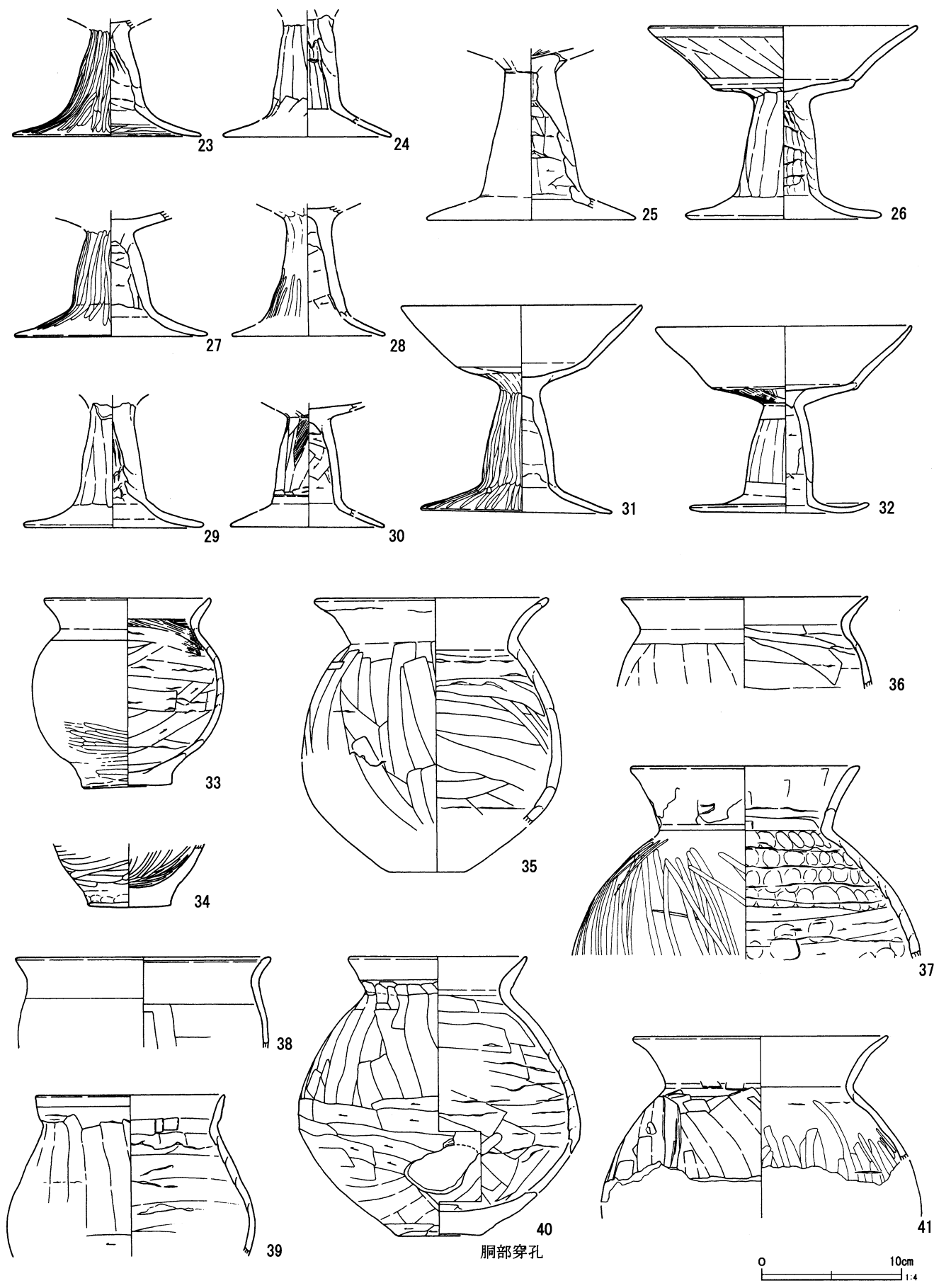
捏土器は1がP1周辺、2が中央部から出土している。1は浅身の坏形、2は埴形を呈する。坏・埴類は、3・7がP2周辺、6がP3・4の中間で口縁を上に向けて出土した。高坏は数量が多く、形態にバラエティーが見られる。22・31・32は中央部から出土し、26はP2の中から破片が一部出土している。また18の埴形高坏はP1から東壁にかけて散在していた。11の罎はP1・3の中間か



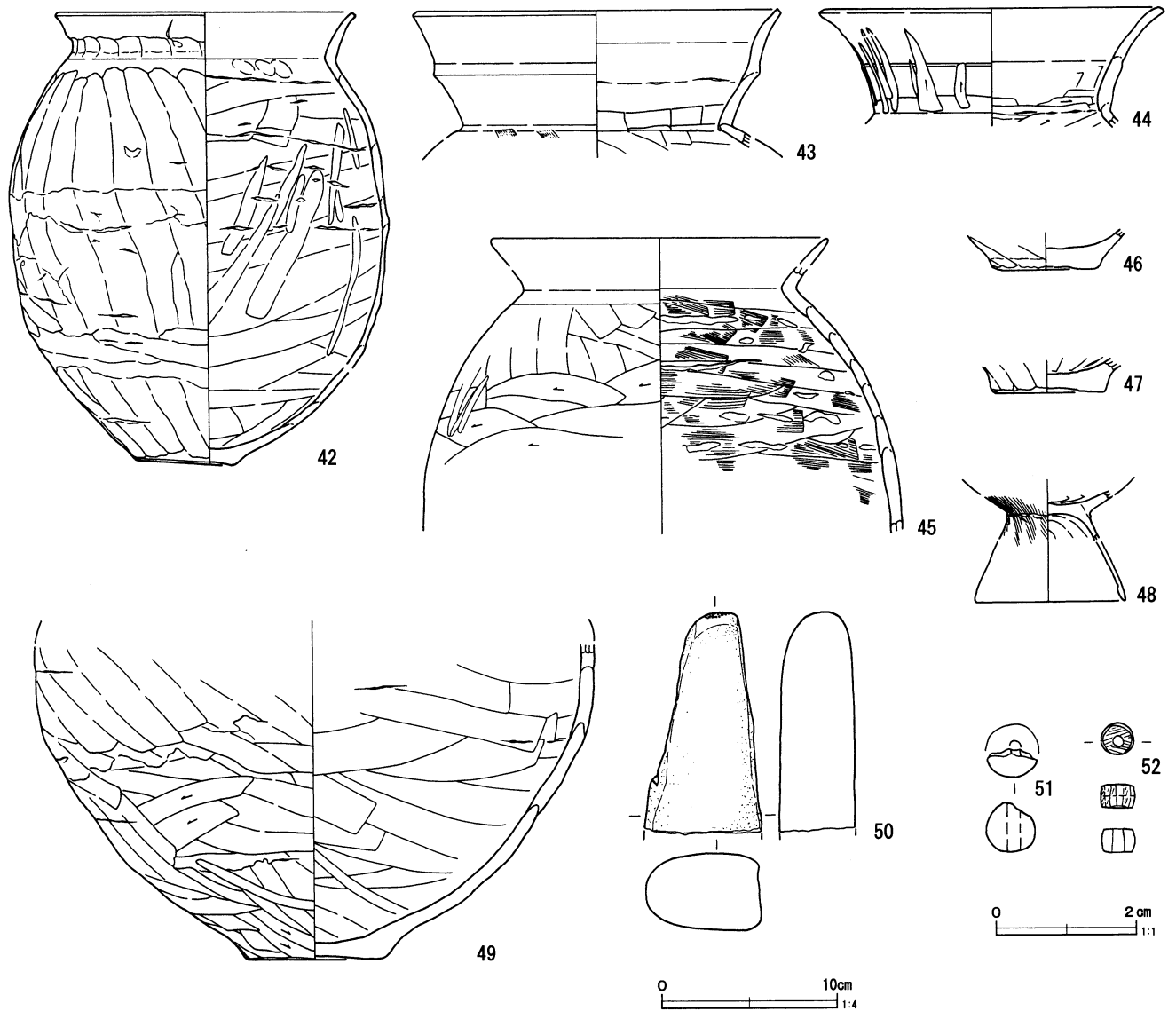
第185図 第13号住居跡遺物出土状況



第186图 第13号住居跡出土遺物 (1)



第187图 第13号住居跡出土遺物 (2)



第188図 第13号住居跡出土遺物（3）

ら、9・13がP 1 周辺、14がP 5 と南壁の間から小型甕の33と一緒に出土した。鉢とした15は口縁部のみの破片で器形についてやや不確かであるが、P 3 とP 4 の間で床面から浮いた状態で出土した。なお、甑の出土は現状では確認されていない。壺類は、49の大型壺胴部下半が中央部から北壁にかけて広く破片が分布していた。また東壁中央寄りから横に倒れ、土圧によって押し潰された状態の甕42とともに37の壺胴部上半が出土している。甕では、P 3 周辺から35が逆位の状態で出土した。41は置台として転用された可能性も考えられる。中央部からは胴部穿孔された40の小型甕

や45の甕が出土した。また埋土からではあるが、48のS字状口縁台付甕台部が出土している。接合部付近の小片で、台部外面に鋸歯状の鋭いハケメが施される。混入品であろう。このほか50の敲石がP 4 周辺から出土し、被熱による赤色化が顕著である。玉類は、51の土製小玉が床面直上から出土したほか、52の滑石製白玉が南東部の床面直上から出土している。

時期は、坏・埴類が定量で加わり、長口縁の小型壺や口径と胴部径のほぼ等しい埴、高坏の数量が多いことなどから、夏目遺跡Ⅲ期に位置づけられる。

第64表 第13号住居跡出土遺物観察表 (第186~188図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 手握土器	P 1 周辺 床面上 9 cm	(6.0) 2.0		25	A・C・D・F・G	良好 橙2.5YR6/6	体部外面指頭圧痕あり
2	土師器 手握土器	中央部 床面直上	9.0 4.6		75	A・B・D・F・G	良好 赤褐2.5YR4/6	体部外面指頭圧痕あり
3	土師器 坏	中央部東寄り 床面上 9 cm	14.0 5.5	3.0	85	A・B・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	体部外面ヘラケズリ
4	土師器 鉢	南東壁寄り 床面直上	(12.0) [4.3]		65	A・B・F・G・J	普通 にぶい赤褐2.5YR5/4	胴部上半にススが付着する 被熱痕あり
5	土師器 鉢	埋土	(10.2) [6.7]	(11.2)	25	A・B・D・E・F	良好 明赤褐2.5YR5/8	口縁部内面補修痕 胴部被熱痕あり
6	土師器 鉢	南西部 床面上12cm	11.1 7.6	11.3 3.6	95	A・B・E・F・K	良好 にぶい赤褐2.5YR4/4	粘土に小礫を含む 体部外面部分的にススが付着
7	土師器 埴	東部 床面上 8 cm	(14.0) 7.5	(4.4)	40	A・D・F・G・J	良好 にぶい橙5YR6/4	体部内面放射暗文
8	土師器 鉢	埋土	(12.3) [8.1]		25	A・D・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	体部内面まばらなヘラミガキ
9	土師器 小型壺	中央部北寄り 床面上 7 cm	[10.2]	(11.7) (2.4)	50	A・B・F・I・J	良好 にぶい橙7.5YR6/4	器形不定
10	土師器 小型壺	中央部南寄り 床面直上	11.5 [5.3]		90	A・B・C・F・J	良好 橙2.5YR6/6	口縁部ヨコナデ
11	土師器 埴	西部 床面上14cm	(8.4) 10.2	8.8 2.3	45	A・B・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	胴部外面ヘラケズリ
12	土師器 埴	中央部 床面上14cm	[1.8]	2.8	70	A・D・F・G・J	良好 橙5YR6/6	凹底 胎土精選
13	土師器 小型壺	P 1 周辺 床面直上	[17.2]	14.6 2.6	80	A・B・C・G・I	良好 橙5YR6/6	胴部外面ヘラケズリ 長口縁型
14	土師器 小型壺	南東壁寄り 床面直上	[8.8]	13.3 4.5	85	A・D・F・G・J	良好 にぶい橙2.5YR6/4	器壁薄く軽量 平底
15	土師器 鉢か	南西部 床面上15cm	(17.6) [6.8]		30	A・B・C・F・J	普通 橙2.5YR6/8	体部内面器面荒れる
16	土師器 高坏	中央部 床面上13cm	12.8 [5.7]		85	A・C・E・F・K	良好 赤褐2.5YR4/6	坏部内外面ヘラミガキ
17	土師器 高坏	西部 床面上20cm	18.5 [4.8]		80	A・B・C・D・J	良好 にぶい赤褐2.5YR4/5	坏部内外面にヘラミガキを施す
18	土師器 高坏	中央部 床面上11cm	[9.7]	12.0	80	A・B・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	裾部外面ヘラミガキ
19	土師器 高坏	中央部西寄り 床面上10cm	(19.5) [5.2]		30	A・D・F・G・J	良好 明赤褐5YR5/6	坏部内面ハケメ後暗文 外面暗文
20	土師器 高坏	中央部 床面上 4 cm	(16.8) [6.2]		20	A・B・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内面放射暗文
21	土師器 高坏	中央部東寄り 床面直上	(19.8) [5.6]		20	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内外面やや幅広いヘラミガキ
22	土師器 高坏	中央部 床面上 5 cm	18.9 15.5	(14.8)	80	A・D・F・G・J	良好 橙2.5YR6/6	坏部内外面、脚部外面ヘラミガキ
23	土師器 高坏	P 1 際 床面上 7 cm	13.2 [8.3]		95	A・B・D・E	良好 明赤褐2.5YR5/6	脚部外面入念なミガキ
24	土師器 高坏	P 1 周辺 床面上 9 cm	[7.7]		90	A・B・C・G・J	良好 明赤褐2.5YR6/6	柱状部外面、面取り状のナデ
25	土師器 高坏	中央部 床面上15cm	[11.0]		60	D・F・G・H・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	柱状部外面丁寧なナデ
26	土師器 高坏	P 2 床面上10cm	19.0 13.9	(13.8)	85	A・B・D・F・G	良好 橙5YR6/6	柱状部内面粘土紐痕明瞭
27	土師器 高坏	中央部 床面上14cm	[8.9]	13.6	70	A・B・C・E・F	良好 明赤褐5YR5/6	柱状部外面ヘラミガキ
28	土師器 高坏	中央部西寄り 床面上10cm	[8.4]		90	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	柱状部外面ヘラミガキ
29	土師器 高坏	中央部 床面直上	[8.9]	12.5	85	A・D・E・F・J	良好 赤褐2.5YR4/6	柱状部内面絞り目顕著
30	土師器 高坏	中央部西寄り 床面上 8 cm	[8.3]		90	A・B・F・G・J	良好 橙5YR6/6	柱状部外面、面取り状のヘラナデ
31	土師器 高坏	中央部 床面上14cm	17.1 15.0	13.6	85	A・B・C・E・F	良好 橙2.5YR6/6	柱状部内面ナデ
32	土師器 高坏	中央部南寄り 床面直上	18.2 13.5	(12.9)	90	A・C・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	裾部やや焼き歪む
33	土師器 小型甕	南東壁寄り 床面直上	11.7 13.5	13.6 6.4	80	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	胴部外面下半にスス付着
34	土師器 小型壺	中央部 床面直上	[4.5]	5.9	85	A・B・C・F・K	良好 にぶい橙5YR6/6	内外面ミガキ

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考	
35	土師器小型甕	P 3 周辺 床面上11cm	16.5 [16.2]	(18.5)	50	A・B・C・F・J	良好 黒褐5YR2/1	口縁部及び胴部中位外面にススが厚く付着	
36	土師器小型甕	中央部東寄り 床面直上	(17.6) [6.5]		20	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部外面ヘラナデ	
37	土師器壺	北東壁寄り 床面上3cm	16.3 [13.8]	(24.9)	50	A・B・C・F・J	良好 橙5YR6/6	口縁部外面補修痕	
38	土師器小型甕	南東壁寄り 床面直上	(17.7) [6.5]	(17.8)	10	B・C・D・F・J	普通 橙5YR6/6	外面スス付着	
39	土師器小型甕	P 2 床面上10cm	(13.4) [6.5]	(17.7)	20	A・B・E・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	胴部外面被熱痕あり	
40	土師器小型甕	中央部 床面上7cm	12.6 19.9	20.1 6.0	75	A・B・C・F・G	良好 にぶい橙7.5YR7/4	胴部下半に穿孔あり	
41	土師器甕	P 3 周辺 床面上8cm	18.1 [11.9]		90	B・C・E・F・G	良好 赤褐2.5YR4/6	逆位の状態で、土器置台として転用の可能性あり	
42	土師器甕	北東壁寄り 床面直上	16.6 26.0	21.4 (5.5)	80	A・D・F・G・J	良好 橙5YR6/6	口縁部から胴上半部にかけてススが帯状に付着	
43	土師器壺	中央部東寄り 床面直上	(20.6) [7.9]		30	B・C・F・G・K	良好 明赤褐5YR5/6	口縁部内面に布目圧痕あり	
44	土師器壺	南部 床面上7cm	19.1 [6.8]		65	A・B・C・E・F	良好 明赤褐2.5YR5/6	口縁部ヨコナデ後一部ヘラケズリ	
45	土師器甕	中央部 床面上16cm	[15.2]	(27.3)	30	A・B・C・F・J	普通 橙5YR6/6	粘土紐積み上げ痕明瞭	
46	土師器甕	南東壁寄り 床面直上	[2.2]	6.0	70	A・B・C・F・J	普通 暗赤褐2.5YR3/3	内面器面荒れる	
47	土師器甕	中央部 床面上15cm	[1.9]	(6.4)	90	A・B・D・F・K	普通 にぶい赤褐5YR5/4	底面植物圧痕	
48	土師器台付甕	埋土	[2.7]		5	A・B・C・D・F	普通 にぶい黄橙10YR7/3	S字状口縁台付甕	
49	土師器壺	中央部東寄り 床面直上	[17.8]	(31.8) 7.8	25	B・C・F・G・K	良好 明赤褐5YR5/6	成形単位明瞭	
50	石製品 敲石	南部 床面上24cm	長さ12.6cm 幅6.7cm 厚さ4.4cm 重さ522.9g 砂岩 被熱により赤色化 Na22						
51	土製品 小玉	床面直上	最大径0.72cm 厚さ0.70cm 重さ0.15g 1/2残			A・F	良好 赤褐5YR4/6	ナデ調整	

第65表 第13号住居跡出土白玉観察表 (第188図)

番号	種類	出土位置	最大径(cm)	上面径(cm)	下面径(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石材	段階	研磨	外形
52	白玉	南東床直	0.48	0.42	0.43	0.29	0.13	0.11	滑石	4	上下側面	中膨れ

第14号住居跡 (第189～195図)

第14号住居跡は調査区中央やや西寄りのJ・K—14・15グリッドに単独で位置する。住居跡北隅部は調査区外にかかっている。

平面形は整った方形の大型住居跡で、規模は長軸長7.26m、短軸長7.20m、床面までの深さは0.21mである。主軸方位はN—113°—Wを指す。

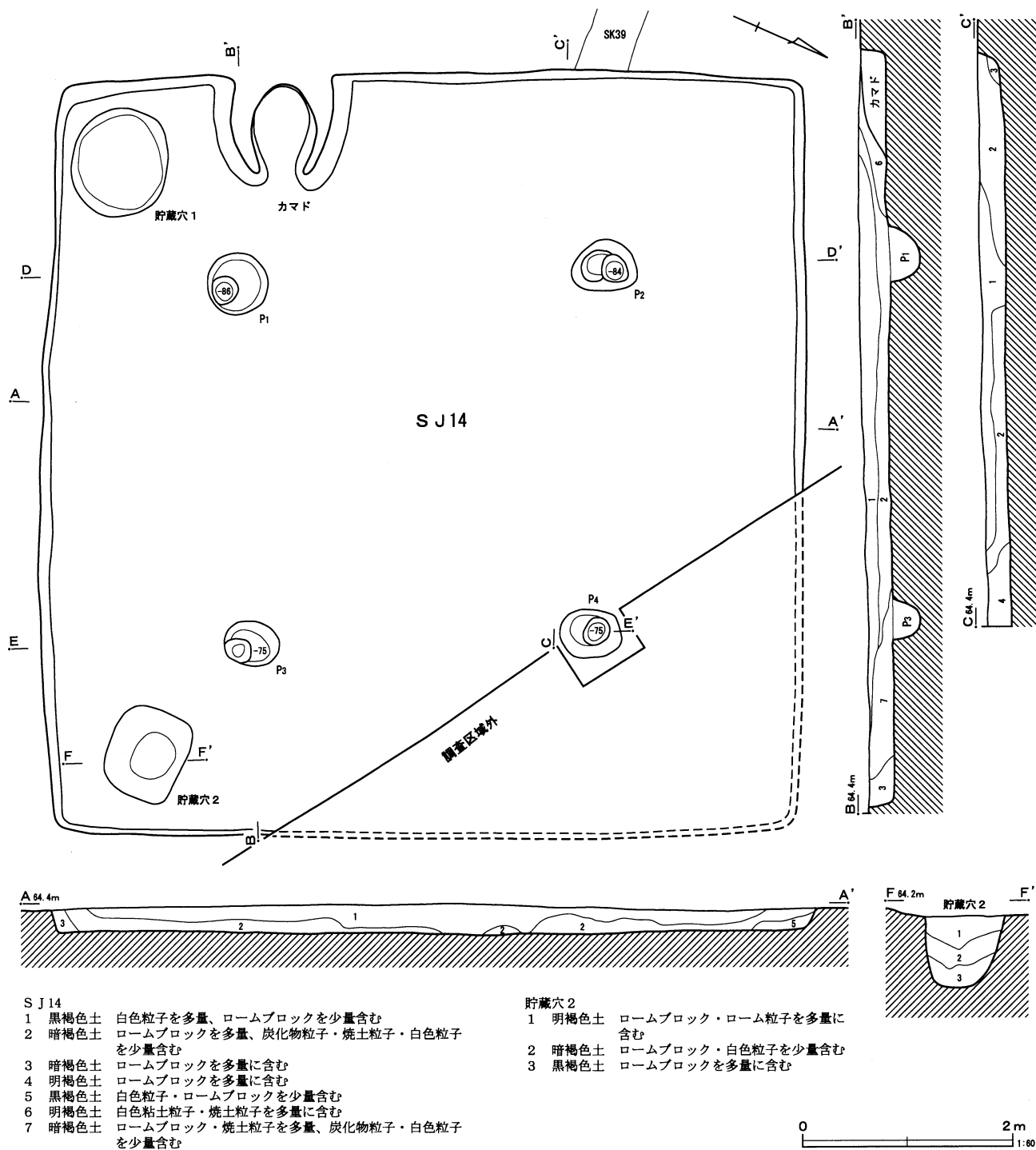
床面は概ね平坦で、特に硬化面などは確認されなかった。埋土は基本的には自然堆積を示すが、第2～4・7層にはロームブロックが多量に含まれており、豊富な遺物量についても勘案すれば、人為的な埋め戻しも検討すべきかもしれない。

カマドは西壁南寄りに設置されていた。全長1.05m、幅1.32m、燃焼部は壁内に収まり、内壁

の幅は約0.50m、燃焼部奥行きは0.96mである。袖部は白色粘土をベースに構築されていたが、内壁の焼け面は明確には確認できなかった。埋土は第10層が掘方、同層上面が火床面と推定される。第1～5層が天井部ないし側壁崩落土であろう。壁外に延びる煙道部は検出されなかった。

貯蔵穴は2基検出された。貯蔵穴1は住居跡南西隅部、カマド南側に隣接する。円形で、規模は径1.04×0.96m、深さ0.59mである。貯蔵穴2は南東隅部にあり、隅丸方形プランで、規模は長径0.84m、短径0.72m、深さ0.66mである。埋土はロームブロックが多量に含まれ、貯蔵穴1使用時には埋め戻されていたと考えられる。

柱穴は4本検出された。P1～P4は規則的に



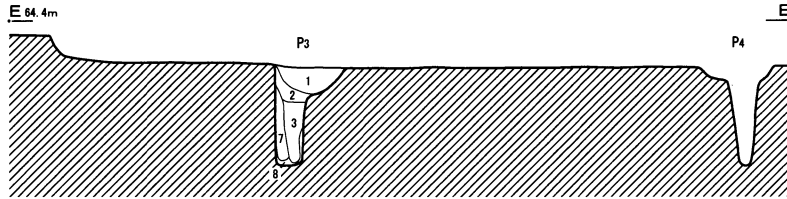
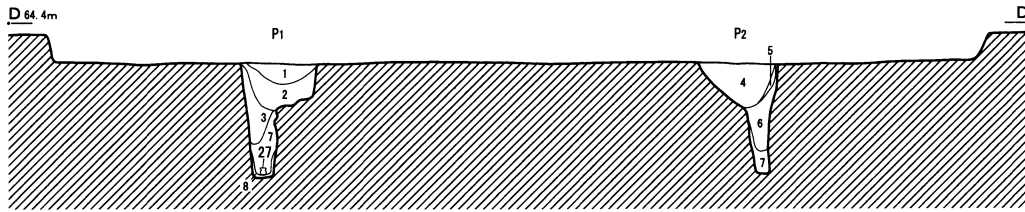
第189図 第14号住居跡（1）

配置され、4本支柱穴と考えるとよい。P4は調査区際にあったため土層の観察など十分に行えなかったが、いずれも深さは75～86cmである。

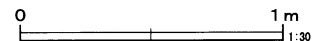
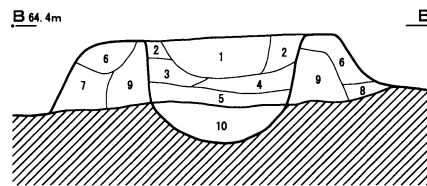
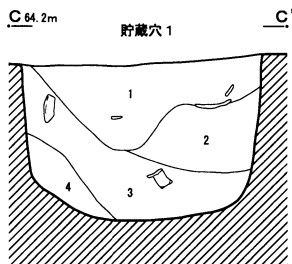
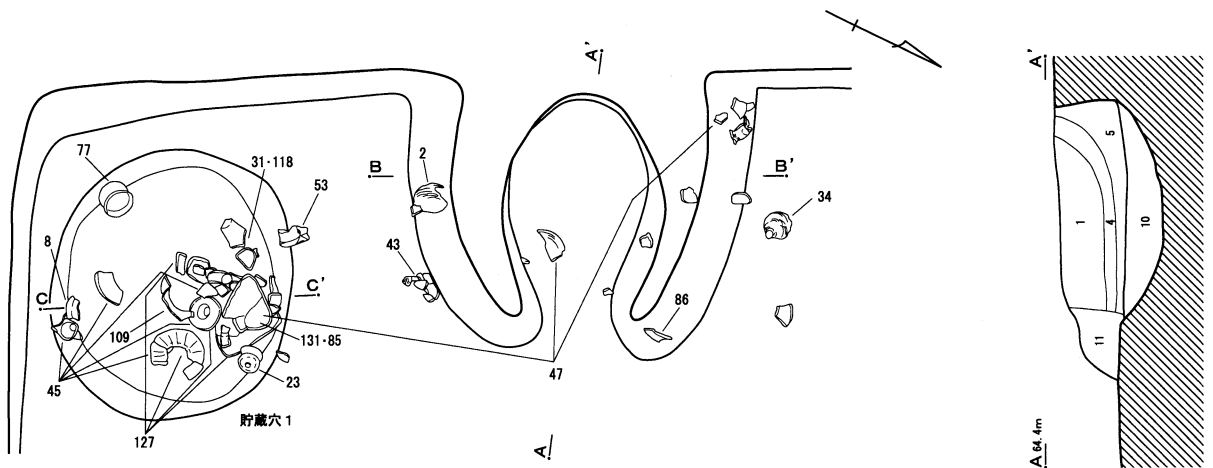
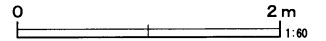
出土遺物は極めて多い。土師器・埴輪・鉢・鉢・高坏・脚付埴輪・小型壺・小型甕・甑・壺・甕、栓形土製品、土玉、土製勾玉、石製模造品（白玉・有孔円板）、桃核が出土している(第196～205図)。

北壁部を除く住居跡全域に分布し、中央付近の遺物の多くは床直から出土した。一方壁際から出土した遺物は床面よりも浮いた位置から出土する傾向が見られ、住居廃絶後やや時間を置いて投棄された可能性がある。

各々の遺物の出土状況について警見する。貯蔵穴1脇の床面から140の有孔円板が単独で出土して



- ビット1～3
 1 黒褐色土 白色粒子・ロームブロックを少量含む
 2 黒褐色土 黒色土を多量に含む
 3 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む
 4 明褐色土 ローム粒子を多量に含む
 5 明褐色土 黒色土を多量に含む
 6 明褐色土 ロームブロック・ローム粒子を極多量に含む
 7 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む
 8 明黄褐色土 ローム粒子を極多量に含む



貯蔵穴1

- 1 黒褐色土 白色粒子・ローム粒子を多量に含む
 2 黒褐色土 白色粒子・ローム粒子を少量含む
 3 黒褐色土 白色粒子・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む
 4 黒褐色土 白色粒子・ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む

S J 14 カマド

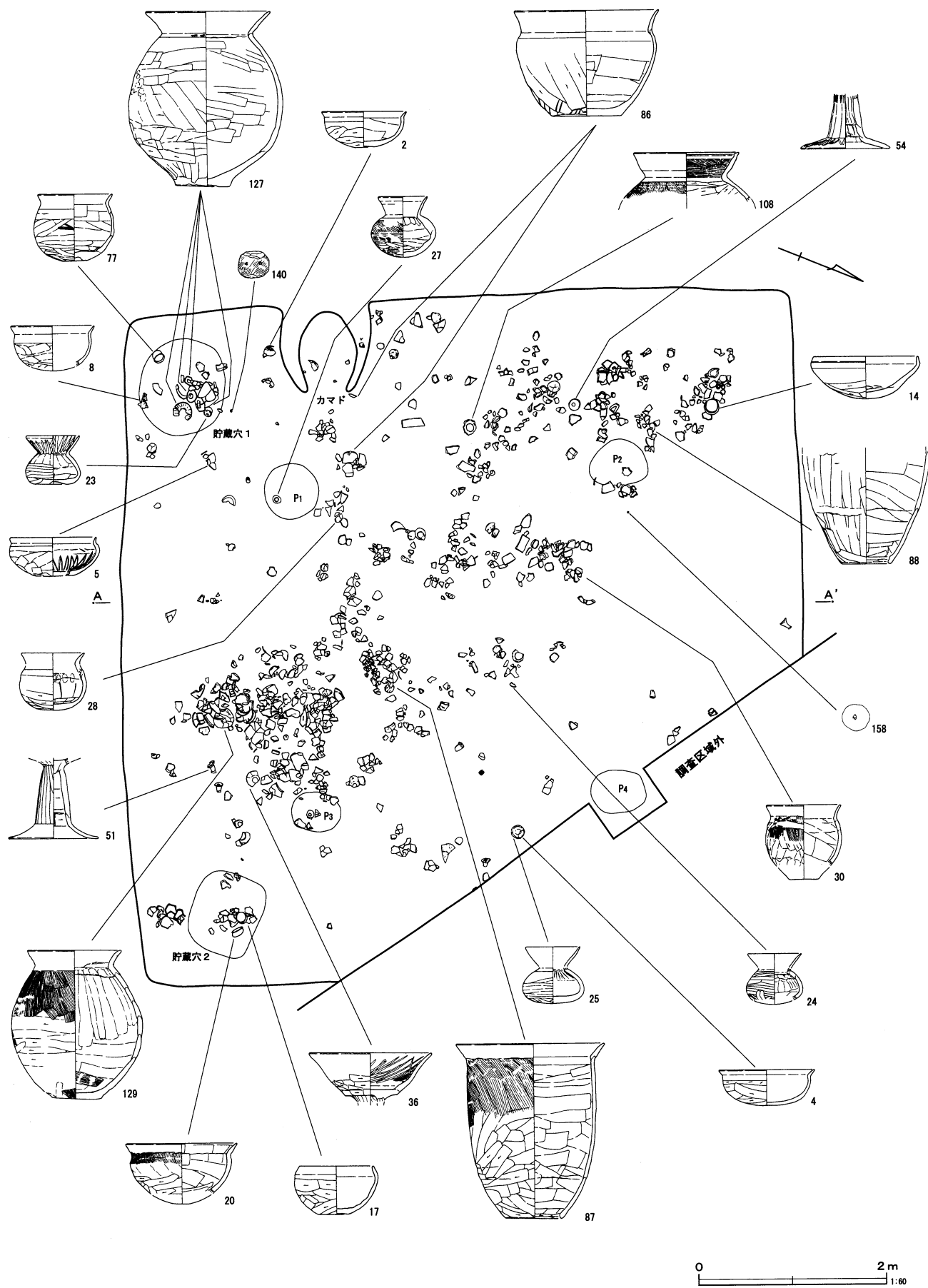
- 1 黒色土 白色粒子・炭化物粒子・ローム粒子を多量、黒色土を少量含む
 2 黒色土 白色粒子・炭化物粒子・ローム粒子を多量に含む
 3 明褐色土 白色粒子・炭化物粒子・ローム粒子を多量に含む
 4 明褐色土 白色粒子・炭化物粒子・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む
 5 黒色土 白色粒子・炭化物粒子・ローム粒子を少量含む

- 6 黒色土 ローム粒子を多量、黒色土を少量含む
 7 灰黒色土 白色粒子・炭化物粒子・ローム粒子を多量、焼土粒子・黒色土を少量含む
 8 灰黒色土 白色粒子・炭化物粒子・ローム粒子・焼土粒子を多量、黒色土を少量含む
 9 白色粘土
 10 黒色土 ロームブロック・黒色土を少量含む
 11 黒色土 白色粒子・炭化物粒子・ロームブロック・黒色土を少量含む

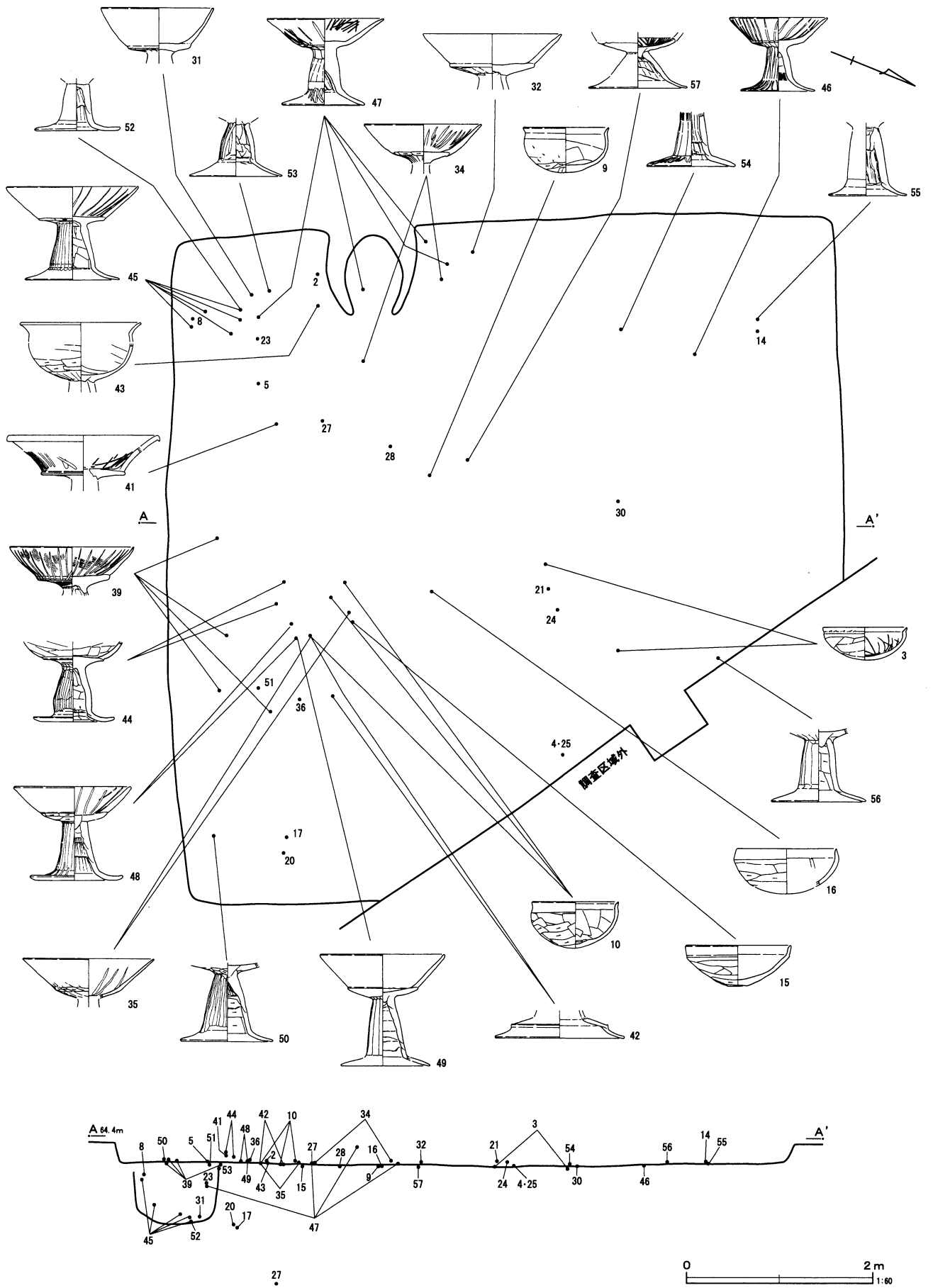
第190図 第14号住居跡(2)・カマド

いる。カマド袖部の上面や内部にも土器片が含まれていた。P1の底面に27の埴が意図的に置いたと思われる状態で出土し、注意される。柱を抜き取った後に置いたのものであろうか。貯蔵穴1では

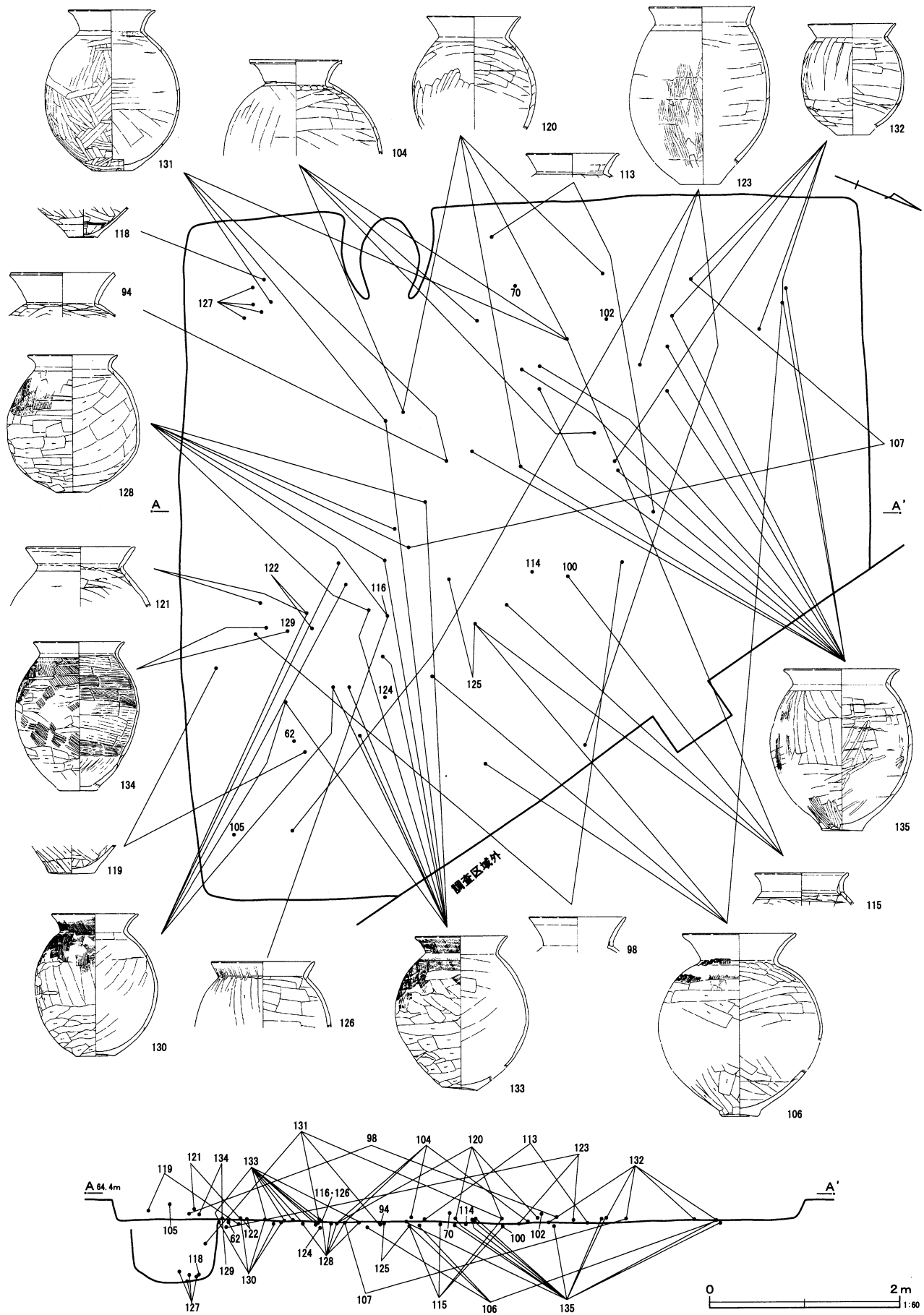
内部に落ち込んだ状態で、23の埴、8の塊、45の高坏、77の鉢、127の甕など多量の土器が出土した(第190図)。住居廃絶時に開口していたと考えられる。一方、貯蔵穴2の底面付近からは17と20の



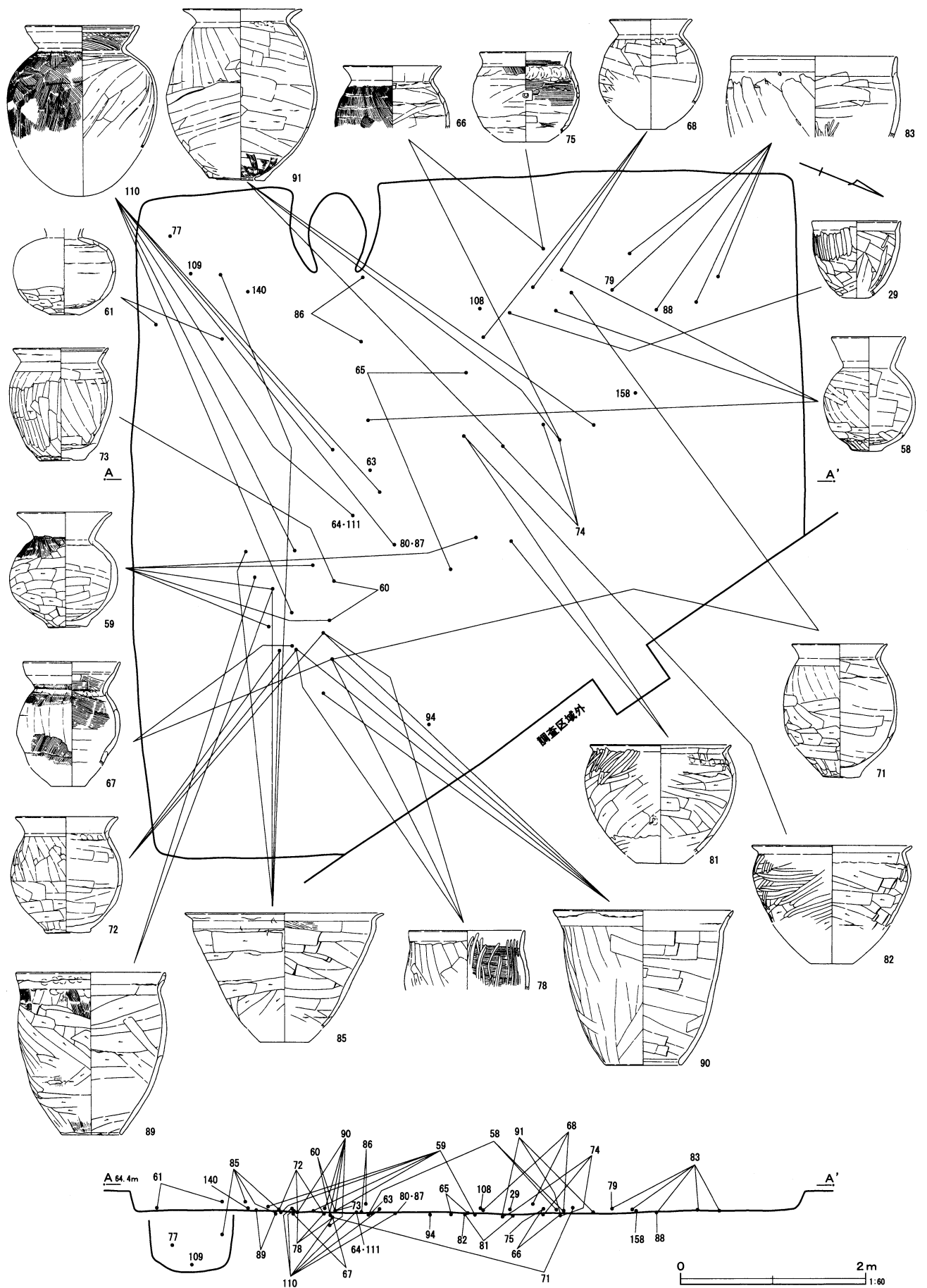
第191図 第14号住居跡遺物出土状況(1)



第192图 第14号住居跡遺物出土狀況 (2)



第193図 第14号住居跡遺物出土状況 (3)



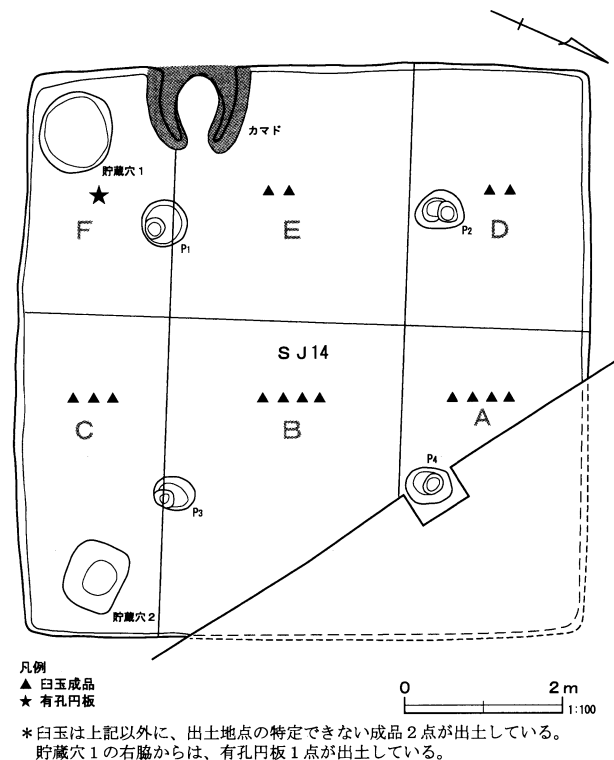
第194图 第14号住居跡遺物出土状況(4)

2点の壺が出土したが、埋土の状態から埋め戻された可能性が高いことは前述した。17は深身の半球形の壺、20は体部外面にハケメを残す大型壺である。

いわゆる布留式系甕は4個体出土した(108~111)。110は中央部に散在しているのに対し、108の口縁部片はカマド右脇から逆位の状態出土し、転用器台として利用されていた可能性もある。口唇部の形態は微妙に異なるが、基本的には内側が肥厚し断面三角形を呈する。胴部外面には斜め方向の細かなハケメを施し、111のみ肩部に横方向のハケメを加える。内面はヘラケズリが特徴的に施されている。底部を残すものはなかったが、図示しなかった破片資料の中には丸底で内面に指頭圧痕を残すものが見られる。なお、布留式系甕の出土はこの大型住居のみに限定されている。

坏・壺類は完形のもの比較的多く、カマドやP3の周辺からまとまって出土した。高坏は脚部のみの破片が多く、壁際にまとまる傾向が窺えた。甕・壺類は完形のものも少なくないが、比較的広範囲にわたって分布するものが多くみられ、小型甕を伴出する例が多い。89・90などの大型甕はピット3の周辺に集中する傾向が見られた。鉢類のうち86の平底鉢はカマド手前のP1脇から出土している。81・82・85などの口縁部が短く屈曲する特徴的な鉢はP3周辺から中央部にかけて散在する傾向にある。

石製模造品の分布状態を確認すると、貯蔵穴1東脇から140の有孔円板が出土している。白玉は17点出土し、住居跡のほぼ全域から出土した。土器類の出土傾向と概ね一致し、床直から出土したものが多く、特に集中する場所は見出せない(第195図)。想像を逞しくすれば、玉緒を切ってばら撒いたのであろうか。157のように直径1cm程の大型の白玉もあるが、大半は直径5mm前後のものである。この他に用途不明の栓形土製品(139)、158・159の土玉、160の土製勾玉なども出土してい



第195図 第14号住居跡石製模造品分布図

る。自然遺物として炭化した桃核が2点ある。

時期については、源初坏が定量で含まれること、胴部が扁球形の壺が主体を占めること、甕に長胴化の兆しが見えること等々から、夏目遺跡Ⅲ期に位置づけることができる。

第15号住居跡(第206~209図)

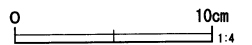
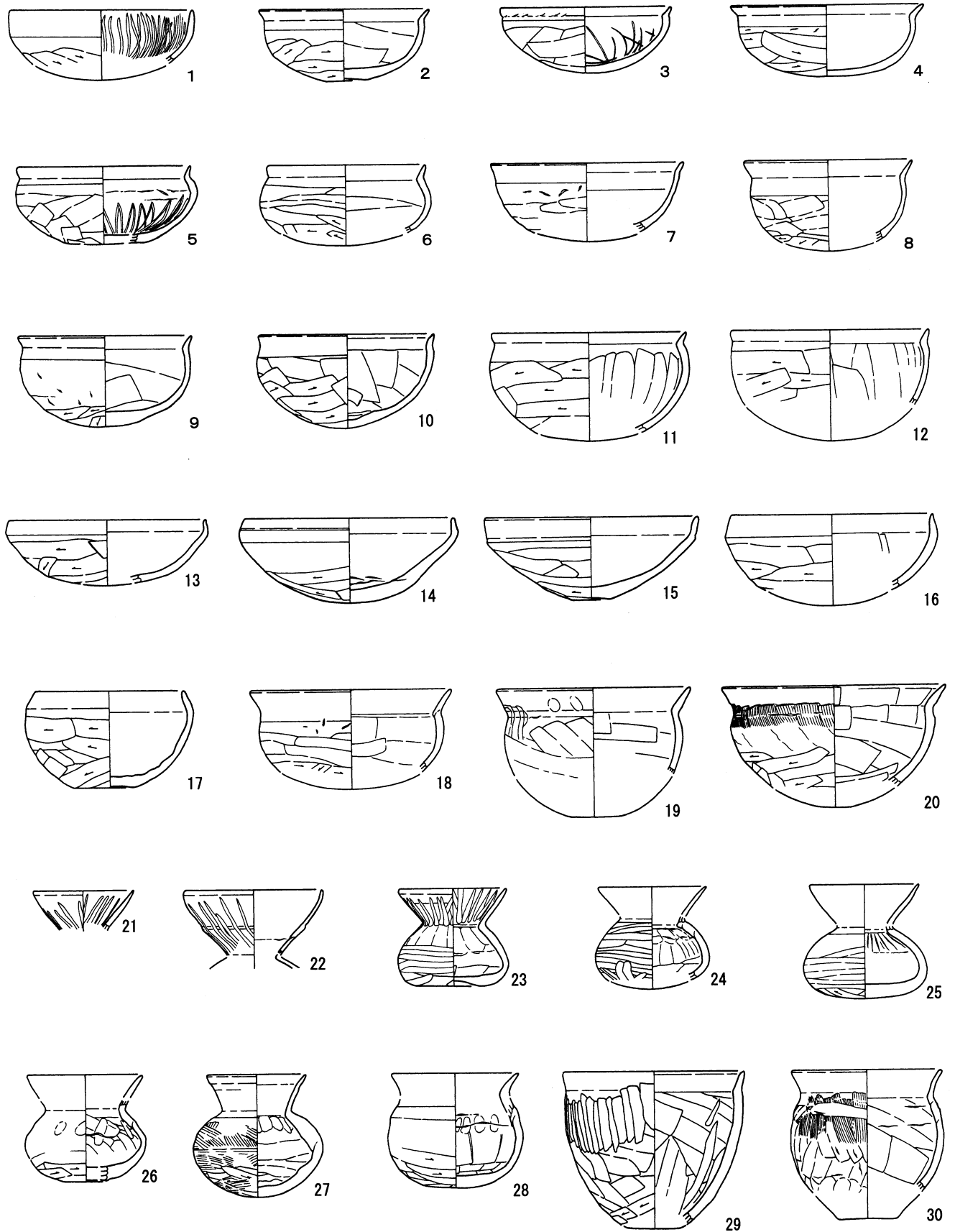
第15号住居跡は調査区中央やや西寄りのK-14グリッドに位置する。

平面形は横長の長方形で、規模は長軸長3.80m、短軸長3.00m、床面までの深さは0.28mである。主軸方位はN-135°-Wを指す。

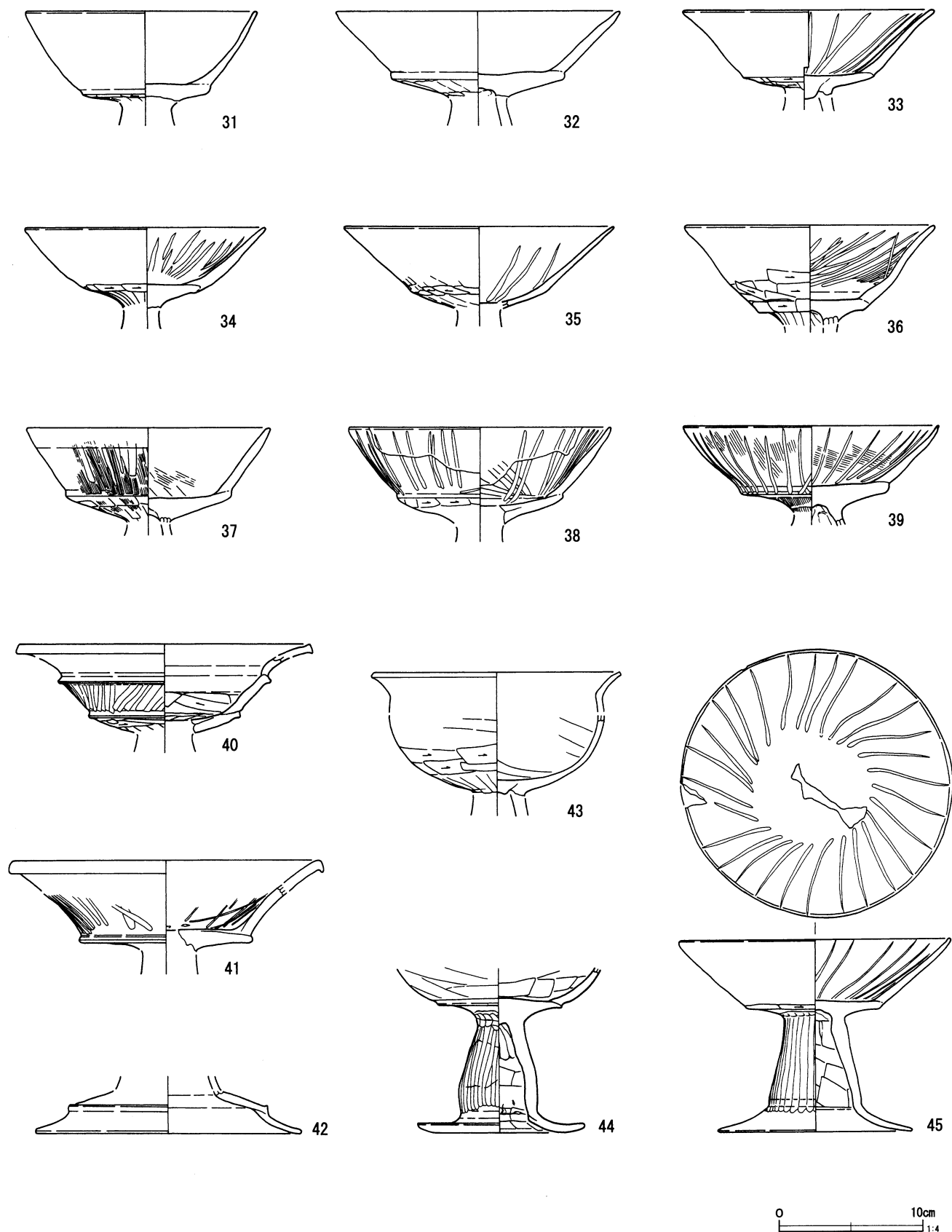
床面は平坦である。埋土は第1層にローム粒子の混入が目立ったが、概ね自然堆積と考えられた。

カマドは南西壁の西寄りに設置されていた。通例のカマドとは異なるが、白色粘土が0.60×0.60m、半円形の範囲に分布し(第1層)、その上面に径0.15mで楕円形の弱い焼け面が確認された。焼け面の位置をカマド燃焼部と考えると、貯蔵穴が接近しすぎるとも思える。

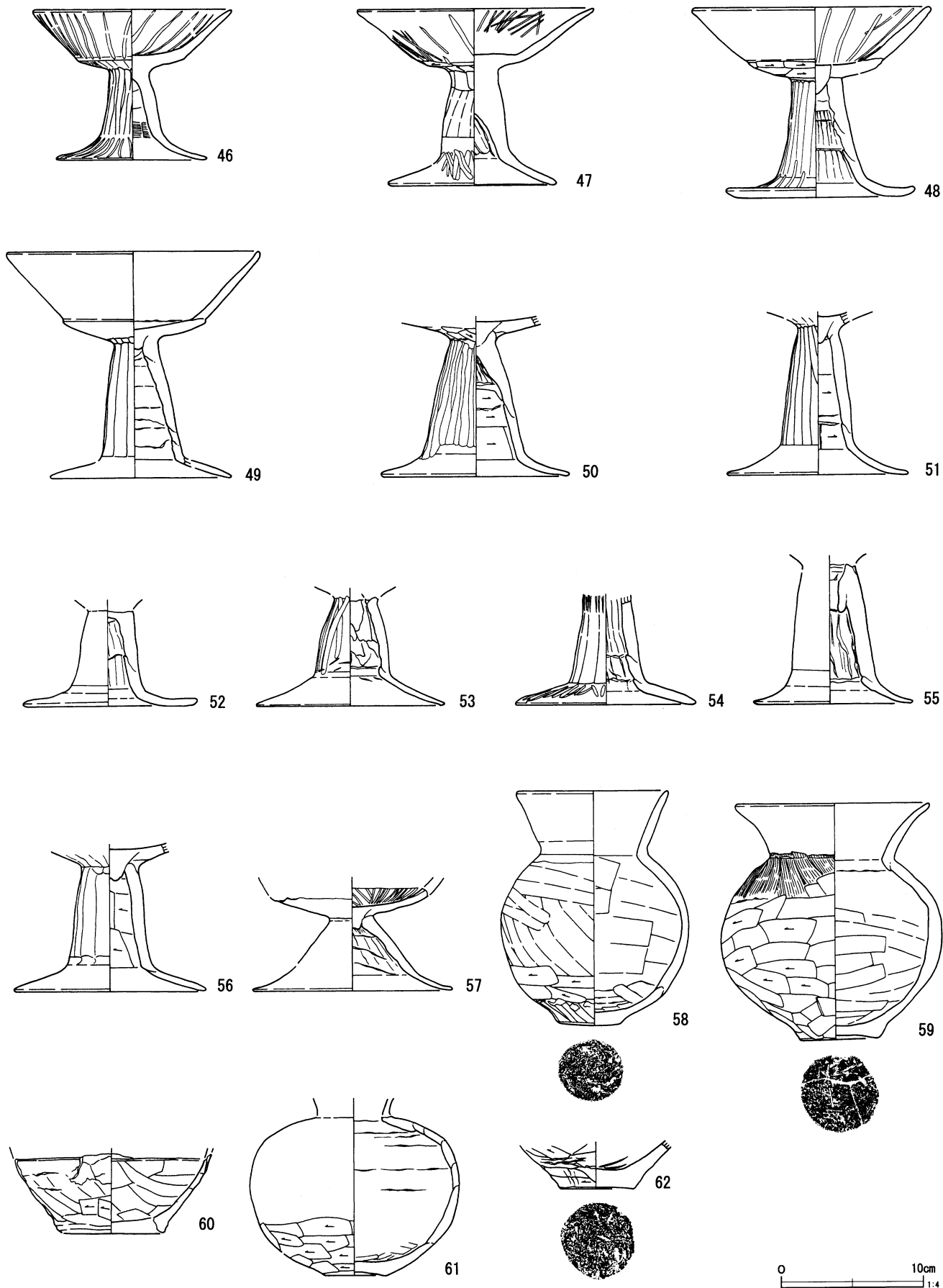
貯蔵穴はカマド脇の西隅部に位置する。円形で、



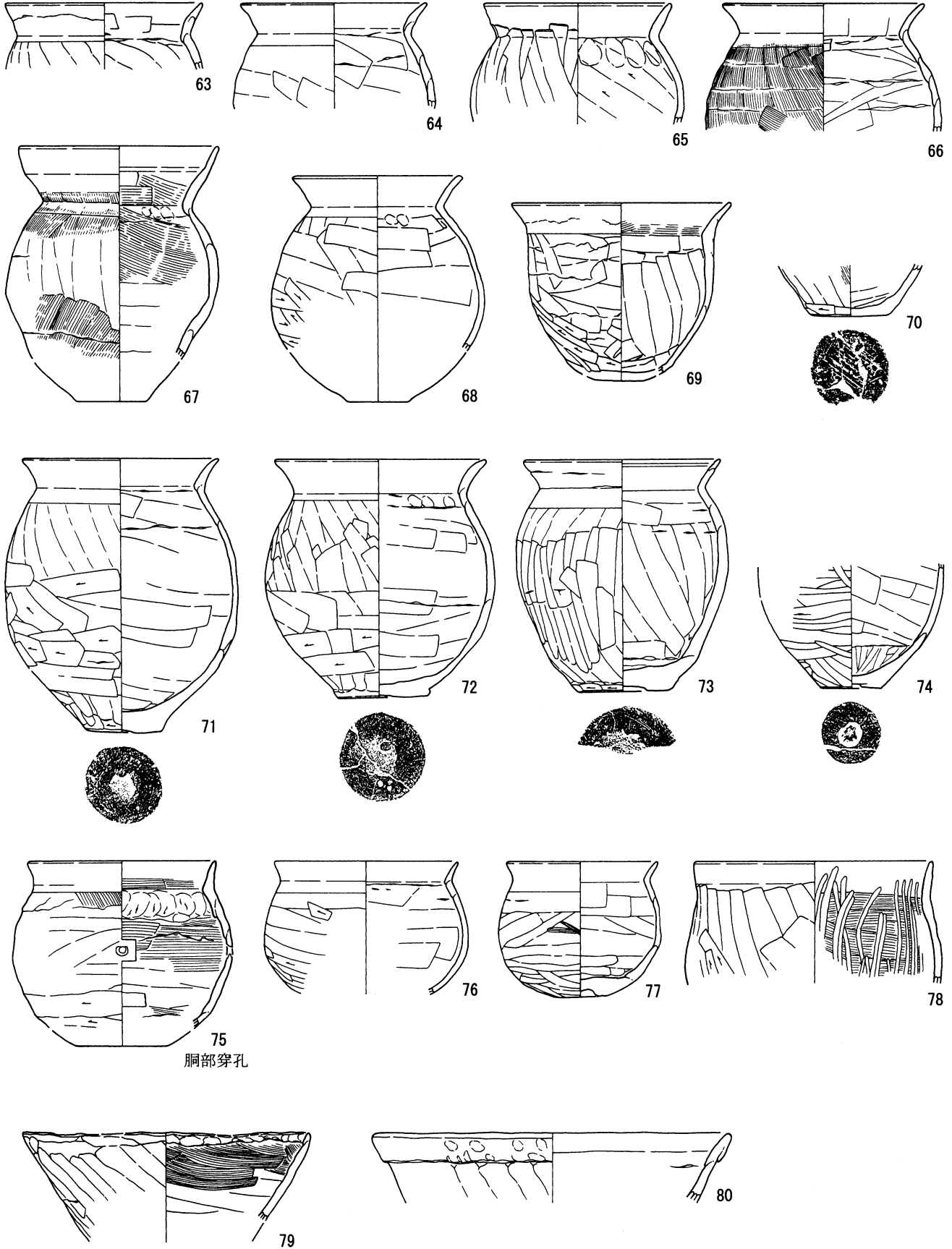
第196图 第14号住居跡出土遺物(1)



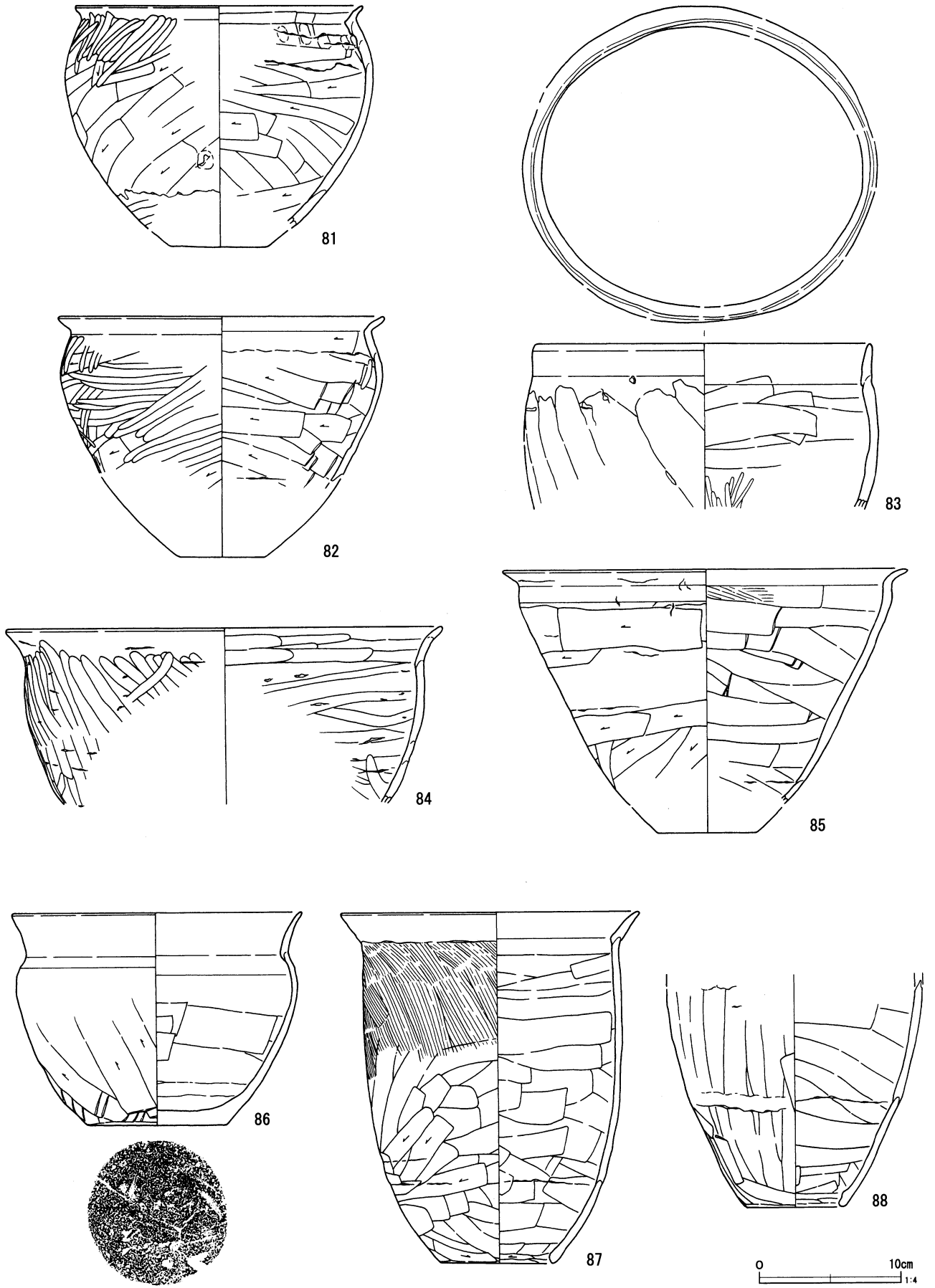
第197図 第14号住居跡出土遺物（2）



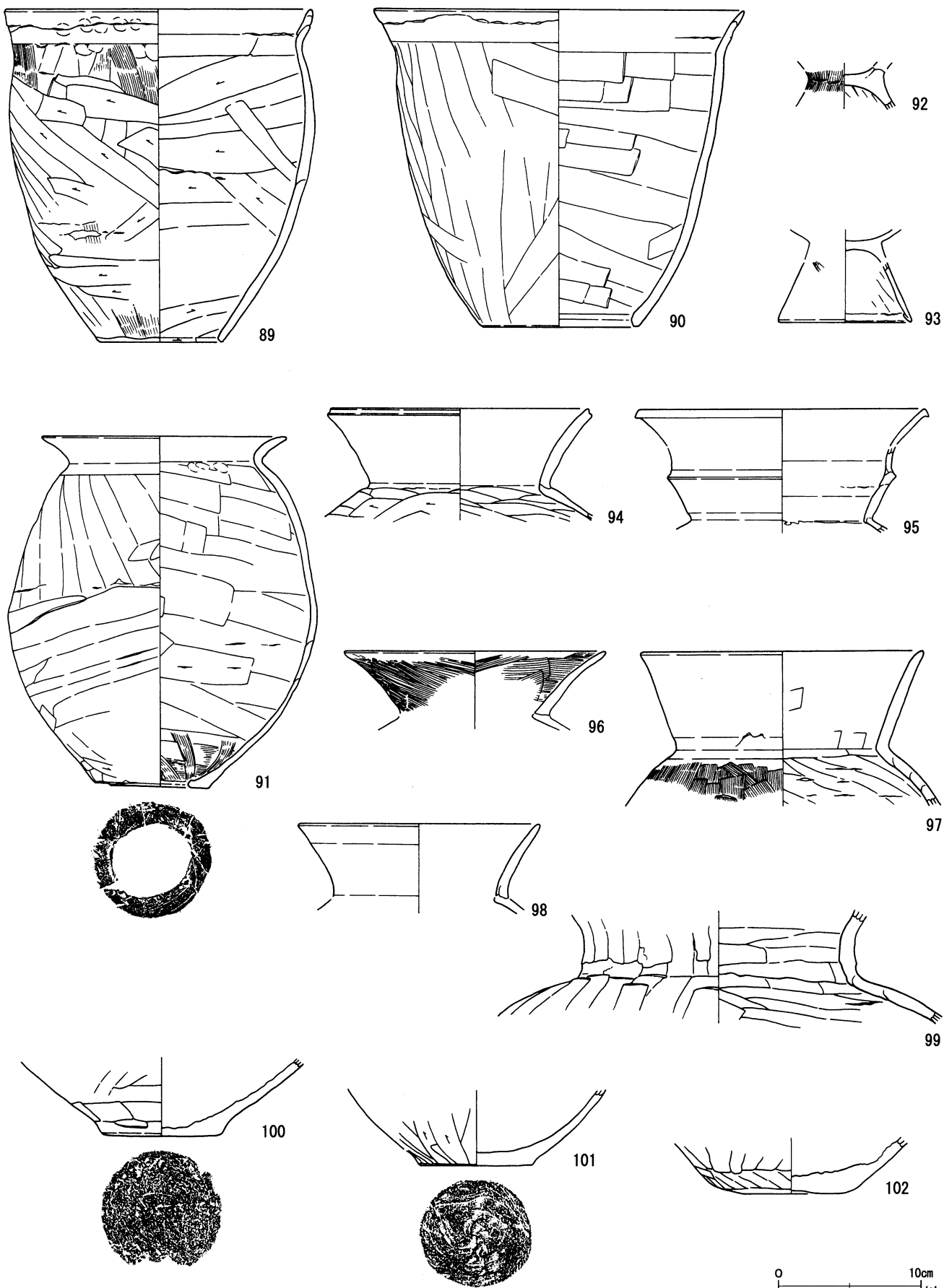
第198图 第14号住居跡出土遺物 (3)



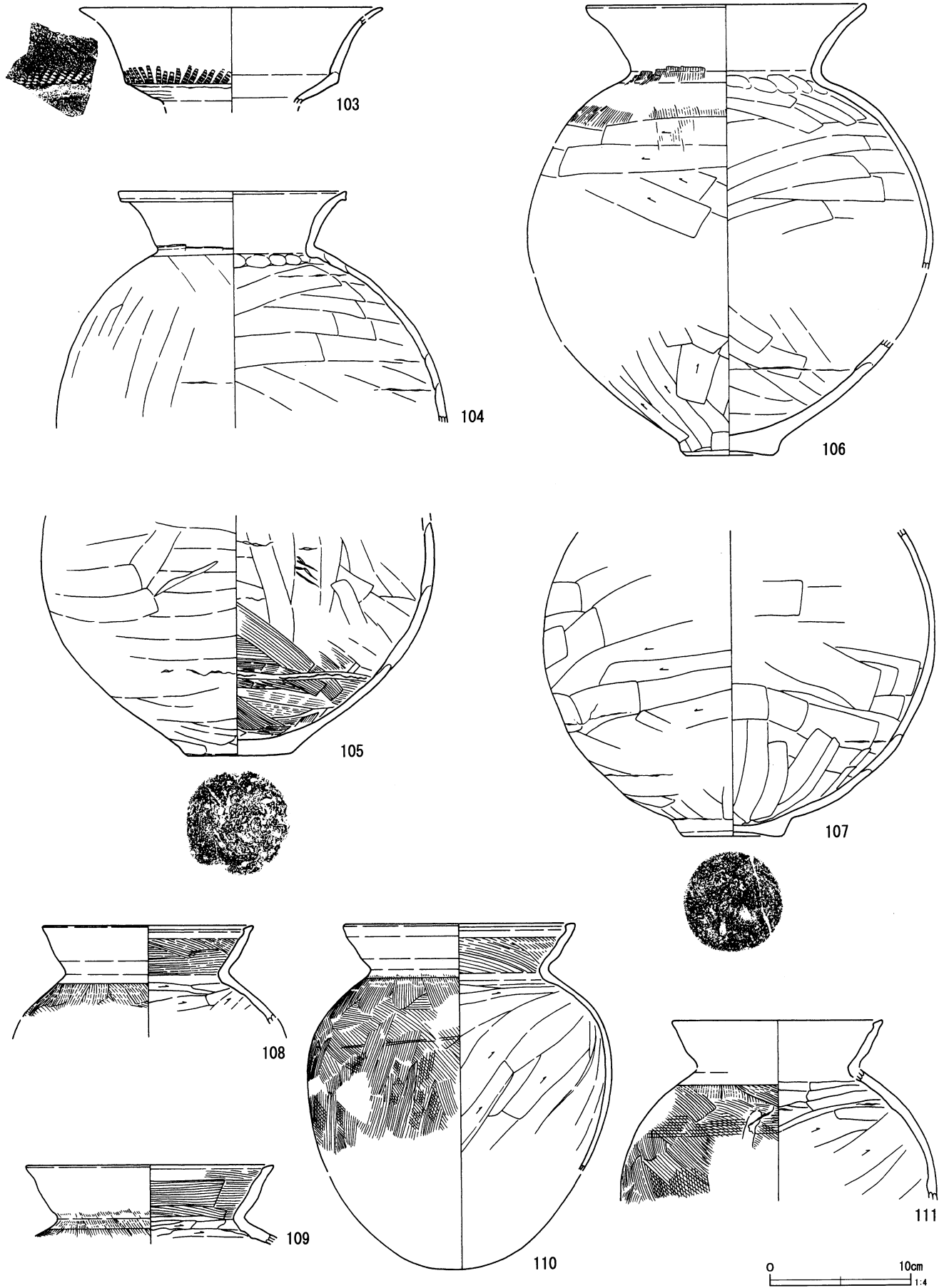
第199图 第14号住居跡出土遺物（4）



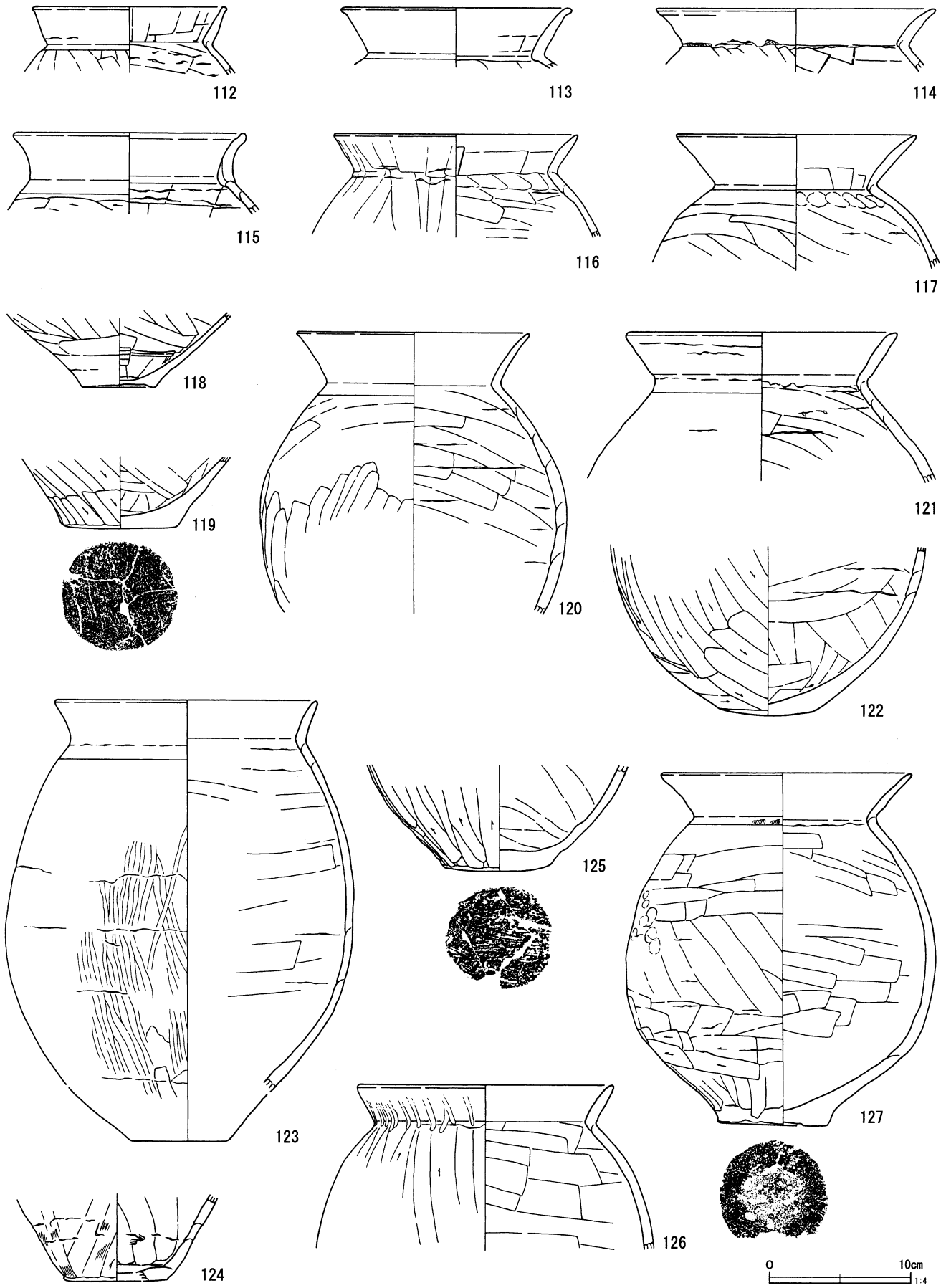
第200図 第14号住居跡出土遺物(5)



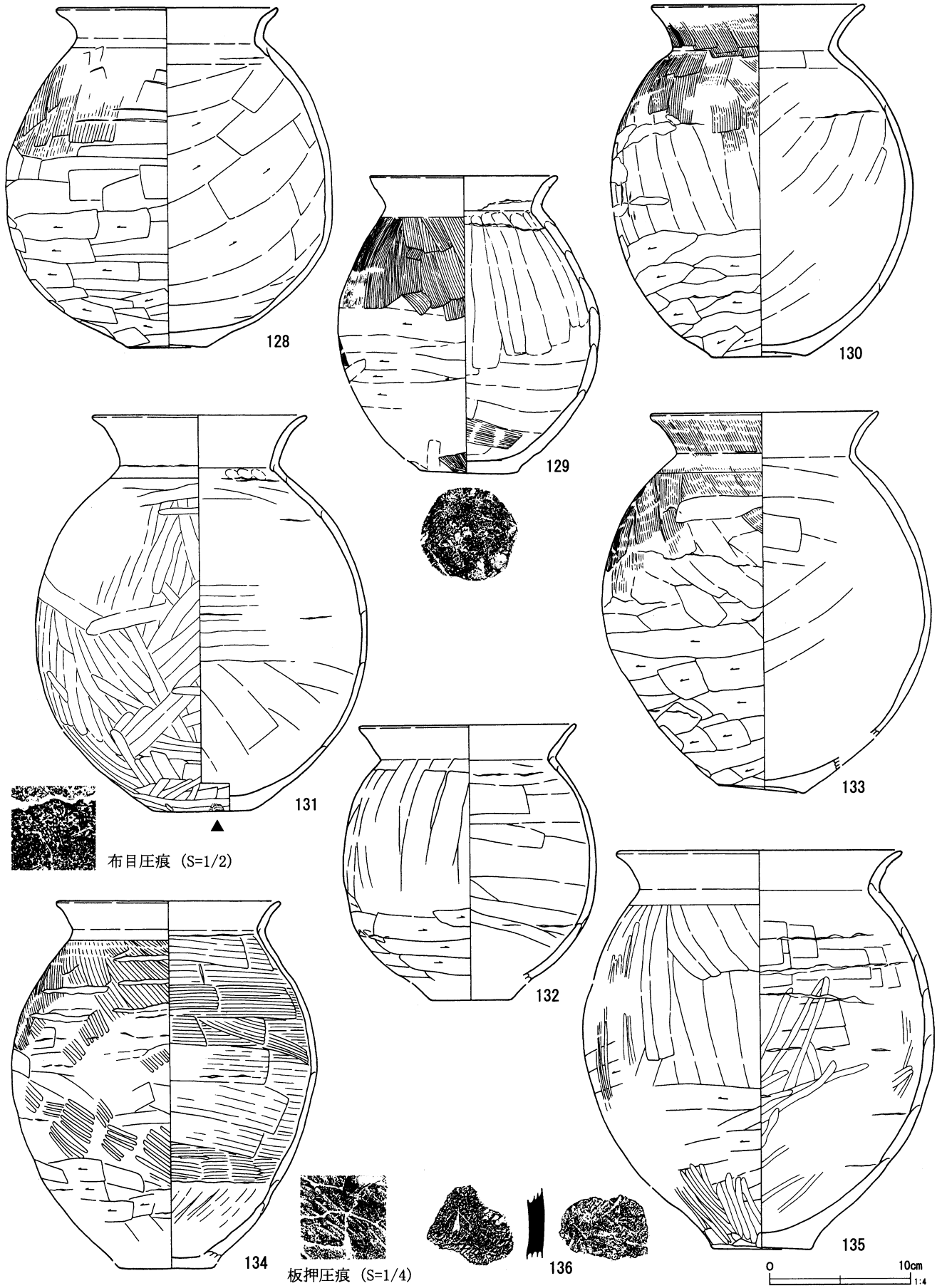
第201図 第14号住居跡出土遺物（6）



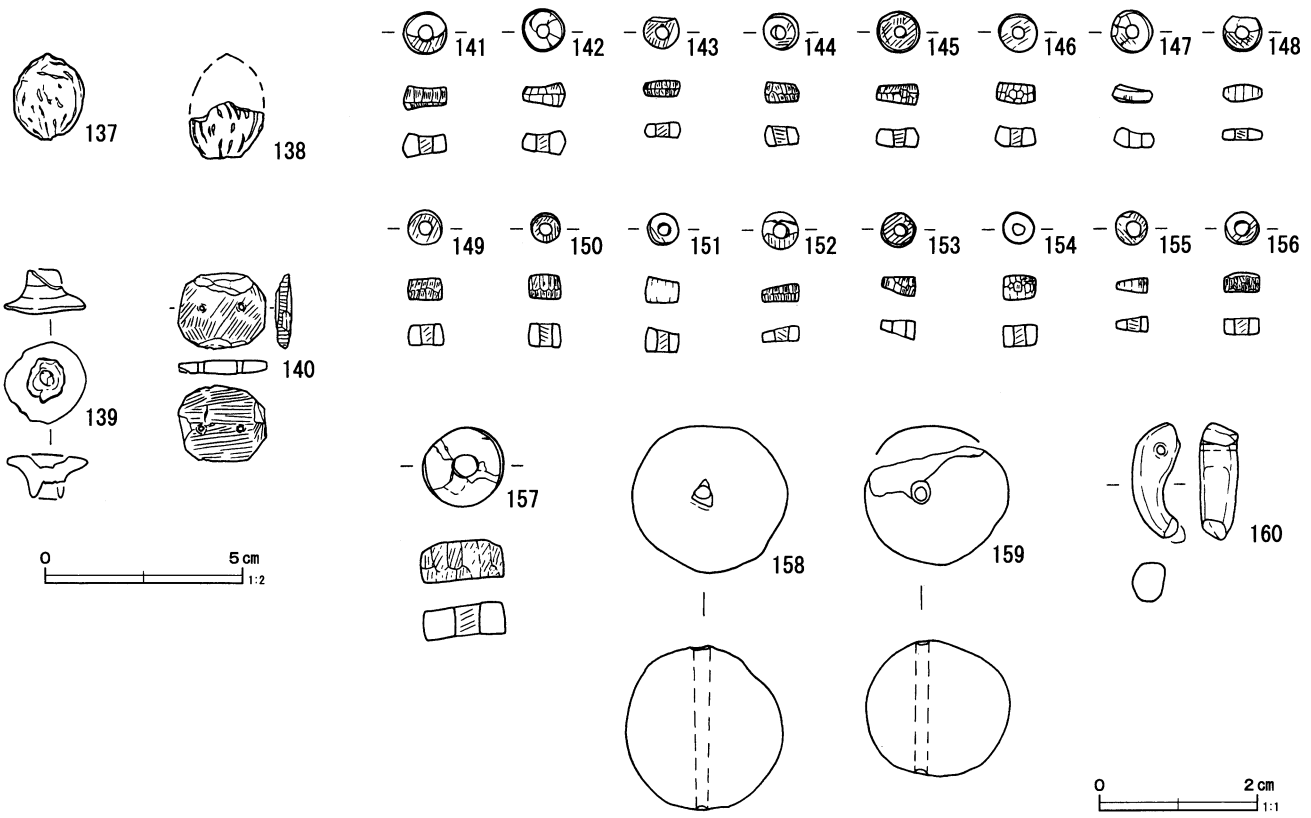
第202図 第14号住居跡出土遺物 (7)



第203図 第14号住居跡出土遺物 (8)



第204图 第14号住居跡出土遺物 (9)



第205図 第14号住居跡出土遺物 (10)

第66表 第14号住居跡出土遺物観察表 (第196~205図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 坏	埋土	(12.7) [4.8]		10	A・B・C・D・F	良好 橙2.5YR6/6	内面放射暗文
2	土師器 坏	カマド左袖際 床面直上	(11.8) 5.1	2.7	75	A・D・F・J	良好 橙2.5YR6/8	底部小さな上げ底
3	土師器 坏	中央部 床面直上	11.9 4.6		95	A・B・F・J	良好 赤橙10R6/6	内斜口縁坏 体部内面まばらなヘラ ミガキ、口唇部直下外面爪痕
4	土師器 坏	東部 床面直上	13.5 5.1		100	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	内外面磨耗顕著
5	土師器 坏	西南部 床面直上	12.1 [5.4]		75	A・B・C・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	体部外面ヘラナデ、内面に松葉状の 暗文を施す
6	土師器 坏	床面直上	10.9 [4.8]		80	A・D・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胎土精選
7	土師器 坏	埋土	(13.4) [4.9]		30	A・B・I	良好 橙7.5YR6/6	体部外面弱いナデ
8	土師器 塊	貯蔵穴1 底面上50cm	(11.8) [5.8]		30	A・B・C・F・J	良好 にぶい褐7.5YR5/4	体部外面ナデ
9	土師器 塊	中央部 床面直上	12.0 6.5		85	A・B・C・D・F	良好 にぶい赤褐5YR5/4	底部外面ヘラケズリ、体部外面に亀 裂痕有り
10	土師器 塊	南部 床面直上	12.3 6.6		90	A・B・F・J	良好 明赤褐5YR5/8	体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ 内底面丸く窪む
11	土師器 塊	床面直上	(13.6) [7.1]		45	A・B・C・F・J	普通 明赤褐2.5YR5/6	体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ
12	土師器 塊	埋土	(13.9) [5.3]		25	A・B・F・J	普通 明赤褐2.5YR5/6	体部内面縦方向のヘラナデ
13	土師器 坏	カマド周辺	(13.8) [4.5]		50	A・B・C・F・J	良好 橙5YR6/6	口縁部短く直立する
14	土師器 塊	北西部 床面上3cm	14.7 6.0		95	A・B・C・F・I	良好 明赤褐2.5YR5/6	体部外面ヘラケズリ
15	土師器 坏	中央部南寄り 床面直上	14.9 5.8	2.6	95	A・B・C・D・F	普通 明赤褐2.5YR5/6	定型化以前の模倣坏 底部周辺外面 ヘラケズリ
16	土師器 坏	中央部 床面直上	14.1 [5.3]		80	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	口縁部に弱い稜を作る 体部下半ヘ ラケズリ

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
17	土師器 壺	貯蔵穴2 底面上6cm	10.4 6.8	4.3	100	A・B・F・G・J	不良 明赤褐2.5YR5/8	内外面が荒れる
18	土師器 壺	埋土	(14.0) [5.8]		30	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐5YR4/4	体部外面弱いナデ
19	土師器 壺	埋土	(13.5) [6.1]		20	A・C・F・I・K	良好 橙5YR6/6	体部外面弱いヘラナデ
20	土師器 壺	貯蔵穴2 床面上9cm	15.7 [7.1]		90	A・B・C・F・J	普通 赤褐5YR4/6	内外面が荒れる
21	土師器 埴	中央部 床面直上	(7.1) [2.8]		30	A・B・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	口縁部内外面暗文
22	土師器 埴	埋土	(9.6) [4.6]		35	A・B・F・G・J	良好 明赤褐5YR5/8	口縁部有段、外面暗文
23	土師器 埴	貯蔵穴1 底面上43cm	7.4 6.9	7.7 4.8	100	A・B・C・F・K	良好 橙2.5YR6/6	口縁部内外面ヘラミガキ 上げ底
24	土師器 埴	中央部 床面上7cm	[4.5]	8.0	70	A・B・G・J	良好 橙2.5YR6/6	体部偏円形
25	土師器 埴	東部 床面直上	5.0	8.7	70	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	体部偏円形
26	土師器 埴	床面直上	[5.7]	(3.0)	50	A・C・F・G	良好 にぶい赤褐5YR4/4	小さな平底をもつ
27	土師器 埴	P1底面直上	6.8 8.6	9.1	90	A・C・F・G・J	良好 橙5YR6/6	丸底 胴部外面粗いハケメ
28	土師器 埴	中央部 床面直上	[6.2]	9.5	45	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	底部外面ヘラケズリやや粗雑
29	土師器 鉢	西部 床面上3cm	(12.7) [11.7]		25	A・B・C・F・J	良好 赤褐5YR4/6	体部外面上半ミガキに近いヘラナデ
30	土師器 鉢	中央部 床面直上	10.4 [8.6]	(10.8)	45	A・B・F・G・J	良好 橙2.5YR5/6	胴部上半、木口状工具によるナデ
31	土師器 高坏	貯蔵穴1 底面上6cm	(15.8) [6.3]		50	A・B・C・F・J	良好 橙2.5YR6/6	坏部内外面ともヨコナデを施す
32	土師器 高坏	西部 床面直上	(19.6) [6.0]		35	A・B・D・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内外面ともヨコナデを丁寧に施す
33	土師器 高坏	埋土	(17.4) [6.2]		40	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内面放射暗文を施す
34	土師器 高坏	カマド周辺 床面直上	16.6 [5.8]		80	A・B・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	坏部内面まばらなヘラミガキ
35	土師器 高坏	南部 床面直上	(18.6) [5.8]		40	A・B・D・F・G	良好 橙2.5YR6/6	坏部内面まばらに暗文を施す
36	土師器 高坏	南部 床面上4cm	17.2 [7.6]		95	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部外面下端ヘラケズリ、内面放射暗文
37	土師器 高坏	カマド	(16.8) [6.6]		30	A・B・C・F・J	良好 にぶい褐7.5YR6/4	坏部外面細かなハケメを残す
38	土師器 高坏	埋土	(18.0) [6.8]		40	A・D・F・J	普通 橙2.5YR6/8	坏部内外面とも放射暗文を施す
39	土師器 高坏	南部 床面直上	17.6 [7.0]		95	A・C・D・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内外面ともハケメ後、放射暗文
40	土師器 高坏	カマド	[5.3]		50	A・B・C・D・F	良好 赤橙10R6/6	有段口縁高坏
41	土師器 高坏	南部 床面上10cm	[4.8]		70	A・B・C・D・K	良好 橙2.5YR6/8	坏部内外面、暗文を施す
42	土師器 高坏	南部 床面直上	[2.9]	(18.4)	25	A・B・C・F・G	良好 赤褐5YR4/6	有段脚高坏
43	土師器 脚付壺か	カマド左袖際 床面直上	[5.7]		55	A・B・C・F・G	良好 橙5YR6/6	体部外面ヘラケズリ 図上復元
44	土師器 高坏	南部 床面上6cm	[11.5]	11.7	70	A・D・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	壺状の坏部 柱状部やや雑なミガキ
45	土師器 高坏	貯蔵穴1 床面上9cm	18.8 13.4	13.4	80	A・D・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内面放射暗文を施す
46	土師器 高坏	P2周辺 床面直上	13.7 10.6	10.4	75	A・B・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内外面及び裾部外面放射暗文
47	土師器 高坏	カマド右袖 床面上16cm	16.6 12.4	(11.8)	70	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	坏部内外面暗文を施す
48	土師器 高坏	南部 床面直上	16.5 13.4	(13.3)	70	A・B・C・F・J	普通 にぶい赤褐5YR5/4	坏部内面放射暗文、裾部外面暗文
49	土師器 高坏	南部 床面直上	17.5 [15.2]		95	A・C・D・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	柱状部外面ナデ
50	土師器 高坏	南壁寄り 床面上3cm	[6.0]	13.3	70	A・C・D・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	柱状部内面上半絞り目、下半ヘラケズリ
51	土師器 高坏	南部 床面直上	[11.2]	(12.8)	70	A・B・D・F・G	良好 明赤褐5YR5/6	胎土精選 柱状部内面ヘラケズリ

番号	種別	出土位置	口径器高	最大直径底	残存	胎土	焼成色調	備考
52	土師器高坏	貯蔵穴1底面直上	[6.7]	12.2	脚部	A・B・C・F・J	良好 橙2.5YR6/6	裾部内外面ヨコナデを施す
53	土師器高坏	貯蔵穴1際床面直上	[7.5]	13.2	75	A・D・F・J	良好 にぶい褐7.5YR5/4	柱状部外面粗いヘラミガキを施す
54	土師器高坏	西部床面直上	[7.7]	12.7	100	A・B・D・F・J	良好 橙2.5YR6/6	裾部外面に松葉状の暗文を施す
55	土師器高坏	北西部床面直上	[9.5]	(11.3)	75	A・B・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	柱状部内面絞り目顕著
56	土師器高坏	北部床面上3cm	[10.4]	(13.5)	65	A・B・C・D・F	普通 明赤褐2.5YR5/6	外面器面磨耗 調整不明瞭
57	土師器高坏	中央部床面直上	[7.2]	(14.1)	80	A・B・C・G・J	普通 明赤褐2.5YR5/6	坏部内面放射暗文を施す
58	土師器小型壺	西部床面直上	10.4 16.5	13.1 4.5	90	A・B・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	胴部下半外面ヘラケズリ
59	土師器小型甕	南部床面直上	13.5 16.7	15.6 5.6	60	A・B・F・G・J	良好 にぶい橙2.5YR6/4	胴部外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ
60	土師器小型壺	中央部南寄り床面直上	[5.5]	(7.0)	35	A・C・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	胴部下半の接合部で剝離している調整は全体に粗雑
61	土師器小型壺	貯蔵穴1周辺床面直上	[11.2]	14.7 4.1	60	A・C・D・G・J	良好 にぶい橙2.5YR6/4	外面器面が磨耗する
62	土師器壺	南東部床面直上	[3.4]	5.0	70	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	底部外面ヘラケズリ
63	土師器小型甕	中央部床面直上	(13.6) [4.7]		45	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	口縁部外面に粘土紐痕を残す
64	土師器小型甕	中央部床面上3cm	(12.9) [7.4]	(14.1)	20	A・B・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	胴部内外面とも丁寧なナデ
65	土師器小型甕	中央部床面直上	(12.8) [8.5]		50	A・B・D・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部内面ヘラケズリに近いナデ
66	土師器小型甕	西部床面直上	(13.9) [9.1]	(16.4)	25	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	胴部外面木口状工具によるナデ
67	土師器小型甕	P3周辺床面直上	(13.8) [15.0]	(14.8)	30	A・B・F・G・J	良好 明赤褐5YR5/6	胴部外面ハケメ後ナデ調整 内外面が荒れる
68	土師器小型甕	西部床面直上	(11.4) [12.3]	(14.8)	20	A・B・D・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	口唇部面取り
69	土師器小型甕	埋土	(15.1) [12.0]		35	A・B・C・F・G	良好 にぶい黄橙10YR7/2	胴部外面に粘土紐接合痕を残す
70	土師器甕	西部床面上5cm	[3.6]	5.5	底部	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	底部外面下端ヘラケズリ
71	土師器小型甕	P3周辺床面直上	13.5 19.1	16.2 5.2	60	A・B・F・J	良好 赤褐5YR4/6	胴部外面上半ナデ、下半ヘラケズリ
72	土師器小型甕	P3周辺床面直上	(14.6) 16.7	16.0 6.2	75	A・B・D・F・G	良好 赤褐2.5YR4/8	胴部外面上半ヘラナデ、下半ヘラケズリ
73	土師器小型甕	中央部床面上3cm	(13.6) 16.2	14.8 (6.3)	35	A・B・F・J	良好 褐7.5YR4/4	口縁部歪みが大きい
74	土師器小型甕	中央部床面直上	[8.5]	(13.0) 4.3	60	A・B・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	胴部外面光沢のあるナデ
75	土師器小型甕	西部床面直上	13.0 [11.8]	15.3	35	A・B・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部中央に焼成後の小穿孔がある
76	土師器鉢	埋土	(12.8) [9.3]	(14.2)	35	A・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	体部外面弱いヘラケズリ
77	土師器鉢	貯蔵穴1底面上22cm	10.4 9.4	11.3 2.8	95	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	体部内外面にスス付着
78	土師器鉢	P3周辺床面直上	(16.4) [8.5]	(18.0)	20	A・B・C・F・J	良好 にぶい橙2.5YR6/4	体部外面ヘラナデ、内面木口状工具によるナデの後ヘラミガキ
79	土師器鉢	西部床面上5cm	19.8 [7.6]		70	A・B・D・G・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	粗雑な調整 口縁部内面に粘土紐痕を残す 甗の可能性もある
80	土師器鉢	中央部床面直上	(24.6) [4.9]		10	A・B・C・F・J	良好 橙7.5YR6/6	甗の可能性あり 折返し口縁
81	土師器鉢	中央部床面直上	(20.0) [15.8]	(21.6)	25	A・B・C・F・J	普通 明赤褐2.5YR5/6	体部外面上半丁寧なナデ、下半ヘラケズリ
82	土師器平底鉢	中央部床面直上	(22.6) [11.7]		25	A・C・D・F・J	良好 赤褐5YR4/6	胴部外面ヘラケズリ後ミガキを丁寧に施す 内面はヘラケズリに近いヘラナデ
83	土師器鉢	北西部床面直上	23.6 [11.7]	(25.0)	60	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	口縁部楕円形に歪む(21.0×23.6cm) 胴部内面下半ヘラミガキ 甗か
84	土師器大型鉢	東部床面直上	(30.4) [12.4]		15	A・B・C・D・F	良好 にぶい橙7.5YR6/4	体部内外面とも丁寧にナデを施す
85	土師器鉢	南部床面直上	28.4 [16.5]		60	A・C・D・J	良好 赤褐5YR4/6	口縁部楕円形に歪む(27.2×28.8cm) 甗か
86	土師器平底鉢	P1周辺床面直上	(20.3) 15.0	19.8 9.7	75	A・B・D・F・J	良好 にぶい赤褐5YR5/4	内外面器面荒れる

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
87	土師器甗	中央部 床面直上	20.8 [24.8]	18.0 7.8	55	A・D・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部外面上半木口状工具によるナデ
88	土師器甗	北西部 床面直上	[15.9]	17.9 6.6	30	A・D・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部下半外面に使用痕を示す擦痕有り
89	土師器甗	南部 床面直上	21.3 23.3	(8.6)	60	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR4/4	胴部外面ハケメ後、ヘラケズリ
90	土師器甗	P 3 周辺 床面直上	(25.6) 22.4	10.6	55	A・C・F・G・I	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部下半内面使用による磨耗顕著
91	土師器甗	中央部 床面直上	17.0 24.5	21.5 8.0	75	A・B・C・F・J	普通 橙5YR6/8	孔径(5.5×4.9cm) 口縁部大きく外反する
92	土師器台付甗	カマド	[2.9]		85	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	外面ハケメ調整
93	土師器台付甗	埋土	[4.2]	(9.2)	10	A・B・F・G	良好 にぶい黄橙10YR6/4	S字状口縁台付甗
94	土師器壺	中央部 床面直上	(18.0) [7.6]		45	A・B・C・F・J	良好 にぶい黄橙10YR6/4	口唇部棒状工具による沈線を巡らす
95	土師器壺	埋土	[6.0]		25	A・D・F・G・J	良好 赤褐5YR4/6	有段口縁壺 内外面ともヨコナデ
96	土師器壺	埋土	(18.0) [4.8]		40	A・C・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	内外面とも細かいハケメを良く残す
97	土師器壺	床面直上	(19.6) [10.3]		20	A・B・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部外面細かいハケメ調整
98	土師器壺	南部 床面上 7 cm	16.7 [5.2]		70	A・B・C・D・F	普通 橙5YR6/8	口縁部内面磨耗のため器面が荒れる
99	土師器大型壺	カマド	[7.9]		20	A・B・F・G・J	普通 にぶい橙7.5YR7/4	口縁部外面、器面に粘土をナデつけている
100	土師器壺	中央部 床面直上	8.2 [5.5]		60	A・B・C・F・G	普通 橙5YR6/6	内面の器面が全体にハゼる
101	土師器壺	埋土	[5.3]	8.0	70	A・B・C・F・J	良好 褐7.5YR4/6	内面の器面の剥落顕著
102	土師器大型壺	西部 床面上 8 cm		6.6	75	A・C・D・F・J	不良 橙2.5YR6/6	内面の器面が剥落する
103	土師器壺	埋土	[6.2]		30	A・B・C・F・J	普通 黄橙7.5YR7/8	口縁部下端に櫛歯状工具の刺突痕
104	土師器壺	西部 床面直上	15.9 [16.8]	(27.6)	40	A・B・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	胴部外面弱いヘラナデ 口唇部面取り
105	土師器壺	貯蔵穴 2 周辺 床面上 3 cm	[16.4]	(27.8) 7.8	30	A・B・D・F・K	普通 橙7.5YR6/6	胴部外面下半磨耗
106	土師器甗	東部 床面直上	(19.6) (32.0)	(28.8) (7.0)	30	A・B・C・F・J	良好 橙5YR6/8	内外面剥落顕著 図上復元
107	土師器壺	西部 床面直上	[21.5]	(27.7) 7.0	40	A・D・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部外面ヘラケズリ後弱いナデ
108	土師器甗	西部 床面直上	14.8 [7.0]		95	A・D・F・G・J	良好 橙5YR6/6	布留式系甗 胴部外面ハケメ、内面ヘラケズリ
109	土師器甗	貯蔵穴 1 底面上 6 cm	17.4 [5.6]		60	A・B・C・F・K	良好 橙5YR6/8	布留式系甗 胎土中に小礫を多く含む
110	土師器甗	中央部 床面直上	16.3 [17.6]	21.5	60	A・B・D・G・J	良好 にぶい橙5YR6/4	布留式系甗 外面スス付着 復元器高24.5cm
111	土師器甗	中央部南寄り 床面上 3 cm	[9.3]	(22.4)	10	A・C・D・J	良好 橙2.5YR6/6	布留式系甗
112	土師器甗	埋土	(13.2) [4.8]		30	A・B・F・J	良好 明赤褐5YR5/8	口縁部外面ハケメをかすかに残す
113	土師器甗	中央部北寄り 床面直上	(15.8) [4.3]		60	A・D・F・H・J	良好 赤褐5YR4/6	胎土精選
114	土師器甗	中央部 床面直上	(19.3) [4.5]		20	A・B・E・F・I	良好 にぶい橙5YR6/4	口縁部外面厚くススが残る
115	土師器甗	中央部 床面直上	16.0 [5.7]		80	A・B・F・I・K	良好 明赤褐5YR5/8	口縁部外面スス付着 胎土中に小礫を多量に含む
116	土師器甗	中央部 床面上 3 cm	(17.0) [7.3]		25	A・B・C・F・I	良好 にぶい橙7.5YR6/4	胴部外面ヘラナデ
117	土師器甗	貯蔵穴 埋土	16.6 [9.6]		25	A・B・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部外面丁寧なヘラナデ
118	土師器甗	貯蔵穴 1 底面上 6 cm	[5.4]	5.2	90	A・B・F・K	良好 にぶい褐7.5YR5/4	内面スス状の付着物
119	土師器甗	南部 床面直上	[5.0]	(8.1)	75	A・D・F・I・K	良好 橙7.5YR6/6	底部外面ヘラケズリ
120	土師器甗	西部 床面直上	(16.2) [19.8]	(21.7)	50	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	胴部下半斜め方向のナデ
121	土師器甗	南部 床面直上	(18.7) [10.6]	(24.5)	40	A・B・C・F・J	良好 にぶい橙7.5YR7/4	口縁部形態は布留式系甗の影響か

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考	
122	土師器甕	南部床面直上	[11.8]	(22.2) 6.6	70	A・B・C・F・J	普通 にぶい橙7.5YR7/4	底部外面ヘラケズリ	
123	土師器甕	貯蔵穴2床面直上	(18.3) [27.5]	24.4	50	A・B・C・G・J	普通 にぶい黄橙10YR6/4	胴部外面ヘラミガキを施す 粘土紐巻き上げ単位による凹凸が残る	
124	土師器甕	P3周辺床面直上	[6.1]	(7.0)	30	A・B・F・I	良好 赤褐5YR4/6	内外面とも粘土紐痕を残す	
125	土師器甕	中央部床面直上	[7.4]	7.3	70	A・B・C・F・K	良好 にぶい赤褐5YR5/4	底部内面スス付着 胎土中に小礫の混入目立つ	
126	土師器甕	中央部床面上3cm	(17.8) [11.7]	(23.9)	15	A・B・C・F・K	普通 にぶい橙7.5YR7/4	口縁部外面粗いヘラミガキ	
127	土師器甕	貯蔵穴1底面直上	17.3 24.7	21.8 7.6	70	A・B・C・F・I	良好 にぶい橙5YR6/4	胴部下半外面ヘラケズリ	
128	土師器甕	中央部南寄り床面直上	15.4 24.1	23.0 5.4	90	A・C・D・F・J	良好 赤褐5YR4/6	胴部上半にヘラオサエ痕有り	
129	土師器甕	南部床面上3cm	12.8 21.2	18.5 6.9	80	A・B・C・D	良好 橙5YR6/8	胴部外面上半ハケメ	
130	土師器甕	南部床面直上	14.9 25.0	21.4 6.6	70	A・C・F	良好 橙2.5YR6/6	内面全体に器面剝離する	
131	土師器甕	西部床面直上	(15.0) [28.0]	(23.4) 7.0	50	A・B・C・F・K	良好 橙7.5YR6/6	胴部外面下端に布目圧痕有り 口縁部図上復元	
132	土師器甕	北西部床面上4cm	15.2 [18.2]	17.9	70	A・C・D・G・J	良好 にぶい赤褐5YR5/4	胴部内面の器面剝落顕著	
133	土師器甕	P3周辺床面直上	16.2 26.8	(23.2) 6.0	70	A・B・C・E・J	良好 赤褐5YR4/6	口縁部から胴部上半にかけてハケメ調整後、ナデを施す	
134	土師器甕	南部床面上3cm	15.7 [25.6]	21.7	60	A・B・F・G・J	良好 にぶい赤褐2.5YR4/4	胴部外面粗いハケメを施す	
135	土師器甕	中央部西寄り床面直上	(20.0) 28.2	24.9 7.0	70	A・B・F・I・K	良好 橙5YR6/8	口縁部及び胴部中位外面スス付着	
136	須恵器甕	埋土			破片	A・C・G・K	良好 暗灰黄2.5Y5/2	在地産 外面ナデ調整、内面同心円文当て具痕	
137	自然遺物桃核	埋土	長さ2.2cm 幅1.8cm 厚さ1.4cm 重さ1.9g						
138	自然遺物桃核	埋土	長さ[1.4]cm 幅1.9cm 厚さ1.4cm 重さ0.8g 炭化 上半部欠損						
139	土製品栓形品	床面直上	径2.1×2.0cm 高さ1.2cm 重さ2.1g			A・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	図示上面浅く窪む 用途不明	
140	石製品有孔円板	南西部床面直上	長さ1.94cm 幅2.21cm 厚さ0.34cm 孔径(左)0.10(右)0.11cm 重さ2.33g 滑石 研磨：側面縦外形：側面8 No.3						
158	土製品土玉	P2周辺床面直上	径2.0×1.8cm 高さ2.1cm 孔径0.2~0.1cm 重さ6.9g			A・C・F	良好 赤褐2.5YR4/8	完存 ナデ調整	
159	土製品土玉	埋土	径1.8cm 高さ1.7cm 孔径0.2~0.1cm 重さ4.0g			A・C・F	良好 赤褐2.5YR4/8	一部欠損 ナデ調整	
160	土製品勾玉	埋土	長さ1.42cm 幅0.50cm 厚さ0.51cm 孔径0.12cm 重さ0.34g			A・F	良好 明赤褐5YR5/6	一部欠損 ナデ調整	

第67表 第14号住居跡出土白玉観察表(第205図)

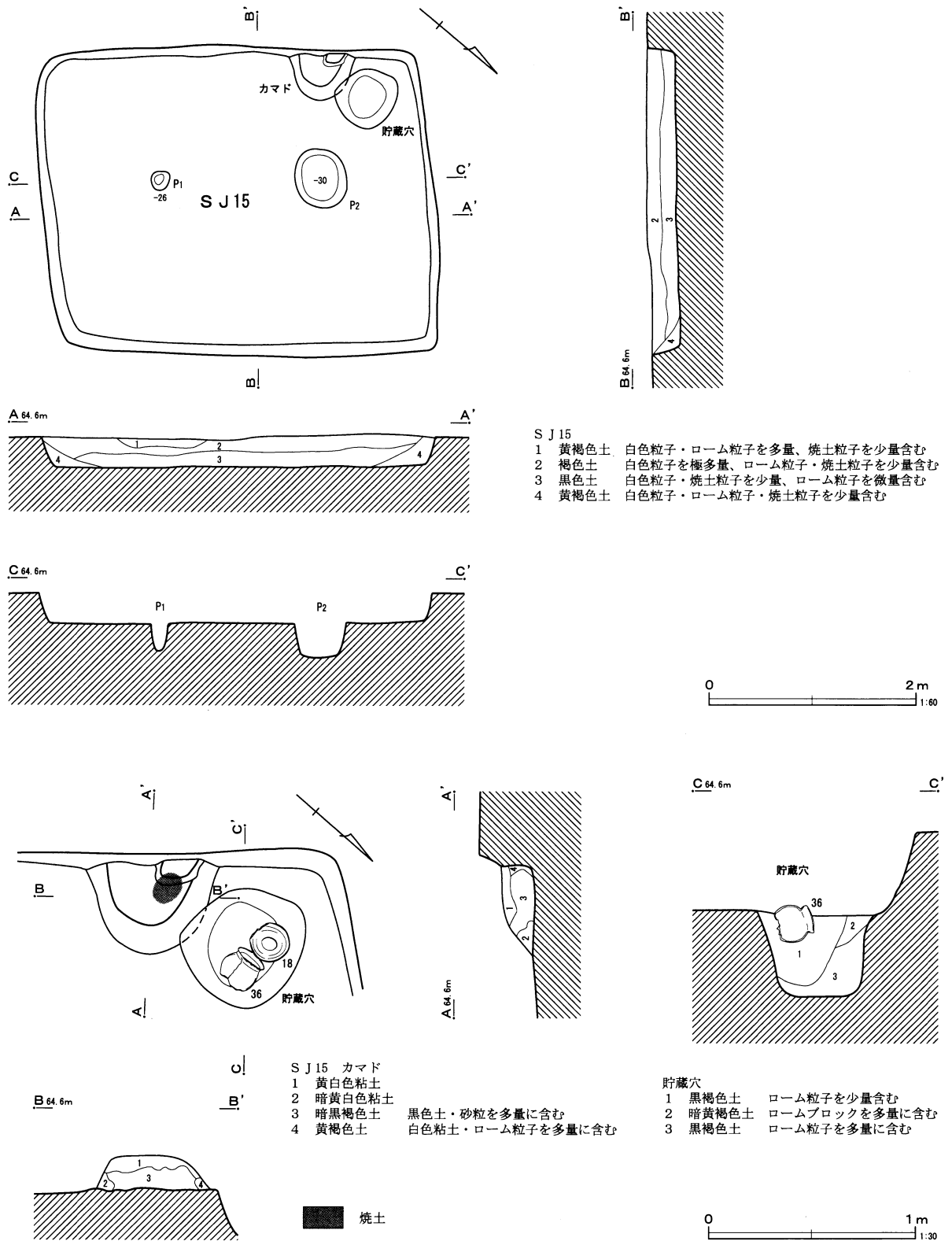
番号	種類	出土位置	最大径(cm)	上面径(cm)	下面径(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石材	段階	研磨	外形
141	白玉	C区床直	0.53	0.52	0.51	0.26	0.18	0.10	滑石	4	上下側面	中央に稜
142	白玉	C区床直	0.53	0.50	0.49	0.27	0.17	0.11	滑石	4	上下側面	中央に稜
143	白玉	E区床直	0.46	0.44	0.44	0.20	0.14	0.06	滑石	4	上下側面	中央に稜
144	白玉	A区床直	0.44	0.41	0.41	0.30	0.14	0.09	滑石	4	上下側面	中央に稜
145	白玉	D区床直	0.53	0.51	0.48	0.25	0.15	0.09	滑石	4	上下側面	中膨れ
146	白玉	C区床直	0.49	0.46	0.48	0.24	0.13	0.10	滑石	4	上下側面	中膨れ
147	白玉	E区床直	0.53	0.50	0.52	0.18	0.16	0.06	滑石	4	上下側面	中膨れ
148	白玉	貯蔵穴1	0.48	0.46	0.46	0.24	0.12	0.07	滑石	4	上下側面	中膨れ
149	白玉	D区床直	0.45	0.40	0.41	0.26	0.15	0.09	滑石	4	上下側面	中膨れ
150	白玉	A区床直	0.39	0.37	0.36	0.30	0.12	0.08	滑石	4	上下側面	中央に稜
151	白玉	B区床直	0.41	0.39	0.38	0.29	0.11	0.08	滑石	4	上下側面	中膨れ
152	白玉	床直	0.46	0.46	0.45	0.19	0.15	0.07	滑石	4	上下側面	直線的
153	白玉	A区床直	0.44	0.40	0.40	0.25	0.14	0.08	滑石	4	上下側面	直線的
154	白玉	B区床直	0.40	0.38	0.37	0.27	0.14	0.07	滑石	4	上下側面	直線的
155	白玉	A区床直	0.43	0.43	0.40	0.21	0.14	0.04	滑石	4	上下側面	直線的
156	白玉	B区床直	0.43	0.40	0.42	0.22	0.13	0.06	滑石	4	上下側面	直線的
157	白玉	B区床直	1.03	0.97	1.01	0.42	0.27	0.74	滑石	4	下側面	直線的

規模は直径0.56m、深さ0.38mである。

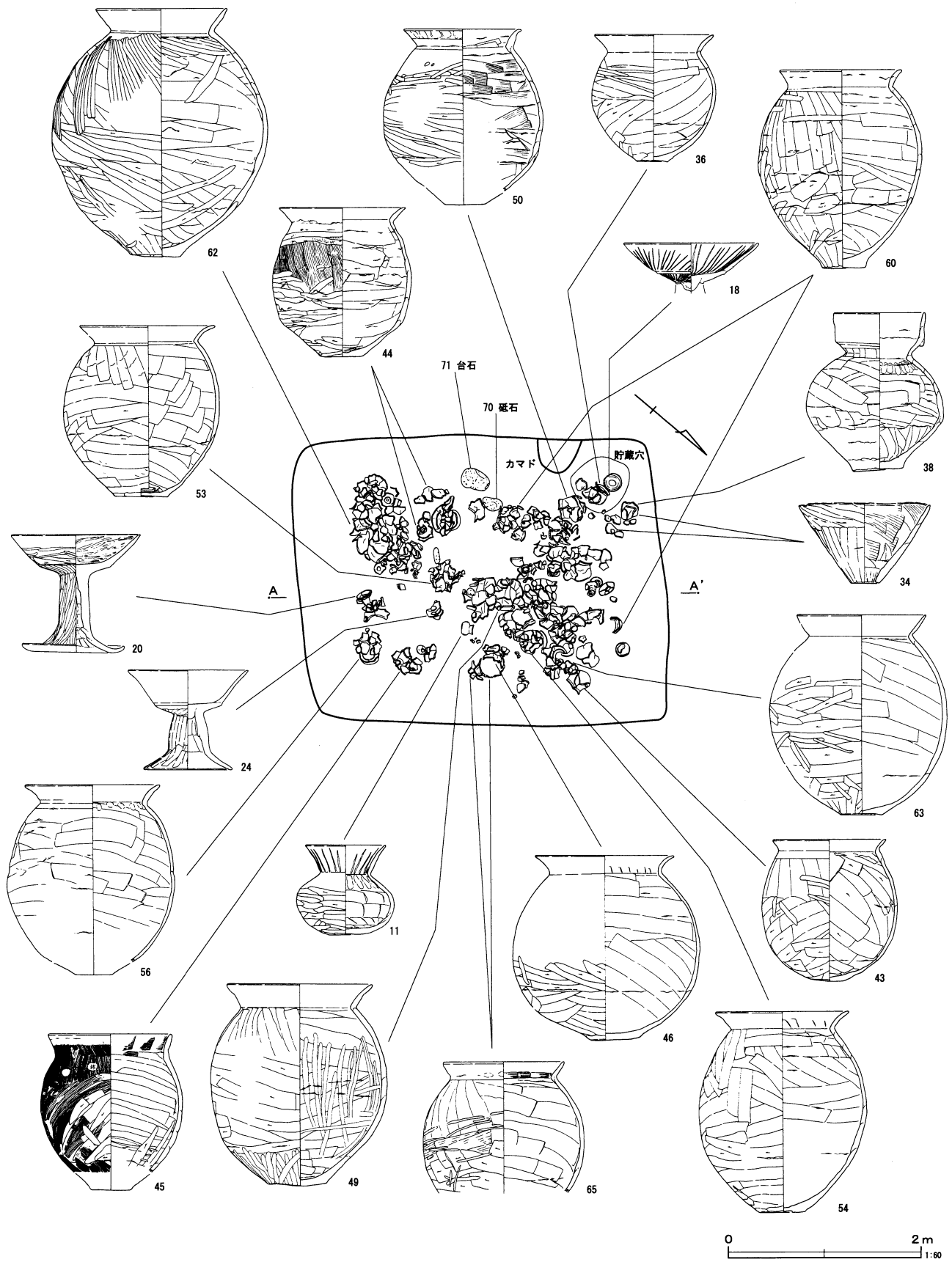
柱穴は2本検出された。P2は掘方を含むとすれば、長軸線上に位置することから住居跡に伴う

2本柱穴と考えられる。

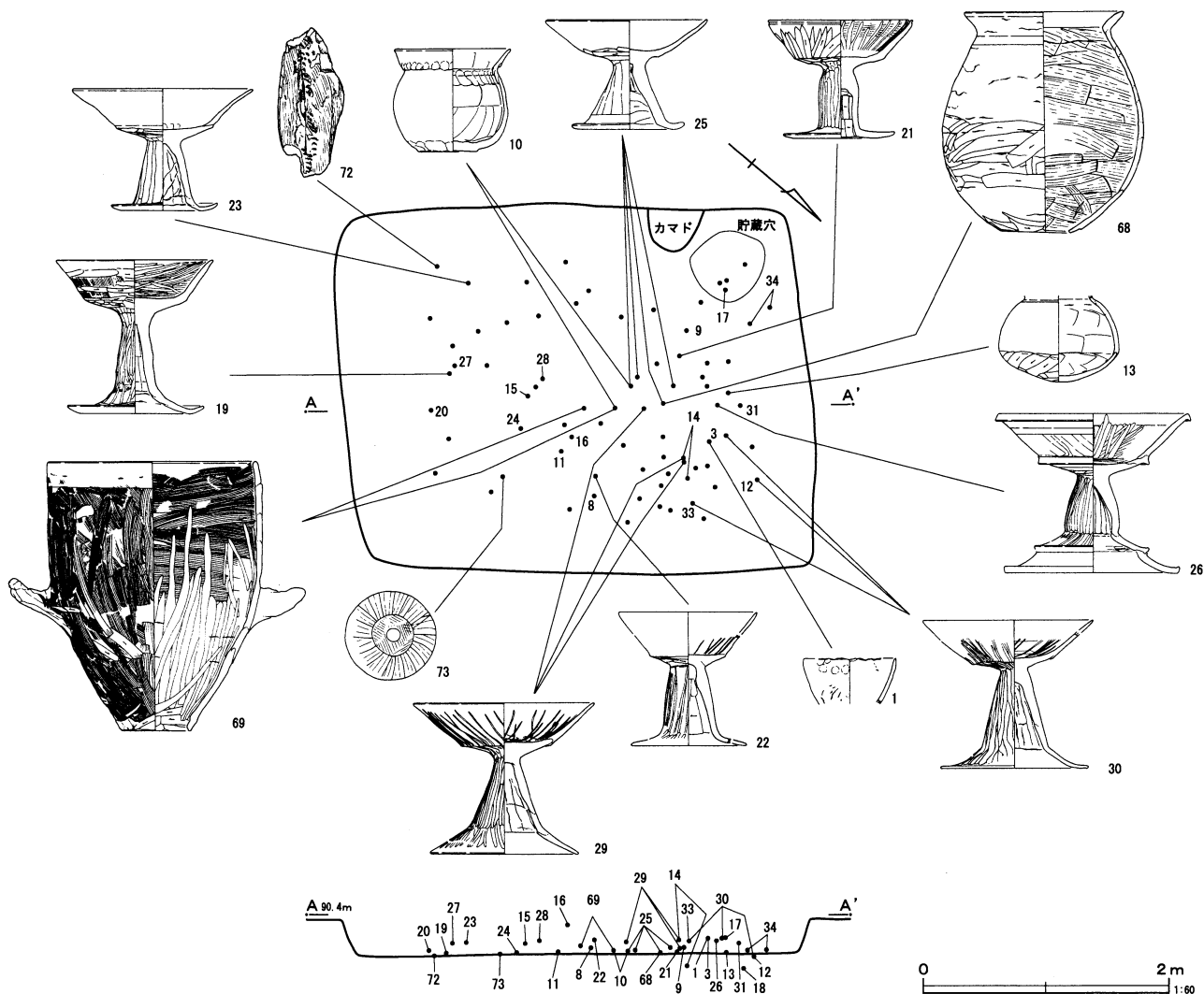
出土遺物は極めて多い。器種的には土師器坏・埴・高坏・甗・甕・小型甕・壺・小型壺・手捏土



第206図 第15号住居跡・カマド



第207図 第15号住居跡遺物出土状況(1)



第208図 第15号住居跡遺物出土状況(2)

器、砥石、台石、石製紡錘車、滑石製白玉・未成品が出土した。(第210～217図)

出土遺物は床面よりも浮いていたものもあるため、すべて伴うとはいえないが、住居廃絶後第3・4層の堆積時までには大量の遺物が廃棄されたと考えられる。広範囲に接合するものもあるが、いずれも完形品に近い形で、いくつかのまとまりをもって配置されていたかのようなのである。

南隅付近には59と62の大型甕、その周囲に23・27の高坏、44の甕、41の二重口縁壺などが置かれていた。また住居中央に69の角状把手の大型甕、49の甕、68の甕形の甑が並び、北隅に向かって11・12の小型壺、26・29・30・31の高坏、37・43・46・48・54・61・63・65などの甕が並んだ状態で集中

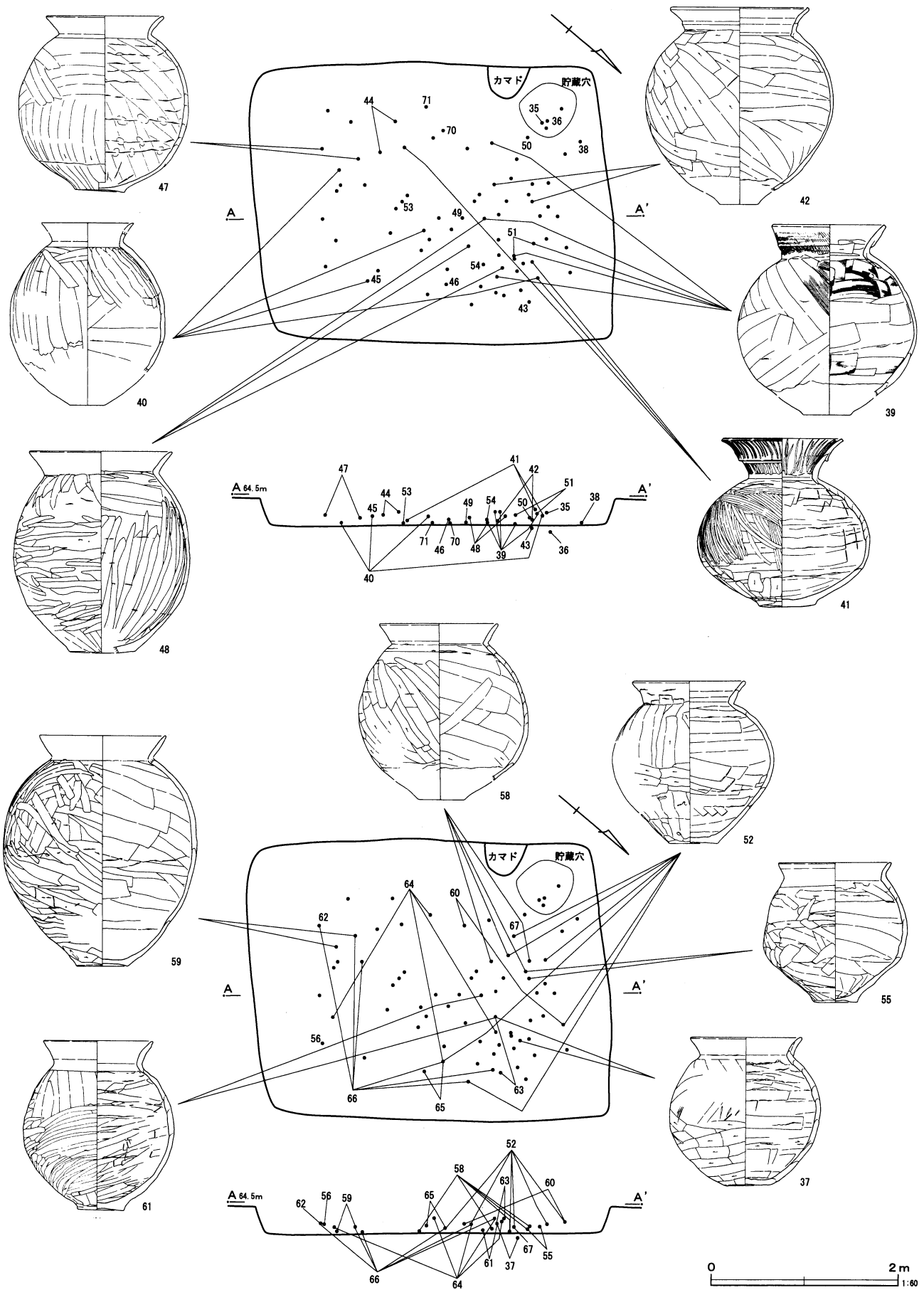
していた。東隅部付近からは45・56の甕が出土している。東南壁中央部では壁寄りから19・20の長脚の高坏が、中央寄りからは24の高坏、53の甕が出土している。

カマド左脇には71の大型の石皿状の台石と70の大型砥石が置かれていた。

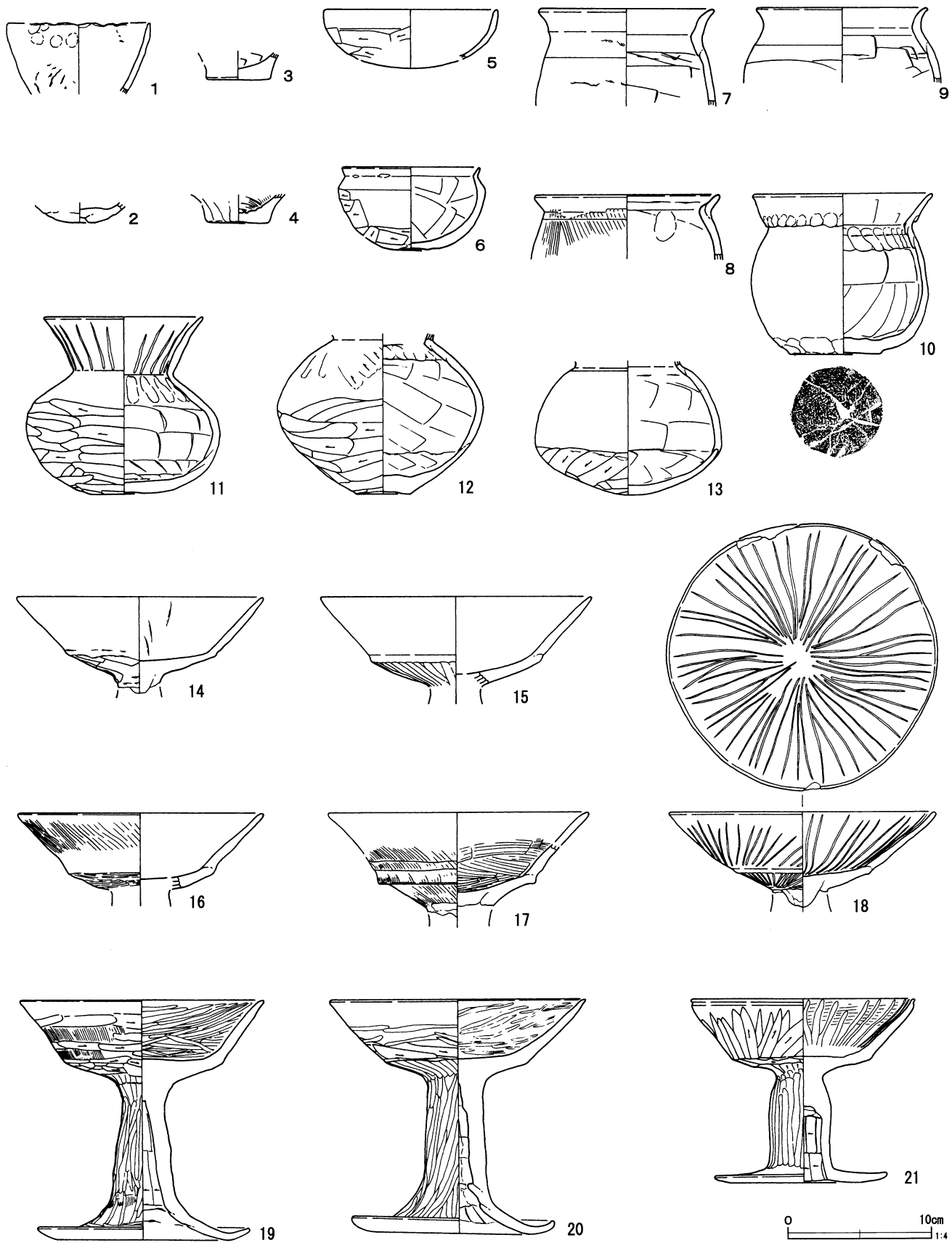
貯蔵穴からは埋土の中層に36の小型甕、18の高坏坏部が流れ込んだ状態で出土した以外に17の高坏の坏部、35の糊圧痕を底部に残す甕がある。

貯蔵穴周辺からは34の小型甑と38の有段口縁壺が並んで出土した。また、9の小型甕、42の有段口縁壺、50・55・60の甕などがまとまって出土した。

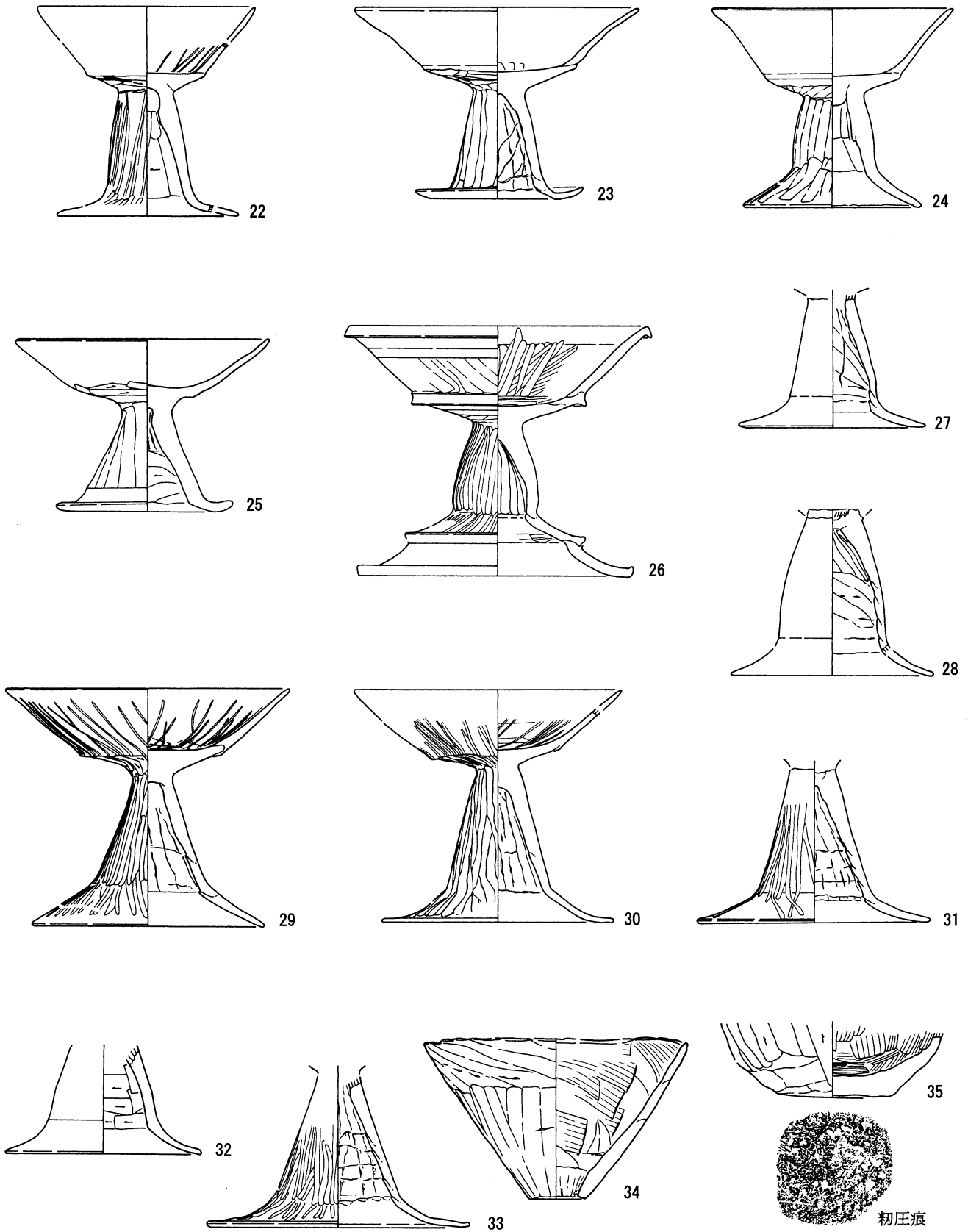
72の滑石の原石に近い未成品は南隅部、73の滑



第209図 第15号住居跡遺物出土状況 (3)

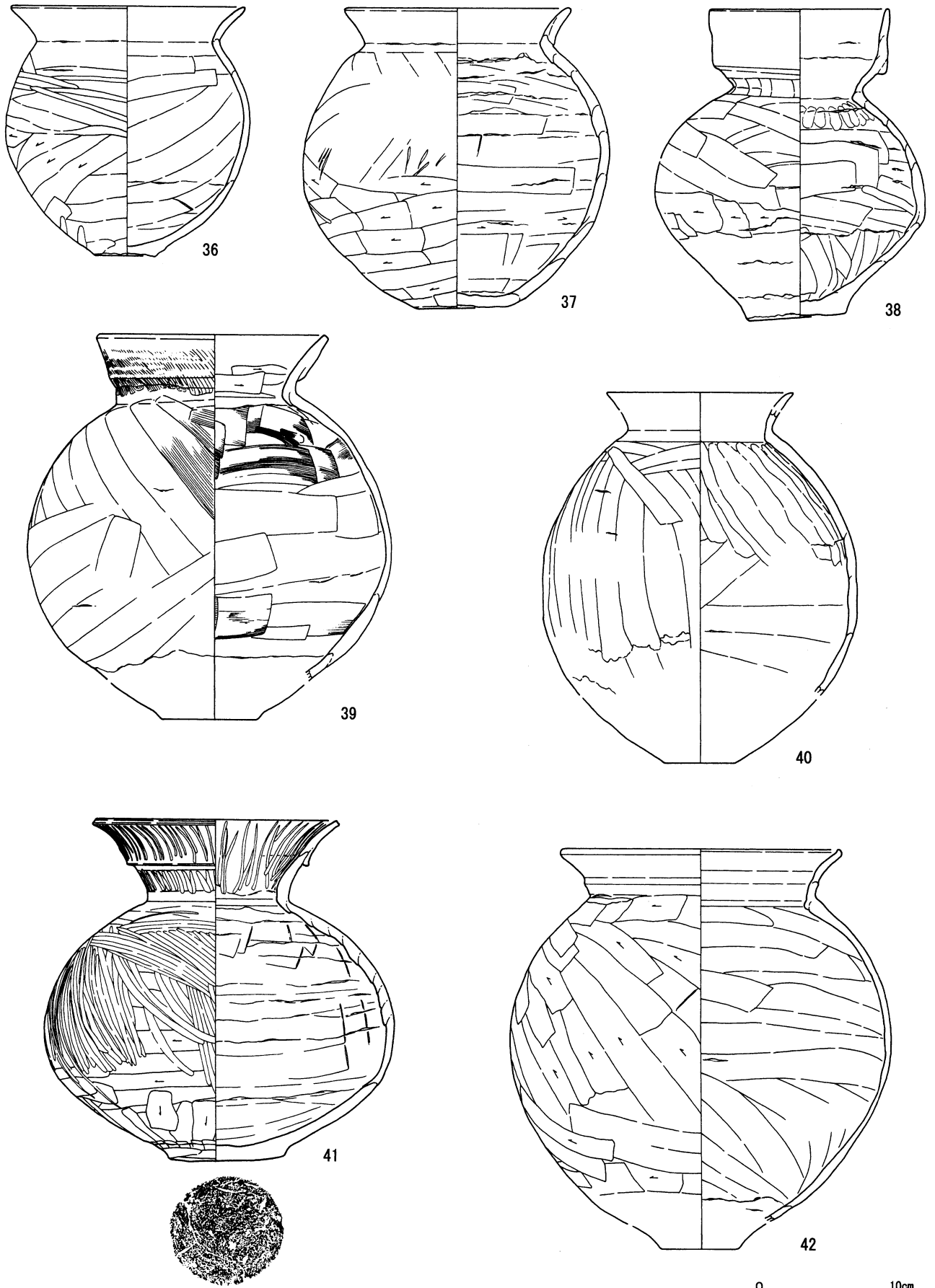


第210图 第15号住居跡出土遺物（1）

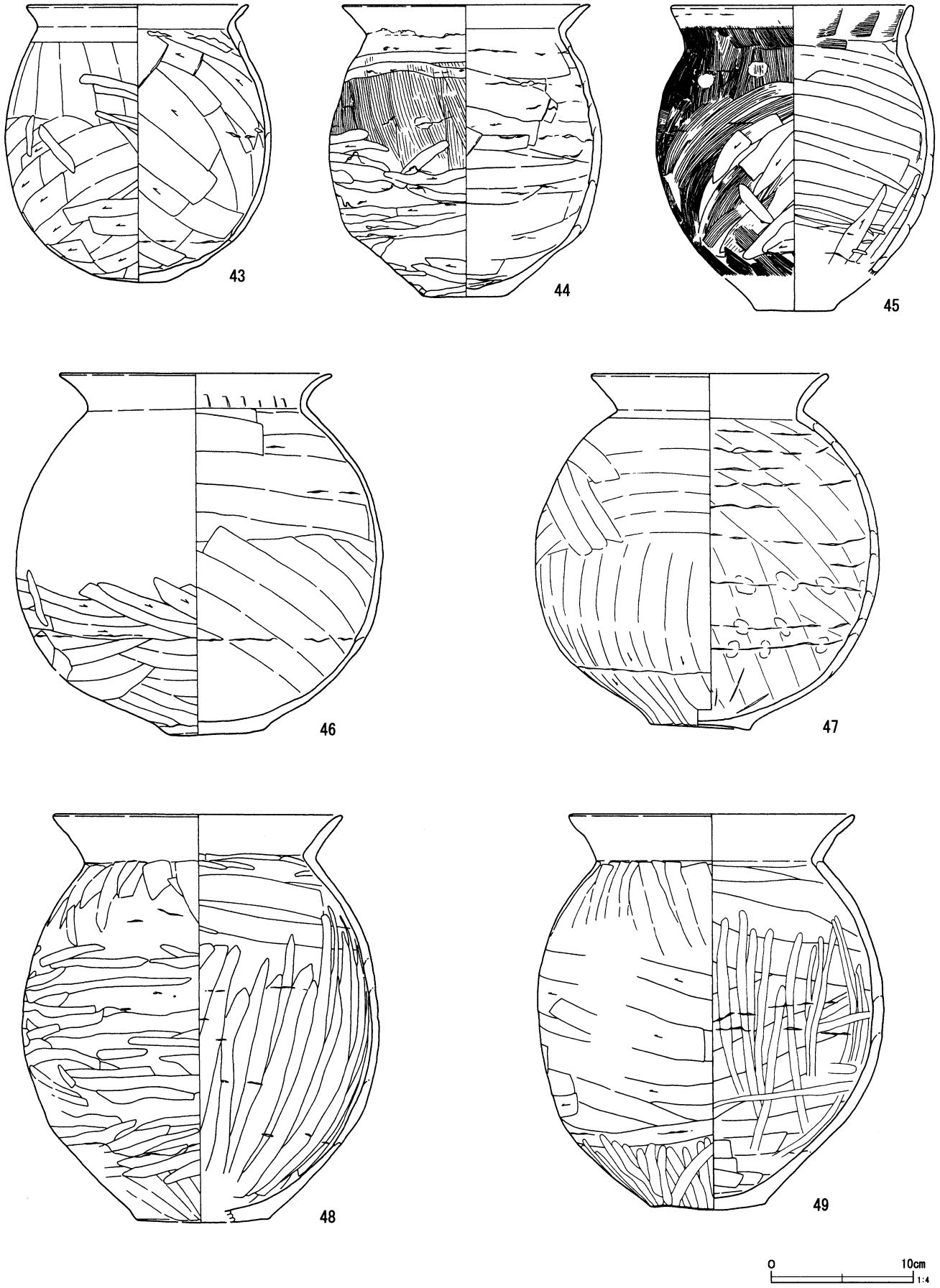


0 10cm 1:4

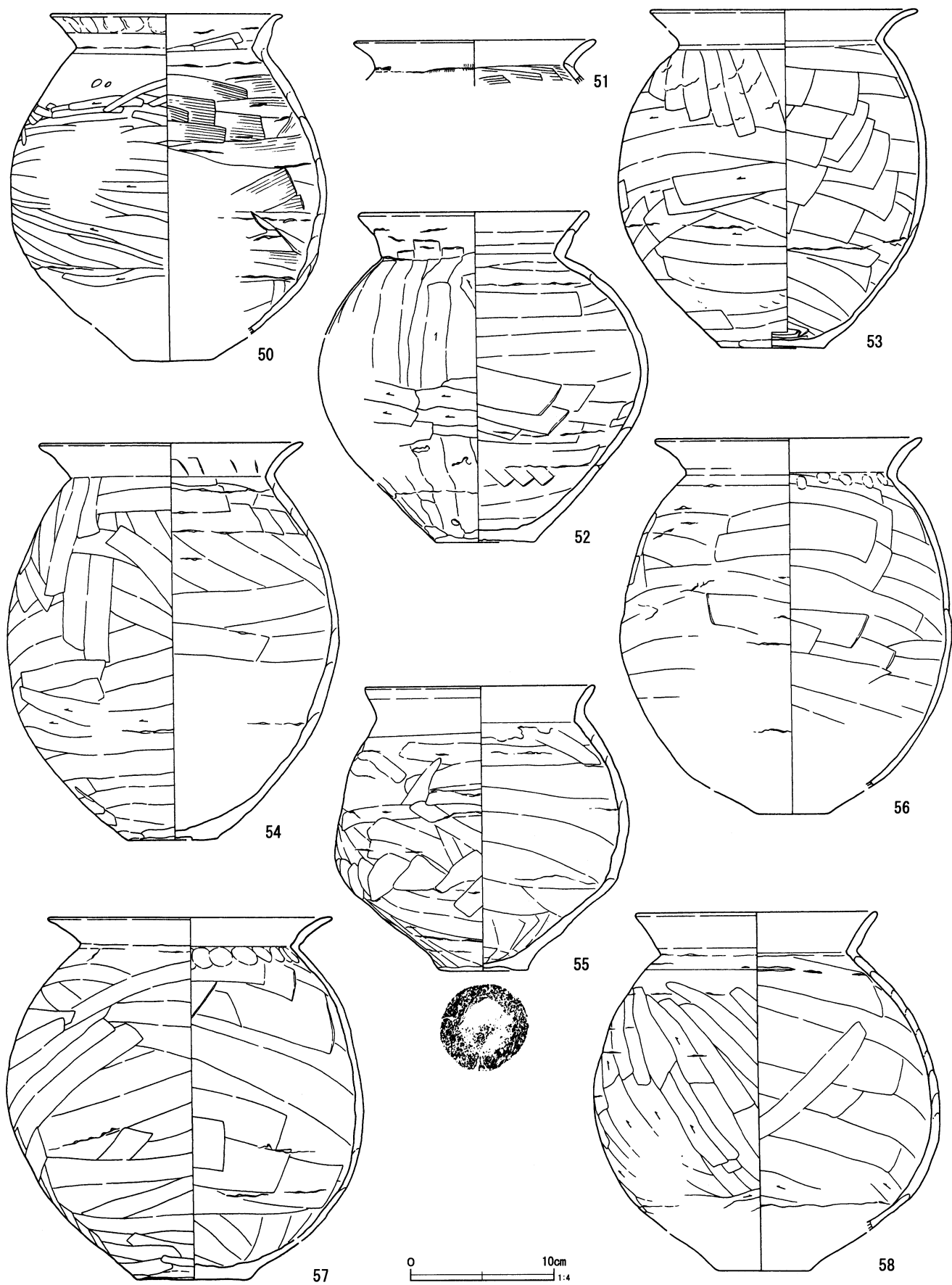
第211図 第15号住居跡出土遺物(2)



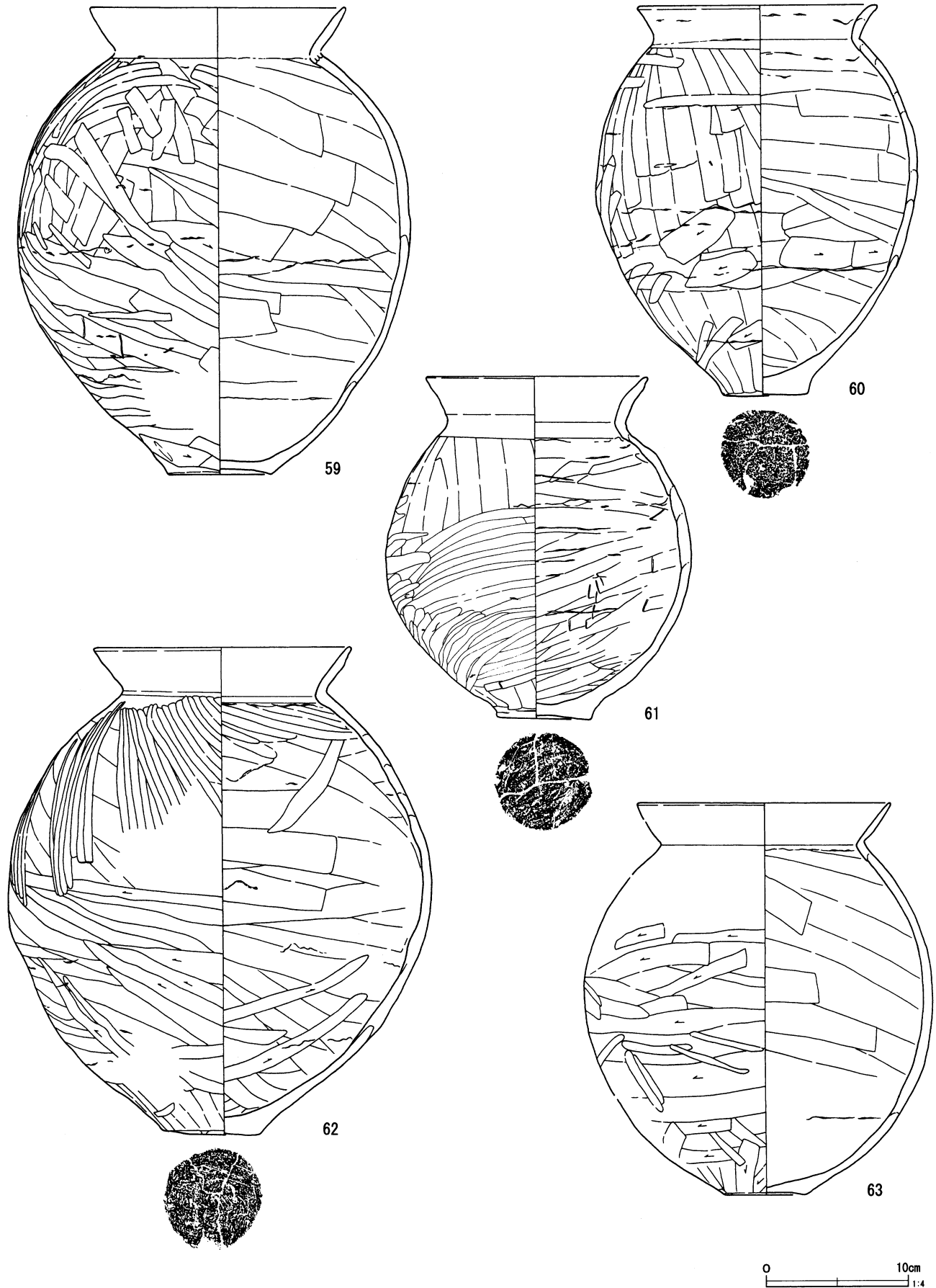
第212图 第15号住居跡出土遺物 (3)



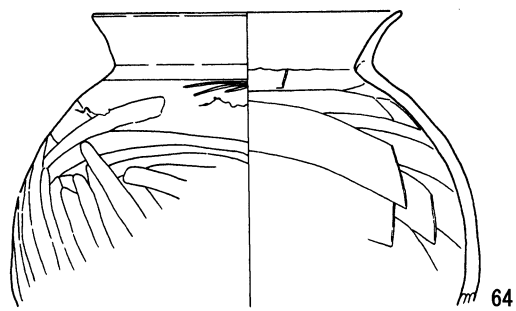
第213図 第15号住居跡出土遺物（4）



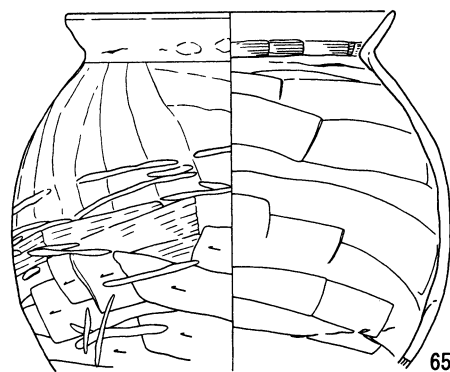
第214图 第15号住居跡出土遺物（5）



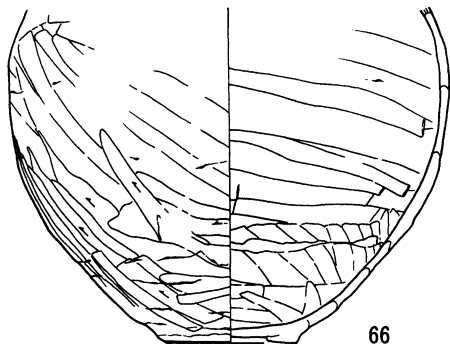
第215図 第15号住居跡出土遺物（6）



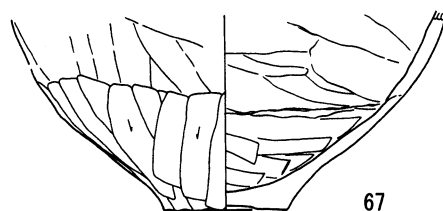
64



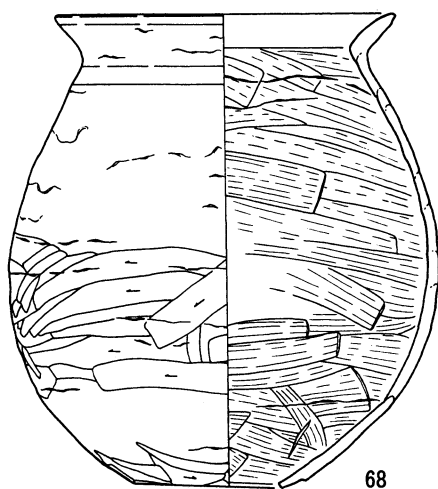
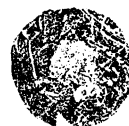
65



66



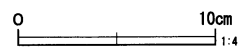
67



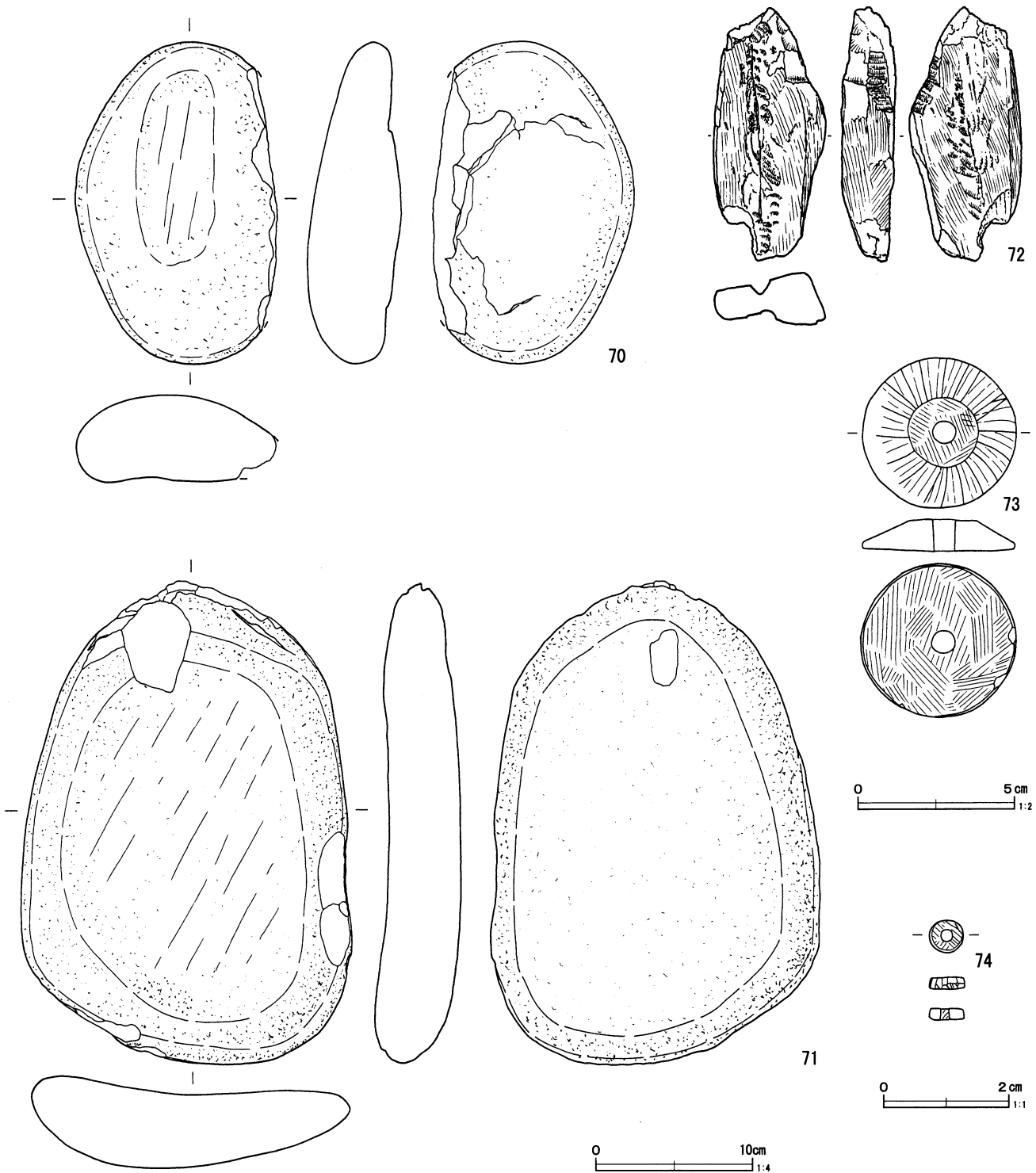
68



69



第216图 第15号住居跡出土遺物(7)



第217図 第15号住居跡出土遺物（8）

石製紡錘車が東隅部付近から出土したほか、埋土中から白玉1点が出土している。なお、5の半球形坏は埋土中から出土しており、確実に伴う遺物とはいえない。混入と考えた方が良さそうである。時期は供膳器において高坏の占める割合が高

く、坏・埴類が少ないこと、38の小型の有段口縁壺、39の複合口縁壺、41の二重口縁壺などのように壺に古い要素が残存していること、69の角状把手をもつ大型甑の存在から夏目遺跡II期に位置づけられる。

第68表 第15号住居跡出土遺物観察表 (第210~217図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 手捏土器	北部 床面上10cm	(9.8) [5.0]		40	A・B・C・F・J	良好 にぶい褐7.5YR5/3	外面粘土亀裂痕あり 内面ナデ
2	土師器 手捏土器	埋土	[1.4]		50	A・B・C・F・J	良好 にぶい橙5YR6/4	小型壺のミニチュアか 外面ナデ 底部窪む 作りやや粗雑
3	土師器 手捏土器	北部 床面上10cm	[2.0]	4.4	90	A・B・C・F・J	良好 にぶい褐7.5YR5/3	外面ナデ、内面ヘラナデ 底部外面 ナデ
4	土師器 手捏土器	埋土	[2.1]	4.4	90	A・B・C・F・J	良好 にぶい褐7.5YR5/3	外面ナデ、内面木口ナデ 底部ナデ
5	土師器 坏	埋土	(12.0) [3.5]		15	A・B・C・D・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	小破片のため住居の帰属不明 混入 品か
6	土師器 壺	埋土	(9.5) 5.8	2.4	45	A・B・F	良好 にぶい褐7.5YR5/4	体部ナデ後ケズリ 底部僅かに窪む
7	土師器 小型甕	埋土	(12.0) [6.8]		15	A・B・F・G・J	良好 橙2.5YR6/6	胴部ナデ
8	土師器 小型甕	北東部 床面上12cm	(12.8) [4.5]	(13.4)	20	A・B・F・J	良好 にぶい赤褐5YR4/4	胴部木口ナデ
9	土師器 小型甕	中央部西寄り 床面上3cm	(12.5) [5.1]		25	A・B・D・E・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部ナデ
10	土師器 小型甕	中央部 床面直上	12.4 11.2	12.4 6.5	90	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	胴部内外面スス付着
11	土師器 小型壺	中央部 床面上3cm	10.9 12.5	13.5 4.5	95	B・E・F・G	良好 赤褐2.5YR4/6	口縁部内外面粗い暗文
12	土師器 小型壺	北部 床面直上	[11.3]	14.4 3.8	90	A・B・D・G・J	良好 橙2.5YR6/6	胴部上半ケズリ後ナデ、下半ケズリ
13	土師器 小型壺	北西部 床面直上	[9.3]		95	A・D・G	良好 橙2.5YR6/6	胴部上半ナデ、下半ケズリ 底部丸 底風
14	土師器 高坏	北部 床面上12cm	17.0 [6.7]		95	A・B・C・F・J	良好 赤褐2.5YR4/6	坏部接合痕明瞭
15	土師器 高坏	中央部 床面上10cm	(18.6) [6.2]		35	A・C・F・G・J	良好 赤褐2.5YR4/6	坏部外面平滑に仕上げる
16	土師器 高坏	中央部 床面上3cm	(16.9) [5.2]		35	A・D・F・G・K	良好 明赤褐2.5YR5/8	坏部木口ナデ後ヨコナデ 器面一部 風化磨耗
17	土師器 高坏	西部 床面上10cm	4.5	(14.2)	90	A・B・C・F・J	良好 にぶい橙7.5YR6/4	内外面木口ナデ 作りやや粗雑
18	土師器 高坏	貯蔵穴 底面上27cm	18.5 [6.7]		95	A・B・F・J	良好 赤褐5YR4/6	坏部内外面暗文 雲母状微粒子を含 む
19	土師器 高坏	中央部南東寄り 床面直上	16.9 16.7	14.8	95	A・B・C・F	良好 にぶい橙7.5YR6/4	坏部ハケメ後ミガキに近いケズリ
20	土師器 高坏	南東部 床面上4cm	17.7 16.4	14.1	95	A・C・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部外面ケズリ後ミガキ、内面ミガ キ
21	土師器 高坏	中央部 床面直上	15.4 12.8	12.0	95	A・B・C・G・I	良好 赤褐2.5YR4/6	坏部外面ケズリ、内面放射暗文 内 底面器面剝落 脚部タテミガキ
22	土師器 高坏	中央部 床面上14cm	[11.7]		80	A・B・C・F	良好 暗赤褐2.5YR3/4	坏部内面放射暗文 柱状部外面ヘラ ミガキ
23	土師器 高坏	南部 床面上9cm	19.4 13.2	11.6	95	A・C・D・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	脚部ヘラナデ 脚部を一部欠損
24	土師器 高坏	中央部 床面直上	16.5 13.8	(12.2)	80	A・B・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	脚部外面木口状工具によるナデ 内 面ヘラナデ
25	土師器 高坏	中央部 床面上3cm	17.2 12.0	12.2	80	A・D・F・J	良好 橙2.5YR6/6	脚部ラップ状に開く
26	土師器 高坏	中央部北西寄り 床面上8cm	(20.5) [15.2]		50	A・C・D・G・J	良好 にぶい赤褐5YR4/6	有段脚高坏 坏部外面ヘラナデ、内面 ミガキ 脚部外面ミガキ、裾部暗文
27	土師器 高坏	中央部南東寄り 床面上9cm	[9.2]	12.9	95	A・D・F・G・J	良好 明赤褐5YR5/6	内面絞り目後ナデ
28	土師器 高坏	中央部 床面上9cm	[10.0]		75	A・B・D・F・G	良好 橙2.5YR6/6	坏部接合部には棒状工具による刺突 痕残る
29	土師器 高坏	中央部北寄り 床面上5cm	19.4 16.4	(16.1)	90	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	坏部暗文、脚部タテミガキ
30	土師器 高坏	北部 床面直上	[14.0]	15.8	75	A・C・D・F・G	良好 橙2.5YR6/6	坏部内外面暗文
31	土師器 高坏	北西部 床面上6cm	[10.6]	16.1	100	A・B・C・E・F	良好 明赤褐5YR5/6	脚部上位風化 脚部内面絞り目顕著
32	土師器 高坏	埋土	[7.3]	(13.4)	30	A・D・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	脚部内面ヘラケズリ
33	土師器 高坏	北部 床面上12cm	[10.4]	(18.0)	80	A・B・D・F・J	良好 にぶい褐7.5YR5/4	脚部外面ヘラミガキ、内面絞り目顕 著
34	土師器 小型甕	西部 床面直上	18.0 11.0	(3.8)	80	A・B・C・F・G	良好 橙5YR6/6	粗製 楕円形に歪む

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
35	土師器 甕	西部 床面上11cm	[5.2]	7.8	90	A・B・C・F・J	良好 にぶい黄橙10YR6/4	成形・調整粗雑 底部靱圧痕残る
36	土師器 小型甕	貯蔵穴 底面上26cm	16.1 17.5	17.1 4.2	90	A・B・C・F・K	良好 にぶい橙5YR6/4	底部内面スス付着
37	土師器 甕	中央部 床面直上	15.6 21.1	21.5 6.0	85	A・D・F・G・J	良好 にぶい赤褐2.5YR4/4	胴部外面スス付着
38	土師器 壺	西部 床面直上	12.3 21.9	19.0 6.7	70	A・C・F・G・K	良好 にぶい黄橙10YR7/3	粗製
39	土師器 壺	中央部 床面上5cm	(15.7) [24.3]	25.4	70	A・B・C・F・J	良好 橙5YR6/8	胴部外面風化のため器面が荒れている
40	土師器 壺	東部 床面上10cm	[20.1]	(22.0)	40	A・B・F・I・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部内面上半指ナデ調整
41	土師器 壺	北部 床面上11cm	16.8 24.0	24.4 7.8	90	A・B・C・D・G	良好 橙2.5YR6/6	有段口縁壺
42	土師器 壺	中央部 床面直上	19.4 [26.3]	26.6	90	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	胴部外面粗いヘラケズリ
43	土師器 小型甕	北部 床面直上	15.4 19.5	18.6 5.0	95	A・B・C・G・K	良好 にぶい赤褐5YR4/3	口縁部外面及び底部内面にススが付着
44	土師器 甕	中央部 床面上9cm	(17.3) 20.6	(19.1) 6.0	50	A・B・F・G・K	良好 明赤褐5YR5/6	器面に指紋を残す
45	土師器 甕	東部 床面上10cm	16.6 [19.6]	19.5	95	A・E・F・I・K	良好 明赤褐2.5YR5/8	内外面スス付着 ハケ甕
46	土師器 甕	北東部 床面上12cm	18.8 25.5	25.5 (6.6)	80	A・B・C・I・J	良好 橙5YR6/6	胴部外面スス付着
47	土師器 甕	南部 床面上9cm	(16.4) 25.2	24.2 7.0	75	C・E・F・J・K	良好 明赤褐5YR5/6	胴部外面被熱のため器面荒れる
48	土師器 甕	中央部 床面上5cm	19.9 28.6	25.1 (9.2)	85	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR4/4	胴部外面に靱圧痕あり
49	土師器 甕	中央部 床面直上	20.0 27.8	24.4 8.1	80	A・B・C・F・J	普通 赤褐5YR4/8	胴部下半外面帯状に黒色に変色
50	土師器 甕	西部 床面上4cm	15.8 [22.4]	21.8	70	A・C・F・G・K	良好 にぶい橙7.5YR7/3	粗製
51	土師器 甕	北部 床面上10cm	16.4 [3.1]		50	A・B・C・F・J	良好 橙7.5YR6/6	口縁ヨコナデ 頸部にハケメ僅かに残る
52	土師器 甕	中央部 床面上3cm	15.6 23.2	(22.8) 6.8	80	A・B・D・F・K	良好 橙2.5YR6/6	胴部外面スス付着
53	土師器 甕	中央部 床面直上	(18.6) 23.6	21.5 7.2	80	A・B・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部外面下半に靱圧痕、爪痕あり
54	土師器 甕	中央部 床面上4cm	18.0 27.7	23.0 6.2	95	A・B・F・I・K	普通 橙5YR7/6	胴部下半内面器面荒れる
55	土師器 小型甕	中央部 床面上3cm	15.8 19.8	21.6 6.2	100	A・B・C・F・J	良好 明褐7.5YR5/8	内外面ともに粘土紐痕明瞭
56	土師器 甕	東部 床面上10cm	18.0 24.5	23.1	85	A・B・C・F・J	良好 橙5YR6/8	口縁部外面スス付着
57	土師器 甕	中央部 床面直上	19.5 25.4	24.7 (7.8)	80	A・B・D・F・J	良好 にぶい橙7.5YR6/4	胴部外面一部スス付着
58	土師器 甕	中央部 床面上4cm	16.6 [22.2]	24.1	65	A・C・D・G・K	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部下位スス付着
59	土師器 甕	南部 床面上4cm		27.4 7.2	95	A・C・E・F・G	良好 橙2.5YR6/6	口縁部を欠損する
60	土師器 甕	中央部 床面上8cm	16.7 27.5	22.5 5.8	90	A・C・F・G・K	良好 にぶい橙7.5YR7/3	全体に粗い作り
61	土師器 甕	中央部 床面上5cm	15.4 24.1	21.4 6.6	85	C・D・F・I	良好 橙7.5YR6/6	胎土中に雲母状微粒子の混入が目立つ
62	土師器 甕	南部 床面上7cm	17.6 34.2	29.6 6.7	90	A・B・C・E・F	良好 赤褐2.5YR5/4	胴部最大径部分の外面に帯状にススが付着する
63	土師器 甕	北部 床面上16cm	17.5 27.5	24.4 (5.3)	70	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/8	胴部内外面被熱のため黒色変化
64	土師器 甕	中央部 床面上12cm	15.4 [14.9]	(23.6)	75	A・B・F・I・K	良好 明赤褐5YR5/6	胎土中に小礫を多く含む
65	土師器 甕	北東部 床面上10cm	(16.5) [18.2]		35	A・B・F・G・I	良好 明赤褐5YR5/6	胴部外面ヘラナデ、一部木口ナデ、中位以下ケズリ、棒状工具による沈線
66	土師器 甕	南部 床面上7cm	[16.9]	(22.3) 6.9	40	A・B・F・I・K	良好 にぶい赤褐2.5YR4/4	胴部上半外面スス付着
67	土師器 甕	中央部西寄り 床面上3cm	[9.9]	6.3	50	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR4/4	胴下位弱いヘラケズリ 中位ナデ
68	土師器 甕	中央部 床面直上	16.8 24.0	21.6 7.5	90	A・B・C・F・G	良好 明褐7.5YR5/6	粘土紐痕を残す
69	土師器 甕	中央部 床面直上	22.4 29.0	23.0 7.3	95	A・D・E・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/8	体部内外面ハケメ

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
70	石製品 砥石	中央部西寄り 床面直上	長さ20.7cm	幅12.8cm	厚さ5.7cm	重さ1951.2g	砂岩 一部欠損	砥面1 平滑 S1
71	石製品 台石	南西壁寄り 埋土	長さ30.8cm	幅21.0cm	厚さ5.0cm	重さ5234.1g	閃緑岩 ほぼ完存	上面浅く窪む S2
72	石製品 未成品	南部 床面直上	長さ8.14cm	幅3.49cm	厚さ1.68cm	重さ59.89g	滑石 平刀彫刻刀のような物で矢羽状に溝を掘っている 表面はガリガリ削っている 何を作ろうとしたかは不明 No.87	
73	石製品 紡錘車	東部 床面直上	長さ4.84cm	幅4.87cm	厚さ0.96cm	孔径(上)0.73(下)0.64cm	重さ29.23g	滑石 研磨：上下面 No.45

第69表 第15号住居跡出土白玉観察表 (第217図)

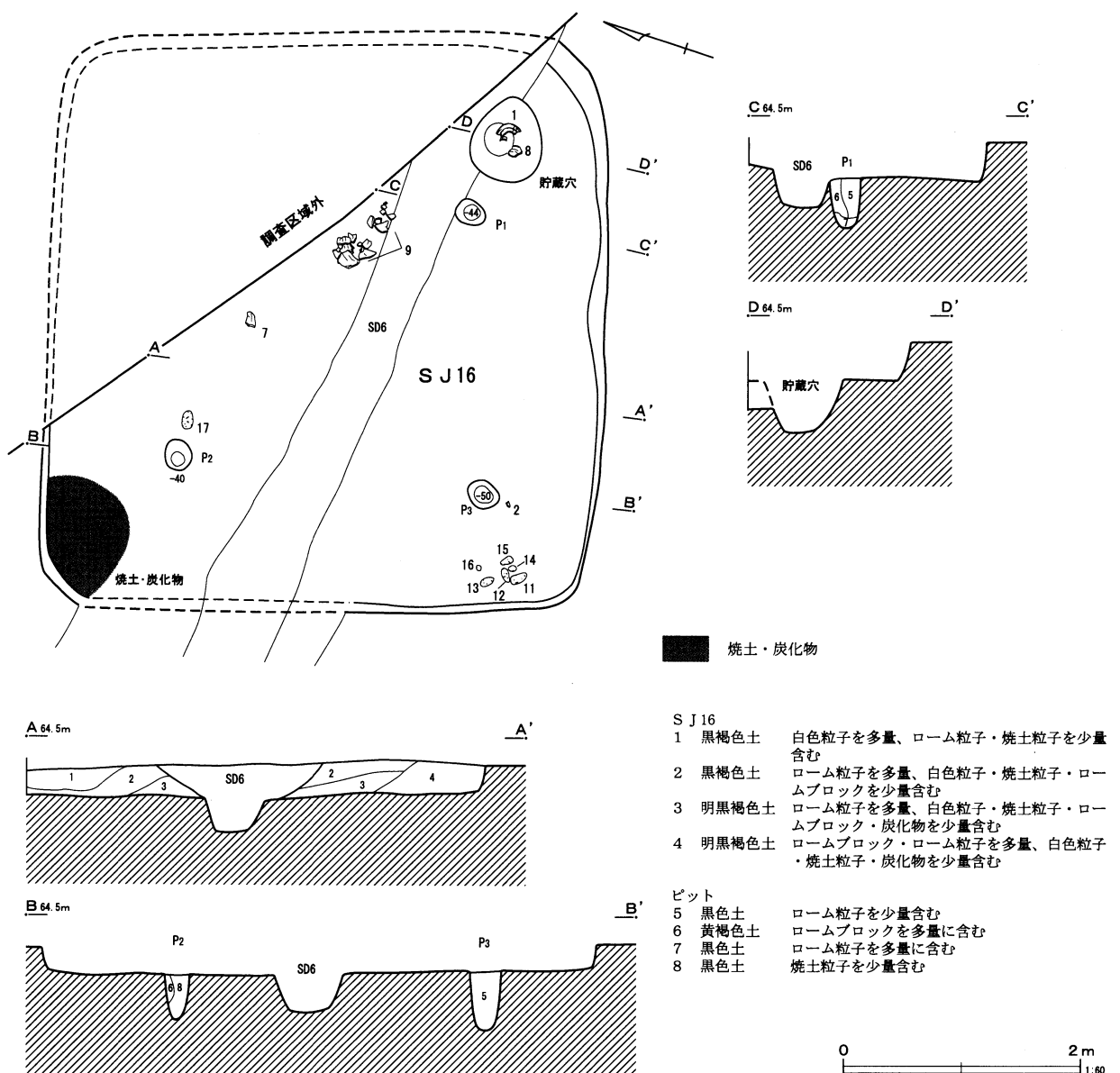
番号	種類	出土位置	最大径(cm)	上面径(cm)	下面径(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石材	段階	研磨	外形
74	白玉	埋土	0.54	0.52	0.52	0.18	0.13	0.09	滑石	4	上下側面	中膨れ

第16号住居跡 (第218図)

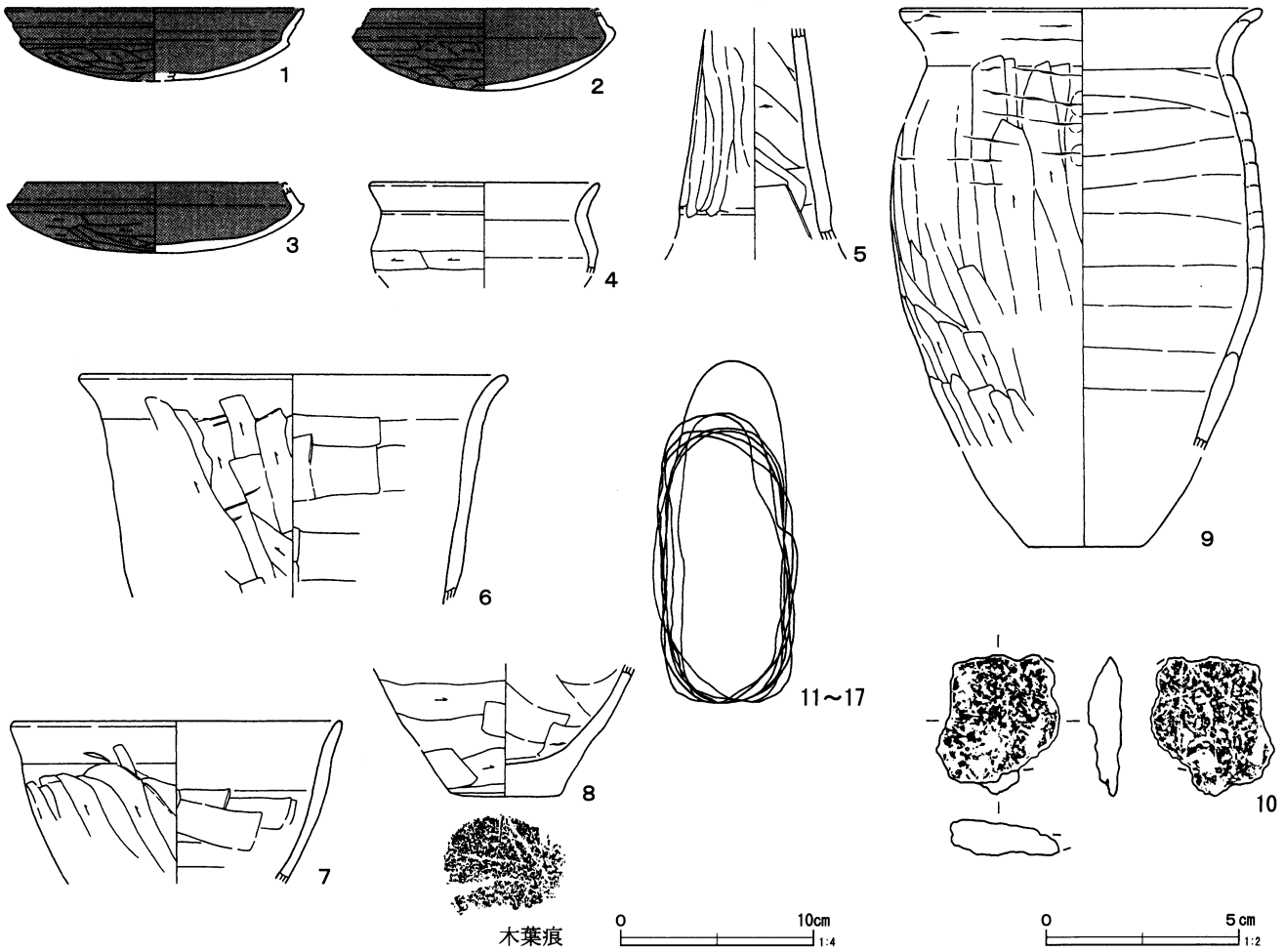
第16号住居跡は調査区西域の I-13グリッドに位置する。住居跡北東部は調査区外にかかって

おり、住居跡中央部を東西方向に延びる第6号溝跡の攪乱を受けていた。

平面形は方形と推定され、規模は長軸長4.86



第218図 第16号住居跡



第219図 第16号住居跡出土遺物

第70表 第16号住居跡出土遺物観察表 (第219図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	貯蔵穴 床面上9cm	(15.3) [3.8]		45	A・B・C・G・J	良好 明赤褐5YR5/6	内外面黒色処理の痕跡を残す
2	土師器 坏	P4周辺 床面上4cm	(11.8) [4.1]		40	A・C・F・G・J	良好 明赤褐5YR5/6	内外面黒色処理の痕跡を残す 口縁部を打ち欠いている
3	土師器 坏	埋土	(13.3) [3.5]		10	B・C・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	口縁部を意図的に打ち欠いている 内外面黒色処理
4	土師器 鉢	埋土	(11.7) [4.7]		10	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	体部外面ヘラケズリ
5	土師器 高坏	埋土	[11.0]		25	A・B・F・J	良好 にぶい黄橙10YR6/4	長脚の高坏脚部 胎土精選
6	土師器 甑	埋土	(22.0) [11.9]		10	B・C・D・E	良好 明赤褐5YR5/6	胴部内面横方向の丁寧なヘラナデ
7	土師器 鉢	中央部 床面上10cm	(17.0) [8.5]		20	A・D・F・I・K	良好 にぶい黄橙10YR6/4	小型甑の可能性あり
8	土師器 甕	貯蔵穴 底面直上	[6.9]	(5.7)	75	A・B・F・J・K	不良 明黄褐2.5Y6/6	被熱により器面荒れる 底面木葉痕を残す
9	土師器 甕	中央部東寄り 床面直上	18.5 [23.0]	19.2	50	A・C・D・F・K	不良 にぶい赤褐2.5YR4/3	胴部外面に粘土紐積み上げ痕を残す 被熱により内面の器壁剝離
10	土製品 焼成粘土塊	埋土	長さ3.7cm 幅2.9cm 厚さ0.9cm 重さ7.9g			A・B・J	良好 明黄褐10Y6/6	繊維質を多量に含む

m、短軸長4.68m、床面までの深さは0.28mである。主軸方位はN-76°-Eを指す。

床面は緩やかな凹凸があり、特に硬化面は見られなかった。住居跡北西隅部付近の床面には数cm

第71表 第16号住居跡出土編物石観察表(第219図)

番号	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存	石質	備考
11	南西部 床面上10cm	13.8	6.2	3.6	631.0	完存	砂岩	一部擦痕 No.7
12	南西部 床面上9cm	15.0	7.2	4.1	608.0	完存	砂岩	一部擦痕 No.8
13	南西部 床面上9cm	14.0	6.3	5.0	776.7	完存	砂岩	両端部敲打痕 No.9
14	南西部 床面上4cm	14.3	6.5	4.8	710.5	完存	砂岩	一部擦痕 No.10
15	南西部 床面上3cm	17.7	7.1	4.7	797.1	完存	砂岩	各面条痕 No.11
16	南西部 床面上7cm	15.0	5.6	5.2	531.2	完存	砂岩	一部擦痕 No.12
17	P3周辺 床面直上	13.9	6.9	3.6	532.9	完存	砂岩	一部擦痕 No.6

の厚さで焼土・炭化物の堆積土が広がっていた。埋土は黒褐色土を基調に構成され、一次堆積土(第4層)にはロームブロックの混入が目立った。

カマドは検出されなかったが、貯蔵穴北側の調査区外、東壁南寄りに存在する可能性が高い。

貯蔵穴は南東隅部に設置されていた。略円形で、規模は径0.70×0.60m、深さ0.42mである。

柱穴は3本検出された。配置関係や深さからいずれも住居に伴う4本支柱穴を構成すると考えられる。埋土は第5・8層が柱抜き痕、第6・7層が掘方埋土であろう。

出土遺物は量的には多くないが、北東隅部に設けられた貯蔵穴周辺と南西隅部からまとまって検出された。器種的には土師器坏・高坏・鉢・甕・甗、編物石、焼成粘土塊がある(第219図)。貯蔵穴からは1の大振りの有段口縁坏、8の甕底部、さらに住居跡中央部に9の長胴甕が散在していた。編物石は南西隅部に6個が集中し、やや離れP2脇から1個出土した。

1は有段口縁坏で、内外面黒色処理を施す。口唇部を丸く収め、内面は緩やかに屈曲しながら立ち上がる。2・3は坏身模倣坏。やはり黒色処理がなされ、いずれも口縁部を意図的に打ち欠いた痕跡がある。5は長脚の高坏と考えられる。胎土は夾雑物が少なく、精選されている。8の甕底部は木葉痕を残す。編物石は棒状のもので、長さ13.6~14.8cmに6点が集中する。

時期は有段口縁坏や坏身模倣坏の特徴から6世紀後葉から末葉を中心とする夏目遺跡Ⅶ期に位置づけられる。

第17号住居跡(第220・221図)

第17号住居跡は調査区の北西部のJ-12・13グリッドに位置する。住居南隅の一部が調査区外にかかるが、ほぼ全容を窺うことができる。

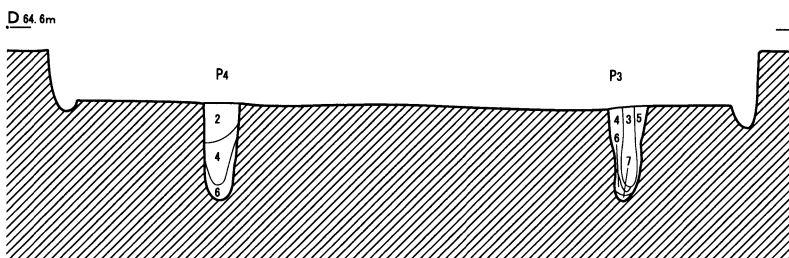
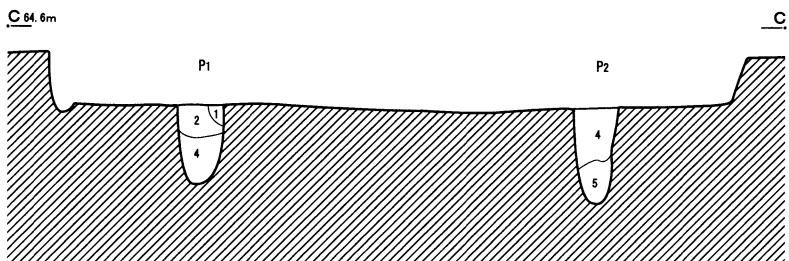
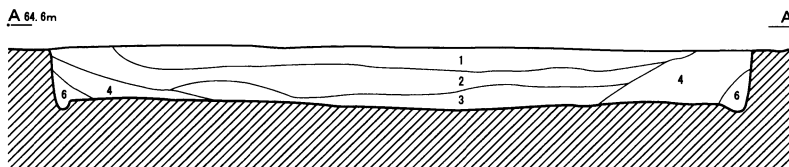
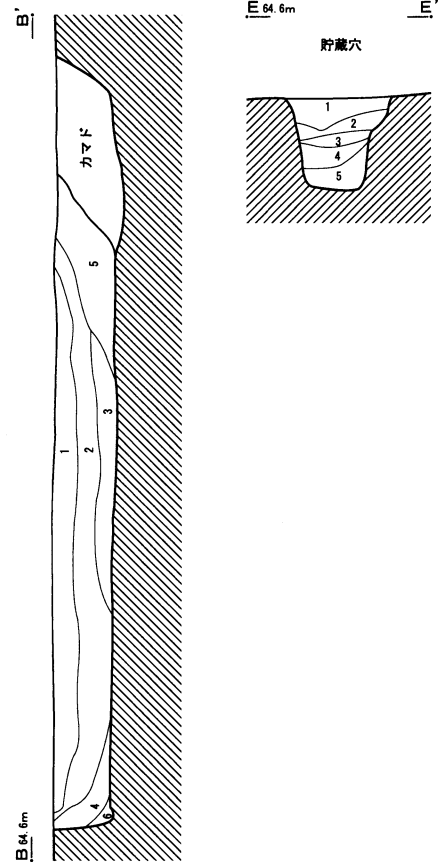
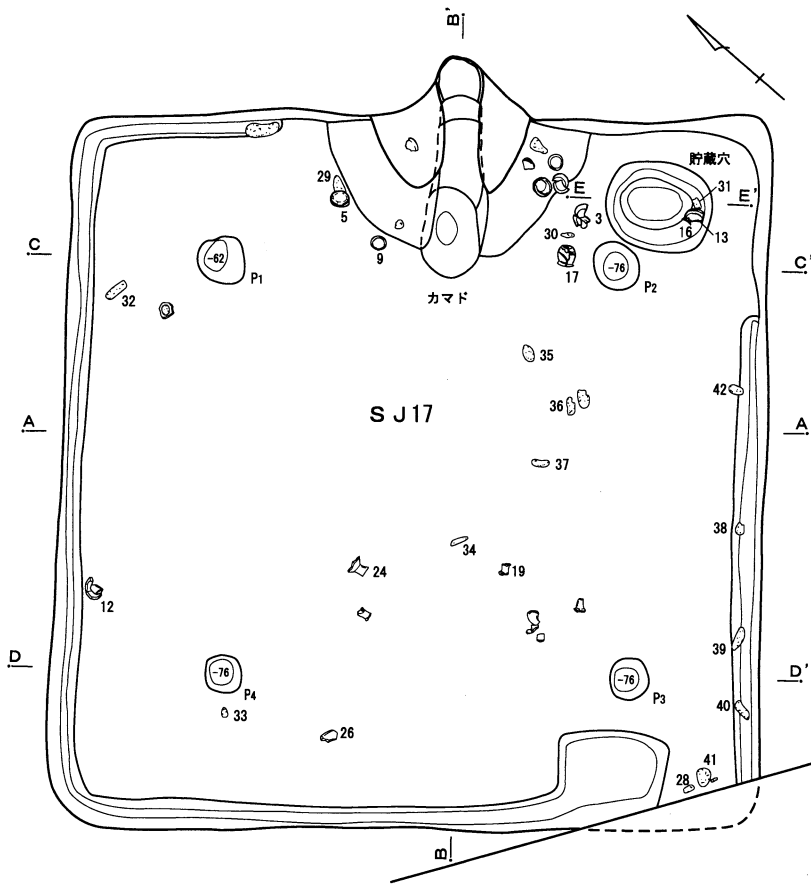
平面形は形の整った方形で、規模は長軸長5.40m、短軸長5.30m、床面までの深さは0.46mである。主軸方位はN-52°Eを指す。

床面は概ね平坦で、特に硬化面はなかった。埋没状況は自然堆積を示しているが、第1・2層にロームブロックが多量に含まれていた。

カマドは北東壁の中央付近に設置されていた(第221図)。定型化したカマドで、規模は全長1.68m、燃焼部内壁部の幅0.30mである。燃焼部奥壁はほぼ壁内に収まるが、煙道部は0.45m壁外に延びていた。カマドは白横色粘土を積み上げて構築されていたが、側壁部は外側にかなり流出していた。断面観察により左右袖(側壁)部は10~15cmほどの高さで地山(ローム)を掘り残し、その上に粘土を積んで構築したことが判明した。燃焼部側壁は強く被熱していた(第21層)。第10・11・12・14層が天井部内壁面の崩落土、15・22・23層が煙道部に由来する埋土、第17層が灰層と考えられる。第24層は焚口部底面の掘方であろう。

貯蔵穴はカマド脇の東隅部に設置されていた。楕円形で、規模は径0.82×0.67m、深さ0.70mである。埋土中には焼土が目立ち、カマド流出土が流れ込んだ可能性が高い。

柱穴は4本が規則的に配置され、深さも十分あることから住居跡に伴う支柱穴と考えられる。P3は明瞭に柱痕が観察されたが、柱径は12cm程度



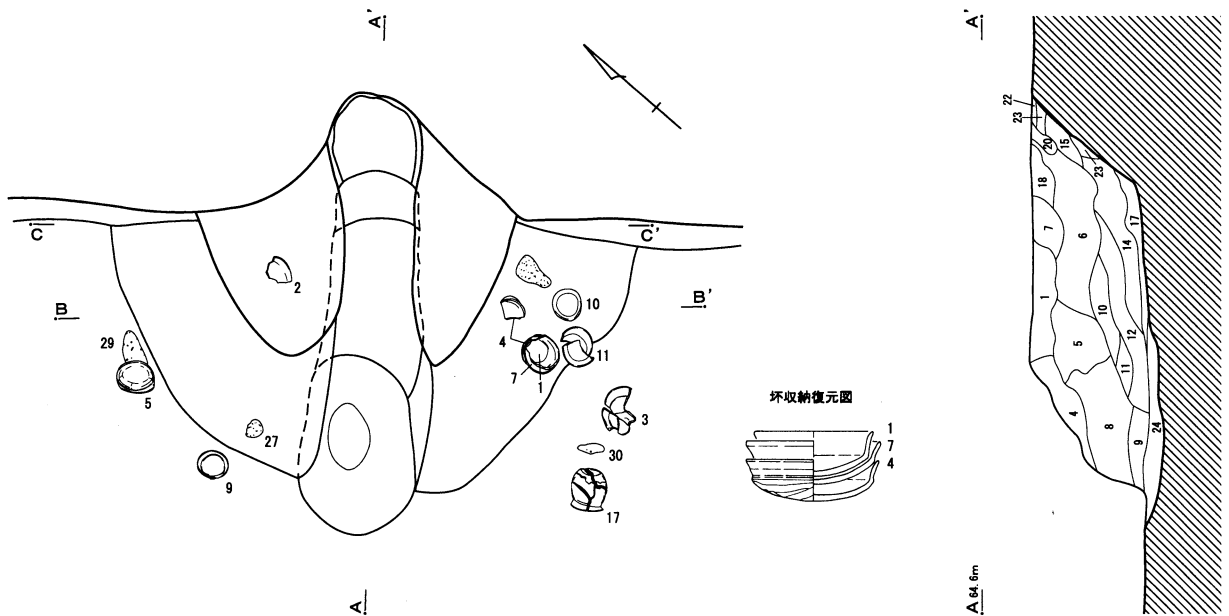
- S J 17
- 1 黒褐色土 ロームブロック・白色粒子を多量、焼土粒子・ローム粒子を少量含む
 - 2 黒褐色土 ロームブロックを多量、白色粒子・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む
 - 3 黒色土 ロームブロック・ローム粒子を少量、白色粒子を微量、焼土粒子を極微量含む
 - 4 褐色土 ローム粒子を多量、ロームブロック・白色粒子を少量、焼土粒子を極微量含む
 - 5 赤褐色土 焼土粒子を多量、白色粒子・ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含む
 - 6 黒色土 ローム粒子を多量、ロームブロックを極少量含む

- 貯蔵穴
- 1 赤褐色土 焼土粒子・ローム粒子を多量、炭化物粒子・白色粒子を少量含む
 - 2 黄褐色土 ローム粒子を極多量、炭化物粒子・白色粒子を少量含む
 - 3 黒褐色土 ローム粒子を少量含む
 - 4 赤色土 焼土ブロックを多量に含む
 - 5 灰色土 ロームブロック・ローム粒子を少量含む

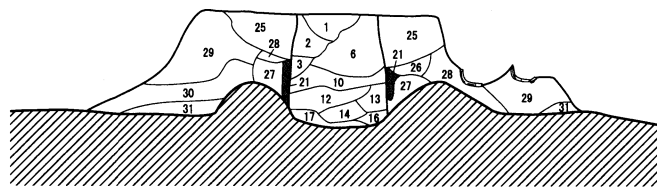
- ピット1~4
- 1 暗黄褐色土 ロームブロックを多量、黒色土を含む
 - 2 黒褐色土 ロームブロックを少量含む
 - 3 暗黒色土 ローム粒子を微量含む
 - 4 暗黄褐色土 ロームブロックを極多量に含む
 - 5 暗黄褐色土 混入物をほとんど含まない
 - 6 黄褐色土 粘土質粒子を含む
 - 7 黄褐色土 黒色土を少量含む



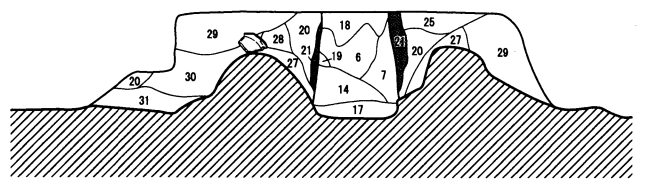
第220図 第17号住居跡



B 64.6m



C 64.6m



赤色化部分

S J 17カマド

- | | |
|----------|----------------------------|
| 1 黒色土 | 黒色土を主体とし、粘土粒子・焼土粒子を少量含む |
| 2 黒色土 | 1層よりも黒色土の混入が少ない |
| 3 赤褐色土 | 粘土粒子・焼土粒子を主体 |
| 4 暗黒褐色土 | 粘土を主体とし、黒色土を斑点状に含む |
| 5 赤褐色土 | 粘土粒子を多量、焼土ブロックを少量含む |
| 6 明褐色土 | 粘土粒子を多量、焼土ブロックを少量含む |
| 7 明褐色土 | 粘土粒子を多量、焼土粒子を少量含む |
| 8 暗赤褐色土 | 粘土粒子を多量、焼土ブロックを少量含む |
| 9 暗黒褐色土 | 黒色土・焼土小ブロックを少量含む |
| 10 赤褐色土 | 焼土化した粘土を主体とし、焼土ブロックを斑点状に含む |
| 11 赤褐色土 | 焼土化した粘土を主体とし、焼土ブロックを多量に含む |
| 12 黒褐色土 | 黒色土を主体とし、焼土ブロックを多量に含む |
| 13 暗赤褐色土 | 黒色化した粘土を主体とし、焼土ブロックを少量含む |
| 14 暗黄褐色土 | 受熱された粘土のほぼ純層 |
| 15 暗黄褐色土 | 粘土を主体とし、焼土ブロックを少量含む |
| 16 暗赤褐色土 | 粘土を主体とし、黒色土を多量に含む |
| 17 暗黒色土 | 黒色土・粘土粒子・灰を少量含む |
| 18 暗褐色土 | 黒色土を主体とし、焼土粒子を少量含む |
| 19 暗褐色土 | 黒色土を主体とし、焼土粒子を微量含む |
| 20 赤褐色土 | 焼土ブロックを主体 |
| 21 赤褐色土 | 焼土ブロックを主体とし、植物繊維の痕跡を残す |
| 22 暗黒色土 | 黒色土を主体とし、焼土小ブロックを少量含む |
| 23 黄褐色土 | ロームブロックを主体とし、焼土ブロックを少量含む |
| 24 暗黒褐色土 | 黒色土・焼土ブロックを斑点状に含む |
| 25 褐色土 | 焼土小ブロック・ローム粒子を少量含む |
| 26 褐色土 | ロームブロック・ローム粒子を多量、炭化材を少量含む |
| 27 白黄色粘土 | 焼土粒子を少量含む |
| 28 白黄色粘土 | 焼土粒子を微量含む |
| 29 暗褐色土 | 焼土小ブロック・ローム粒子を少量含む |
| 30 黒赤色土 | 灰を含む黒色土を主体とし、焼土小ブロックを多量に含む |
| 31 暗黄褐色土 | ローム土を主体とし、黒色土を少量含む |

0 1m 1:30

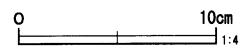
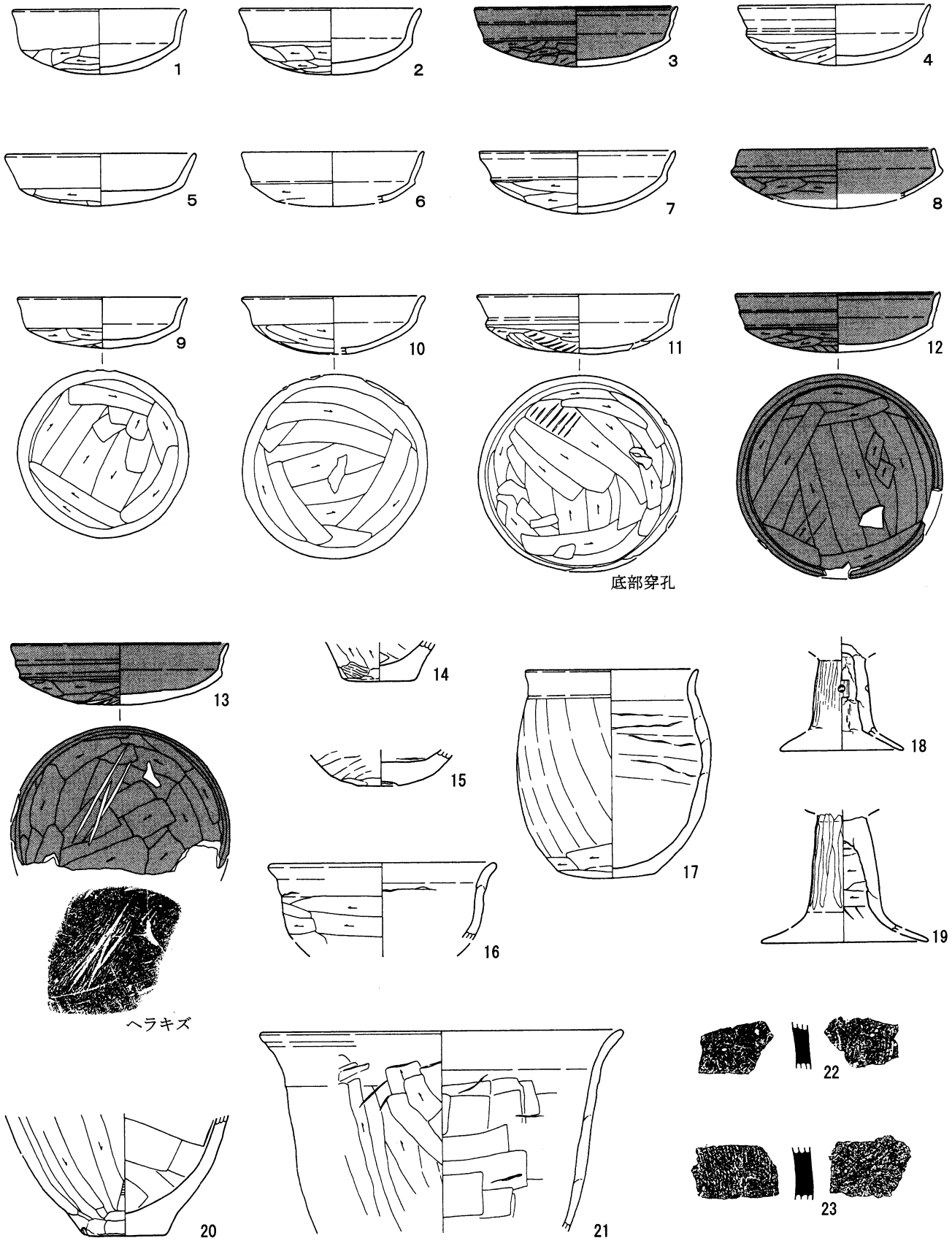
第221図 第17号住居跡カマド

と細い。壁溝はカマドと貯蔵穴の周囲を除いて巡っていた。概ね幅15~25cmで、深さは5~18cmである。南西壁南端部の広がった部分は壁溝とは異なるであろう。

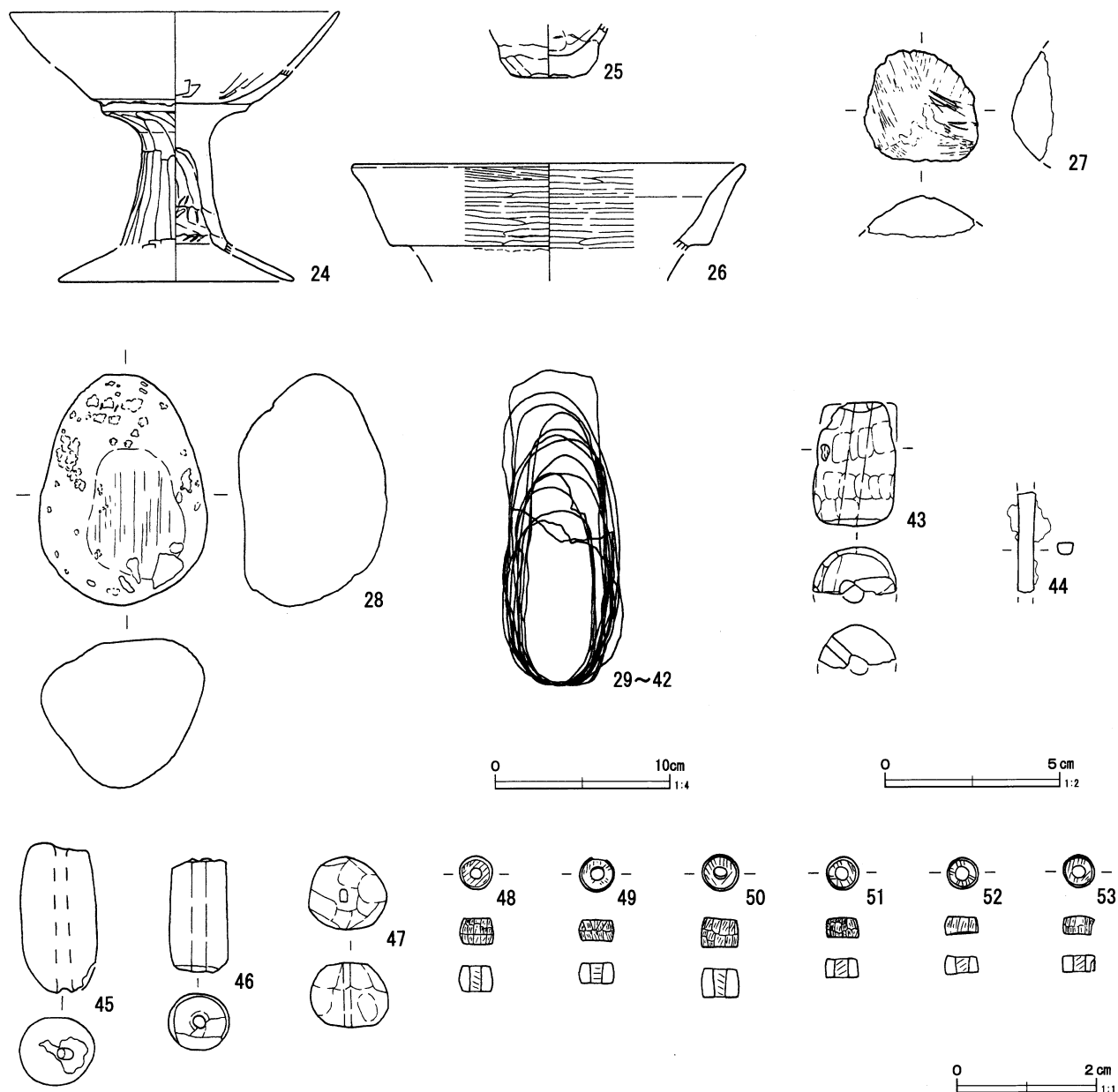
出土遺物は土師器坏・鉢・小型甕・甑・高坏・壺・手捏土器、須恵器甕、砥石、磨石、棒状鉄製品、土錘・土製丸玉、滑石製白玉、編物石がある(第222・223図)。遺物はカマド周辺からまとまっ

て出土した。右袖に接するように坏が3個重なった状態で出土した(上から第222図1・7・4)。また、それに接するように11の坏、北東側に10の坏が出土した。さらに、約30cm離れて出土した3の坏まで含めれば、6枚を重ねた状態で収納していたと考えることができる。

貯蔵穴からは底部にヘラキズを残す13の坏、16の鉢がそれぞれ出土した。カマドと貯蔵穴の間の



第222図 第17号住居跡出土遺物(1)



第223図 第17号住居跡出土遺物（2）

床面には3の坏と17の小型甕がある。一方、左袖上面からは2の坏と27の砥石片が、袖部裾に接するように5と9の坏が出土した。5は伏せた状態で、9は口縁部を上に向けていた。

北西壁際から12の有段口縁坏が出土した。編物石は14個検出された。南東壁際から5個比較的等間隔で出土した以外は、中央部やカマド周辺に床面から浮いた状態で散在していた。南隅からは28の角閃石安山岩製の磨石が出土している。

第222図1～13は模倣坏である3・12・13はいわ

ゆる有段口縁坏で黒色処理される。8は坏身模倣坏で同様に黒色処理される。11の坏(坏蓋模倣坏)は底面に内側から穿孔された小孔が確認されたが、重ねて収納された内の1枚であることを考慮すると故意に穿孔されたかと理解するには慎重にならざるを得ない。13の坏に残されたヘラキズは刀子状の刃物による傷と思われる。出土状態から住居使用段階に付けられたものであろう。

なお中央部から出土した19・24の高坏をはじめ、14の甕、15の壺、18の高坏、26の有段口縁壺

第72表 第17号住居跡出土遺物観察表 (第222・223図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	カマド右袖 床面上15cm	11.9 4.5		80	A・B・C・G・J	良好 にぶい褐7.5YR5/4	体部外面磨耗により器面荒れる
2	土師器 坏	カマド左袖 直上	(12.4) 4.7		45	A・B・F・I・K	不良 にぶい橙5YR6/4	内外面の剥落が著しく、調整不明瞭
3	土師器 坏	カマド右袖脇 床面上3cm	14.0 4.2		85	A・B・D・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	内外面黒色処理 残りが良くない
4	土師器 坏	カマド右袖 床面上14cm	13.3 4.3		85	A・C・D・F・J	良好 明褐7.5YR5/6	胎土中に雲母状微粒子を多く含む
5	土師器 坏	カマド左袖脇 床面直上	13.0 3.7		100	A・B・C・F・J	不良 にぶい赤褐5YR5/3	風化著しい 内面器面荒れる
6	土師器 坏	埋土	(12.5) [3.5]		20	A・C・D・F・G	普通 橙5YR6/6	器面磨耗
7	土師器 坏	カマド右袖 床面上14cm	13.6 4.4		85	A・C・D・F・J	良好 にぶい赤褐5YR5/4	口縁部内面磨耗 胎土中に雲母状微粒子を含む
8	土師器 坏	埋土	(13.4) [3.5]		15	A・D・E・F・J	良好 にぶい褐7.5YR5/4	内外面黒色処理
9	土師器 坏	カマド左袖脇 床面直上	11.6 3.6		100	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	内外面磨耗により器面荒れる
10	土師器 坏	カマド右袖 床面上9cm	12.6 4.0		95	A・B・C・F・K	良好 明赤褐2.5YR5/6	内外面磨耗により器面荒れる
11	土師器 坏	カマド右袖 床面上10cm	14.0 4.2		95	A・D・F・G・J	良好 にぶい橙5YR6/4	体部外面穿孔痕か
12	土師器 坏	北西壁溝際 床面上18cm	14.1 4.2		95	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐5YR4/4	有段口縁坏 内外面黒色処理
13	土師器 坏	貯蔵穴 床面直上	15.0 4.3		35	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐5YR4/4	内外面黒色処理 体部外面ヘラキズあり
14	土師器 甕	埋土	[2.8]	5.1	70	A・C・D・F・K	良好 橙5YR6/6	外面ヘラケズリ、一部ハケメ
15	土師器 壺	埋土	[2.5]		60	A・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	凹み底
16	土師器 鉢	貯蔵穴 底面上64cm	(15.5) [5.4]		60	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR4/4	体部外面ヘラケズリ
17	土師器 小型甕	カマド右袖脇 床面直上	11.9 14.4	13.5 6.6	90	A・B・C・F・K	良好 橙7.5YR6/6	内外面被熱により器面剥落
18	土師器 高坏	埋土	[6.5]		50	A・C・F・G・J	良好 明赤褐5YR5/8	未貫通の小孔一個有り
19	土師器 高坏	中央部 床面上7cm	[8.4]		80	A・B・F・J	良好 明赤褐5YR5/8	脚部外面ヘラミガキ
20	土師器 甕	埋土	[8.4]	5.7	80	A・C・D・I・K	普通 にぶい赤褐5YR5/4	内底面被熱により器面剥落
21	土師器 甕	埋土	(24.9) [14.0]		15	A・B・C・D・F	良好 にぶい赤褐5YR5/4	胴部外面ヘラケズリ
22	須恵器 甕	床面直上			破片	A・C・G・J・K	良好 灰5Y5/1	外面：平行叩き目 内面：同心円文当て具 在地産 23と同一個体
23	須恵器 甕	床面直上			破片	A・C・G・J・K	良好 灰5Y5/1	外面：平行叩き目 内面：同心円文当て具 在地産 22と同一個体
24	土師器 高坏	中央部 床面上3cm	[11.1]		80	A・D・F・J	良好 橙2.5YR6/6	硬質な焼き上がり 混入品
25	土師器 手捏土器	埋土	[3.2]	(4.5)	35	A・B・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	内外面ナデ
26	土師器 壺	西部 床面上11cm	(23.0) [5.2]		15	A・B・F・G・J	良好 にぶい赤褐5YR5/4	口縁部、内外面丁寧なヘラミガキ
27	石製品 砥石	カマド左袖 床面上15cm	長さ6.6cm 幅6.8cm 厚さ2.5cm 重さ93.6g				凝灰岩 二次被熱あり 破断面を除く各面に擦痕あり	
28	石製品 磨石	南部 床面上12cm	長さ13.7cm 幅9.9cm 厚さ8.6cm 重さ608.6g				角閃石安山岩 完存 各面に擦痕あり No38	
43	土製品 土錘	カマド	長さ3.69cm 幅2.44cm 厚さ1.38cm 重さ10.26g			A・G	普通 橙7.5YR7/6	側面に中央孔に貫通する小孔がある 指押え痕あり 側面孔径0.35cm
44	鉄製品 棒状品	床面直上	長さ3.0cm 幅0.5cm 厚さ0.3cm 重さ2.8g				断面形は片面が平坦な矩形	
45	土製品 管玉	床面直上	長さ2.2cm 幅1.1cm 孔径0.2cm 重さ2.5g			A・G・J	普通 にぶい黄橙10YR6/3	一部欠損
46	土製品 管玉	カマド	長さ1.67cm 幅0.88cm 厚さ0.84cm 孔径0.15cm 重さ1.31g			A・G	普通 にぶい橙7.5YR6/4	一部欠損
47	土製品 丸玉	カマド	最大径1.16cm 厚さ0.98cm 孔径0.13cm 重さ1.02g			A・F	良好 明赤褐5YR5/6	一部欠損

第73表 第17号住居跡出土編物石観察表(第223図)

番号	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存	石質	備考
29	カマド左袖脇 床面上4cm	14.4	7.1	4.2	672.8	完存	安山岩	No.2
30	カマド右袖脇 床面上7cm	10.2	4.5	4.1	324.4	完存	砂岩	No.12
31	貯蔵穴 床面直上	(10.4)	6.0	4.1	345.9	上半部欠損	砂岩	No.14
32	北西壁溝際 床面上10cm	(18.3)	5.9	4.9	737.3	上端、裏面欠損	砂岩	No.17
33	P4周辺 床面直上	13.5	6.0	4.5	574.0	完存	絹雲母片岩	No.20
34	中央部 床面上7cm	16.5	6.1	(2.4)	318.7	裏面欠損	砂岩	一部擦痕 No.23
35	中央部 床面上11cm	17.2	6.5	3.1	539.1	完存	絹雲母片岩	No.24
36	中央部 床面上3cm	12.3	4.2	3.2	236.9	裏面一部欠損	絹雲母片岩	No.27
37	中央部 床面上13cm	12.4	5.4	3.2	367.6	完存	砂岩	一部擦痕 No.28
38	南東壁溝 床面下4cm	(9.5)	6.3	4.1	339.9	上半部欠損	砂岩	No.33
39	南東壁溝 床面直上	16.1	4.8	5.1	624.9	完存	砂岩	一部擦痕 No.34
40	南東壁溝	14.6	6.0	4.5	683.4	完存	砂岩	一部擦痕 No.35
41	南部 床面上12cm	15.1	5.5	4.1	548.7	完存	砂岩	両端部敲打痕 No.36
42	南東壁溝際 床面直上	11.7	4.8	4.9	427.3	完存	砂岩	一部擦痕 No.39

第74表 第17号住居跡出土白玉観察表(第223図)

番号	種類	出土位置	最大径(cm)	上面径(cm)	下面径(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石材	段階	研磨	外形
48	白玉	床直	0.50	0.45	0.44	0.40	0.14	0.16	滑石	4	上下側面	中央に稜
49	白玉	床直	0.50	0.45	0.45	0.30	0.18	0.12	滑石	4	上下側面	中央に稜
50	白玉	壁溝	0.53	0.47	0.50	0.42	0.16	0.22	滑石	4	上下側面	中膨れ
51	白玉	壁溝	0.48	0.43	0.46	0.30	0.17	0.10	滑石	4	上下側面	中膨れ
52	白玉	壁溝	0.46	0.43	0.46	0.26	0.18	0.10	滑石	4	上下側面	中膨れ
53	白玉	壁溝	0.48	0.46	0.46	0.25	0.16	0.09	滑石	4	上下側面	直線的

などは周辺の住居跡からの混入品である。このうち18の高坏脚部には未貫通の小円孔が1箇所穿たれている。

土製品には43の側面に小孔が穿たれた管状の土錘、玉類とした45・46の土製管玉、47の土製丸玉がある。このうち46の管玉と丸玉はカマドからの出土であり、カマド祭祀との関わりなども注意されよう。

鉄製品には44の断面矩形の棒状品がある。両端部を欠損し、住居跡に伴うかは不明である。

滑石製白玉は成品が6点出土した。出土位置の詳細は不明であるが、床直2点、壁溝4点である。外形は中央に稜をもつもの(48・49)、中膨れのもの(50~52)、直線的なもの(53)に分かれる。

時期は、黒色処理を施した有段口縁坏の口唇端部内面に沈線が巡り、有段部の作出も木口状工具の端部によって沈線状に段が巡る特徴から、後述する第18住居跡よりも古相を示している。概ね夏目遺跡Ⅶ期に位置づけられる。

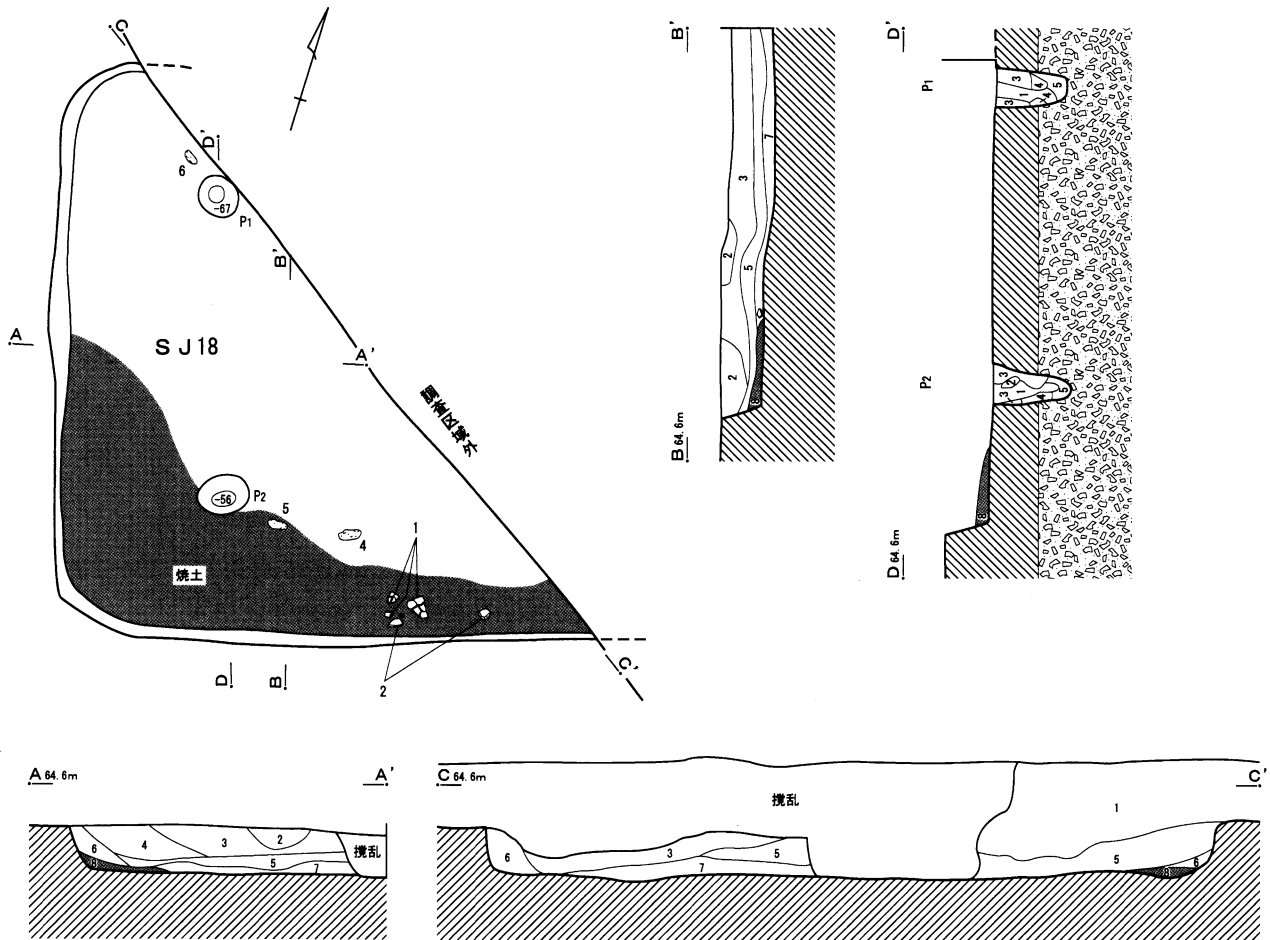
第18号住居跡(第224図)

第18号住居跡は調査区北西端部のH-11・12グリッドに位置する。住居跡北半は調査区外に延びており、全体の約2分の1を調査した。

平面形は方形と推定され、規模は長軸長4.35m、短軸残存長4.08m、床面までの深さは0.35mである。主軸方位は西壁を基準に採れば、N-28°-Wを指す。

床面は緩やかな凹凸があり、硬化面などはなかった。南壁から西壁部にかけて壁際に厚さ数cmの焼土層の堆積を確認した。またその直上には床面全体に焼土と炭化物混じりの黒褐色土が広がっていたことから火災によって焼失した住居跡の可能性が高い。埋土には後世の大きな攪乱があり、堆積状況の詳細は不明であるが、第3層と第5層にロームブロックが多量に含まれることから人為的に埋め戻されたものと想定される。

カマドは本来存在するものと考えられるが、調査区内からは検出されなかった。

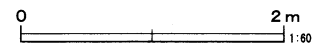


S J 18

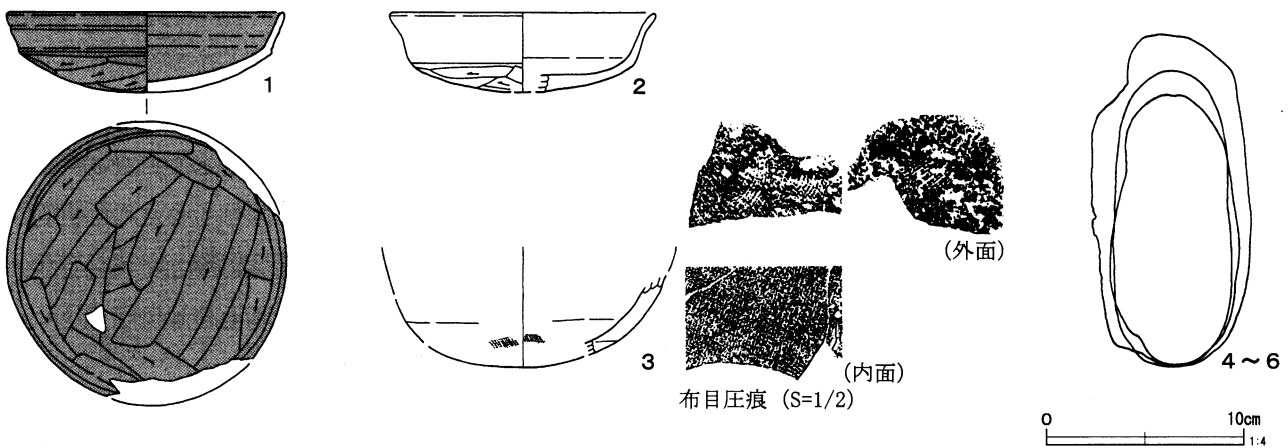
- 1 耕作土
- 2 灰褐色土 灰色粒子を多量に含む
- 3 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 4 黒褐色土 ローム粒子を極多量、ロームブロックを多量に含む
- 5 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む
- 6 黒褐色土 ローム粒子を極多量、ロームブロックを少量含む
- 7 赤褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量に含む
- 8 焼土

ピット1・2

- 1 暗黒褐色土 ローム粒子を少量含む
- 2 暗黒褐色土 ロームブロックを少量含む
- 3 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 4 黄褐色土 黒色土を少量含む
- 5 暗褐色土 ロームブロックを少量含む



第224図 第18号住居跡



第225図 第18号住居跡出土遺物

第75表 第18号住居跡出土遺物観察表(第225図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	南壁寄り 床面直上	14.0 4.1		85	A・B・C・F・K	良好 にぶい黄褐10YR6/3	内外面黒色処理
2	土師器 坏	南壁寄り 床面上8cm	(13.3) 4.0		50	A・B・C・F・J	良好 にぶい褐7.5YR5/3	内面光沢のあるヨコナデ
3	土師器 塊	埋土	[4.0]		45	A・B・F・G・J	良好 にぶい黄橙10YR6/3	内外面に布目圧痕付着

第76表 第18号住居跡出土編物石観察表(第225図)

番号	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存	石質	備考
4	南部 床面直上	16.8	8.0	4.1	673.7	完存	安山岩	一部擦痕 No.7
5	P2周辺 床面直上	14.9	6.0	6.1	817.0	完存	安山岩	両端部敲打痕 No.8
6	P1周辺 床面直上	13.6	6.5	4.5	519.9	完存	砂岩	被熱痕 No.9

柱穴は2本検出された。P1は深さ67cm、P2は深さ56cmをそれぞれ測り、底面はローム層を掘り抜いて砂礫層に達していた。いずれも住居跡に伴う4本支柱穴と考えられる。埋土は第1層が柱痕、第3～5層が掘方埋土であろう。

出土遺物は土師器坏・塊と編物石があるが、全体に少ない(第225図)。南壁沿いに土師器坏と編物石が検出されている。1の有段口縁坏と2の模倣坏は床面から若干浮いた状態で出土した。1は内外面に黒色処理を施した口径14.0cmの大振りの有段口縁坏である。口縁部は大きく開き、有段部分の作出は木口状工具の端部を利用した沈線になっている。2は復元口径13.3cmの模倣坏で、口縁部と体部の境に弱い稜を作り出すもので、無彩である。3の塊は埋土中からの出土で、体部内外面に布目圧痕が部分的に残る。

編物石は3点出土した。4・5はP2の東側から50cm程の間隔をおいて並んで出土した。また6はやや離れたP1脇から出土した。いずれも床面上からの出土である。扁平な棒状礫で、石質は安山岩と砂岩である。

時期は遺物が少なく不明確であるが、黒色処理の有段口縁坏、有稜模倣坏の組み合わせから、6世紀後葉から6世紀末葉を中心とする夏目遺跡Ⅶ期に位置づけられる。周囲にはほぼ同時期の第16・17号住居跡が近接しており、一つの住居群として把握される。

第19号住居跡(第226・227図)

第19号住居跡は調査区南東端のO-20・21グリッドに位置する。重複する第2・20・21号住居跡を切って構築され、北東隅を第29号土坑によって壊されていた。

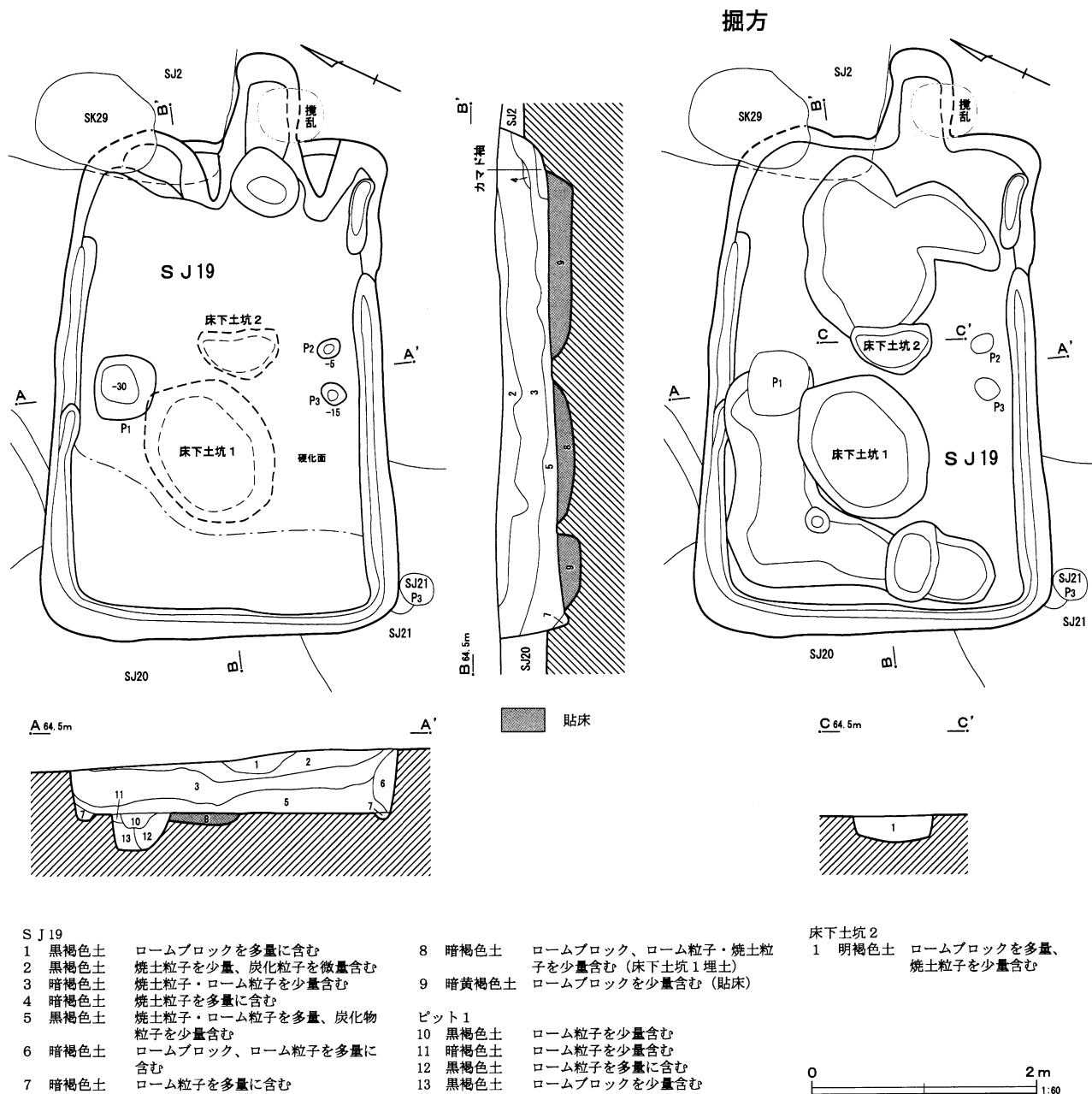
平面形は長方形で、規模は長軸長4.40m、短軸長3.15m、床面までの深さは0.50mである。主軸方位はN-65°-Eを指す。

床面は西壁部が若干低く軟弱であったが、カマド前面から中央部を中心に硬く踏み固められていた。また、カマド左脇に床面よりも一段高いテラス状の段差が造り出されていた。埋土には焼土粒子が多量に含まれていたが、焼失住居を想定できるほどではない。

カマドは東壁に設置され、上面は攪乱を受けていた。規模は全長1.47m、燃焼部内壁幅0.65mである。燃焼部奥壁は壁を約0.75m掘り込んで構築されていた。第1～6層が天井部崩落土で、第6層には多量の焼土ブロックが含まれていた。第7層が灰層と考えられる。第8層が焚口部の埋め戻し土と考えたが、灰層の一部かもしれない。第11層は住居掘方または床下土坑の埋土である。カマドは第11層を切り込んで造られていた。

貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴は3本検出された。P1は住居跡に伴うと判断できるが、柱痕は検出できず柱穴との確証は得られなかった。P2・P3は深さ5～15cmと浅



第226図 第19号住居跡・掘方

く、帰属は不明確である。

壁溝はカマドの位置する東壁を除いて巡っていた。幅17~28cm。深さは10cm前後である。

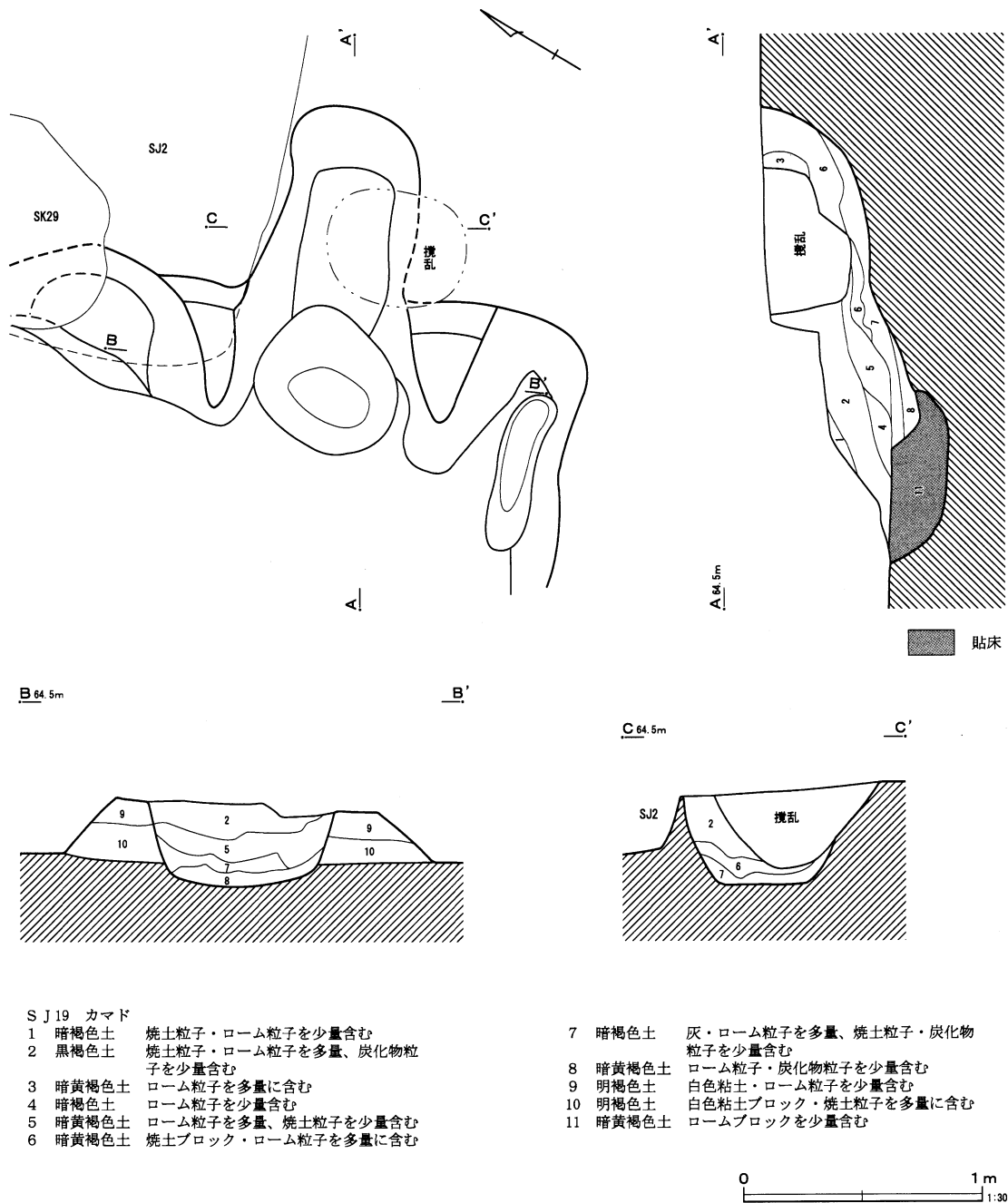
掘方はカマド前面と西壁部周辺に認められたが、不定形である。カマド前面のそれは床下土坑を含んでいるのかもしれない。

床下土坑は2基検出された。第1号床下土坑は楕円形で、径1.35×1.05m、深さ0.12m、ロームブロックの埋め戻し土が充填されていた。第2号

床下土坑は径0.72×0.42m、深さ0.25mで、やはりロームブロック主体に埋め戻されていた。

出土遺物は土師器北武蔵型坏・武蔵型壺・武蔵型甕、須恵器坏・甕がある(第228図)が、量的には少ない。

1・2は北武蔵型坏である。1は扁平化しているが丸底を保っている。2は体部の調整範囲が広く、平底に近くなる。3は南比企窯産の須恵器坏。口径は14cm台と大きく、底部は回転糸切り後、外



第227図 第19号住居跡カマド

周及び体部下端に回転ヘラケズリを施す。4は口径16cm台と推定される大型坏で、末野窯産か。5は武蔵型の壺。6・7は武蔵型甕である。6は「コ」の字状口縁に移行する形態である。8は須恵器甕の胴部破片。外面平行叩き目、内面同心円文当て具痕。在地産と考えられるが産地は不明。

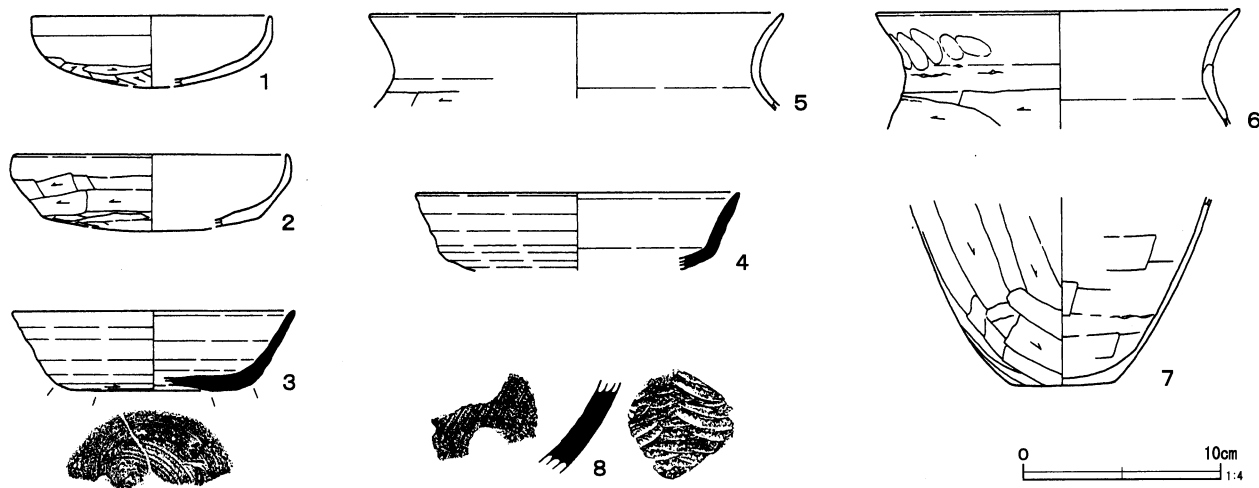
時期は8世紀前半の夏目遺跡Ⅺ期に位置づけられる。

第20号住居跡 (第229図)

第20号住居跡は調査区南東部のO-20・21グリッドに位置する。カマド燃焼部付近を大きく、重複する第19号住居跡に壊されていた。

平面形は方形の小型住居跡で、規模は長軸長3.13m、短軸長3.10m、床面までの深さは0.42mである。主軸方位はN-37°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土中第1層～第4層



第228図 第19号住居跡出土遺物

第77表 第19号住居跡出土遺物観察表 (第228図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 杯	埋土	(12.0) [3.6]		25	A・B・F・G・K	普通 橙7.5YR6/6	北武蔵型杯
2	土師器 杯	カマド	(13.6) [3.7]		20	A・B・D・J	良好 にぶい黄褐10YR5/3	北武蔵型杯 平底に近い
3	須恵器 杯	埋土	(14.1) 4.0	(8.6)	50	A・G・H・K	良好 灰黄2.5Y6/2	南比企窯産 底部内面平滑 ロクロ 左回転
4	須恵器 杯	埋土	(16.2) [3.9]		20	A・B・G・J・K	良好 灰オリーブ7.5Y6/2	末野窯産か
5	土師器 壺	埋土	(20.8) [4.9]		20	A・B・D・F・J	普通 明赤褐5YR5/6	内外面風化顕著
6	土師器 甕	埋土	(18.1) [6.0]		15	A・B・F・G・J	普通 橙5YR6/6	口縁部外面指頭圧痕
7	土師器 甕	埋土	[9.5]	5.2	55	A・B・C・F・J	良好 黒褐10YR3/2	胴部外面スス付着
8	須恵器 甕	埋土			破片	A・C・F・J	良好 灰黄2.5Y6/2	外面：平行叩き目 内面：同心円文 当て具痕 在地産

にはロームブロックが多量に含まれており、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは北壁に設置されていた。燃焼部本体は削平されていたが、左袖部分に僅かに白色粘土の堆積が確認された。煙道部は壁外に1.45m水平に延びていた。地山をトンネル状に掘り抜き、先端部はピット状の煙出しに接続していた。天井部は崩落せずに遺存していた。

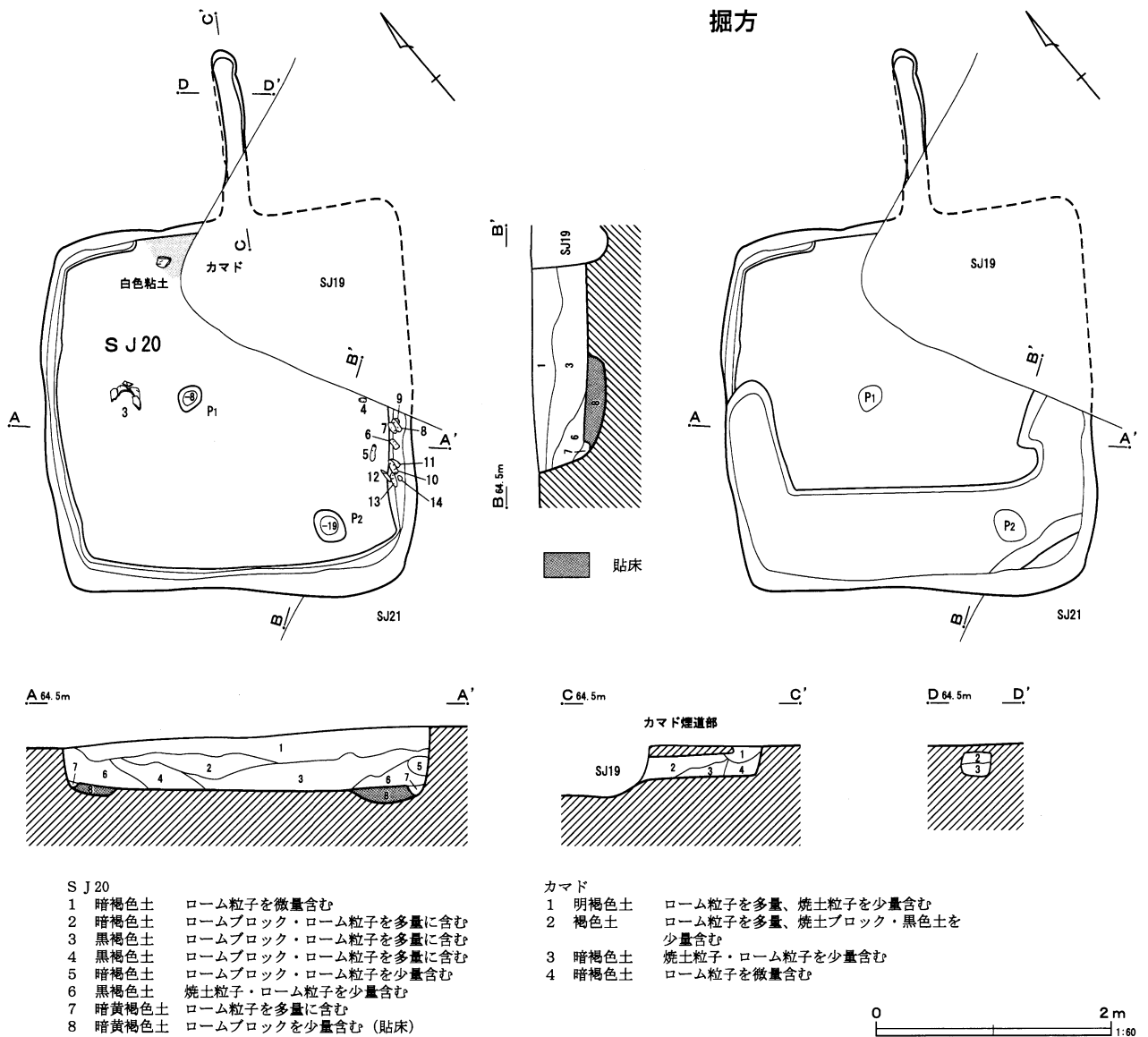
貯蔵穴は検出されなかった。柱穴は2本検出されたが、深さ8～19cmと浅く、柱穴か否か確定できない。

壁溝はカマド周辺を除いて巡っていた。幅は18～32cm、深さ5cm程度である。

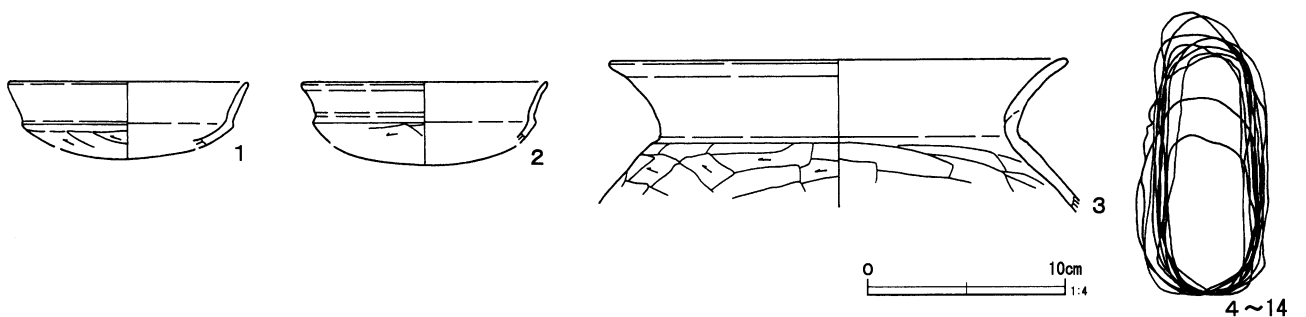
掘方は住居跡南半分で方形周溝状に掘られていることが確認された。ロームブロックを少量含む暗黄褐色土で埋め戻し、貼床を施していた。

出土遺物は土師器杯・壺と編物石がある(第230図)。1・2は土師器模倣杯の小片である。口径12cm前後の小振りなもので、体部が浅く扁平になり、口縁部外反気味に開く。埋土からの出土である。3は土師器壺で、床面から出土した。球胴形を呈し、胴部外面に横ないし斜め方向のヘラケズリが特徴的で、丸甕とされる器種である。

編物石は11個を数え、東壁際からまとめて出土した。いずれも床面から10cm前後浮いた状態で出土し、壁際に沿って比較的等間隔に並んでいた。



第229図 第20号住居跡・掘方



第230図 第20号住居跡出土遺物

棒状を呈し、長さ13cm前後の砂岩・絹雲母片岩の円盤が主体である。

時期は遺物が少なく明確でないが、小型化した

模倣坏や球胴形の壺の伴出から7世紀前半を中心とする夏目遺跡Ⅷ期に位置づけられる。

第78表 第20号住居跡出土遺物観察表(第230図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	埋土	(12.0) [3.3]		15	A・B・C・F・G	良好 橙7.5YR6/6	体部外面ヘラケズリ
2	土師器 坏	埋土	(12.3) [3.1]		10	A・C・D・F・J	良好 橙7.5YR6/6	体部外面ヘラケズリ
3	土師器 壺	西部 床面直上	(23.0) [7.8]		45	A・B・C・I・J	普通 橙7.5YR6/6	胎土に砂粒を多く含む

第79表 第20号住居跡出土編物石観察表(第230図)

番号	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存	石質	備考
4	南東壁寄り 床面直上	7.8	4.5	2.9	147.4	完存	砂岩	No.3
5	南東壁寄り 床面上4cm	13.1	5.4	3.2	292.2	裏面一部欠損	砂岩	No.4
6	南東壁溝 床面上8cm	12.1	6.0	4.8	462.3	上端部一部欠損	石英	No.5
7	南東壁溝 床面上6cm	14.0	5.6	4.0	506.2	完存	砂岩	No.6
8	南東壁溝 床面上7cm	(12.0)	4.8	2.4	159.2	下端欠損	絹雲母片岩	No.7
9	南東壁溝 床面上4cm	9.9	6.3	4.0	311.0	完存	砂岩	No.8
10	南東壁溝 床面上16cm	12.8	6.0	2.3	313.8	完存	絹雲母片岩	No.9
11	南東壁溝 床面上11cm	12.7	4.6	3.8	437.4	完存	砂岩	一部擦痕 No.10
12	南東壁溝 床面上7cm	(13.6)	4.4	1.5	158.9	上端部欠損	絹雲母片岩	No.11
13	南東壁溝 床面上13cm	(12.4)	4.3	2.6	258.6	上端部欠損	絹雲母片岩	No.12
14	南東壁溝 床面上9cm	12.5	5.1	3.2	324.5	完存	砂岩	一部擦痕 No.13

第21号住居跡(第231~235図)

第21号住居跡は調査区の南東端部のO・P—20・21グリッドに位置する。第19・20号住居跡に壊され、また南西部は調査区外にかかっている。第3号住居跡は西隅部と微妙に重複するが、新旧関係は明確ではない。

平面形は方形で、規模は長軸長5.34m、短軸長5.10m、床面までの深さは0.30mである。主軸方位はN—66°—Eを指す。

床面は緩やかに起伏をもつ。住居跡中央部の柱穴を結んだラインの内側が非常に硬く踏み固められていた。埋土は炭化物ブロックやロームブロックが多量に含まれる部分があり、人為的な関与が想定される。

カマドは北東壁の中央付近に設置される(第232図)。左袖と燃焼部の一部は攪乱を受けていたが、燃焼部はほぼ壁内に収まると考えられる。壁外に延びる煙道部は検出されなかった。全長1.50m、燃焼部内壁の幅は0.45mである。袖部は暗褐色の粘土を主体に構築されていた(第6~10層)。第1~3層は天井部崩落土、第4層は灰層と考えられる。

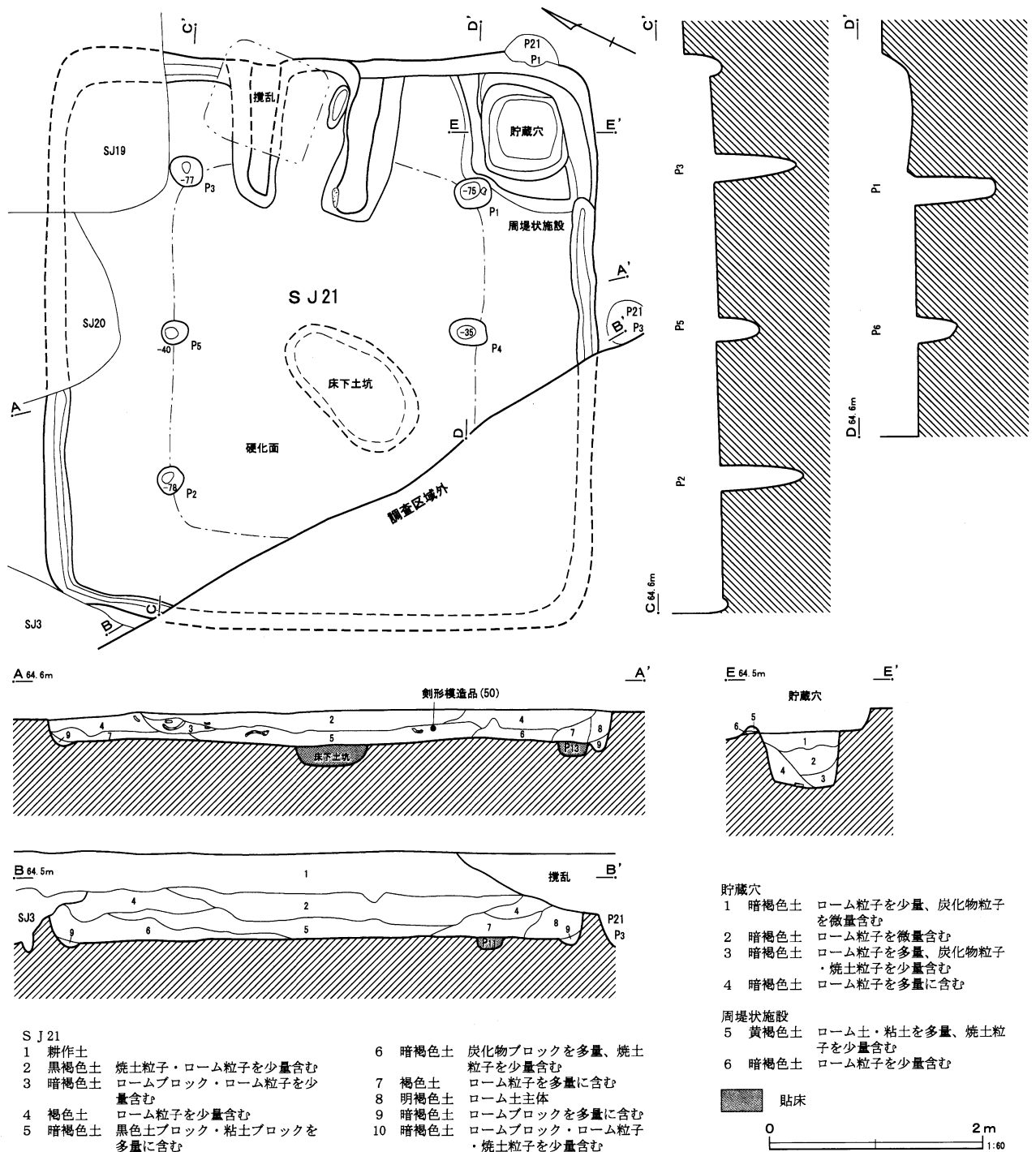
貯蔵穴は東隅部に設けられていた。カマドの右側にあたる。方形で、規模は一辺0.70m、深さ0.52mである。貯蔵穴をL字状に取り囲むように周堤状施設が付設されており、ローム土や粘土を含む黄褐色土を主体に造られていた。

柱穴は5本検出された。規則的に配置されており、本来は6本柱穴を構成したと考えられる。P1~P3は深さも70cmを超え、支柱穴と考えられる。P4・P5は40cm以下と浅く、桁柱を支える支柱であろうか。

壁溝はほぼ全周するものと考えられる。幅15~30cm、深さ約10cmである。

住居中央部の床面下から土坑が1基検出された。楕円形で、規模は長径1.44m、短径0.78m、深さ0.18mである。埋土はロームブロックの埋め戻し土で、上面は貼床されており、いわゆる床下土坑と考えられる。また、床面下からピットが13基新たに発見された。P8のように柱穴と考えるも良い深い掘り込みもあるが、大半は浅い不定形の小穴であった(第233図)。

出土遺物は土師器坏・壺・鉢・埴・甗・高坏・脚付壺・壺・甕、砥石、剣形石製模造品、土玉、



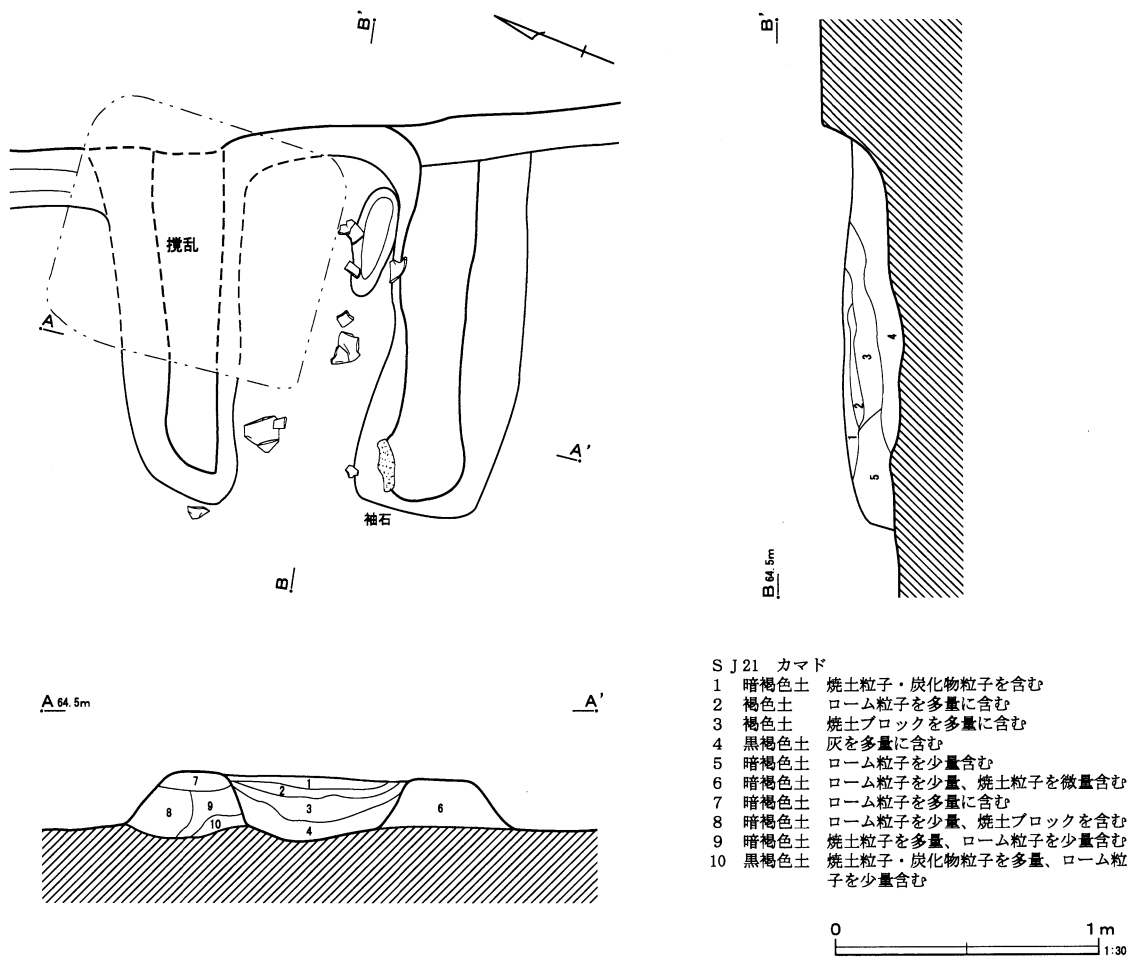
第231図 第21号住居跡

ガラス小玉がある（第236～240図）。

住居跡全体から多量に出土したが、特に住居跡中央から西隅部にかけてまとまっている。出土位置は床面から出土したものも見られるが、大半は床面より10cm前後浮いた状態である。特に壁際のはものは斜めに流れ込んだ状態、また貯蔵穴のものは床面の高さまで完全に埋まった状態で出土した

ものが目立つ。

遺物の分布は敢えて分ければ、南東壁寄りの一群とP2周辺から中央部にかけてまとまる一群に二分される。後者は、44の大型壺を中心に構成される一群で、6の剣形模造品を中に入れた壺をはじめ、坏、高坏、小型壺などによって構成され、完形品が多く含まれている。



第232図 第21号住居跡カマド

カマド内部からは支脚は検出されず、甕の破片が出土したにすぎない。貯蔵穴は上面から26・30の高坏や16の甕が出土しているが、内部からは33の高坏が出土した程度で、人為的に埋め戻された可能性もある。26の高坏は柱状部から裾部へ移行する内面に布目圧痕が明瞭に残されていた。

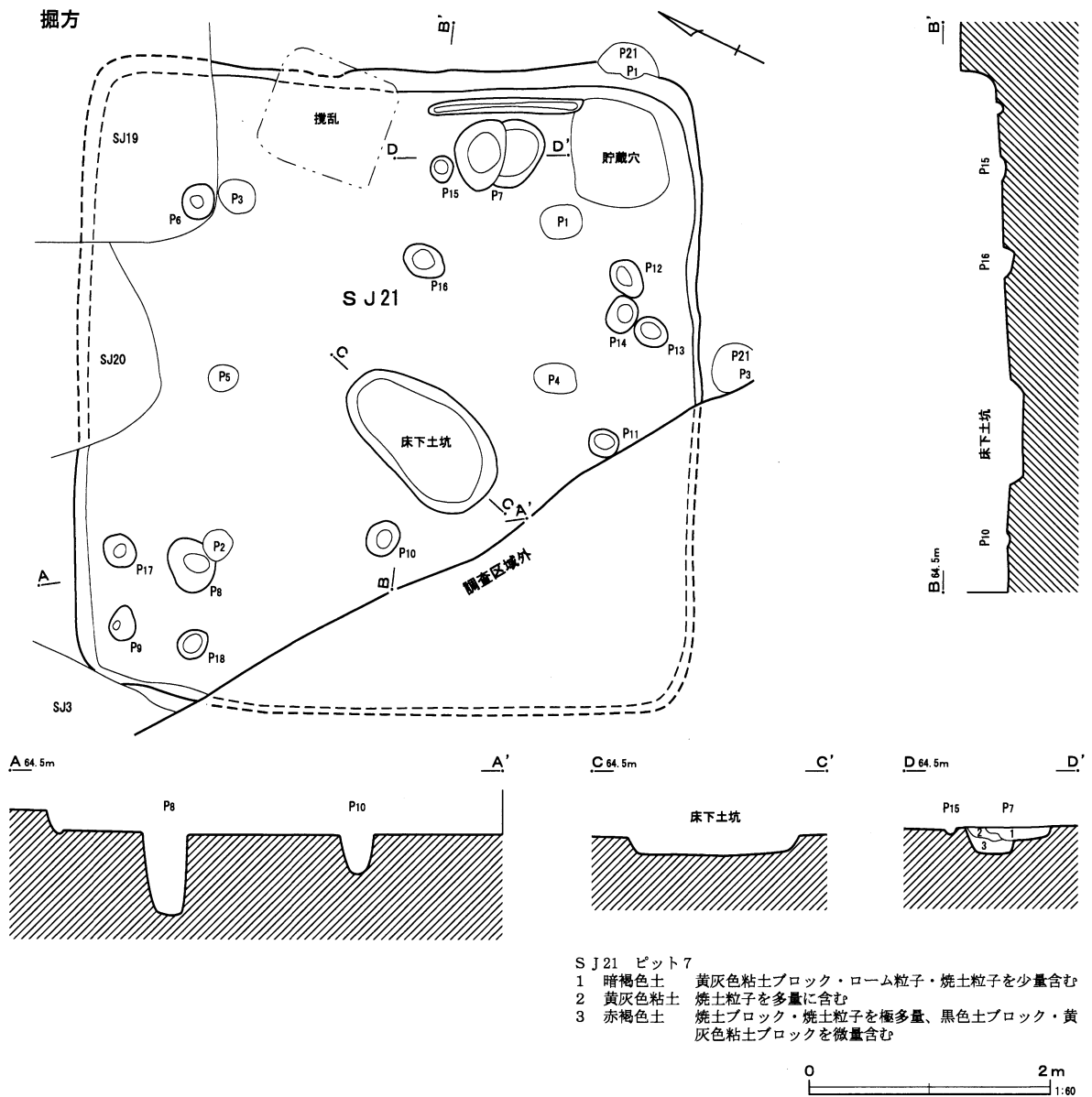
貯蔵穴周辺からは、周堤状施設に接する3の坏のほか、28の高坏と43の甕が床面から出土している。南東壁際には1の坏、14の小型甕、22・24の高坏、36の脚付壺が流れ込んだ状態で出土した。少し南に離れて23の高坏の下から49の砥石が重なった状態で出土している。47の壺は比較的広い範囲に広がっている。南西側の調査区域際の床直上からは9の小型壺、39の複合口縁壺が潰れた状態で出土した。

P 2 脇から出土した44の大型壺は、土圧によっ

て内部に口縁部が落ち込んだ状態で潰れていることから、本来、口縁部を上にした正位の状態で据え置かれていたと考えられる。44は復元器高61cmを超える有段口縁壺の大型品である。胴部は大きく歪む。胴部外面はハケ調整後、下半部にヘラケズリ、上半部にヘラナデを施す。

そして、その東側には17の甕、2の坏、17の高坏、15の小型甕、8の埴、40・48の甕、4の坏などの完形品が置かれていた。また、北側にはやや離れて32・35の高坏、13の鉢、12の小型壺が配されていた。南側には29の高坏が単独で出土した。さらに、その西側には高坏や小型壺などの土器がまとめられた状態で置かれていた。

その西側の一群の土器について出土状況をもとに当初の配列を復元すると、51の剣形模造品を中に入れた6の壺を坏部に乗せた25の高坏を南端



第233図 第21号住居跡掘方

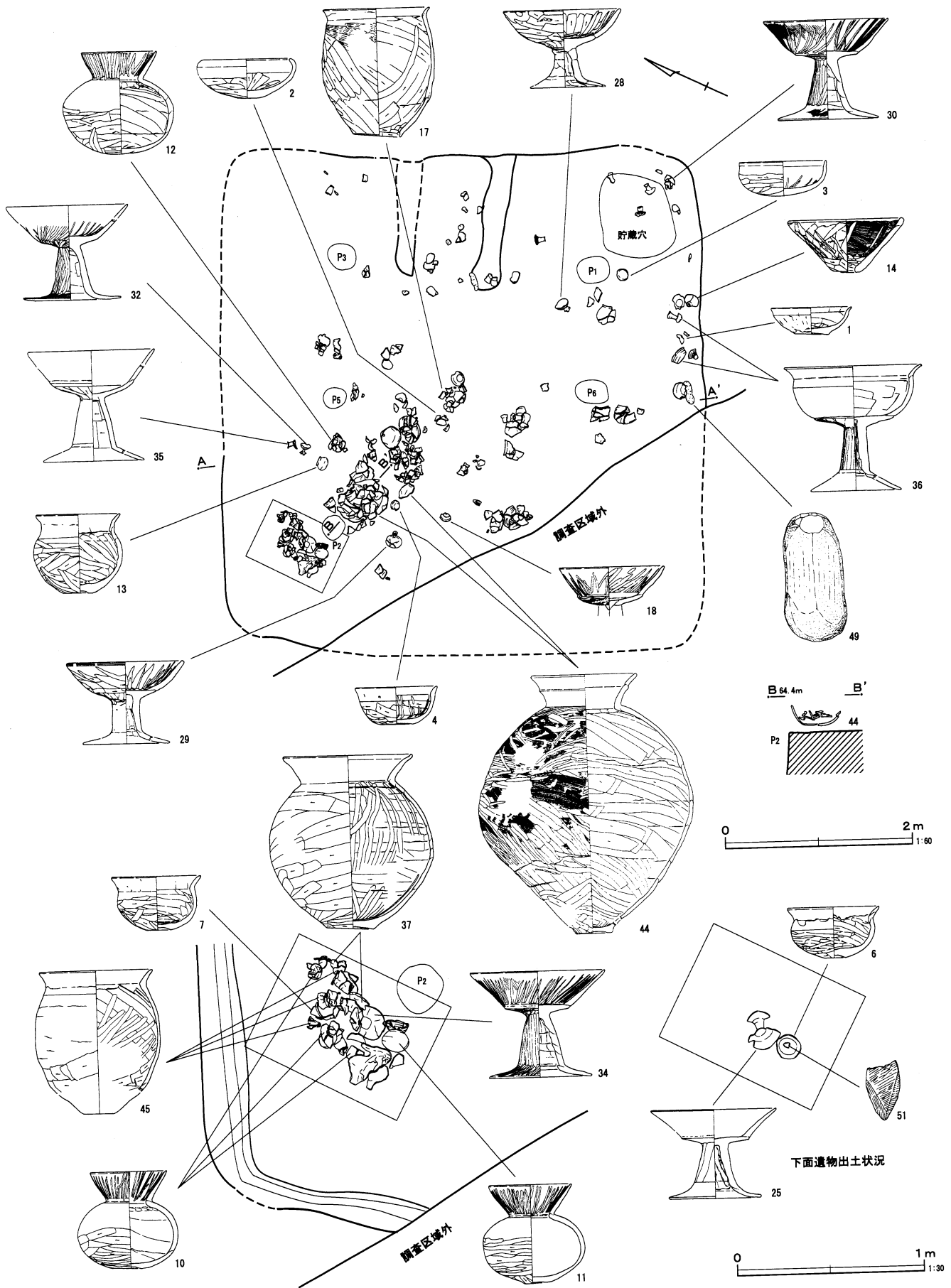
に置き、それに接するように10・11の小型壺、34の高坏を並べ、内部に7の埴を入れた45の甕と37の甕が西端に並べられていたと考えられる。

このように大型壺の周囲に土器群を配置した状況から見て、何らかの祭祀の痕跡を示すと予想される。

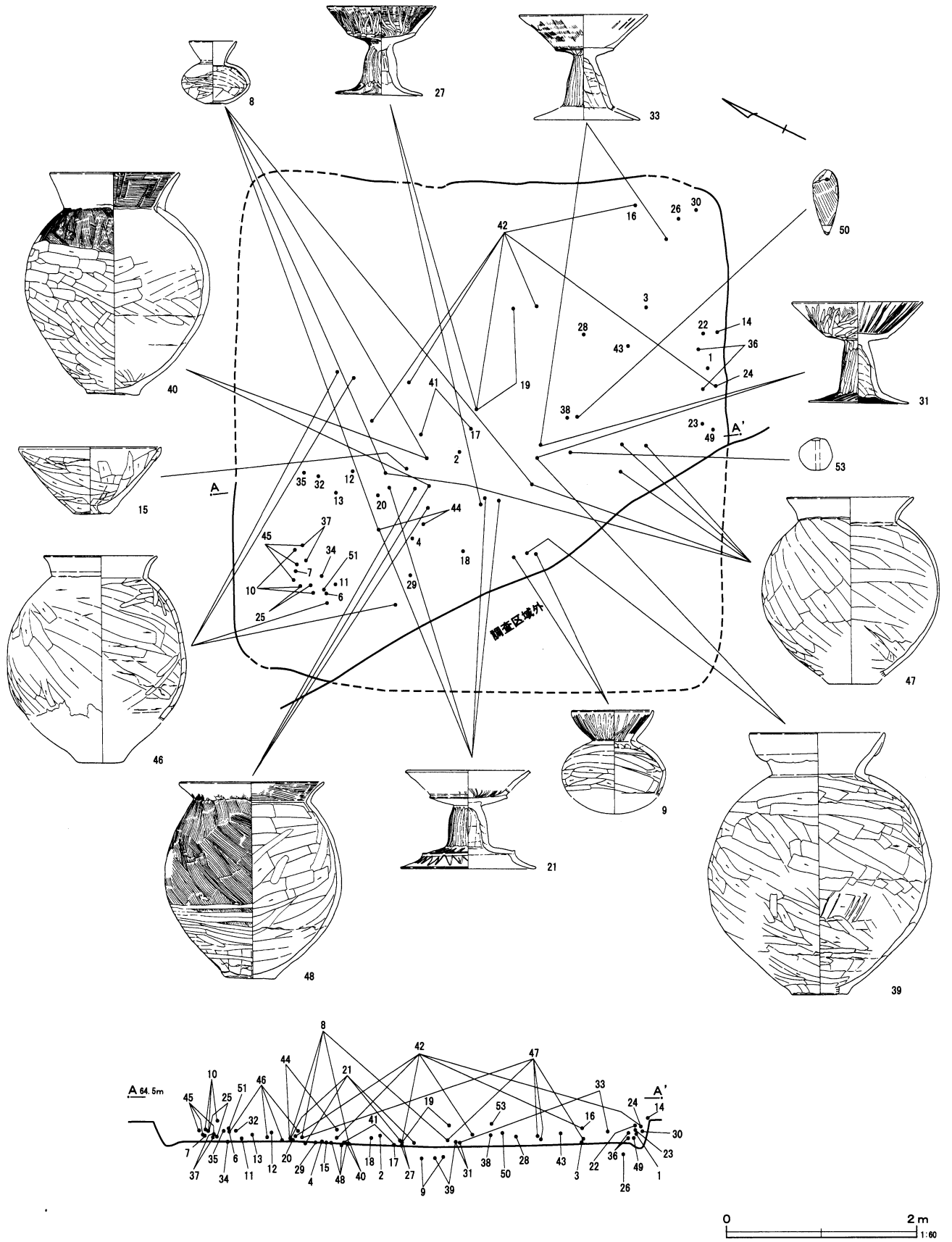
剣形模造品は2点出土している。うち1点(50)は埋土中から、もう1点(51)は先述したように6の坏内部に入れてあった。50の剣形模造品は完形品であるが、51は穿孔部より頭部を欠損してい

る。人為的な折損なのかは不明確であるが、儀礼行為の終焉を告げるための行為によって壊されたのか興味深い。53の土製丸玉は中央部の床面上25cmから出土。また出土位置は不明であるが、コバルトブルーに発色したガラス小玉の出土も注目に値する。

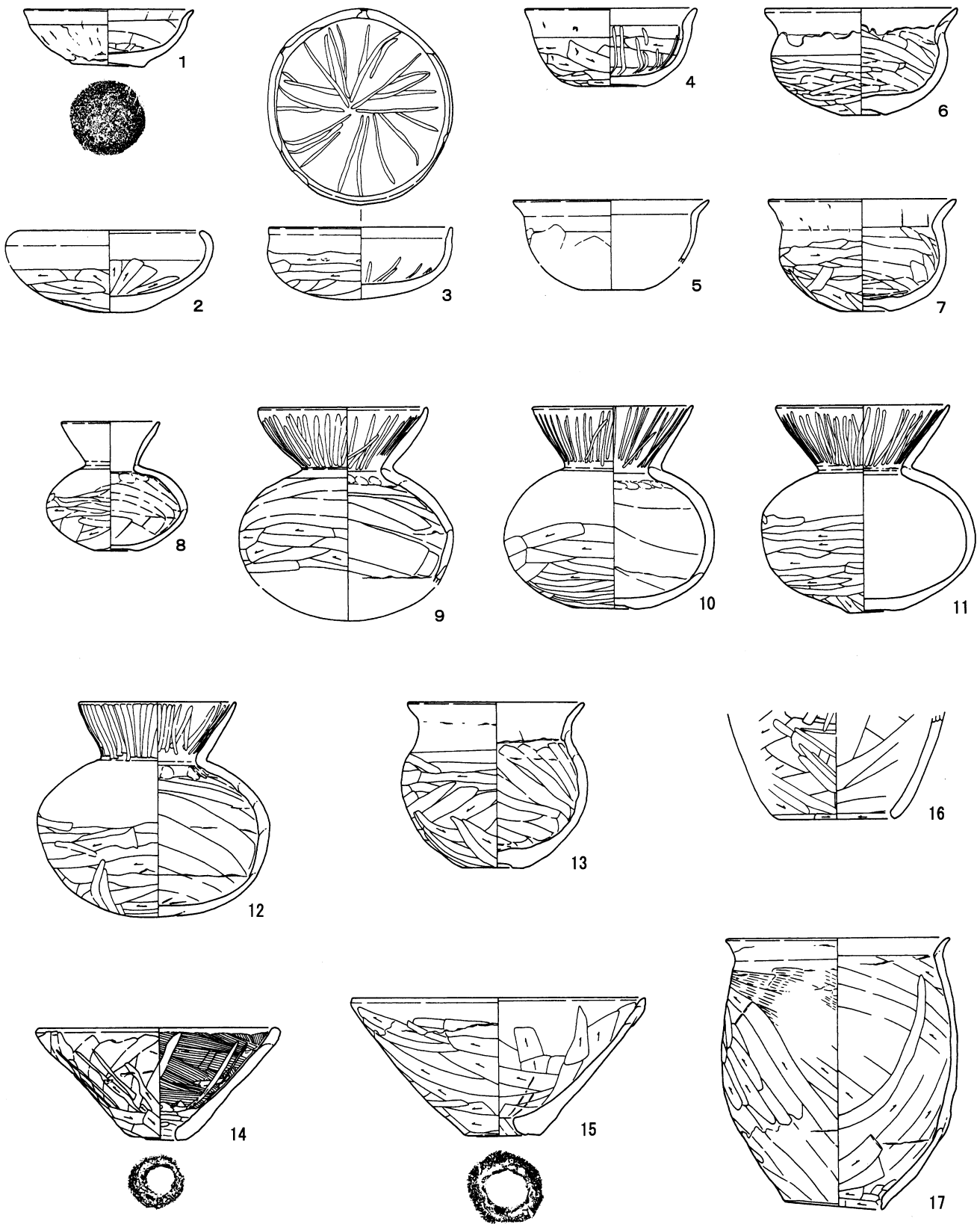
時期は、口縁部が内屈する坏や平底の坏など典型的な模倣坏出現以前の様相を示すことから夏目遺跡II期に位置づけられる。



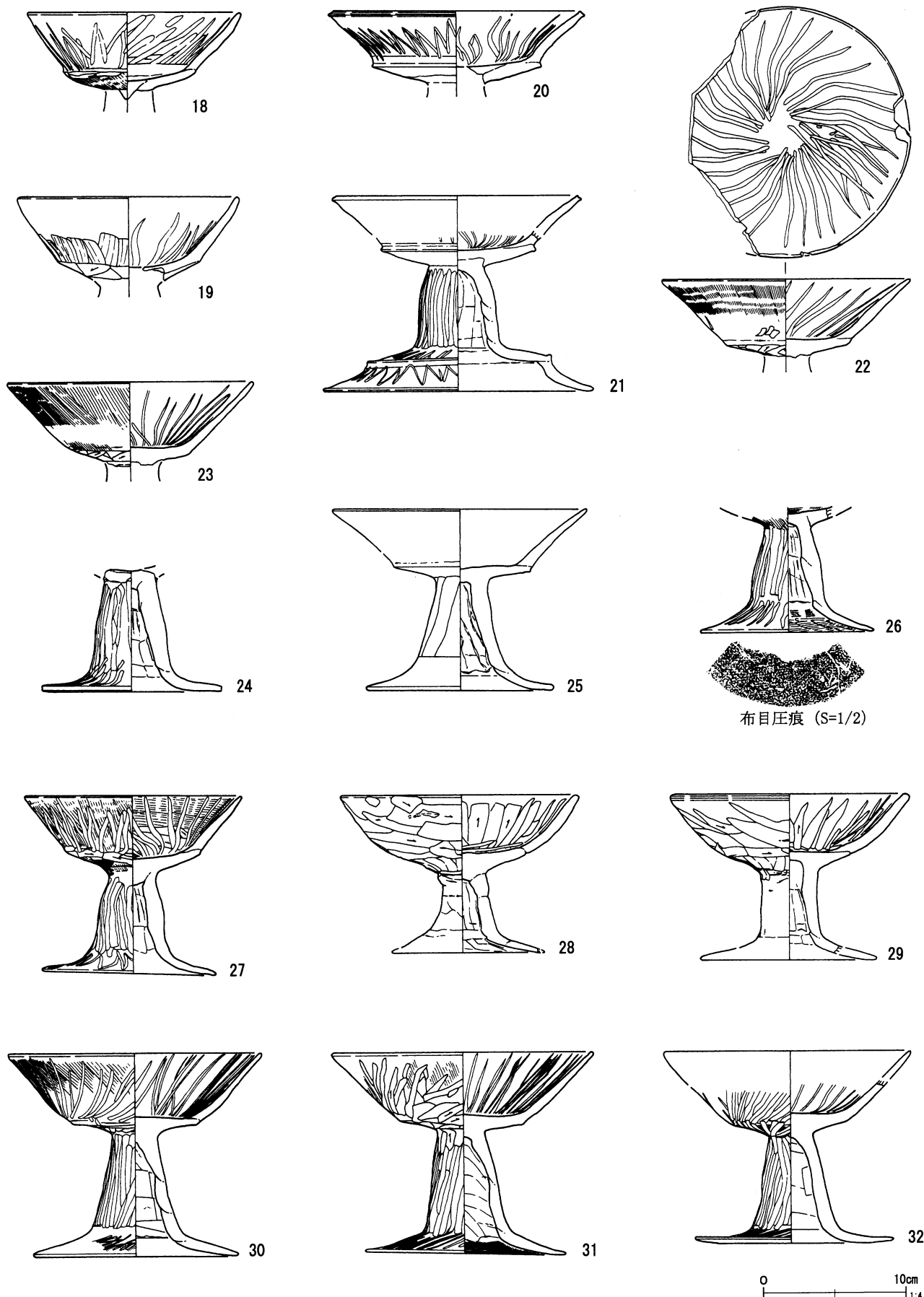
第234図 第21号住居跡遺物出土状況(1)



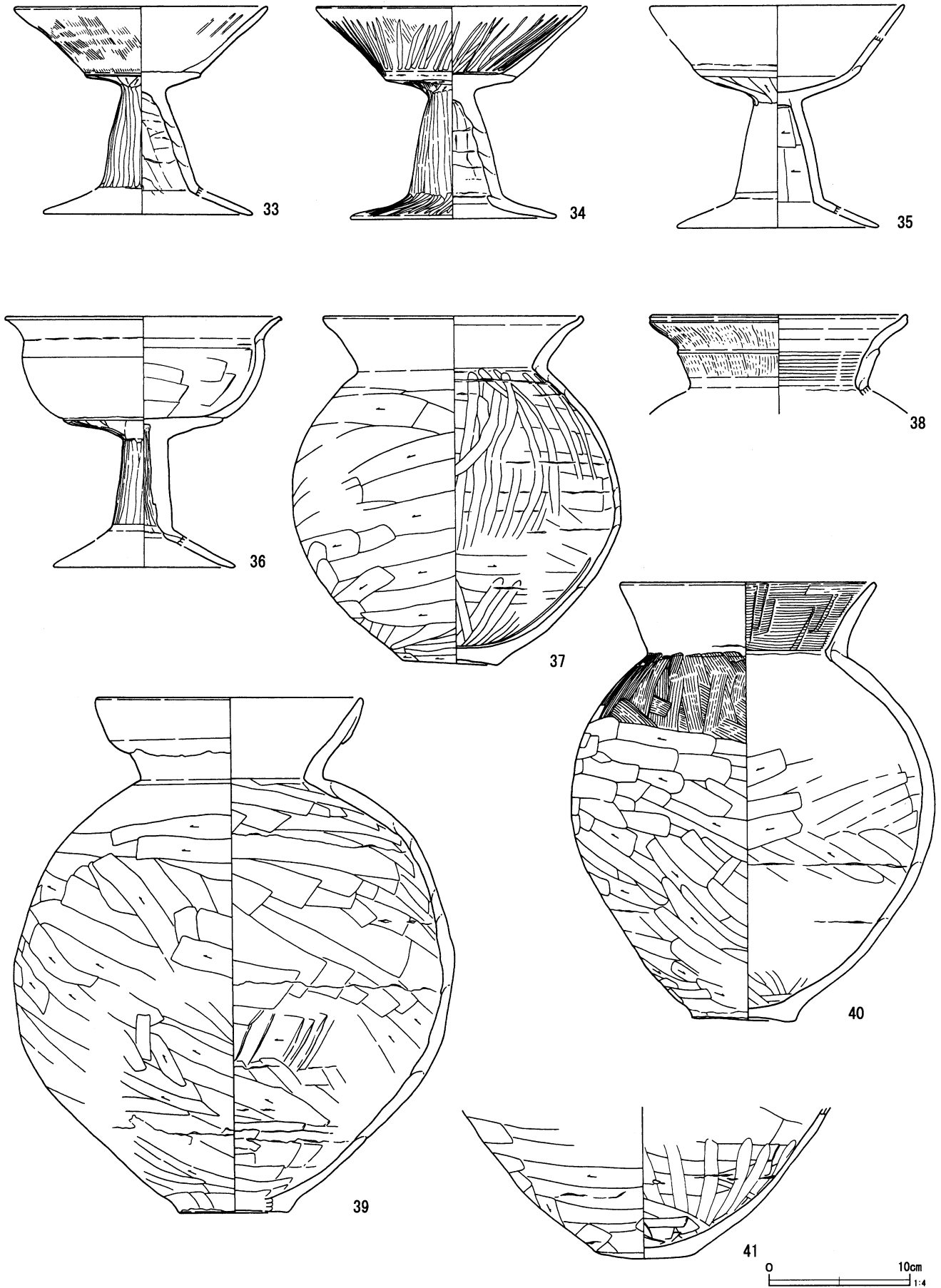
第235図 第21号住居跡遺物出土状況 (2)



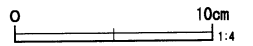
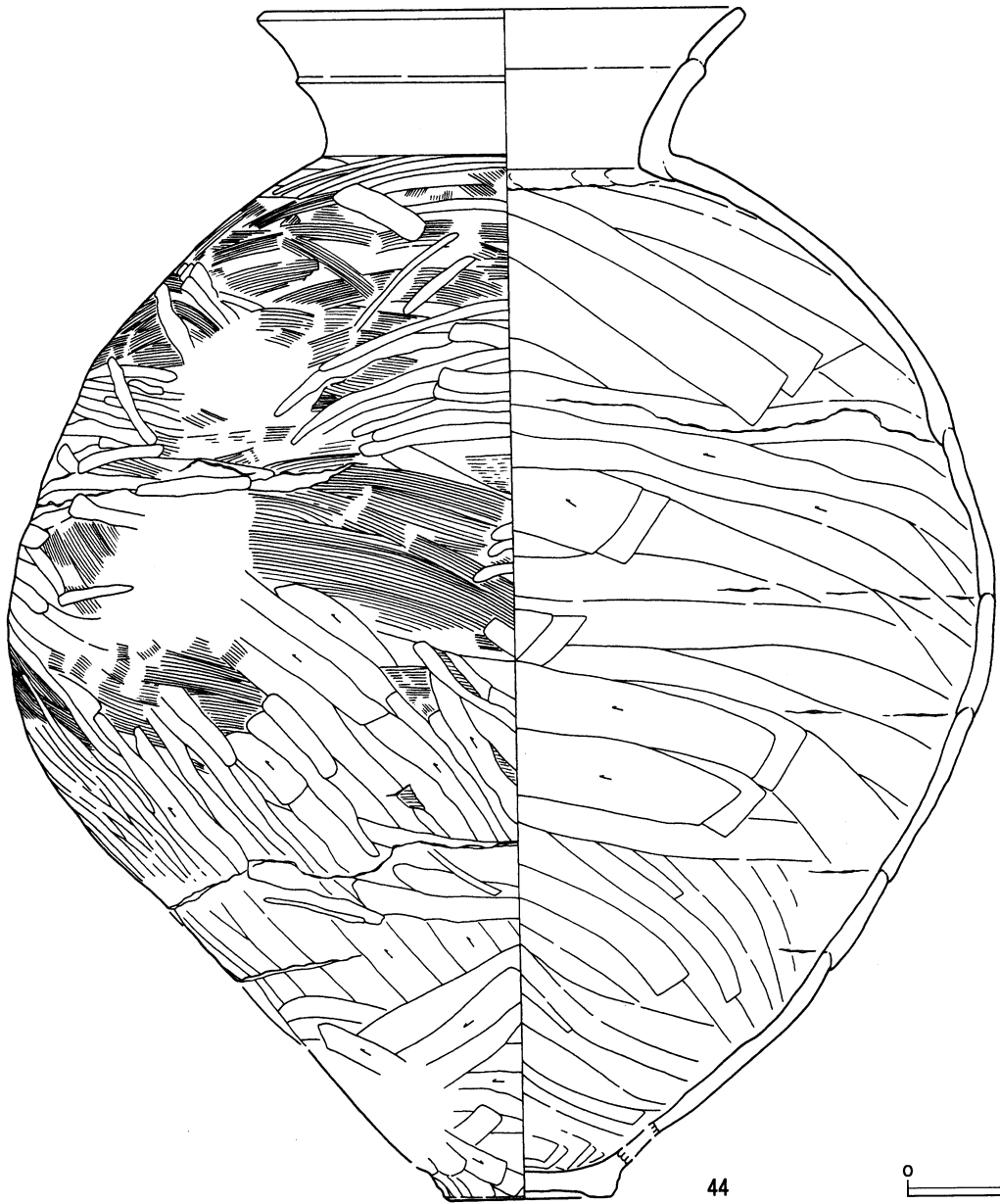
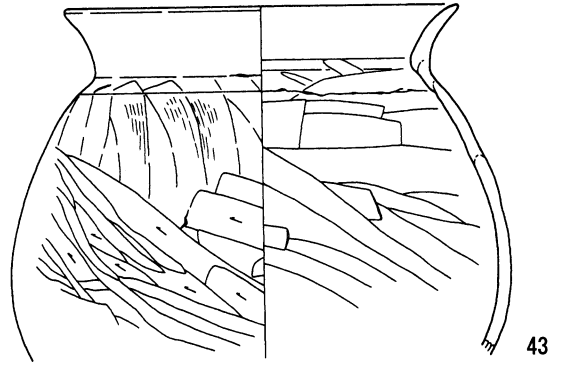
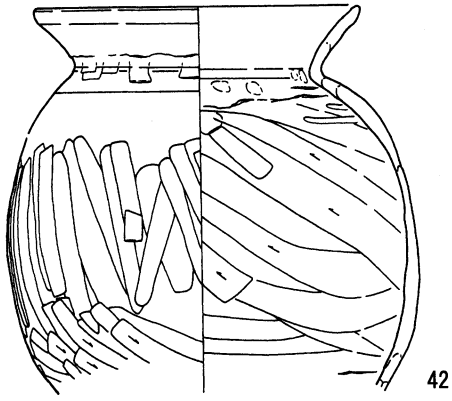
第236図 第21号住居跡出土遺物(1)



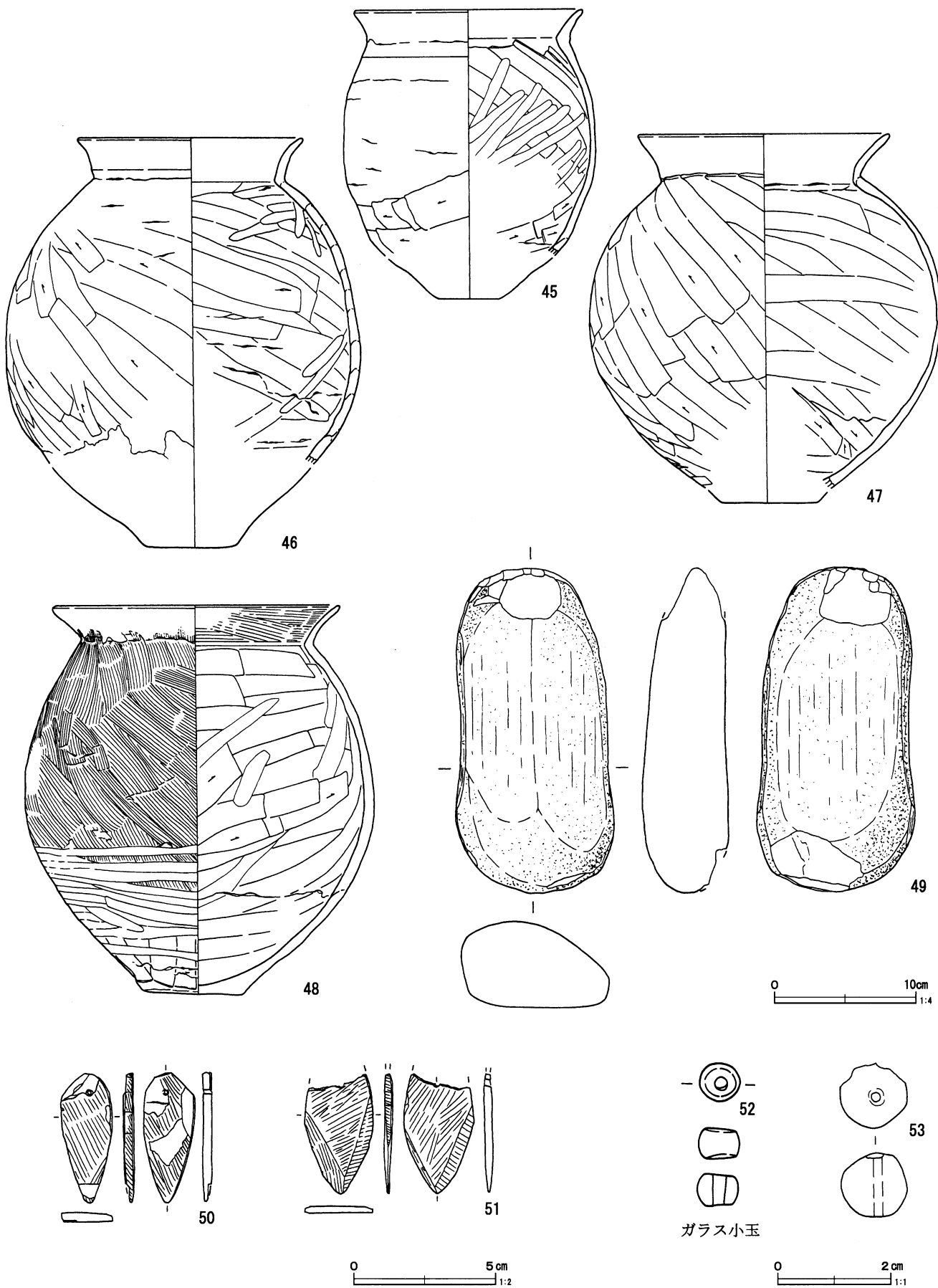
第237图 第21号住居跡出土遺物 (2)



第238図 第21号住居跡出土遺物 (3)



第239图 第21号住居跡出土遺物（4）



第240図 第21号住居跡出土遺物(5)

第80表 第21号住居跡出土遺物観察表 (第236~240図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	南壁際 床面上13cm	(11.5) 3.9	5.0	90	A・B・C・K	普通 にぶい橙2.5YR6/4	調整やや粗雑
2	土師器 坏	中央部 床面上10cm	(12.4) 5.5	3.3	60	B・C・D・F・K	良好 明赤褐5YR5/6	小さな平底の底部削り出し 体部内面ヘラケズリ 胎土小礫多量
3	土師器 坏	貯蔵穴脇 床面直上	(12.3) 4.9		95	A・D・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	内面粗い放射暗文、外面器面荒れていて調整不明
4	土師器 埴	中央部 床面上6cm	11.6 5.3	4.6	95	A・C・G・I	良好 明赤褐2.5YR5/6	体部内面粗いヘラミガキ
5	土師器 埴	カマド右袖	(13.2) [4.4]		25	A・D・F・G・J	良好 橙2.5YR6/6	体部外面光沢のあるナデ
6	土師器 鉢	北西部 床面上13cm	13.0 7.3	3.0	95	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	体部内面指ナデ 底部上げ底 剣形品が入れられた状態で出土
7	土師器 鉢	北西部 床面上13cm	12.6 7.6	3.4	100	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	体部内面指ナデ 底部上げ底
8	土師器 埴	中央部 床面上3cm	(6.5) 8.8	9.5 2.9	85	A・B・C・F・J	良好 にぶい橙2.5YR6/4	胴部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ
9	土師器 小型壺	中央部西寄り 床面直上	11.2 [12.1]	14.5	80	A・D・F・G・J	良好 橙5YR6/8	口縁部内外面ヘラミガキ 内底面に粘土層が付着
10	土師器 小型壺	北西部 床面上16cm	10.8 13.8	14.2 4.3	80	A・C・D・E・F	良好 にぶい赤褐2.5YR4/4	口縁部内外面ヘラミガキ
11	土師器 小型壺	北西部 床面上8cm	11.6 14.0	14.5 3.2	95	A・C・D・F	良好 明赤褐2.5YR5/6	口縁部内外面ヘラミガキ 内底面に粘土層が付着
12	土師器 小型壺	中央部北寄り 床面上9cm	10.5 14.0	15.7 3.0	85	A・B・C・F・J	良好 赤橙10R6/6	口縁部外面細かいヘラナデ、内面ヘラミガキ
13	土師器 鉢	北部 床面上9cm	11.9 11.2	4.2	100	A・B・D・F・J	良好 橙5YR6/6	体部内面指ナデ 外面ヘラケズリ 底部上げ底
14	土師器 小型甗	南壁際 床面上27cm	(16.0) 7.9	3.8	50	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	体部内面木口状工具によるナデ 作りやや粗雑
15	土師器 小型甗	中央部 床面直上	19.8 9.3	5.2	100	B・C・E・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	体部内外面ヘラケズリ
16	土師器 甗	貯蔵穴際 床面上10cm	[7.2]	(14.7) (8.0)	20	A・B・C・F・J	良好 にぶい赤褐5YR5/4	胴部外面ヘラケズリ
17	土師器 甗	中央部 床面直上	15.0 18.4	16.0 6.6	90	A・B・C・F・K	良好 にぶい橙5YR6/4	胴部外面に黒斑あり
18	土師器 高坏	中央部西寄り 床面上8cm	14.9 [5.4]		55	A・B・F・G・I	良好 にぶい橙5YR6/4	坏部外面鋸歯状のヘラミガキ、内面粗いヘラミガキ
19	土師器 高坏	カマド右袖 袖直上	(15.2) [5.8]		30	A・D・F・G・J	良好 にぶい黄橙10YR6/4	坏部外面下端木口状工具によるナデ、内面放射暗文
20	土師器 高坏	中央部北寄り 床面直上	(17.4) [5.1]		25	A・B・D・F・J	良好 赤褐2.5YR4/6	坏部外面鋸歯状の暗文、内面放射暗文
21	土師器 高坏	中央部 床面直上	[11.2]	19.0	50	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内外面ヘラミガキ 脚部外面鋸歯状のヘラミガキ
22	土師器 高坏	南壁際 床面上18cm	17.4 [5.4]		80	A・D・F	良好 明赤褐5YR5/6	坏部外面木口状工具によるナデ、内面放射暗文
23	土師器 高坏	南壁際 床面上16cm	17.1 6.0		95	A・B・C・D・F	良好 赤褐5YR4/6	坏部外面木口状工具によるナデ、内面放射暗文
24	土師器 高坏	南壁際 床面上19cm	[8.5]	(12.6)	75	A・B・F・G・I	良好 橙5YR6/6	脚部外面ヘラミガキ、裾部放射暗文
25	土師器 高坏	北西部 床面上10cm	(17.6) 12.7	12.8	80	A・C・D・F・I	良好 明赤褐2.5YR5/8	脚部内面絞り目顕著
26	土師器 高坏	貯蔵穴 底面上31cm	[8.7]	12.2	95	A・B・D・J	良好 明赤褐5YR5/8	裾部内面に布目圧痕が残る
27	土師器 高坏	中央部 床面直上	15.6 12.4	12.2	95	A・B・F・G・K	良好 にぶい橙2.5YR6/4	坏部内外面暗文、脚部外面暗文
28	土師器 高坏	中央部 床面上4cm	16.6 [11.0]		90	A・B・C・F・I	良好 橙2.5YR6/6	作りやや粗雑
29	土師器 高坏	西部 床面上3cm	16.4 [11.2]		95	A・B・C・E・F	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	作りやや粗雑
30	土師器 高坏	南東隅部 床面直上	(17.6) 14.2	(14.4)	40	A・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	坏部内外面ヘラミガキ
31	土師器 高坏	中央部 床面直上	18.2 14.2	14.1	70	A・B・D・F・J	良好 橙5YR6/6	坏部外面ヘラケズリ 内面ヘラミガキ 裾部外面ヘラミガキ
32	土師器 高坏	北部 床面上14cm	[11.4]	(14.0)	75	A・D・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内外面暗文 脚部外面ミガキ、内面ナデ
33	土師器 高坏	中央部 床面直上	(17.8) [13.4]		65	A・B・C・G・J	良好 橙2.5YR6/6	坏部内面器面剥落 粗い暗文を施す
34	土師器 高坏	北西部 床面上5cm	19.2 15.0	14.3	95	A・D・F・G・K	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内外面ヘラミガキ、裾部外面ヘラミガキ

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
35	土師器 高坏	北部 床面上13cm	[12.7]		40	A・B・C・E・I	良好 明赤褐2.5YR5/6	坏部内面中央付近は器面が荒れている
36	土師器 脚付埴	南壁際 床面上11cm	19.4 [16.3]		65	B・F・G・I・J	良好 橙2.5YR6/6	脚部内面絞り目顕著
37	土師器 甕	北西部 床面上10cm	18.2 24.7	23.2 6.7	60	A・B・C・G・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	口縁部から胴部外面に一部スス付着
38	土師器 壺	中央部 床面上6cm	9.0 [5.7]		40	A・B・C・F・G	良好 橙2.5YR6/6	口縁部外面ハケメ後、ヨコナデ
39	土師器 壺	中央部西寄り 床面直上	18.6 [36.4]	(31.3) (7.8)	55	A・B・F・I・K	良好 明赤褐2.5YR5/8	胎土に赤色粒子を多く含む 図上復元
40	土師器 壺	中央部 床面直上	18.0 31.0	25.8 7.4	90	A・B・C・D・K	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	胴部外面上半、口縁部内面ハケメ
41	土師器 壺	中央部 床面直上	[10.6]	7.1	50	A・D・F・I・K	良好 明黄褐10YR6/6	底部内面ヘラオサエ痕あり
42	土師器 甕	中央部 床面上4cm	(16.3) [19.6]	(20.7)	50	A・B・C・F・K	良好 にぶい橙2.5YR6/4	胴部下半外面ヘラケズリ
43	土師器 甕	南部 床面上7cm	(19.7) [17.9]	(25.3)	30	A・B・C・F・G	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	胴部内面木口状工具による強いナデ
44	土師器 大型壺	中央部北西寄り 床面上6cm	24.8 (61.6)	51.0 8.4	70	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	胴部やや歪む 図上復元
45	土師器 小型甕	北西部 床面上10cm	15.9 [17.4]	17.8	65	A・B・C・F・G	良好 にぶい橙5YR6/4	胴部下半外面にスス付着
46	土師器 甕	北部 床面直上	(15.8) [23.2]	25.0	75	B・C・F・G・J	良好 橙5YR6/6	胴部下半に補修痕あり
47	土師器 甕	南部 床面上4cm	17.5 [25.1]	(24.8)	35	A・C・F・I・K	良好 橙7.5YR6/6	胴部外面風化顕著 胴部下半内面接合部ヘラケズリ
48	土師器 甕	中央部 床面直上	20.0 27.6	24.4 7.0	80	A・B・C・D・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	胴部下半外面横位のヘラナデ
49	石製品 砥石	南壁際 床面上8cm	長さ22.7cm 幅11.2cm 厚さ6.0cm 重さ2133.9g 砂岩 砥面5 平滑 両端部欠損 No12					
50	石製品 剣形品	中央部 床面上14cm	長さ4.52cm 幅1.73cm 厚さ0.35cm 孔径0.15cm 重さ4.23g 滑石 研磨：側面斜 No23					
51	石製品 剣形品	北西部 床面上12cm	長さ4.14cm 幅2.40cm 厚さ0.24cm 孔径0.13cm 重さ3.72g 滑石 研磨：側面斜 No89 No.6の埴の内側から出土					
52	ガラス製品 小玉	埋土	最大径0.63cm 上面径0.51cm 下面径0.49cm 厚さ0.5cm 孔径0.17cm 重さ0.27g コバルトブルー					
53	土製品 丸玉	中央部 床面上25cm	最大径1.17cm 厚さ1.09cm 孔径0.17cm 重さ1.27g		A・B	良好 黒褐5YR5/6	一部欠損	

3. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区中央部を中心に4棟が検出された。その分布状況は北西側の第2～4号掘立柱建物跡の3棟からなるグループと、やや東へ離れた第1号掘立柱建物跡と柱穴列から構成されるグループに大きく分けられる。すなわち前者は古代に遡る高床倉庫と推定される総柱建物跡群、後者は周囲の柱穴列や平行して延びる溝跡と有機的な関連をもって構成された中世の屋敷地である(第241図)。

第1号掘立柱建物跡(第242図)

第1号掘立柱建物跡は調査区中央部のM-17・18グリッドに位置する。第1～3号溝跡の東側に隣接しているが、軸は僅かにずれる。攪乱が多く、建物構造を確定することはできない。

桁行1間、梁行2間、東西棟の側柱建物跡である。桁行寸法は4.80m、梁行寸法は4.20m、主軸方位はN-77°-Eを指す。

桁行の柱間柱は攪乱により確認できない。西側梁行の柱間柱は等間に揃わず、P1-P3間は1.80m、P3-P5間は2.40mである。東側梁行のP2-P4間、P4-P6間の柱間寸法は2.10m等間になる。

柱穴は直径40～65cm前後、円形で比較的小規模である。深さも28～46cmと全体的に浅い。柱痕はP2の第5層を想定することもできるが、あまり明確なものではない。

出土遺物がないため時期は不明確であるが、溝跡との関連を想定すれば中世頃となろうか。

第2号掘立柱建物跡 (第243図)

第2号掘立柱建物跡は調査区中央部のK-16、L-15・16グリッドに位置する。北東側に第3・4号掘立柱建物跡が近接し、一つの建物群を形成している。

2×2間の総柱風建物跡であるが、P7-P8間の柱間柱を欠く。また、P5は一回り小規模で、床束と考えられる。ただし、対応する柱筋の交点に乗ってこない。

桁行・梁行寸法は3.30m、主軸方位はN-36°-Eを指す。柱間寸法はP5を除くと1.65m等間に揃う。柱間は狭く、高床倉庫の可能性が高い。

柱穴は、小規模なP5以外は、径50~70cm前後の円形を基調としている。深さは15~46cmと比較的浅いものも多く、土層断面に明瞭な柱痕を検出することはできなかった。

出土遺物は土師器坏と小型甕がある(第244図)。1は北武蔵型坏で、P8から検出された。口縁部はやや開き気味であるが、まだ、扁平な丸底形態を保っている。2は小型甕の胴部上半の破片である。おそらく小型の台付甕になろう。P7から出土した。

時期は不明確であるが、出土遺物から8世紀前半から中頃に位置づけられることから夏目遺跡XI期と考えておきたい。

第3号掘立柱建物跡 (第245図)

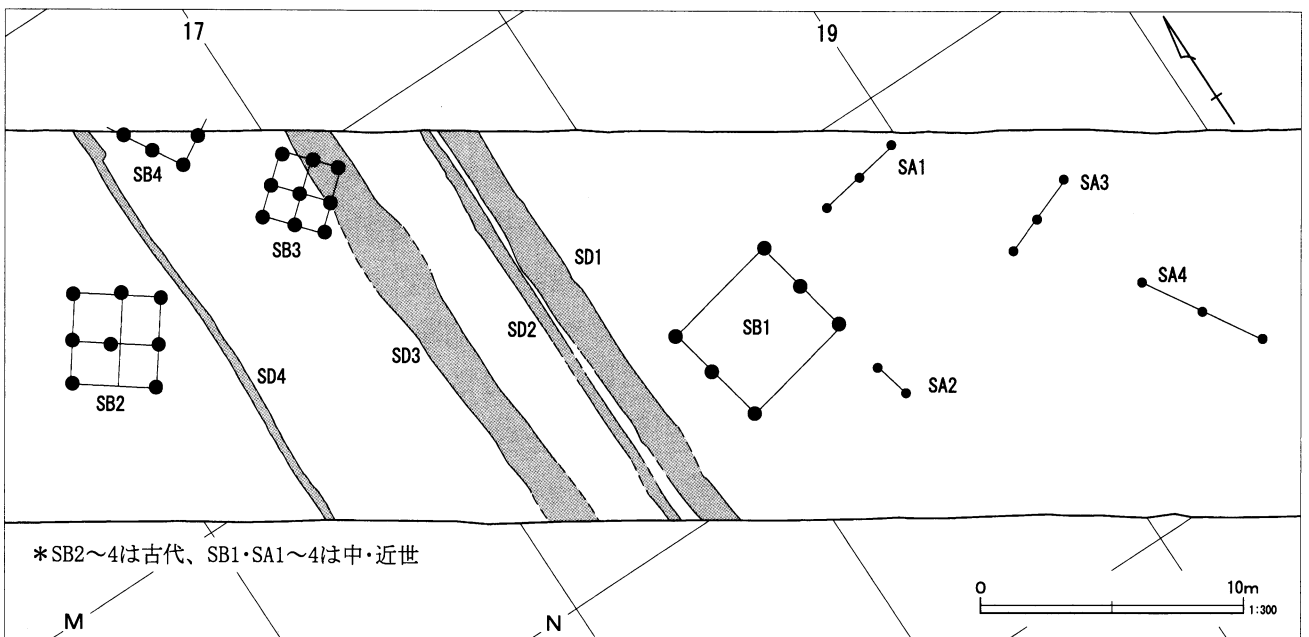
第3号掘立柱建物跡は調査区中央のK・L-16・17グリッドに位置する。第3号溝跡の攪乱を受けていた。

2×2間の総柱建物跡である。桁行寸法は桁行2.60m、梁行2.40m、主軸方位はN-48°-Eを指す。

桁行の柱間寸法は1.30m等間、梁行のそれは1.20m等間に揃う。柱穴は円形基調である。P9は第3号溝跡に削平され、底面の当たりが辛うじて認められたのみであった。P5以外の柱穴は直径44~76cmであった。P5は直径28cmと一回り小さく、床束の可能性が高い。柱間寸法が短い総柱建物であることから高床倉庫と考えられる。

柱痕はなく、抜き取られた可能性が高い。

出土遺物はなく時期は不明であるが、第2号掘立柱建物跡との関連性から近接した時期の所産と推定される。



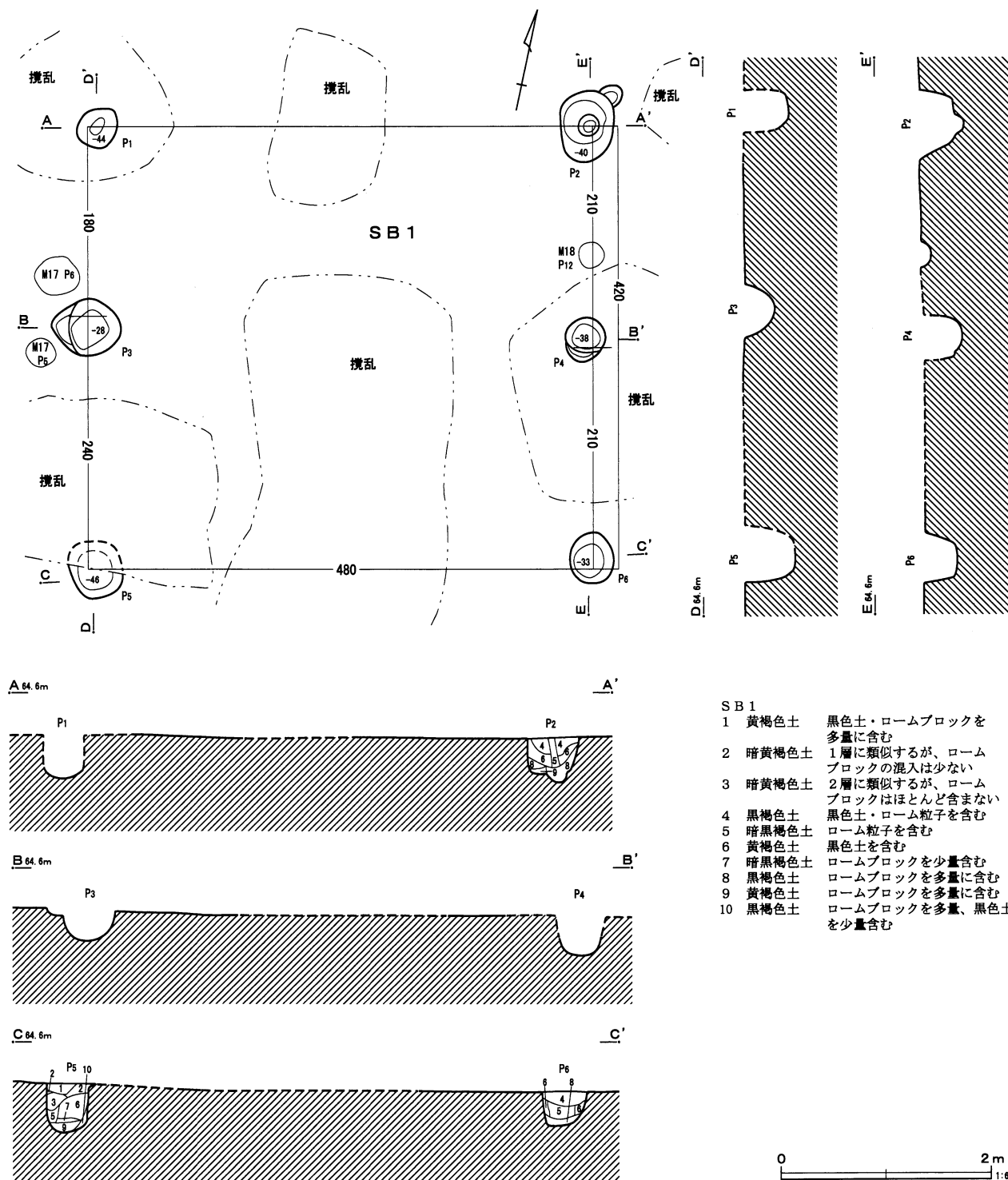
第241図 掘立柱建物跡・柱穴列分布図

第4号掘立柱建物跡 (第246図)

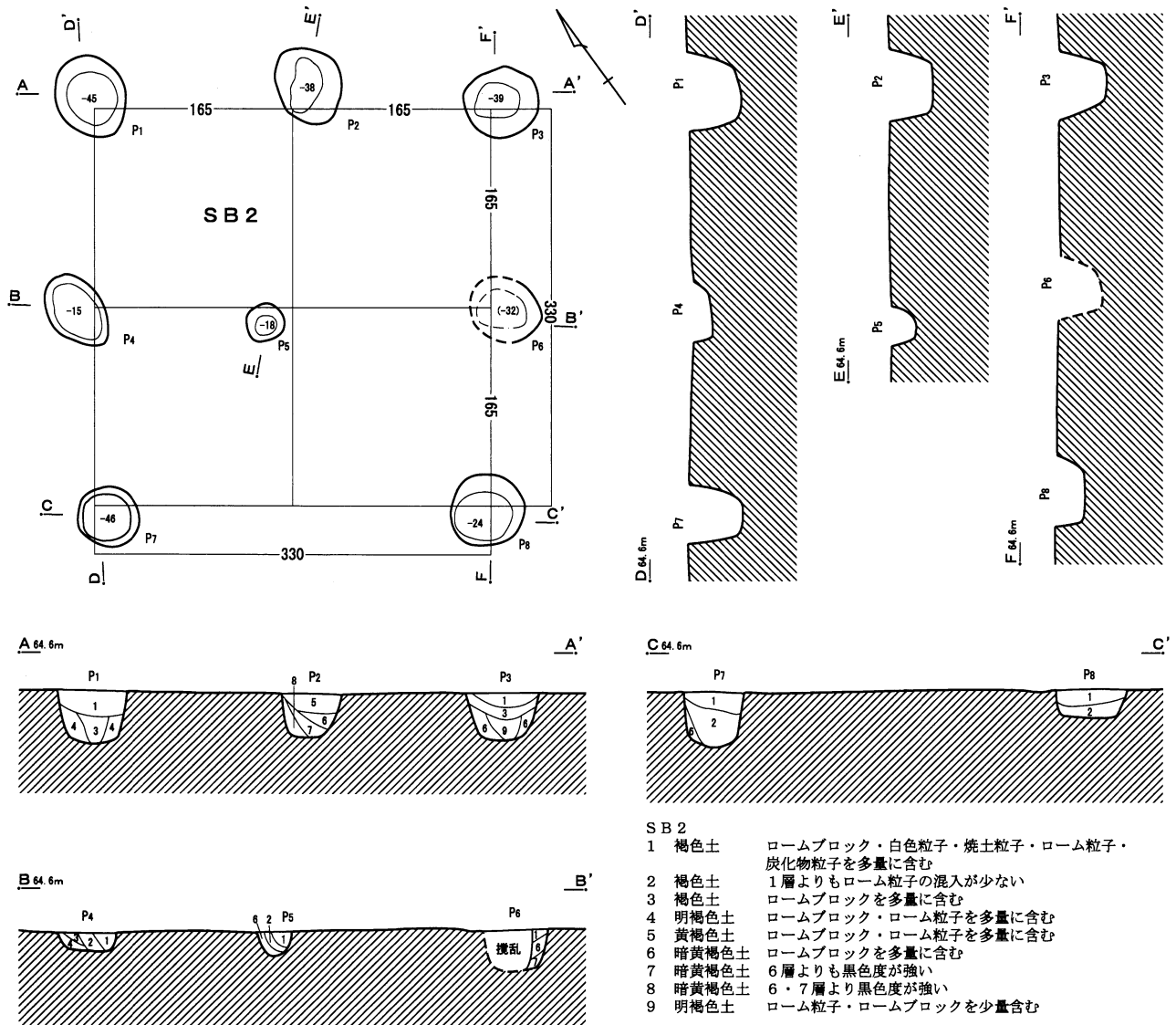
第4号掘立柱建物跡は調査区中央部のK-16グリッドに位置する。大半が調査区外に延びるため、全容は不明である。桁行2間(2.40m)、梁行1間(1.20m)のみ確認された。主軸方位はN-31°

-Wを指す。

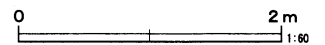
P1-P2間、P2-P3間の柱間寸法は1.20m等間となる。柱間寸法は狭く、第2号掘立柱建物跡、第3号掘立柱建物跡と同様、高床倉庫になる可能性が高いと推定される。



第242図 第1号掘立柱建物跡



第243図 第2号掘立柱建物跡



柱穴は円形を基調とし、直径40~90cm、深さ30~58cmである。

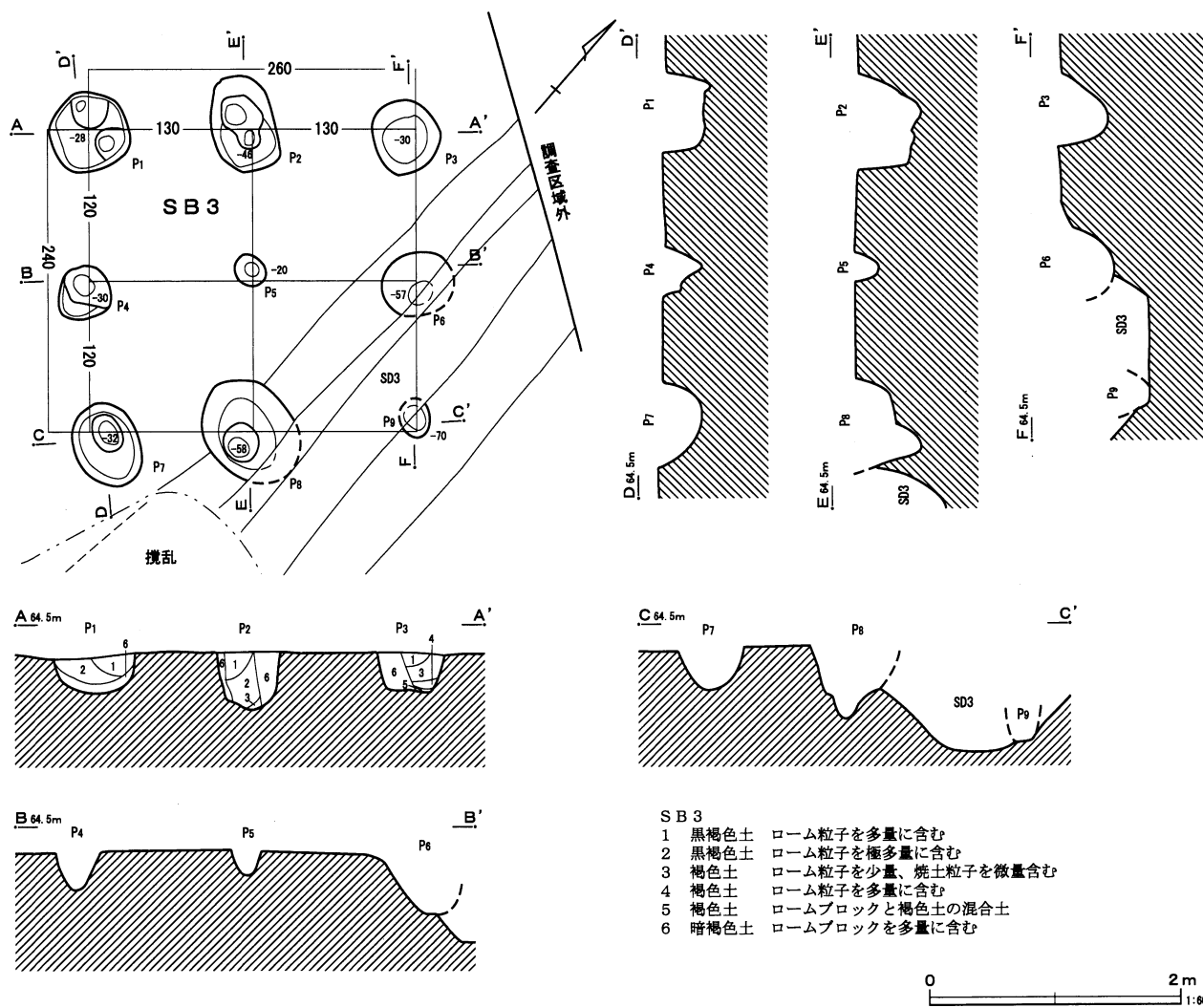
遺物はまったく出土していない。時期についても積極的に想定する根拠がなく不明とせざるを得ないが、第2号掘立柱建物跡に近接した時期と考えておくのが妥当であろうか。



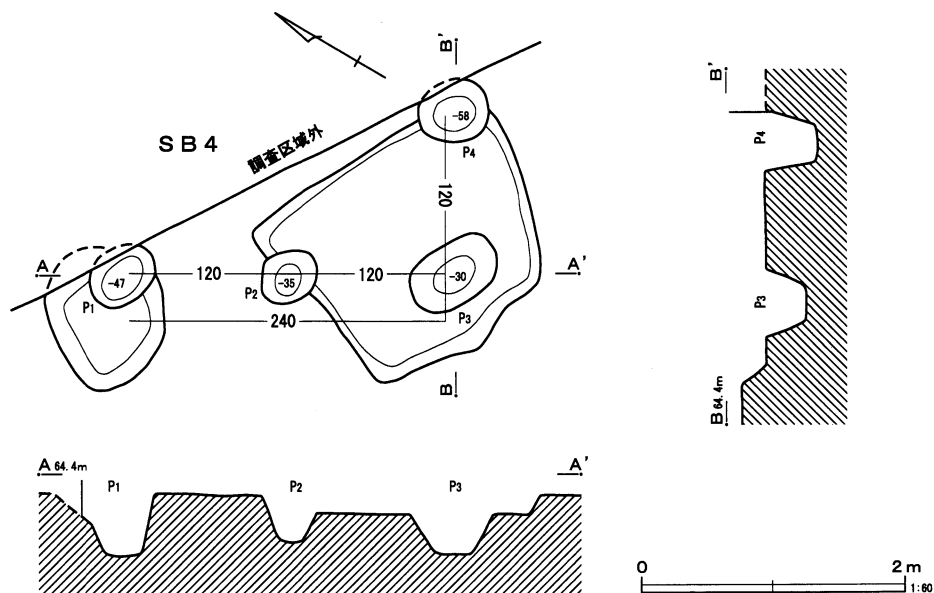
第244図 第2号掘立柱建物跡出土遺物

第81表 第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第244図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	土師器 坏	P 8 埋土	(11.7) [3.2]		15	A・B・F・J	普通 明赤褐5YR5/6	内外面とも磨滅著しい
2	土師器 小型甕	P 7 埋土	(11.2) [6.1]		20	A・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	胴部外面ヘラケズリ ノッキング顕著



第245図 第3号掘立柱建物跡



第246図 第4号掘立柱建物跡

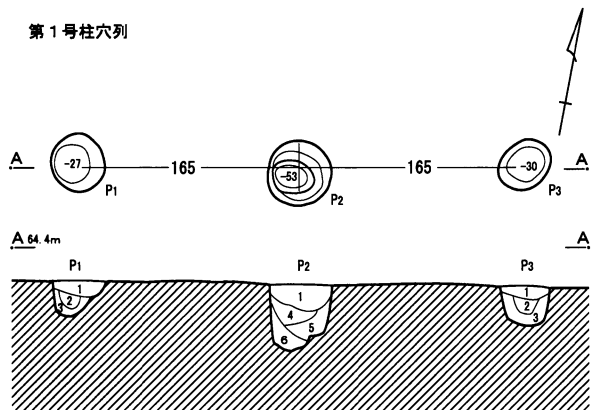
4. 柱穴列

第1号柱穴列 (第247図)

第1号柱穴列は調査区中央付近のM-18グリッドに位置する。柱穴3本が直線状に並ぶ。その西側の延長線上には第1号掘立柱建物跡の柱筋が通る。全長3.30m、P2はその中間に位置する。主軸方位はN-78°-Eを指す。

柱穴は円形基調で、直径40~50cm、深さ27~53cmである。

出土遺物はなく時期は不明であるが、西側へ約3mに位置する第1号掘立柱建物跡と関連する施設であると想定すれば、中世段階に位置づけることができよう。



S A 1

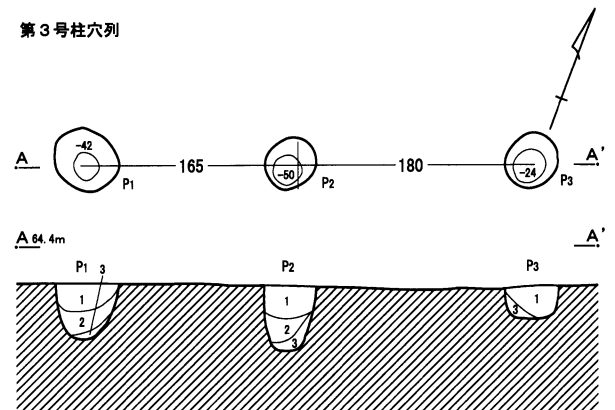
- | | | | |
|---------|---------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色土 | ロームブロックを多量に含む | 5 黒褐色土 | 4層よりローム粒子の混入が少ない |
| 2 暗黒褐色土 | ローム粒子を微量含む | 6 黒褐色土 | ローム粒子を微量含む |
| 3 暗黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む | | |
| 4 黒褐色土 | ローム粒子を含む | | |

第2号柱穴列 (第247図)

第2号柱穴列はM・N-18グリッドに位置する。柱穴2本から構成される。第1号掘立柱建物跡の東側柱列の南側延長線上に乗っている。建物との距離は約2mである。P1-P2間の柱間は1.50mである。主軸方位はN-12°-Wを指す。

柱穴は円形基調で、直径40~50cm、深さ28~38cmである。

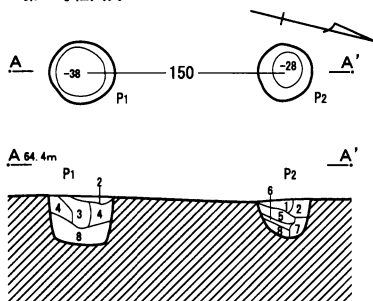
遺物は出土せず、時期は不明である。第1号掘立柱建物跡と関連する施設であるならば、中世の可能性はある。



S A 3

- | | |
|--------|-----------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒子を多量に含む |
| 2 黒褐色土 | 1層よりローム粒子を多量に含む |
| 3 黄黒色土 | ロームブロックを多量に含む |

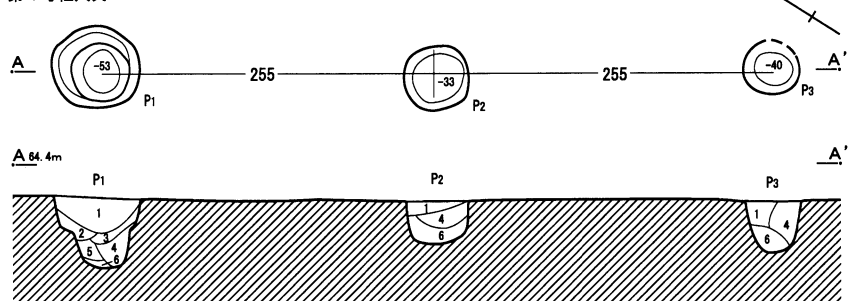
第2号柱穴列



S A 2

- | | |
|---------|---------------------|
| 1 暗黒灰色土 | ロームブロックを多量に含む |
| 2 黒灰色土 | ロームブロック・ローム粒子を多量に含む |
| 3 暗黒褐色土 | ローム粒子を微量含む |
| 4 暗黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む |
| 5 黒褐色土 | ロームブロック・ローム粒子を少量含む |
| 6 黒色土 | ローム小ブロックを少量含む |
| 7 黒褐色土 | ロームブロックを多量に含む |
| 8 暗黒褐色土 | ロームブロック・ローム粒子を少量含む |

第4号柱穴列



S A 4

- | | |
|---------|---------------------|
| 1 暗黒灰色土 | ローム粒子を少量含む |
| 2 黒褐色土 | ローム粒子を少量含む |
| 3 暗黒褐色土 | ローム粒子を微量含む |
| 4 暗黒褐色土 | ロームブロックを少量含む |
| 5 暗黒褐色土 | 混入物をほとんど含まない |
| 6 暗黄黒色土 | ロームブロックを多量、黒色土を少量含む |



第247図 第1・2・3・4号柱穴列

第3号柱穴列 (第247図)

第3号柱穴列はM-19グリッドに位置する。柱穴3本が直線的に並ぶ。長さ3.45m、P1-P2間は1.65m、P2-P3間は1.80mである。主軸方位はN-67°-Eを指す。

柱穴は円形で、直径40~50cm、深さ24~50cmである。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第4号柱穴列 (第247図)

第4号柱穴列はN-19グリッドに位置する。P1~P3の3本の柱穴が直線的に並ぶ。長さ5.10m、P2はその中間に位置する。主軸方位はN-33°-Wを指す。

柱穴は円形で、直径42~65cm、深さ33~53cmである。

出土遺物はなく、時期は不明である。

5. 溝 跡**第1号溝跡 (第248図)**

調査区中央部のL・M・N-17グリッドに位置する。第11号住居跡、第10・11号土坑と重複する。西側に位置する第2号溝跡、約3m離れた第3号溝跡が平行してほぼ直線的に延びる。走行方向はN-2°-Wを示す。検出された長さは18.00m、幅1.15~1.50m、深さ0.15~0.56mである。底面は緩やかに北に向って低くなる。

出土遺物は須恵器甕の口縁部と胴部の破片がある(第251図1・2)。これらが確実に溝跡に伴う遺物かは不明である。

第2号溝跡 (第248図)

調査区中央部のL・M・N-17グリッドに位置する。第11号住居跡、第11・43号土坑と重複する。第1号溝跡と並走するように直線的に延びる。幅0.30~0.65m、深さ0.17~0.22mである。

底面は北に向って低くなっている。

遺物は出土しなかった。

第3号溝跡 (第248図)

調査区中央部のK・L・M-17グリッドに位置する。第11号住居跡、第3号掘立柱建物跡と重複する。第1・2号溝跡と並走するように直線的に延び、第2号溝跡とは2.5mの空間を保つ。幅1.40~2.00m、深さ0.66~0.72mである。

底面は概ね平坦で、北に向って緩やかに低くなっている。

出土遺物は常滑系の陶器甕と須恵器甕がある

(第251図3・4)。3は溝跡に伴うと考えられ、13世紀代に位置づけられる。

第4号溝跡 (第249図)

調査区北西部のK・L・M-16グリッドに位置する。第45号土坑と重複する。ほぼ直線的に延び、走行方向は真北を示す。検出された長さは17.30m、幅0.23~0.51m、深さ0.04~0.12mである。小規模な溝跡である。

埋土中から土師器片が少量出土した。

第5号溝跡 (第249図)

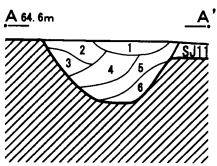
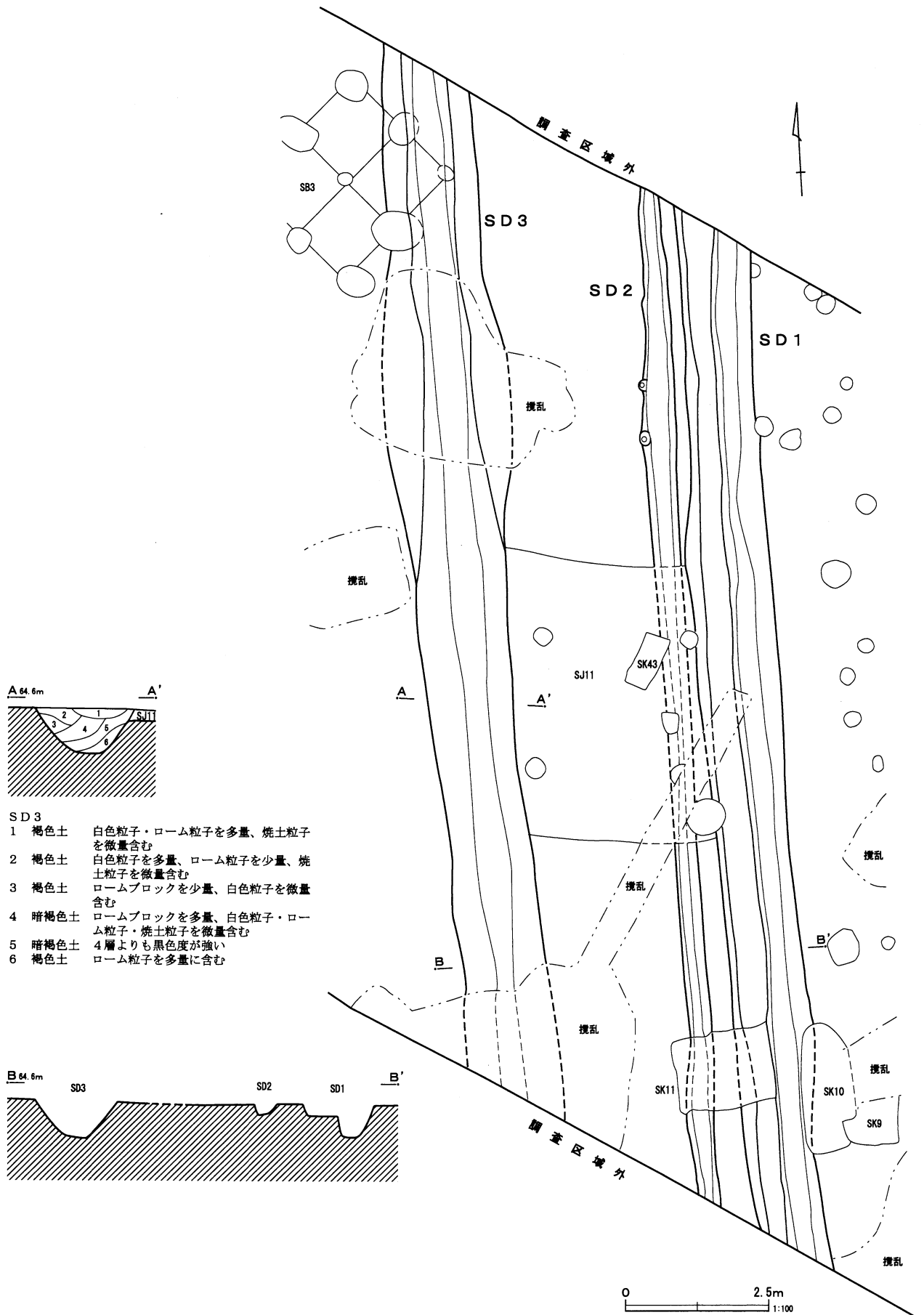
調査区北東部のK-15・16、L-15グリッドに位置する。第12号住居跡、第13号土坑と重複する。ほぼ直線的に延び、走行方向はN-38°-Eを示す。検出された長さは14.90m、幅0.65~0.93m、深さ0.31~0.46mである。

底面は北東に向って低くなっている。遺物は北武蔵型坏・大型坏がある(第251図5・6)。8世紀前半に位置づけられ、重複する第12号住居跡からの混入であろうか。

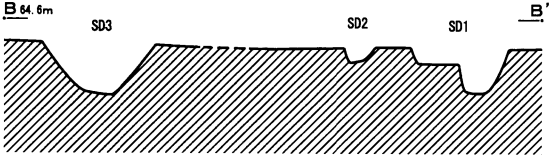
第6号溝跡 (第250図)

調査区北西端部のI-10~13グリッドに位置する。東西に直線的に延び、走行方向はN-83°-Wを示す。検出された長さは33.50m、幅0.95~2.30m、深さ0.40~0.70mである。底面は東に向って緩やかに低くなっている。

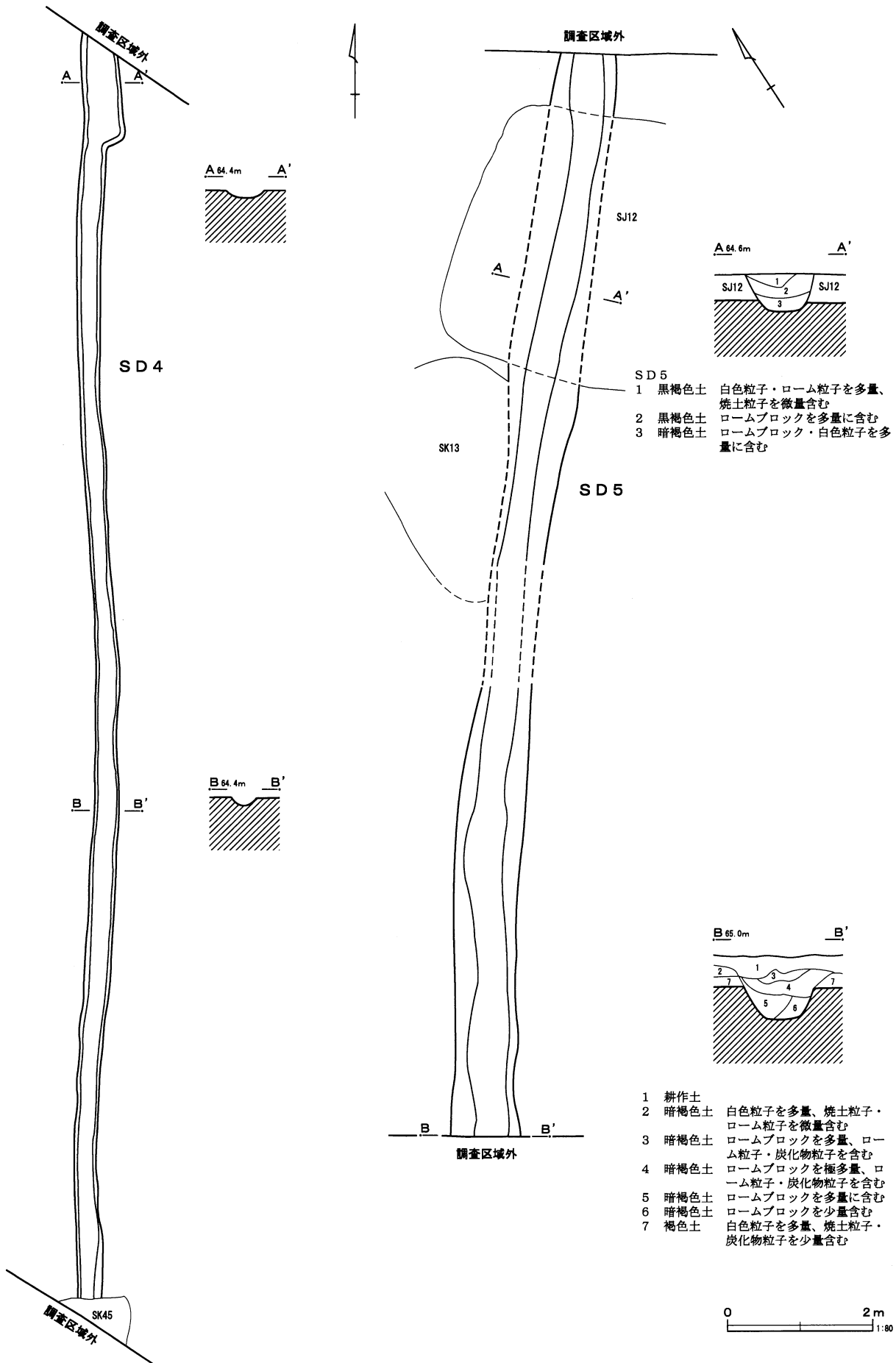
埋土中から常滑産甕の胴部片が出土した(第251図7~11)。13世紀代に位置づけられる。



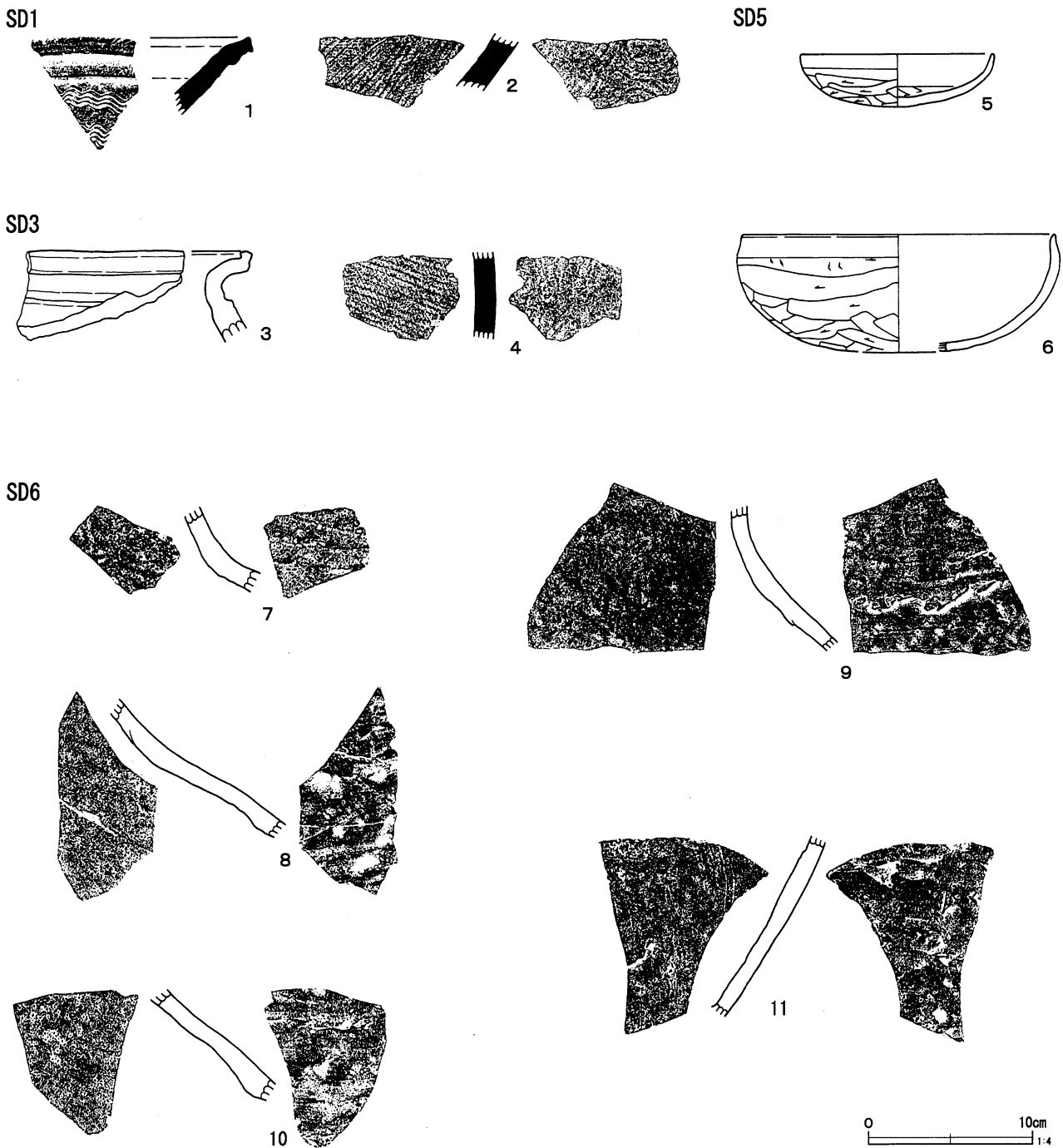
- SD3
- 1 褐色土 白色粒子・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む
 - 2 褐色土 白色粒子を多量、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む
 - 3 褐色土 ロームブロックを少量、白色粒子を微量含む
 - 4 暗褐色土 ロームブロックを多量、白色粒子・ローム粒子・焼土粒子を微量含む
 - 5 暗褐色土 4層よりも黒色度が強い
 - 6 褐色土 ローム粒子を多量に含む



第248図 第1・2・3号溝跡



第249図 第4・5号溝跡



第251図 溝跡出土遺物

第82表 溝跡出土遺物観察表 (第251図)

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
1	須恵器 甕	SD 1 埋土			破片	A・C・D・K	良好 灰 N6/	上野産か 口縁部外面櫛描波状文
2	須恵器 甕	SD 1 埋土			破片	A・C・K	良好 灰 N6/	外面：平行叩き目 内面：同心円文 当て具痕 上野産か
3	陶器 甕	SD 3 埋土	[5.6]		破片	A・C・G・K	良好 にぶい褐7.5YR5/4	口縁部 外面に釉が掛かる 常滑系 13世紀代 小型品
4	須恵器 甕	SD 3 埋土			破片	A・C・G・I	良好 灰 N6/	上野産 外面：擬格子叩き目 内 面：同心円文当て具痕が微かに残る
5	土師器 坏	SD 5 埋土	11.5 3.2		50	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	北武蔵型坏 内底面ヘラナデ

番号	種別	出土位置	口径 器高	最大径 底径	残存	胎土	焼成 色調	備考
6	土師器 坏	S D 5 埋土	(19.0) [7.1]		25	A・B・F・G・J	良好 にぶい・橙5YR6/4	大型の北武蔵型坏
7	陶器 甕	S J 16 埋土			破片	A・G・J	良好 内面：褐灰10YR5/1	肩部破片 外面に光沢のある自然釉 が掛かる 常滑産 13世紀代
8	陶器 甕	S D 6 埋土			破片	A・G・J	良好 内面：灰褐5YR4/2	肩部破片 外面に釉が掛かる 常滑 産 13世紀代
9	陶器 甕	S D 6 埋土			破片	A・G・J	良好 内面：灰赤2.5YR4/2	肩部破片 外面に釉が掛かる 常滑 産 13世紀代
10	陶器 甕	S D 6 埋土			破片	A・G・J	良好 内面：灰褐5YR4/2	肩部破片 外面に釉が掛かる 常滑 産 13世紀代
11	陶器 甕	S D 6 埋土			破片	A・C・G・K	良好 内面：灰褐7.5YR5/2	胴部下半 常滑産 13世紀代

6. 土 坑

第1号土坑 (第252図)

第1号土坑はN・O-19グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.27m、短径0.82m、深さ0.16mである。主軸方位はN-8°-Wを指す。埋土から土師器片が出土した。

第2号土坑 (第252図)

第2号土坑はN-19グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.19m、短径0.98m、深さ0.19mである。主軸方位はN-5°-Eを指す。埋土から土師器片が出土した。

第3号土坑 (第252図)

第3号土坑はN-19グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径3.07m、短径0.77m、深さ0.30mである。主軸方位はほぼ真北を指す。

第4号土坑 (第252図)

第4号土坑はN-19グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径1.44m、短径0.84m、深さ0.29mである。主軸方位はN-7°-Wを指す。埋土から土師器片が出土した。

第5号土坑 (第252図)

第5号土坑はM-19グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径1.19m、短径0.84m、深さ0.17mである。主軸方位はN-70°-Wを指す。埋土から土師器片が出土した。

第6号土坑 (第252図)

第6号土坑はM-19グリッドに位置する。平面形態は不定形で、規模は長径1.61m、短径0.79m、

深さ0.17mである。主軸方位はN-63°-Eを指す。埋土から土師器片が出土した。

第7号土坑 (第252図)

第7号土坑はN-19グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径3.36m、短径0.87m、深さ0.50mである。遺物は出土しなかった。

第8号土坑 (第252図)

第8号土坑はN-19グリッドに位置する。平面形態は不定形で、規模は長径0.89m、短径0.55m、深さ0.24mである。埋土から土師器片が出土した。

第9号土坑 (第252図)

第9号土坑はM-17グリッドに位置する。平面形態は方形と考えられる。規模は長径0.92m以上、短径0.81m、深さ0.39mである。主軸方位はN-88°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

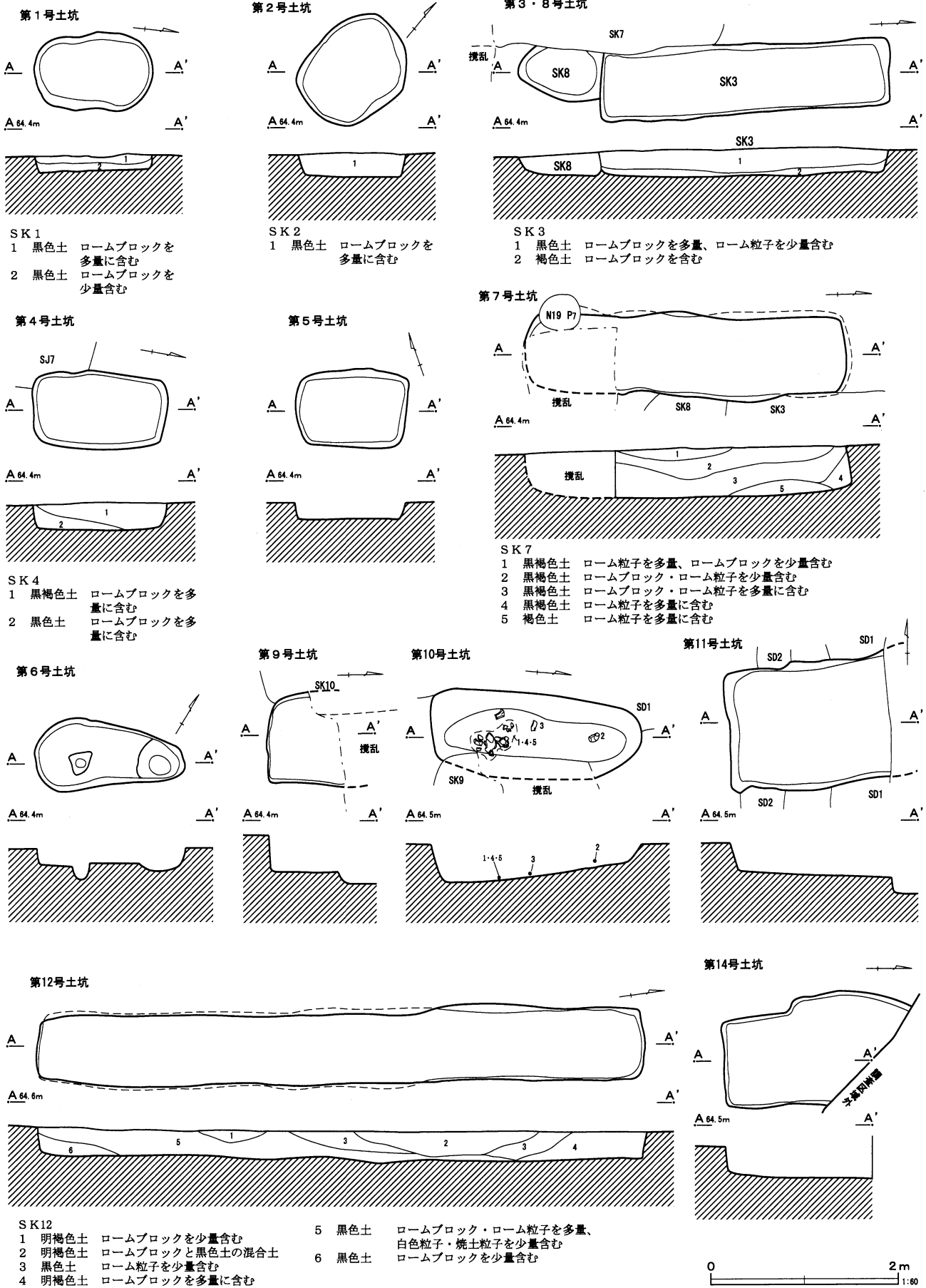
第10号土坑 (第252図)

第10号土坑はM-17グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径2.22m、短径0.69m、深さ0.38mである。主軸方位はN-6°-Wを指す。

遺物は埋土から北武蔵型坏・甕が出土した (第255図1～5)。

第11号土坑 (第252図)

第11号土坑はM-17グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径1.72m、短径1.35m、深さ0.35mである。主軸方位はN-87°-Eを指す。埋土から土師器片が出土した。



第252図 土坑 (1)

第12～14号土坑 (第252図)

第12～14号土坑は、調査区中央のK・L-15グリッドに位置する。平面長方形の土坑が南北方向に一列に並ぶ。第12号土坑は、長径6.49m、短径0.80m、深さ0.34mである。主軸方位はN-9°-Eを指す。遺物は埋土から模倣坏が出土している(第255図6)が、混入であろう。第13号土坑の現状は不定形であるが、本来は長方形となる。規模は長径5.97m、短径2.29m、深さ0.35mである。主軸方位はN-6°-Eを指す。第14号土坑は大半が調査区外に位置するが、平面長方形と考えられる。規模は長径1.91m、短径1.18m、深さ0.26mである。

第15号土坑 (第253図)

第15号土坑はI-12グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径2.11m、短径1.79m、深さ0.63mである。主軸方位はN-82°-Eを指す。遺物は常滑産甕、角閃石安山岩製磨石、土師器高坏がある(第255図7～8)。

第16号土坑 (第253図)

第16号土坑はH・I-10グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径1.29m、短径1.29m、深さ0.51mである。

第17号土坑 (第253図)

第17号土坑は、I-10グリッドに位置する。平面形態は不定形で、規模は長径1.50m、短径0.78m、深さ0.25mである。主軸方位はN-86°-Eを指す。埋土から土師器片が出土した。

第18号土坑 (第253図)

第18号土坑はH-10グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.90m、短径0.76m、深さ0.17mである。主軸方位はN-71°-Eを指す。埋土から土師器片が出土した。

第19号土坑 (第253図)

第19号土坑はH-10グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径1.21m、短径0.62m、深さ0.15mである。主軸方位はN-25°-Eを指す。

埋土から土師器片が出土した。

第20号土坑 (第253図)

第20号土坑はH-9グリッドに位置する。調査区外に大半が位置し、平面形態は方形と考えられる。規模は長径0.91m以上、深さ0.32mである。主軸方位はN-83°-Wを指す。

第21号土坑 (第253図)

第21号土坑はH-9グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径1.37m、短径1.03m、深さ0.45mである。主軸方位はN-33°-Eを指す。埋土から土師器片が出土した。

第22号土坑 (第253図)

第22号土坑はH-9グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径1.90m、短径1.09m、深さ0.35mである。主軸方位はN-10°-Eを指す。埋土から土師器片が出土した。

第23号土坑 (第253図)

第23号土坑はH-9グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径1.19m、短径1.19m、深さ0.40mである。

第24・25号土坑 (第253図)

第24・25号土坑はH-9グリッドに位置する。2基の長方形の土坑が重複する。規模は長径3.02m、短径0.58m、深さ0.33mである。主軸方位はN-85°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第26号土坑 (第253図)

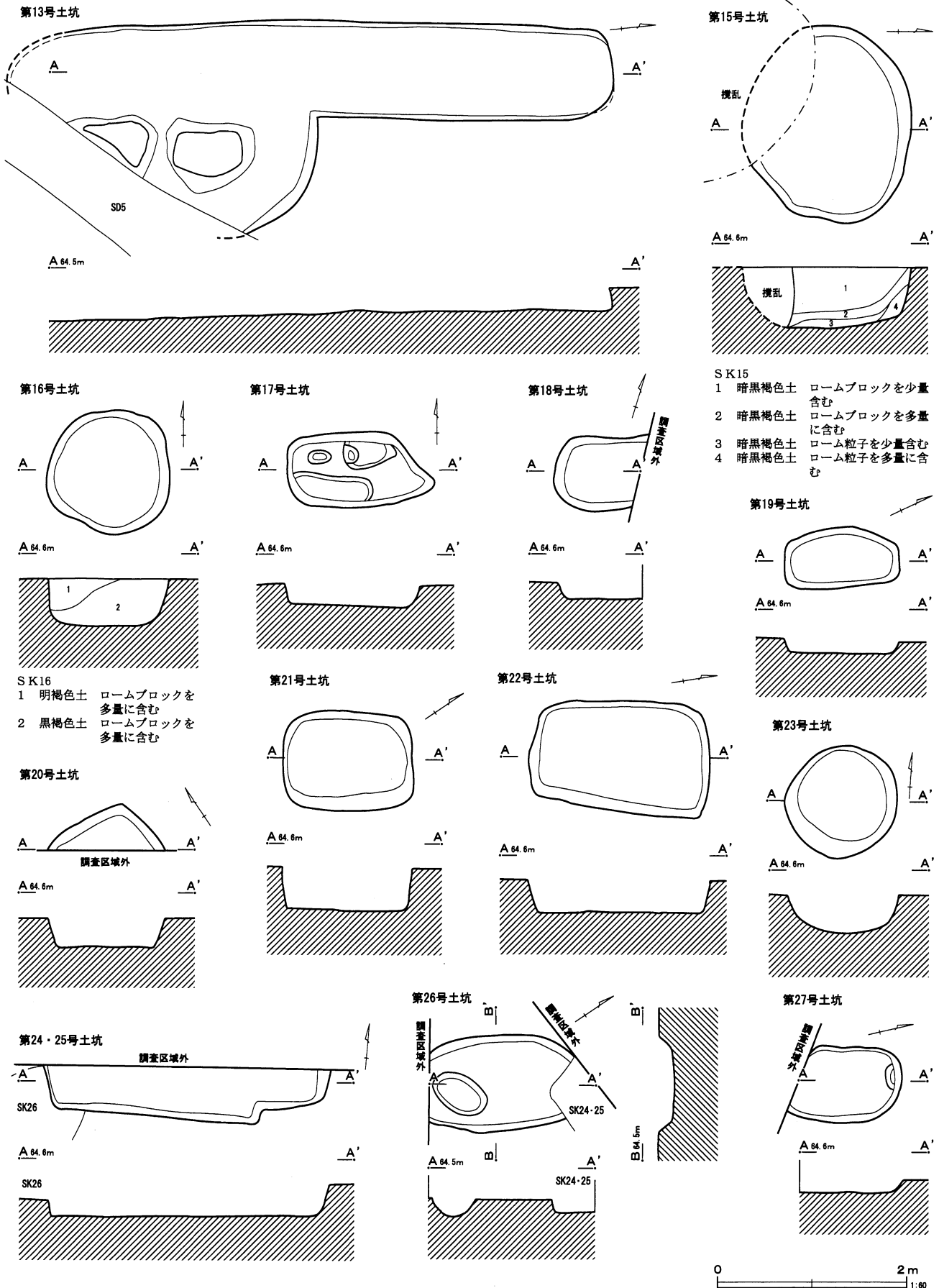
第26号土坑はH-9グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.53m、短径1.01m、深さ0.17mである。主軸方位はN-35°-Eを指す。埋土から土師器片が出土した。

第27号土坑 (第253図)

第27号土坑はH・I-10グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.07m、短径0.78m、深さ0.14mである。主軸方位はN-14°-Eを指す。埋土から土師器片が出土した。

第28号土坑 (第254図)

第28号土坑はH-10グリッドに位置する。平面



第253図 土坑(2)

形態は楕円形で、規模は長径0.64m、深さ0.27mである。主軸方位はN-5°-Wを指す。

第29号土坑 (第254図)

第29号土坑はO-21グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.12m、短径0.85m、深さ0.07mである。

第30号土坑 (第254図)

第30号土坑はO-21グリッドに位置する。平面形態は不定形で、規模は長径1.01m、短径0.41m、深さ0.07mである。

第31号土坑 (第254図)

第31号土坑はO・P-21グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.87m、短径0.47m、深さ0.10mである。主軸方位はN-37°-Wを指す。

第32号土坑 (第254図)

第32号土坑はP-21グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径1.12m、短径1.11m、深さ0.24mである。

第33~36号土坑 (第254図)

第33~36号土坑は調査区北西部のI・J-12グリッドに位置する。南北方向に長方形の土坑が4基1列に並ぶ。第33号土坑は、長径1.33m、短径0.65m、深さ0.26mである。第34号土坑は、長径1.21m、短径0.51m、深さ0.28mである。第35号土坑は、長径1.09m、短径0.55m、深さ0.24mである。第36号土坑は、長径1.26m、短径0.67m、深さ0.19mである。時期不詳であるが、芋穴であろう。遺物はいずれも出土しなかった。

第37号土坑 (第254図)

第37号土坑はI-13グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径2.88m、短径0.69m、深さ0.39mである。主軸方位はN-84°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第38号土坑 (第254図)

第38号土坑はJ-14グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径3.47m、短径0.71m、

深さ0.40mである。主軸方位はN-80°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第39号土坑 (第254図)

第39号土坑はJ-14グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径1.72m、短径0.50m、深さ0.07mである。主軸方位はN-85°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第40号土坑 (第254図)

第40号土坑はK-13グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.24m、短径0.82m、深さ0.31mである。主軸方位はN-83°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第41号土坑 (第254図)

第41号土坑はJ-13・14グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径1.46m、短径0.77m、深さ0.44mである。主軸方位はN-80°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第42号土坑 (第254図)

第42号土坑はL-15・16、M-16グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径1.95m、短径1.15m、深さ0.20mである。主軸方位はN-55°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第43号土坑 (第254図)

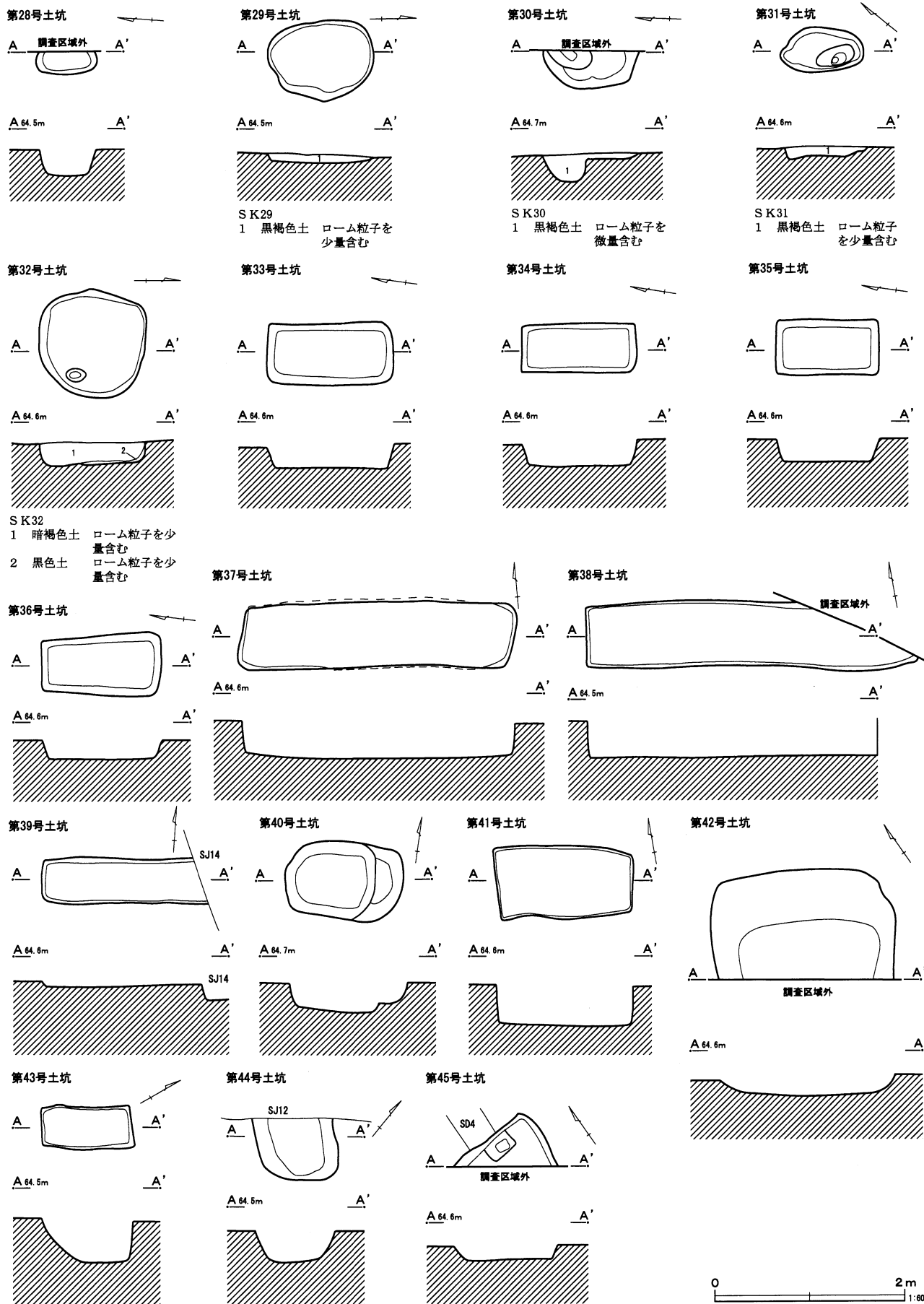
第43号土坑はL・M-17グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径0.95m、短径0.44m、深さ0.45mである。主軸方位はN-30°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第44号土坑 (第254図)

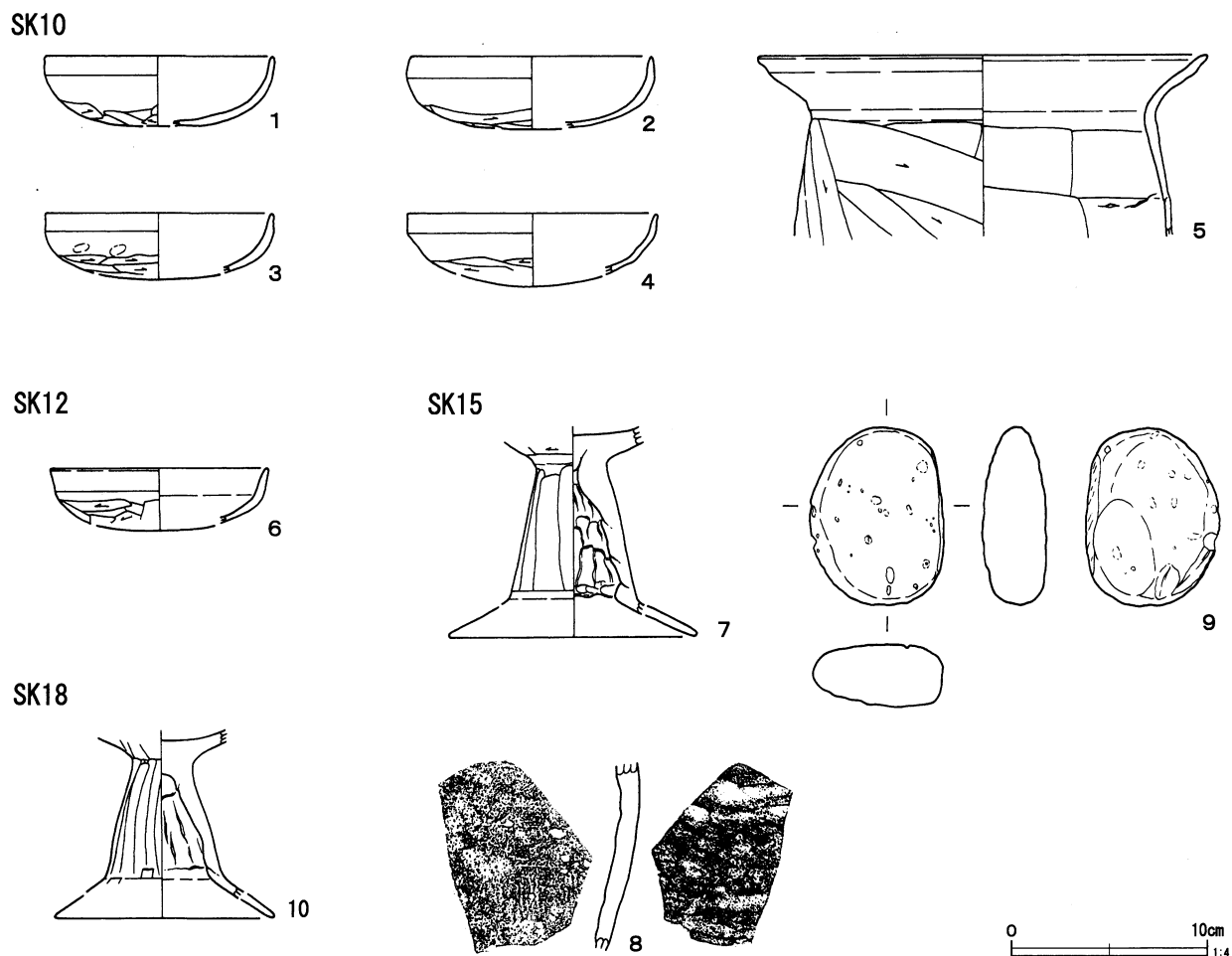
第44号土坑はK-16グリッドに位置する。平面形態は楕円形と考えられる。規模は長径0.84m以上、深さ0.33mである。主軸方位はN-51°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第45号土坑 (第254図)

第45号土坑はM-16グリッドに位置する。平面形態は長方形と考えられる。規模は長径0.88m以上、深さ0.17mである。主軸方位はN-88°-Eを指す。遺物は出土しなかった。



第254図 土坑 (3)



第255図 土坑出土遺物

第83表 土坑出土遺物観察表 (第255図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	SK10 底面直上	(11.4) [3.5]		40	A・B・C・F	良好 橙5YR6/8	北武蔵型坏
2	土師器 坏	SK10 底面上6cm	(12.2) [3.7]		30	A・B・F・G・J	良好 橙5YR7/6	北武蔵型坏
3	土師器 坏	SK10 底面直上	(11.8) [3.1]		30	A・B・C・J	良好 橙5YR6/8	北武蔵型坏
4	土師器 坏	SK10 底面直上	(12.6) [3.2]		20	A・B・D・F・J	良好 橙5YR6/6	北武蔵型坏
5	土師器 甕	SK10 底面直上	(22.8) [9.4]		25	A・B・C・G・J	普通 橙5YR6/8	外面被熱のため器面荒れる
6	土師器 坏	SK12 埋土	(11.0) [2.8]		25	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	内外面磨耗
7	土師器 高坏	SK15 埋土	[9.4]		90	A・C・F・G・J	良好 にぶい赤褐2.5YR5/4	脚部内面絞り目顕著
8	陶器 甕	SK15 埋土			破片	A・C・G・J	良好 灰(内面)N4/	常滑系 外面釉が掛かる 肩部に近い破片
9	石製品 磨石	SK15 埋土	長さ9.0cm 幅6.9cm 厚さ3.2cm 重さ82.8g			角閃石安山岩(軽石)	各面に擦痕あり 完存 角閃石安山	
10	土師器 高坏	SK18 埋土	[8.5]		80	A・C・F・J	普通 浅黄橙2.5YR6/6	器面は磨滅著しい

第84表 土坑一覧表

番号	グリッド	平面形	長軸方向	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構	遺物	挿図
1	N・O-19	楕円形	N-8°-W	1.27	0.82	0.16		土師器	第252図
2	N-19	楕円形	N-5°-E	1.19	0.98	0.19		土師器	第252図
3	N-19	長方形	N-0°-S	3.07	0.77	0.30	SK7・8	土師器	第252図
4	N-19	長方形	N-7°-W	1.44	0.84	0.29	SJ7	土師器	第252図

番号	グリッド	平面形	長軸方向	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構	遺物	挿図
5	M-19	長方形	N-70°-W	1.19	0.84	0.17		土師器	第252図
6	M-19	不定形	N-63°-E	1.61	0.79	0.17		土師器	第252図
7	N-19	長方形	N-0°-S	3.36	0.87	0.50	SK3・8		第252図
8	N-19	不定形	N-0°-S	(0.89)	(0.55)	0.24	SK3・7	土師器	第252図
9	M-17	方形	N-88°-W	0.92	(0.81)	0.39	SK10		第252図
10	M-17	楕円形	N-6°-W	2.22	(0.69)	(0.38)	SD1 SK9	土師器	第252図
11	M-17	長方形	N-87°-E	(1.72)	1.35	0.35	SD1・2	土師器	第252図
12	L-15	長方形	N-9°-E	6.49	0.80	0.34		土師器	第252図
13	K-15	不定形	N-6°-E	(5.97)	(2.29)	0.35	SD5		第253図
14	K-15	不定形	N-0°-S	(1.91)	1.18	0.26			第252図
15	I-12	楕円形	N-82°-E	2.11	1.79	0.63		土師器 陶器 軽石	第253図
16	H・I-10	円形	N-0°-S	1.29	1.29	0.51		土師器	第253図
17	I-10	不定形	N-86°-E	1.50	0.78	0.25		土師器	第253図
18	H-10	楕円形	N-71°-E	(0.9)	0.76	0.17		土師器	第253図
19	H-10	長方形	N-25°-E	1.21	0.62	0.15		土師器	第253図
20	H-9	方形	N-83°-W	(0.91)	(0.53)	0.32		土師器	第253図
21	H-9	長方形	N-33°-E	1.37	1.03	0.45		土師器	第253図
22	H-9	長方形	N-10°-E	1.90	1.09	0.35		土師器	第253図
23	H-9	円形	N-0°-S	1.19	1.19	0.40		土師器	第253図
24・25	H-9	不定形	N-85°-E	3.02	(0.58)	0.33	SK26		第253図
26	H-9	楕円形	N-35°-E	(1.53)	1.01	0.17	SK24・25	土師器	第253図
27	H・I-10	楕円形	N-14°-E	(1.07)	0.78	0.14		土師器	第253図
28	H-10	楕円形	N-5°-W	0.64	(0.24)	0.27		土師器	第254図
29	O-21	楕円形	N-0°-S	1.12	0.85	0.07	SJ2-19	土師器	第254図
30	O-21	不定形	N-0°-S	1.01	(0.41)	0.07			第254図
31	O・P-21	楕円形	N-37°-W	0.87	0.47	0.10		土師器	第254図
32	P-21	円形	N-0°-S	1.12	1.11	0.24	P2(P-21G)	土師器	第254図
33	I-12	長方形	N-8°-W	1.33	0.65	0.26			第254図
34	I-12	長方形	N-10°-W	1.21	0.51	0.28			第254図
35	J-12	長方形	N-7°-W	1.09	0.55	0.24			第254図
36	J-12	長方形	N-7°-W	1.26	0.67	0.19			第254図
37	I-13	長方形	N-84°-W	2.88	0.69	0.39			第254図
38	J-14	長方形	N-80°-W	3.47	0.71	0.40			第254図
39	J-14	長方形	N-85°-E	(1.72)	0.50	0.07	SJ14		第254図
40	K-13	楕円形	N-83°-E	1.24	0.82	0.31			第254図
41	J-13・14	長方形	N-80°-W	1.46	0.77	0.44			第254図
42	L・M-15・16	長方形	N-55°-W	1.95	(1.15)	0.20			第254図
43	L-17	長方形	N-30°-E	0.95	0.44	0.45	SD2		第254図
44	K-16	楕円形	N-51°-E	0.84	(0.64)	0.33	SJ12		第254図
45	M-16	長方形	N-88°-E	(0.88)	(0.60)	0.17	SD4		第254図

7. ピット

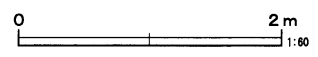
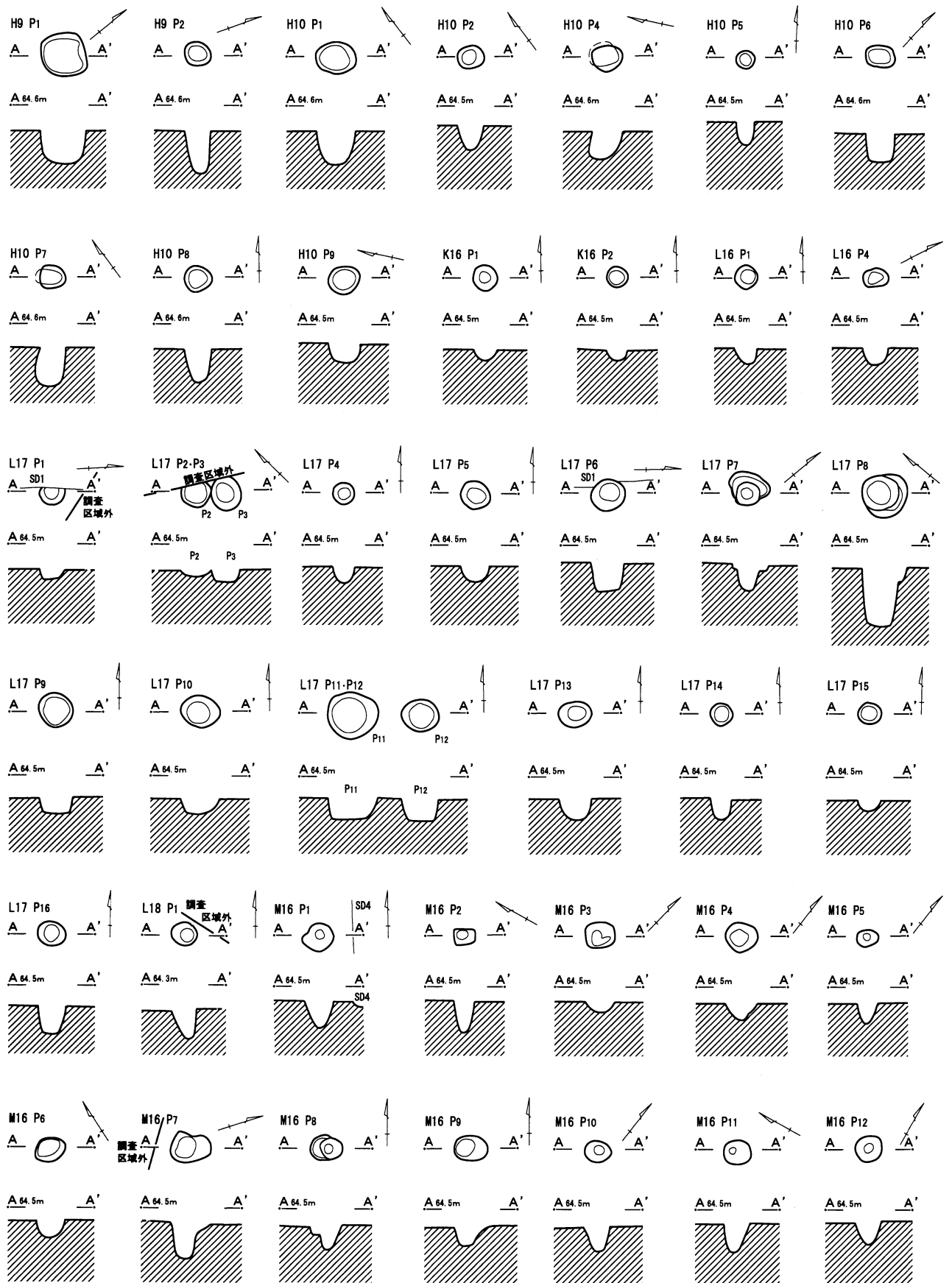
調査区内からは単独のピット(小穴)が115基検出された(第256～258図)。分布状況は調査区北西端部のH-10グリッド、調査区中央部から南東部寄りのL-17、M-16～19、N-19・20グリッドに集中する。後者は第1号掘立柱建物跡を中心とする柱穴列や溝跡の分布と概ね重なっている。

ピットの規模は径0.20～0.68m、深さ0.07～

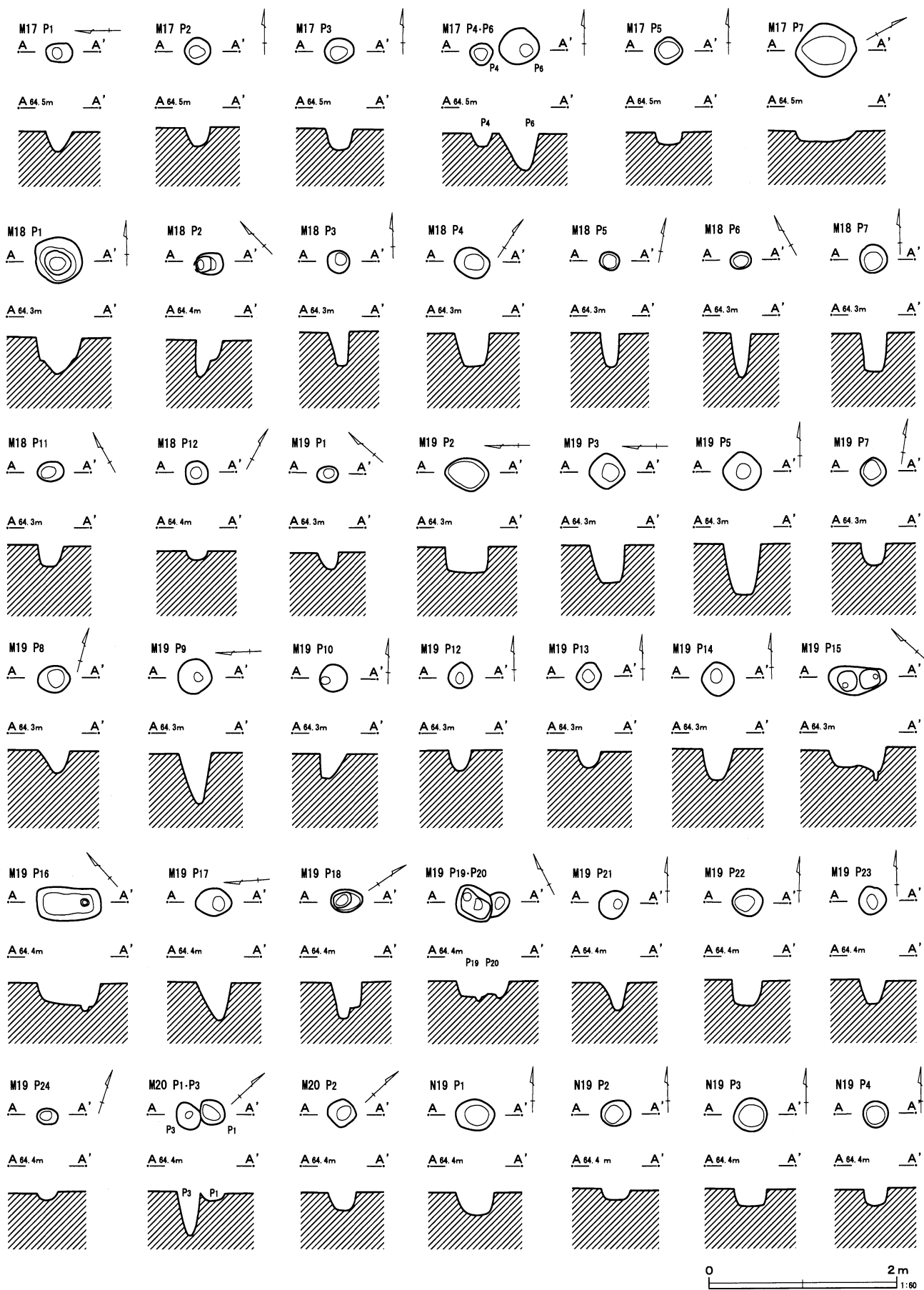
0.54mと一様でなく、柱痕の確認されたものはほとんどない。配列も掘立柱建物跡や柱穴列として把握することの難しいものが多かった。

ピットに直接伴う遺物は少なく、性格については不明とせざるを得ない。なお、規模などの詳細については第86表のピット一覧表に記載した。

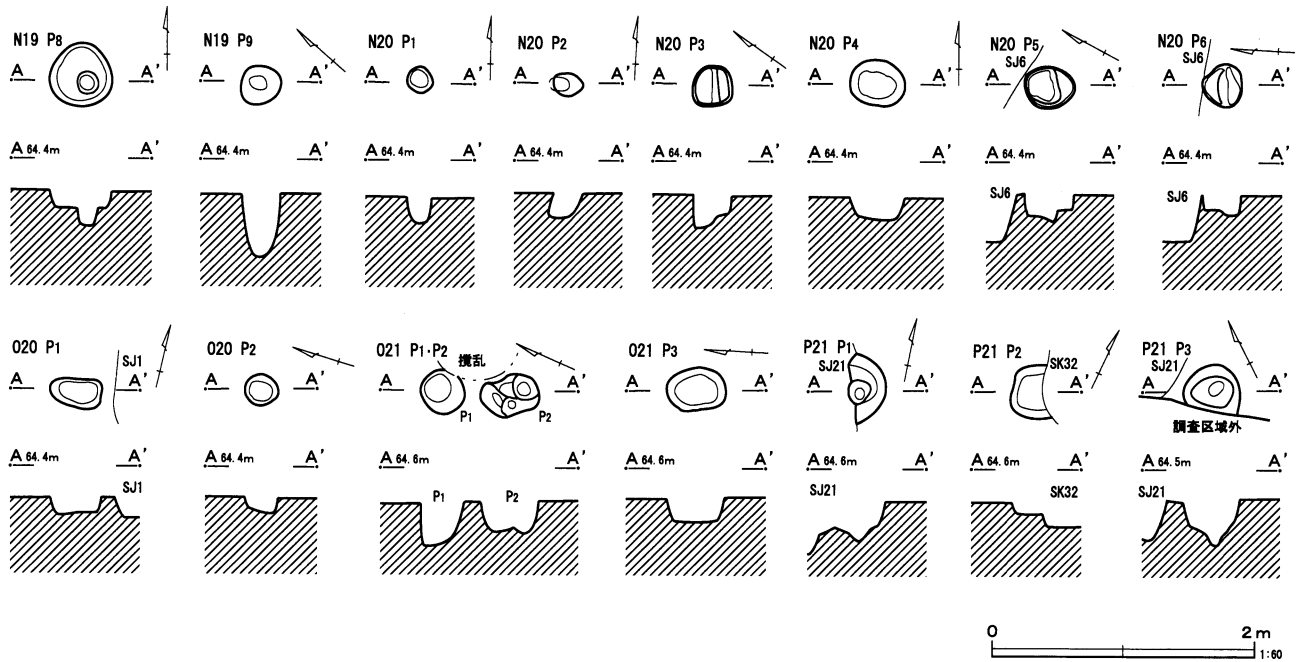
出土遺物は調査区中央部のM-19グリッドの



第256図 ピット (1)



第257図 ピット (2)



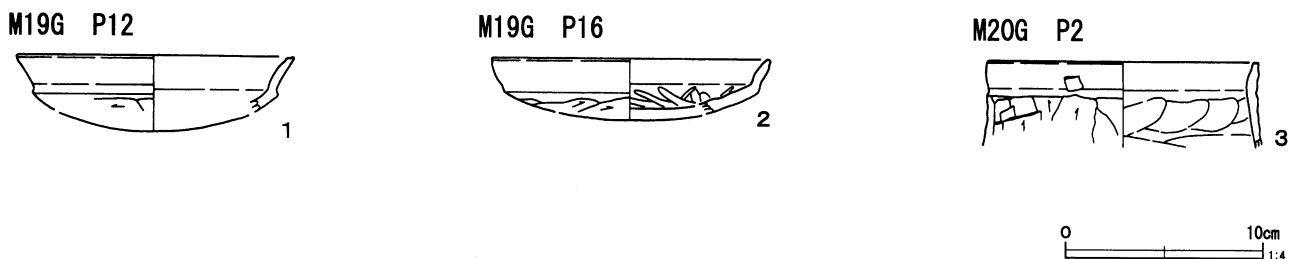
第258図 ピット (3)

P12・16及びM-20グリッドのP2から出土した土師器杯・鉢3点のみを図示した(第259図1~3)。

これらのピットは比較的近接した位置にあり、かつ遺物の時期も近いことから相互に関連性を有する可能性もあるが、性格を明確にし得なかった。

1は口縁部の大きく外傾する模倣坏で、口唇部に浅く窪む面取りを施している。鬼高II式に位置

づけられる。2は体部内面に不定方向のヘラミガキを施す扁平な体部の模倣坏である。器形やヘラミガキの特徴などあまり在地的でない要素が見られる。鬼高式後半に位置づけられる。3は頸部の屈曲の少ない広口の鉢である。胴部内面上端に連続する強い指ナデが施される。被熱痕は認められなかった。



第259図 ピット出土遺物

第85表 ピット出土遺物観察表 (第259図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器杯	M19グリッド P12	(13.9) [2.8]		10	A・C・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	胎土緻密
2	土師器杯	M19グリッド P16	(14.0) [2.7]		15	A・B・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	体部内面不定方向のヘラミガキ 非在地系
3	土師器鉢	M20グリッド P2	(13.6) [4.3]		20	A・F・G・J	良好 橙2.5YR6/6	胴部内面断続的な指ナデ

第86表 ピット一覧表

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
H-9	P 1	46	45	32	
H-9	P 2	28	25	44	
H-10	P 1	42	33	33	
H-10	P 2	28	24	20	土師器
H-10	P 3	—	—	—	欠番
H-10	P 4	31	27	27	
H-10	P 5	20	20	24	
H-10	P 6	30	23	29	
H-10	P 7	26	24	35	土師器
H-10	P 8	28	28	34	
H-10	P 9	33	30	20	
K-16	P 1	26	24	12	
K-16	P 2	22	21	10	
L-16	P 1	22	22	15	
L-16	P 2	—	—	—	SB3に編入 土師器
L-16	P 3	—	—	—	SB3に編入 土師器
L-16	P 4	26	19	15	
L-17	P 1	26	(17)	10	SD1
L-17	P 2	32	(25)	7	土師器
L-17	P 3	(34)	30	11	
L-17	P 4	22	8	15	
L-17	P 5	31	29	15	
L-17	P 6	36	33	29	SD1
L-17	P 7	41	34	27	
L-17	P 8	48	44	59	
L-17	P 9	36	36	18	
L-17	P10	40	33	15	
L-17	P11	52	48	22	
L-17	P12	38	33	23	
L-17	P13	34	26	20	
L-17	P14	23	23	20	
L-17	P15	24	22	10	
L-17	P16	29	25	29	
L-18	P 1	26	23	28	
M-16	P 1	32	29	28	
M-16	P 2	22	16	32	
M-16	P 3	30	26	13	
M-16	P 4	34	30	18	
M-16	P 5	21	17	20	
M-16	P 6	32	25	18	
M-16	P 7	41	30	37	
M-16	P 8	33	25	24	
M-16	P 9	34	25	10	
M-16	P10	28	22	24	
M-16	P11	28	24	30	
M-16	P12	28	26	22	
M-17	P 1	28	20	22	
M-17	P 2	28	28	20	土師器
M-17	P 3	30	26	23	
M-17	P 4	23	23	14	
M-17	P 5	28	28	12	
M-17	P 6	42	38	39	
M-17	P 7	64	57	14	
M-18	P 1	54	48	38	土師器
M-18	P 2	29	23	39	
M-18	P 3	24	24	36	
M-18	P 4	37	30	37	
M-18	P 5	21	20	36	
M-18	P 6	22	17	45	
M-18	P 7	29	29	40	
M-18	P 8	—	—	—	SA1に編入
M-18	P 9	—	—	—	SA1に編入
M-18	P10	—	—	—	SA1に編入
M-18	P11	28	20	22	
M-18	P12	23	23	9	
M-19	P 1	22	16	17	
M-19	P 2	40	34	27	土師器
M-19	P 3	34	34	40	
M-19	P 4	—	—	—	SA3に編入 土師器
M-19	P 5	38	38	52	土師器
M-19	P 6	—	—	—	SA3に編入 土師器
M-19	P 7	26	26	24	土師器
M-19	P 8	34	28	24	土師器
M-19	P 9	37	35	54	土師器
M-19	P10	29	29	27	
M-19	P11	—	—	—	SA3に編入
M-19	P12	27	24	22	土師器
M-19	P13	28	25	18	土師器
M-19	P14	33	32	34	
M-19	P15	61	30	34	土師器
M-19	P16	68	35	29	土師器
M-19	P17	39	30	39	
M-19	P18	34	25	38	土師器
M-19	P19	40	33	20	土師器
M-19	P20	20	20	20	
M-19	P21	32	28	29	土師器
M-19	P22	32	28	26	
M-19	P23	30	29	26	
M-19	P24	23	17	9	
M-20	P 1	29	26	8	
M-20	P 2	27	27	20	土師器
M-20	P 3	30	24	45	
N-19	P 1	41	32	24	
N-19	P 2	31	26	10	土師器
N-19	P 3	35	35	17	
N-19	P 4	27	27	18	
N-19	P 5	—	—	—	SA4に編入 土師器
N-19	P 6	—	—	—	SA4に編入 土師器
N-19	P 7	—	—	—	SA4に編入 土師器
N-19	P 8	48	48	24	
N-19	P 9	31	28	47	
N-20	P 1	20	18	18	
N-20	P 2	22	17	18	
N-20	P 3	30	29	25	
N-20	P 4	42	35	18	
N-20	P 5	38	31	19	

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
N-20	P 6	31	30	16	
O-20	P 1	40	23	13	
O-20	P 2	25	23	10	
O-21	P 1	34	31	31	
O-21	P 2	43	29	22	

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
O-21	P 3	44	32	17	
P-21	P 1	50	(28)	29	SJ21
P-21	P 2	40	(25)	8	SK32
P-21	P 3	43	(36)	33	

8. その他の遺物

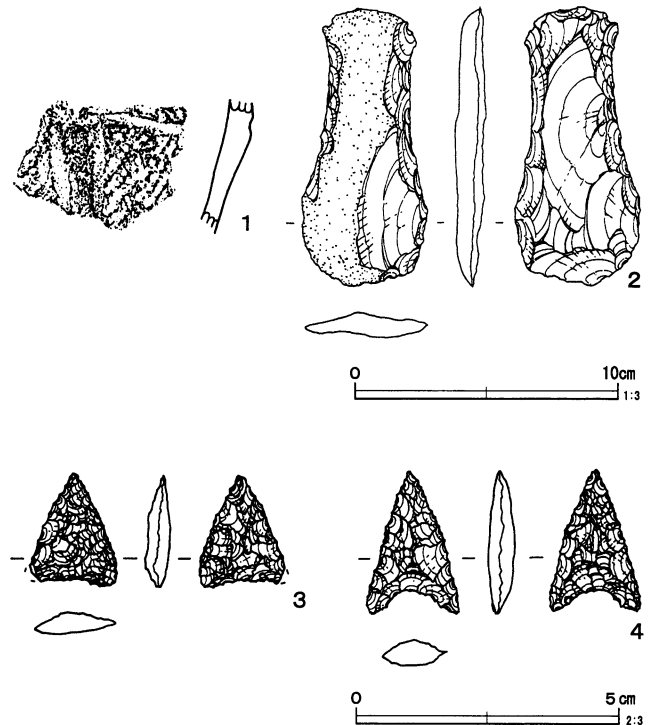
第260図に縄文時代の遺物を一括した。

1は縄文土器深鉢の胴部上半の破片で、横走する沈線から2本沈線の懸垂文が垂下する。地文にはRLの単節縄文が縦位に施文され、沈線間は磨り消される。加曾利EⅢ式である。

2は打製石斧である。正面に自然面、裏面に分割面を大きく残している。形状は短冊形で刃部は円刃である。調整加工は基部両側縁に周縁的剝離が施されている。本地域の縄文時代中期に特徴的に見られる形態である。石材はホルンフェルス。

3は石鏃である。左脚部を一部欠損する。平基無茎で平面形状は正三角形に近く、厚手であるが作りは丁寧である。石材は黒曜石。

4は石鏃である。凹基無茎で平面形状は整った二等辺三角形を呈しており、調整加工は両面との丁寧に施されており、横断面は凸レンズ状である。石材はチャート。



第260図 縄文時代の遺物

第87表 縄文時代の遺物観察表 (第260図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	縄文土器 深鉢	S J 3 カマド			破片	A・B・F・G・J	普通 浅黄橙10YR8/4	加曾利EⅢ式
2	石器 打製石斧	S J 7 埋土	長さ10.4cm	幅4.8cm	厚さ1.2cm	重さ58.0g	ホルンフェルス	側縁部はやや細かく調整
3	石器 石鏃	S J 4 埋土	長さ2.11cm	幅1.66cm	厚さ0.44cm	重さ1.2g	黒曜石	両側縁部に細かい調整 扶れは浅い 左基部欠損 No.33
4	石器 石鏃	S J 14 埋土	長さ2.64cm	幅1.74cm	厚さ0.5cm	重さ1.62g	チャート	全体的に丁寧な調整 基部は深めの扶れが作り出されている No.159

VI 弥藤次遺跡の調査

1. 概要

弥藤次遺跡の調査では、古墳時代中期の竪穴住居跡2軒、溝跡1条のほか、中・近世の溝跡9条、土坑12基、ピット33基を検出した。調査面積は500㎡である。現況の地形観察によると、調査区の西側に南西から北東に向って入り込む埋没谷が存在するため西に向って緩やかに傾斜し、遺構の分布が全体に希薄である。

古墳時代中期の住居跡は、夏目遺跡から続く集落域の西端にあたる。いわゆる源初坏の出現した

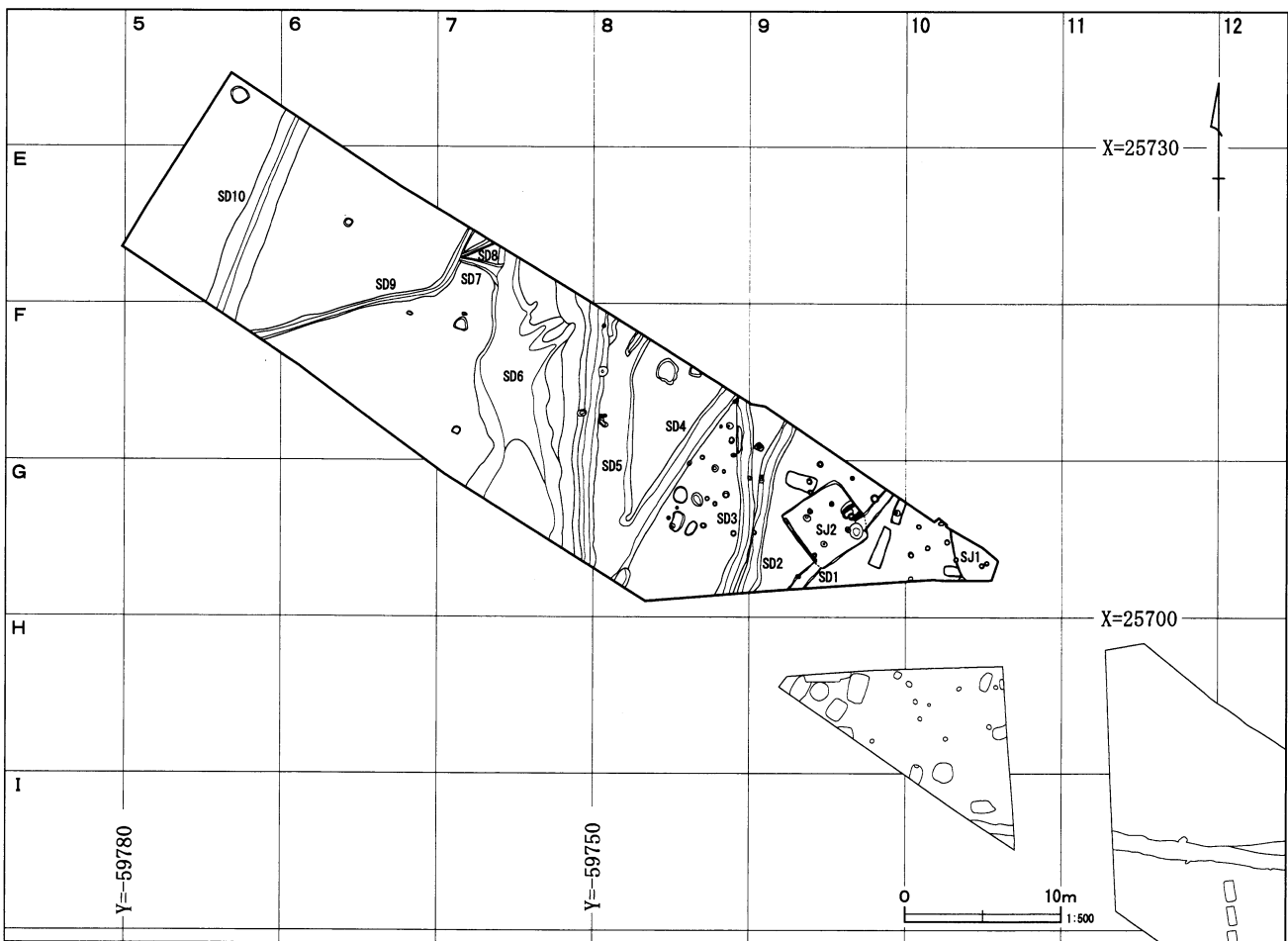
段階の住居跡で、滑石製白玉や手捏土器、土器片を再利用した加工円板などの祭祀遺物も出土している。第6号溝跡は緩やかに蛇行しながら南流する比較的規模の大きな溝で、集落域の西側を画する区画溝と考えられる。出土遺物には前期末の赤彩された小型器台をはじめ、埴、小型壺、口縁部に粘土紐の輪積み痕を残す粗製の甕、折返し口縁の大型鉢、埴、高坏など中期前半の土器群がまとまって廃棄されていた。

2. 竪穴住居跡

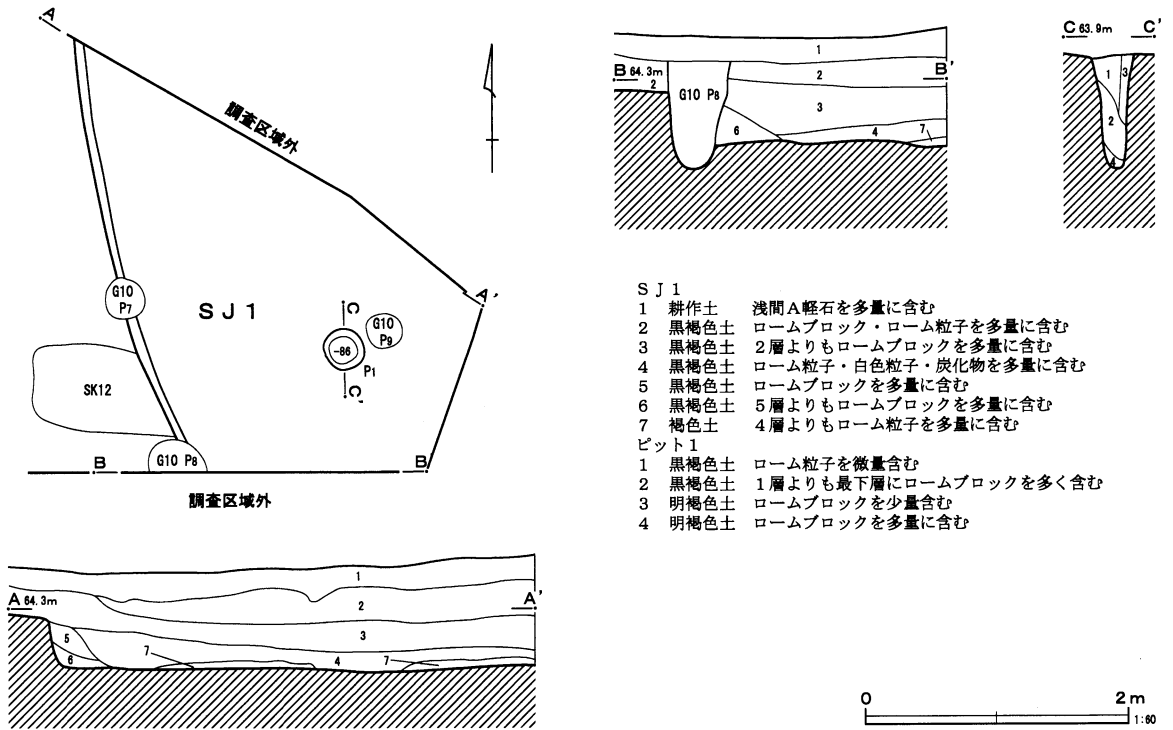
第1号住居跡 (第262・263図)

第1号住居跡は調査区南東端のG-10グリッドに位置する。調査区の制約により大半が調査区

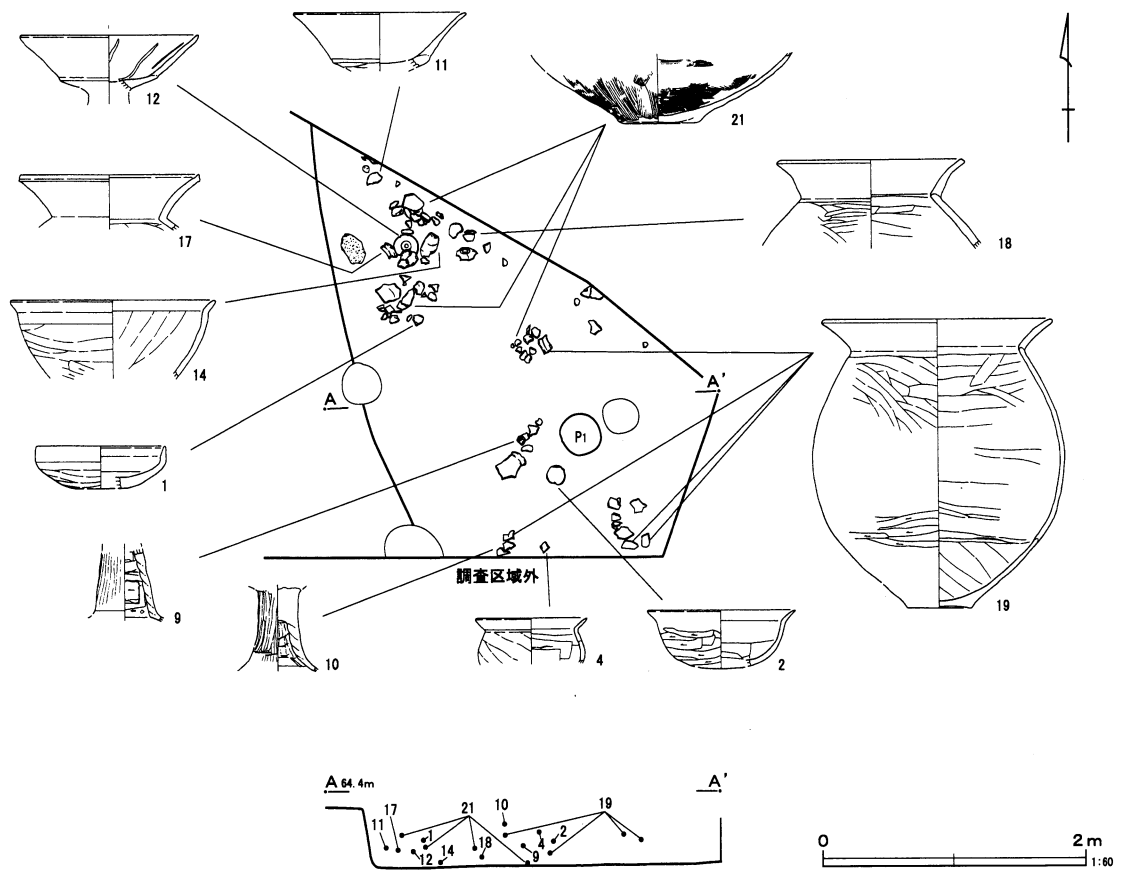
外に延びているため、西壁部のみ限定的な調査である。西壁部の南寄りには第12号土坑が重複し、それに切られている。



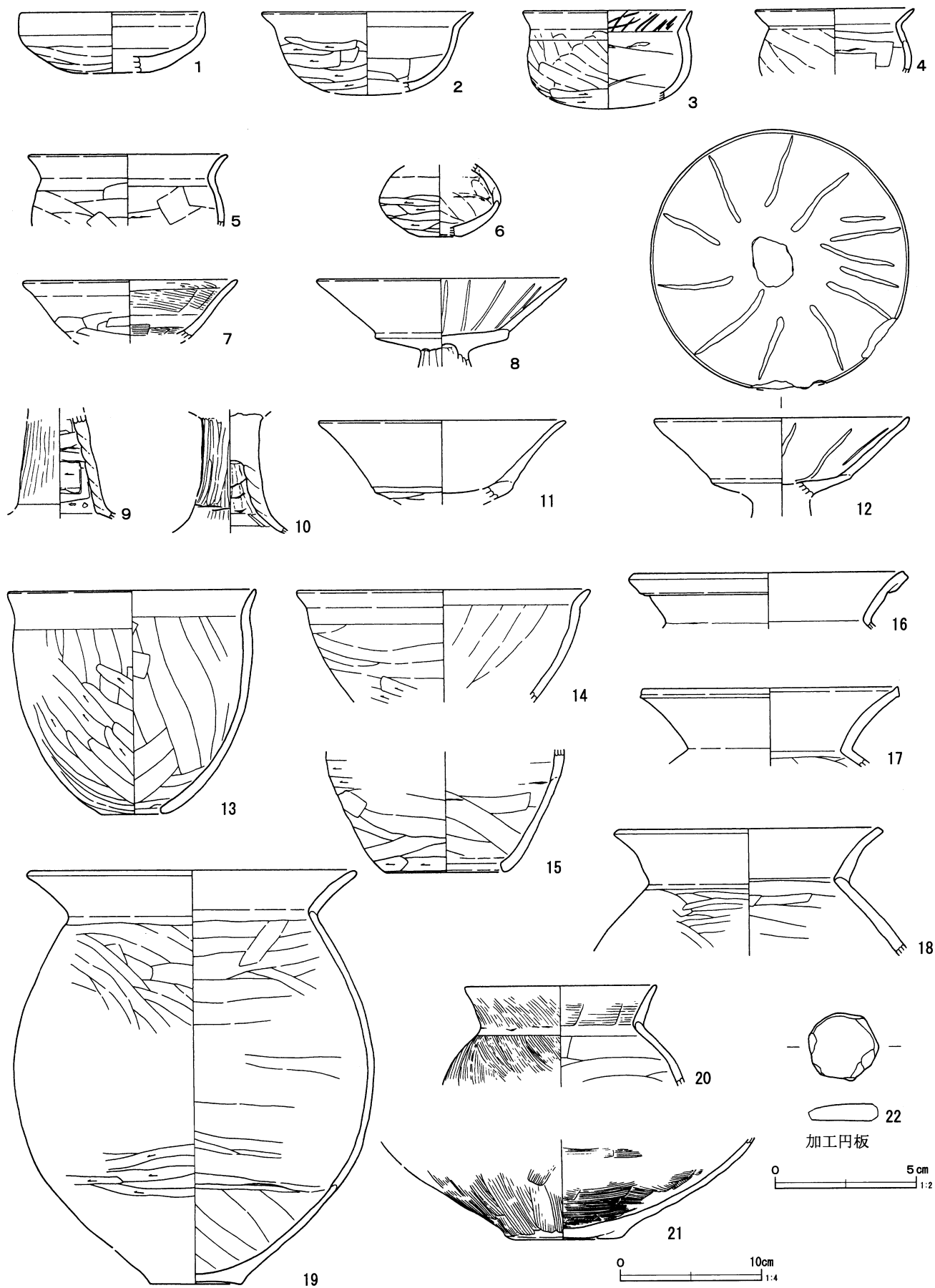
第261図 弥藤次遺跡全体図



第262図 第1号住居跡



第263図 第1号住居跡遺物出土状況



第264図 第1号住居跡出土遺物

第88表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第264図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 坏	西壁寄り 床面上17cm	(12.9) [4.3]		25	A・B・D・F・J	普通 明赤褐2.5YR5/8	内外面とも風化剝離著しい 内面口縁の稜は明瞭
2	土師器 坏	P1周辺 床面上17cm	(14.8) [5.7]		25	A・D・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	内斜口縁
3	土師器 壺	埋土	11.8 [5.7]		75	A・B・F・G・J	良好 橙2.5YR6/8	口縁部内面に不規則な線刻
4	土師器 鉢	南西部 床面上25cm	(11.2) [4.6]		15	A・B・D・F・J	不良 明赤褐2.5YR5/6	内面スス附着 外面は風化のため器面剝離
5	土師器 鉢	埋土	(14.0) [5.1]		20	A・B・D・F・J	普通 橙7.5YR6/6	胴部外面被熱痕あり
6	土師器 埴	埋土	[5.2]	(8.6) (3.0)	30	A・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	底部削り出しによる上げ底
7	土師器 高坏	埋土	(15.0) [4.2]		30	A・B・D・F・J	良好 にぶい赤褐5YR4/4	坏部外面光沢のあるナデ 内面ハケメ
8	土師器 高坏	埋土	(17.4) [6.3]		30	A・C・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/8	胎土緻密 坏部内面粗い放射暗文
9	土師器 高坏	P1周辺 床面上17cm	[7.3]		80	A・B・D・F・G	良好 橙5YR6/8	連続成形手法 内面ヘラケズリ
10	土師器 高坏	南西部 床面上33cm	[8.5]		80	A・D・F・G・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	脚部上半中実造り
11	土師器 高坏	西壁寄り 床面上11cm	(17.2) [5.6]		30	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	有稜高坏
12	土師器 高坏	西壁寄り 床面上10cm	17.8 [5.7]		90	A・B・C・F・J	良好 橙5YR6/8	坏部内面まばらな放射暗文
13	土師器 小型甗	埋土	(17.4) 15.8	(3.7)	20	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/8	底部外面擦痕顕著
14	土師器 鉢	西壁寄り 床面直上	(20.7) [8.0]		20	A・B・C・D・F	良好 にぶい赤褐5YR4/4	内外面一部スス附着 小型甗の可能性あり
15	土師器 甗	埋土	[8.6]	(8.4)	30	A・B・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	内外面一部スス附着
16	土師器 壺	埋土	(19.2) [4.0]		25	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/8	折り返し口縁
17	土師器 壺	西壁寄り 床面上11cm	18.0 [5.6]		70	A・B・C・F・J	良好 橙7.5YR6/8	素口縁壺
18	土師器 壺	西部 床面上5cm	(18.4) [9.0]		30	A・B・C・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	甗の可能性あり
19	土師器 甗	南西部 床面上23cm	(22.7) 29.1	(25.4) 6.4	25	A・B・C・D・F	良好 にぶい黄橙10YR7/4	口縁部及び胴部下外面にスス附着
20	土師器 小型甗	埋土	13.5 [7.2]		60	A・B・C・F	良好 にぶい赤褐5YR4/4	口縁部、胴部外面木口状工具によるナデ
21	土師器 壺	西部 床面直上	[7.1]	8.3	75	A・C・D・F・J	普通 橙7.5YR6/6	器面全体に風化
22	土製品 加工円板	埋土	大きさ2.5×2.3cm 厚さ0.6cm 重さ3.9g			A・B・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	胎土緻密 土器片転用

平面形は方形系と考えられる。規模は西壁長3.32mを残存し、床面までの深さは0.37mである。主軸方位はN-17°-Wを指す。

床面はやや凹凸があり、部分的に被熱を受け赤色に変色していた。埋土はロームブロックの混入が目立つ黒褐色土が主体で、概ね自然堆積を示している。

柱穴は1本検出された。P1は深さ86cmで、主柱穴と考えられる。埋土の状態から柱を抜き取ったようである。

カマド、貯蔵穴、壁溝等の施設は検出されな

かった。

出土遺物は土師器坏・壺・高坏・甗・鉢・壺・小型甗・甗、土製円板がある(第264図)。西壁の北寄りと中央部に比較的まとまった状態で土器が廃棄されていた。何れも床面から少し浮いた状態で出土した。この他に西壁際から扁平な円礫が住居跡外から流れ込んだように斜めの状態で出土した。また埋土中からは土器片の破断面を丸く再加工した加工円板が出土しており注目される。

時期は平底の坏と内斜口縁の壺が伴っていることから夏目遺跡Ⅲ期と考えられる。

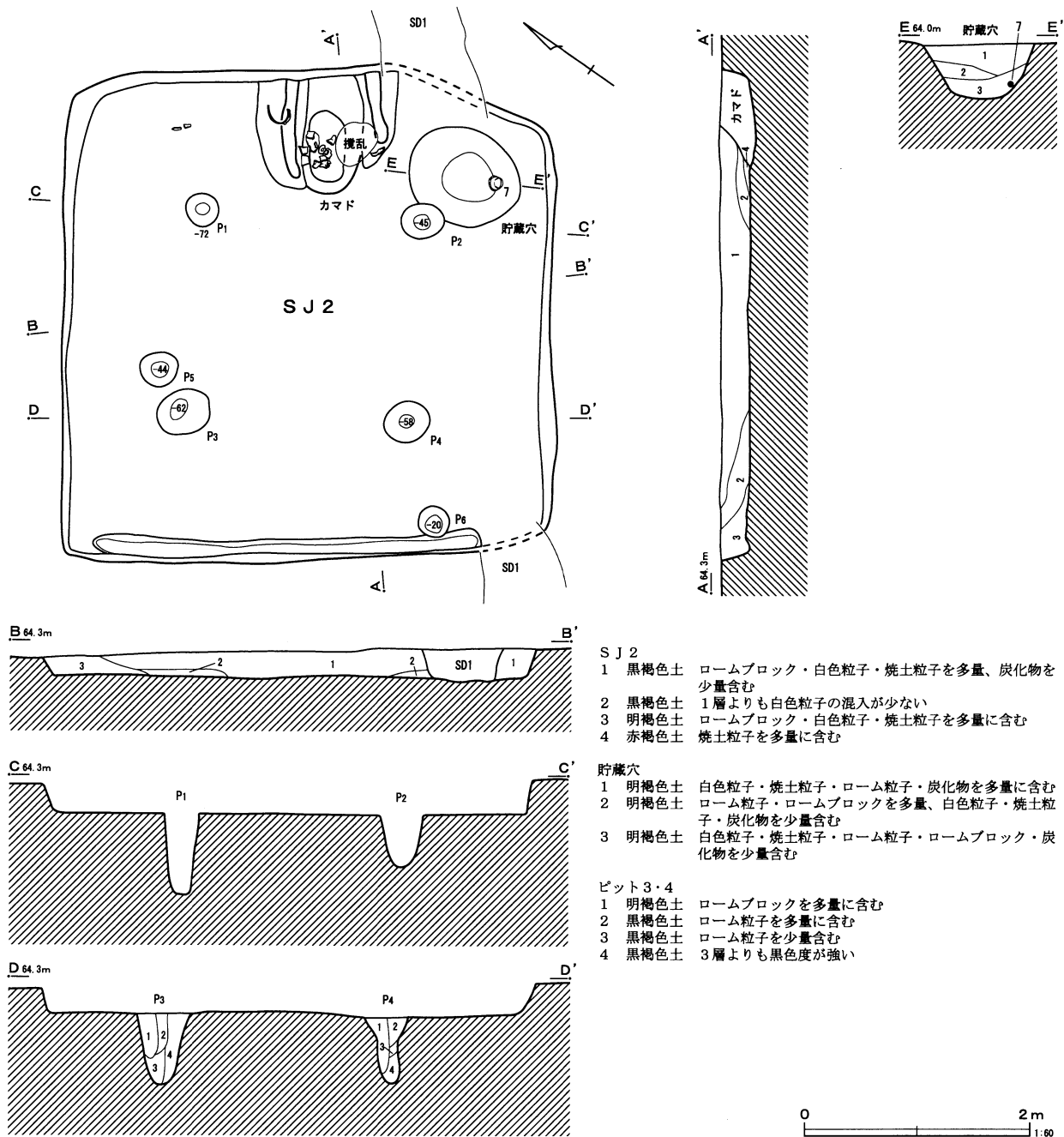
第2号住居跡 (第265・266図)

第2号住居跡は調査区南東部のG-9グリッドに位置する。南東壁際に第1号溝跡が重複し、北東から南西に向って縦断する。

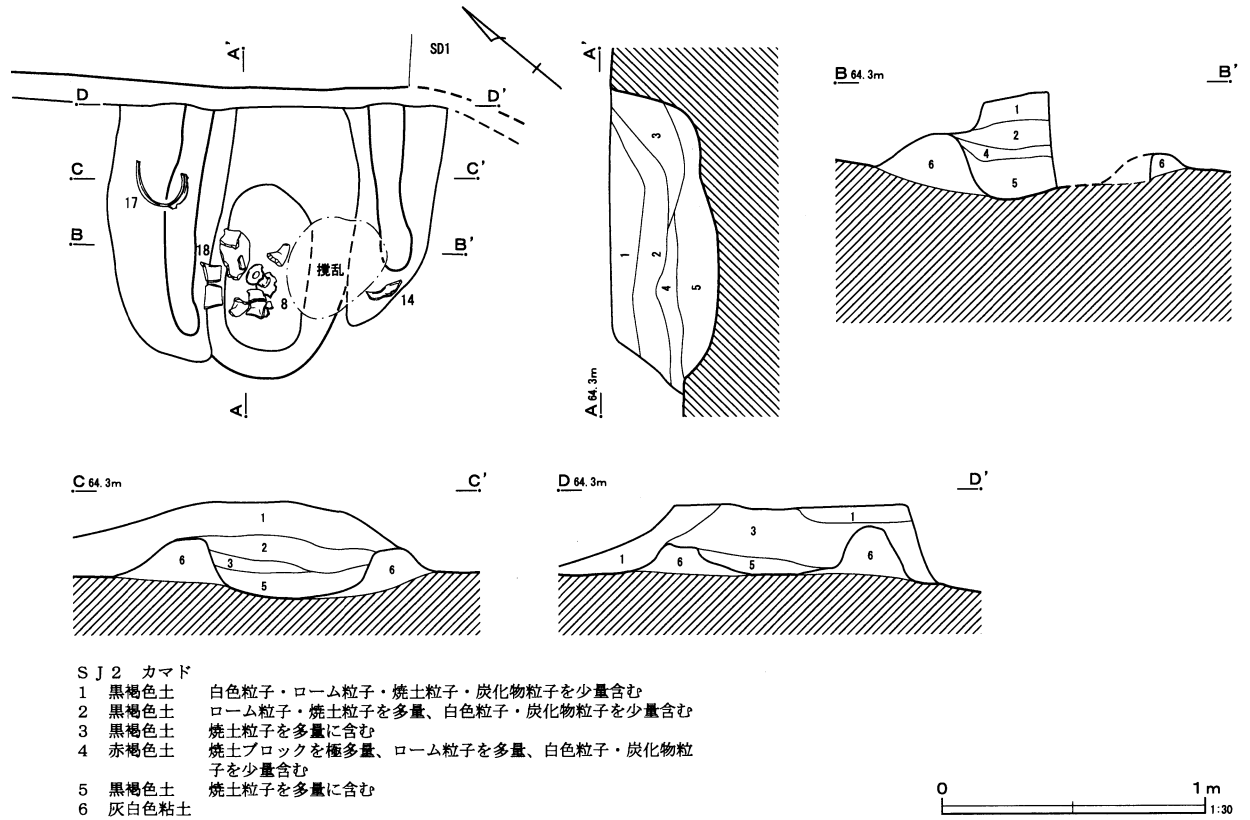
平面形は北東壁に歪みが見られるが比較的整った正方形である。規模は一辺4.36mほどで、床面までの深さ0.21mである。主軸方位はN-57°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、カマド手前に硬化面が見られた。埋土は第4層が焼土粒子を多量に含むことからカマドの流失土で、他はレンズ状の自然堆積を示していた。

カマドは北東壁の中央に設置されていた。全長1.02m、燃烧部内壁部の幅0.48mである。燃烧部は壁内に収まり、壁外への掘り込みは見られない。袖部は灰白色粘土で構築され、ハ字に開くタイプ



第265図 第2号住居跡



第266図 第2号住居跡カマド

である。埋土は第5層の上面が火床面にあたり、第4層が天井部崩落土と考えられる。

貯蔵穴は東隅部のカマド右脇に位置する。平面楕円形で、長径1.02m、短径0.85m、深さ0.49mである。

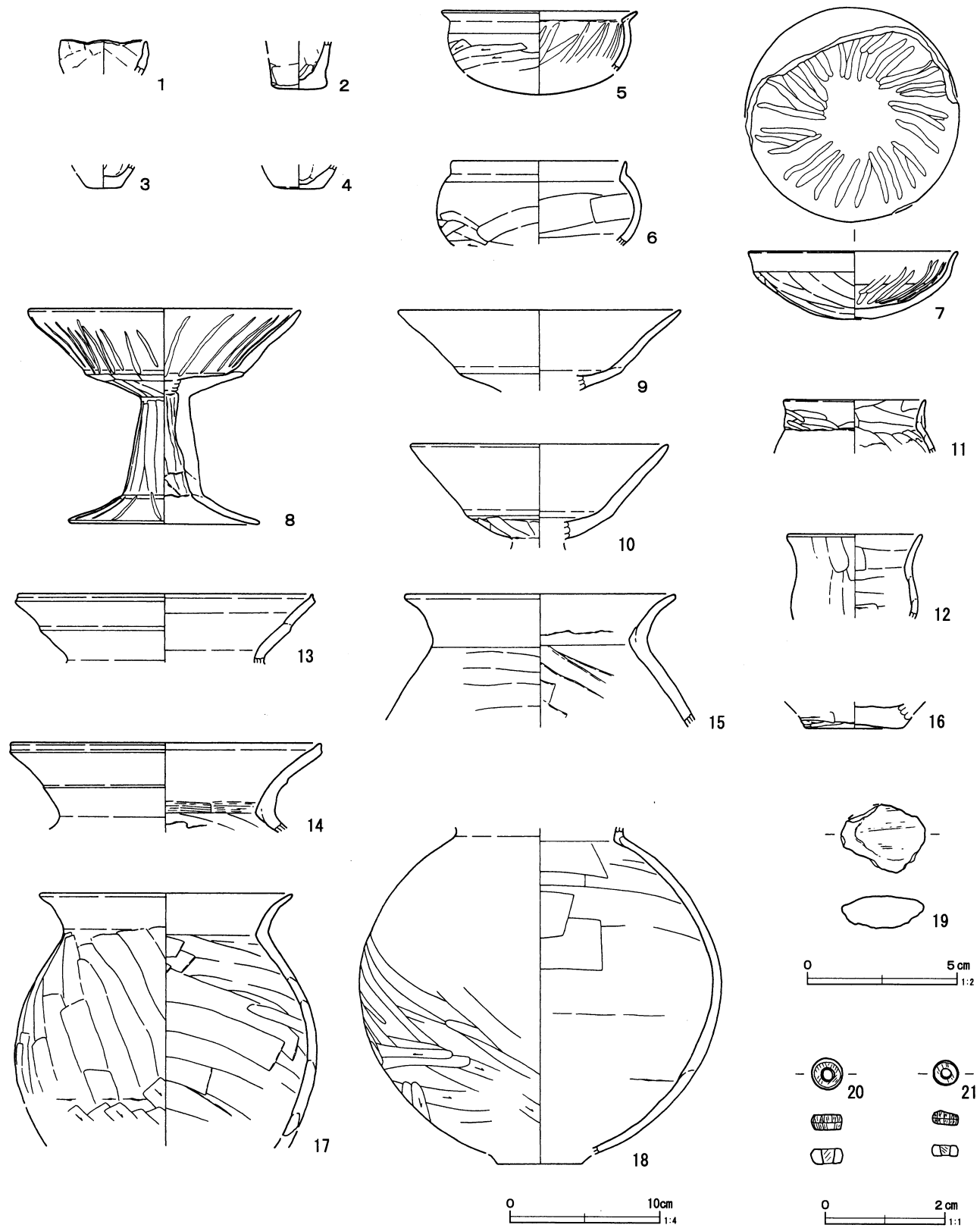
柱穴は6本検出された。P1～P4は規則的に配置され、深さの点からも支柱穴と考えられる。P3とP4は土層断面の観察から第1・2層が柱抜き痕、第3・4層が掘方埋土であることが判明した。

壁溝は南西壁際にのみ部分的に巡り、幅14～21cm、深さ5cmほどである。

出土遺物は土師器・埴輪・高坏・鉢・甕・有段口縁壺・手捏土器・焼成粘土塊、滑石製白玉がある(第267図)。

カマドの周辺と貯蔵穴を中心に分布する。カマド燃焼部には高坏(8)と壺(18)の破片がまとまっていた。8の高坏は焚口寄りから倒立した状

態で出土したもので、やや原位置を動いているが本来は支脚として転用されていたものと考えられる。屈折脚の和泉型高坏で、坏部の内外面にヘラミガキを施し、同様に裾部外面にもヘラミガキを施す。18は壺の胴部破片で口縁部及び底部を欠く。また、右袖先端部からは14の有段口縁壺の口縁部が、左袖部の上面からは17の素口縁甕の胴部上半と13の有段口縁壺の口縁部破片が出土した。さらに貯蔵穴からは7の坏が口縁部を上にした正位の状態から少し浮いて出土した。7は口縁部と体部の境に稜を有する、いわゆる原初坏である。口縁部は緩やかに外反し、内面に幅広の放射暗文を施している。この他に埋土から5の内斜口縁坏、6の口縁部の短く直立する埴輪、11・12の粗製の小型鉢などの器種がある。手捏土器は4点出土した(1～4)。いずれも小破片のため器形は明確でない。2は貯蔵穴の埋土、3はP3の埋土からの出土である。



第267図 第2号住居跡出土遺物

この他に19の焼成粘土塊、20・21の滑石製白玉が埋土から出土した。19の焼成粘土塊は植物繊維

の圧痕が見られる。白玉は断面が中膨れ形である。時期は夏目遺跡Ⅲ期と考えられる。

第89表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第267図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 手捏土器	埋土	(5.6) [2.3]		10	A・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	内外面ナデ
2	土師器 手捏土器	貯蔵穴 埋土	[3.3]	3.7	70	A・B・C・J	良好 明赤褐5YR5/8	底面に棒状圧痕
3	土師器 手捏土器	P3 埋土	[1.6]	2.3	60	A・B・D・F	良好 明赤褐5YR5/6	外面黒斑
4	土師器 手捏土器	埋土	[1.6]	(3.3)	20	A・B・C・F・J	良好 橙5YR7/6	外面黒斑
5	土師器 坏	埋土	(13.0) [4.0]		30	A・B・C・D	良好 橙5YR6/8	体部内面粗いヘラミガキ
6	土師器 塊	埋土	(11.6) [5.6]		20	A・C・D・F・G	良好 橙5YR6/8	体部外面ヘラケズリ
7	土師器 坏	貯蔵穴 底面上11cm	(14.0) 4.5	2.6	80	A・B・C・D・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	体部内面粗い放射暗文
8	土師器 高坏	カマド燃焼部 使用面直上	18.0 14.4	(12.6)	70	A・B・C・D・F	普通 橙5YR6/8	坏部及び裾部に放射暗文を施す
9	土師器 高坏	貯蔵穴 埋土	(18.8) [5.5]		20	A・D・F・G・J	普通 明赤褐2.5YR5/8	坏部内面風化により器面凹凸あり
10	土師器 高坏	カマド 埋土	(17.2) [6.4]		30	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	口縁部ヨコナデ
11	土師器 鉢	埋土	(9.4) [3.7]		30	A・C・F・G・J	普通 橙5YR6/8	SD1一部接合 粗製
12	土師器 鉢	埋土	(9.0) [5.6]		10	A・B・D・F・G	良好 橙5YR6/8	粗製
13	土師器 壺	カマド 左袖直上	(19.8) [4.7]		30	A・D・F・G・J	普通 明赤褐2.5YR5/8	有段口縁壺 口唇部上方へ短くつまみ出す
14	土師器 壺	カマド右袖端 床面下6cm	20.8 [6.0]		70	A・D・F・J	良好 橙5YR6/8	赤色粒子を多く含む 有段口縁壺
15	土師器 甕	埋土	(18.0) [9.0]		15	A・B・C・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/8	胴部外面ナデ
16	土師器 壺	埋土	[1.6]	6.6	底部	A・B・C・F・J	良好 橙5YR6/8	底面藁状圧痕
17	土師器 甕	カマド 左袖直上	(16.8) [16.2]	(20.3)	40	A・B・C・F・K	普通 にぶい黄橙10YR7/4	胴部内外面にスス付着
18	土師器 壺	カマド燃焼部 使用面上9cm	[26.1]	(24.2)	40	A・B・C・D・F	普通 にぶい褐7.5YR5/4	胴部外面下半ヘラケズリ
19	土製品 焼成粘土塊	埋土	長さ2.8cm 厚さ1.0cm	幅2.2cm 重さ5.5g		A・B・F	良好 橙7.5YR6/6	器面に植物圧痕を残す

第90表 第2号住居跡出土白玉観察表 (第267図)

番号	種類	出土位置	最大径(cm)	上面径(cm)	下面径(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石材	段階	研磨	外形
20	白玉	埋土	0.51	0.42	0.46	0.23	0.20	0.10	滑石	4	上下側面	中膨れ
21	白玉	埋土	0.41	0.35	0.35	0.20	0.15	0.05	滑石	4	上下側面	中膨れ

3. 溝跡

第1号溝跡 (第268図)

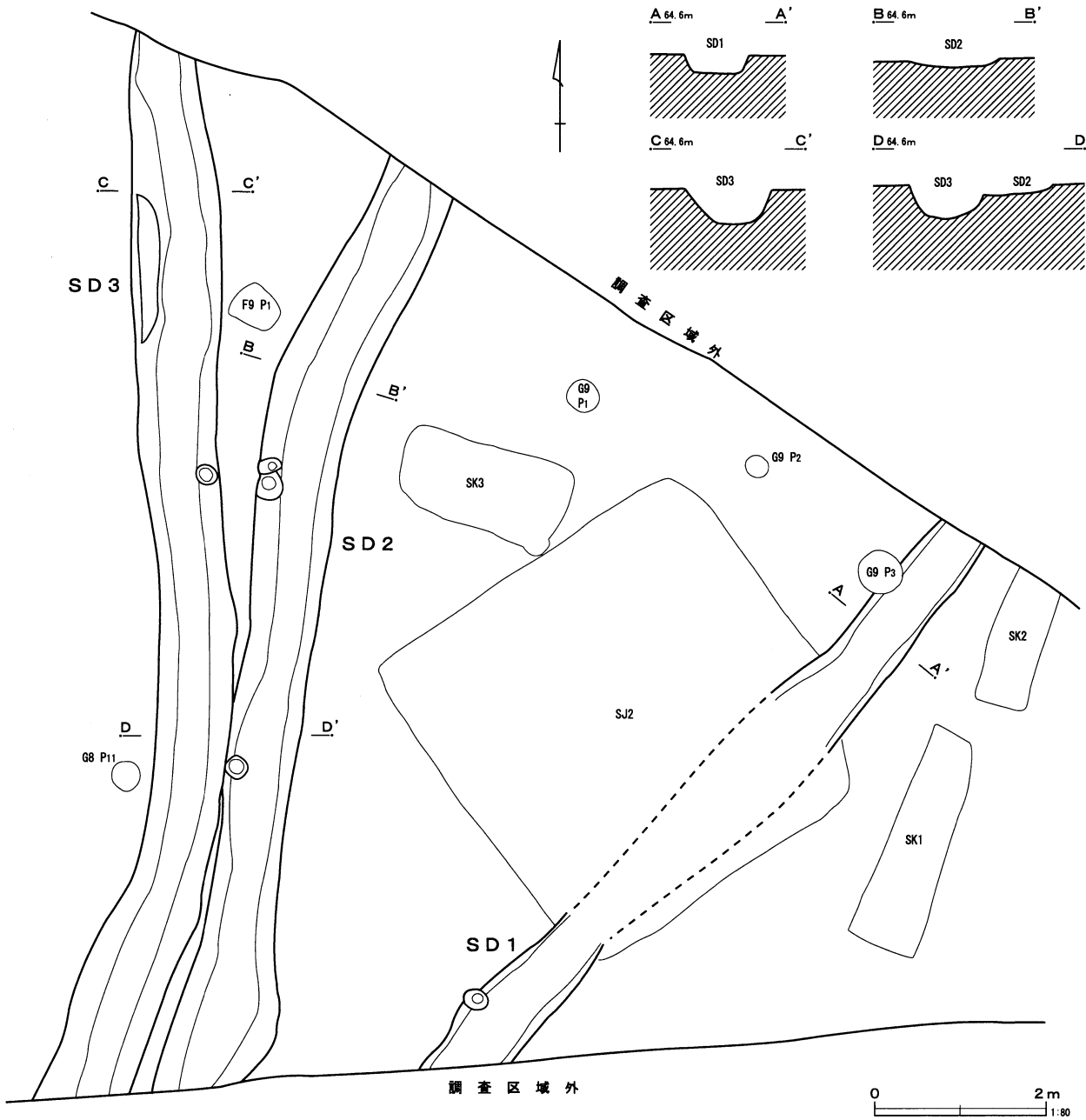
調査区東端のG-9グリッドに位置する。南西から北東に向ってほぼ直線的に延び、第2号住居跡を切っている。走行方向はN-44°-Eを示す。検出された長さは8.95m、幅0.60~0.88m、深さ0.22~0.27mで、断面形は台形に近い。

遺物は第2号住居跡からの混入と考えられる古墳時代中期の手捏土器と壺の底部片があるだけで(第269図1・2)、溝跡に直接伴う遺物はない。

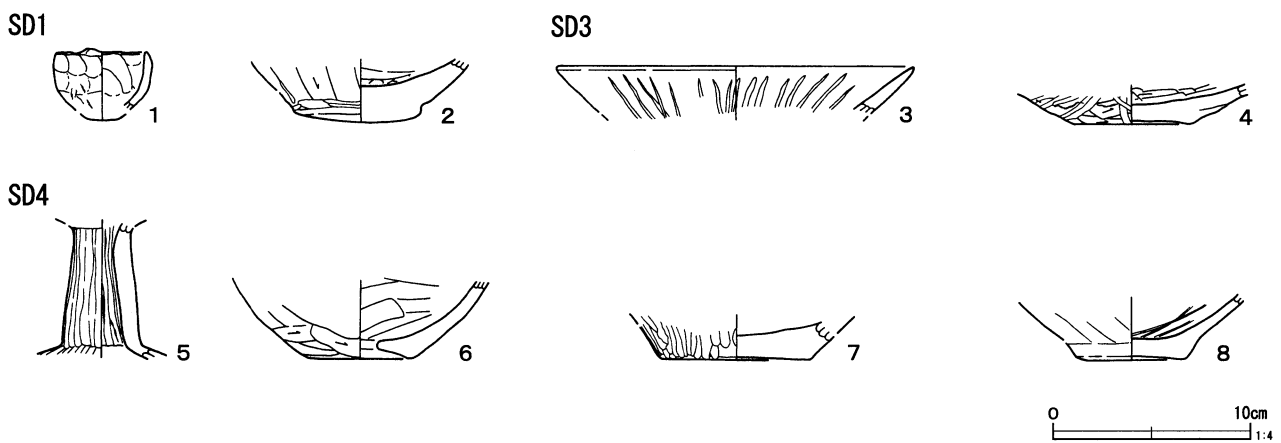
第2号溝跡 (第268図)

調査区東側のF-9、G-8・9グリッドに位置する。南北に緩やかに蛇行しながら延び、南側で第3号溝跡と一部接する。走行方向はN-13°-Eを示す。検出された長さは11.30m、幅0.72~1.20m、深さ0.10~0.17mを測り、掘り込みは非常に浅い。底面は概ね平坦で、北に向って緩やかに傾斜する。

遺物は出土しなかった。



第268図 第1・2・3号溝跡



第269図 第1・3・4号溝跡出土遺物

第91表 第1・3・4号溝跡出土遺物観察表 (第269図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 手捏土器	SD 1 埋土	(4.5) [3.0]		25	A・B・D・F・J	良好 明赤褐5YR5/8	S J 2からの混入か
2	土師器 壺	SD 1 埋土	[3.2]	6.4	60	C・D・F・J・K	良好 橙5YR6/8	S J 2からの混入か
3	土師器 高坏	SD 3 埋土	(18.0) [2.4]		10	A・D・F・G・J	良好 橙5YR6/8	坏部内外面放射暗文
4	土師器 壺	SD 3 埋土	[2.0]	(5.9)	30	A・B・C・F・J	良好 橙5YR6/8	赤色粒子を多く含む
5	土師器 高坏	SD 4 埋土	[6.8]		80	A・B・C・F・G	良好 橙2.5YR6/8	柱状部内面絞り目顕著 外面に靱圧痕あり
6	土師器 小型甌	SD 4 埋土	[4.0]	(4.9)	20	A・C・F	良好 明赤褐5YR5/6	孔部直径約1.4cm
7	土師器 壺	SD 4 埋土	[2.2]	7.5	底部	A・B・D・F	良好 橙5YR6/8	胴部外面ヘラミガキ
8	土師器 壺	SD 4 埋土	[3.3]	5.4	40	A・B・C・D・J	普通 橙5YR6/8	外面風化 内面平滑

第3号溝跡 (第268図)

調査区東側のF・G—8・9グリッドに位置する。南北に緩やかに蛇行しながら延びており、南側で第2号溝跡と一部接している。走行方向はN—3°—Eを示す。検出された長さは12.70m、幅0.78~1.20m、深さ0.35~0.40mで、断面台形である。西側壁面にはテラス部が造作されていた。底面は概ね平坦である。

遺物は、坏部内外面に放射暗文を施す高坏と外面にミガキを施す壺の底部片が出土した (第269図3・4)。これらは溝跡に直接伴う遺物ではなく、混入であろう。

第4号溝跡 (第271図)

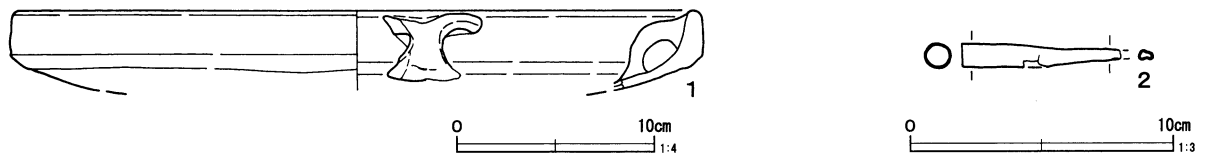
調査区中央部東寄りのF・G—8グリッドに位置し、第5号溝跡と調査区際で交差する。土層断面の観察から第5号溝跡の埋没後に掘削されたも

のであることが明らかである。南西から北東に向ってほぼ直線的に延び、走行方向はN—33°—Eを示す。検出された長さは15.00m、幅1.10~1.30m、深さ0.32~0.44mで、壁面が斜めに立ち上がり、断面台形を呈する。底面は北東に向って緩やかに低くなっている。

遺物は高坏脚部、小型甌、壺底部などの破片が出土した (第269図)。後述するように江戸時代の焙烙や煙管を出土した第5号溝跡を切っていることから、これらの遺物は周辺の遺構から混入したものと考えられる。

第5号溝跡 (第271図)

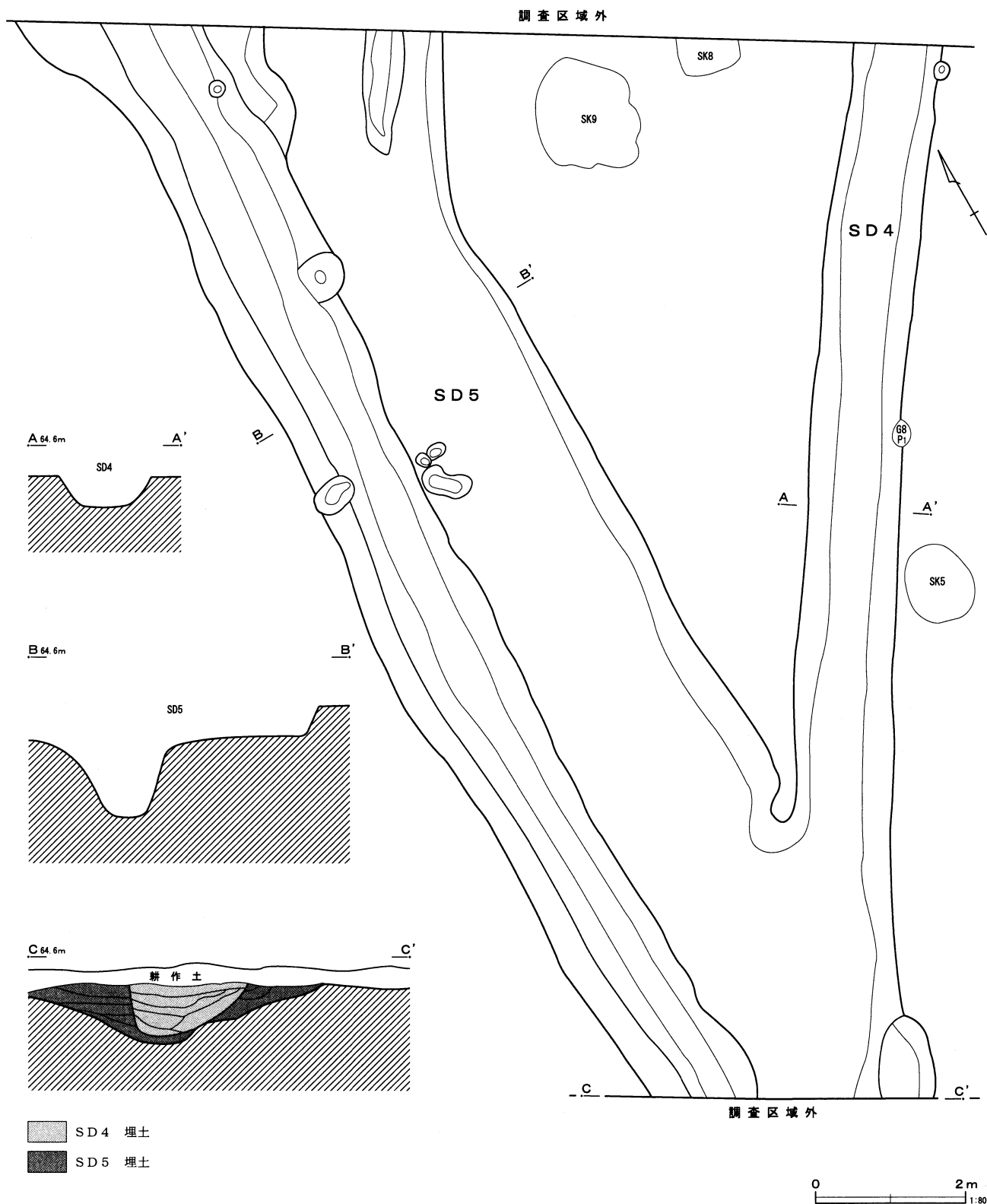
調査区中央部東寄りのF・G—7・8グリッドに位置する。真北に向かって直線的に延びている。走行方向はN—2°—Eを示し、南に延長すると、夏目西遺跡の調査区西側で検出された東西溝の第



第270図 第5号溝跡出土遺物

第92表 第5号溝跡出土遺物観察表 (第270図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	軟質陶器 焙烙	埋土	(34.0) [4.0]		10	A・D・F・J	良好 橙5YR7/6	胎土中に赤色粒子、雲母を多量に含む
2	銅製品 煙管	埋土	残存長6.0cm、径0.9cm、重量3.7g			煙管の吸口		蠟付けの合せ目良く残る 口付けの部分は歯で噛み潰され大きく歪む 真鍮製

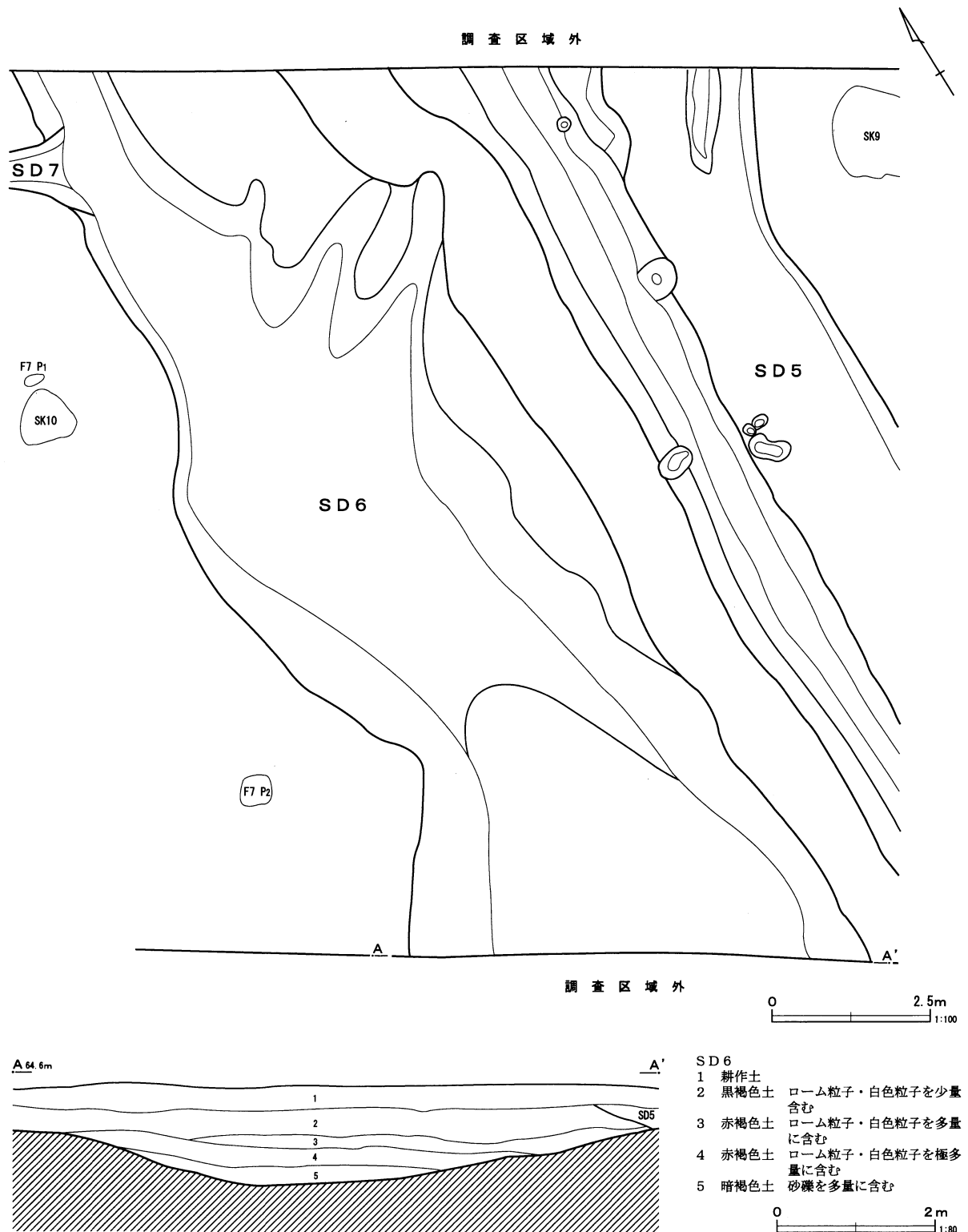


第271図 第4・5号溝跡

6号溝跡に直交することから、本来は同一の溝として機能していたようである。

検出された溝の長さは16.20m、幅3.40~4.20

mと幅広く、東側にテラス状の浅い溝が取り付け、西側はさらに一段深く溝が掘り込まれている。最深部の深さは約0.73mを測る。土層は概ね自然堆



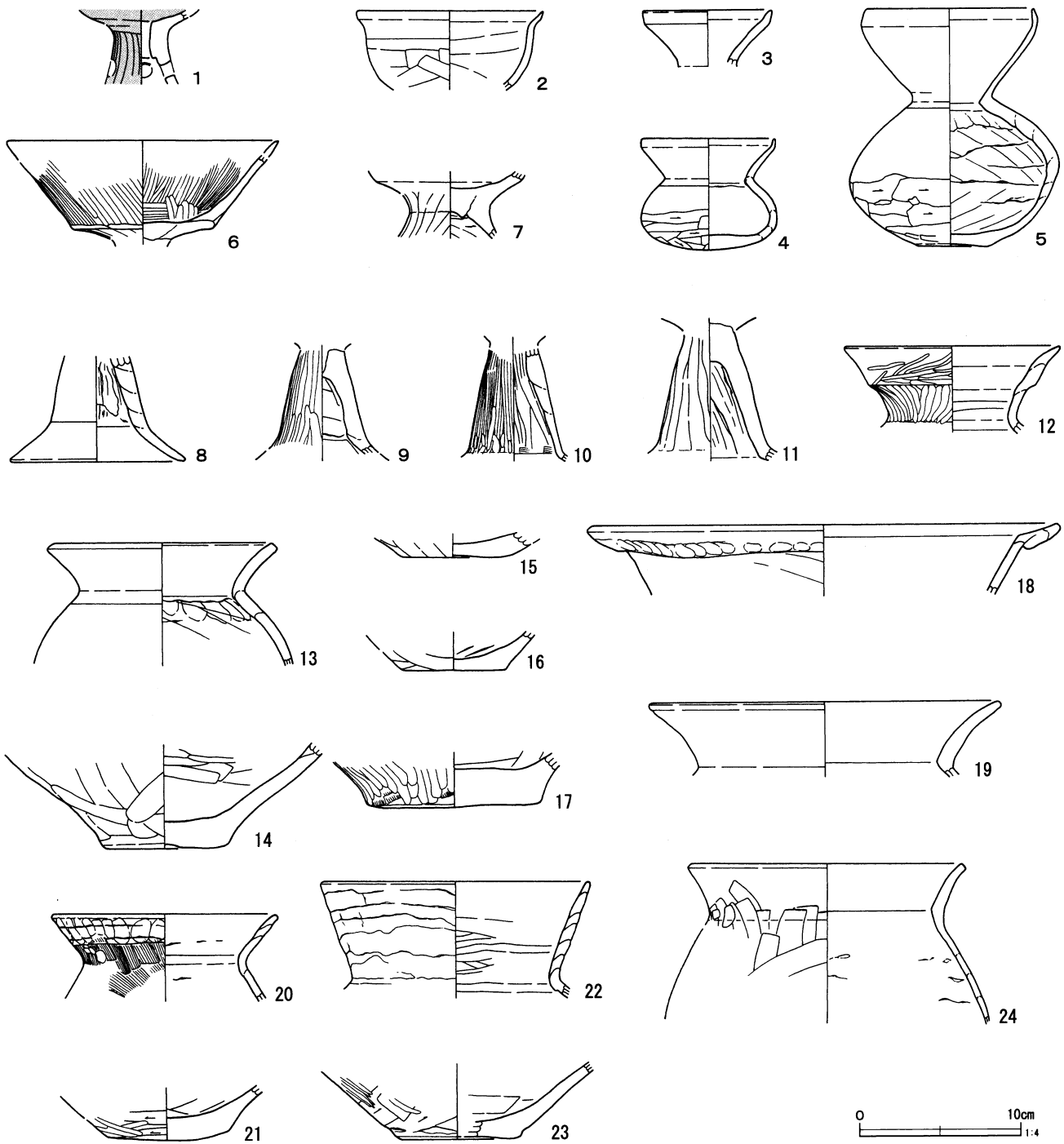
第272図 第6号溝跡

積を示す。

遺物は、図示した18世紀後半の焙烙と真鍮製の煙管吸口のほか（第270図）、図示していないが灰釉小皿や常滑の甕の破片などもあり、掘削時期の上限は中世まで遡る可能性もある。

第6号溝跡（第272図）

調査区中央部のE・F・Gー7グリッドに位置する。南北方向にほぼ直線的に延び、走行方向Nー3°ーEを指す。検出された長さは16.90m、幅4.10~5.60mと幅広く、深さ0.21~0.58mの緩や



第273図 第6号溝跡出土遺物

かな立ち上がりの掘り込みで、北端で第7号溝跡が合流する。土層断面の観察によると東側に平行する第5号溝跡は、本溝跡が完全に埋没した段階に掘削されたものであることが明らかとなった。底面はやや起伏が見られ、南流する。

土層は自然堆積を示し、第3層を中心に土器が

包含されていた。古墳時代前期後半から中期前半が主体である。第4層は鉄分が多く見られ、第5層は多量の砂礫を含むことから、一定量の流水状態が考えられる。

遺物は、第3層を中心に土師器が出土した。古墳前期後半の赤彩された小型器台、S字状口縁台

第93表 第6号溝跡出土遺物観察表 (第273図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器器台	埋土	[4.8]		70	A・B・D・F・J	普通 橙5YR6/8	外面及び受部内面赤彩 3方に円孔を穿孔
2	土師器壙	埋土	(11.5) [5.0]		40	A・C・D・E・F	良好 橙2.5YR6/8	体部外面ハケ目状のヘラナデ
3	土師器埴	埋土	(7.8) [3.6]		20	A・B・C・F・J	良好 橙5YR6/8	口縁部ヨコナデ
4	土師器埴	埋土	(8.2) 6.9	8.5	70	A・B・C・F・J	良好 橙5YR6/8	底部外面黒斑あり
5	土師器小型壺	埋土	10.4 14.8	13.0 4.2	75	A・C・D・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	胴部外面下半ヘラケズリ
6	土師器高坏	埋土	[5.3]		30	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	坏部内外面ミガキ
7	土師器高坏	埋土	[4.2]		70	A・C・D・F・J	良好 橙5YR6/8	接合部外面ナデ
8	土師器高坏	埋土	[6.7]	10.9	80	A・B・C・D・F	良好 橙5YR6/8	柱状部内面絞り目顕著
9	土師器高坏	埋土	[6.5]		80	A・B・C・D・F	良好 明赤褐2.5YR5/8	坏部と脚部の接合部に小円孔が開く
10	土師器高坏	埋土	[7.1]		80	A・D・F・G	良好 明赤褐2.5YR5/6	柱状部内面絞り目顕著
11	土師器高坏	埋土	[8.6]		90	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/6	柱状部内面縦位の強いナデにより絞り目を消す
12	土師器壺	埋土	(13.3) [5.4]		50	A・B・C・F・J	普通 橙7.5YR7/6	口縁部外面ヘラミガキ
13	土師器壺	埋土	(13.5) [7.6]		40	A・B・C・D・F	良好 橙2.5YR6/8	胴部外面ナデ
14	土師器壺	埋土	[6.5]	(7.6)	30	A・B・C・F・J	良好 明赤褐2.5YR5/8	胎土中に赤色粒子を多量に含む
15	土師器壺	埋土	[1.5]	6.1	80	A・B・F・I・J	良好 橙5YR6/9	胎土中に砂粒を多量に含む
16	土師器壺	埋土	[2.4]	6.5	80	A・B・C・F・J	良好 明赤褐5YR5/8	胴部外面ナデ
17	土師器壺	埋土	[3.4]	10.9	100	B・C・F・J・K	良好 橙2.5YR6/8	底部外面砂粒付着
18	土師器鉢	埋土	(28.8) [4.5]		20	A・B・E・F・J	普通 橙7.5YR6/6	折り返し口縁 粘土紐痕、指頭圧痕を残す
19	土師器甕	埋土	(21.5) [4.7]		30	A・C・D・F・K	普通 橙5YR6/8	器面全体に磨耗顕著
20	土師器小型甕	埋土	(13.8) [5.5]		40	A・B・C・F・J	普通 橙7.5YR6/6	口縁部外面粘土紐の輪積み痕を明瞭に残す 吉ヶ谷式系か
21	土師器甕	埋土	[3.3]	7.5	60	A・C・F・I・K	良好 橙7.5YR6/6	外面に一部ススが付着
22	土師器甕	埋土	(16.6) [7.2]		40	B・C・F・J・K	普通 橙5YR6/8	口縁部外面に粘土紐の輪積み痕を明瞭に残す 粗製 吉ヶ谷式系か
23	土師器甕	埋土	[4.7]	(7.8)	40	A・B・C・D・F	不良 橙5YR6/8	胎土中に赤色粒子を多量に含む
24	土師器甕	埋土	16.8 [10.0]	(20.2)	70	B・C・D・F・J	普通 橙5YR6/9	内外面とも口縁から胴部にスス付着

付甕の破片 (非掲載) のほか、埴、小型壺、口縁部に粘土紐の輪積み痕を残す粗製の甕、折返し口縁の大型鉢、壙、高坏などの中期前半を中心とする土器がまとまって出土した (第273図)。

人為的な掘削を示すような痕跡に乏しく自然流路の可能性も残されている。しかし、住居跡の分布状況などを考え合わせると、夏目遺跡から続くこの集落の西側を画するような性格をもった区画溝と考えておきたい。

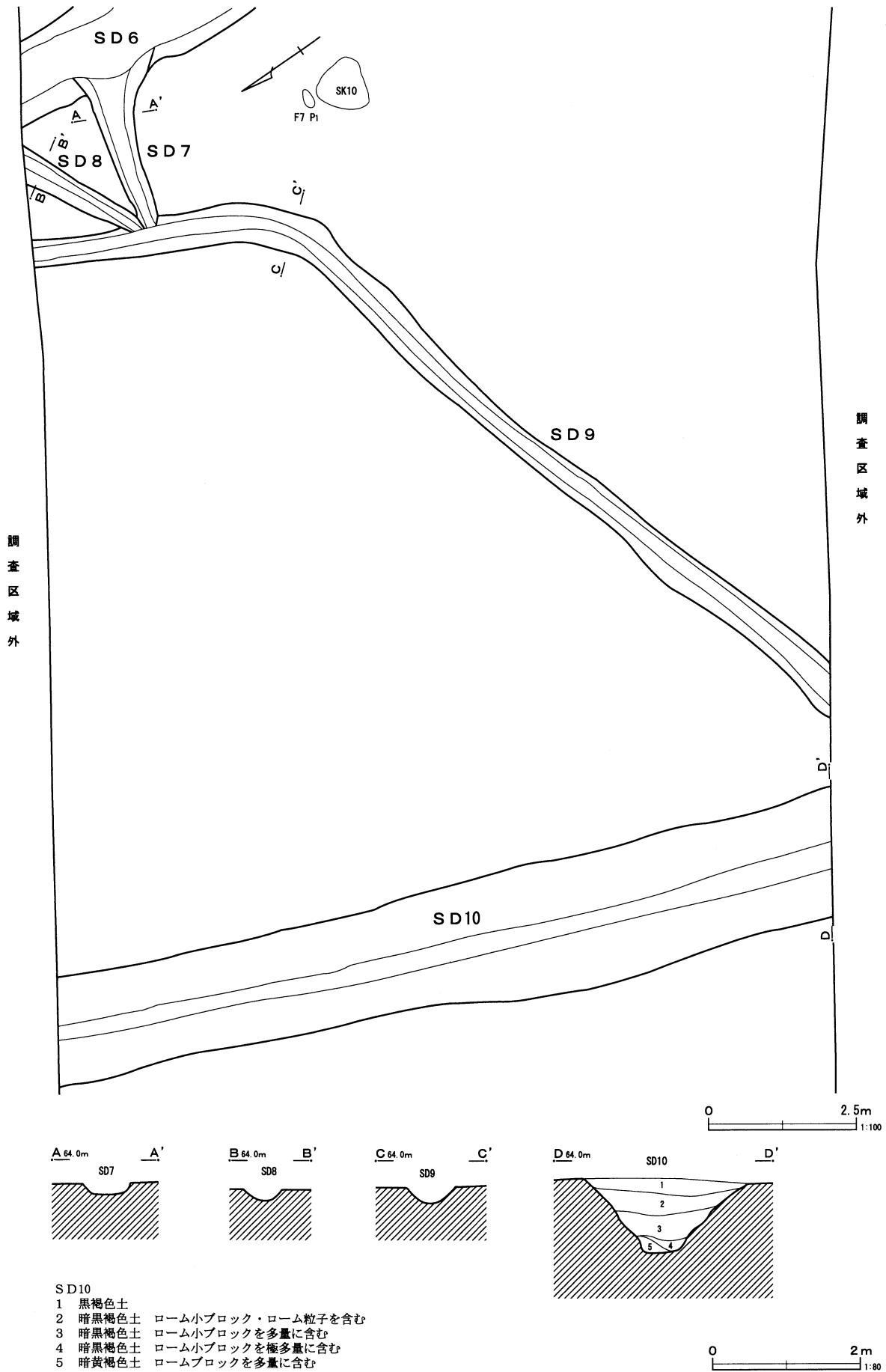
第7号溝跡 (第274図)

調査区西側のE-7グリッドに位置する。第6号溝跡と第9号溝跡を結ぶように東西に延びる。走行方向はN-73°-Wを示す。検出された長さは2.80mで、第6号溝跡との合流部分で最大幅1.40mを測る。深さは0.10m前後と非常に浅い。

遺物は出土しなかった。

第8号溝跡 (第274図)

調査区西側のE-7グリッドに位置する。第



第274図 第7・8・9・10号溝跡

7・9号溝跡と重複し、北東端は調査区域外へと続く。走行方向はN-67°-Eを指す。確認長2.40m、幅0.30~0.50m、深さ0.13mである。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

第9号溝跡 (第274図)

調査区西側のE-6・7、F-5・6グリッドに位置する。南西から北東に向って直線的に伸び、途中で北へ屈曲し向きを変え、調査区域外に伸びる。第6号溝跡と最も接近する位置において第7・8号溝跡が合流する。確認長16.50m、幅0.40~0.70m、深さ0.16~0.30m、断面形は台形に近い。底面は幅が狭く、北東に向って緩やかに傾斜する。

遺物は出土しなかった。

4. 土 坑

土坑は12基検出された。調査区東側に集中する傾向が窺われる。時期や性格を示すようなものは少ない。なお、規模や出土遺物についての詳細は第94表に記した。

第1号土坑 (第275図)

G-9グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長軸長2.62m、短軸長0.82m、深さ0.24mである。主軸方位はN-21°-Eを指す。遺物は土師器片が僅かに出土した。

第2号土坑 (第275図)

G-9グリッドに位置し、北端が調査区外にか

第94表 土坑一覧表

番号	グリッド	平面形	長軸方向	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構	遺物	挿図
1	G-9	長方形	N-21°-E	2.62	0.82	0.24		土師器	第275図
2	G-9	長方形	N-22°-E	(1.58)	0.63	0.27			第275図
3	G-9	長方形	N-70°-W	2.00	1.04	0.11		土師器	第275図
4	G-8	楕円形	N-30°-W	0.90	0.69	0.25			第275図
5	G-8	楕円形	N-6°-E	1.05	0.89	0.11			第275図
6	G-8	楕円形	N-36°-E	1.00	0.55	0.14			第275図
7	G-8	不定形	N-21°-E	1.25	0.79	0.19	P5(G-8G)		第275図
8	F-8	方形か	N-75°-W	0.81	(0.52)	0.24			第275図
9	F-8	不定形	N-25°-E	1.42	1.36	0.24			第275図
10	F-7	不定形	N-45°-E	0.90	0.86	0.13			第275図
11	D-5	円形	N-37°-W	1.10	1.05	0.60			第275図
12	G-10	長方形	N-87°-W	(1.02)	0.67	0.07	SJ1		第257図

第10号溝跡 (第274図)

調査区西端のD・E-5・6、F-5グリッドに位置する。調査区内を南北に縦断する上幅2mを越す断面V字形の溝である。走行方向はN-22°-Eを示す。確認長13.50m、幅1.65~2.20m、深さ0.73~0.87mである。埋土は暗黒色土を基調とする。底面は南西から北東に向って緩やかに傾斜する。

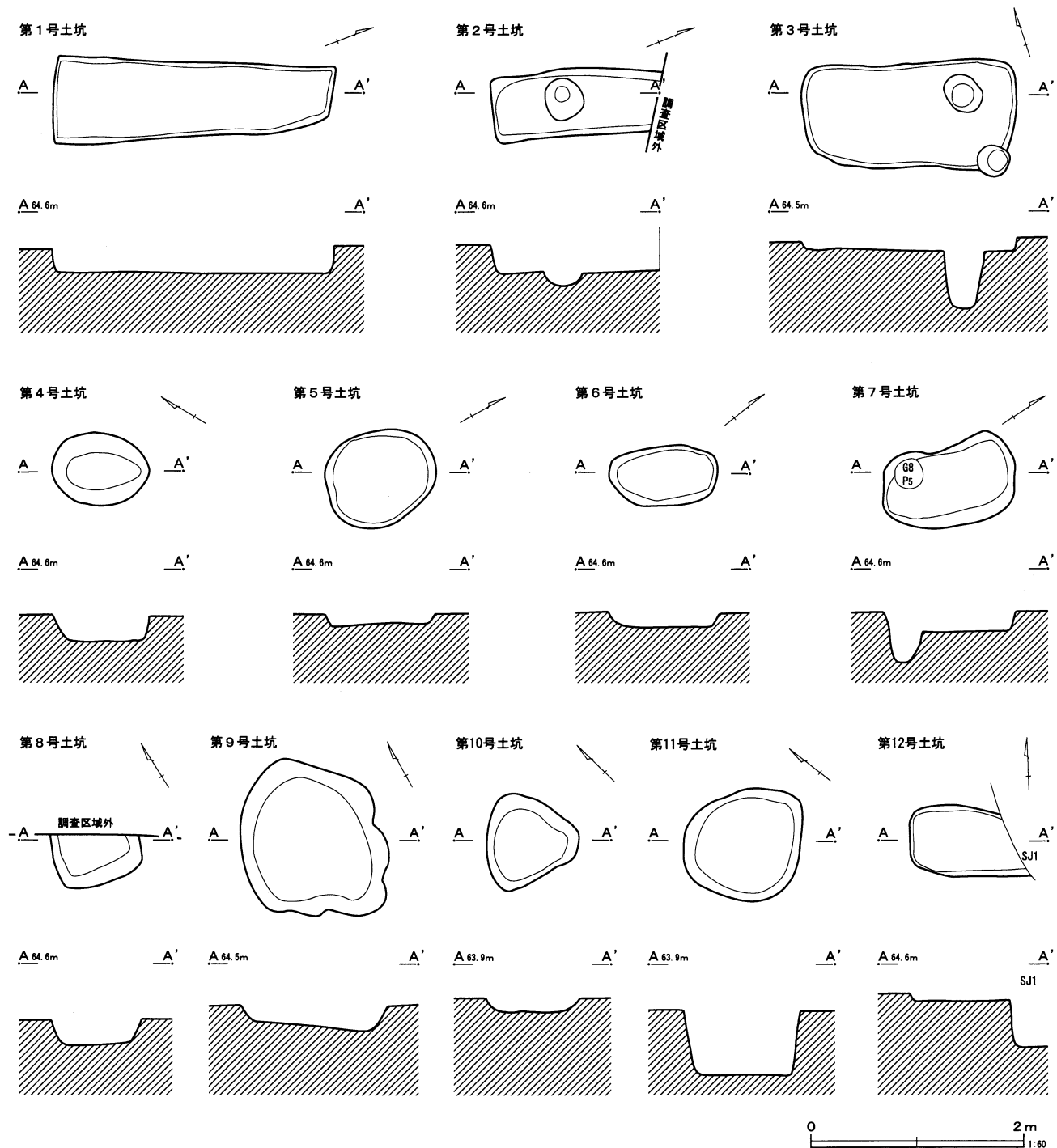
出土遺物が少なく図示できるものはないが、非掲載遺物の中に瓦質の焙烙の破片が認められることから近世以降に位置づけられる。また、本溝跡は調査区南側に広がる現在の集落の西側を画する市道の延長線上にあたることから、地境などの区画溝としての性格が考えられる。

かる。平面形態は長方形で、規模は長軸長1.58m以上、短軸長0.63m、深さ0.27mである。主軸方位はN-22°-Eを指し、南側に位置する第1号土坑と軸を揃えていることから、近世以降の芋穴と考えられる。遺物は出土しなかった。

第3号土坑 (第275図)

G-9グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長軸長2.00m、短軸長1.04m、深さ0.11mである。底面は概ね平坦であるが、小穴が2本認められる。主軸方位はN-70°-Wを指す。

遺物は第276図に図示した小型壺の頸部の破片

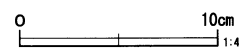
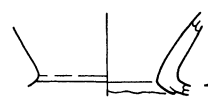


第275図 土坑

が出土している。小破片であり、遺構に伴うかは明確でない。

第4号土坑 (第275図)

G-8グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.90m、短径0.69m、深さ0.25mである。主軸方位はN-30°-Wを指す。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。



第276図 第3号土坑出土遺物

第95表 第3号土坑出土遺物観察表 (第276図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 小型壺	埋土	[4.2]		20	A・B・C・J	普通 橙5YR6/8	器面全体に風化磨耗

第5号土坑 (第275図)

G-8グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.05m、短径0.89m、深さ0.11mである。主軸方位はN-6°-Eを指す。

第6号土坑 (第275図)

G-8グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.00m、短径0.55m、深さ0.14mである。主軸方位はN-36°-Eを指す。

第7号土坑 (第275図)

G-8グリッドに位置する。平面形態は不定形で、規模は長軸長1.25m、短軸長0.79m、深さ0.19mである。主軸方位はN-21°-Eを指す。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

第8号土坑 (第275図)

F-8グリッドに位置し、北半部の大半が調査区域外にかかる。平面形態は方形系と推定され、規模は長径0.81m、短径0.52m以上、深さ0.24mである。主軸方位はN-75°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第9号土坑 (第275図)

F-8グリッドに位置し、第8号土坑に近接する。平面形態は不定形で、規模は長径1.42m、短径1.36m、深さ0.24mである。主軸方位はN-25°-Eを指す。底面はやや凹凸がある。

第10号土坑 (第275図)

F-7グリッドに位置する。平面形態は不定形で、規模は長径0.90m、短径0.86m、深さ0.13mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。

第11号土坑 (第275図)

D-5グリッドに位置する。平面形態は略円形で、規模は長径1.10m、短径1.05m、深さ0.60mである。主軸方位はN-37°-Wを指す。

第12号土坑 (第275図)

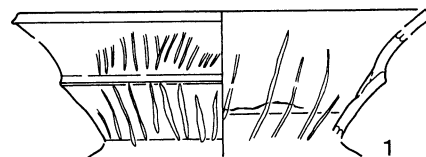
G-10グリッドに位置し、第1号住居跡の西壁を切っている。平面形態は長方形と推定される。規模は長軸長1.02m以上、短径0.67m、深さ0.07mである。主軸方位はN-87°-Wを指す。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

5. ピット

検出されたピットは33基を数える (第278図)。調査区西側の第3号溝跡と第4号溝跡に挟まれた空間に集中する。規模は径16~59cm、深さ5~97cmと幅が認められる。規模などの詳細については第97表に記した。

出土遺物はG-8グリッドのP10から口縁部にヘラミガキを施した二重口縁壺の破片が実測図示できたにすぎない (第277図)。

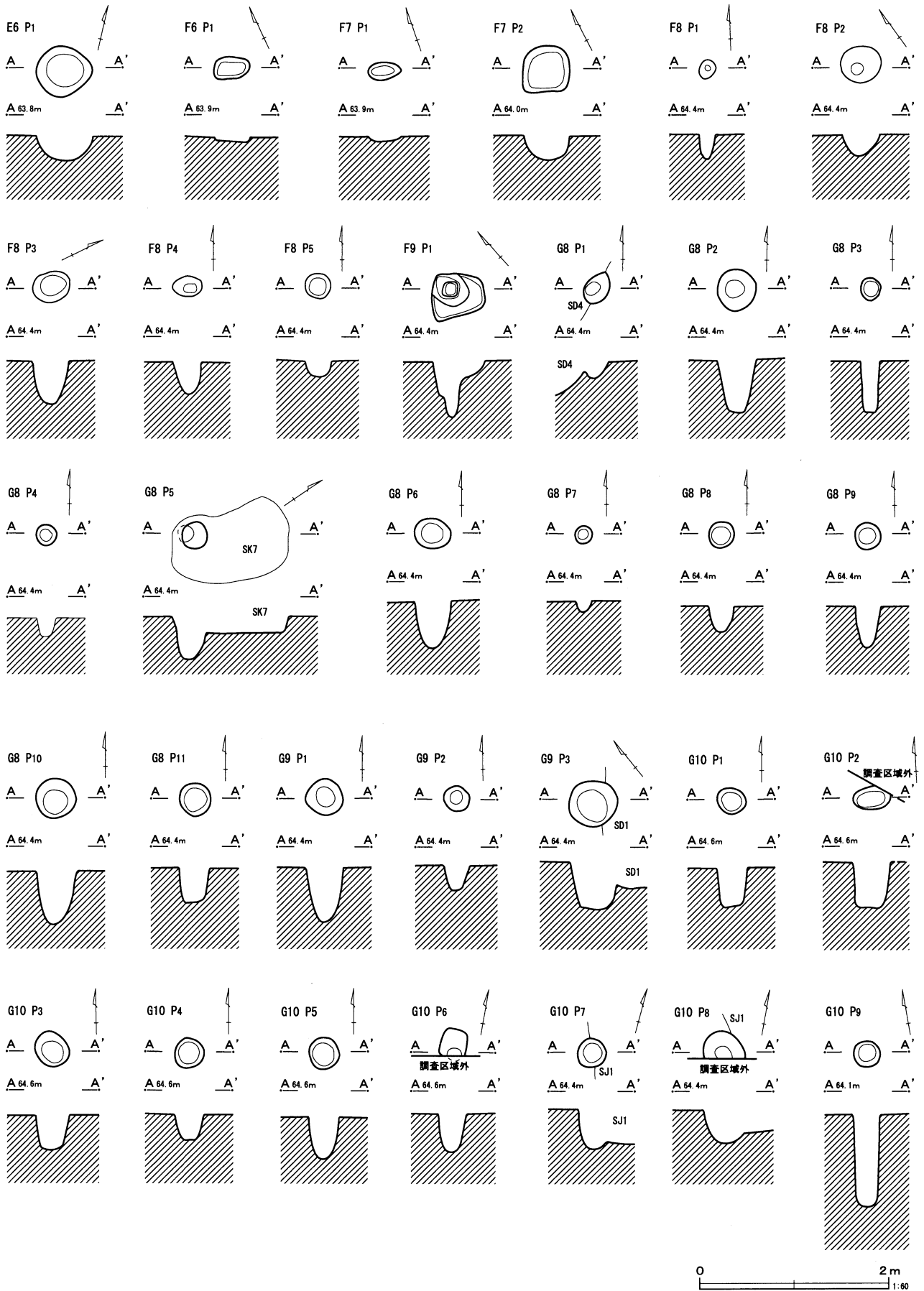
G8G P10



第277図 ピット出土遺物

第96表 ピット出土遺物観察表 (第277図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器 壺	G8グリッド P10 埋土	[5.5]		10	A・D・F・J	良好 橙5YR6/8	口縁部内外面ヘラミガキを施す



第278図 ピット

第97表 ピット一覧表

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
E-6	P 1	59	55	26	
F-6	P 1	36	24	5	
F-7	P 1	35	18	5	
F-7	P 2	48	48	25	
F-8	P 1	22	16	26	
F-8	P 2	43	39	23	
F-8	P 3	39	33	45	SD3
F-8	P 4	31	22	34	SD3
F-8	P 5	28	27	17	
F-9	P 1	56	48	59	
G-8	P 1	36	25	17	SD4
G-8	P 2	44	40	55	土師器
G-8	P 3	23	20	53	土師器
G-8	P 4	22	22	19	土師器
G-8	P 5	28	26	45	SK7
G-8	P 6	38	31	49	
G-8	P 7	18	18	11	

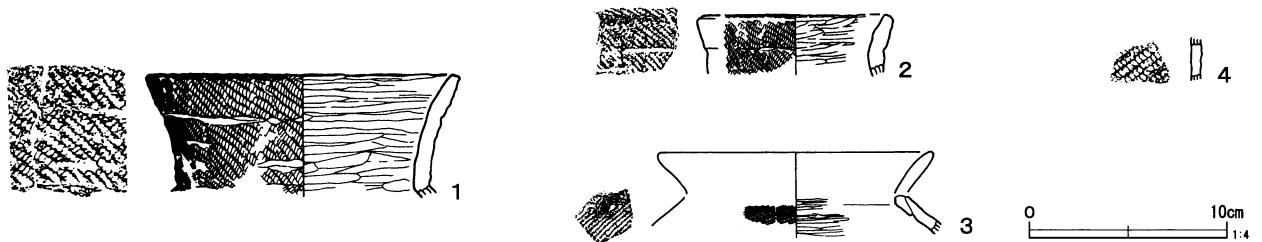
グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
G-8	P 8	27	26	26	
G-8	P 9	28	26	43	
G-8	P10	42	41	57	土師器
G-8	P11	35	34	36	
G-9	P 1	40	37	56	
G-9	P 2	26	26	25	
G-9	P 3	51	48	50	SD1
G-10	P 1	30	27	42	
G-10	P 2	40	24	47	
G-10	P 3	37	32	37	
G-10	P 4	32	32	27	
G-10	P 5	34	32	44	
G-10	P 6	30	27	40	土師器
G-10	P 7	30	30	42	SJ1
G-10	P 8	44	29	35	SJ1
G-10	P 9	28	28	97	SJ1

6. その他の遺物

古墳時代初頭の土師器を第279図に一括した。該期の遺構は検出されておらず、夏目遺跡で検出された弥生時代中期の第1号土坑以後の空白時期を埋める貴重な資料である。

1は口縁部に縄文帯、胴部にミガキを施す甕形土器である。口縁部外面に粘土紐接合痕を4段明瞭に残し、外面に縄文を施文し、内面は横位のミガキを丁寧に施す。周辺では神川町前組羽根倉遺跡、美里町羽黒山古墳群、本庄市(旧児玉町)塩

谷平氏ノ宮遺跡などで該期の土器が出土している。本例は吉ヶ谷式系土器として羽黒山古墳群出土例よりも新しい段階に位置づけられる。2は小型の甕形土器の口縁部破片である。1と同じく粘土紐接合痕を残し、口唇部と口縁部外面に縄文を施文し、内面にミガキを施す。3・4とも縄文を施文した小破片である。3は肩部文様帯に細縄文を横位施文した単口縁の甕形土器と推定される。4は甕形土器の胴部破片である。



第279図 古墳時代初頭の遺物

第98表 古墳時代初頭の遺物観察表 (第279図)

番号	種別	出土位置	口径器高	最大口径底	残存	胎土	焼成色調	備考
1	土師器甕	SD 6埋土	(15.4) [6.2]		40	A・B・E・F・J	良好 にぶい褐7.5YR5/4	口縁部外面粘土紐痕、縄文施文 口唇部縄文 内面ミガキ
2	土師器甕	SD 4埋土	(9.2) [3.1]		10	A・B・F・J	良好 明赤褐5YR5/6	口縁部外面粘土紐痕、縄文施文 口唇部縄文 内面ミガキ
3	土師器甕	SJ 2埋土			破片	A・B・F・J	良好 灰褐7.5YR4/2	頸部片 外面縄文施文 内面ミガキ
4	土師器甕	SJ 2カマド埋土			破片	A・B・F・J	良好 橙7.5YR6/6	外面縄文施文、内面ナデ

Ⅶ 調査のまとめ

今回報告した夏目・夏目西・弥藤次遺跡の調査成果としては、古墳時代中期におけるカマド導入期集落の様相が、一般的な竪穴住居跡だけでなく、玉作工房跡、大溝跡、道路跡、井戸跡などのまったく性格の異なる遺構群によって復元することが可能になったことである。

さらに、以前より注目されていた布留式系甕が大型住居からまとまって出土し、畿内地域との人やモノの交流の実態がより明瞭になった点が挙げられる。その他にも烏帽子形を呈する中空の炉支脚や高坏の脚部を転用した鞆羽口、大型砥石など

1. 夏目遺跡群の土器様相

I期 夏目遺跡23・27号住居跡、夏目西遺跡6号住居跡を指標とする夏目遺跡群成立期の土器群である(第280図1~18)。小型器台や台付甕などの古墳時代前期的な器種は既に組成から欠落し、まだ源初坏(中村1989・1999)や供膳器に相当する鉢や碗が定量で存在しない段階に該当する。

1の小型無頸壺は口縁部に一對の小孔を穿つ、和泉期から鬼高期前半に見られる特徴的な器種である。2・3・6は内斜口縁の碗で、口縁部形態に多様なあり方を示す。5は平底鉢で、韓式系土器の影響が指摘されている(坂野2007)。7~9は小型罎で、該期は8のように口径と胴部径が等しいものが主流である。10は罎形の小型壺で口縁部が大きく開き、胴部は球形に近い。11は小型高坏で、裾部が大きく開く特徴をもつ。12の高坏は脚部が中膨らみで古相を示す。14は鉢形の小型甕である。カマド出現以前の段階であり、大型甕の出土例は明確でない。18は折り返し口縁状の複合口縁壺で、頸部外面にハケメを残す。

時期は和泉I式期でも新相に相当し、5世紀前葉から中葉の年代と考えておきたい。上里町愛宕遺跡3・7号住居跡に併行する段階である。

の鍛冶関連遺物や滑石製模造品を製作した玉作工房跡など、集落内における手工業生産のあり方も「夏目遺跡群」(以下、夏目・夏目西・弥藤次遺跡を指す場合の総称として用いる)の性格を考える上で重要な情報を提供してくれた。

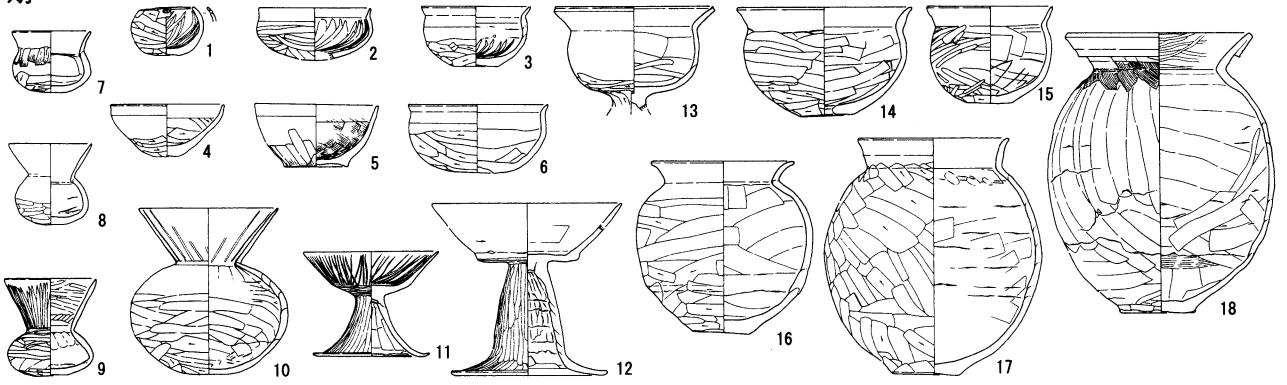
本章では、住居跡から出土した土器を中心に検討を行い、古墳時代中期から平安時代までをI期からⅢ期に時期区分し、その上で集落の時期的な変遷過程を提示する。最後に今回の調査で明らかにされた問題点を整理し、西富田遺跡群における夏目遺跡群の位置づけについて検討したい。

Ⅱ期 新興集落としての夏目遺跡群を代表する隆盛期の土器群である。住居跡群に明確な時期差を抽出し難いが、敢えて新相・古相に分ければ、夏目遺跡(以下遺跡省略)12・24号住居跡、夏目西1・7・15号住居跡が古相(第280図19~57)、夏目9号住居跡、夏目西2・4・9・21号住居跡が新相(第281図1~52)を示す。

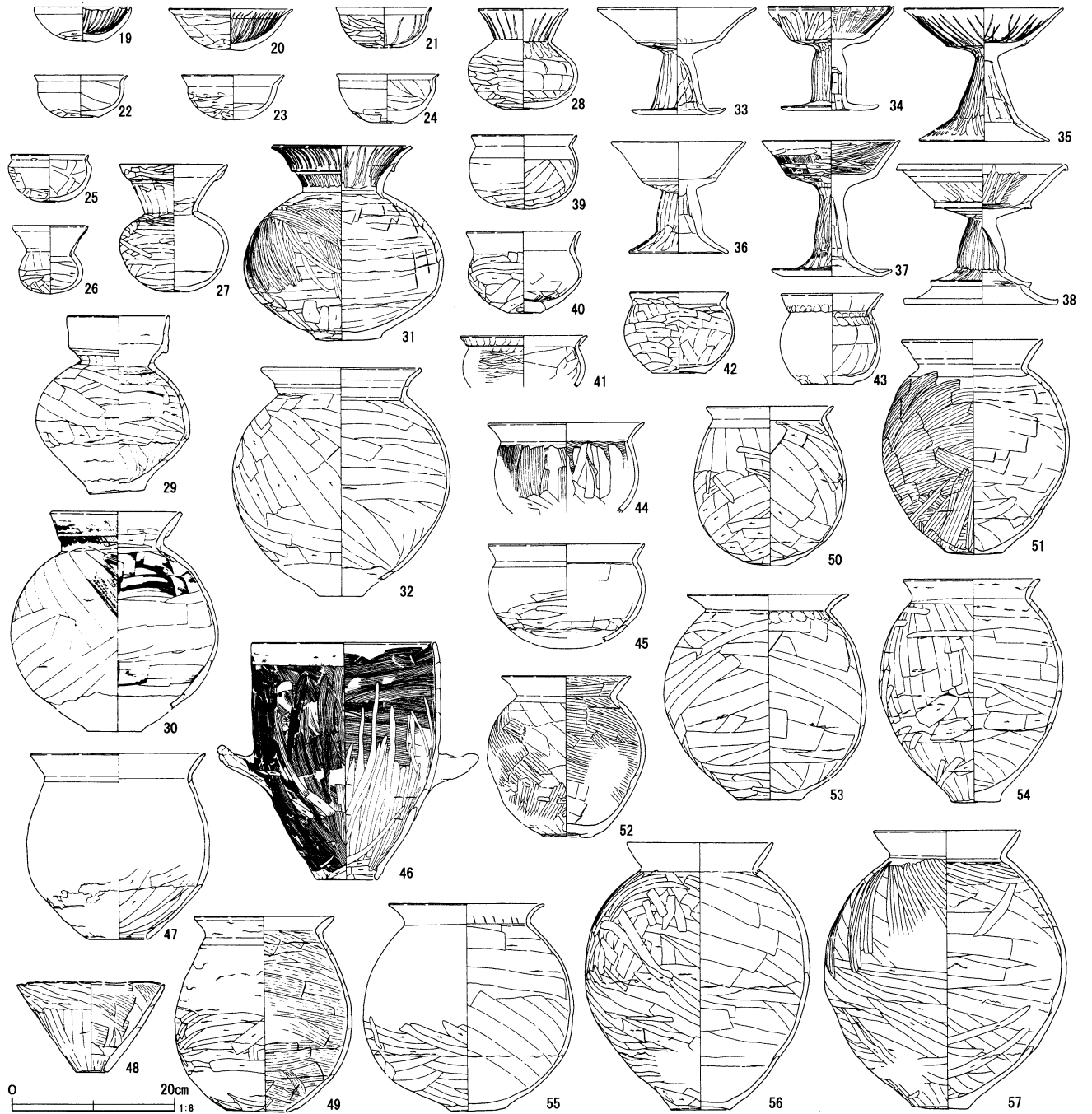
古相は、小さな平底を残す碗が主流で、口縁部が内湾気味の19と外反する20がある。21~25は体部が半球形の碗で、口縁部は緩やかに外反する。27は折り返し口縁状の小型壺で、須恵器隼の影響であろう。29は口縁部が長く直立する特徴的な壺で、非在地系のものである。30~32の壺は、30がやや退化した複合口縁壺、31が古相を残す二重口縁壺、32が有段口縁壺である。33~38は高坏で、裾部の形態が多様である。46・47・49は大型甕。46は須恵器や韓式系土器との関連が想起される角状把手をもつ深鉢形の甕、47・49は甕形の甕である。48は鉢形の小型甕。50~57は甕で、小型甕の出土が目立ち、51・52はハケ甕である。甕は球胴形と長胴化傾向のものが混在する。

新相は、坏・碗類が土器組成に定量を占めるよ

I 期

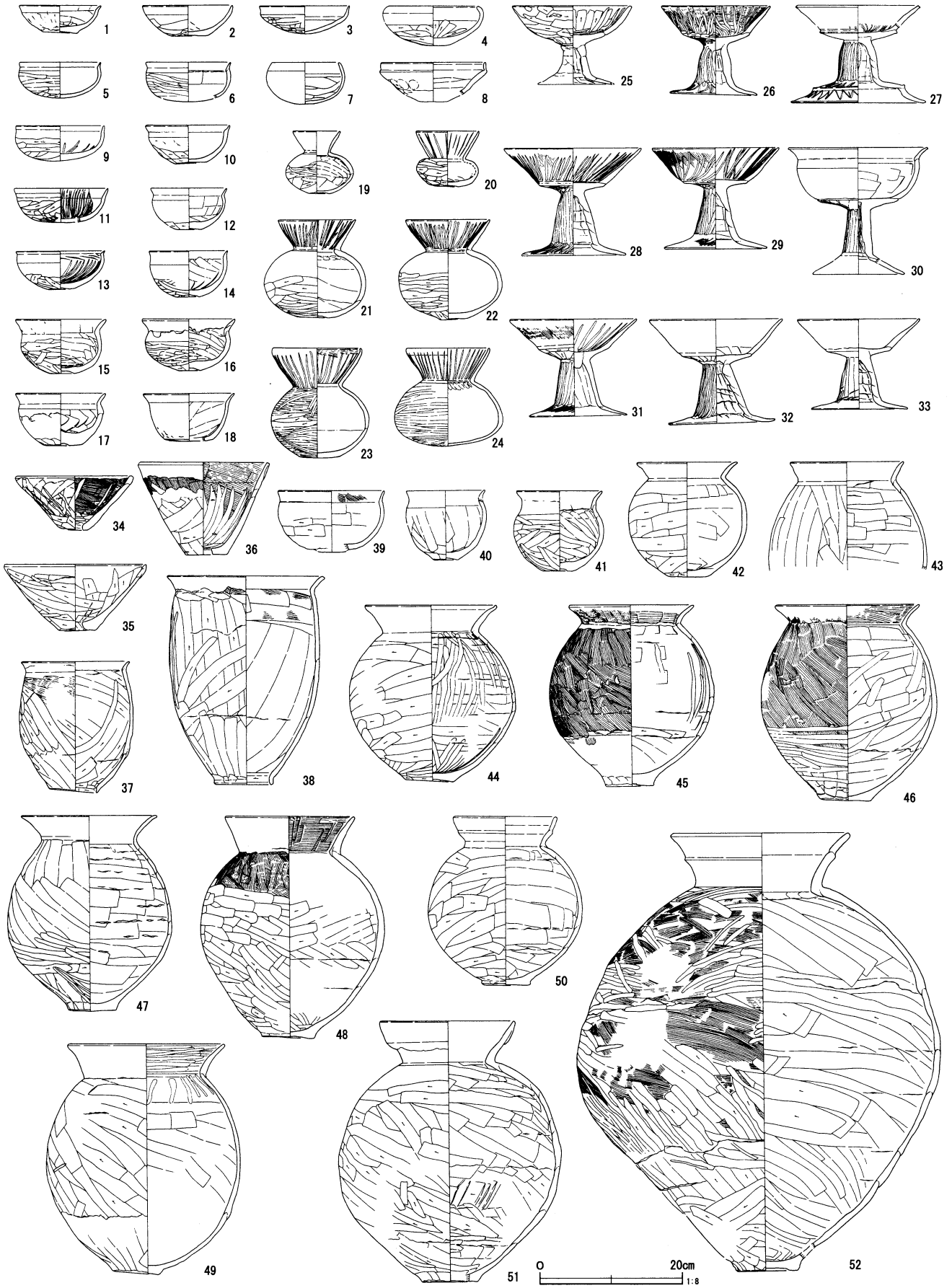


II 期 (古)



第280図 夏目遺跡 I・II期の土器群

II期 (新)



第281図 夏目遺跡II期の土器群

うになり、高坏や埴が増加する。30は脚付埴である。34～37は小型甗で、36は複合口縁に近い。大型甗には38の深鉢形が出現する。45・46はハケ甗、47・48はナデ甗で、48は胴部上半にハケメを残す。50は有段口縁壺、51は複合口縁の壺、52は超大型の有段口縁壺である。

時期は和泉Ⅱ式期前半を中心とし、5世紀中葉の年代に位置づけられる。本庄市諏訪遺跡30・32号住居跡、同薬師元屋舗（南大通り線内遺跡）遺跡12号住居跡に併行する。

Ⅲ期 夏目13号住居跡、夏目西3・8・11・13・14号住居跡、弥藤次1・2号住居跡が該当する（第282図1～48）。坏・椀類は土器組成で定量を占め、高坏や埴が減少する段階である。坏・埴類は1・2の浅身の半球形坏、4の深身の半球形坏、3の鉢形の坏、5～7、11～15の内斜口縁坏、8～10の須恵器模倣と考えられる口縁部が内屈ないし直立する坏などバラエティーがある。概して底部は小さな平底が多い。高坏は16の埴形高坏、17・18の和泉型高坏、19の有段坏がある。20～22は小型埴で体部が扁平化し、本期以降は激減する。20は口縁部に段を有するもので臚模倣であろう。埴形の小型壺は口縁部が長く伸びる。25は鉢形の小型甗。26～30は大型甗で、26の広口鉢形、27・30の深鉢形、28の甗形、29の壺形など多様な形態が出現する。31～34は鉢で、33は韓式系土器の影響の窺われる平底鉢、32・34の口縁部が短く屈曲した鉢は、35・36の布留式系甗とともに大型住居の夏目西14号住居跡から出土した。甗は40のように長胴化したものが本期に伴うか検討が必要であろう。38・39の胴部上半にハケメを残す甗は該期で消滅する。43～45は口唇部を面取りした広口の壺、48は大型の複合口縁壺で、口縁部に単位は不明であるが棒状浮文の貼付痕がある。

時期は和泉Ⅱ式期後半から終末に位置づけられる。5世紀後葉を中心とした年代であろう。本庄市諏訪遺跡49号住居跡、同東五十子城跡遺跡8号

住居跡に併行する段階である。

Ⅳ期 夏目25号住居跡、夏目2号井戸跡が該当する（第283図1～29）。該期は埴の急激な減少に特徴づけられる。土師器坏は定型化した須恵器坏蓋模倣坏は出土していないが、須恵器坏蓋を意識した口縁部と体部の境に段をもつもの（3・4）、群馬県域に広く分布する放射暗文の内斜口縁坏（11～14）、半球形坏（5・6）などバラエティーがある。18・19は和泉型高坏である。高坏は該期以降減少化傾向にある。20の脚付埴は短脚化したもので、該期でほぼ消滅する。21～23は直口壺で、22は口縁部の中程に沈線をめぐらす。27は口縁部が大きく外反する広口の有段口縁壺である。

本期は鬼高Ⅰ式期初頭に位置づけられ、5世紀末葉を中心とする年代に比定される。本庄市諏訪遺跡48号住居跡に併行する段階である。

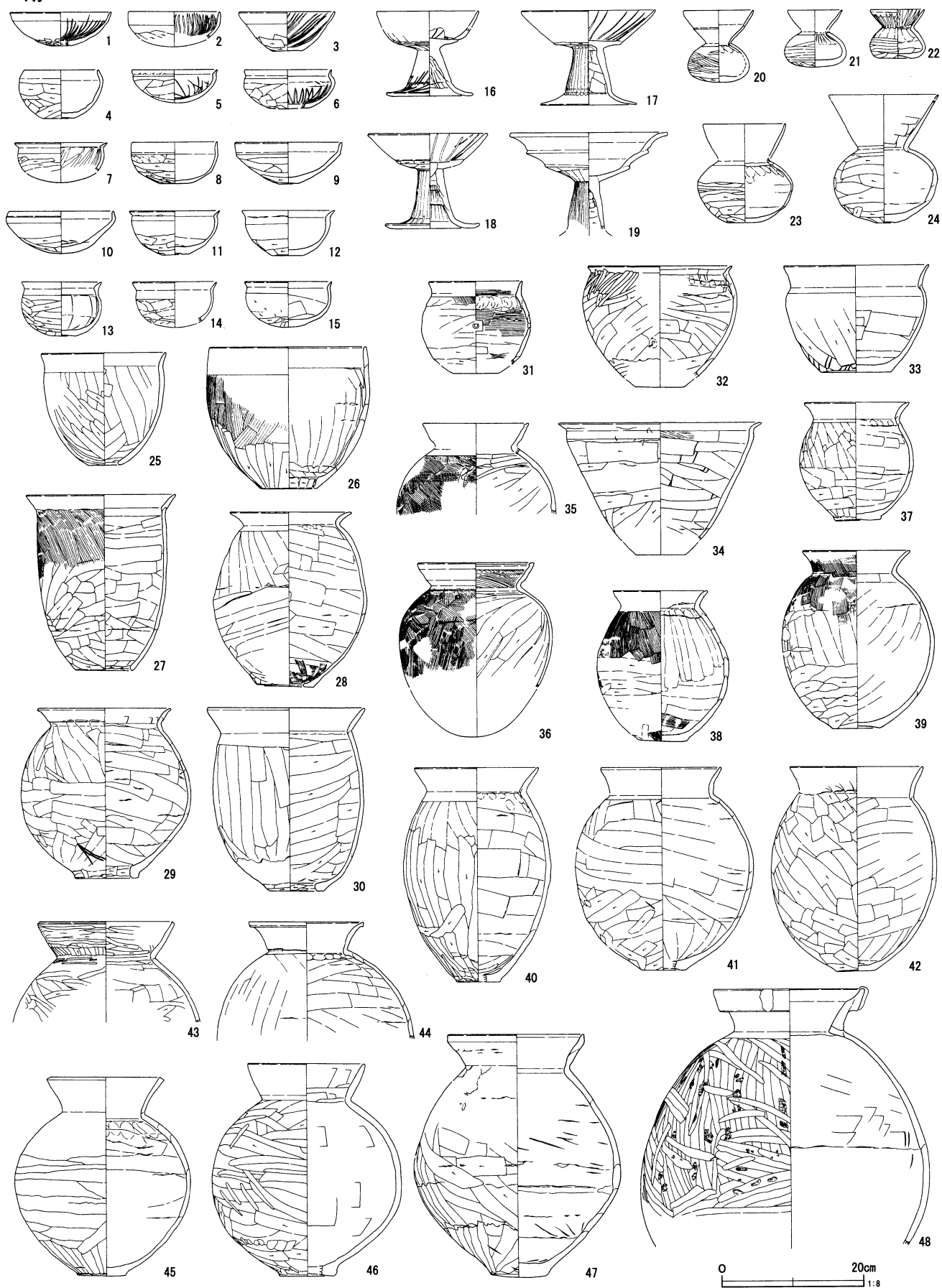
Ⅴ期 夏目3・5号住居跡を指標とする（第283図30～45）。土師器坏は典型的な須恵器坏蓋模倣坏の段階である。口縁部が直立し、口唇部は内削ぎ状に面取りを施す。夏目3号住居跡からは35～37の模倣坏を載せた短脚の鬼高型高坏がまとまって出土した。38は三方透かしをもつ須恵器高坏の脚部。胎土の特徴から藤岡窯産もしくは末野窯産であろう。40・41は小型壺に分類されるが、40は広口壺にしたほうが良い。42・43は甗で、42はやや長胴化の進行したもの、43はまだ球胴形に近いものである。44は広口の大型壺、45は有段口縁壺に分類されるが、45は長胴化が顕著で、この種の壺としては最終形態に近い。

時期は鬼高Ⅰ式期前半の6世紀初頭から前葉に位置づけられる。共伴した須恵器高坏はTK47型式からMT15型式併行であろう。

Ⅵ期 夏目6・16・17・19・20号住居跡を指標とする（第283図46～73）。

土師器坏は須恵器の坏蓋模倣坏が主体であるが、口縁部の直立するものは少なく、口縁部が外反するものが大半を占める。60は坏身模倣坏。

III期



第282図 夏目遺跡III期の土器群

62～66の高坏は口縁部が大きく外反する模倣坏を載せたタイプで、脚部は短脚で裾部が大きく反り返る。68は底部に円孔をもつ鉢形の小型甗。69は口縁部に沈線による段部を作出した壺。70は球形胴の甗もしくは甗形の甗となろう。71は口縁部に最大径をもつ長胴甗、72は最大径を胴部下半にもつタイプ、73は胴部中位に最大径をもつ。

時期は口縁部が外反する模倣坏が主体を占めることから鬼高Ⅰ式期後半の6世紀前葉から中葉に位置づけられる。

VII期 夏目西16・17・18号住居跡が該当する(第284図1～25)。土師器坏は坏蓋模倣坏(1～10)、内外面を黒色処理した有段口縁坏(11～15)と身模倣坏(16～18)が伴出する。19の高坏脚部は大型の長脚高坏であろう。20は鉢形の短頸壺である。22の鉢は小型甗の可能性もある。23・24は大型甗で、該期までは定量で残存する。25の甗は長胴化があまり顕著でない。

時期は6世紀後葉から末葉を中心とする年代で、本庄市下田遺跡43号住居跡に様相に近い。

VIII期 夏目4・15号住居跡、夏目西20号住居跡が該当する(第284図26～40)。

土師器坏は口径12cm前後の小型化した模倣坏と有段口縁坏がある。模倣坏は口縁部が外反して開き、体部が浅い。37・38は球形胴の丸甗ないし壺。39の甗は口縁部に最大径をもち、胴部の張りのほとんどない長胴化の最も進行したもので、胴部外面に縦ヘラケズリを施す。時期は7世紀前半を中心とし、本庄市薬師元屋舗遺跡36A号住居跡、同今井川越田遺跡181号住居跡に併行する。

IX期 夏目18号住居跡、夏目西12号住居跡が該当する(第284図41～70)。

土師器坏は模倣坏が主流で、口径9.8～11.7cmの小振りの一群を主体に、口径12.6～15.0cmの大振りの一群を伴う。さらに大振りの一群は浅身と深身に分けられる。51・52のように口縁部が直立し体部との境に段をもつものも残存するが、

有稜坏が目立つ。48は内面に黒色処理が施される。66は口縁部が大きく外反する皿。67は短脚高坏で、脚部は大きく開き、外面を縦方向にヘラケズリする。69・70の甗は胴部の長胴化が顕著で、外面調整が縦ヘラケズリから斜めヘラケズリに大きく変化し、鬼高的な長胴甗からの脱却が図られる。

時期は7世紀前半でも中頃に近い年代を想定しておきたい。本庄市古川端遺跡10号住居跡、同今井川越田遺跡5号住居跡に併行する段階である。

X期 夏目西5号住居跡が該当する(第284図71～75)。土師器坏は口径が3種に法量分化した北武蔵型坏(71～74)が出土している。体部にまだ丸味を残し、口縁部が弱く内屈する特徴から7世紀末葉から8世紀初頭頃に位置づけられる。上里町立野南遺跡2号住居跡に併行する段階である。

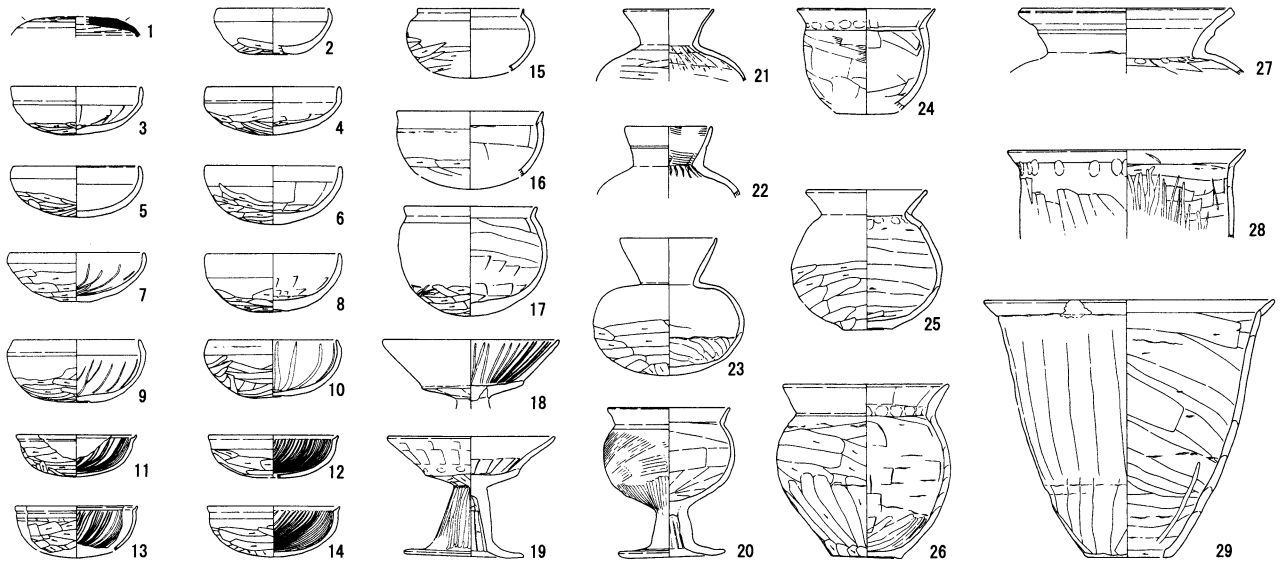
XI期 夏目西19号住居跡が該当する(第284図76～81)。76の須恵器坏は底部回転糸切離し後、外周及び体部下端に回転ヘラケズリを施すもので、南比企窯産である。77は口径16.2cmに復元される大型坏で、末野窯産である。土師器坏は扁平化した体部であるが丸味を残す78と平底に近い79がある。煮沸具は口縁部が「く」の字から「コ」の字へ移行する段階の武蔵型甗(80)と球形胴の武蔵型壺(81)がある。

時期は8世紀前半に位置づけられる。

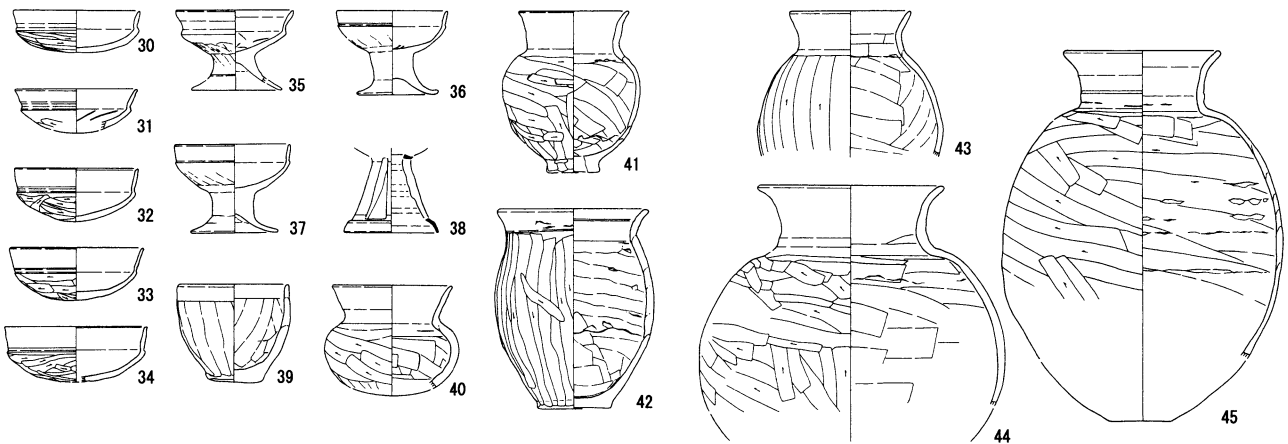
XII期 夏目21・22号住居跡が該当する(第284図82～103)。83～87の須恵器坏は底部糸切り離し未調整で、末野窯産。82の小振りの須恵器蓋が伴出する。土師器坏は平底の北武蔵型坏が主体である。底部に丸味を残すもの(88～90)、腰に張りを残すもの(91～95)、暗文坏(96・99)に分けられる。暗文坏は内底面に螺旋暗文、体部内面に放射暗文を施し、大・小がある。この他に口縁部が大きく外反する97の皿、98の深身の壺が伴う。煮沸具は「コ」の字状口縁甗と台付甗が見られる。

時期は8世紀末葉から9世紀初頭で、本庄市将監塚・古井戸遺跡H-155号住居跡に併行する。

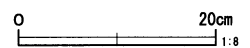
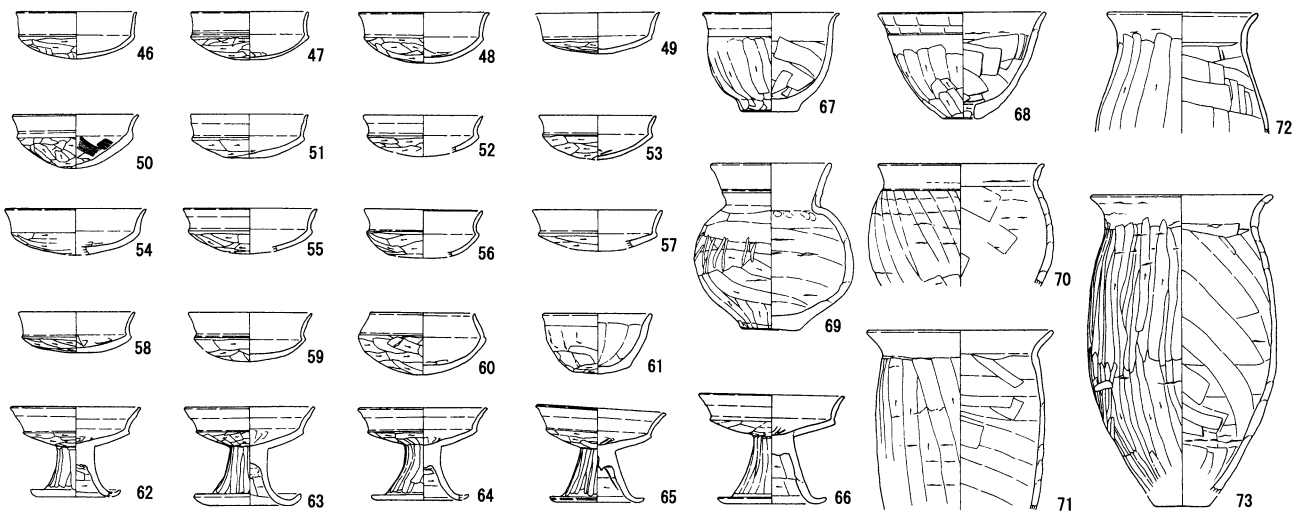
IV期



V期

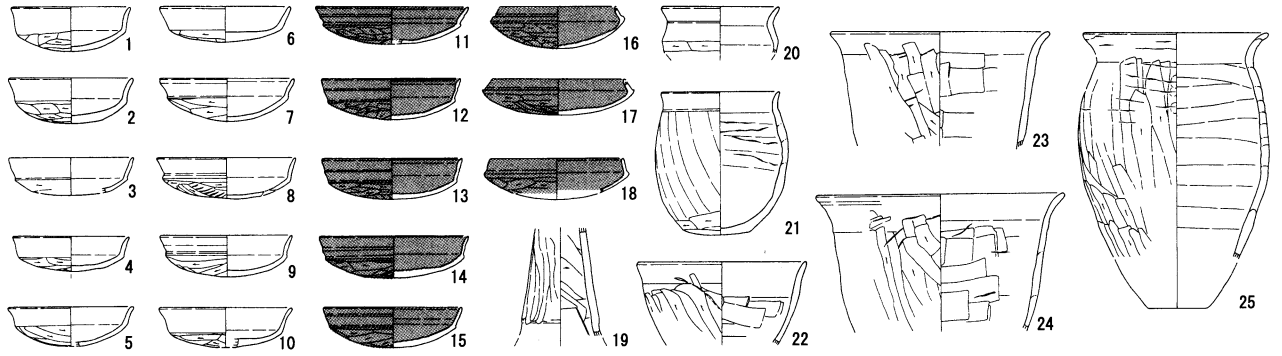


VI期

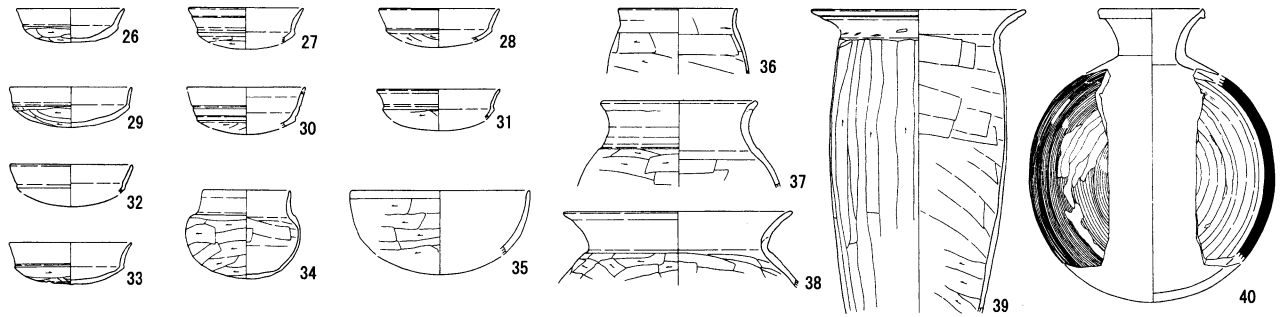


第283図 夏目遺跡IV~VI期の土器群

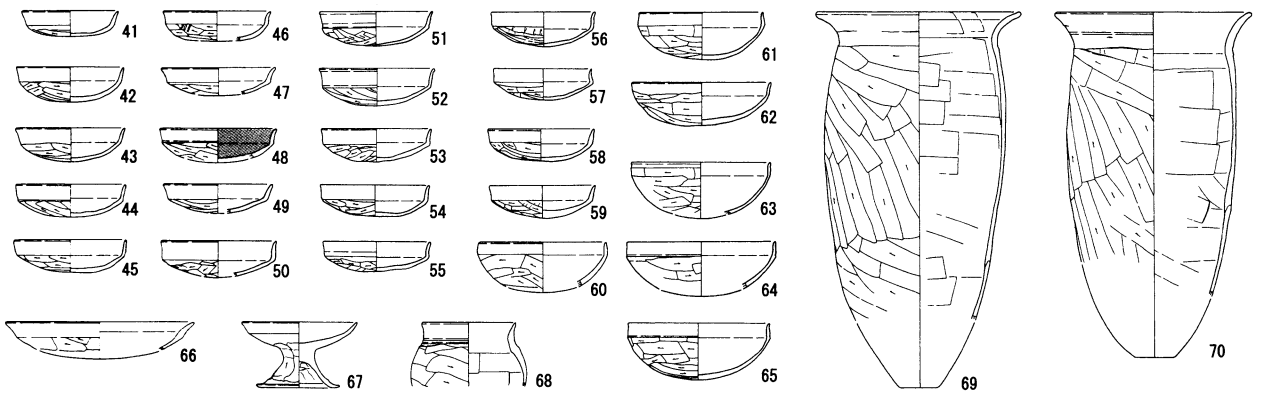
VII期



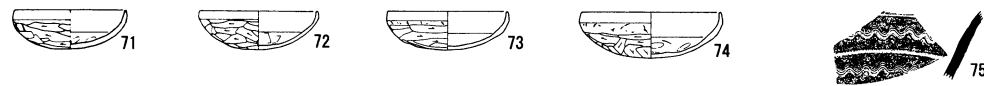
VIII期



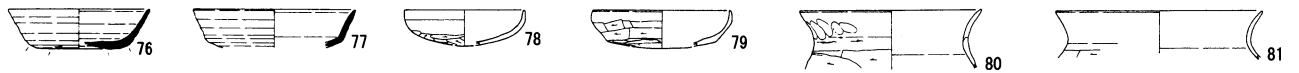
IX期



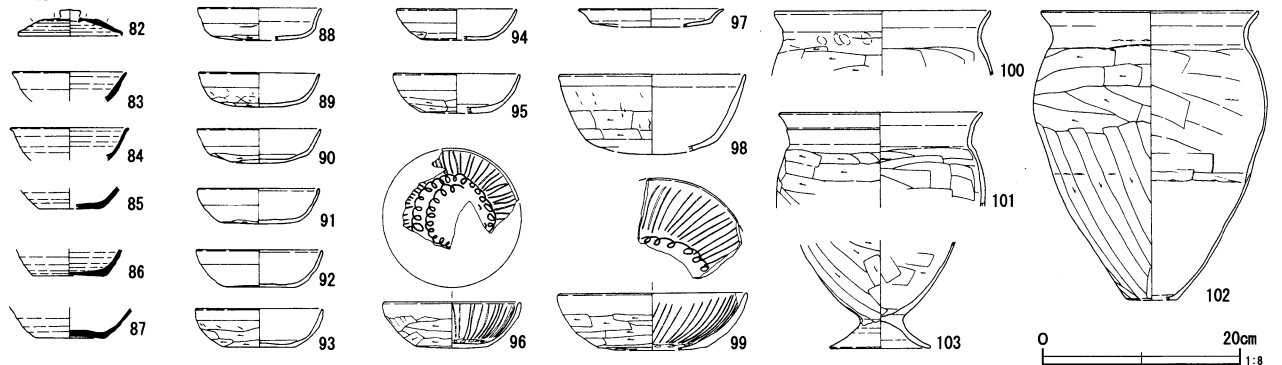
X期



XI期



XII期



0 20cm 1:8

第284図 夏目遺跡VII~XII期の土器群

2. 集落構成について

次に3遺跡を一つの集落として捉え直し、土器による時期区分を基にして、時期ごとに集落の変遷を概観したい。

ここでは集落形成に大きな影響を与えた大溝跡を境にして、居住域を東側居住域と西側居住域に分けて集落景観を復元する(第285・286図)。なお、大溝跡の性格については、開鑿時期、存続期間など多くの課題を残しているが、集落が本格的に活動を開始した段階から廃絶するまでの期間に集落形成の根幹的な機能を担っていたことを前提に論を進めることにする。

I期以前 今回の夏目遺跡の調査において弥生時代中期中葉の土坑が1基検出された。こうした断片的な要素を前史としながら、本庄台地の中央部が生活の舞台として利用されていたのが古墳時代前期にまで遡ることが、社具路遺跡南地区の調査によって明らかにされている(長谷川他1987)。また今回の弥藤次遺跡の調査でも吉ヶ谷式系の口縁部に輪積み痕を残す甕が出土しているほか、S字状口縁台付甕の破片なども散見され、該期には小規模な集落が散在するような状況にあったことが予想される。

I期 古墳時代中期の和泉I式期の中で西富田遺跡群内の各遺跡が集落形成を開始する。

夏目遺跡群では大溝跡を境として東側居住域に夏目7・8・23号住居跡の3軒、西側居住域に夏目26・27号住居跡、夏目西6号住居跡の3軒からなる2グループに大きく分かれる。さらに西側居住域では、空白地を挟んで集落域の西限を弥藤次6号溝跡が南北に画している。

本期はカマドが導入される以前の段階である。夏目8・23号住居跡で地床炉が検出されているほか、夏目西6号住居跡では南壁際に白色粘土を敷き詰め、その上に火床を有する通有の炉跡とは異なった加熱施設が検出され、炉からカマドへの過渡期的な様相を窺うことができる。

なお、東側居住域の夏目14号住居跡も重複関係から本期に属する可能性がある。

II期 本期に属する住居跡は、東側居住域の夏目9・10・12・24号住居跡の4軒の一群と、西側居住域の夏目西1・2・4・7・9・10・21号住居跡の7軒からなる一群、さらに単独で所在する夏目西15号住居跡の大きく3群から構成される。大溝跡の両側に住居跡群が広く展開している。当該期から次期にかけて夏目遺跡群のみならず、二本松遺跡や西富田新田遺跡などでも隆盛期を向えており、外的な要因による急速な進展を窺わせる。

本期は住居跡にカマドが導入された段階である。天井部や袖部などの上部構造のはっきりしないものや、住居内部に馬蹄形の袖部を構築し、高坏を支脚に転用したものなど、定型化以前の初期カマドが確認されている。

III期 本期に属する住居跡は、東側居住域の夏目2・13号住居跡と、西側居住域の夏目西3・8・11・13・14号住居跡、弥藤次1・2号住居跡の計9軒で構成される。II期から継続的に住居跡群が居住域全体に広がる。東側居住域では2軒と規模を縮小するが、西側居住域では一辺7mを越す大型住居跡の夏目西3号住居跡と夏目西14号住居跡の2軒を核として住居跡群がまとまり、さらに空白地を隔てて弥藤次1・2号住居跡の2軒が分布する。全体で4グループに区分される。とりわけ布留式系甕を出土した夏目西14号住居跡と夏目西11・13号住居跡の3軒からなる住居跡群は、住居内に大量に土器が廃棄されており、集落域の中で特別な空間域を形成する。

本期までは夏目西11号住居跡のように炉跡を有する住居が残存しており、炉とカマドが混在する段階と考えられる。ただし、次期からはほとんどの住居跡に造り付けカマドが普及する。

なお、遺物の出土していない夏目1・11号住居跡も重複関係からII・III期に位置づけられる。

IV期 本期に属する住居跡は大溝跡に接近する夏目25号住居跡の1軒のみである。一時的な衰退なのか、集落内部における別地点への居住域の移動によるものかは判然としないが、二本松遺跡では和泉II式期のうちで集落が終焉を向え、鬼高I式期まで継続していないことから、該期に集落の再編が大きく進行したのであろう。

また同時期の遺構として、この住居を切るように掘削された夏目2号井戸跡がある。砂礫層にまで達する素掘りの大型井戸である。一義的には清浄な水を安定的に獲得することを目的にしたものであるが、集落全体に関わる井泉祭祀の祭儀の場として重要な役割を果たしたことを予見させる。

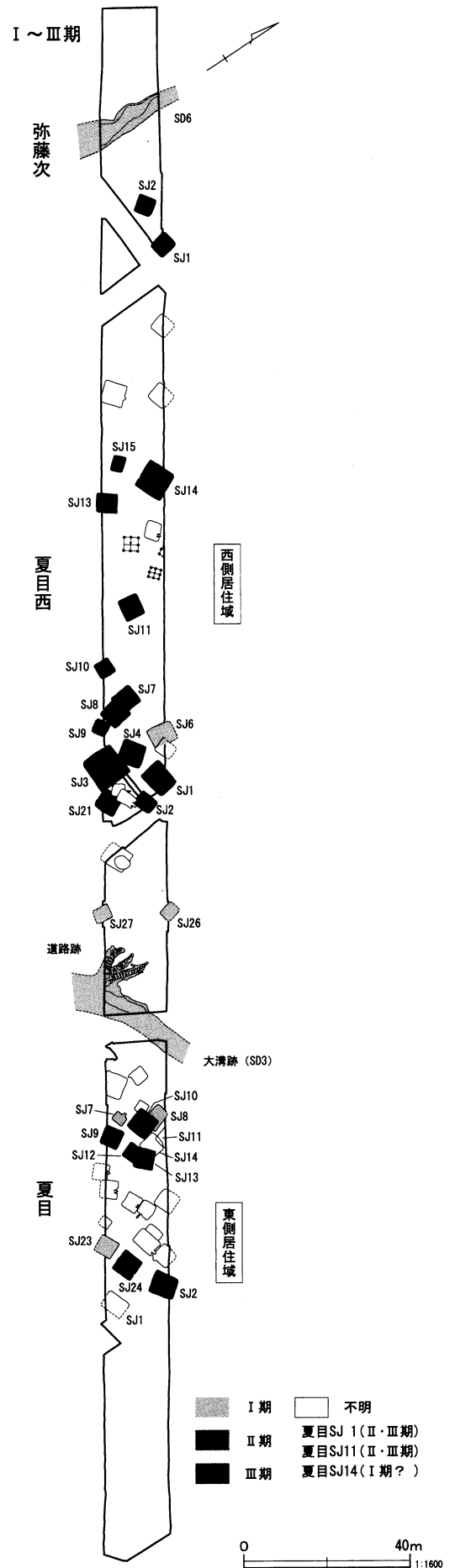
V期 該期を構成する住居跡は、東側居住域の夏目3・5号住居跡の2軒のみである。本期から次期のVI期までは東側居住域に住居跡の分布が偏在し、西側居住域は無住地化してしまう。

VI期 本期に属する住居跡は、東側居住域の夏目6・16・17・19・20号住居跡の5軒で構成され、住居跡数が増加に転じ、二度目のピークを向える。傑出した規模の住居は見られないが、安定的に住居が営まれる。

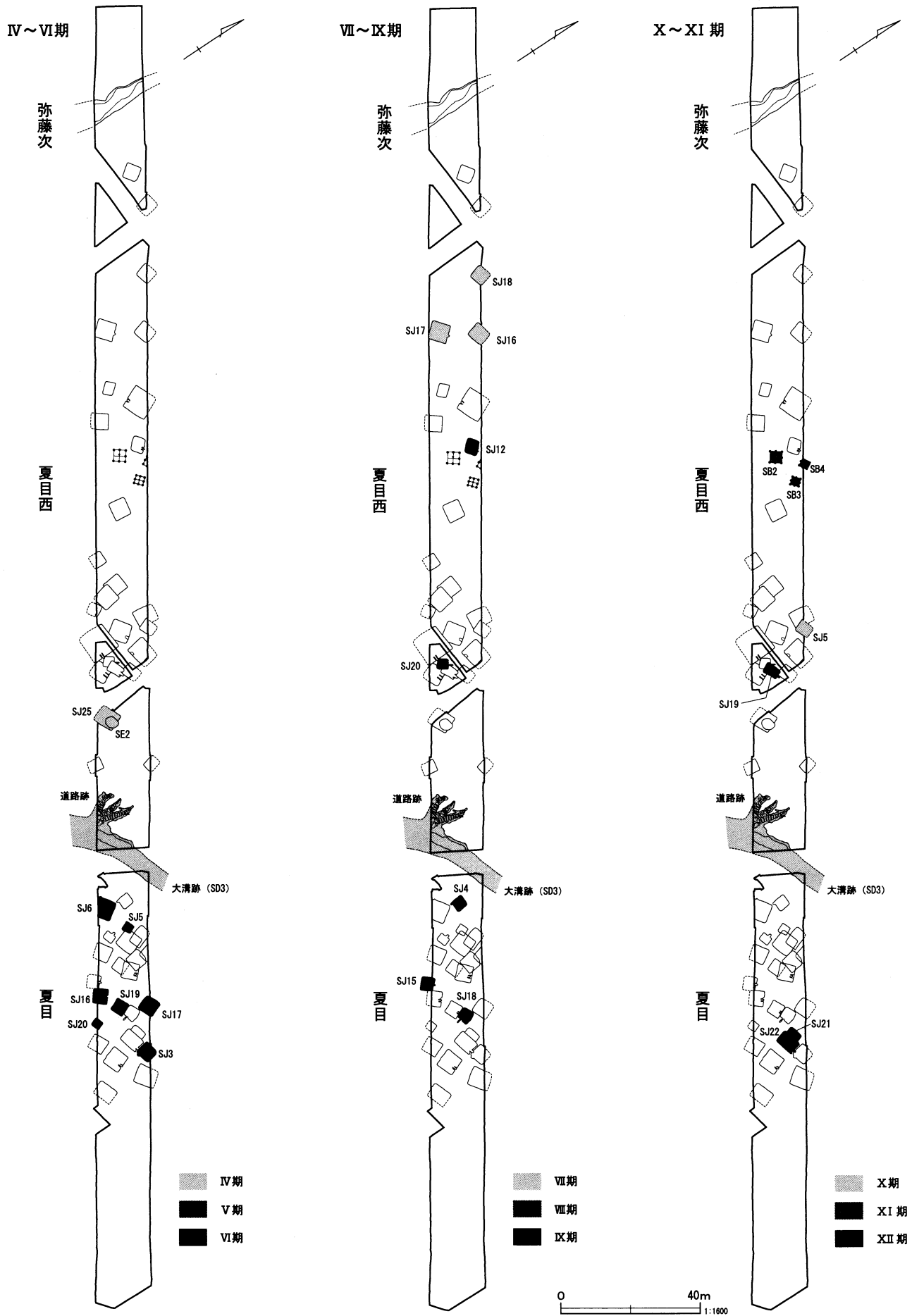
VII期 構成住居跡は夏目西16・17・18号住居跡の3軒で、前時期までの東側居住域から一変して、西側居住域の北西部に大きく偏在する。本期を境に集落規模の漸移的な縮小化と住居跡群の分散化・単独化が顕著となる。以後は連続的な集落展開を示すことはなく、時期的にもいくつかの断絶が認められるようである。

VIII期 該期の住居跡は、東側居住域の夏目4・15号住居跡と西側居住域の夏目西20号住居跡の3軒からなる。東側居住域では依然として大溝跡に近接して住居跡が営まれ、居住域の固定化が進行する。他方、西側居住域でも大溝跡の近辺に分布域が回帰する。概して小型の住居跡が多く、煙道部が細長く伸びたカマドが目につく。

IX期 本期に属する住居跡は、夏目18号住居跡、



第285図 夏目遺跡群の集落変遷 (1)



第286図 夏目遺跡群の集落変遷 (2)

夏目西12号住居跡の2軒で、東西居住域に1軒ずつ対極的な位置にある。夏目18号住居跡は南壁にカマドを付設するもので、カマド導入期以外ではきわめて例外的である。

X期 本期に属する住居跡は、西側居住域の夏目西5号住居跡のみである。北武蔵型坏を出土し、7世紀末葉から8世紀初頭に位置づけられる。西富田遺跡群全体を見回しても該期の住居跡は大幅に減少する。こうした動向は女堀川中流域の微高地上に所在する遺跡にも見ることができる。7世紀中葉を境に多くの遺跡が廃絶し、それに替わって本庄台地縁辺部の八幡太神南遺跡群や将監塚・古井戸遺跡などの大規模集落が7世紀後半に成立する動きに連動したものであろう。

XI期 該期は西側居住域にある夏目西19号住居跡と3棟の掘立柱建物跡から構成される。住居形態は縦長の長方形で、東壁にカマドを付設する。また北西にやや離れて3棟の掘立柱建物跡が、小

規模な高床式倉庫群を形成する。

XII期 該期に属する住居跡は、東側居住域の夏目21・22号住居跡の2軒である。長い空白期間を置いて再び東側居住域に住居跡が営まれる。両者は切り合い関係にあり、短期間のうちに建て替えられている。夏目22号住居跡は縦長の長方形プランで、東壁にカマドを付設する。時期は8世紀末葉から9世紀初頭に位置づけられ、該期を最後に住居跡は姿を消してしまう。

国道462号線建設に先立って調査された夏目遺跡でもほぼ同時期に集落の終焉を向えていることから、夏目遺跡群全体として衰退傾向にあることは確実である。また、社具路遺跡北地点でも軌を一にして集落としての終焉を向えており、集落の再編成が広く実施されたことが読み取れる。ただし、隣接する薬師元屋舗遺跡では10世紀前半まで規模を縮小しながらも集落が継続することが明らかにされている（増田1991）。

3. 問題点と今後の課題

最後に今回の調査で明らかになった二、三の事柄について、その意義とそこから提起される問題点について整理し、まとめにかえたい。

(1) 初期カマドについて

ここではカマド導入期前後のI期からIII期を中心に初期カマドの特徴について検討する。

I期はカマド出現以前の段階である。炉跡の位置は住居の中央ではなく、東壁寄りの支柱穴を結んだ線上に設置するものが多く、貯蔵穴は北東隅部あるいは南西隅部に設けられている。しかし、I期の新しい段階には、炉からカマドへの過渡期的な様相を示すカマド状遺構A類（夏目西6号住居跡）が出現する。その構造は、壁際に粘土を敷きつめ、その部分に炉を設けたもので、初現的なカマドの一形態として位置づけられよう。

II期は本格的なカマド導入期にあたる。該期の特徴としてカマドの形態的多様性が指摘される。

初期カマドの形態には、天井部や袖部などの上部構造の明確でないカマドB類、住居の壁面から離れ独立したカマドC類、住居壁面に袖部が直接繋がるカマドD類の3類型が認められる。さらに詳しく見ると、B類は床面よりも上位に火床面をもつB1類（夏目西1・15号住居跡）と中央部を浅く掘り窪め燃焼部としたB2類（夏目西4・10号住居跡）に細分される。またC類も馬蹄形状の袖部をもつC1類（夏目10号住居跡、夏目西7b住居跡）と不定形の袖部をもつC2類（夏目9号住居跡）があり、C類には高坏を転用した支脚が備えられる場合が多い。D類は煙道部を壁外に切り込まず、壁面の立ち上がりと一体化したもので夏目西21・24号住居跡が該当する。

III期にはカマドD類が引き続き構築されているが（弥藤次2号住居跡）、B・C類は姿を消す。それに替わって住居内に燃焼部を設けたカマドE類

が見られ、壁面から燃焼部が大きく離れるE1類（夏目13号住居跡、夏目西8号住居跡）と、壁面に接近するE2類（夏目西14号住居跡）に区分される。また後半には壁面を煙道部の立ち上がりを利用し、壁外に煙道部を切り込んだ完成された形のカマドF類（夏目西3号住居跡）が出現する。

一方、該期には夏目西11号住居跡のように炉をもつものが一部残っている可能性もあるが、次期以降はほとんどの住居跡にカマドが導入され、D類とF類がその主流を占める。

住居におけるカマドの位置関係は、北壁ないし東壁の右寄りに付設され、カマドの右脇に貯蔵穴を備えたものが全体の7割を占めており、カマド構築における一定の方向性が読み取れる。しかし、南壁ないし西壁にカマドを付設する事例も初期カマド段階では一定割合で存在している。

このように夏目遺跡群におけるカマドの受容は、5世紀中頃のI期後半にカマド状遺構A類が導入され、5世紀後半を中心とするII期に多様な構造のカマドB・C・D類が出現する。そしてIII期後半以降は定型的なカマドF類に収斂する様相が窺われた。

（2）大溝跡について

夏目遺跡の大溝跡は居住域を大きく二分し、集落の展開を大きく規制している。とりわけ西側居住域では大溝跡周辺への住居の進出はI期の2軒のみで、それ以降は不可侵状態であった。例外的に大溝跡に取り付く道路跡と夏目2号井戸跡があるにすぎない。これらから大溝跡の西岸エリアが集落全体の特別な共有空間（広場・協業・祭祀など）として機能していたことが容易に想定される。

大溝跡の性格については、西富田遺跡群が展開する本庄台地内部が比較的高燥な場所であり、生活用水を得ることが難しいことから、一般的な灌漑用排水路としての機能よりも、集落の生活用水を確保することを目的に人為的に開鑿された流路跡の可能性が高い。周辺に目を向けると本庄市教

育委員会が調査した夏目遺跡5号溝が、溝の規模や流下方向が一致していることから（長谷川他1985）、同一の流路跡である公算が強い（第6図）。その当否については今後の調査の進展を待たなければならないが、夏目遺跡群を貫流する大溝跡の存在は、本庄台地中央部に集落が進出するための前提条件の一つであったと考えられる。つまり、西富田遺跡群における和泉期の急進的な発展を支えた水利システムに関わる問題である。

本庄台地特有の自然現象に「久城水」と呼ばれる野水が知られる（水島1978）。過去の記録や低地帯の観察から台地中央部を流れる複数の流路跡の復元が試みられ、その流路跡と集落群の分布を重ね合わせると、概ね流路跡に沿うような形で集落域が展開していることが指摘されている（本庄市1986、増田1991・1997）。こうした集落を結ぶ流路跡の存在こそが、生産性が低いと考えられる台地内部に集落が進出し得た要因を解く鍵を握っているのであろう。

（3）井戸跡について

低地遺跡の発掘調査の進展により、古墳時代前期に遡る井戸跡の調査例が知られるようになってきた。しかし、古墳時代中期以降の井戸跡の調査例については管見に触れたものに本庄市川越田遺跡1号井戸跡が挙げられるにすぎない。古墳時代では、一般的にまだ地下水を意図的に利用しようとする意識が社会的には芽生えておらず、飲料水の多くは湧水などに依存していたと考えられる。

夏目2号井戸跡の存在は、湧水層を求めて硬く掘り難い礫層を掘削することによって、清浄な水を安定的に獲得することが可能になったことを意味する。首長居館として著名な群馬県三ツ寺I遺跡では、丸太材を削り抜いた井戸枠をもつ大型井戸を利用して首長によって神マツリが執り行われている。それとは直接的に対比できないが、集落全体に関わる祭祀行為に必要な装置として重要な役割を担っていたことは想像に難くない。埋土中

から多量に出土し土器群は、埋井儀礼に供された後に一括して投棄されたと見るべきであろう。

(4) 布留式系甕について

本庄市域における布留式系甕の出土例は、雌濠遺跡2号住居跡(坂野1988)、二本松遺跡17号住居跡(長谷川他1983)、夏目遺跡66号住居跡(長谷川1985)及び、本報告の夏目西14号住居跡の3遺跡4例が知られている。これらの遺跡は女堀川下流域の本庄台地中央部、直径1kmほどの狭いエリアに集中している。口縁部が大きく直線的に立ち上がり、胴部が長胴化し、器面のハケ調整もタテハケ後の肩部ヨコハケが省略され、不定方向の粗いハケが目立つ。おおよそ布留式期Ⅳ～Ⅴ併行期に位置づけられる(米田1991)。これらは胎土の特徴から在地で製作された可能性が高い。

既に指摘されているように、これらは畿内地域の布留式甕を在地で忠実に模倣したものであろう(坂野2007)。その受容のあり方は、畿内地域から土器の中に入った内容物が運ばれた搬入土器のような一過的なものではなく、土器作りの伝習が存在するような、世代をまたいだ期間をみこめる人的な往来によるものと想定される(西川1993・2003)。日常生活に用いられることの多い煮沸具に表された現象であることから、畿内地域に出自をもつ一定数の人が、夏目遺跡周辺にある期間居住していたことを暗示しているのではなかろうか。

(5) 滑石製模造品について

夏目西1号住居跡は滑石製模造品を製作した工房跡と推定した。その根拠としては、床面及び埋土下層から滑石の剝片と白玉未成品、及び成品が比較的まとまって出土したことと、その分布状況から住居内における作業空間の把握が可能なが挙げられる(第144図)。しかし、調査中に実施した住居跡埋土の土壌洗浄では微細なチップや剝片等の検出量が少なく、工房跡と認定するための必要条件を満たし得るのか、検討の余地を残す。

夏目西1号住居跡から出土した白玉未成品の組

成(第146・147図)は、1段階の形割品7点(23～29)、2段階の穿孔品5点(30～34)、2a段階の穿孔時欠損品53点(35～87)、2b段階の穿孔中途品5点(88～92)、3段階の穿孔後研磨品2点(93・94)で、これに完成品6点(95～100)が加わり合計78点を数える。このうち2a段階の75～87には穿孔前の研磨痕が観察され、形割後の粗研磨(1'段階)の工程の存在を示唆する。このように白玉未成品には各工程のものが含まれていることから、白玉の製作が集落内で行われていたことは間違いのないであろう。

この他に滑石製品の製作に関わる痕跡として、夏目西3号住居跡から出土した紡錘車の未成品と考えられる加工痕を残す原石(第154図28)や夏目西15号住居跡から鑿状工具による矢羽根状の切削痕を表裏両面に残す原石(第217図72)があり、集落内部で生産が行われていた証左となろう。

石製模造品の出土傾向について瞥見すると、白玉は夏目20・23・24・25号住居跡、夏目西1・4・11・13・14・17号住居跡、弥藤次2号住居跡の11軒から出土した。また、剣形模造品は夏目西3・7・21号住居跡、有孔円板は夏目西14号住居跡からそれぞれ出土している。鬼高期の住居跡である夏目20号住居跡と夏目西17号住居跡を除くと、すべて和泉期の住居跡に集中している。

断片的であるため不明な点も多いが、集落全体における石製模造品の出土傾向と工房跡の様相を考え合わせると、その生産規模や需給形態について、和泉期を中心に自給的な集落内消費程度の小規模なものであったと考えておきたい。

以上、夏目・夏目西・弥藤次遺跡の調査を通して明らかにされた問題点について整理してきた。

夏目遺跡群の性格を考える上で、生産性の低い台地中央部になぜ集落が成立したのか、その契機となった歴史的背景の解明が今後の大きな課題である。そのためには水田経営以外に生産基盤(畑作など)が求められるのか、灌漑用排水や生活用

水といった水利の問題、布留式系甕に象徴される
畿内地域からの人々（渡来人）の移住の問題、さ
らには新来の技術を含む手工業生産（鍛冶・玉作・
ガラス製品など）や馬匹生産との関わりなどの個
別研究の積み重ねが必要であろう。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 1988『将監塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 磯野治司 1999『庚塚遺跡』北本市埋蔵文化財調査報告書第8集 北本市教育委員会
- 太田博之 2000「古墳時代の北武蔵における渡来系集団の動向」『考古学ジャーナル』No.459 ニューサイエンス社
- 大橋信弥 1978「支脚形土製品の系譜」『古代研究』17 元興寺文化財研究所考古学研究室
- 柿沼幹夫他 1979『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集 埼玉県教育委員会
- 恋河内昭彦 1995『飯玉東Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴詩・毛無し屋敷・石橋』児玉町文化財調査報告書第17集 児玉町教育委員会
- 恋河内昭彦 1996『辻堂遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第19集 児玉町教育委員会
- 小久保徹他 1978『東谷・前山2号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会
- 駒見和夫 1984「古代における炉とカマドー北武蔵での検討を中心として」『信濃』第36巻第4号 信濃史学会
- 坂本和俊 1984「Ⅲ 埼玉県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
- 笹森紀己子 1982「かまどの出現の背景」『古代』第72号 早稲田大学考古学会
- 末木啓介 1994「埼玉県におけるカマド導入期の様相ーカマド、大形甕、坏の形態を中心として」『研究紀要』第11号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木徳雄 1996「古代北武蔵の開発と集落ー埼玉県北部の灌漑方式の変化を中心にー」『月刊文化財』11月号 No.398
- 高久健二 2003「埼玉県における竈の導入・定着過程と器種組成変化に関する一考察ー本庄台地を中心にして」『古墳時代東国における渡来系文化の受容と展開』専修大学文学部
- 高橋一夫 1991「集落研究に関する二、三の覚書」『古代学研究』第125号 古代学研究会
- 瀧瀬芳之他 1997『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 立石盛詞他 1982・1983『後張ー本文編・図版編Ⅰ・Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15・26集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富田和夫他 1985『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富田和夫 2002『熊野遺跡（A・C・D区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中村倉司 1989「関東地方における竈・大形甕・須恵器出現時期の地域差」『研究紀要』第6号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中村倉司 1999「埼玉県における5世紀代の土器ー和泉式土器の行方ー」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- 西川修一 1993「関東における布留系土器について」『庄内式土器研究Ⅳ』庄内式土器研究会
- 西川修一 2003「関東地方における古墳出現期～前期の近畿系土器」『初期古墳と大和の考古学』学生社
- 長谷川勇他 1983『二本松遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集1分冊 本庄市教育委員会
- 長谷川勇他 1984『本庄遺跡群発掘調査報告書ー夏目遺跡・三空山古墳 三空山7号墳ー』本庄市埋蔵文化財調査報告書第6集 本庄市教育委員会
- 長谷川勇他 1985『夏目遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集2分冊 本庄市教育委員会
- 長谷川勇他 1986『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅲー社具路遺跡・三空山1号～6号墳ー』本庄市埋蔵文化財調査報告書第8集 本庄市教育委員会
- 長谷川勇他 1987『社具路遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集3分冊 本庄市教育委員会
- 坂野和信・富田和夫 1996「飛鳥時代の関東と畿内ー北関東における7世紀の土器様相ー」『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』

- 坂野和信 1988「竈導入期の土器」『本庄市立歴史民俗資料館紀要』第2号 本庄市立歴史民俗資料館
- 坂野和信 2007『古墳時代の土器と社会構造』雄山閣
- 本庄市 1976『本庄市史』資料編 本庄市史編集室
- 本庄市 1986『本庄市史』通史編I 本庄市史編集室
- 増田一裕 1987『東富田遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第10集 本庄市教育委員会
- 増田一裕 1987『南大通り線内遺跡発掘調査報告書I』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集第1分冊 本庄市教育委員会
- 増田一裕 1989『南大通り線内遺跡発掘調査報告書II』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集第2分冊 本庄市教育委員会
- 増田一裕 1991『南大通り線内遺跡発掘調査報告書III』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集第3分冊 本庄市教育委員会
- 増田一裕 1996『社具路遺跡第9地点発掘調査報告書』本庄市遺跡調査会報告第5集 本庄市遺跡調査会
- 増田一裕 1997『市内遺跡発掘調査報告書～西富田地区編～』本庄市埋蔵文化財調査報告書第22集 本庄市教育委員会
- 水島治平 1978「久城堀・女堀・九郷用水堀—古代・中世の賀美・児玉郡をめぐって—」『本庄市史拾遺』第20号 本庄市史編集室
- 森原明廣 1990「関東地方におけるカマド初現をめぐって」『研究紀要6』山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財センター
- 山口正憲 2000「古墳時代中期の有段高坏について」『青山考古』第17号 青山考古学会
- 米田敏幸 1991「土師器の編年 1 近畿」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器 雄山閣
- 和久裕昭他 2004『社具路遺跡—第4地点—』本庄市遺跡調査会報告第7集 本庄市遺跡調査会
- 和久裕昭他 2004『社具路遺跡—第13地点—』本庄市遺跡調査会報告第10集 本庄市遺跡調査会

図出典

第280図 夏目遺跡I・II期の土器群

- I期 夏目SJ23：2・3・7～9・11・12・14～18 夏目SJ27：5・10 夏目西SJ6：1・4・6・13
- II期(古) 夏目SJ12：42 夏目SJ24：27・40・41・45・51 夏目西SJ1：19～24・44・47 夏目西SJ7：26・39・52 夏目西SJ15：25・28～38・43・46・48～50・53～57

第281図 夏目遺跡II期の土器群

- II期(新) 夏目SJ9：2・5・6・10・12・17・23・24・31・32・36・38・39・42・43・47・50 夏目西SJ2：11 夏目西SJ4：3・7・8・13・14・33・45・49 夏目西SJ9：18・20・40 夏目西SJ21：1・4・9・15・16・19・21・22・25～30・34・35・37・41・44・46・48・51・52

第282図 夏目遺跡III期の土器群

- III期 夏目SJ13：42・43 夏目西SJ3：1・29 夏目西SJ8：3・8・47 夏目西SJ11：11・12・19・20・26・30・40・41・45・46・48 夏目西SJ13：13・16・23・24 夏目西SJ14：2・4～6・9・10・14・15・17・18・21・22・27・28・31～39・44 弥藤次SJ1：25 弥藤次SJ2：7

第283図 夏目遺跡IV～VI期の土器群

- IV期 夏目SJ25：1・2・5・10・15・16・18・21・28 夏目SE2：3・4・6～9・11～14・17・19・20～27・29
- V期 夏目SJ3：31～43・45 夏目SJ5：30・44
- VI期 夏目SJ6：46～50・62～65・67～69 夏目SJ16：51～54・71 夏目SJ17：55～57・72 夏目SJ19：58・59・61・70・73 夏目SJ20：60・66

第284図 夏目遺跡VII～XII期の土器群

- VII期 夏目西SJ16：11・16・17・19・20・22・23・25 夏目西SJ17：1～9・12～14・18・21・24 夏目西SJ18：10・15
- VIII期 夏目SJ4：26・27・29・30・35・40 夏目SJ15：32～34・36・37・39 夏目西SJ20：28・31・38
- IX期 夏目SJ18：41～48・60・66～68 夏目西SJ12：49～59・61～65・69・70
- X期 夏目西SJ5：71～75
- XI期 夏目西SJ19：76～81
- XII期 夏目SJ22：82～102

第99表 写真図版遺物番号対応表
【夏目遺跡】

図版48	第1号土坑出土弥生土器
1	第1号土坑(第118図1)
2	第1号土坑(第118図2)
3	第1号土坑(第118図3)
4	第1号土坑(第118図4)
5	第1号土坑(第118図5)
6	第1号土坑(第118図6)
	第1号土坑出土石器
7	第1号土坑(第119図8)
8	第1号土坑(第119図7)
図版49	溝跡出土遺物
1	第12号溝跡(第108図2)
2	第11号溝跡(第108図3)
3	第11号溝跡(第108図5)
4	第11号溝跡(第108図4)
5	第14号溝跡(第108図7)
6	第14号溝跡(第108図8)
7	第14号溝跡(第108図9)
8	第15号溝跡(第108図13)
9	第16号溝跡(第108図14)
	第1号井戸跡出土遺物
10	第1号井戸跡(111図1)
11	第1号井戸跡(111図2)
12	第1号井戸跡(111図3)
13	第1号井戸跡(111図4)
図版51	
1	第23号住居跡(第82図66)
2	第23号住居跡(第82図67)
3	第23号住居跡(第82図68)
	土製品(1)
4	第9号住居跡(第45図38)
5	第15号住居跡(第58図9)
6	第24号住居跡(第86図19)
	土製品(2)
7	第23号住居跡(第81図52)
8	第23号住居跡(第81図53)
9	第2号井戸跡(116図40)
10	第2号井戸跡(116図41)
	磨製石鏃
11	石器 磨製石鏃(第139図3)
図版52	第23号住居跡出土白玉
1	第23号住居跡(第81図54)
2	第23号住居跡(第81図55)
3	第23号住居跡(第81図56)
4	第23号住居跡(第81図57)
5	第23号住居跡(第81図58)
6	第23号住居跡(第81図59)
7	第23号住居跡(第81図60)
8	第23号住居跡(第81図61)
9	第23号住居跡(第81図62)
10	第23号住居跡(第81図63)
11	第23号住居跡(第81図64)
	第20・24・25号住居跡出土玉類
12	第20号住居跡(第69図5)
13	第20号住居跡(第69図6)
14	第20号住居跡(第69図7)
15	第25号住居跡(第88図18)
16	第24号住居跡(第86図20)
17	第24号住居跡(第86図21)
18	第24号住居跡(第86図22)
19	第24号住居跡(第86図23)
20	第24号住居跡(第86図24)
21	第24号住居跡(第86図25)
	砥石・磨石
22	第11号溝跡(108図6)
23	第1号井戸跡(111図5)
24	第15号住居跡(第58図8)

	第3号住居跡出土編物石
25	第3号住居跡(第29図19)
26	第3号住居跡(第29図20)
27	第3号住居跡(第29図21)
28	第3号住居跡(第29図22)
	第6号住居跡出土編物石
29	第6号住居跡(第35図15)
30	第6号住居跡(第35図16)
31	第6号住居跡(第35図17)
	第9号住居跡出土編物石
32	第9号住居跡(第45図34)
33	第9号住居跡(第45図35)
34	第9号住居跡(第45図36)
	第25号住居跡出土遺物
35	第25号住居跡(第88図17)
	第14号溝跡出土遺物
36	第14号溝跡(第108図12)

【夏目西遺跡】

図版126	須恵器
1	第5号住居跡(第160図5)
2	第12号住居跡(第183図18)
3	第14号住居跡(第204図136)
4	第17号住居跡(第222図22)
5	第17号住居跡(第222図23)
6	第19号住居跡(第228図4)
7	第19号住居跡(第228図8)
8	第1号溝跡(第251図1)
9	第1号溝跡(第251図2)
10	第3号溝跡(第251図4)
	陶器
11	第3号溝跡(第251図3)
12	第6号溝跡(第251図7)
13	第6号溝跡(第251図8)
14	第6号溝跡(第251図9)
15	第6号溝跡(第251図10)
16	第6号溝跡(第251図11)
図版127	土製品
1	第14号住居跡(第205図160)
2	第17号住居跡(第223図47)
3	第21号住居跡(第240図53)
4	第14号住居跡(第205図159)
5	第14号住居跡(第205図158)
6	第14号住居跡(第205図139)
7	第1号住居跡(第145図21)
8	第17号住居跡(第223図46)
9	第17号住居跡(第223図45)
10	第17号住居跡(第223図43)
	石製品
11	第14号住居跡(第205図140)
12	第3号住居跡(第154図30)
13	第3号住居跡(第154図29)
14	第3号住居跡(第154図31)
15	第11号住居跡(第179図44)
16	第7号住居跡(第165図25)
17	第21号住居跡(第240図51)
18	第21号住居跡(第240図50)
19	第7号住居跡(第165図24)
20	第15号住居跡(第217図73)
図版128	第1号住居跡出土石製品(1)
1	第1号住居跡(第146図23)
2	第1号住居跡(第146図24)
3	第1号住居跡(第146図25)
4	第1号住居跡(第146図26)
5	第1号住居跡(第146図27)
6	第1号住居跡(第146図28)
7	第1号住居跡(第146図29)
8	第1号住居跡(第146図30)

9	第1号住居跡(第146図31)
10	第1号住居跡(第146図32)
11	第1号住居跡(第146図33)
12	第1号住居跡(第146図34)
13	第1号住居跡(第146図35)
14	第1号住居跡(第146図36)
15	第1号住居跡(第146図37)
16	第1号住居跡(第146図38)
17	第1号住居跡(第146図39)
18	第1号住居跡(第146図40)
19	第1号住居跡(第146図41)
20	第1号住居跡(第146図42)
21	第1号住居跡(第146図43)
22	第1号住居跡(第146図44)
23	第1号住居跡(第146図45)
24	第1号住居跡(第146図46)
25	第1号住居跡(第146図47)
26	第1号住居跡(第146図48)
27	第1号住居跡(第146図49)
28	第1号住居跡(第146図50)
29	第1号住居跡(第146図51)
30	第1号住居跡(第146図52)
31	第1号住居跡(第146図53)
32	第1号住居跡(第146図54)
33	第1号住居跡(第146図55)
34	第1号住居跡(第146図56)
35	第1号住居跡(第146図57)
36	第1号住居跡(第146図58)
37	第1号住居跡(第146図59)
38	第1号住居跡(第146図60)
39	第1号住居跡(第146図61)
40	第1号住居跡(第146図62)
	第1号住居跡出土石製品(2)
41	第1号住居跡(第146図63)
42	第1号住居跡(第146図64)
43	第1号住居跡(第146図65)
44	第1号住居跡(第146図66)
45	第1号住居跡(第146図67)
46	第1号住居跡(第146図68)
47	第1号住居跡(第146図69)
48	第1号住居跡(第146図70)
49	第1号住居跡(第146図71)
50	第1号住居跡(第146図72)
51	第1号住居跡(第146図73)
52	第1号住居跡(第146図74)
53	第1号住居跡(第146図75)
54	第1号住居跡(第146図76)
55	第1号住居跡(第146図77)
56	第1号住居跡(第146図78)
57	第1号住居跡(第146図79)
58	第1号住居跡(第146図80)
59	第1号住居跡(第146図81)
60	第1号住居跡(第146図82)
61	第1号住居跡(第146図83)
62	第1号住居跡(第146図84)
63	第1号住居跡(第146図85)
64	第1号住居跡(第146図86)
65	第1号住居跡(第146図87)
66	第1号住居跡(第146図88)
67	第1号住居跡(第146図89)
68	第1号住居跡(第146図90)
69	第1号住居跡(第146図91)
70	第1号住居跡(第146図92)
71	第1号住居跡(第147図93)
72	第1号住居跡(第147図94)
73	第1号住居跡(第147図95)
74	第1号住居跡(第147図96)
75	第1号住居跡(第147図97)

76	第1号住居跡(第147図98)
77	第1号住居跡(第147図99)
78	第1号住居跡(第147図100)
79	第1号住居跡(第147図101)
図版129 玉類	
1	第11号住居跡(第179図45)
2	第11号住居跡(第179図46)
3	第11号住居跡(第179図47)
4	第11号住居跡(第179図48)
5	第11号住居跡(第179図49)
6	第11号住居跡(第179図50)
7	第11号住居跡(第179図51)
8	第11号住居跡(第179図52)
9	第11号住居跡(第179図53)
10	第11号住居跡(第179図54)
11	第11号住居跡(第179図55)
12	第11号住居跡(第179図56)
13	第11号住居跡(第179図57)
14	第11号住居跡(第179図58)
15	第11号住居跡(第179図59)
16	第11号住居跡(第179図60)
17	第11号住居跡(第179図61)
18	第11号住居跡(第179図62)
19	第11号住居跡(第179図63)
20	第14号住居跡(第205図141)
21	第14号住居跡(第205図142)
22	第14号住居跡(第205図143)
23	第14号住居跡(第205図144)
24	第14号住居跡(第205図145)
25	第14号住居跡(第205図146)
26	第14号住居跡(第205図147)
27	第14号住居跡(第205図148)
28	第14号住居跡(第205図149)
29	第14号住居跡(第205図150)
30	第14号住居跡(第205図151)
31	第14号住居跡(第205図152)
32	第14号住居跡(第205図153)
33	第14号住居跡(第205図154)
34	第14号住居跡(第205図155)
35	第14号住居跡(第205図156)
36	第14号住居跡(第205図157)
37	第4号住居跡(第158図26)
38	第4号住居跡(第158図27)
39	第17号住居跡(第223図48)
40	第17号住居跡(第223図49)
41	第17号住居跡(第223図50)

42	第17号住居跡(第223図51)
43	第17号住居跡(第223図52)
44	第17号住居跡(第223図53)
45	第13号住居跡(第188図52)
46	第15号住居跡(第217図74)
47	第21号住居跡(第240図52)
石製品未成品	
48	第3号住居跡(第154図28)
49	第15号住居跡(第217図72)
図版130 舟形土製品	
1	第11号住居跡(第176図2)
焼成粘土塊	
2	第4号住居跡(第158図25)
3	第16号住居跡(第219図10)
4	第8号住居跡(第168図17)
5	第8号住居跡(第168図18)
打製石斧	
6	石器 打製石斧(第260図2)
石鏃	
7	石器 石鏃(第260図3)
8	石器 石鏃(第260図4)
砥石	
9	第6号住居跡(第161図11)
図版132 第12号住居跡出土編物石	
1	第12号住居跡(第183図19)
2	第12号住居跡(第183図20)
3	第12号住居跡(第183図21)
第16号住居跡出土編物石	
4	第16号住居跡(第219図11)
5	第16号住居跡(第219図12)
6	第16号住居跡(第219図13)
7	第16号住居跡(第219図14)
8	第16号住居跡(第219図15)
9	第16号住居跡(第219図16)
10	第16号住居跡(第219図17)
第17号住居跡出土編物石(1)	
11	第17号住居跡(第223図29)
12	第17号住居跡(第223図30)
13	第17号住居跡(第223図31)
14	第17号住居跡(第223図33)
15	第17号住居跡(第223図32)
16	第17号住居跡(第223図34)
第17号住居跡出土編物石(2)	
17	第17号住居跡(第223図35)
18	第17号住居跡(第223図36)
19	第17号住居跡(第223図37)

20	第17号住居跡(第223図39)
21	第17号住居跡(第223図38)
22	第17号住居跡(第223図40)
23	第17号住居跡(第223図41)
24	第17号住居跡(第223図42)
第18号住居跡出土編物石	
25	第18号住居跡(第225図4)
26	第18号住居跡(第225図5)
27	第18号住居跡(第225図6)
第20号住居跡出土編物石	
28	第20号住居跡(第230図4)
29	第20号住居跡(第230図5)
30	第20号住居跡(第230図6)
31	第20号住居跡(第230図7)
32	第20号住居跡(第230図8)
33	第20号住居跡(第230図9)
34	第20号住居跡(第230図10)
35	第20号住居跡(第230図11)
36	第20号住居跡(第230図12)
37	第20号住居跡(第230図13)
38	第20号住居跡(第230図14)
鉄製品	
39	第11号住居跡(第178図43)
40	第17号住居跡(第223図44)
桃核	
41	第1号住居跡(第145図22)
42	第5号住居跡(第160図6)
43	第14号住居跡(第205図137)
44	第14号住居跡(第205図138)

【弥藤次遺跡】

図版138	
1	第6号溝跡(第273図4)
2	第6号溝跡(第273図5)
土製品	
3	第1号住居跡(第264図22)
4	第2号住居跡(第267図19)
第5号溝跡出土遺物	
5	第5号溝跡(第270図1)
6	第5号溝跡(第270図2)
古墳時代初頭の遺物(1)	
7	土師器 甕(第279図1)
古墳時代初頭の遺物(2)	
8	土師器 甕(第279図2)
9	土師器 甕(第279図3)
10	土師器 甕(第279図4)